現代日本文學全集
LVIII

新村出集
柳田國男集
吉村冬彦集
齋藤茂吉集

杉浦非水裝幀

改造社版

新村(左上)柳田(右上)吉村(右下)齋藤(左下)四家の近影

「新村・柳田・吉村・齋藤集」目次

吉村冬彥集

齋藤茂吉集

新村出集

凡例

舊交新知の諸友が文章と共に駄文を一の随筆集に編せられんとすれば何はともあれ嬉しき心地せらるゝまゝに廢紙を再三取捨補綴して送りおきつるに今や校正了りぬとて略年譜を徴發せられ剰筆蹟をも添へてよこせとて追撃急電いときびし此上の遅滞は許されじと観念して送状を附すもの也

昭和六年八月七日　京都にて　新村出

考古家が鋤の端の掘出物は詩人の想像から作上げた架空談に止まると信ぜられた物語、俚俗の口碑に傳はつた根無草から花が咲いたと考へられた昔話をば、段々事實化しようとする。日本にある金殿の話も考古家の發見に由つて相當の根據を有つやうにならぬとも限らぬ。コロンブスの探檢心を刺激したトスカネルリの書簡中にも、有の金殿の話が引いてある。されば彼のジェノワ出の探檢家が黄金花咲くと思つて日本國を目指して渡海したとは謂れぬまでも、冥々の裡に之を引寄せたのけ、或は五月雨に降殘したる光堂の金色の餘光かも知れぬ。更に別の推定を試みれば、あのヹニスの行商の息子に、遠西に傳はつた金島の昔話を日東に結付けて金殿の話を組立てたとも考へられる。

久しく金島の所在地附近だと假定された馬來半島の一角が、十六世紀の初、一たび佛郎機人の占有に歸したかと思ふと、スマタラ島の南に金島があるといふので幾度か船を出しては、覆沒の難に罹つたこともある。或船の報告に由ると、實際其島を發見して黄金を滿載して歸航する寶船を見たといふ。南蠻の七福人でも乘つて居さうなことである。所が初夢の類であつたと見えて、金の島は見當らない、段々南へ南へと探してゆく。今度は少し西だ、そら東だといふ中に百年ばかり經つ。遂に黄金が島は日本の東へ移つて來た。斯くて南海東海の知識は增したが、たうとう島は見付からず仕舞ひ、笑話にもなりさうで、又教訓にも引かれさうな話である、然しながら、當代慶長頃の日本の金銀の産出額は夥しいもので、海外への流出も亦驚くべき程であつた。南蠻貿易極盛の一頃、天川船は年々我國より一千萬圓にも上る黄金を積んでいつたといふ。さればケンペルは形容して、輸出がもう二十五年も續いたら、天川はソロモンの榮華の極み時分にジェルサレムの府庫に充ちた金銀の富と同等に達したであらうと評した位である。西班牙人が日本を銀の島と呼んだことは、フランシスコ・シャヸエル上人の書簡にも見えるが、我國を黄金が島と名付けたことは聞かぬ。然し、遠西人の昔話の金島は即ち日本だと誇稱しても恥かしくない富を有つてゐたのである。

二　佛郎機人の渡來

ライン江底の黄金を求め得たアルベリッヒの如く、葡萄牙人は希臘古傳から出た金島を遂に東海の扶桑に見出した觀がある。然し、葡人は此黄金から未だ環を鍛へ終らない間に、愛の教、吉利支丹が東漸した爲め、此黄金を手放して權力を失つて仕舞つた。長崎や天草は手に入れそこなつたが、纔に亞媽港だけはルスの後裔たる葡人が東洋に於ける孤城となつて居る。黄金島に程近いマラッカを領有した後數年、この所謂佛郎機人の船が南海に現はれて、媽港の西南に當る上川島を根據として貿易の要津廣州の府に互市を求めたのは、明武宗正德十二年、西紀一五一七年の事である。獨逸でルーテルが新教開基の年、明では王陽明が寧王の亂を平げた一二年前に當る。葡萄牙の使臣は既に方物を貢して入京を許された所、正德十四年偶々帝の南狩に遭ひ、翌年帝に從ひて、南京から北京に入り、會同館に置かれ、前途好望であつたのに、間もなく武宗の崩御となつたのが一轉機で、使者は獄に下される、修交は絶たれる、爾來凡三十年、廣東上川島に、閩泉州漳州に、浙寧波舟山に、屢々互市場を得て、而も續いて根據地とすることが出來ず、攘夷鎖港の厄に遭つたけれども、撓まず屈せず終に澳門に立脚地を確立するに至つたのである。其間天文十二年（西紀一五四三　明嘉靖二十二年）八月葡國の商船が種子島に來り、同十八（嘉靖二十八）年シャヸエル上人が日域に渡來し

て西教弘布の端緒を開いたりして、日東先づ西方の文明の光に浴し始めた。既に扶桑より去つた上人が中華の民を濟度しようとして、上川島に着いて、瘴癘の爲に命を殞したのは一五五二（嘉靖三十一）年の事で、亞媽港を葡人が領有したのは其前後、寧ろ稍後年に屬するらしい。尤も葡人が此處に據り又は貿易を始めたのは何頃から、又固有の由來や手段や年代に就ては、清朝の史籍地誌兵志等にも異説が區々であり、西人の所論も一定せず、且中國の所傳と泰西の考證と齟齬してゐるが、姑く諸説を參酌して、嘉靖三十年代、西紀一五五〇年代の初、或は中頃を以て葡人の媽港開市場確立又は其占據の時期と假定しておく。卽ち倭寇が閩を中心として浙廣に亙つて最も猖獗を極めた頃である。其頃江南一帶の沿海は、俗諺に所謂「北虜南倭」の其上に、更に蕃舶との釁を加へ、海上には佛狼機の聲を聞いて、濱邊には日本刀の切味を知る有樣であつた。西力東漸の事蹟は倭寇の歴史と相俟つて史興も一段と深い。さて此と媽港との關係はどうか

三　亞媽港とナホリ

亞媽港はナポリの面影を與へるといふ。成程其形勢或は似た所があるかも知れぬ。然し規模の大小は別として、一たび彼の南伊太利の名港に遊んで、あの長汀曲浦に打出でて見れば、あの山の頂より立登る煙が清明な空に消える、陋巷に入つた肩摩轂撃の間を通れば、南國の風殊に著しく、物言ひの喧騒や身振りの活潑が耳目を衝く、夕暮山巓より火の燃えるのが見える時分に公園に逍遙すれば、卽興詩人か講談師か群衆を引附けて高聲に謳ふ、潮風に大船が碇を下せば、琵琶を彈く男が娘に踊らせながら鄭聲に何々節かを合唱して小舟が流してくる、凡て此等土俗の色彩から得た感興を覺束なくも今心裡に再現して、まだ見ぬ澳門の上に投じ、其面影を見出さうと勉めても詮がない。若し詩趣の豐富と史興の横溢とを除けば、此廣南の一新港は小ナポリと呼んでも合點される位な似通ふ趣を具へてをる。けれども、澳門の背後には所謂廣東が控へてゐて一層南伊の古港に比べらるべき格に位するのを忘れてはならぬ。更に我朦朧たる史眼に映ずる儘に閩の泉州、浙の杭州明州寧波をヱネチヤやジェノワに對して見たくなるのであるが、兎も角この由緒の深い嶺南の要港たる廣府を風土や民俗や人氣の側から、交通史や文化史の上から、ナホリに聯想するのは不倫であらうか。廣府は上古より夙に遠西の商舶、海南の蕃舶を以て港を賑はせ、北は中原、南は海洋の物產集散の中心として珍禽異獸の渡來や香木奇花の移植はいふに及ばず、諸蕃の混和、殊俗の交錯より異域の文化の流入に至るまで史上の興味は一通りでない。天竺の教法も波斯大食の文明も此津を通り、早い話が、達磨が南天より渡來にも、義淨が南海の寄歸にも、廣州を經たし、大食人の創めた回教の寺院懷聖寺も廣府にあれば、入竺求法の高僧が波斯船に便乘して入津した例もあるといふ樣に摩訶支那の南門であつた時代がある。澳門に至つては、宛然小廣州の觀があつて、諸蕃の雜居といひ、歐商の開市といひ、西教の傳來といひ、殊に明末清初にかけて、天主文藻より慶長元和に亙つて、歐洲文華を南國に取次ぐ問屋であつたこと猶唐宋時代の廣府の如くであつた。廣州城下に泊した海舶が倭寇を避けて前明正德年中に西の方高州府の電白縣に遷された後、嘉靖に至つて東に復し、一たび香山の浪白澳を以て蕃舶の市場に充て、再轉して遂に亞媽港がルシタニヤ人の占居となつた始末である。

嶺南の地は荊楚よりも更に南に偏在し、中原

には隔り、燕趙とは別域たること獨伊の相違に髣髴としてをる。支那の風土文物に南北の別を立てる學者があるけれども、此南越は、梅早く落つるといふ彼の大庾嶺でも踰えなければ、屈原の郷に進むことも出來ない程の更に遠い南である。ヴイマルの詩人がナポリに旅寢した折の日記に「ナポリの民は樂園に占居するが如く信じて居る、北の國びとどもの上を、さも傷はしう考へ、不斷の雪、木造の家、無智は甚しいが、金は澤山 Sempre neve, case di legno, gran ignoranza, ma danari assai. と、斯様に吾等の有様に對して想像して居る」と見えるが如く、南濱に濆する廣東の民も北地を此様に憫んでをるだらうか。ゲーテが或日灣頭の丘上に杖を曳いて、俯仰山海の好景に見惚れて居ると、村童が一人何やら叫びながら近寄つて來た、一寸の間身動きもせずに居たかと思ふと、軈て詩客の背を輕く打つて、右手を延ばして指さしながら斯う云つた、「をぢさん御免よ、こりやあわしの郷だよ」Signor, perdonate! questa è la mia patria! 之を聞いたゲーテは、後に此事を紀行に書いて「憫むべき北人の我眼には涙が催された」と擱筆した。「ナポリを見てから死ね」Vedi Napoli e poi muori! の諺の如く、市の形勝には流石の大詩人も「言語に絶す」とて、筆を收めた程で、市民は我を忘れて醉うたやうに、宛も、「何ヹスヰオのもう二つや三つ近處に控えて居たつても構ふもんか」と嘯いてをる。『イフヰゲニー』や『タッソー』の名篇も山水明媚な此邊りで作者の結構に出た所が多いことは、其女友に宛てた玉章の一節でも知られる。斯くの如き勝地と、赤道に二十度も近く、瘴癘の氣に富むといふ南越の府とを同視してはならぬが、南土の人が故國に安じて北人を見ることも、やはり斯様な風がありはせぬか。又古來中國の詞人で嶺南の風光に吟咏した者は、決して少くはあるまい。我が朧ろげな記憶に浮ぶ潮州の謫客の如きは元來彼處に佛骨を謗り、此處に鱷魚を祭る様な北人の氣魄其儘であつて、到底南風の餘韻を傳へる文人ではあるまいが、橄欖の影茉莉の香獨り烈しいあたりで郷土を歌つた名作は世に聞えぬのか。

四　媽港の詩仙洞――倭寇と詩人

かの所謂小ナポリを飾る爲に天は萬里の遠西より詩人を下した。葡萄牙の國民詩人ルイス・デ・カモエンス即ち是である。斯人あつて亞媽港は初めて洋舶の交易場から不朽の詩境たる地位に上り、耶蘇宗や西洋學の東漸した歴史の上に殘るばかりでなく、世界文學史中の一名所となつた。

媽港を北へ支那領（香山城當の前山寨）と連絡させる蓮花莖と云つて廣さ僅に五六丈の、支那里で十里程の沙隄がある。中間に關閘を据ゑて華夷の境界とした。此地峽のこちら、沙隄の盡きる邊に蓮花山といふ危險な小山が聳え、其北麓には浪に浮んで來たと傳ふる二三の奇石が横はる。嶺を攀つて南を遙に眺むれば、海天無際、島嶼靑を泛べ、煙霧の中には澳夷の居る白屋數十百間が見える。大慈大悲の三巴寺は、同じ名を負ふ石火矢臺の蔭に隱れて分らぬ。西には靑洲山といふ幽勝な小島を見下す。桃榔檳榔の中に耶宗の寺樓が屹立し蕃館が樓閣を構へ、卉果を雜植して澳夷遊眺の地とした。東には九星洲山と云ふ小嶼が浮ぶ。九峰に分れて、巖穴が多く、奇葩異草に富み天塘水と呼ぶ甘泉がある。カプリの奇勝は無いが、澳東の海中、星散碁布する島々に白波の打碎ける絶景は亦此蓮花山上に賞せられる。山下の稍南に望厦村といふ村落がある。茅屋三々五々、菜園があつて一二の徑が之を横切る。村の前にある二つの石が煙月迷離の際に望むと男女が肩を比して立つてゐ

代の詩人の王が南天に住する時、滿剌加に職を奉じて居た。ルシタニヤ人が不拔の元氣を以て東方の探檢と經略とに從事し、到る所葡寇をしつゝ、支那に達し、根據の港を得ようとしてゐた最中に育つたルイズは、「千艘や萬艘」と福の神の如く東の國から寶物を舶載する帆掛船を見掛けたらうし、桃太郎が征伐した鬼が島の樣な御伽話を實歷として聞かせられたに違ひない。バルロスの「亞細亞」の如き大著が出る一五五二年前に、既に幾多の紀行類が現はれて居たと考へられるから、之を讀んでルイズは感奮したこともあらう、憧憬したこともあらう。又一方には、文藝復興期に當つて、叔父が初度の總長になつた革新後のコインブラ大學に入つて、ルイズは夙に學藝を修め、秀才の聞えが高かつた。其間既に金髮の一少女に清い熱い愛を捧げて、詞はペトラルカぶりの、心はプラトーンまがひの情詩の數々を詠んだ。十八歲で業を卒つて首都に歸り、ゆかりを以て宮廷に出入し、詩才を發揮するに至つたが、其の強い我と鋭い舌とは、さなきだに嫉まれがちの天才に禍根となつた。禁中の政客詩人才媛と交はつて、宮廷の花と持映されてゐた所に、春の祭に或寺で、ふと見初めたのが緣となつて、宮女カテリナ・デ・アルタイーデに懸想して、其から數多くの戀歌も出來、其爲遂に多恨の生涯を送るに至つたのは、在來りの筋である。傳ふる所に由れば、才人は思餘りて此王妃の內侍カテリーナ——歌の中ではナテルシヤといふ——に當てて、密かに歌を贈つたのが露はれて、道ならぬ儀とて宮中に出入を差止められたともいふし、或は何か鞘當筋があつたともいふ。兎も角カモエンスは既に放たれてテーシューの江畔に行吟する身となつたが、自ら抑へて泪として南土に徂き、阿弗利加のモーア征伐に加はつた。レバントの海戰に負傷して跛となつたり、北阿の海賊に擒となつたりしたセルヴァンテスや、アルマダに從軍したローペ・デ・ヹガと同じ運命に遭遇したのである。不幸にも水戰で右眼の明を失ひ、古今の敍事詩人ホメーロスやミルトンやの難を半ば身に負うて二年の辛苦を嘗めた後、歸國したことはしたけれど、其武勇を賞せらるるでもなく、其文名を傳へらるるでもなく、ましてや戀路の關を据ゑられて傷懷遣る方がなかつた。所へ或祭の日に國王の鹵簿に扈從した主馬の者と自分の仲間とが喧嘩したのを仲裁したのが過ちの素で、隻眼の詩人は捕へられて入牢申渡され、後に赦されて印度へ配流される身の上になつた。

一五五三年春三月二十六日、不遇の騷人は瑾を懷き、瑜を握り、金砂敷けるテーシューの河口を、夕暮れに船出して、彼のスキピオの名句「不報之故土兮、不可以埋我骨」ingrata patria, non possidebis ossa mea を吟じつゝ印度に向つた。畢竟其敍事詩中の英雄や小英雄の跡を履んだのである。世既莫吾知兮、人心不可謂兮、懷情抱質兮、獨無匹兮の感を以て東に下つたカモエンスは、臥亞に着くと直に、隣國との戰役に出征する、年を越えて又亞剌比亞蕃夷の遠征に遣られるといふ樣に、銃劍を手にせざるを得なかつた。臥亞總督の饗宴に演ずる喜曲を作つた樣な風流韻事もあり、詩人は別に閑日月あつたが、獨清獨醒であるだけに、持前の銳鋒を露はして、植民地に於ける上下風俗の頹廢を諷刺した爲に、臥亞から追放されて再び竄流の身となつた。是迄も貧に處し不幸に堪へ悶々の中にも忘れ兼ぬるは故土と佳人とであつたのに、今は更に不在者や死亡者の財產管理人とでもいふ樣な役目を宛かはれて、澳門に謫せられ或はマラッカに流離らへ、或はモルッカに漂ひ、寄邊なき身と成果てては、寧ろ南海の魚腹に葬られて、魂はピレネー山南に歸れよとも思つたらう。

斯くの如き浮沈の末、カモエンスは南風に逆られて澳門に着いたのである。着く時には干戈を手にして倭寇の討伐に從したらしいが、一五五八（弘治四）年より同六〇年迄配所に在つて、大夫でもない刺史でもない卑しい職務を執る暇には、御心自在、陶々たる猛虎の禁をよそにして、草木森々たる處にある巖穴の幽邃を愛して、茲に不朽の名作を稿した。

「海づらよりは少しひきいりて山かげにかたそへて、大きやかなるいはほのたてるをたよりにて」流離の詩人が草した敍事詩と、湖水に浮ぶ明月の影を見て石山の寺で書いたと語り繼がるる閨秀の物語とは、南緯の對比をなすものとはいへ、稀成の境に於ては共に一大詩たるの感がある

此隻眼の蘇島守は、瓜哇生れの忠僕アントニオに侍かれて、澳南に三年あまりの常夏を送り流たでこゝもとに立わくる心地して夢閑かならぬ歳半も經なかつたが、遂に遇つて職を罷められて風雨に召還さるることになつた。吾等が遠に日東に誇へる光榮を有することが出來なかつた蛮人は、西航の途、其船が交趾沖湄公河口で難破して、僅にルシアダス稿本を身に添へて、十余里に泳ぎ助かることを得たのは、不運中の好運であつた。若し眞に「明月不歸沈碧海、白雲愁色滿蒼梧」の嘆を繰返さねばならなかつたらば、歐南の李白たるものは、矢張タッソーに非ずんばエガであつたに違ひなからう。

印度に達して、初めて得たのは愛人ナテルシヤの訃音、受けたのは纏綿の恥であつた。幽囚に次ぐに幽囚を以てし、後故國に歸る路すがら阿弗利加の東岸ソファラで貧寠の裡に數年を過ごし、一五七〇年四月「私が女子よ、南風吹かにや、わしは一生戻れまい、私が女子よ、南風讃めよ、わしが土産は金の帶、かはい南風もつと吹け、ほツほ、えいといふ勇ましい船歌を聞いて、リサボンに歸り、流離十六年の後、初めてテーシュー江畔の金砂を踏んだ。

歸ると都は黒疫の蔓延やら宗門改めの嚴重やらで、異郷で想つた程の安慰も無かつたらうが、定心廣志、ルシアダスの公刊に從事し、先づ幼王に獻り、官府と宗門との免許を兩たから得て、出版したのが、歸國して二年餘後のことである。耶蘇會の學林に通ずる陋巷の端に、畢安樂に接する寓居にあつて、昧にやんごとなき邊りの保護を失つて後は、赤貧洗ふが如き有樣で、忠僕の黒奴が夜な〳〵路頭に袖乞をして主人の爲に食料を得たといふ話さへ殘つてゐる。

一五八〇年、又もや黒疫の流行つた歳の六月十日、カモエンスは終に命を終つた。棺にも納められず、而も又經帷子をも着せられずに、人知れず葬られたと聞くに至つては、誰か此天才の爲に泣かずに居られようぞ。昔から詩人の薄倖は珍しい話ではない。然し此ルシタニヤの國民詩人ほど悲慘な運命に遭うた例は、實に稀有である。施療院にあつて臨終の床の邊で今しも聖餐の禮を奉ずる僧に、其手澤の『ルシアダス』を形見に遣した。流竄の暴句に成つた苦心の作を、南海の波間に懐いた最愛の書を、終に手離して逝かねばならなかつた。其國の偉人と其國民の雄圖とを歌つて其國其國民に何等報いられることもなくて逝かねばならなかつた。

六　『ルシアダス』と百合若物語

發見時代の葡萄牙は、ガマ、アルメーダ、アルブケルケの三傑を生んだ。同時に幾多の小ガマや、小アルメーダや、小アルブケルケを産した。積年の小發見に續いて、阿弗利加の周航、印度沿岸の征服、滿剌加の占領といふ事業を果した。國民感情が勃然として起るのは自然の勢

だ。其處で是等の俊傑を頌し、是等の壯圖を歌ひ、國民の氣魄を表白して、之を後昆に遺し、當代に傳へる爲に、ホメーロスやギルギリウスの如き敍事詩人を渇仰せねばならぬ。恰も好し、古典研究の風潮はイベリヤ半島の西にも及んで、希臘羅典の古詩は之を學ぶ者が多く、註疏を作る者も輩出し、十五世紀の末、はや葡人の宏業を六脚韻の羅詩に詠じた作家もあつた位である。カモエンスの天才は家系や時勢の刺激からして、夙に國民敍事詩の製作を我が使命と自覺し、殊にコインブラ大學に在つては鋭意イリアス、オヂッセーア、エーネイス等の研鑽を事とし、先づ羅典史詩を綴つても見、佳人への詩中には自ら「新ギルギリウス」とさへ名乘つた。然し、其詩才は優に國語を以て史詩を作るの力のあることを發揮し、國詩をば羅詩と同位に引上げることを得た。俗語を敍事詩に用ゐて、之を塵いたから、天下靡然として之に從ひ、文起八代之衰の場合の如く、カモエンスが起つて、初めてルシタニャの國語を以て書かれた國民詩は百世の師を得、天下の法を作つたわけである。

斯樣にして詩壇の期待空しからず、遂に葡國のホメーロス、葡國のギルギリウスは出現した。茲には其敍事詩『ルシアダス』の結構や詩形や着想を評說する暇はない。只詩體と修辭はギルギリウスに則り、韻律はアリオストーに倣つたこと、獨創の構想を以て國土國民を謳ひ、殊に全國民を詩中の勇士としたのは、破天荒であること、事實や歷史を細說直寫しようと心掛けて、寧ろ人物の理想化や自然の美化を避けようと勉めたこと、然し無論古代の神話中の神々は敍事中に取り納れたことなどを數へ擧げて止まうと思ふ。却つて枝葉に渉るけれど、題名及其名義に關して一言しておきたいことがある。

敍事詩の原名は『オス・ルシアダス』といふ。ルシアダス（男性複數）とは別にルシタノスとも云ひ得べく、ルシタニャ人、即ち葡萄牙人を指すのである。古傳中の葡萄牙建國者即ち葡人の高祖をルスス或はリソスといひ、之に因つて國をリサ、リシアと呼んだので、ルシアダスはリシア人又はルススの子孫の義である。古への羅名のルシタニャから葡人をルシタノスと稱したのは、近代の羅典學者の文章に始まり、一四八一年以來行はれてゐたが、十六世紀の敍事詩人どもは寧ろ此學者じみた羅名を避けて、響きの好い雅名のルシアダエ（又リシアダエ）ルシアデス（又リシアデス）といふ形を用ゐてをつた、其をカモエンスが初めて語尾を變へてルシアダスと爲て俗語に編入したのであるといふ。

所がエルシアダスといふ名が、一五七、八〇年代前後に行はれた御伽話の中に見える。即ち、ルスス、エリサが首都リスボア（リサボン）を拓き、後にウリスセス（オヂッソイス）が之を建てなほしたといふ建國傳說に基くらしい。ウリッセスが、イベリヤ半島へ渡つて來てリサボンの都を建てたといふ話を當代の荒唐な史傳から材料に採つて、法學者羅學者として聞えたペレイラ・デ・カストロはリスボアの建立者ウリ。セア』といふ敍事詩を書いた。出來たのは一六〇〇年（慶長五年）出版したのは一六三六（寛永十三年）である。稍おくれて同代の史詩人で『ウリッシッポ』といふ敍事詩（一六四〇寛永十七年）を書いた者もある。此話は勿論無稽に違ひないけれども、葡人の雄飛時代には文海に歡迎さるべき好題目であつて、當代あちこちに見當る幾多の敍事詩料の中では、先づルシアダスに次いで世間受のするもので、果してカモエンスの反對家はペレイラの『ウリッセア』を推して『ルシアダス』以上の作であると云つた程である。又同じ材料を使つて誦讀戲曲に仕組んだ作者もある。フェルレイラ・デ・ヴスコ

ンセヽロスの『ウリシッポ』（古く一五八七年より前天正十五年頃か）それだ。

されば、十六世紀の遅くも後半期には、國民の建立者たるウリッセスの物語は、人口に膾炙して居たらうし、古典講讀の餘波で、ホメーロスの原作の筋も當代の人心に觸れて廣く知れ亙つてゐたらうから、彼是の因縁相俟つて、東洋へ渡つた船頭や商賈達は、此物語に非常な興味を感じてゐたらうと思はれる。況んや彼等自身は皆オヂッソイスであり、オヂッソイスの弟子どもで有つたので、到る處、同様の冒險をして、風が續つて御角の陸地に着くべき樣もなく、あやかしが憑いて難儀をしたことも多くあり、海神が恨をなして、潮を蹴立て惡風を吹きかけ三叉の鉾を振上げて飛び來ると、打物わざに叶はなかつたことも屢々あつたら、又港々で百拍子の様に名残りを惜んで滯留を需めたキリプソーもあつたらうから、オヂッソイスの冒險譚が彼等の口から様々の港に傳はり、更に語り繼ぎ言ひ繼ぐ樣になりはしなかつたらうか。若し果して百合若傳説がオヂッソイスの話から出たものとすれば、其物になつた經路は以上の如くであつたことと考へる。彼の物語等はホメーロスの港から港に下り行へても配流される様な事がなかつたのは、致方がないけれど、假に想像を逞しうすれば、日本人は媽港か滿剌加か、臥亞か、さもなくば「波濤の謫所」でカモエンスに會ふ機會があり得た筈であるから、萬一其口から古希臘の百合若の話を聞いたならば此上もない面白い話である。現に天文十七（西紀一五四八）年薩南の若者の彌次郎が、滿剌加でシャヰエル上人に出遇つて遂に此「東方の使徒」の爲に東道の主となつた事實があるではないか。況してやカモエンス自身は既に一箇のオヂッソイスである。

予は今餘りに外れた横道から本題に復らなければならぬ、史的空想から段々史實の道へ戻つて來ねばならぬ。

七　敍事詩に描かれた支那と日本

『ルシアダス』の大部分が東洋、殊に靜閑な天川で成つたことに就いては、有力な考證もある。詩篇の或節は後半期閑中又は航路に出來たといふ説も爭はれまい。唯、天川の背後村前の洞は「禽獸の音なひなく、人跡絶え、樹木繁茂として晝猶暗く、此に勝れる寂寞たる隱處何處にか求め得べき」と其小曲第百八十一に自ら歌つた通り、作詩に適した閑境であつた。「最の狹間に籠り居て、埋れ果てぬる身にしあれば、涙と悲みとばかりなる瀕死の命をおのがまゝに侘びてまし」と詠じた此洞窟は、昔の仙士が修行の遺跡か、島夷の設けた禪庵か、唐宋時代の大食人の墳塋か、と異説はないけれど、『ルシアダス』に由つて、初めて典雅の境となつたのである。

何はともあれ『ルシアダス』中に我國の様子を如何に敍してあるかを見たいのが人情である。元來この敍事詩は一面に於て葡人の東方經略史、ガマの東征傳であるが、作者は第九段の首に至るまで、偉業宏圖と異域の情景とを敍し去り敍し來つた後、初めて一轉して萬綠叢中紅一點ともいふべき插話を織出した。東方の經營既に緒に就いて、葡人どもが、「各こえいはぬ喜びに胸を漲らせ」てよ吹く東風に帆を擧げて歸國の途中、海路の日和を待合せたか、但しは風の吹廻しでか、到着したのが、美愛の島である。愛の女王、ルシア贔屓のヹヌスが、勇將傑士の功勞に報い、其頭目の勞苦を慰めようとして、此島を蒼波の上に浮び上らせたのである。詩人は是に至つて、實録の中に虚誕を交へた、希臘のキリウスは以上ホメーロスの筆致を學んで、イリアスに描かれたトロヤ落

城の光景にも反照すべき此戀島の卷を添へた。此種の結構は、古今の敍事詩人の用ゐた慣用手段であつて、其構想や敍景はチョーサーにも、アリオストーにも、タッソーにもミルトンにも趣が似通ふとて、其等との關係を考證した史家もあるが、カモエンスの女神島の描寫には獨特の妙味の存することは爭はれぬ。而して古來名高いヱヌスが島の卷の末の方第十に於て、日本や支那の事が而も神女の口に由つて歌はれてゐる樣に寫してあるのである。大名は猿樂や連歌に興を催し、士民は御伽草子に閑を消し、禪僧は似而非詩文を玩弄し、歌人は古今傳授を難有がつた文學の衰世に、宗祇も宗長も宗武も宗鑑も既に亡く、時雨降る頃小蓑ほしげなる猿の眞似ばかりして、何等創作力がなかつた元龜天正の交に、纔に長頭丸が產聲を擧げた頃、歐南のホメーロスが神女の口を借りて、ほんの十數行ながらも、日域の事を敍したのは、日本人にとりては千部萬部の史類に載せられたのよりも寧ろ光榮とすべきであらう。「女神はやをら銀のみ車に召して雪の翼の白鳥に曳かせ、軟風がたゝする青海波の上を蓬萊の島さして向はせらる。白鳩は環を畫きながら、紅ゐを帶び給へる女神の周りをまはる」ローエングリンの序曲を聽いてる樣な氣がして、誦んでゆくと、何だか遠くの水天髣髴の際から船歌が風の工合で聞える。「雪なす白鳥どもは、綠の濱邊にみ車を上岸し奉れば女王は花の汀を踏ませ給ふに褰げたまへる裳裾はゆるやかにみ手より落ちたり。雪の肌半ば露はれ、打笑み給へば薔薇匂ふ」といふ段になると、青一髮の上に白帆が見える。ヱヌスは此から歡樂の鄕を現じ、女護の島を產まうとして、愛童を召寄せると、象牙の弓と黃金の鏃を嵌めた矢を持つてクピドが出て來る。すると、勝誇つて故國に歸る葡國の勇士達の船が近寄る、案針が不意に島を見付ける、鎭守の女神が生みませる蓬萊の島である。此から、島の敍景があり、舟子と海女との交歡があつて、勇士達の功は稱へられ勞は報いられ、前途の幸福、將來の洪運が豫言されるといふ筋で、遂にガマ達は嫦娥ともいふべき神女に導かれて、參差たる路を登つて、高山の巓から、國見をすると、芬氣の中に地球が明亮に見えるといふ段になる。神女は戰くヷスコに四方を指さし、其大功を頌し、併せて國人の雄圖を讚した後、恆河の注ぐベンガラ灣のあなたを見遣り、葡人將來の鎭東策を講じ、徐に「東のナイル」湄公を越えて極東の國々に話頭を轉じた。カモエンスが罪なくして流された配所よりの歸路、あはや葡人雄圖の頌詩を水泡に歸せんとしたのを、辛くも優しい湄公の濱邊に救ひ得た仕合せを、詩人は神女の豫言の脣から漏させて、私かに自分の抱負を示した。神女の話は愈々支那に入る。「彼處には古波の香れる長汀延び、此處には交趾の耕せる土地小高う、安南の入江より、美なる支那の故土起る、炎天の下より堅凍の地まで、富强の帝國廣く橫る」と說起して、次に大砲や指南錢の發明の古いこと、萬里の長城の宏壯なことを擧げて、歐洲の天砲聲未だ響かざるに先ち、此土既に其雷轟を敵に注ぎ掛けたり、西土猶磁石の神奇を知らざるに方つて、此土夙に定北の針を有せり、埃及以て稜錐塔を誇るに足らず、高山深谷に涉りて長壁萬里に蜿蜒たり」と讚した。

　斯くの如く吾々は先づ婉麗な歌劇の一幕を見て恍惚となつたかと思ふと、忽ち神代卷の中の一節を畫圖にして眼前に展開された樣な心地がする。ニンフやガマは何媛、何の尊と名けたい感が起つて建國の雄圖が懷ばれる。敷ます島の八十島は、谷蟆の狹度る極み、鹽沫の留る限り、見霽かします四方の國は、天の壁立つ極み、國の退立つ限り、青海原は棹柁干さず、舟の艫

の至り留る繞み、大海原に舟滿ちつゞけて、遠き國は八十綱打掛けて引寄するの概を茲に窺はれる。佫神女は支那の濱邊は未來の事とて話を轉じ、紫だちたる曙に、輝く海を彩る南の島々の上に移る前に大八島國を歌つた。ガマを麾いて語るには、

島の國こそ好く見つべけれ、
天地の惠み豐に足らひ
花も果も千々に香れる。
見よや日本を、廣き地球の
北の兩低う國土位す、
東の境を海原周らし。
偉なる哉ガマ、爾が勞の
結果は其土に燦然たらむ。
天の御法に異端の滓渣を
鑛屑るごと除きし棄てば
銀の光皓々たらむ。

末の三行は、シャヰエル上人が法を弘めて耶蘇宗が邦人を教化濟度するといふ事に照應する。よしやカモエンスが澳門に入る時、同舟の者と共に倭寇を平げたといふ話が眞實でも、それは倭寇、これは耶蘇人、抒情に日本の名は南鐐の如く其不朽の叙事詩中に輝いてある。澳門の[illegible]洞には、カモエンスの半身銅像が立つてゐる。其礎には『ルシアダス』中の六節が三面に分けて刻してある。洞の邊りには、内外の詞客の製作にかゝる銘を彫附けた石碑があつて、左から三つめのにはタッソーの頌を勒した。ローペ・デ・ヱガの挽歌もあつたが、碑にはなつてゐない。澳門の史興、詩人の追憶は綿々として盡きない。タッソーやヱガの如き詩人と觸れ、ヱネチヤの畫家と觸れた當代の日本人の上を、もう少し書いて見たい心地がする。然し南風は此で小止みとする。

（明治四十三年六月）

南蠻酒に醉ひて（一）

京は烏丸通りの西がはを二條からおの／＼南北に少し上り下りするところに私の興味をそゝつた店が二軒ある。この二三年來暖簾や看板を電車の上から見ながらも、二條の停留場は私たちには用のないところであるから、ついおりて見るほどの氣もなく、いつも見過ごしてばかりゐたのであつた。さて二條南の一軒の方はカステラ屋であつて、暖簾には上段に赤く BENIMODENRAI と横書してあり、その眞下には片假名で縱にカステラと墨書し、その右方には花丸ボウル、と書き、左方には越後屋としてある。暖簾の地はヅックのやうな白木綿であるが眞ん中で縱に二枚をつぎあはしてある。幅も丈も五尺ほどあらうか。異樣に古風な暖簾である。二年ほど前に、私はTといふ經濟學士から、上記の横文字の何といふ意味であるかを尋ねられて、DEZIMADENRAI といふ綴りを間違へてあゝ書いたので、元はデジマデンライ卽ち出島傳來といふ意味ではなかつたのかと故事附けておいた。長崎出島の蘭人からの傳來といふわけである。DがBに、ZがNに、そしてAがOに字體の轉化やら書きちがへやらで變つたのであらうと私は考へて見たのであつた。然るに今度その家にいつてカステラを買ひながら主人らしい人にきいて見ると、先祖が長崎へいつて紅毛人から傳來して來たので、それをベニケデンライと書いたのだといふ。

嶺南思出草

ヱネチヤを發つてフィレンツェに向つたのは四月二十九日の午後であつた。

其日の朝、サンマルコ寺の仲見世で、例の記念と土産に、ゴンドラ形の栞折や珊瑚樹や、繪葉書を買はうと或店頭に立寄つた所が、古風な大形の船が、まだ船卸もせずに海濱に橫はつて居る側に、女が火炙に遇つてる景の繪葉書を見付けた。熟視すると、昨日博物館で雛形を見た二十四挺艫の帆船と同じ形で、其蔭には大勢手に手に得物か十字架らしい物を持つて、焚殺される女を見守つて居る所だ。はてなと下の方を見ると、ダンヌンチオの「船」、鳳凰座にて、と、赤く刷つてある。店の女に尋ねると、今興行中であるといふ。買物もそこ〳〵にし、試に場が取れるか聞かせて見ようと、宿に歸つた。原作は未だ手にしなかつたが、此一月の十日頃、初興行の模樣と筋書を其晩に羅馬から報じた長文の電報を、翌朝の伯林の新聞で讀んで記憶して居るから、是非見物して歸りたいものだと、胸を躍かせて、ホテルの手代に賴むと、お生憎樣と膠もない挨拶である。第一、世界を此土地に取つてはあり、殊に作者が顏を出すと云ふので、毎晩非常な人氣、どうしてジッパングの人などが席を買へるものかと云はぬばかりの始末に、未練は殘るが、曲中で當市の象徵になつて居る「全世界號」とバジリオーラとを書いた葉書をせめてもの好記念として、此詩趣に富み史興に豐かな水の都を去ることにした。

葡萄の房を取りそこなつた狐の樣に、新曲の味を酸ぱいとは思はなかつたが、まだ行く先々に面白いものが澤山あると自ら慰めて發途すると、程なく汽車はポー川の鐵橋を渡る。川邊の柳が霞んで故鄕を思はせる景色である。去年の春渡歐の途、ジェノワからミラノをさして同じ川の上流を橫ぎつた時、古風な幼稚な歌を詠んだことを想起す。北嶺の雪を、薄霞を透して鮮かに望みながら、西南の上へ向つて行くと、東海道の俤を懷ばしめて、昔四月の休暇に駿河の山麓を通つて鄕里に歸つた時分の氣分になつて來た。氣のせゐか、段々濃くなる空の色や、段々強くなる日の光の刺戟に感じて、若い心が躍りさうになる。いつしか、沿岸の平原を過ぎて、破壁に藤の花まつはる村落に入り、漸く青陵の起伏する間に進む。

古詩人の「伊太利亞紀行」を取出して、ヱネチヤの節を拾讀みすると、自分が僅か三日間の滯留ながら其間に起し得た興趣の乏しかつたことや遭遇し觀察した所の平凡であつたことに益々氣が付いて來る。古詩人が、滯在半月餘の間に、幾度も觀劇をして、犀利な品評を下して居る所を讀むと、現代の戲曲家の新作を見逃した不平が心の底の方で動く。段々紙をはぐつて行くと、十月七日の段月明に乘じて、ゴンドラを泛べ、艫に一人、舳に一人、名高い磯節を歌ふ男を連れて、掛合に歌はせて聞いたと云ふ條に至る。一人の識者の話に由ると、小島の汀に小舟を泊めて、一方で高調に歌ふと、鏡の如き海面に響き亙る、遙か彼方で他の一人がそれを受けて、次の歌を吟ずる、彼一句、此一句、相呼應して、終夜續ける、二人の間が遠く隔るほど、益々好く聞える、中間に居て聽くのは、興が無いのださうである。そこで、彼の二人は、此を實地に試して見せようと、舟を

繋いでジュデッカに上り、岸邊で遠く相離れ、詩人に歌つて聽かせる。ゲーテは、と行きかく行き、兩方の端に立つては、遠くから到る吟聲に耳を欹てて、涙催すまでに感じたとある。船頭の磯節は、獨特のメロヂーで、タッソーや、アリオストーを歌ふのである。リドー邊の蜑の女達が歌ふのを聞くと、又格別だといふ。海人は、夫が沖に漁に出て居ると、夕暮濱邊に出て澄透る聲で歌ふ、其中に海上から聲が聞えて來て、此から掛合になる所は何とも言はれぬ氣持だと船頭が多感の騷人に語る。白氏の詩を誦するが如き感が湧いて、自分は此詩趣ある紀行の一節を讀みつゝ恍惚となつて居た。然し、百二十年前の磯節が、今でも水の都に其遺韻を傳ふるか如何かは、知らぬけれど、せめてゴンドラに棹して春宵の一刻を過ごせばよかつたものをと悔む。

かくて、ターナーの畫いた朝の色をも其處に賞し得なかつた不滿足を以て所謂「光明の都」に遠ざかりつゝある自分は、今しもフェルララに着いたのである。

其昔の遺蹟は指顧の間にあらうと思はれても、汽車は唯青山の間の小都に沿うて進行するばかりで、何等の眼を惹くものは無い。同じ紀行に由れば、ゲーテは、十月十四日、客船に乘じて發し、行く〱江を溯り、古歌を吟じて北緯四十五度を横ぎり、江岸の風景を賞しつつ、此古都に着いた後、騎して氣忙しなく遺址を見物したとある。不平であり、不幸であつたアリオストー、タッソーに就いて記する所は極僅かであつた。

此紀行の著者が、嶺北に歸つて完成した戲曲「トルカートー、タッソー」を舞臺で觀ると、エステ家の別墅で、遊園を飾る大理石柱の下を、館の姬君と上臈エレオノーラとが輕羅を纏うて、纎手で花環と月桂環を束ねて居る所で序幕が明く。一方の石柱の頂は、ギルギリウスの首、他方のはアリオストーの首で飾つてある。兩敍事詩人の白い像が、南方の清明な青空に映じて、典雅な景の中心になつて居ると、嬋妍たる淑女が、各々作り上げた環を詩人の像に冠らせる。すべて長閑な情趣であつて、當時自分は能樂で起る一種の興を、此場で催したのであつた。後になつて、狂亂詩人の本色を現はす場に至ると決してさうではないが、殊に序幕でタッソーの出場のあたりは、斯くの如き感興を禁じ得なかつた。やがてアルフォンス公も來合せて、三人で詩人の新作の噂が始まると、最早く詩客を遠方に認めた姬君は、「妾こそタッソーの來るを見申して候、徐かに歩みを運ばせて、或は緩く、或は急に、――あれ又立止りて候」といふ。「潛思詩作に耽る身の夢ばし覺まし候な、唯吟行はせ候へ」と兄君は沮む。レオノーレが、「いや、吾等を見留めて、此方へ來り候」と云ふ程に、三人は上手に在つて、彼方より徐ろに近づいて來る詩人をば熟視して居る。自分は揚幕から出る「羽衣」の天女を待つ興を以て迎へると、黑衣を纏うた多感の騷人は、新作「聖府解放」(ラ、ジェルサレンメ、リベラータ)の稿本を手にして、下手から登場する。「此書を捧げばやと參りて候が、未だ整はぬふしも御座候程に、おん手に參らするを躊躇ひ申候」とつゝましやかな詞があつた後、遂に意を決して奉呈すると、アルフォンス公は之を受納する。謝辭、謙辭、讃辭が雙方の間に濟んでから、公の胸に應じて、妹の姬は、ギルギリウスの石像の首から、月桂の環を取つて、之を此新敍事詩人に戴かせようとする。詩人は謙遜して身を後去る。傍の上臈は、「何とて否み候ぞ、御覽候へ、此の美しき枯れせぬ環を、御身に被けられらずる御手をこそ」と言葉を添へると、一なう、待たせ給へや、斯くて後

は、いかゞ世を經申すべきやらん、思ひも寄らず候」と承引しない。姫は環を高く捧げながら、「いかに、タッソー、妾にこよなき喜びを受けさせ給へ」とあると、是に至つて、初めて才人は、「其の美しき重荷をば、御身の貴き玉手より、我が孱弱き首にこそ、いざ膝まづきて受け參らせめ」と、やをら屈むと、姫は環を被ける。月桂環の授受の優容閑雅なのが、尚更能掛りに感じられたのは、氣のせゐに違ひない。其後、詩人は事を以て家老と爭ひ、暇乞して當家を立出でようとする時、別に臨んで感激の餘、思慕の果やんごとなき姫の前に跪いて、將に玉のおん身をかき抱かんばかりにすると、「其處退き候へ」と狂亂詩人を突退ける邊も、矢張謠曲を思起させた。……

斯くの如き古めかしい空想に耽りながら、昔のアルフォンス公の城下フェルララを、今しも後に殘して、タッソーの生涯を追懷した。狂詩人は遂に城下の一院に幽せられたが、其遺蹟はゲーテにも弔はれたこと、其紀行に見える通りだ。尋いで、我が若い想像力は、謠曲趣味から起つた足利時代の連想を桃山時代に向はせて、三百餘年前の日本の公達どもを、タッソー幽閉當時のアルフォンス公の館に再現せしめた。

宋元系統の、色彩の淡い、感情の涸れた室町時代の禪宗文明が、其末期に、嶺南諸國の濃厚な、强烈な調子を帶びた吉利支丹文明と接觸して、將に何等か爲す所あるやうに見えて、而も内外の形勢の爲に果敢なく終つて仕舞つた其徑路は、史興を催さしめ、併せて詩趣に富む所である。外敎の勢力が全盛であつた安土桃山時代には、我西南諸國に於ける新文明の代表者が南歐の大國に使を遣した時、其等の使節は年歯弱冠に滿たざる公達であつて、知識に渇し、感情に豐かに、突如十六世紀末の文藝復興爛熟期の文物に接して、如何に之を見守り、如何にそれから刺戟を受けたかを追想したくなつて、自分は今この旅路に無限の興味を覺え始めた。たしか千五百八十五年、天正十三年の夏鈍滿所伊藤義賢を始め、大友有馬大村三侯の年少使節が、伊國都鄙到る處の歡待を受けて、フェルララに着いた折は、アルフォンス公は、格段なる待遇を與へて、珍客を城中に留め、其去るに方つては、舟を艤してポーを下つてヱネチヤに送らしめたとある。其頃の城下は、全盛の頃であつて、今吾等が汽車の窓から見た小都會とは、比べものに成らなかつた。この所謂「印度の公達」を見て、上﨟衆は、沙翁の喜曲中に出て來るモロッコやアラゴンの公子に喫驚したポーシャ達とは全く異つた印象を得たであらう。狂亂詩人は、既に幽居中であつて、極東異人の面影をも知るに由なかつた。

更に回想は再びヱネチヤに復る。一行は、旅に病んだ使節の一人中浦を後に託した後、江を下つてキオヂヤを經て異采ある水都の客となつた。マルコ・ポーロ以來音に聞くジパング人を、今初めて目擊して相も變らぬ厚遇である。或時はリドの城に請じて、月明の夜に其近くの海上に舟遊を催した。ゲーテの遊んだ當年の秋から數へて、正に二百年の昔である。同じメロヂーの磯節は何を題目にして歌つたか。雄飛時代の少年は、興に乘じて故國の小歌を聞かせて、一座と樂を分ちはしなかつたらうか。又或時は、巨費を投じて、チチアンの門に出でた名工チントレットーに託して、使節等の肖像を畫かせて、之を評定所の壁に懸けることを決した。此像は、惜い哉近時佚して所在が分らなくなつたが、今も奉行所の大廣間に見物人の眼を惹く『極樂』の大圖を始め、大作に富む此ヱネチヤ派の老工の同じ手に掛つて、桃山時代の派手な模樣が如何なる色彩に畫かれたらう。

茶筅髷に結んだ矮小なる日本人の姿も、半身ならばヱラスケスが描いた侏儒の様になりは爲なかつたらう。兎も角開元天寶時代に入唐した正副使節藤原清河、吉備眞備の貌を玄宗皇帝の供奉で畫いて、蕃藏中に納めたと云ふ話よりも、名譽なことと語傳へてよい。

斯くて使節等は一寺院の外壁に、羅典文を勒した大理石板を記念に遺して存、この多趣なヱネチヤを去り、伊南歐諸都を巡歴して後、再び八重の潮路を越えて日東に歸つた。歸ると、外教の形勢は一變して居たが、天正の末年聚落の第で秀吉に謁した時、嶺南の風土文物をいかに說いたか、秀吉は又之を聞いていかに刺戟されたかは、固より舊文明の傳燈者たる僧侶や公卿の日記などに傳はるべくもない。然し、南國から傳はつた西洋文明の曙光が、初には葡國の薄倖詩人カモエンスの詩篇に表はれ、後には西國の宗教詩宗ローペ・デ・ヱガの作曲に現じ、中頃は水都の大畫工チントレットーの美眼に映じた後、當然國家の障壁に遮られて、外の星に光を讓りつゝ、殆どあるかなきかのさまに消えてしまつたのは、悲曲流の末路に類し感興の深い史題である

徒々として極なき空想の絲も、いつしか斷れて、汽車ははやボロニヤ近い。嶺南の春の夕暮は、更に別趣の興を起さうとして居る。

（明治四十四年一月）

南蠻酒に醉ひて（二）

私は紅毛をベニケではなくして寧ろベニモと訓んだのであらうと思ふが、私は自分が出した前說の少しく穿ちすぎたの嫌ひのあることを微笑せずにはゐられなかつた。主人のいふには、百年ほどまへ先祖が長崎の和蘭人から習つて歸つたので、先祖はその頃三井家に仕へ黑船掛りを勤めてゐたので長崎通ひをしてゐたのだといふやうに語つた。すると越後屋といふ屋號も三井家に因んで名づけたものかも知れないと私は推測した。ともかくも私は物好きにもこんな事を聞き出すためにカステラを買ひにはひつたのである。それから家に歸り紅茶をすゝりながらそれを二切れ食べてこの原稿を書きはじめたのである。そのカステラがおまけに古い和蘭燒の小皿の上にのせられて出て來たものだから頓に興が乘つて來た。

然し私が最初この一篇を書いて見ようといふ氣を起したのはカステラのせゐではない。實はもう一軒の方の酒屋で買つた南蠻酒のおかげである。越後屋の前から烏丸通りの西側を歩いて二條を橫ぎり凡そ十軒ほど上つた所に中德といふ酒屋がある。間口はカステラ屋よりも二三倍ほどあるが、格子の前に、南蠻酒、ねり酒、みりん、燒ちう、と幅二寸五分ほど丈一尺ほどの板に文字を刻んで胡粉で塗つた雅致のある古めかしい看板が四枚並んで懸つてゐる。正月の中ごろだと思ふが、烏丸通りのプラタースの街路樹を電車の中からぢいと見入つてゐたとき、ふと前々から念をかけてゐた南蠻酒の看板のみが一枚特に目にはひつたのである。私は今日こそはと二條で下車して步をはやめてその酒屋にはひつた。いきなり南蠻酒を一本と番頭さんに言つた。私は酒屋に酒を買ひにいつたのはこれが生れてはじめてである。壜詰はございませんと番頭さんはことわつた。一たいどんな酒なんだと私は尋ねた。まあ燒酎と味醂との間のものでございますと云ふ。私は少し失望せざるを得なかつた。

星月夜

中古から星のかゞやく夜の空を星月夜といひならはしてゐる。月夜にまがふ星空を形容したとすれば、星のためには月に對して見劣りがするといふ感を起させぬでもない。星月夜といふ語は、歌の用語としては、平安朝の末期からあらはれてゐるが、稍用ゐられ始めたのは、室町時代以後であらう。鎌倉初期の八雲御抄には、まだ星月夜といふ詞を擧げてない。藻鹽草といふ歌語辭典からその名が初めて出てゐるのだから、割合に後代に至つて知られた詞とすべきである。然し出典は平安朝の散文にまで遡り得るのである。

今昔物語卷第二十七の第五節「冷泉院水精成人形補捕語」と題する話の中に、

翁和ラ立返テ行クヲ星月夜ニ見遣ケレバ

といふ文句があるが、出典として一番古い。歌の方では、鳥羽天皇の永久四年十二月に顯仲、仲實、俊頼等男女七人の作家の歌を集めた永久四年百首、また堀川次郎百首ともいふ小さな歌集に、皇后宮女房で、肥後守定成の女なる肥後と呼ばれた女房の雜歌中、星を詠じた名歌が人口に膾炙してゐる。

　我ひとり鎌倉山を越行ば
　　星月夜こそうれしかりけれ

夫木集（十九雜一）にも出てゐる。「越行ば」を或本に「越來れば」としてある。何しろ上は萬葉より、二十一代集まで星月夜といふ句は見當らぬので、この歌はかた〴〵有名になり、あちこちに廣く引用された。謠曲の『調伏曾我』には賴朝が「明るを待や星月夜」とうたふと、立衆の上歌に、

「鎌倉山を朝立て〳〵、まだ有明の影のこる……

とつゞけるが如く、枕詞のやうにあつかはれた例もある。

應永二十二年の爲尹卿千首には、二例ある。爲尹は定家の子爲實の曾孫で冷泉家の嫡々である。戀二百首のうち寄星戀として、

　心をぞしるべに來つる星月夜
　　さてもくまある道のさゝはら

と詠じたのが一つ。もう一つは、夏百首で水上螢の題詠で、

　池の面にうかぶ螢の星月夜
　　水くらからず更にみえつゝ

とある。共に拙い作である。爲尹とほゞ同時代で稍後かと思ふ作に、東福寺の禪僧に有名な正徹書記の、

　荒れ渡る窓の北なる星月夜
　　また燈火をならべてぞ見る

といふ、やはりつまらぬ歌がある。以上の三首は皆室町初期の作家である。

然るに平安朝末期より鎌倉初期へかけての女性歌人に建禮門院右京大夫といつた人の家集に、

　月をこそながめなれしか星の夜の
　　深きあはれを今宵知りぬる

といふ即興の歌が一首ある。題詠でないから何の技巧もなく、唯卒直に星夜の美を讚仰した作たるに過ぎない。然しこれだけの讚美でも、これまでの歌人は、星夜に對してしてくれなかつたのである。

右京大夫は書道の傳統で有名な世尊寺家の娘である。源氏物語奧入といふ簡單な源氏の註釋を作つたり、夜鶴庭訓抄といふ書道のこと

を述べたりした人の息女である。この庭訓抄も多分彼女の爲に書いたものと思はれる。彼女は高倉天皇の中宮建禮門院に仕へ、後宮中をお暇して、平家沒落に遭ひ、後白河法皇の大原御幸のあつた文治二年の春より少し前、すなはち元年の秋のころ寂光院に門院を訪ひまゐらせたこともある。その冬琵琶湖畔にさすらへて、比叡の麓坂本あたりにて、或晩眞夜中に起き出でて星月夜を見上げて上記の歌を詠んだのである。その題詞を見ると、日本の文學ではとにかく古今獨歩ともいふべき文字がうかゞはれる。

十二月の朔日の頃なりしやらん夜に入りて雨とも雪ともなく打散りて村雲さわがしく一つに曇りはてぬものから、むら〳〵星うちきえしたり。ひきかづき臥したるきぬを、更けぬる程、丑二つばかりなどにやと思ふ程に、ひきのけて空を見上げたれば、殊に霽れて、淺葱色なるに光こと〳〵しき星の大きなるがむらもなく出でたる、なのめならず面白く、紺の紙に箔をうち散らしたる様に似たり。今宵はじめて見そめたる心地す。さき〳〵も星月夜見なれたることなれど、折からにや異なる心地するにつけても唯物のみおぼゆ。

これほど星月夜を讃美した散文韻文は、この外私の未だ日本文學にみかけない所である。紺紙に金銀砂子をちらしたやうな冬の眞夜中のはれわたつた空を、追懐と愛着とに滿ちた彼女は見上げて、「たゞ物のみ覺ゆ」と嘆じた、紺紙に箔を散らした様だと形容したのも、書道の家に生れた彼女として、初めて意味のある文句であつた。美い意味に於てのお里をあらはしたものである。

文治元年十二月一日は太陽暦にすると、西暦一一八五年十二月三十一日に當るから、今日でいへば、先づ大晦日か元日あたりの深夜即ち午前二時頃の天界を、叡山の東麓から湖邊へかけて觀望したらば、右京大夫女の當年の氣分がいくらかうかゞはれる筈である。

まあ一端を想像して見ると、その時分オリオン座の大星どもも、シリウス等と共に、もはや視界からは逸してしまつてゐたらうが、東方からは牧夫座の大角や乙女座の角がのぼつてゐたらう。北斗七星も無論だらう、獅子座のアルフワのレグルスは、その弱い光を既に中天に輝かしてゐたらう。蝎座の大火、日本で中子星、支那で心宿といふ、あのきらりとしたやつは見えただらうか。

とにかく、物すごいほどに澄みわたつた冬空に、あゝいふ愛別、あゝいふ世變を經驗した彼女が、大星を、いはゆる「光こと〳〵しき星の大きなるが村もなく出でたる」を、見上げた感情くらゐ高調に達したものはあるまい。

（大正十二年九月）

南蠻酒に醉ひて　（三）

看板の並べぐあひでもすぐに察しられさうにもあつたのだし、書物を見るなり人の話を聞くなりして自然會得がゆくはずであつたのに、私は名にひかされて何だかエキゾチックな香りの未だ失せない或るものを求め得るかのやうな氣がしたので、突如とびこんでしまつたのである。店の中の右手に樽が四つ五つ並べてあるところに導かれていつて見ると、磁製の樽に呑口がついてあつて樽の前面には寶の一字と南蠻の銘とが印刷してある大きなレッテルがはりつけてある。

昴星讃仰

夏の夜更けに織女と牽牛とが銀河を隔てながらしめやかに西をさして動いてゆくと、かささぎならぬ白鳥は翼をひろげ首をのばしてさも二人の仲を隔てようといらだつて天の河を南に突進しようとしつゝも、これもやはり宿命に曳きずられて私たちの頭の上を西の方へと越してゆく時分、もう北冠の珠の飾りは大角星に引つぱられて遙かあなたに薄くなつてしまひ、こなた東のかたを仰ぐと天馬の形相がいよいよ高くなつて見える。もう星の品定めも一とほりついて少し退屈になつて來るころ、比叡山の方からあらはれて來た馭者座の主星がきら／＼して更けゆく空の單調を破るかと思ふと、東山の上をかなりのぼつてお待兼ねの七つ星らしい一むれが見えそめる。もしや眼の迷ひではないかと疑はれるばかり最初はちらついてはつきりそれと定めがたい。舞子の花かんざしの銀のぴらぴらか、天女の瓔珞のゆらぎかと、暫しはかはゆらしさに氣を取られる。「澄んだ闇の空をのぼつて來て、銀絲にからみつけた螢の一むれのやうにちらつく」とテニスンが形容したそのスバルを今夜見つけたのだ。ほんに銀の螢籠を高く夜の空に吊した樣に見える。

私たちの氣のせゐか、清少納言が枕草紙に「星は」と題して、まつさきに「すばる」の名をかかげたのは、まんざら筆まかせではなく、敏感な女性の眼にこの星がえならずうつくしいと映じたためではなかつたか。いや／＼、それなら得意の筆法で何とか一ことありさうなものと打消されさうでもあるが、無意識にその名が劈頭に筆端をほとばしつたその奧底に何やらわけがありげだと思ひたくてならぬ。この草紙には星の名を五つ數へ立てたが、一時代以前の源順が勤子内親王に書いて上げた和名抄には、星に關する名稱を七八つ揭げてある。そこにもスバルは漏れなかつた。して見ると、平安朝の中ほどには、歌や文にこそ現はされなかつたけれど、民衆の眼についてゐた知名の星であつたことは爭はれない。さるにても萬葉以來七夕を詠じた無數の歌があるに反して、このかはいい一むらぼしが、因襲とはいひながら、一人の作家をも有ちえなかつた不幸を私たちは悲しんでやりたい。そこでこのいとしい星を先頭に出してくれた清女をたゝへずにはをられぬわけである。この憫むべき星の名は、歌詞には度外視されたから、例へば順德院の八雲御抄にも上げて載けなかつたのは當然な運命で今更愚痴もいへぬ。

舊約聖書の約百記に、「爾すばるの緒を結びつけ得べきかといふ意味の文句があつて人のよく引く所である。然し日本語でスバルといふ語は、元來スブル（統括）シバル（繫縛）などの語と同源で、スベラギ（天皇）等のスベラとも亦同じ語根から出たのだから、初めから散りぢりなものを統べくゝつてある形になつてゐる。卽ち連珠とも呼んでよからう。星の名としてこんな美しい名まへが、またと他にあらうか。近世になるとムツラボシ（六連星）といふ異名がこれに與へられた。こんな稱呼よりも上古以來傳統の正しいスバルといふ名の方がどんなに好いか知れない。一體スバルは肉眼の利き方によつては六つにも見え七つにも見えるので、西洋では古來七ツ星と唱へてゐるが、日本ばかりでなく印度や支那でも或る時代までは六星と數へてゐ

たことがある。唐の不空三藏の翻譯で弘法大師の將來本として名高い宿曜經によると昴を六星としてある。唐代は固より漢代に於ても既に七星としてあるにも拘はらず、印度の天文學では六星となし、スカンダ神の乳母六人に見たてて、その名をクリッティカー、音譯して迦提と云つた。火神の子供を守り立てる六人の御乳の人に擬してあるのは、希臘でスバルをアトラス神の七人娘として美しい神話が出來てゐるのと比べると、面白い對照であるが、私たちは保姆とするよりも少女とする方がふさはしいと感ずる。七人娘のうち一人の娘が隱れたと云ふ物語も希臘にあつた位だから、スバルを六星としたり或は七星としたりするのは古今東西その揆を一にすると云つてよい。支那でも六星と考へたことがないではない。又アイヌ語にイワンリコプといふ星の名があることは藻汐草といふ文化初年の辭書に出てゐる。イワンは六でリコプは星であるから或はこれもスバルのことかとも考へられるが確かでない。

近世の書物にも稀にはスマルといふ語形が見えるが、これこそ古語を傳へたもので、スバルといふのは中古以來の形なのだ。上古の麻行音が婆行音になる若干の語例に照して、上古のスマルが中古に至つてスバルに轉化したことは直に首肯される所である。星の名ではないが、玉の一聯を上古タマノミスマルと云つた。古事記に美須麻流之珠と書いたのを日本紀の方には御統としてある。記の歌にも多麻能美須麻流と詠んである。萬葉集の歌にも頂きに著須賣流玉といふ句がある。珠玉は上古の純日本式裝飾であるから、これらの文句は、直に私たちに太古上代の風俗を想起さしめずんば止まない。五百箇御統などといふその意味、その響き、何といふ美妙な表現であらう。それが延喜六年の日本紀竟宴和歌にはイホツスバルとなつてゐるから、星の名の方でも、やつぱり同様な音聲變化が起つたものだと考へてよろしい。

平安朝以前には星の名としてのスマルは、直接文獻にあらはれて遺つてゐない。然し延曆二十三年の皇太神宮儀式帳に天須婆留女命また須麻留女神といふ女神の名が三ケ所(渡會郡神社)に見える。この女神こそ昴星の象徴に違ひないと私は思ふ。但し延喜式の神名帳には須麻漏賣神社となつてゐるが、その座は多氣郡の方にある。言語學的に觀て面白いと思ふのは、延曆年代の丁度過渡期にスマルとスバルとの兩音形があらはれてゐることである。延喜式の神社名は古形を傳へてゐるに止まるものと見てよからう。さてこのスマルメの神といふ女神は、儀式帳によると大歲御祖命とも緣故があり、倭姬命とも因みがある所から推して農事に關する神ではなかつたかと想像する。記紀の神代の卷にはあらはれて來ず、以後の古典にも說いてないから神祇史に通ぜぬ私たちには確かなことは言へないけれど、どうも秋の收穫に緣のある女神らしいやうに思ふ。即ち私は須麻留女神を昴女神と解しておきたいのは、このスバル星は東西共に農耕に結びつけられ、而も女性に擬せられて居るからである。尤も釋日本紀に引く丹後國風土記には、水の江の浦島が龜比賣すなはち乙姬樣に伴はれて龍宮に赴いた時、宮門に出迎へたスバル星の化身を七豎子としてあるが、文字通りに解すれば、直にこれを乙姬に扈從する女童としてしまふわけにはゆかぬかも知れぬが、まあ概してこの可憐な星を女子に見立てるのに誰も異論はあるまい。珠を聯ねたミスマルの様なスバル星が六七人の女神として少女として擬人され又それが農事に繫がつてをるとすると、よしやそれが支那の天文學的知識と沒交涉であつた所で、日本人の天體に

關する純古の想像を表現したものとして、うぶであるだけ却つて興趣が深いのである。私の考では、スマル星は農耕時代の上世日本人の幼い天體觀察から知られ、又、或は三韓を通じ或は直接に支那天文學の影響を受ける以前の命名にかゝるものだと見るのである。上世日本人が見分けた恆星はひとり此のスバルのみに限らなかつたであらうけれど、かゝる愛すべき名をつけられた星、かく神格化された星、かくばかり農民に親しまれた星は、我國の天文界にあつては格別の取扱ひを受けた果報者であつた。

秋から冬にかけてスバルは日沒又は宵の口に西へと一晩毎に高く見えて來て人々の眼に慣れる。尙書堯典に、日短星昴、以正仲冬とあるのも、冬至をさすので、それから大戴禮記の夏小正を見ると、四月昴則見とあるから、スバルは仲冬に中し、それから早く西に沒して、夏正の曆の四月に再び東に見えはじめるのを、支那でも古代から注意したことがわかる。詩經の國風一召南の一に小星と題した五句詩二章がある。

嘒彼小星、三五在東、肅肅宵征、
夙夜在公、寔命不同、

嘒彼小星、維參與昴、肅肅宵征、
抱衾與裯、寔命不猶、

參はミツボシで、オリオン星座の三王座、俗にオリオンの帶といふ名高い星だ。これも東西の古典に有名であるが今は詳說せぬ。召南の國風にはこの二星を題材にしてあるが、西洋ではオリオンは、七人娘スバルを追つかけて東から登つて來る獵夫となつてゐる。希臘では太古農民詩人ヘシオドスが英雄詩人ホメロスとの歌合せにスバルを歌つて、みごとに勝を得た話がある。希臘歲事記(とでも云はうか、「日々の仕事」とでも題さうか)の中にも同じ文句が見えてゐる。

アトラス神の七人娘スバルが上つて來るころ、爾の收穫は始まり、それが沈んでゆくころ、爾の耕作は始まる。四十晝夜この星隱れ、さて歲一周りして、爾がその鎌をとぎだす時分に、再び見はれる。

こんなにスバルは農民に親しまれた星である。東に上つて來るのは五月、西に沒して往くのは十一月とされてゐた。支那にも大昴中して芋食すとか、仲冬昴星中して芋を收むとかいふ俚諺もあると云ふ。日本でも近代信州の俗諺に、「スバルまん時粉八合」と云つて、スバルの中する時蕎麥を植ゑると一升で粉が八合取れると農家でいひはやしたさうだ。かう云ふ俗說が今も信州その他の地方にあつたら知りたいと思つてゐる。この俗諺は今から百二三十年前寬政時代の言草であるが、同じ頃の大和にも農民が星を觀察して種蒔などの時を定めたといふ話がある。それは京都の老學者畑維龍の『四方の硯』といふ隨筆中に見える話で、それによると、

星象を見ることは農民よりくはしきはなし。大和の國は水のとぼしき處なれば四月比より夏中農民夜もすがらいねずして星の象ばかり見て種おろし、あるひは夜陰の露おきたるに苗のしめりをしり、米穀の實のるとみのらざるとを、あらかじめ知る事なり。その星にカラスキボシ、ヒシボシ、スバルボシ、クドボシなどやうの名をつけて某の星は何時に何の位にあらはれ何時を何の方にかくるなどいひて、その日づもりにてはかること露たがはず。

とある。上古の大和の遺風とも考へられる。外國から影響された天文學や星辰崇拜乃至星辰傳說とは全く起源を異にするに違ひない。カラスキボシは參で、オリオン座の三ツボシであ

るが、近世以降の文獻に見えるだけで、上古中古の典籍には錄してない。ヒシボシ及びクドボシのことは未だ考へない。

近世の事情から上古を推すると、スバルは農民に注目された星で、あゝいふ美名を與へられ、更に天須麻流女命と云つて農耕に關係ある女神とされたのであらうと思ふ。希臘語のプレイアデス（それから英佛語また獨語のそれが出てをる）の語源には二説ある。一はプレオーン即ち衆多といふ義だといふ説、これは日本のスマル又スバルと稍似た意味だが、國語の方には衆多の統一といふ意味があるだけ優つてゐる。第二の説は、希臘語でプレオーといふ語は、航海すると云ふ義で、スバル星の東へ上り西へ沈む期間（五月―十一月）が航海季節であるから、プレイアデスとは航海星の意だといふ考である。この説の方が言語學者間に用ゐられてゐる。日本でも、この星は舟人にはよく知られた星であつた。物類稱呼によると、伊勢鳥羽伊豆の船詞に、十月中旬に吹く北東風を星の出入といふが、それは夜明けにスバル星西に入る時に吹くのだとしてある。同書に又畿内及び中國の船人の言葉に、十月の風をほしの入りごちといふとある。これもスバル星のことである。その他明治時代にも同樣な天氣占ひがあると見えて、幸田露伴氏の水上語彙にもさういふ事が載つてをる。然しながら日本の古典上ではスマルは希臘語の場合のやうに航海に緣のある命名とは言はれない。

スバルを又ハウキ星と呼んだことがある。それは宿曜經の註釋書に見える異名で、滿洲語又は同系の東北方言にもさういふ稱呼があるから、幾らか尤もな所もある命名だと云つてよい。西洋で七つ星といひ、昔日本で六連星（江戸）とも七曜の星ともいつた外に、關東で九曜の星ともいつたさうであるが、若し實際スバルに九箇の星を認めたとすると、頗る慧眼だ。何故といふに七人娘の外に、父アトスラと母プレイオーネを加へると九人となり、十七世紀西洋の一天文家の所見に暗合するわけだから。

希臘語で鳩のことをペレイアデスと云ひ、スバルのプレイアデスと音が似てゐる所から、この星の名を鳩の意味だと俗解し、又この一むらの星、七人娘がさつをオリオンに追はれて逃げて來たので神樣はそれを鳩に姿を變へさせて下さつたので、無事に天上することが出來たなどといふ御伽話めいた昔話も起つた。

拉丁語ではこの星をヴェルギリアエと呼んだ。春の星といふ意だとも云ふし、又瑞枝星の義だとも云ふ。春草木が青々としげり、瑞々しい小枝がすく〱とのびる季節に出てくる星だからさういふのだ。ヘシオドスの文句に見える所と異曲同工の命名である。これも亦愛すべき名まへといふべきである。私たちは、スバルの可愛い姿を讚美する。それと同時に、あちこちに於けるその命名の來歷を考へると感興が更に深い。

（大正十二年四月）

星夜讃美の女性歌人

代々の歌集を繙いて誰しも感ずるのは、和歌に星夜の美をうたつてないことである。敍景詩としてでなく抒情詩戀愛詩としての七夕の歌の如きは、日本が盛唐の文學や風俗の影響を受けた後、萬葉以來の歌に幾千と數へてよいか知れぬ程であるが、もと〳〵捉はれた題詠であつて、清新の味に乏しいものばかりだ。曉や宵の明星は稀に詠まれたが、曉星となると、もう因襲的に神樂歌のそれに拘泥してしまつて陳腐な歌が多い。それもさすがに萬葉の長歌になると、朝夕東西に位置をかへて人の眼につく此金星をあしらひに使つたのが二首もある。其一は卷二の人麻呂の挽歌で、「夕星のかゆきかくゆき」とあり、其二は五卷の雜歌に、「明星のあくる朝は」と「夕星の夕べになれば」との二句を對句にしてある。卷十秋雜歌の七夕の題下に、人麻呂の歌と傳へて、

　夕星もかよふ天道をいつまでか仰ぎて待たむ月人壯

と云ふ一首があるが、これも珍しい取材である。

人麻呂には、構想上更に面白い幼稚ながら壯大な比喩的な歌がある。卷七雜歌に詠天と題して、

　天の海に雲の波立ち月の船星の林にこぎかくる見ゆ

とよんだのがそれであるが、詩としては感心せぬ。星を主題にしたものではないが、とにかく比喩に使つた點だけでも以上の數首は注目しなければならぬ。卷二に持統天皇が大后のとき天武天皇の崩御をかう詠まれた御製がある。

　北山にたなびく雲の青雲の星離りゆき月もさかりて

これも星が比喩に用ゐられただけに過ぎない。

朝日のかゞやき、夕映えのけしき、それはともあれ、朧月夜を若くものなきとまでたゝへ、秋の夜の月はいふも更なり、四季をり〳〵の月に吟詠無數であるのに星夜の美をたゝへたのはおろか、星々を詠んだ歌は極々少い。平安朝末期から鎌倉時代にかけては、星の歌は稍眼についてくるが、それ以來でも夕づつ（金星）が十首ほど、七ます星（北斗七星）が數首ほか見出せぬ有さまである。單に曉星をよんだのはまだ一つ位しか知らぬ。然し院政時代あたりから鎌倉中期ごろまでの歌には、まづ和歌史のうちでは絕唱と見るべきものがちらほらある。殊に定家の作や爲家以下その子孫の作中に誦すべきものが割合に多い。星の歌とか寄星祝とかいふ様な題で詠んだ作歌がまゝ家集などにあらはれてゐるが、詩的價値の乏しいものばかりだ。そのうち應永年中、冷泉家の爲尹が詠じた寄星祝の歌、

　曇りなく空にみちたる光りかな星の林の夕闇のそら

の如きはいゝ方である。定家の作には左の三首がある。

　星のかげ西にめぐるも惜まれてあけなんとする春の夜の空

　そよくれぬ楢のひろ葉に風おちて星いづる空の薄雲のかげ

　冬の木の霜もたまらぬ山風に星の光りのまさりがほなる

季節々々の星の氣もちがよく現はされてゐる。その子爲家にはこんなのがある。

暮るゝまに出そふ星の數しらずいやまし
にのみなる思かな

さゆる夜の雲みる星の林より霜吹きおろ
す木枯らしの風

源家長の左の一首は定家の春の夜の明くるを惜む情緒とかはらぬ星にあこがれた名吟である。

夏みえし星の光りぞかくれゆく秋たつ夜
半の長きはじめに

夏の夜な〳〵見なれた星々を西天に送るのは、何だか心さみしい妙な氣分になるものだ。牧夫星座の大角のみ遙かあなたにかゞやき、北冠はうすゝなり、織女牽牛のめをと星が頭上からあちらへそれてしまひ、北十字星てふ白鳥が向きをかへて、見つけた私たちの眼を迷はす。その代り七人娘のすばるが段々高くなり、その後から牡牛のまなこを光らすアルデバアランがついてくるのが、日暮れて間もなく見られるのが樂しみである。定家の歌のうち、春の曉近き星空には何をみとめるか。牧夫は西に沈まんとして、蝎座の心星は南天に低くきらめき、七夕の二星が、私たちの頭上に高く未練を語らつてゐるのが氣づく、夏の夕まぐれにたなびく薄雲の空には何の星々をみつけるか。やはり天頂の棚機と彥星と、やゝ西の空高く大角が私たちの眼をひく。南には火星と蝎の大火とが、かゞやき、西天低くは明星がひからう。定家の歌の第三に冬の夜に光りのまさりがほなる星とは何々か。七人娘のすばる星について來る畢星のアルデバアランか、娘たちを追つかけて上るたくましい獵夫大オリオンか。いやいや大ぞら無比の天狼星のシリウスだらう。雙子星もあれば馭者もある。冬の霜夜は星の群雄割據だ。

星月夜といふ言草は、一たい月夜を基にして星夜を形容した文句でちと氣にくはぬ所もあるが、萬更棄てた名前ではない。散文では今昔物語に出てゐるのが最も古いから平安朝中期このかたの新語であらう。歌には肥後と呼ばれた女性歌人が鳥羽天皇の永久四年の百首(いはゆる次郎百首)に星と題して詠んだ名歌が一ばん早い。後世よく人が引く作である。

我ひとり鎌倉山を越えゆけば星月夜こそ
うれしかりけれ

まことに純直な歌である。暗き夜と鎌倉とをかけた詞の綾があつても、先づ星夜の賞美として すらりと出來た佳い歌といつて差支ない。肥後は、肥後守定成といふものの女で、皇后宮に仕へた女房であつたと云ふ。敕選集中に作歌も多く載せられ、別に肥後集といふ家集も存する。それから一時代數十年程を經て高倉天皇の中宮建禮門院に勤めた右京大夫といふ女房に、星夜を讃美した詞書き附きの歌がある。これが私のこゝに顯彰しようとする女性歌人の古今獨步な特色である。

この不朽なる建禮門院右京大夫は、代々能書家を出した世尊寺家の女で、權跡と稱せられて三跡の一人に數へられた行成卿六代の孫に當る。高祖父の伊房、祖父の定信、父の伊行、兄の伊經、甥の行能、いづれも書道の達人であつて、町田淸興の審定した世尊寺法書にもその手蹟が存し、古筆切れその他に幾代となく譽れある記念を遺して居る。右京大夫とは父伊行の官名に由つたものだらうが、祖父定信、曾祖父定實にはその役名が系圖に記入してあるけれども、父のには見えてゐない。父は源氏物語奧入の著者としても聞え、又夜鶴庭訓抄といふ書道の敎訓書を作つて其娘たちにのこした。この抄物は彼女一人の爲に書きのこしたとは明記されぬけれども、彼女はじめ姉妹三四人の庭訓に書いたものとした所で、その中ではこの女性歌人が首であつたとしてよいのである。世尊寺

家は代々宮殿の額とか大嘗會の御屏風とか、萬葉や源氏また敕撰集の本文又は題簽などを書いた譽れのある家柄で其中にも大は一切經を一人一筆で書いたといふ定信の如きがある。萬葉の筆者には行成はじめ、その孫伊房があり、殊に伊房は仙覺律師が校定の萬葉集に用ゐられた二種の古寫本の筆者であつた。父伊行や兄伊經にも現存の某々萬葉切れの筆者が擬せられてをる位だ。かういふ傳統の家に彼女は生れあはせたのである。されば右京大夫家集の中にも亡き兄の爲に阿彌陀經を書いた時に詠んだ歌や、父伊行のもとで手習をした人の筆蹟を宮中で見て往時をしのんで作つた歌もある。俊成卿九十の賀のをり、後鳥羽院より賜はつた袈裟に女歌人宮内卿の作を彼女は敕により紫の絲で文字をぬひつけたことを「昔のことおぼえていみじく道の面目なのめならずおぼえし」と後年追懷して家集に書いた。その外、手習のことなども集中に尙一二散見し、讀む者をしてさすがにとその家筋を想起させる。

この家には新古今以後の敕撰集に四十七首を收められた行能の如き作家も出で、その父祖伊經伊行伊房も敕撰集また歌合などにその作歌は見えるものの、取りたてるほどの名吟もきこえない。たゞ右京大夫家集に至つては、時の女流作者の集とは選を異にし、歌そのものより寧ろ詞書が豐かであつて、恰も平家物語の小さな縮圖とも見える所から明治晩期になつて、史學者歌學者の推奬を受けるやうになつた。文は眞情の流露を主とし技巧の勝れた所はないけれど、却つてその閲歴から湧いた純な感じが表現されてゐる所に特色をもつ。少くも六十歳を越えた承久嘉祿頃に三四十年前の事の追憶を書いたもので、大體首尾一貫し年次もほゞ立つてゐる點も他の家集とは相違してゐる。自作の歌は約三百首あつて他の五十餘は他人の作である。一家の集などいひて歌よむ人こそかきとゞむることなれ、これはゆめ〳〵さにはあらず、たゞ哀れにも悲しくも何となく忘れがたくおぼゆることどもの、そのをり〳〵ふと心におぼえしを思ひ出らるゝ儘に我が眼ひとつに見んとて書きおくなり」と書き起して、平家全盛の時代からその沒落に至るまでの榮枯を中心に愛人資盛との生別死別より、重衡の捕はれ、維盛の入水、さては女院を大原にたづねまゐらせた悲しき秋を經て、心苦しさに堪へかねて都を立出でて比叡坂本の邊にさすらへて大雪に大内の橘をしのぶあたり、はては再び後鳥羽院の宮中に仕へて、徒然草に指摘してあるやうに、「世の式もかはりたることもなきに」たゞ自分の心の中ばかり碎けまさる悲しさを訴へたくだり、終始緊張して讀まれる。平家西海に沈んだ同じ年の暮と思はれるが、坂本にしばし假りねをしてゐたころの一節に日本文學絶無の文字が味はれる。

十二月一日ころなりしやらん。夜に入りて雨とも雪ともなくうちちりて村雲さわがしく一つにくもりはてぬものから、むら〳〵星うちきえしたり。ひきかつぎ伏したるきぬを、更けぬるほど、丑二つばかりなどにやと思ふほどに、ひきのけて、空を見あげたれば、ことに晴れて淺黄色なるに光りこと〴〵しき星の大きなるが、むらもなく出でたる、なのめならずおもしろく、縹の紙に箔をうちちらしたるによう似たり。今宵はじめて見そめたるこゝちす。さき〴〵も星月夜見なれたる事なれど、これは折からにや、異なるこゝちするにつけてたゞ物のみおぼゆ。

月をこそ眺めなれしか星の夜の深きあはれは今宵知りぬる

題詞の文といひ歌句といひ際立つた巧緻をみないけれど、率直に天象を敍して星夜に感激

し「たゞ物のみ覺ゆ」と意味深長に餘韻を含ませた筆致は、幾度讀んでも倦きない。かくの如く星夜を讃美した敍景抒情兼ね備はつた文字は、國文學史上の絶唱と云つても過言ではあるまい。玉葉集卷十五雜歌二にもこの歌に一聯な夜る、星の光殊にあざやかにて晴れたる空は、縹の色なるが、こよひ見そめたる心ちしていとおもしろく覺えければ」と題して錄してあるのはうれしい。然し明治以後の國文學史家は、この家集をさへ見すごしてしまつた位であるから、たまさか取上げた先覺者でもこゝの一條の如き佳篇をさまで珍重してくれなかつたのは、餘儀なきことであらう。

こゝに十二月一日とあるは多分文治元年のことと思ふ。月輪兼實の日記玉葉によると、その年十一月二十八日から十二月二日までの五日間、陰晴不定と見えてをる。その十二月一日は太陽暦で十二月三十一日に當るから、先づ翌年陽暦の正月元日あたりの星の圖をくりひろげて七百五十年の昔をしのぶのも亦一興であらう。

元來冬の夜は星の觀賞に最もふさはしいとされてゐる。星夜の美觀は冬に優る季節はなきにしても、それも宵の口のことであつて、深夜には天界の模樣もかはるし、天文家か格段の物ずきでなければ、觀象など出來にくい。從つて右京大夫集に見える深夜讃美の一節の如きも、深夜の丑二つ、先づ午前二時頃の星界の模樣として想像に畫いてみなければならない。宵には陰晴定まらず、曇りはてもせずに星々が雲間に隱見した有りさまであつた。大オリオンの星座にせよ、天狼と名にしおふシリウスにせよ、可愛い雙子星にせよ、はなれ／＼に姿を現じたり沒したりしてゐたに違ひない。雲のたゞずまひに心おちつかず、星のみえがくれに氣がめいつてしまひ、枕に就いても寢つかれず、たうとうやるせなさに堪へかねて午前二時ごろと思ふころ、臥床をぬけ出て空を仰いだ。眞夜中の天はすつきり宵とはかはつてゐた。淺黄色に澄みわたつた空に、異常な光りの大星どもがまんべんなく出てゐる。オリオンはもはや西に傾いてしまひ、山に隔てられて見えなくなつてゐたらう。シリウスもおぼつかない。雙子星などはどうであつたか。西の方の眼界が不自由なのに反して、東と東南の方は、湖水からあちらへ、廣々と展望がきいたであらう。牧夫座の首星たる大角は必ず東に上つてゐたに違ひない。乙女座の角ももう姿をあらはして居たかと思ふ。獅子座のレグルスは無論だ。北向きに天邊を仰いだら、大熊星の北斗が横はつてゐたらう。すべてこれらの一等星二等星をはじめ物すごいほどに光りがさえ／＼した大星は、西海に沒したかた／＼、さては愛人とその一族たちの靈魂ではなかつたか。西へ沈みゆくオリオンとひきかへに東にあらはれる蝎の眼、なかご星（心宿大火）が東南の天低くぎら／＼輝いてゐたら、彼女はどんなに惱まされただらう。「たゞ物のみおぼゆ」では感じの表現がよわすぎるけれど、如何せん老後の追憶であるから、まづこれほどの情趣をよくもこんなに敍したものだと感ずるの外はない。

さすがに彼女は世尊寺家に生れた女性であつた。物すごい深夜の星の景を寫すにふさはしい詞を忘れなかつた。紺色の紙に箔をうち散らしたやうだと星ぞらを形容した。この一句のために右京大夫の個人的特色がおのづとよく現はされた。家柄はさすがに爭はれぬと感じさせる。紺紙に金箔を砂子のやうに散らした模樣を連想したのは彼女の場合ほんとに活きた比喩である。世尊寺流の手にも似かよふといはれる藍紙萬葉を私たちに想浮べさせもし、追福に書きもしたら紺紙金泥、經卷をも私た

ちの眼に映じさせる。私たちは信ずる、あの文句がこの一節に對して畫龍點睛となつてゐると。

繰返していふ、舊日本の文學に於て建禮門院右京大夫は、星夜の讃美の一節に於て無比の光彩を放ち、私たちは永久この女性歌人のスターを忘れてはならぬと云ふことを。

（大正十二年八月）

南蠻酒に醉ひて（四）

番頭さんは、ずん／＼呑口から茶碗に一杯注いでくれた。私は言つた、こゝで飲むんぢやない、僕は元々酒は飲めない方だ、たゞその南蠻酒といふのがなつかしいので買つて歸らうと云ふわけなんだからそれを二合壜くらゐに一本つめてくれたまへ、若し南蠻酒の銘のあるレッテルがはつてあれば結構だがね。えんばんとレッテルはございませんと番頭さんは答へた。小さいのがなければ、あの樽にはつてある樣なのでもいゝんだと私はきり出した。番頭さんは益々不審なお客だと心中怪んだにちがひない。

私はその日は七條までいつて歸りには下鴨の友人に私の近著『南蠻更紗』を贈るつもりでそちらにまはるつもりで、烏丸通りを二條まで來たのであつた。風呂敷にはその本が一部包んであつた。それを見せるのも子供じみるとは躊躇したが、えゝ儘よと風呂敷をあけて書物をケースごとちよつと見せて、まあこんな風に僕は南蠻好きなんだから君んとこの南蠻酒を買つて歸つて一杯味つて見ようと云ふわけさ、まあ云はゞ風流心とでもいふかな、物好きの骨頂さね、と餘計な辯解を試みると、先方でも初めてわけがわかつたと見えて、奥へいつて熱心に南蠻酒のレッテルを探してくれなどした。その間に小僧さんが壜に詰めてくれたのを、なあに又そのうち作つたら出しておいてくれたまへと、二合壜を外套のかくしにしのばせて、酒屋を出た。名にめでて買へるばかりぞ南蠻酒、などと口のうちで棄てぜりふをいひながら下鴨の友人をたづねて書物を贈り、いざそれからその近くの維舟博士をおとづれて酌みつゝ共に異香に醉はん哉と友の家を立出でかけたが、あいにく夕方に間もない程であつたので、他日を期して家路を急いだ。途中外套のポケットから壜の口が少しはみ出てゐるのを氣にしながら家に歸つて衣服を更めるが早いか、小さなコップで一口飲むと、これはしたり、せめて屠蘇のつよいぐらゐと高をくゝつてゐた所が、飲みつけない私には、强さも强し、味もわるし、全く幻滅のあはれさ。

南蠻の惡酒にゑひぬ冬ごもり

と懺悔をして、その後或人の本に書いて置いたやうな始末である。聞けば、南蠻酒は普通に柳影とも稱へ、盛夏に暑氣拂ひとして飲む燒酎まがひの酒ださうだが、さてその由來は如何であらうか。例のせんさく癖がむら／＼と起つて來た。

名に執着して調べて行くと、先づ傳長老の異國日記に、慶長十七年の六月、ノビスパンヤ（新西班牙）即ちメキシコから家康公への贈物の目錄に斗景だの鷹の道具だのと共に南蠻酒兩樽といふ名目が載つてゐる。村上博士はその異國日記抄に於てこの南蠻酒とあるのを葡萄酒だと註解された。一應尤もである。私も私の懺悔錄に書いた南蠻酒を、やつぱり粗製な葡萄酒、昔いはゆるチンタ酒のたぐひと最初は思つたのであつた。

海の星

今から五十年ほど前の明治七年に、そのころの大日本主教ベルナルド。プチジャンの允許を經て公教會から刊行された聖教日課といふ小册子がある。私の見た本は故人上田柳村が祕藏したもので、今京都大學の圖書館に珍襲するものである。故人は大正元年八月それに證註を附け序文を添へて雜誌藝文の上に翻刻したが、柳村が他界の翌年の秋、未亡人は故人が愛著したこの證註本を單行して世に頒つた。追善の至情ここに至つたものとして私もありがたく戴いてそれを愛藏してゐる。この聖教日課中の祈禱文等は教會が新に飜譯したものではなく、實はこれら浦上其他の舊信者が世々口碑で語り傳へたのを蒐集したものだと故人が證言した如く、眞に學藝の上の注意をひくべき國文學上の價値ある一文獻であつて、私たちはそれを世に弘めたベルナルド師をはじめ上田君及同未亡人に感謝せずにはをられない。

「聖教日課」のうち、「聖體を領けて後の誦」と題する十數行の誦があるが、聖母に向ふ誦に、別に『亞物海星』といふ私の愛誦する一篇を見る。首めの四行を抄するとかうである。

亞物海の星
天主の聖き御母
且常世童身
果報いみじき天の門

とたゝみかけて、『聖瑪利亞頌徳の禱文』にもあるやうに聖母を讃美してゆく。羅甸の原文によると、

Ave maris stella,
Dei Mater alma,
Atque samper virgo,
Felix coeli porta.

殊に私のすきな文句は起句の「海の星」maris stella の二語である。私は嘗てそれを自著の書名に選ばうと思つたくらゐであつた。ところが室生あたりの大和の山中に住む新知の友人木水君は、そのことを知つて私に一書を送り、海の星の一句に異常な感興を注がれた。木水君は、その海の星といふのは、この頃美しい仲のよい姿を見せてゐる雙子座ではないでせうかとよく見える二月はじめに認められたのであつた。私は書送られた。書信は雙子星座が夜な〳〵よく見えるそのときあの誦文の海の星が雙子座の兩星をさしたものかどうかは確かでないにしても、その推考には道理がこもり、その擬定には妙味があると感じたのであつた。わかき友は或る參考書の一節を抄出して、使徒パウロが二月の中旬、羅馬に航行のをりに乘つたアレキサンドリヤ船には、その舳先にディオスクリ即ちジュピテルの雙子のしるしが刻まれてゐたといふ使徒行傳二八章に記した所を指摘し、それは丁度あの時代紀元六十年頃には、この星座は、海の荒れ易い一二月時分に終夜船の進路を導くかのやうに輝いて、さて日出と共に西に沒すると云ふ工合に特に航海者の保護神とあがめられてゐたからであらうと書いてよこされた。

スバルを含む牡牛星座と、參すなはちミツボシとして知られるオリオン星座とに隣して、われらの雙子座の主星カストルとポルックスとが輝く。大神ジュピテルがレーダに産ませた雙生兒である。神話によれば、カストルが故あつて殺されたのでポルックスもそのあとを追うて死にたいと願ひ、そこで神は二人を天界にのぼし

て星としたのだといふ。語義からいふとジュピテル卽ちジウスの雙生といふので希臘語でそれをディオスクウロイと稱へる。ジウス大神の子息どもといふ義である。羅甸語ではそれをゲミニと呼び、英語のいはゆるトキンスに當るのである。希臘羅馬共に古くからカストル、ポルックスの話は人口に膾炙してゐ、殊に羅馬には神社も建てられて武士や騎士の守護神であつたといふが、星としては古代に知られてはゐなかつたやうに思ふ。騎者としてその形相を現はされた淵源は遠いにちがひないけれど、星座として知られたのは、トレミイの天文學以來ではなからうかなどと素人考へには推察されるのである。ホオマアの兩詩篇にもこの星はみえない。そのオデッセイ物語には有りさうだが無い。航海に關する星としてはスバルが支配してゐたばかりだ。イリアッド物語に敍せられたアルキスの楯にも日月と並べて、星には、スバルやオリオンなどはあるが雙子はない。羅馬ではヴァアヂルのエイネアッド物語にも見えないけれど、ホレエスの詩には既に出てゐるといふ。雙子星はどこの國の古文學にも俗傳にもスバルほどには夙く知られ弘く認められなかつたと見える。

印度の神話でも同じやうな雙子の物語があるのは面白い。偶然の暗合ではなからう。月神とニンフとの間に出來た雙生兒にアシュヴィニといふのがある。卽ち希臘のディオスクウロイであり、羅馬のゲミニである。この二男兒は印度ではアシュヴィニといふ名の示すが如く馬匹として現はされた。三角形をした三輪車を曳く驢馬の形にあらはされ、貨幣の面には雙馬雙星を以て刻みつけられたこともある。神人の疾を癒やす醫者と示現したのは、暴風をなごめる靈驗と異曲同工であらう。但し印度にてもやはりアシュヴィニは航海者の守護神にもなつてゐたのである。日月が海面よりさし上る前景の大空の光輝は、印度でも希臘でも三輪車であれ駟馬であれ、そのかゞやかしい現象をば天がける馬の姿に比べたくなつたのは自然であらう。さればアシュヴィニも眉目秀麗の仲好しの兄弟と現じ、曙光の雙神と見はされた。

私は印度のアシュヴィニもゲミニと同じ星宿であつたか否かを未だ明かにしないけれど、神話の由來は蓋し同一であらうと思ふ。ともかくも、歐洲にあつては雙子星は耶蘇紀元時代よりこのかた航海安全の守神としていつかれたことは事實であるが、天文と神話とをひきはなして考へて見ると、上述のやうな古神話が印歐兩土の間に一致するのは面白いことである。

支那に於ては雙子星は二十八宿のうち井宿に屬するが、後世の天文學では井宿に附屬する北河の三星中の主星がそれに當る樣である。古典に於ては雙子星は認められてゐなかつたらしいが、それには天文學上の理窟もあらうけれども、私たちはこの光輝ある雙星を夜の人々が漢土に於て何故見逃したのであらうかと怪しまずにはゐられない。參につゞいて、この雙をどうして見とめなかつたのであらうかと不思議である。尤も西洋に於ても太古の詩文にはあらはれてゐない程であるから、支那をとがめるわけにはゆかない。まして日本の如き星界に注意しなかつた國の古人にあつては、三ツぼしの外にこの雙子ぼしを名ざさなかつたのも無理はない。

私はつい長談義をしてしまつたが、聖母をなぞらへた海の星といふのは、雙子星ではないかと考へつかれた木水君の說に私が感興を惹いたのは、實は他の點であつた。それは、詩聖ダンテの生れたのは、古傳によると太陽が雙子座に入つた時分すなはち五六月のころであつた

と云ふことを連想したからである。神曲天堂界第二十二曲にそのことが見えてをる。いま山川内三郎氏の譯本によつて示すと、

わがかの金牛に續く天宮を見てその內に入りしごとく早くは汝豈指を火に入れて引かんや

ああ榮光の星よ、大なる力滿つる光よ、我は汝等よりわがすべての才（そはいかなるものなりとも）の出づるを認む

我はじめてトスカナの空氣を吸ひし時、一切の滅ぶる生命の父なる者、汝等と共に出で汝等とともに隱れにき

後ゆたかなる恩惠をうけ、汝等をめぐらす貴き天に入りし時、我は圖らずも汝等の處に着けり

汝等にこそわが魂は、之を己が許に引くその難所をば超ゆるに適はしき力をえんとて、今うやうやしく嘆願くなれ

金牛につゞく天宮とは、牡牛座に隣する雙子座をいつたものであるが、註釋者の言によれば、雙子宮の星はその下界に及ぼす影響によつて詩才や學才を啓發するとの古說があるので、ダンテはこれらの星々の影響の下に生れあはしたがために、その才能をかの星の光に歸すると歌つたのであるといふ。詩聖の生れた西紀一二六五年には五月十八日から六月十七日までの間太陽雙子宮にあつたのだから、この日限間にダンテは生れたのだと解せられてをる。而もその日を五月の末となす說もあるといふ。されば私がいま六百六十年の後の五六月の交に方つてこの一小篇を草するのも因緣がないではなからう。さて詩聖は同じ二十二歌の末を、

われ不朽の雙兒とともにめぐれる間に、人をしていと猛くならしむる小さき麥場、山より河口にいたるまで悉く我に現はれき

かくて後我は目をかの美しき目にむかはしむ

と結んだ。美しき目とは、天界の導者たるベアトリイチェをさすのである。第二十七曲にも、「我をレーダの美しき巢より引離して」と見えてをる。雙兒はジュピテルがレーダに生ませたものであるから、雙子宮を母親レーダの巢と稱したわけである。この外神曲にはあちこち雙子座のことは出てゐるが、私は一々引くの煩を省く。

伯林の美術館に藏せられるボツチチエリの神曲畫帖を見ると、畫家は詩人が天堂界第二十二歌の首めに於て、

おどろきのあまり、我は身をわが導者に向はしむ、そのさま事ある毎におのが第一の賴みどころに馳歸る稚兒のごとくなりき

この時淑女、あたかも蒼ざめて息はずむ子を、その心をば常に勵ます聲をもて、たゞちに宥むる母のごとく

と歌ひ起した氣持をよく捉へて、ダンテがベアトリイチェに導かれて、恆星かゞやく第八天に階して昇る樣子を巧に畫いてをる。詩人が危げに天女にすがるところ、一段上には二人して俯仰してゐるところ、それらの情致が纖細なるペン畫にて描出された。この第二十二圖や第二十三圖には、二人の下方に雙子星が點出されてをる。私たちはベアトリイチェの形相が、この畫家が新春やヴェナスの出生などの名作で寫したモデルの女人によく似てゐるのを見とめる。

日輪井宿に在るところ生れたダンテを追慕し、その千古の傑作神曲を愛誦し、またボツチチエリの名畫に見入れば、聖母を讚して海の星ととなへ、天の門とたゝへた彼の讚文にいふ所の海の星はどうしても雙子星であつてほしく、

なる。況んや使徒パウロが乘つた雙子丸の漂海談をも想ひ起すと、是非さうしてしまひたくなる。船の舳先に雙兒の神々を刻んだといふ古傳があるが、雙兒に限らず船首に神人の容姿を彫刻する習慣は近代までつゞき、日本へ來航した南蠻船や紅毛船にも、畫で見るが如く、さういふ彫物がついてゐた。現に平戸の松浦家にも一つ傳はつてゐる。足利の近在の古寺に存するカテキ樣の像なるものも、既に人も言ひ私も考へた如く、それを問答師から出たもので吉利支丹の遺物だとする一說も有力ではあるが、或は黑船の船首の彫刻とは見られないかとも思つてゐる。日本でも船を貨狄と稱してもをり、又刻してある文字にエラスムスと見えてゐるその文字の解釋からしてもかの木像は船に因があるやうにも思はれるのである。――こゝは考證の場所ではないから、大概にしておくが、暴風の夜に帆柱の尖頭などにぴか〳〵閃く怪しの光を俗に聖エルモの火ととなへる、そのエルモと云ふのも元來船を守護する聖エラスムスをさすのださうだから、カテキ樣のエラスムスも、有名な敎學者たるそれより來たと說くよりも、考へなほして見て、それは船に因むものではないかとする方が自然かもしれない。最古く日本に來航した和蘭船の一つにエラスムス丸といふのがあつたと云ふからそれと併せて考へて見ると新に啓發する所があらうと思ふ。海の星から話が船に及んでしまつたが、私はテニスンが悲曲モオド MAUD の末章第二十八章の第一節に雙子星をよみこんだ句を示してこの稿を終らう。

匂へる水仙の花しぼみ、さてまた馭者星と

輝く雙子星とが西に沈める參星のおくつきの上高う

榮冠の如く懸れる……

テニスンはしば〳〵オリオンを引きあひにうたふ。この同じ詩曲の第三章中にもあれば、ロックスリイ・ホオルにも銀の螢かごに比べたスバル星と共に徐に西にすべり去る大オリオンを並び擧げてをる。然し天の河を隔ててオリオンなどと遙に相對する雙子星を憧憬した詩人はダンテをおいて誰があつたらう。

（大正十四年七月、「女性」）

南蠻酒に醉ひて（五）

チンタ酒とはポルトガル語で、チント、ヴィニヨ卽ち有色酒、赤葡萄酒の意味のチントを訛つたもので、德川時代長崎に遊んだ人たちはよくこれを飮んだもんだ。私は南蠻酒はこのチンタ酒よりは、アラキの方に近いのではあるまいかと思ふ。然し慶長時代には、チンタをもアラキをも共に南蠻酒の名で總稱し得たかも知れない。

アラキは李時珍の本草綱目にも既に阿剌吉と出て居り、アラビヤ語より東西兩洋の諸國に傳播したものであるが、亦南蠻酒と稱し得ることは疑ない。譯せば火酒とも燒酎とも譯される。アラキはやはり米から釀造する酒である點に於ては、後世の南蠻酒と同じである。

日本一と日本晴

いつの時代にも一種の流行語といふものがあつて其時代の反映を成して居る。吾等が幼き耳に慈母から聞いたお伽話の中にある日本一の黍團子や日本一の花咲爺などといふ場合に使はれた日本一の語も其起源を探つて見るとやはり一時代の流行語として廣く用ゐられた語で、確かに其時代の國民精神を表現してをるのである。尤も日本一などといふ褒め詞はいかなる時代にでも誰でも自らこしらへて使ひ得られる詞には相違ないけれども、それが一時代に非常に流行して居るのを見て、吾々は其當時の國民の思潮がいかばかり高まり、上下の元氣がいかばかり壯んであつたらうと想像されるのである。日本一といふ形容語は足利時代より徳川時代の初期へかけてのはやりことばと自分は認めるが、其以前にも用ゐられなかつたのではない。優にやさしき平安朝の宮廷裡の婦人でさへきかぬ氣のものであると「すべて人には一に思はれずばさらに何にかせん、二三にては死ぬともあらじ、一にてをあらん」などといふ位の見識があつたのだから、日本一といふほどの考へがないわけはあるまい。濱松中納言物語、大鏡などは、もはや日本一、日本第一といふ賞美語がいづれも二ケ處ほど見える。又下つて鎌倉時代になると、平治物語や平家物語の如き軍記物には日本一の不覺人とか、日本一の剛の者とかいふ文句があり、當時代の初期の文書にも日本第一の天狗などと出てくるので、段々廣く用ゐられて來たやうである。然し、足利時代になると、この俗語は益々頻繁に用ゐられ、又其意味も頗る擴張されてをるのである。曾我物語(四)には「日本一のふかく人」といふ句で出てをるが義經記になると、一、二、五、六、等の巻々に都合數ケ處に見えてをり、例へば、靜御前を讃美して、「舞においては日本一にて候」といひ、「日本一といふ宣旨を給りけると承候し」といひ、又常盤御前の容色の美しきは「日本一の美人也」などと稱へるやうに最上級の讃美語としてあちこちに使はれてをる。謠曲などに、「日本一の御機嫌にて候ふ」(小袖曾我)、「これこそ日本一の事にて候ふ賜はり候へ」(鉢木)、「日本一の烏帽子が似合ひ申して候ふ」(烏帽子折)などの使ひざまになるといかにこの語が流行したかがわかり、従つて意味が大分擴がつて來たことが知れる。丁度同じ頃であらう、御伽話に黍團子をほめて日本一といひ、花咲爺をほめても日本一といひ、むやみにこの語を使つてをる。謠曲で用ゐてある以上は、狂言の上にあるのは當然の話で、「日本一の下手」といひ、「日本一の大ふ」などと見える。要するに足利時代は國民の元氣の大いに勃興した時代である。韓國や支那の沿岸を荒しまはつて、所謂倭寇を試みた時代である。高麗及朝鮮との交際や明との交通も盛んであつた時代である。末期になると、西洋や南洋との交通も開けたし、對外精神の發展は遂に征韓の擧を起さしめるやうになつたのである。かくの如く外に向つて大いに膨脹し侵略し飛躍せんとするの元氣を持つて居た當時の我國民は内に在つては常に霸者たらんとする氣概を有し、清女のいはゆる「一に思はれずば、更に何にかせん」の意氣を持ち、日本一、天下一、「三國一たらんする心掛があつたものと思はれる。徳川時代の初期凡數十年といふものは時代思潮の上からいへば、やはり戰國時代

思潮の繼續である。日本近世史の著者は近世を元和二年以後としたと思つてゐるが、或意味からいふと、更に繰下げて天草亂後、德川氏が鎖國政策を執るに至つた寛永十六年あたりまでを前代と一つらに見てしまつて差支あるまいと思ふ。德川時代は鎖國時代、封建割據時代である、國民精神の萎靡時代である。立派な覇者が唯一人江戸に構へて御座つた時代である。この征夷大將軍が即ち天下一であり、日本一であつたのである。當代の民衆は將軍の威光に謳歌しつゝ「日光を見ないうちに結構といふな」といつた。日本一の代りに寧ろ日光一といふ語でも出來さうなものであつたと思ふ。さて德川氏の初期に日本一の語が流行つたことは、葡萄牙人のかいた日本文典の中に、形容詞の最上級として此語を天下一といふ語と共に擧げて「彼奴は日本一、大けなげ者ぢや」「天下一の學者である」などの例を示してをるのでも知れよう。當時流行の俳諧でも、月花を賞めるには猶往々この語を用ゐ、「唐までも日本一の月夜かな」(重頼)、「名木の花ぞ日本一の谷」(常春)、甚しきに至つては、談林の句に、「色好みあつぱれそなたは日本一」(松意)などとやつてをる。かの『醒睡笑』にもやれ「日本一の鈍なる弟子」とか、「われは日本一の事をたくみ出いたは」とか、「紙は日本一の播磨杉原」とか見えるので、一般の事が推される。

さて足利時代には、獨り、日本一のみならず、すべて「何々一」といふことがはやつたもので、坂東一、西國一、中國一、西塔一、門前一、尙進んでは天下一、三國一等の語がある。天下第一の稱は既に漢籍にも見えてをるのであるが、我が足利時代中葉の抄本にも見え、以後の軍記及俗文學には非常に多く使はれてをる稱號である。この稱は大抵藝術界の優勝者、即ちチャンピョンといふやうな意味で、一種の尊稱である。即ち天下一號といつて、信長記にも「天下一號を取者何れの道にても大切なる事なり」とて一藝一道のチャンピョンに向つて與へた美稱である。即ち「天下一の太鼓打」、「太鼓の天下一」(甲陽軍鑑)、「天下一の藝者」(信長記)などとて、戰國以來天下に覇たらんとするもの輩出したによつて出て來た流行語である。所が隨分濫用されはじめたものと見えて、信長記に「天下一は唯一人有てこそ一號にて有べけれ二人有る事は猥なるに」とある。德川氏以後に至つても其遺風があつて、弓術の優勝者が天下一の名を博したことは、大日本史料慶長十一年及十二年の條に見える。承應三年甲午に女院御所より天下一美號不苦とあり云々(境鏡)などとあつて、壺燒鹽にまで用ゐられ、能役者、目暗者、まじなひも、この號賦與せられ(醒睡笑)、看板、暖簾、商品等にまでこの號を記した(信長記、見聞集、色音論、奈良名所記等)從つて俳諧にこの名の甚だ多く見え、月花を愛づるにも、やたらに天下一天下一といつたものである。かくの如く流行した結果、あまり濫用し過ぎたので、遂に天和二年に器物に天下一の字を記すことを禁ぜられた。一體、時代からいへば天下一の將軍の下に、むやみに天下一などと稱するのは不都合の至りなのであらう。天和二年といへば元祿の少し前で、はや大分德川時代の風潮がかつて來た。これで全くすたれたのではないが、戰國時代に流行しはじめた語が太平の時代に衰へるのも、言語の運命上然るべき話だ。

天下一に次いでは、三國一といふ語が、やはり同時代に流行つたものである。これも、初めは廣く用ゐられた賞美語であるが、月雪花を愛で、美人をほめたりする外、最も多くは嫁入りや婿取の場合の祝辭に用ゐられた。狂言に花子の姿の美なるを稱へて「天竺震旦我朝三國

「いかいよの」といひ、秀句好きなるを「唐土天竺我朝三國に隠れがおりない」と形容したり、「老僧のはたらき三國一」（醒睡笑）などといつたりする。後世は嫁入聟取か、さもなくば甘酒屋の看板に名殘を留めてあつて、現今も、天下一、日本一などの美稱と共に國産物などには記してあるのを折々見うけるが、まづこゝらが結末であらう。三國といへば昔は日本、支那、印度（朝鮮は一國とは已に見做されなかつた）であつたものが、今は露佛獨とか日英米とかいふ工合に變つたのだから、今のやうな始末になるも、あたりまへの話である。

日本一を初め、右の語はみな足利時代（戰國時代）から徳川時代の初期までをこめての流行語であつたのが、時勢の變遷と共に段々すたれてしまつた。まあ之からは世界一といふ語か、さもなくば、「日本で第一」といふ意味でなく、「日本が第一」といふ意味で、日本一といふ語をはやらせねばなるまいか。

因みに述べておきたいのは、日本晴といふ語がやはり足利時代の語らしいので、當時海上生活に慣れて、氣宇廣大であつた國民の思想界より生れたものであらう。この語は僧文之の南浦文集「慶長十四年」と、松江重頼の犬子集「寛永十年」とで見た外、其以前の書物には未だみかけぬが、どうも鎖國民の生んだものでなくして、海國民の作つたものらしく考へられるのである。稍後れては、女雪の編した雨吟一日千句（延寶七年）に、西鶴の「山科も日本晴となりにけり」といふ句が見えて居る。「待てば海路の日和あり」の諺と共に、海上生活から出來た語であらう。日露戰爭によりて吾々は東郷日和、大山時雨、小村日和などの語を明治當代の天象語彙の中に見出すの光榮を有するが、其等の語よりも日本晴の語の方が、どんなによいか知れない。

（明治三十九年四月）

南蠻酒に醉ひて（六）

寛永十五年に成り、正保二年に出版された松江重頼の毛吹草に由れば、山城の土産のうちに南蠻酒が數へられてある、とすれば京都でも寛永時代にはそれが出來たものと見える。重頼の同門になる松永貞徳の文集の中には、名酒を舉げて葡萄酒、焼酎、美淋酎等者、自異國來候」とあつて、南蠻とは見えてゐないが、これ等の酒がエキゾチックなることを明示してをるのは面白い。

享保十七年京都附近の人三宅也來が著した萬金産業袋の巻六、酒食門のうちにねり酒。焼酎。みりん酒などと共に南蠻酒の製法を説いて、

上白米一石、こはいひにむし、かうぢ二斗、生焼酎一石、右三色を一つにして仕こみ、日數五十日斗して、あぐる、あげやう常酒のごとし、但日數は夏冬にて少しづゝの相違有、かくのごとくいひてはいと安き事のやうなれども、かげんむつかしき仕こみなり、こはいひのさめ、かうぢのあらひ、水氣のおきやう、手かけてよく其術を知るべし、酒にあげて木香を好まねば、ふるき樽に入るべし

と云ひ、最後に異國酒には、アラキ、チンタ、アポヒイタ、ニッハ、ハアサ、マサキ等の名目を舉げてをる。本書によれば、南蠻酒は、異國的なものでなくなつてゐる譯で、アラキやチンタなどとも別な酒とされてゐたことがわかる。

沈鐘の傳說

沈鐘の傳說は我國の諸地方に隨分多い。墨田川の鐘が淵にも或寺の鐘が沈んでゐるとは、既に江戸名所圖會にも見え、今も其邊の人で信じてゐる者もある。芭蕉の「月いづこ鐘は沈める海の底」の句で名高い越前の鐘が崎や、幽齋の紀行で夙に知れ渡つた筑前の鐘岬は、常宮や志賀神社に今も存する寶物の名鐘との關係は附けずとも、說話として興味は豐かである。然し、三井寺や道成寺の鐘から出た樣な文學上の逸品は未だ此等の沈鐘傳說から生れぬ樣だ。南谿の西遊記などでも人の知る如く、鐘は龍神の愛するもの故に、船に積んで海上をかよふと、必ず沈み、又沈んだ鐘を引上げようとすれば、龍神の怒に觸れて大風波が起ると信ぜられて、筑前の鐘の話も其一例となつてゐるが、若し假に龍神を我國土の神とし、鐘を異域の信仰たる佛敎の象徵とし、又國土の海神が鐘の渡來を嫌ふといふ樣に解したならば、此等の傳說が幸にして早くハウプトマンの樣な作家の手に掛つた場合には一種のアレゴーリッシュの名作と成り得たらうと思ふ。

筑前の鐘岬は玄海灘に瀕して南韓と相對し、其南方には西方文明輸入の要津たる博多を控へ一方には又宗像祠に接してゐる。而して宗像神は天照大神が生みませる三女神である。又少し隔つては志賀の綿津見神社もあつて、後の住吉神で矢張三神を祭る。萬葉の古歌に「千早振る金のみさきを過ぎぬとも吾は忘れず志賀のすめ神」とあるを、後人の附會にもせよ鐘岬と解して置いて、此海中の沈鐘をば宗像志賀の諸神の所爲とすることも出來よう。時代を佛敎盛時の天平の頃に取るならば、萬葉集卷十六なる志賀白水郎が沖に出た儘歸らぬ夫を悲む歌なども一種の取材と成り得るであらう。「荒雄らがゆきにし日より志賀の海女の大浦田沼はさぶしからずや」と鑄物師ならぬ船人の妻マグダを點出するも妙であらう。但し沈んだ鐘は、朝鮮人の鑄たものであつて、船に載せて運ぶ間に船子と共に沈沒することとなるのである。現存する朝鮮の古鐘は近時考古學者の寫眞を蒐集したものを見ても分る樣に、立派な藝術品として稱美するに足ることは言ふまでもなからう。

天草の亂があつて數年の後、この鐘岬附近の一小島に來た伴天連どもの黑船を見つけて有司に報じたのも宗像の社人であつたといふ。其時捕へられた南蠻人は後に改名して江戸の切支丹屋敷に幽囚された岡本三右衞門といふ名高い伊太利亞人である。これは鐘の沈んだ話とは違ふが、外敎の渡來に抗する一種の神力の結果と見て、併せて構想に資したい感がする。又桂川中良の桂林漫錄を見ると、

> 孟子はいみじき書なれども、日本の神の御意に合はず、唐土より載來る舶有れば必覆へると云ふ事、古くより云傳へたる所なり、

とあるが、五雜俎にも、

> 倭奴亦重儒書、云々、凡中國經書、皆以重價購之、獨無孟子云、有携其書往者、舟輒覆溺、此亦一奇事也。

と見え、神意の畏るべきことを言傳へてある。孟子の危險思想を含む爲め、古へ淸原家では御前講義で或章句を除いたことのあるは、京都帝國大學所藏の淸家本慶長版孟子の書入にも見えるから、如斯き海上の遭難あるは當然か

も知れぬ。國神が嫁ふ鐘が、渡來する途中で船から落ちて沈むのと同じわけと認められる。

時代後れにブレケッケックスと谷蝦蟆の聲を擬ねた所で手柄にもならぬと云はゞそれ迄であるが、秀郷とやらんが龍宮より鐘を取つて來たやらに、此沈鐘の古傳說を文獻中より拾ひ來つたならば、觀じ様に出つては、內外思潮の衝突する時勢のアレゴリーとも成り得ることは疑あるまい。

（明治四十五年一月）

南蠻酒に醉ひて（七）

南蠻酒の傳統は、實にまつたく古い。ポルトガル人渡來以前少くとも三十年くらゐ遡り得るのである。牡丹花肖柏が晩年泉南に退隱して永正十三年七十四歲の折に書いた「三愛記」といふ隨筆の文章がある。三愛とは花と香と酒との三つを愛することをいふのであつて、そのうち酒について肖柏は次の如く賛してゐる。

酒はもろこし南蠻のあぢはひを試み、九州のねりぬき、加州の菊花、天野の出群なるを求め・・・

之によると、唐土南蠻の酒の美さをほめたことがわかる。九州のねりぬきとは、博多の練酒をいふので、其のねり酒と云ふのは產業袋にその製造が見え、私が買ひに出かけた酒屋の看板にも見えて居る。してみると南蠻酒なるものは、ポルトガルやイスパニヤなどの黑船が南洋や支那近海に來初めない時分からの稱呼とも見え、それがその名その物共に今日に傳はつてゐるものと考へてよいのであらう。本草綱目に燒酎は元の時代からの飲用であると出てゐるが、葡萄酒が波斯から東漸したが如く、阿剌吉酒の如き燒酒も阿剌比亞から傳播したのかも知れない。さういふ徑路は他日の研究問題にゆづることにしよう。

私の「南蠻更紗」には鋤燒の話や喫煙の話は載せたが、菓子や酒のことは書かなかつたから、ついこんな閑談をしてしまつた。カルタやチャルメラのやうな遊戯方面のことをも入れてあり、外來の染織物や異國の草花類にも及びながら、酒や菓子のことを逸してゐたのは不思議だ。序ながら、拙著に對して幾多の友人や未知の讀者から、種々有益なる增補と訂正とを賜はり、又新資料の寄贈や誤記誤植の指摘を受けた芳情を感銘するために、本誌の餘白を借りて主要な增訂を試み、大方の好意に酬いようと思ふ。誤植の夥しいことは、叱責に對して辯解の辭に窮するが、再版の際甚しいものを出來るだけ訂正しておくつもりである。

喫煙に關しては、最近薔薇閣氏の「煙草禮讚」の如き趣味ある單本や、同じ社から出る雜誌「郊外」の煙草號の第一第二などもあつたが、私の取扱つた名稱問題には關する所が殆どなかつた。大正十二年七月八日「サンデー每日」に、福良竹亭氏が煙草の原產地は臺灣の南東に近き紅頭嶼であつて、天保年間に長崎奉行から幕府に呈した臺灣の古圖にはタバコ島と記してあり、龜山島をキセル島と書いてあるといはれたのは、直に首肯されるが、私には一の新資料であつた。

日本文學の海洋趣味

日本文學の海洋趣味に乏しいことは今更書きたつるまでもないが、實にこの四面環海の島國にも似合はぬ話である。これには種々の原因があることで、第一古くから航海の術が開けず海運の業が進まずして文學の興つた時代から始終海洋畏怖の念に囚はれ、それが先入主となつて鎖國時期に入つてしまつたから、遂に明治時代までは海洋文學の發達する機會がなかつた。文學の興る以前の神話傳說時代に於て却つて海に關する興趣溢るゝばかりの說話が存するのは古事記や日本紀に見えてゐる通りである。唯惜むらくは後に海洋詩人が生れてこれらの古傳說に基いて敍事詩や抒情詩を製作することも、物語を編むこともなかつたのである。純粹の詩の方では無論一般に長篇大作は現はれなかつたが、散文詩ともいふべき平家物語なり謠曲や淨瑠璃なりの或る部分にも、日本海洋詩の代表的作品と目せらるゝものは求められない。遡つて考へて觀ると、支那文學の中にも既に海洋趣味は缺乏してゐたので、先進國の詩文から自然界の風物を吟詠する種子を採り來つた往古の日本文學はこの點に於ては得る所がなかつたのである。文選の海賦をはじめ人口に膾炙する詩文が萬更ないわけではないが、えて花鳥風月を諷詠の料にしたがる島國の小詩人には、かの大陸文學からは、その特長たるべき大陸的要素を受入れることすら能くせず、況してそれから海洋氣分の影響を被るわけは全く無かつた。それこそ木に緣つて魚を求むる以上の望みである。それやこれやの原因からして近時までは我國文學にかゝる一大缺陷を生じてしまつたので、之を上は希臘文學より海洋趣味の連綿絶えざる歐洲文學に比較し、遼遠なる太古より海洋殖民の事業が發達して冒險海寇の氣風が旺盛であつた遠西諸國民の詩文に對照するは、初めより當を失してゐる沙汰である。縷說して東西對比の例證を舉げる必要もあるまい。

遣唐使船の十有餘回にわたる往來は、國史を讀むに、波瀾曲折に富むもの頗る多きにかゝはらず、之に關する歌は萬葉集中長短二十三首古今集中僅に一二首を數ふるに止まり、而も皆海路の平安を祈る送別の類か在唐中本國を慕ふ意味のものかに過ぎぬ。平安朝中期以後に於ける僧侶の渡唐に際しても、代々の敕撰集等に散見する歌はいづれも同樣な抒情詩で一も航海中の感興を歌うたものはない。「はや日の本へ」と憧憬した憶良、「天の原ふりさけ見」たる仲麿の亞流のみであつた。まだしも萬葉集には海洋畏怖の情が發表された歌の外に、渡唐船をはなれて、海洋傳說を詠じたものもあり、人麿などの短歌には平凡なる題材を捉へて而も誦すべき佳作が交るけれども、古今集以後になつては到底話になられ。遣唐使船には隨分海洋趣味のたゞよふ詩料が豐かであつて、例へば寶龜年度の四船歸航のをり、清河の愛孃喜娘が難破の插話にせよ、又その前の天平勝寶年度の歸東船が南漂の物語にせよ、彼我の載籍に據れば隨分立派な作品が出來上るべき筈であつた。詩人文豪の力次第では、オデッセーの如き物も綴られた筈である。少くともテレマック位なものは編まれる筈である。それが平安朝の女性的文士の手にかゝつては、漸く竹取物語の「龍の首に五色の光ある玉」を取りに渡海して難破に遭つた失策談か、或は宇津保物語の俊蔭巻に見ゆる

波斯漂流譚くらゐな作物となつて現はれた丈である。土佐日記を貫く海洋恐怖の觀念、源氏物語須磨の巻などの一くさり、いづれも當代の女々しい情緒のあらはれに外ならぬ。ひとり平安京に蹐跼する貴族のみならず入唐求法の高僧にても、その巡禮紀行を讀んでも、海の興趣を敍した名文は見ることが出來ない。

元寇の役は、遣唐使船時代の産物として吉備公入唐繪詞があるが如く、幸にして有名な蒙古襲來繪卷となつて一かどの藝術品を殘したが、これも海戰を描いたものとして決して成功した作とは云はれぬ。而も元寇は文學上の遺篇としては、賴山陽時代まで果して何を傳へたとするか。中世以來の俗諺に「むくりこくり」の言葉があるだけで、何を民間の俗謠童話に寄與したか。天龍寺船の往復も畢竟中古の遣唐使船が當時人に影響した以上に、何等五山文學に異彩を添へる程ではなかつた。三百年にわたる倭寇の八幡船すら遂に日本の國民文學に何等發揮する所がなくして終つたのは、國文學史上の一大損害とせざるを得ぬ。其時代の製作で且つ流行を極めた謠曲にも、僅に「唐船」一曲が倭寇の一面を反映するものといへばいへる位なので、それも父子の恩愛を仕組んだ衣業の作たるに過ぎない。古傳說に據つた「玉の井」「浦島」、舊史に基いた「海士」、平家沒落史に料を資つた「船辨慶」や「八島」や「碇潜」にも、貧弱なる日本の海洋文學史には、さすがに見逃せない節がないではないが、これが倭寇時代のものかと思ふと、大いに物足らぬ感がある。「白樂天」なり「絃上」なり或は「春日龍神」なりを論ずるときは、「海界」海のものではないが」などに現はれてゐる所と共に、唐土に對する日本の國民的自覺がほの見えて、いくらか時代の面影をとゞめてゐるかと首肯かれるけれども、海の散文詩としては感心することが出來ない。足利時代に成立つたと考へられる御伽話のうちにも海洋的要素が多少認められることは疑のない所であるが、それもあまりに小規模に於てである。桃太郎の童話でも、御曹子島渡りの昔語でも、時代の氣分を髣髴させるに違ひないが、國民的の代表的作品としては、言ふに足らぬ。況んや七福神の乘合船の如きで、平和的情調のものは、或は戰國時代の華奢な人の氣就を、何處かに象徴してゐるとも思はれるが、純なる海洋上の詩とは見られない。

八幡船の時代の次に、南蠻船の時代と御朱印船の時代とが相接する。彼より寄來る南蠻の黑船よりは、かの希臘古詩オデッセー物語が傳はつて百合若物語が出來たと說く學者もあるが、考證薄弱にして信憑の價値はない。文祿慶長のころ黑船物語と名にのみ殘る作物は、如何やうなものであつたにしろ、我が所謂海洋文學の上からは多くを期待されぬ。我より南の國々島々へ渡航した朱印船は、何等の海洋詩人を載せて去來しなかつた。然し、これらの南蠻朱印兩船來往の時代に材を資れば、現代の日本詩人は幾多の海洋詩を成すことが出來ようと、予輩は平生より鴫望しつゝある。たゞ過去を顧みると、南蠻船貿易の時代が今日尚多く傳はつてゐるのに反して、文學的述作の絕無であるのは、こよなき遺憾だと思ふ。松の葉の小唄の「昔より今に渡りくる黑船緣がつくれば鐘の師となる」サンタマリヤに無限の哀調が響くばかりである。長崎ぶしの「ころんでもころこしても袖に涙のとゞまらぬ」は袖の涙のとるばかり、あとには唐土へ通ふ船、なかの長崎の見つるかいな守すれば、思ひ出すことは街と夜中の曉とうたふ、いづれにせよ、海港長崎は徘しても洋中の異國に富んでをらぬ。歷史的には輝しけに見ゆるジャガタラ文

もこの時代の末期を物語る絶妙な文學ではあるものの、海に隔てられた遣瀨なさを嘆つ聲であつて、海上の難そのものを綴つたものではなかつた。

斯くの如き物足らなさの中にも、足利時代の中程より德川時代の初期へかけて行はれた小唄には海の情趣の含まれるものが割合に多く拾ひ出されるのである。又德川時代の全期を通じて俗謠中には、まゝ誦すべき佳什を見受ける。然しかれもこれも主に海洋趣味の消極的方面、靜的方面、平和的方面を歌つたもので、その積極的方面、動的方面、狂暴的方面は自然に看過されてゐる。船唄と題する詩篇が大抵造船又は進水の式に方つて謠ふもので、船上でうたふものではない樣に、多く祝福的の作にあらずんば、海上の人を待ちわびる情を抒べ、遠洋に出づる人と別るゝ悲みを訴へ、波濤と爭ふ人を思遣る切なさを敍したものであつて、舟子漁夫の海上生活を描いた樣な名篇は甚乏しい。德川時代の俚歌のみならず、溯つて神樂歌催馬樂風俗歌より梁塵秘抄の古謠に至るまで皆同樣である。降つて足利時代の俗謠集で名高い閑吟集に見ゆる左の諸篇の如きも、いづれも同じ範圍を出でない。

人買舟は沖をこぐ、とても賣らるゝ身を
たゞ靜に漕げよ船頭殿

沖のとなりで舟漕げば阿波の若衆にまねかれてあちきなや櫓が〱〱〱おされぬ

又港人舟が入るやらう、から櫓の音がころりからりと

一夜なれたる名殘惜さに出でて見たれば奧中に舟のはやさに霧の深さよ

月はやまだの上にあり船は明石の沖をこぐ冴えよ月、霧には夜舟のまよふに

中古雜唱集の「思ひの津に、舟のよれかし、星のまぎれにおしとまゐらう、やれことうとう」なども、これらと同じ趣味の小唄である。巷謠編にある土佐の唄の、

四百舟かよ君まつは、五百舟かよ君まつは、かぢをしづめてなのりあふ、エイヤソリヤ

の如きは、さすがに大きな所があつて港の景趣のあらはれてゐる歌では上乘の部である。隆達の小唄にある、

豐後や薩摩の殿たちに〱、一夜二夜となれそめて、あすは舟づる、なんとせうその恨めしや

は松の葉の飛驒組にも出て、其角の初霜の句にも採られた有名な小唄で「あすはおよずもの、船がおよずもの」と對する「船の中には何とお寢るぞ」とあるのを想起さしめ、戰國時代の堺港あたりを偲ばしめる。かやうに港々の出舟入舟に離苦を嘆き逢瀨を樂しむ情を歌うたものは最も多數を占む。入舟の方では前に擧げた土佐唄と似た淡路の唄に「舟がつく〱、百二十七艘さまお御座るかあの中に」とあるのや、肥前の唄に「平戸小せどから舟が三艘みゆる丸にやの字の帆がみゆる」とあるのなどは、山家鳥蟲歌の中の歌で予輩の愛誦するものである。「來るか來るかと濱へ出て見れば濱の松風音ばかり」の失望、「船は出て行く帆かけて走る茶屋の女子が出てまねく」の哀別、この類の小唄は隨分多く又分布も廣い。出舟の唄で「出た〱もろこし船がちよいと、浪にゆられて帆がゆら〱と」の如きは、ゆつたりした春の港の趣を現じた佳品である。

荒海に隔てられた戀情は東西の詩人の歌うた好題目であつた。近くは松前追分節、古くは佐渡と越後の隔離を嘆じた小唄などが名高い。海上生活に思を寄せたものには、「一波にゆられて鯛をつる」といふ瀨戸内海邊のや、一雨にしよ

結び、打振ひつゝ、暫くする程に、サンツカリの郷の、國土の岸も次第々々に隱れ、奥山の高嶺を塵塚の堆と遙かにあとへ殘し殘しつゝ、あなかしこ、過ぎ行き、行く程に、あなかしこ、トンツカリの郷、あなかしこ、奥つ嶺々を遠く〳〵後に殘しぬ、さるほどに突如として逆風吹き來りたり。我乘る舟は、あなかしこ、さかしまに吹き戻されぬ。あなかしこ。

といふあたりより難風に出あふ光景を敍するくだりは、譯者の筆も躍動して、かのアイヌ人からどうして日本の詩人も恥かしいやうな詩句が迸り出でたかと感嘆するばかりである。

琉球の萬葉集ともいはるゝおもろ草紙と名づくる抒情詩の集より、伊波氏が「古琉球」の中に抄出して解説を加へたものを見ると、やはり南島の古代にも本邦人に見がたき幽婉な詩想が窺はれる。八重山の俚謠の如きは海洋の興趣に富む最も優れた名篇で、日本の詩集には見當らぬものである。予輩は琉球の古謠中に倘誦すべき海洋詩の存することを期待してをるが、さるにてもおもろ草紙の早く出版されて日本の文學界に清新な南島詩を傳播するの日あらんことを希望して止まぬ。

琉球に浦島傳説のあることは、既に伊波氏等の紹介によつて知られてゐる。日本の神典にある海宮傳説と連絡する浦島傳説が、口碑として沖繩に殘り、古記錄上にて宮古にも存することは、この説話の系統を調べる上に於てよい手掛りを得たものであるに違ひない。然るに更に南下して臺灣の生蕃にも同樣の傳説が語りつたへられるのを見ると、この海洋神話の研究が益々興味深く益々有望になつて來ることが判る。

予輩はこゝで今更本邦の浦島傳説の出典や沿革を並べたてようとは思はない。又これを箇々の要素に分析したり、支那の古傳に連繫させたりすることを試みない。況してや妄りに説話弘布の範圍を擴げて方途がないやうにしてしまひたくない。唯臺灣東部のアミス蕃の諸部落に、この一種の浦島傳説の存するのを見て、口碑の地理的分布の上から、非常に興味を感ずるのである。伊波氏が「古琉球」に擧げた宮古島の浦島傳説は全く内地の舊傳と同じであるが、臺灣蕃族の間に傳はつてゐるのは、それと多少趣が異なる。それは蕃族調査報告書によるに、阿眉族の南勢蕃（馬蘭社）、奇密社、太巴塱社に於て、女護の島の話となつて現はれてゐる。諸部落の話は、多少差別はあるが、大體は同一である。

かれこれ綜合して見ると、かつてある一人の男が鯨に乘つて海に航し女護の島に着き、島の宮殿に請ぜられて住つてゐたが故郷忘じがたく、再び鯨の背にのせられて歸つて來た所が、いつの間にか長い歳月が經つて居て誰も見知る者がなかつた、といふ筋で、その前後の始末や道行に大分本土の話と違つた點があるが、根本的に共通な所があるので、何人もこれを同一系統の話だとしない者はあるまいと思ふ。

予輩は日本の海洋趣味を回顧通覽して、上古より近世に及び、樺太より臺灣へ下つた。大觀すればいかにも海洋文學の貧弱であるといふ毀りは免れないけれども、上述の如くそれには内的及び外的の原因があることで、獨り我等の島國詩人を罪するには忍びぬ。且又内的原因としては國民の想像力が淡く思索力が淺いので、到底海の神秘幽玄を歌ふに堪へなかつたことを算へなければならない。さりながら、明治大正年間の半世紀に於ては、右の諸條件は大いに革まつたのであるから、既に新海洋文學の端緒は現はれてをるが、予輩は將來この種の大詩人大文豪の出づることを期待せねばならぬ。

（大正五年八月七日、「新小説」）

海賊の話

賊になるなら海賊になつて見たいと私はバイロンの「海賊行」を讀んだときにさう思つた。ゲーテがメフィストをして言はしめた語にかういふのがある。

自由な海は人の心を解放する。
思案なんぞ誰がしてゐるものか。
なんでも手ばしこく攫むに限る。
肴も捕れば舟も捕る。
暴力のある所に正義は歸する。
何を持つてゐるかが問題だ。
どうして取つたかは問題にならぬ。
（鷗外譯ファウスト第二部第五幕）

痛快な文句だ。この文句を讀むといつも巣林子の毛剃九右衞門が思ひ出される。貧弱な日本の海洋文學では博多小女郎浪枕の首めの一章はまづ[illegible]とすべきであらうが、メ[illegible]イ、[illegible]外史に[illegible]んで、海軍と貿易と海賊の三事とは、分けることの出來ない三位一體だといふのおれなら「[illegible]」は[illegible]の白人だ」と豪語した樣な意氣は鎖國時代の[illegible]文學には求められない。

海賊と貿易と海軍の連關は、世界の海賊史や商業史の上に認められる如く、日本の海の歷史上でも顯著になつてゐる。

近古乃至近世にあつて海賊といふ名がまた海軍の意味に使はれてゐたことは周知の事實である。海賊のわざは他方において密貿易にかはつた。足利時代以降支那の沿岸や日支の近海に暴威を逞うした倭寇は支那人からバハンの名を以て呼ばれたが、普通の說に由ると、この半商半賊の倭寇船は、八幡大菩薩の旗を掲げて支那の沿海に出沒したものだから八幡船とよばれ、その支那音のバハンが日本人にバハンと訛られて海寇の意味に使はれたのだといふ。然るに德川時代の中ごろになると、バハンの名は拔荷即ち密貿易の意味に變つてしまつた。男らしい海上奪掠は、卑怯な海上密貿易に代つたのである。かういふ樣に日本でも海軍と海賊と商賣とは三位一體になつてゐる。バハンの語源や語義變化に關する考證さては海賊の歷史は、他日別にするつもりであるから茲には略するが、東西の海上權力史を回顧すると海賊の研究は中々面白い。

今は昔、英國が西班牙の艦隊を撃破して西海に霸を稱し東洋の貿易場裡に先進國たる葡萄牙や西班牙や阿蘭陀の商權を侵しに來たとき、これらの國々の商人どもは、後進國のことを海賊と罵つたものだ。―お山の大將おれひとり―といつまでも威張つてゐたい所へ、後から押して來るものがあると、突きおとさねばならぬ。後れて來て先取の商權を侵害しようとすると、いつもこの海賊といふ名を後進者におつかぶせて泥坊呼ばはりをするのがお手である。獨逸もその手をくはされた。日本もその傳でやられかけてゐる。皆この「後から來たもの突きおとす」のである。英國も二三百年前には同樣な境遇にゐたのだ。慶長十八年に來た英國の特使提督セーリスの日記にも、英人は早くも日本に在留する南蠻の宣教師達から海賊と誹られてゐたと憤慨してゐるが、蘭人のごときは葡萄牙人からはバハンと罵られながら他方では英人を海賊と輕蔑した。お互ひさまであつた。新井白石は采覽異言において、英國のことを稱して「國海中にあり、俗善く舟を操つる、人又勇敢にして最も水戰を戰ふ、西南諸國皆其の人を畏れて海賊と

爲す」と記してゐる。日本の俗語で番賊のことをイギリスと呼んだと著者は附記したが、國學者の谷川士清の如きは、倭訓栞といふ國語辭典でイギリスといふ語を標出して、白石の説によつてそれを番賊のことだと釋したやうな始末だ。德川幕府で編纂した日本近世外交史ともいふべき通航一覽には、英國のことを「或はいふ、常に海中に漂泊して海賊を業とす」とも註した程だ。こんな風に海賊の所業と海軍や海運の發達とは關連してゐる。メフィストの壯語も尤もだ

海賊の猖獗を極めた時代には之に關する壯快な史話も少くないが、そのわりに海賊を題材にした文藝は極稀である。中世の書簡文體の用例を集めたものの一つに異制庭訓往來といふのがある。その中に、こんな文句の一例がある。亂世のことで賊に代つて吐いた氣焔だ。「賊に大小あり、小罪は已に大罪より輕し、小賊は何ぞ大賊に等しからん、竊盜強盜は山賊海賊に比すべからず、山賊海賊は他領押領の大賊に比すべからず、又爭位奪國の大盜よりも輕し、然らば末代は皆賊の世なり、唯我一人のみに非ず」と賊は自己を辯護してゐる。けちな賊の言草だ。山海の群盜として、もう少し調子の高いところを聞かせてくれたらよかつたのにと殘念である。

土佐日記や源氏物語（玉かつらの卷）を讀んだ人は、中古四國中國筋の海賊を恐れたことを知つてゐるが、文學にあらはれた所があの位では誠に心細い。今昔物語や宇治拾遺物語に、海賊の話があるが、いづれも氣の弱い奴らや、直に發心してしまふ樣な連中で、壯烈な所業は見えぬ。雄偉な精神は少しもない。古今著聞集に出てゐる熊野邊の海賊のでも同樣だ。賊の氣の弱いところを示してゐる丈である。これらはいづれも海賊鎭撫といふやうな思想から出た逸話であつて、敢て海賊の爲に氣勢を揚げたがはの文章ではないのだから仕方がない。この種の物語の中、最も趣味のあるのは、著聞集や十訓抄に記されてゐる音樂家和邇部用光、父茂光の美談である。多分平安朝の末ごろのことであらう、用光は土佐あたりに出かけたことがあつた。往航の時であるか、或は歸りがけに安藝の海上であるか確にはわからぬが、海賊に出遭つて將に殺されようとした時、彼は携へて來た篳篥を取出して、今生の思出に祕曲の一ふしを吹きすました。海賊もおのれの船を押へて一曲を聽いて居たが、すつかり感じ入つて涙を流し、そのまゝ漕ぎ去つてしまつたといふ。ただこれ丈の話であつて、話はたゞ音樂の靈驗を說いたやうなもので物足らぬ點はあるけれども、貧弱な日本の海賊文藝では、この話は最も群を拔いてゐる。後にこの用光の篳篥を海賊丸とも海賊逃とも名づけて傳へたといふことである。

とにかくかういふ類の感激的な或は信心深い海賊の話は、この後にも出てくる。

瀬戸内海のうちでも伊豫安藝備後邊の海上は海賊の最も盛な場所であつて、支那人を慴れさせ南蠻人にも喧傳された伊豫大島の能島氏の如きは、倭寇史上にも海軍史上にも名高い。されば文學に現はれた所でも、安藝備後の灘を中心にして西は馬關海峽に及び、東は淡路と明石との瀬戸附近が多い。毛剃九右衛門の世界は下の關に取つてある。その下の關あたりに、近松と同時代に、海賊島といつて、石垣を四方に築上げ當時形ばかり殘つてゐた大屋敷の跡が存したといふ話が、西鶴の門人として著名な北條團水の晝夜用心記に見えてゐる。この書は寶永四年の刊行で、近松の作は、それから十年ほど後の享保三年の作である。無論あの淨瑠璃がこれから直接に材を得たとは云はれないが、中世の海賊橫行の跡は、元祿時代までは人口に

膾炙してゐたものに違ひないから、共同の根源から種子を得たものと考へられる。正文の末頃、安藝と備後の間に起つた海賊にまつはる可憐なローマンスも日本の海賊文學では棄てかねるであらう。但しお伽話であつて悲壯な趣は見えない。周防山口に逃げていつてた公卿の夫妻があつたが、大内義隆が沒落したのでせんかたなく歸洛する海路の上で、折から安藝の忠海にかゝつたとき、その東の海村能地の海賊に襲はれて夫君基賴卿は海に投げこまれ、北の方は海賊の家の嫁にされようとした。奥方は、海賊の醉ひつぶれてゐる隙を窺つて遁れいでて、夫の菩提を弔ふために或る尼寺に入つて尼となつてゐた。所が夫はもとより水練の達人であつたから、海に入つても死なずに首尾よく泳いで陸にあがり備後の鞆の港へたどりつき、土地の豪家に身を寄せてゐた。海賊は奪掠した財寶の中、夫の扇面を、[illegible]なる彼の尼寺に持參してそれを尼さんに寄附した。北の方の尼公がそれを見ると紛らふ方なき亡夫の筆蹟であつたから、やがてそれに歌を遺して書きつけた。話かはつて海賊の家人が何かの縁でかの尼寺に詣つたことがあつた。家人はその一幅を求めてかへり、主人や基賴卿に見せた。そこで奥方の行方もわかり、前によびむかへて一まづ目出度く同棲することとなつた。所が好事魔多し、いざ京都へ歸らうとする頃、基賴は遂に沒し、ただ人もついで最後を追うたとて、土地では比翼塚を作つたといふのが話の筋をなしてゐる。これは淺井了意が寛文六年に自序をかいた御伽婢子に出てゐる所である。

俳諧では貞德派のものに海賊の取材が往々見える外、日本の詩歌には遺憾ながら見出しにくい。こゝでも西詩の方が希臘以來豐富だ。ロビンソンの作者にも、海賊譚の作があり、スコットにも、あまり聞えぬが『海賊』と題する作品が存する。日本では海賊は日清戰爭時代までは、文學の主材に使はれずに過ぎた觀がある。

（大正十一年八月）

南蠻酒に醉ひて（八）

時計に關しては、遠州の高林兵衛氏の著書「時計發達史」が私の研究を補ふ所多きは言を要しない。かういふ出版物のあらはれたのを私は喜ばずにはゐられない。私の話が新聞や雜誌に出た以後、古い時計の寫眞を贈られたり見せられたりしたこともあつたが、私を目して時計の蒐集者とされたのには恐縮した。時計の古いのは一つも持たないし、その寫眞についても、私は未だ研究の發表に注してゐない。[illegible]を[illegible]未だ見ないが、鎌倉の中尾淸太郎氏からの通信によると、東京の遞信博物館にたづねたらわかるだらうとの事で、七八年前遞信省で催された時に關する展覽會あたりで見たことがあるとのことである。又[illegible]の[illegible]に[illegible]新城博士より一書を得て知ることが出來た。

カルタに關しては往年藝苑誌に發表後、[illegible]博士辻博士から古畫の寫眞を見せられたこともあつたが、私は未だ實物を見て[illegible]を考訂するまでに至らない。その後、東京の中川淸次郎氏からもカルタに關して二三の異見を書き送られたが、私はその厚意に對しても未だ報いる暇がなかつた。然し[illegible]の作品から出たと私が考へた[illegible]については、この春新年號に[illegible]して京都日出新聞に載て、「のんきな[illegible]」と題して[illegible]を記した。それについて中田[illegible]氏から一二の意見をも頂戴したが、これも其儘になつてゐる。

大西洋上より

米國滞留中は何となくそは〳〵して長文の信書を草することが出來ませんでした。乘船後まだ氣が落ちつかないで二三日經つうちに少し天氣が妙になつて來て讀書は出來ても執筆する氣は起りませんでした。船の書架からブラウニングやテニソンなどの詩集を借出して、他の人々が新刊の小說類を爭つて耽讀する中で、こんな古風な集を繙いてをる所から海洋に關する長短さま〴〵の作をあさつて愛吟してをりました。幸か不幸か日本人の乘客が一人も居あはせないので興に任せて誦讀する機會を多く得たのを喜んでをります。ブラウニングの『海上よりの鄕思』『異國よりの鄕思』などを譯しかけてみましたが遂げませんでした。船中で得た唯一の好伴侶は印度の醫者でありました。この紳士はボンベイを發してから日本を經、米國を横ぎり、これから私等と同道で渡英する途上に於いてお互ひに知合となつたわけでありました。ニューヨークを出た日の夕がた、私が西に沒する太陽の美に見とれてゐる最中に、あちらから聲をかけられて、互ひに旅程をうち明かしなどして、話がはずんで、果は印度の古詩宗教などにも及んだのでありました。落日の光が海面を眞紅から紫紅に染めかへてゆく所や、ちぎれちぎれの飛雲の色どりが刹那々々にうつろひゆく所などを指さして、互ひに感に入つてをりました。既にして十日ごろの月が右弦の方に檣頭高くかゝつてゐるのを見出して、このチャンドラが暫く私とこの印度人との間の話題となりました。古風な私は仲麿を想起せずにはゐられませんでした。私は少時默しました、印度人は月に關する戀愛詩を微吟してきかせてくれました。こんなことで航海初日の夕ぐれは過ぎました。次の日の日沒も月夜も遊子の感情をそゝるに十分でありました。テニソンの『航海』と題する詩中に、平凡ながらこんな光景を敍してあるのを見つけて譯しかけては止めてしまひました。さうかうする中に天氣工合が面白くなくなつて來て何等の感興も涌かずに今日に至つたのであります。

米國では三四の大學をはじめ、あちこちの圖書館を見學し博物館を巡覽し多少の裨益を得ましたが、固より申すに足るほどのものはありません。何しろ五月の下旬と六月の上半月との好季節に居あはせたものですから、野といひ公園といひ、林といひ街路といひ、到る所新綠で、半老の氣も若やぎ身も心もをどるやうに覺えて、活けるしるしありと幾度感じたことでありませう。風薫るとか青嵐とかいふ句をつかつて、一つ吟じてみようと試みましたが物になりません。ナイヤガラは、その時の天候やら氣分やらも手傳つたのでせうが、大した感興が起りませんでした。漢土の詩人でも引張つて來て高吟させて見たい氣が起りました。むしろニューヨークの下町に聳ゆる摩天閣の上から、どんよりした日和に眺めた光景の方が氣に入りました。ウィッスラーの畫もがなとも思ひました。尤も晴れた月の眺望も好いには違ひありません。エクキテーブルの高閣の三十階上の窓から眺望すると、あちこちの尖塔を越えて、この川港の水面が東西にみえて、二三の長橋が右方に、左方には大船小船の動靜が手にとるやう、閣下の街上を俯瞰すればほんに蟻の樣な人がうごめく。初め寫眞で見たり人に聞いたりして懷

いた感じに比べると自分の持つた反感は誤りであつて、私は實地に見て文明の美をこゝに味ふことを得たのをうれしく思ひました。この私が川端の波止場からすべり出てそろ／＼海面に進みだした時にも、私は尖塔高閣の美觀にうたれずには居られませんでした。かういふゆつたりした場合のみでなく、ニューヨークに着きたてに、自動車で下町から上町へ、肩摩轂撃の街路を、ガソリンの高き香にひたりつゝ衝き進んだときにも、都會といふものの氣分、文明といふものの情趣を獨りしみ／″＼味つて愉快がつてゐたのでありました。野暮な議論、凡俗な問題は姑く措いて、自分はニューヨークといふ所を存外愛する氣になれたのを幸とします。私だけの片手落な觀察では、ボストンよりも好ましく思ひました

ボストンはあの博物館、あの音樂堂、あの圖書館、あの大學を外にしては、市そのものは感服せずに去りました。實は面白みを見出し得る機會を得ずにしまつたのだと云ふ方が當つて居ませう。ワシントンの閑靜で樹蔭多き街路や、プリンストンの大學構内などを散歩したときは、ニューヨークの俗塵を脱して、あゝ清々したといふ氣持であつたことは固より爭はれません。大學地や圖書館のことはこゝには記しません。別に書いて見たいと思つてゐます。唯二三是非書いて置かなければ濟まない所があります。實は、その邊がこの信書の目的の存する點であるのです。

プリンストンは大學町であります。古風なところはありませんが、オックスフォードあたりに似てゐます。新しいオックスフォードと名づけてもよいかと、私の眼には映じました。これはシカゴ、コロムビヤ、ハーヴード、エール等の諸大學で感じた自分の氣分と比較して、こゝで往年のオックスフォードを連想したからであります。無論新古の差異はお話にはなりません。プリンストンについては、特に他日所感を書いて見ようと思ひますが、螢が草原を飛びはなれては飛び下る薄暮のころ、日米人入りまじりの懇和會に招かれて、或る寮の一室にいつたことがあります。その室の主人公たる米國の學生から、プリンストンの學生結社の話などを聞きましたが、それは別として、その室の壁にダンテがフヰレンツェの橋の袂でベアトリチェに邂逅する光景を描いた英國の名畫――よく見かける――の廉い寫眞畫が掲げてあるのを見て、京都を出てから忘れてゐたダンテの記念のことを想起したのでありました。翌日こゝの大學圖書館では、ついダンテ・コレクションのことを尋ねることを忘れてしまひました。ウォーヅウォースの特別展覽が別室にあつたのをすら一通り見すごしただけで、何一つ記憶にとめてないほど、要務の方にとらはれてしまつたのを遺憾とします。然しダンテの事を想出させてくれたプリンストンの寮の一夕を感謝しなければなりません。

ワシントンの議員圖書館に入つても、要部の視察と、スヰングル Swingle 氏が努力して蒐集した漢籍の通覽とで時間を失ひ、ダンテ・コレクションに目を觸れることもダンテの珍本を見せてもらふことも機會を捉へそこなひました。好い機會はあつたにも拘はらず、それ以上に見なければならぬ書物の方に氣をとられて、こでも何の手がかりをも得ませんでした。たゞ館の一員スレード Slade 氏より、日本に於けるダンテの蒐集飜譯研究及び記念事業のことを頗る詳細に問はれて、故上田柳村君の名や、大賀壽吉君の名や山川中山二氏の神曲飜譯にある由を擧げて答へるやうな始末でありました。今年ダンテを記念するやうな詩があつたら、それをも知らせてくれと何やかや向うから註文を

引受けてしまひました。

ワシントンから夜行でボストンにゆき、その日の午後ボストンの美術博物館で、コローが深き林にさまよふダンテをヴージルが導しるべする景を畫いてあるのを見つけ出して自分にも奇縁だと思ひました。この美術館にはミレーの蒐集はかなり多く、モネー、コローのも相當に集つてをりますが、コローの畫材としては、ダンテの迷ひ入つた深林はふさはしいものと申されるでせう。三獸のつきまとへる物悄ましげのダンテを促してるヴージルの顏は青白く若やいで見えます。その翌日です、ハーヴード大學の圖書館で初めて有名なダンテ・コレクションにぶつかつたのは。ハーヴードに入る時には、初めから、そのコレクションを目睹しようと、もくろんだのでありました。これは確かにコローの畫のお蔭であります。

ハーヴードにはダンテに關する著述もあり、近世語學者として將た聲音學者として知られるグランヂェント Grandgent 教授が居ることは知つてゐましたが、會ひませんでした。梵語學の碩學ランマン Lanman 翁は相かはらず精力絶倫であるが、本年は健康上轉地保養に出かけるさうだと云ふ話でした。圖書館の貴重書室には故ノートン Norton 教授及びダンテ學會などからの寄贈にかゝるダンテの珍籍が二三の書棚に充ちてゐましたが、普通書庫の方にはダンテ文庫が、伊太利文學の部の中に、長いスタックの二列にわたつて架藏せられてゐるのを、ダンテ書目の編者として名のあるレイン Lane 副司書より見せられた時は胸の躍るのを感じました。スタックの側面にあるスヰッチのボタンを押すとぱあつと電燈がついて、スタックの間にはひると、左右各六段ある架上にぎつしり神曲等の原本、譯本、辭書、批評、註疏、傳記、雜著、學會及雜誌、記念、書目等の順序で整然と並んでゐるを見たときには、一々の書名に眼が觸れるまでもなく、書物の背革の金文字が燦然と光を放ち氣のせゐで後光が射したやうな感じがしました。レイン氏が或は指さし或は抽出して親切に見せてくれます。日本のも一つありますと頻りに探してくれましたが、そこにはなく、後に別の書架から取出して來てくれました。見ると著者からノートンに贈つた本でありました。この春大賀氏から柏井園氏の著述でハーヴートの書目に載つてゐるのがある筈だが、原本は未だ見たことがないとのことでありました。京都大學の圖書館で大賀氏や黑田氏とも相談して日本のダンテ書目を編纂しておきたいと云つたとき、私は帝國圖書館の目錄に當りましたが、遂に柏井氏の書物の名を探し出さなかつたのでしたが、それを今ハーヴードの圖書館で見出すとは妙な縁であります。見ると明治三十九年三月の出版で、ノートンの書簡の譯文、ノートンの寫眞なども卷頭に出てゐて好記念たるべきものでした。ノートンのことは有名でありますから、今更こゝに申すまでもないのですが、日露戰爭の翌年に柏井園氏はノートンのダンテ論を譯出し、これに同じくボストンのヂーンスモーア Dinsmore の小著 Aids to the Study of Dante の一部の翻譯を附載し、なほそれにさま〴〵の附錄を添へて出版したのでありました。上田君の『詩聖ダンテ』よりは數年後のものですが、柏井氏の書には、上田君の著のことは擧げてありません。この書は『ダンテ研究』とあつて Essay on Dante とハーヴードの目錄に出てゐます。ちよつと奇遇なので紹介しておく次第であります。書物の價値には關係ないことですが、運命としては妙なものであります。ノートンが、この書に序したのは、その逝去前二年(一九〇六、明治三十九年)のことであつたのも亦此書の爲め仕合せの一つ

辭し去ることに致しました。ダンテを求めてゲーテ沙翁を得たり、また何ぞ恨みんやと朝河氏に連れられてこゝを出て大學構内構外を見物してエールからもどりました。

話はボストンの公共圖書館にどもりますが、そこの館長ベルデン Belden 氏は一二年前日本に來遊したこともあるさうで、殊に懇切にしてくれました。同館の外構へは、地味なルネッサンス式で程よき大きさです。正面の玄關からモザイクの床をふんで、淡黄色の大理石の階段をあがつてゆくと、シャヴンヌの壁畫の神韻に心の落着きを覺えました。中途のバルコニーから中庭を見下すと、さゝやかな芝生の眞中に、長方形の池があつて、單純な噴水が出てゐます。綠の草原には、鳩が五六羽おりてゐます。コートの一隅には合歡樹かアカシヤか、若い木が不規則に一二本生えてゐます。この清楚なオープンコートの周圍の廊下には、讀書室から下りて休息してゐる人が見えます。京都でもこんなライブラリーを作りたいなと思ひました。建築、壁畫共に沈靜な趣があつて、規模の宏壯、裝飾の華麗、設備の周到などは姑く措き、此處の圖書館は大いに氣に入りました。然し三階のサーヂェントの壁畫は感服出來ませんでした。サーヂェントは中々多才らしい樣で、現にボストンの博物館の壁畫をかいてゐる樣な多能さを以てゐる樣ですが、あちこちで見る小品には感服しましたが、圖書館のアレゴリカルな毒々しい壁畫には厭氣がさしました。アレゴリカルなのでは、むしろ同館の教員閲覽室の天井畫をとりたいと思ひます。何疋かの疾走する馬群で「時間」迅速を象りたる此畫をとりたいと思ひました。――米國に來て渡歐以前に享受した樂みの一は、新古の繪畫を見られたことであります。ハーヴード大學の陳列館 Fogg Museum では、思ひかけず、クリート壁畫の模寫を見て嬉しく思ひました。ボストンの日本版畫も、ありがたかつたに違ひありません。然しニューヨークの博物館の特別展覽會で印象派及後期印象派の諸作品を見たときほど胸がをどつたことはありませんでした。古畫を見て　年の追憶に耽り、魂を佛伊の美術館に馳せもしましたが、十餘年前の在歐期には、古典的な畫に氣を奪はれてゐたためか、新畫を見たことが至つて少かつたのですが、今本場ではなくとも、この土に於いて新代諸名家の逸品を見て興趣勃然として起つたのも當然だと思ひます。西班牙のズルオアガのものも三つ四つ見ました。ニューヨークの西班牙博物館にあるゴヤの美人畫と對照させて見て、獨り悅に入りました。歐米新古の美術のことはとまれかくまれ、私は米國に來て米國土人の籠細工の模樣や土器模樣の面白いのに、少からぬ興味を感じ、もつと米國滯留の日取を長くしておいたら、ゆつくりからいふ方の知識をも得てかへり、又土人の土俗その他人種學的資料をつかまへることも出來たものをと遺憾に感じました。喜田教授の觀察を乞ひたいものが甚多いので、シカゴ、ニューヨーク、ワシントンの博物館などでは、同教授を思ふこと甚切であつたのでありました。米國土人の手工品と希臘や日本のそれとの類似を屢々思ひつきましたがその都度危險々々とひつこみましたが、色々參考になることは多いやうでありますから、續々米國へこのかはの研究家を出すやうにしたいものだなどと考へました。昨日もアンドルー・ラングの一書を、この船中の書架から借出して「蠻人の工藝」などの論を見て、今更ながら、げにも比較研究といふやつは厄介な代物だと浩歎したのであります。この章の中では、ラングも米國土人のポッタリーと希臘のそれとを對比させて注意を與へて居ります。

これで民謠義は止めませう。別に新しい觀察や見解があるのではありません。ダンテの記念の事が氣にかゝつてならなかつたものですから、つい筆を執る事になつたのです。それも太西洋の波の靜かなせゐです。

（大正十年九月、「藝文」）

南蠻酒に醉ひて（九）

チャルメラに關しては上田柳村の詩を錄したが、石川啄木が、

　飴賣のチヤルメラ聽けばうしなひしをさなき心ひろへるごとし

と詠んだ名歌をおとした。これは家の子供に教へられたのだ。それが縁で晩學ながら啄木歌集を賞翫するやうになつた。

近世外來染織品名に關しては、別に大いに書いて見るつもりで材料がかなりたまつてゐる。更紗については先年太陽に書いておいた通りである。語源のわからないカイキといふ語に關して、中尾氏からは、繪絹に用ゐたことが多いので、描き絹即ちカイキスの下略であらうといふ說を書送られたが、近世の轉音法や其物の用途の方から考へて私は首肯しかねるのである。花の名に關して、大阪の清水元太郎氏はアラセイトウはやはり洋語ではなからうかとの注意をして下さつたが、自分は未だその是非を明かにするに至らない。かういふ諸方からの新見解と私自身の未解決とは他にいくらもあるけれど、一々こゝに記さない。

「ふれふれ粉雪」の童謠に似よつた現代の俚謠については俚謠集拾遺のうちから京都の分を抄錄したが、高知にも同じやうなものがある。それには下句が、

　お寺の柿の木、降りやとまれとまりや

となつてゐる。徒然草に引いてゐる形に、この方がいくらか近い。「空に蟲が湧く〳〵」の句を面白くないと私が評したに對して東朝のSは、實際雪が降るとき空を見上げると灰色でむく〳〵蟲がわくやうな感じがするばかりでなく、蟲の生活に親しみのある兒童の氣持をよくあらはしたものだと書いてよこしたのは私も同感だ。北原白秋氏の「思ひ出」を私が藝文で紹介したのは大正初年頃だとおぼえてゐるが、あれは京都の文科大學教官室そのころの實況を寫したもので、知る人ぞ知る、Tは原勝郎君、Kは多分狩野直喜君、第一のOは上田敏君、第二のOは濱田康算君であつた。Nとあるは私である。上田君と原君とは既に故人になつてしまつた。感慨が深い。

　スバル星に關しては、前記のSから、江戸でスバルを九曜星といつたのは、空も澄み、眼もよかつた時分のこととして當然であらう、自分にも八つにも見え、時には九つにも十にも見えることがある、山岳のなかで空氣の透明なところでは常に九つか十には見えると思ふと言つてよこした。尤もであると老生はうなづいた。丹波の茶摘歌にこんなのがある。

　月は東にすばるは西に
　いとし殿御は眞中に

やはり俚謠集拾遺に出てゐる。オリオンの參星をカラスキボシといふことは、あそこに述べておいたが、近頃松岡靜雄氏の「爪哇史」を見ると、ジャバでもやはりそれを鋤といふさうである。農具の名稱をもつて來た所が面白い。

長崎再遊

博多よりあなたに進むにつれて汽車の兩がはには櫨のうすもみぢが見えて來てこの地方の特色をきはだたせた　異郷人の眼には、この前、二度ながら夏のはじめにこの邊をとほつた時にでもこの樹は物珍しく感じたのであつたが、いま晩秋のしぐれ日和に眺めると、あゝ筑紫の野を過ぎゆくのだといふ趣が痛切に味はれると共に、遠い風土の秋に逢ふといふ情がしみじみと浮んでくる。筑肥の野を西へ〳〵とゆけば萬葉歌人の思出かこれかれあらはれても來たが、自分はこの地方色を織成す櫨の樹に、とらへられてしまつて、古歌によまれた櫨も、黄櫨染のそれも、天之波士弓のそれもみな、この樹なのかと、平生草木のことに疎いのに反して、遽かに興味づいて來て獨り推考に耽つてゐた。

佐賀や有田より早岐を經て汽車が大村灣に沿うて南下する時分には氣持もおのづと一變してくる、海岸よりは寧ろ湖邊を通る心地がする。野生の山茶花があちらにもこちらにも山のほとりにさきみだれてゐる。黄菊が山路を色どつてゐる。蜜柑や金柑が、枝もたわゝに實のつてゐる。すべてが平和な南國の秋といふ氣持をあらはす眞ツ際中に、自分のからだは一刻々々玉の浦長崎へともつてゆかれる。何だか伊太利亞の旅をして、とある由緒古き小都會へでも着くのではないかといふ氣がする。

もはや浦上村のみ堂や學寮らしいものが見えはじめる。稻佐の峠にさへぎられた夕ばえは、ほんのりこの平和な里を照らしてゐる。さあかうなると、もう櫨の樹も筑紫の秋も古典の感興も何もない。あゝ我が長崎だ、長崎だと胸がをどるばかりだ。

旅亭の樓上に港の夜を眺望すれば、異境に居るときの様な、落着かなさ、おぼつかなさの底に何やら前途ありげな望みの光が點々たゞよふ氣がしてたまらなくなる。「あすは船づる何とせうぞの」といつたやうな心もとなさも衝いて來て、星とも螢ともみまがふ、山に據るこの港町の燈火をあかず眺め入つた。たうとう夢おちつかぬ一夜をすごしてしまつた。

翌日は雨であつた。圖書館を訪うてしんみり物を見るには却つて仕合せであつた。近ごろ舊街道に近い古賀といふ村落から發見されたキリシタンの大きな墓石の寫眞をはじめ、港外へだたらぬ伊王島の舊家などから出たメダイ類など、珍しい物の數々を示された。メダイの中には、フィレンツェのピッチ館にあるラファエルの圓畫のマドンナの構圖そつくりの聖母子の意匠を鑄たものを見かけた。さまで古い系統の遺品とはみとめなかつたが、本邦に殘つてゐる此種のものでは異彩を放ち、自分たちの心をときめかすものだ。漢字を鏤めたメダイもあつた。これは支那から舶載のものに違ひない。水戸の徳川家で今春みかけた平假名のメダイの方が更に珍しいけれど、とにかく漢字のものは自分には初見であつたのでうれしかつた。文書類では原本はなく寫眞と影寫とであつたが、薩摩の山川港に存する大迫氏文書は寛永十一年、呂宋貿易と異教徒とに關するもので、天正十五年の禁教令、同十六年の長崎知行布告は、一は鍋島家、他は松浦家に存し、共に秀吉の發したものとして著名である。天正十九年秀吉が長崎に令した法度書は貿易史料として貴重な價値

がある。その他先年原本を一見して未だ閲讀の暇のなかつた大浦天主堂所藏の一六〇七年の長崎版「スピリツアル修業のマヌアル」の寫眞全部の具はつてゐるのをも見て一部分細讀して抄錄することが出來たのはありがたかつた。この本は數年前モリソン文庫の石田文學士が出張撮影せしめられたもので、原書は慶長十二年の活版本であるが、今春出版された京都帝國大學文學部考古學研究報告のうちに抄出した高槻在の東氏所藏にかゝる吉利支丹抄物の考證資料として有益なものであることを、この度の採訪によつて知つたのは幸である。

これらの吉利支丹史料の外、圖書館や市史編修室で見た鄕土史料、學藝史料は多かつたが、一々擧げるの煩に堪へない。

明くる日は天氣も晴れ日曜日でもあつたので午後から永山武藤兩君や新識の永見廣田大庭三君を加へて總勢六人で浦上の天主堂をおとづれた。德川幕府の初期乃至末期に篤信者の盛んであつた一鄕として、布教史上に有名な地であるが、案內を受けて親しく參詣したのはけふが初めてである。み堂の右手にある敎師館の一室には、近郷はては近隣諸島などから蒐集した篤信者の遺品が陳列常置してある。メダイの數々はいふに及ばず、コンタス、チシピリナなどの法具をはじめ、外海にあつた泥畫の十五玄義圖、おなじく天使ミゲルの圖等は、最も強く私たちの眼をひく。明治初年の文書にも注目すべきものがあつたが、恰も午後三時の式が始まるといふので、館を出でて同伴者と共にみ堂のうちに入つた。堂は丘陵の麓小高き地に聳え、大むね赤煉瓦造であるが、堂內の床は一面に板の間である。近年の建立と見えて物さびた樣子もなく、上窓や兩側より入りくる光線もまばゆきにすぎ、普請にも莊嚴の趣は見えない。然し村々より三々五々寄り集る篤信者の老若男女のおびたゞしいのには一驚した。右側に女子左側に男子と分れて高らかに祈禱文を讀誦するを默聽してゐると、日本にゐる心地がしない。み堂內の雰圍氣はしつくりあはない感があるが、熱心な信仰を抱く質朴な農民の人々のおもてを見まもり、その聲に聞入ると、いつしかこちらも引入れられて、おのづから聖いすがすがしい心と難有い法悅とが涌いて來る。あのきびしいむごい禁制の三百年間を、巧にきりぬけて來た擧句、首尾よく復活した奇蹟もいかにもとうなづかれるのである。

み堂にきた途中、村はづれで求めた新版の公敎會祈禱文をはぐり〳〵讀んでは、私は白い被衣をかぶつた白薔薇の如き一列を見やつた。聖マリヤの連禱の新譯文を見ると、「主あはれみ給へ、基督憐みたまへ、主あはれみたまへ、キリスト我等に聽きたまへ」に始まつて、段々文句を重ねていき、マリヤをたゝへては、「最いさぎよき御母、いと貞操なる御母、終生童貞なる御母、玷なき御母」といふやうな對句を疊み、「正義の鑑、上智の座」などと譬喩で進んで、

それから更に、

奇しき玫瑰花　我等の爲に祈り給へ
達味の塔　同
象牙の塔　同
黃金の堂　同
契約の櫃　同
天の門　同
曉の星　同

と讚美しつゝたゝみかけてゆく名句を私は獨り默讀してゐた。舊い聖敎日課を見ると、この邊は更に古雅に綴つてある。

奧ゆかしき玫瑰花　我等の爲に願ひ給へ
達未の敵樓　同
象牙の寶塔　同
黃金の高殿　同

約束の櫃　同
上天の門　同
曉明の星　同

故人柳村や白村がよく口に筆に上せた「象牙の塔」といふ句のこゝにあらはれてくるのもなつかしい。

私たちはみ堂を出て一めぐりして、堂後なる木造の古めかしいエクレジヤを一瞥して低徊歸途についた。

その夜は銅座の永見氏に招かれて吉利支丹の遺品の外、かなり古い外國貿易を描いた大幅の軸物を見ることを得た。單に一の風俗畫としても貴重なものである。南蠻屛風とは趣もちがひ、海岸(堺あたりといへばいへる)に濱して貿易の商店が軒を並べ、外人の來往商賣する有りさまは稀代の光景を呈してをる。南蠻屛風の如く一方に伴天連どもを配置してないのも面白い。

かゝる異國情調にひたつて一夕を語り更かすと、何やらどこからかラベイカの一ふしでセレナードでも聞えてきさうだ。銅座から上野屋まで歸つてくる長崎のノクターンは夢のやうであつた。同好の武藤君から押しつけられた書畫帖に、われを忘れて古句を書きなぐつたのも、物狂はしさの頂上である。書いたのは花樂軒蝶々子の俳諧當世男に見えた次の連句で、自序に延寶四年とある。

出ぶねの酒をすごせ道づれ
ラベイカで名殘を惜む歌もあり

次の日午後私はあかぬわかれを此地に告げて博多へ向つた。眞に「何とせうぞの、うらめしや」である。

（大正十二年十二月九日）

南蠻酒に醉ひて（十）

鋤といへば、鋤燒の話が『南蠻更紗』の讀者の感興を最強くひいたと見えて、これに關する增補が一ばん多く私のところに達した。大毎の岩井武俊氏は山城の南部でも、その習慣のあつたことを報じ、東京の室津鯨太郎氏は、幼少お國での記憶に牛の鋤で牛肉を食べたことを思ひ出して、北堂にたづねられた所が、鄕里土佐では鯨の赤身や皮肉を醬油をつけては鋤で燒いて食べたことは珍しくないとの話であつたとのことを通信してくれられた。自身でも明治二十二三年ごろ鋤を火の上にかけ鋤のへりに味噌で土手を作り其中へ牛肉や兎の肉などを入れて煮て食べたことを思ひ出すと附加へられた。室津氏は刀劍の研究家で、近時南蠻雜考やそれで鍛へた刀工康維の事を研究してその專門雜誌の上に發表せられたが、それに因んで私に南國の土俗について注意を喚起されたのであつた。改造社の濱本君から土佐のスキヤキの話を聞いた事があつた。かういふ鹽梅に特に關西諸地方に廣くあゝいふ習慣が行きわたつてゐたのかと思つてゐると、關東にも昔も今もさういふ調味法があるといふことを更に知らした友人が二人もある。

その一は京都の小山源治君であつて、式亭三馬が文化九年の自序を以て出版した古今百馬鹿といふ戲作の第一回に「鼻毛をのばす御亭主馬鹿」と題して江戸で或町家の夫婦が癡話喧嘩をした後で、仲直りに、亭主の方から、

おまへも一盃飲みな、何ぞ取りにやらう、まづ其間そこの下にある皿をくれ玉へ、鴨の鍬燒をして食はう、ヲット、鍬形を爰へ吳んな、

といふ一條がある。

異國俳趣記

俳書類に見えた異國情趣の句は、十五年前小泉迂外氏が風俗志林第二卷第一號および集古會誌壬子卷四に摘錄せられ、宮武氏の川柳叢書第一篇の附錄にもとりいれられてあつて、古く柳亭種彦などがよく俳句を考證につかつたその流れを汲む道すぢであるが、私も同じ道すぢをたどつて俳書のうちから南蠻紅毛にちなんだ句を拾ひあつめておいたことがあるから、この機會を利用してかきつけておく。成るべく小泉氏の分と重複せぬやうにするが、興の向ふところ多少同句がまじるかも知れない。

寛永以降の貞德派の句集には異國的のものが甚だ多いのは時勢上自然である。タバコやキセル、鐵砲や遠目鏡、時計、カルタや葡萄酒、さてまた南蠻船とか黑船とかいふ題目、吉利支丹に關するものも散見する。最も多いのはタバコの句であらう。私がしば〳〵引用した貞德の油糟の句の如きは唯一の例かと思ふ。寛永十年に成つた松江重頼の犬子集はこれらの種類の句に富むが、貞德自身の作も多いが、慶友すなはち堺の卜養（初代）の句がかなり多い。讀人不知の作にて（卷五）

長崎へまかりてくろふねの
入ざる年に
雲のかゝる月や黑舟空の海

の句、慶友の句（卷十五）に「蜜も皆まつ黑方に打けぶり」の前句に、

南蠻舟にたばこをやのむ

と附け、おなじく（卷十七）「白き物こそ黑くなりけれ」に對して、

まかい絲を南蠻舟に賣はてゝ

とよんだのがある。編者重頼が「忍び〳〵にかたる上瑠璃」に、

らう人や世界の圖をば知ぬらん

と附けた句中の世界の圖といふ語は、德川初期の流行言葉で、遡れば海外交通時代の盛期に及ぶのであるが、日本西教史を見てもわかるごとく信長や秀吉が世界圖を按じたことと、家康が世界圖の枕屏風を駿府の城中にもつてゐたこと等の事實と思ひあはすべきであらう。下つては寛文年間の卜養狂歌集中にも二首もよまれてゐるのを見かける。

よきといひて類ひもいざやしらひげを
これぞ南方ぬくせかいの圖

それには「ある人南方の毛拔を給はり氣に入たらば歌よみておこせとありければ」と題詞がある。南方けぬきのことは既に毛吹草にも出てゐる。卜養はまた、

吹風呂のてんと其いきそれすいた
せかいの圖ぢやと名を右衛門殿

とよんだ　同集秋の部の或る一首の題に、「何れにても譽る詞を世界の鐵砲洲といひ待りければ」云々と見えるが如く、もはや日本一や天下一や三國一では譽めかたがきかなくなつたところが面白いのである。西鶴も一代男卷四にこの語をつかつたが、別段の成語としてではないらしい。

貞德の油糟は寛永二十年の刊行であるが、「をれずまがらずとほらざりけり」の前句に附けた五句のうち、

爰になし南蠻人の國のかね

と南蠻鐵をきかせたところは日本の近世刀劍史にも一つの資料ともならうか。同じ年の淀川すなはち新增筑波集には、タバコの句にその註が

添へて出てゐるのは、珍しくないが、「琉球國はらくなあきなひ」といふ句をよんで、「まうくるも又まらくるも女子にて」といふ句につけてゐる。琉球の句は鷹筑波や紅梅千句に一句づつみえてゐる。正章千句に蝦夷の句が二三句出てゐるのと呼應するわけである。貞室の正章千句すなはち千句獨吟之俳諧は貞徳を判者として正保四年に成り慶安元年の刊行であるが、それには私の愛誦する連句があるから左に引く。

かたきもつ身のなど弓斷なる
黒船はゑげれす舟のあひ近み
俄に風のかはる洋中
みんなみの空に陰氣な雲たちて
覆ひきざるや補陀樂の山

慶長元和のころ葡萄牙西班牙の黒船が新來の阿蘭陀英吉利の船を海賊船としてかたきのやうにしたのは異國日記や外蕃通書などによつてうかゞはれ、セイリスの日誌等にも明記してあるので、當時の列强が東海南洋に角逐しつゝあつた模樣を示すばかりでなく、末の三句の如きは日本の南洋詩では異彩を放つものと思ふ。

枕上の時鷄に夢をさまされて
南蠻人の月をみるさま
冷しとせいたかをとこ笠をとり

との附けかたは蕉風の方から見ればともかく、南蠻趣味からいへば興味が深い。明暦元年刊行の紅梅千句にも同趣の句は應接に暇ないほどである。時計、ビイドロ、鐵砲、石火矢、それらはさておき、

のぼりぬる絲巻物に利の有て　安靜
繁昌しける長崎の町　友仙
戸ざゝざる世ぞ下の關かみの關　季吟

の如き連句は貿易史の裏書となる。鯨の句も貞門には多いが、こゝには略さう。

寛永十五年貞徳の判がある西武の鷹筑波は同十九年の開板であるが、それにも同樣の句があまた見えるが、正章千句の英吉利船と南蠻船との對抗がこゝにも反映してゐるのに氣がつく。

すはやかたきとさはぐ船中
ひつくはへ矢をいぎりすやこはからん

吉利支丹の句もこの集に出てゐる。

功徳はいづれ法華念佛
吉利支丹ころばんとての談合に
尾もひれもひんとはねたる魚をみて

それより古くは犬子集の卷十四に、「あぐる柱はころびさうなり」の句につけて、

はた物となすだいうすに異見して

となるは磔刑に處せられた提宇子宗すなはち吉利支丹の師徒に異見して轉宗せよと迫るところである。油糟のうちにも、

迚もしなばいかでか腹を切らざらん
江戸ぜめにあふ武士のていうす

とあるのも、吉利支丹の武士が切腹を肯ぜぬことをよんだのである。寛永正保頃の刊行といふ仁勢物語に、

むかし男ありけり、きりしたんの御法度ありて、むさし野へつれて行ほどに、とが人なれば町奉行にからめられにけり。女も男もくさむらのなかにおきて火つけんとす。女わびて
むさし野はけふはなやきそ淺草や
つまもころべり我もころべり
とよみけるを聞て夫婦ながらたすけてはなちけり。

とあるのも、江戸の邪宗退治のありさまを滑稽化して寫しておもしろい。淺草に邪徒を處刑したことは記録にも出てゐる所である。

貞徳が慰草卷八に於て、六時禮讃の由來に關して、評語を下した條に、

今の時代にありしだいうすばらひなどをも

よくしろし置たき儀なり　末の代にいたり
てかの南蠻より來りてかの法をひろめむに
當時の御成敗をしらざる日本人めづらしく
聞いれて此國をかれらがとらん事うたがひ
なし、心あらむ人はねん比に今ある事を書
置て面々の子孫にのこさるべき儀なり。
と記しておいたのは、吉利支丹の日本にいり
たりし時は京衆牛肉をワカとがうしてもては
やせり」（卷四）と京都で牛肉をたべた話と共
に、私が既に述べたことがあるが、ワカとは葡
語の Vaca で英語のビーフにあたるのである。
かういふ外來語もすたれて後世にはきこえな
い。貞室の片言は慶安三年の編であるが、總
じて南蠻言葉唐人口などは聊かも使用すべから
ずといふ制定などを設けて排斥し賀留多用語な
ども避けるやうにしたらしい（卷二）やうであ
る。但し重頼の毛吹草を見ると、カルタ關係の
語も附合すなはち連想語句集中に加へてあるの
で、さう嚴しい制定が行はれたわけもない。蕉
風の句にもイス郎ちイスハダ（劍の葡語）がよみ
こまれてもゐる。
毛吹草は寛永十五年正月の序があり、刊行
は[illegible]、卷の三の附合の部を見ると、
[illegible]、、、蟲、一、劍一、拾一、繪合、などの語に
「かるた遊び」を附合せる一例にしてあるが、そ
の中の劍を南蠻人につけあはせてある。これは
前記の油糟にも一例を見出すのである。尙毛
吹草には南蠻酒や南蠻菓子が出てをり、シャボ
ン、マルメロ、ボブラ、チャウ、カッパなどの如く
衣食に關する外來語が散見する　貞徳文集は
やはり慶安版の稀覯書であるが、それにも南蠻
の事物がちらほら見えるのは不思議でない。
さて話が吉利支丹にもどるが、慶長十七年
の跋のある刊本小瀨甫庵の童蒙先習の卷七に、
可樂物と題して、一邪なる法の漸うすく成行
は」とあつて、

病の邪氣去が如し、邪法を發揮せんには、し
しびしほに成侍るとも、君のため民のため
萬代のためならば、せめうたんに邪法おの
づから薄く成なんは、樂ても猶餘りあり。

儒學と愛國のがはよりの異端排斥の意氣ぐみ
さかんであるが、これを羅山の排耶蘇の文や貞
徳の慰草などと連關して面白く感ずるのであ
る。
談林派の方で、キリシタンとかバテレンとか
オランダとかいふ文字を書名や流派名につかつ
て互ひに排斥しあつてゐたのは延寶年間である
が、この派の人々は紅毛の名前をつかふわりに
はその事物をよみこんだことは少い樣で、貞徳
派の異國的なのには遙に及ばない。世界の圖に
ついては西鶴一派にも「戀病を思へば世界の圖
法師ぢや」（山本西六）などの駄洒落がある。
蕉風に於ても芭蕉自身に蘭人に關する二三の
句が見えてゐるが、それらは趣味からいへばむ
しろ蕉風には遠い。其角には紅毛人をつかまへ
て「紅毛來貢の品々奇なりとして」と題して、

桐の花新渡の鸚鵡ものいはず

の名吟がある。嘗ては延寶七年の江戸蛇之鮓
に、言水が、

びいとろ障子戀へだつ春

とよんだ一句は、芭蕉の、

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

といふ人口に膾炙した俳句と共に載せてある
が、其角の水戸黄門の簾子の御茶屋にて、

水の上み醉顏清し氷茶屋

と題した瓢逸は蕪村を想はしめる。其角が元祿
三年選集のたれか家に、次の連句のあるのは寧
ろ珍しい。

人質かへす命うたかた　其角
沈着耶蘇も陸徒もころぶ也　才丸
歩、るしけに恥るはら帶　嵐雪

嵐雪の玄峰集には、四十二國人物圖か山海經

の插繪でも見たものか、題詞の長いのをそへて、

紀の山紀の海にいり江に入る、禹益の水を治めて異物をしるせる海外山表のありさま、ルスン、カボチャなどいふ遠津島の人がらは畫にのみ見たり、南のえびすの洞にかくれ、いはほに走るを鬼にもせよ人にもせよ、こゝろおかるゝ旅寢なり。

蛇いちご半弓提げて夫婦づれ

の面白い句がある。去來に至つては、長崎には緣故深きにもかゝはらず、異國情趣の句は殆どないといつてよい位である。長崎の丸山にて、「いなづまやどの傾城とかり枕」と、去來發句集のみならず、風俗文選にも「後の丸山賦」を添へて載せてある名句はあるけれど、異國ものをあしらつたのにはカルタに關する俳句に、

手一杯ユスのカルタや躑躅山

といふ赤い色にてあらはしてある劒の形すなはちイスパダをよんだものがあるにすぎない。卯七の渡鳥集にも卯七の千句興行に、

錦積む町も奥あり里神樂

といふ妙にひねつた所を吟じたのが私の眼についたくらゐである。然し去來が元祿三年長崎にあこがれ卯七を夢みて、「これより南にゆくいの心せちに出たり」とて、

長崎のながきも訪はん雲霞

と吟じたといふことであるが、私はこの一篇の眞僞に多少の疑はもちつゝも、それを錄せるいはゆる去來文なるものは愛誦しておかないのである。南國の鄕土に憧憬したあの意氣はうれしくてたまらぬ。

天明時代の句にも異國情趣のたゞよふものがないではない。召波の春泥句選にこんなのがある。

石火矢に出行船や霧のひま

蘭船の歸帆を吟じたのである。

大江丸の俳懺悔にも同趣の句がある。

石火矢に船出す春の行くへ哉

春と秋との相違ではあるが、詩作はとにかく、事實からいへば秋の方がかなふわけである。大江丸が駝鳥に對して、

桐ちるやみぬ唐土の鳥はみせ

とよんだのは、其角が桐の花に新渡のあうむをあしらつたのに比べてどうか。蕪村等が安永二年の歌仙に、

ともづなは只かりそめに結ぶらん　几董
月おぼろなる紅毛の額　一音
散華を案じ〳〵て寢てしまひ　春堂
春やむかしのふるさとの味噌　蕪村

前二句はやはり召波や大江丸の俳句と同工で歸航の蘭船をうたつたものである。すでに延寶の長崎土産に、「早きものゝ品々」とあつて、その中に阿蘭陀の歸帆がある。惜まれたにちがひない。「あすは船出る何とせうぞの」などと松の葉に見えてゐる情致はどこでもかはらないものだ。たゞし加賀の樗庵麥水が明和安永年中出島の蘭館に宴して七月十五日の月を賞して、

いざたまへ家名月と興すべき

の句を發したは少しふざけすぎてゐる。詞書はからである。

長崎に遊びし日、故ありて紅毛館に入る、出島の臺にヘトルの役アルメナヲルトと宴する事ありて、其日は文月の十五日也、宵の月甚だ明かなりし。

ヘトルは葡語 feitor で甲比丹の下役、Armenault は明和安永の交に在任した人で、進んでは甲比丹ともなつて、事蹟ものこつてゐたかとおぼえてゐる。

何で見たか忘れたが寛政十年春の刻本に阿蘭陀鏡といふ俳書がある樣であるが、俳諧書籍目錄にも載つてゐないから他日調べてみようと思ふ。延寶年中の阿蘭陀丸二番船などといふのと趣を異にしてゐるにちがひない。

樫の葉

昔より今に渡りくる黒船緣がつくれば鱶の餌となる
さんたまりや　（松の葉）

日見の峠一の瀬と云ふ所を過るほど、都てえしれぬ香鼻に入て胸心わろく、とへば是なん長崎のにほひと申」と延寶の長崎土産に見える其異臭は、鎖國時代の日本人の鼻をいかほど強く刺戟したらうか、崎陽の俳人向井去來の花薄の句碑が建つ彼の峠を越えて港に近づくと、百尺竿に飜る紅白旗に、先づ和蘭館はあすこぞと心ときめき、新しい西學の知識を追求する若い人たちは多年夢みた扇形の出島が眼の前に展開されてどんな心地になつたらうか。巣林子の形容を茲に移せば「唐土阿蘭陀の代物を朝な夕なに引受けて千艘出れば入船も日に千貫日萬貫日小判走れば銀が飛ぶ金色世界も斯やらん」といふ港の繁盛に引寄せられる商賈は云ふに及ばず、新渡の唐本蘭書に胸躍らす學藝の士より遠國の珍禽異獸に怪喜する兒童に至るまで此浦から受けた薫化の莫大であつて、近世の日本文化史上光輝ある功績を遺したことは茲に說くまでも無い。「聞てよき物──石火矢の音」と長崎土産にもあるが如く、其音に蘭船の入港を喜ぶ市民、「はやき物──阿蘭陀の歸帆」とある樣に、異人に別を惜む丸山の遊女、繻子天鵞絨の手ざはり、カステラの味、チンタ酒の香り、聖堂に乾隆帝の額を揭ぐれば、蘭館に北方流派の海洋畫を看る、帆柱を猿の如くさわたる黑奴、街頭に輕侮の的たる間の子、屋後に泥芥をあさる豚の鳴聲、紅毛の留守を守るさびしき女の愛づるカナリヤ、通詞の家に弄ぶオルゴルの音止みて、外からチャルメラのひびき耳をつく、……

危險思想よと宗門改めは、書物改めと共に此浦に嚴しく、吉利支丹寺の鐘の音既に絶えて明倫堂に咿唔の聲高らかに、諏訪神社の花盛りは春毎に人の賑を增す時勢であつたから、異風殊俗の尙更際立つて土地の色合徐々鮮かに成來り、いはゆる長崎のにほひ鎖國の民の鼻をつくばかりであつたのは當然である。然るに此のにほひを文學の上に傳へたのは、地誌紀行記錄の類をはじめ、曆數食貨等の志類を除くと極めて少い。當代民心の趨向致し方がないとは云へ、文藝の士のふがひなさ、徒に此のエキゾチックな好題目を逸し去つたのは惜むべきことと思ふ。屛風繪に殘る南蠻船紅毛船着津の景に長崎のにほひを偲び得るが如く、近世の詩歌俳句の中より若干の例を見出すことも敢て難事ではない。然し他の學藝の徒が成遂げた業に比べれば、文藝上の作品の寥々たるは固より爭はれぬ。試に思出づる儘に其著しい二三を擧げれば此土に遊んで歸つた後、崑陽は蘭學の基を開き、鳩溪は奇器を工夫し、子平は北邊の國防を論じ、江漢は洋畫の流派を弘め、皆紅毛人の啓發を受けた。崎陽の象胥家から出た者では、支那小說流布の端を開いた岡島冠山、天文學に文法學に造詣最も深かつた中野柳圃を數へ擧げよう。之に反して此土地に來往し或は客遊した文學者、若くは此港から他方に移つた文學者で世に顯はれたものは甚だ少い。而して其顯はれた少數文士のうち長崎のにほひを留めた佳作を遺したものは更に少い。

これらの文人のうちで、和蘭芝居の梗概を書

留めた南畝や、唐人芝居を見物して長歌を詠んだ橿園の如きは異數とすべきであらうが、瓊浦に流寓した貞德が「獅子野牛さへもかいたる油畫に」の附句を遺したのや、貞享年中行脚して客遊した三千風が崎陽の風光を敍して、「是に對すべきは和朝の富士山の外はあらじとおぼふ……所詮長崎を見ずして京物語はすまじかりける」とて、菊の日に、「西都に菊あつてチンタの玉江壽けり」の句を吐いたのも、ともに玆に擧げて置くの價があらう。貞門の俳人より談林一派乃至所謂阿蘭陀西鶴の輩に至るまで外來的の事物を挾むことが多くあつても、特筆する程の句もない。乾坤辨說の編者の子として父元升の學問の一面たる曆學に身を立てたこともある向井去來は長崎より出でて蕉門に名を成し蕉風を鄉土に弘めたが、元貞門の好奇談林の奔放とは違ふから、支考と共に丸山の賦を作り、「いなづまやどの傾城とかり枕」の一句を添へた丈で、あたら崎陽特殊の風物も吟咏のたねとはならなかつた。況んや去來の性格では斯樣な方向に進み得なかつた。蕉門で同鄉の魯町卯七の輩以下の句に至つては七部集以外にあつては姑く博捜の士に俟たう。

去來の時代より正に百餘年の間、長崎が迎へた著名の洋人には、其初め元祿に獨逸のケンペル、中頃安永に瑞典のツンベルグ、文化に魯國のクルゼンステルン、獨人であつたが、文政の中程に至つてシーボルトの來崎を見んとするに先つて、前後して二人の詩人が瓊浦に遊寓して能く斯土の特色を諷詠の料に供したのは多とすべきである。一は山陽の西遊稿（文政元年）、他は星巖の西征集（文政七年）である。前者の長崎謠十解、後者の瓊浦雜詠三十首、共に諷誦すべく、賴氏の校書袖笑に代つて清客江辛夷を憶ふの七絶は、梁氏の女校書袖笑に贈るの一首と合せて朗吟すべきものであらう。彼が阻郤郎船故故逢の結は松の葉の長崎節に、

　こがれ〳〵て唐土舟の袖に湊のよる〳〵はそりや逢ふよる〳〵は袖に湊のよるばかりそりやあふ

の遺韻を偲ばしめる。吾等が少年の頃愛誦した山陽の中秋の詩の瓦光明滅海山影、旗色依稀吳越舟、長鋏短衣成久客、蠻煙蠻雨又中秋は、西征集の十五夜泛舟於瓊浦賞月の詩に比べる。明地に長崎のにほひはするが而も後者の載將水府珠千斛、買斷揚州月二分の佳句も氣に入つた。星巖の鄭成功詩六絶句は外史氏の佛郎王歌一篇と對して詠史であるが、吾等は蘭醫に遭つてナポレオンのモスカウ敗績の戰況を聽いた事柄そのことを面白く感ぜずには居られない。

賴襄の荷蘭船行の長詩は、正に中島廣足の長歌、詠紅毛船入貢歌一首、幷に短歌に匹敵する。中島橿園はもと熊本の藩士であつたが、致仕の後は專ら長崎に來往して國學を講じ歌道を教へ、語學考證上の著述歌文の製作數多の書物となつて殘つて居るが、歌人としてよりは語學者として顯はれ、語學者としても寧ろ補訂を事とした。玉霰窓の小篠、詞八衢補遺、增補雅言集覽等能く綿密に宣長春庭雅望等先進諸家の所說を補訂して後人を益すること多かつた。斯くして鎭西國學者の泰斗となつたが、身崎陽に在りて蘭學の影響を受けず、固有の國語學の祖述者であつたのは稱揚すべきか惜歎すべきか。兎も角も空しく豐後臼杵の神主の子にして少にして京畿に遊學した鶴峯戊申をして名を成さしめた。鶴峯氏が曆數に秀でた頭腦を有つて居た丈、蘭學に入り蘭文典をも解して遂に日本文典に應用して語學新書（天保二年刻）の名著を殘すに至つたのであらうが、然し此著が幕末語學界に流星の如く一閃過したと云ふのみで如何ばかり日蘭兩國語の本質を明らめて居た

上の著作であるかは問ふまでもない。ホフマンも身蘭國に居ながらにして、時後れて日本文典を編したが、あれだけの出來榮を海西翁の新書に見られるか、又此新書が櫻園翁の功績ほども後昆を益したか、自分は寧ろ之を疑ふ。然し論は竟畢蘭學に通ずべくして通じなかつた廣足の天分や年齢は別問題として戊申ほどの知識にては後代の國文典に寄與する所幾何も無かつたらうと云ふに落ちる。

山陽の詩才と廣足の歌才とを比較するの要は無いが、西遊稿と櫻園長歌集とに見える同じ題目の長詩を對照して優劣を論ずるは、要するに漢詩國歌の得失を論ずることになり併せて當代漢國兩學家の西洋事物に對する感興及び態度にも論及ぶ様になると思ふ。此最後の意味に於て、神主の家に生れた海西翁が蘭文典を學んだのを多とし、長崎に住して蘭學に通曉する機を捉へなかつた櫻園翁を議すべきであらうが、此點からいふと伊勢の足代弘訓翁の如きは、時勢や土地や交友やも然らしめたに相違ないが、經世の志もあり攘外の念もあつたので、國學者中出色であつた。是も一つは中國や攝津の感化にも由つたことと想像される。嘉永年中黒澤翁滿が異人恐怖傳と題して、志筑忠雄―中野柳圃の檢夫爾の日本誌の鎖國論、享和二年に之を刻したことや、安政年中横山由清が魯敏遜漂行紀略を譯出したことは、國學者の事業としては寧ろ奇しいがこれも時世である。されば獨り中島廣足を議すべきでは無いが、維新の際に後れを取り、明治の三十有餘年間サトウ、アストン、チャンバレンの三家をして功を成さしめた責任は幕末の國學者にも既に相當の責任が歸しはしまいか。

再び櫻園翁が好機を逸したことを述べて見たい。山陽は文政元年即ち西紀一八一八年、嘗てモスカウの役に從軍した軍醫からナポレオンの話を聞いて長詩を詠じた。十年の後文政十一年に廣足は、その樺島浪風記にも書いた通り、長崎から船を發して鄕里熊本に向ふ際に、暴風雨に遭つて難破したが、其際シーボルトが國禁を犯して歐西へ持去らうとした日本地圖類を載せた阿蘭陀船も亦同じ天災にかゝつた。其事は前記の浪風記にも「蒙古が艦を吹きやぶりしむかしの神風」の仕業とし、內外學者の疑獄一件を略叙してあるが、有名な事件であるから多くの人の知悉する所である。シーボルトは初渡の際に在りては、文政六年より此事件に至るまで前後數年長崎に在つて幾多の英才門人を得て、我國の地理歷史博物を研鑽して廣く材料を求め、同時に醫藥動植の學を傳へて居たのであつた。其研究の結果の一端は早くも歐洲の學界に報告され、現に遭難の翌年一八二九年六月附長崎發の日本人種起源論の如きは、巴里の亞細亞協會で披露されてクラプロートの批評を受けたこともある。而して樺島浪風記に神風を頌した國學者は、幾多の蘭學者とは違つて此著名な東洋學者に接する機會を捉へなかつたらしい。

「詩を作り異を記して故郷に傳へん」とした外史氏の心掛と意氣とは此歌人には見ることが出來なかつた。因みに附加へて置くのは山陽にも矢張り同様の遭難があつたので、薩摩で艤港より萬里泊舟天草洋を過ぎ熊本に向ふ頃、大風浪に遇つて殆ど覆沒する所であつたので、島原に上陸して漁戸に宿し、五言の長詩を賦して其模様を誌した此詩は、櫻園翁の和文よりも簡勁で印象が強い。

詠紅毛船入貢歌と荷蘭船行とを比べるに、五七の單調と序詞の冗漫は長歌の特質であるから止むを得ないとして、南方に取得がある。然し「御代の日本と天皇の」のみことのきことをすと出始めるのは、此等の詩はあつても古來に過ぎて冗長の嫌あるを免れぬ。中

程に至つて、初めて「水鳥のうかべるごとくたくぶすま白き帆かげの浪間よりあらはれぬるを」と蘭船を點出したのは、單直に崎陽西南天水交、忽見空際點秋毫と詠起したのよりも印象不鮮明である。望樓號砲一怒嘷、二十五堡弓脫弢は「をちこちに火矢の音どよめ」よりも餘りに弱すぎる。然し末尾に憂國家一流の口吻で慨歎したのは、「いやましに榮ゆるさと浦安の國ぶりしるく春花のにほふ大御代こゝろなきえみしがともあふがざらめや」の悠々迫らざるに及ばない。而して橿園の長歌の敍事の方が細密であることは確かだ。諏訪神社の大宮司であつて中島翁と交りのあつた青木永章にも詠蠻舶人貢歌といふ長篇の歌があるが、前記の長歌よりも優つて居るやうに思ふ。反歌には永章の「あたならば我とりてむといさみたつ新防人はをたちとるらし」に對して廣足の「外國のたえぬ貢にあめのした萬のたからみちたらひたり」とある。

橿園長歌集には尙「唐船をよめるうた」がある。「わがほれる墨も硯もかみ筆もさはにぞあるらし、いざ子どもはや引いれよそのからふねを」と結ぶ。其外「詠食火鳥歌」に珍禽をうたひ、「觀虎作歌」に韓國の虎ちふ神を詠じた。「觀淸人戲場作歌」に三國志中の一曲の演戲を敍したのは、南畝の隨筆に見えたる蘭唐の曲の梗概と共に珍重すべきものである。短歌にも同樣な題目を詠んだものが無いではあるまいが、橿園集中には茲に擧ぐるに足るべき作を見ない。瓊浦集には崎人某の正月元日紅毛館にて詠じた「えみしらも小旗たてそへ吾くにのよろづよいはふ春はきにけり」及び同　某の蘭船をよんだ「つたひのぼる三の柱のふなこどもなれし手わざはあやふげもなし」を初め數首の歌を擧げ得るに止まる。

別に文政六年九月橿園三十二歲のをり、通辭猪股久藏から賴まれて急に譯したといふ阿蘭陀國風詩二篇がある。之に由つて翁と蘭人との關係は一段密になるわけであるが、譯詩あまりに自由で、和臭を帶び過ぎ、エキゾチックな香りが全く失せてしまつたのは遺憾である。斯樣な材料を更に多く集め今一きは調べてみたらば、廣足と蘭學との間柄が段々好く知れて來るであらう。然し不知火考で蘭人の說を承けてポスポリユス(燐火)エレキテル(電氣)を引證し、或は蘭人西洋にて火星船中に飛入し物語、或は物の理を窮むる紅毛人すら造物者の所爲といふことを假定する所以を述べたのでも、翁が西學と全く無交涉でないことは分る。上村觀光氏所藏の、廣足より作信女に與へた二通の書狀に由つても此邊の消息は分る。然し翁の對外感興は至つて淺かつたらしく、又態度も硏究的とは云へない。右二通の全文は他日別に揭載するとして、今必要ある部を摘むと、一通は某年十一月二十五日附で、

長崎も當年は何もめづらしき事も無御座候。唐　夏船も不來　いとさびしく冬船相待居候時節に後座候。海外の靜なるやうすに御座候

とある。海外の靜穩とは鴉片の亂後の小康をいひ、弘化年中にかゝるか。他の一通も年は書いてない。七月十四日である。

(フランス)異國評判通相違無御座候。しかし御武備におそれ早々歸り候はこゝちよく覺候

とあるは弘化三年六月長崎に入港した三隻の佛船を指したので、其評判が中外經緯傳の著者の處へも聞えて居たものと見える。同じ書狀中次の一節が一番面白く、長崎の匂ひを放つ。

(昨年)本國船(紅毛)の大將遊女の爲に髭剃無相違候副將よりよほどやかましく

いはれ能由是より長崎にて女につろき者を丸山と申候扱彼潮の夜の一曲（節曲ナルベシ）拵なりし由のぞき見いたし候もあの蘭陀北承申候

但し句括弧中の文句も原註の儘である。蘭の翁は粋人だつたと見える、

長崎の鳥は時知らぬとて夜中にうたうたうて／＼君を戻す　（松の葉）

（明治四十五年正月）

南蠻酒に醉ひて（十一）

木枚本には、亭主が長火鉢に倚つて鐵形を五徳の上に載せて、これから箸で鴨の肉を入れようとしてゐる挿繪があつて、

鴨の鐵燒するを

手料理の鴨と職にはひきかへてつけ燒刃

亭は聞かぬ女房　　三馬

といふ狂歌の讃をしてある。これは實に意外である。文化九年といへば、料理談合集より少し後だから、江戸での例としては、既載の分の裏書きになるくらゐなものだが、スキヤキではなくて、クハヤキといふ名であるのが一段と面白い。料理談合集のことは、大阪の高安六郎博士の厚意によつて私が委細知ることが出來たのであるが、博士は更にその本を合刻せる料理早指南大全と題する四編合綴の一冊本を私に贈つて下すつた。その第四編が即ち談合集であつて文化元年十月の凡例があり醍醐陳人の記する所である。

その二は東京の龜井文學士が其傳聞せる所を私に報道された鋤燒の話である。それは、宮内省の鴨獵のときの料理に、四角形の鋼鐵板を火の上にのせて、その上で鴨の肉を燒き生醤油でたべる、その味は無類の美まさだとのことを人から聞かれたさうである。料理談合集や古今百馬鹿に見える文化年間の遺風が今なほ高貴なあたりの御獵の食事に殘つてゐるのは面白い。關東の方にも、昔からさまで下品な調味とも見えないのは或はこの食方が土地の下民から起つたのではなくて、他地方から傳來したがためではないかと思はれる。

この外、海賊の話に横槍を入れられた神崎氏、眞宗と切支丹との關係について一二の補遺を與へられた姉崎博士があるが、一々引用文は敷演するに煩に堪へないから大略にしておくが、私は以上先進諸賢や新舊既知未知の方たちに對して深く感謝し、殊に誤字、誤植を指摘して下すつた二三の方々にはかへす／＼お禮を申述べる次第である。私は進んで遵主聖範のことについても書きたいのであるが、からいふ標題の下で、而も專ら飲食のことを話題に上せた後などに於て、聖範のことを一つなみに取扱ふのは何だか濟まない樣な氣がして來たから、ここで擱筆する。たゞ私をして聖範のことを書かしめようとするに至つた渡邊氏手塚氏木村氏の御懇切に對しては茲に敬んで御挨拶を申しておかねばならぬ。いづれ稿を更めて微志を果したいと思つて居るのである。私信に對して貴名をあらはしたことをお詫びするのであるが、南蠻酒の醉ひごこち醒めやらぬ筆のすさびと御寛恕を乞ふ次第である。

阿蘭陀正月

日本人が鎖國中太陽曆で新年を祝つたのは、明かに年次の知れてゐる所では、大槻玄澤が寛政六年の暮、即ち西暦一千七百九十四年の新正に同學同好の士を招いて宴を張り、所謂阿蘭陀正月を壽いだのが最初であらう。此の時の模樣は新元會圖とて今も大槻家に大きな畫幅となつて殘つて居る。斯かる新例も畢竟長崎から傳はつたもので、彼の玄澤が同友桂川甫周の弟に當る森島中良は、紅毛雜話に「冬至より十一日にあたる日を以て、彼國の正月とす、これをヤニユワレーといふ、長崎出島に旅宿の蠻人、譯官をまねきて酒筵をまふく、ことに華麗をつくすとなり」と述べ、其折の獻立は長崎土產などにも出てある通りで、今の少し念の入つた西洋料理のメニユー程のものだ。箸を用ゐないでナイフやフォークや匙子で取つて喫ひ、白金巾を膝の上に蔽ひ、一菜を食し了れば器皿を易へるといふことが、左も珍しげに敍してある。玄澤が天明初年、崎陽遊學の際に食した紅毛の卓袱料理の獻立も、森島の雜話に載つて居るので、寛政甲寅の新元會の有樣も略想像される。

紅毛雜話には尙も玄澤の言を引いて、阿蘭陀正月に出島の蘭人が棕梠繩に裁を卷きたる物を以てカピタンを初め銘々をうちて回る習慣のあると云ふことを述べて、吾邦の卯杖の類であらうとの推察を下してある。和蘭の此の習慣は今日獨逸邊で除夜にシルヴェステルの晩と名づけて街頭に所嫌はず人を打歩くことがある彼の行事と似てゐたが、大方古代ゲルマニヤ種族の習はしの名殘であらう。正月上の卯の日に桃梅椿柳などにて杖を作り五色の絲で卷いて宮中に獻上し、之を以て魑魅を逐ふ用に供したと云ふ卯杖の式や、長崎邊で正月十四五日にむぐら打とて町の男兒共が竹の先に稻藁を結附けて家々の前の履石を打つて歩く習慣だの、同じ地方に矢張り正月十四日に尻たゝきとて新婦の尻を打つ習慣だのと同じく祝儀であつて、人の咎めないことに成つて居る。斯くの如き紅毛の殊俗も二百有餘年の間之を長崎以外に傳へた者は極めて僅であつて、惜しい哉、風土物產の誌を初め紀行の類にも時に纔に之を略敍するに止まつた。

文人詩客の崎陽に遊ぶ者は多く冬春よりも秋季を選んだかと見える。即ち此の季節に紅毛船の出入があつて、鎖國時代唯一の開港場が最も賑ひ、最も異彩を放つ。然し中には太田南畝の如く公務を帶びて一年間も滯留し唐蘭兩國の通交に關して微細な觀察を試み學藝及び風俗に就いての見聞を綿密に記述した徒もある。南畝の記載した阿蘭陀屋敷冬至の祝とは、「殊に祝ふ事にて一年に一度の大事に奔走する事なり」とあるから耶蘇降誕祭であつたらうが、宴會の珍膳の外、何も敍して無いのは物足らぬ。蜀山が唐館に支那の演戲や傚戲を見物したのは二月二三日の事で、出島で文政三年に興行した阿蘭陀俄芝居は九月二十四日とある。延寶の長崎土產に數へ擧げた如く、聞て好き物に石火矢の音ともあれば、六、七月の交紅毛船の入津と成ると、長崎は頓に賑ひ、商賈人は更なり、醫術本草蘭學を修むる輩より、衣裳に關白周倉を縫物にしたる丸山の遊女に至るまで活氣を呈するは謂ふ迄もない事、遠西の學者も黑奴も又は食火鳥や駱駝も此の出島に渡來

して蠻國人の耳目を驚かす。

　文化の初に南畝が來てから、文政の元年に山陽、同六年に星巖が來遊して、共に瓊浦の風物を吟詠して、一は其西遊稿に、他は其西征集に能く斷腸の特色を傳へた。兩詩人の客遊は七夕と中秋とを挾んで恰も紅毛入津の期節に際したが、賴氏の荷蘭船行の如き作に對する梁氏の詩は見られなかつた。此の七夕柳賀池館の詠は、彼の七星春歌に對すべく、山陽が中秋の名吟は星巖の十五夜泛舟於瓊浦賞月の佳什に比せられる。一の長崎謠十解と他の瓊浦雜詠二十九首と各優劣はあるが、前者の、

入港西洋賈客船、
譙樓信砲數聲傳、
兩藩戍卒森旗戟、
萬炬如星夜不眠。
洋船互大黠琉璃、
未一歎聞到大磯、
館外批[illegible]貿安穩、
舳艫迭故佛郎機。

は、後者の、

報道諸神進岬來、
萬[illegible]結曳最遲遲、
無端[illegible]等雲帆、
賺殺嬌娃望幾回、

と共に蘭船の入港を諷詠したものである。女校書袖笑に對しては、山陽には戲に代つて情人江辛夷を憶ふ詩あり、星巖にも彼女に贈つて江芸閣の代答を得た詩がある。巖の鄭成功詩七絕句は遂に陽の佛郎王歌の題材の奇拔なのに及ばないが、前者の毘合那詞、月琴篇の如き竹枝は後者の作に求め得られまい。入崎の際の詩に巖の落日鑼聲亞蘭館、迴風旗影浙江船、山の官樓蠻館家萬戶、高低山色海光間の相對比すべきものあるは故に擧ぐる迄もないか。

　山陽が長崎を發して海路肥後に赴かうとする路で大風浪に遇つて船の覆らうとした危難を賦して五言の長篇を作つた。恰も詩人が雲耶山耶の名吟を得る頃の事であつた。此は文政の初年九月の話であるが、文政十一年の八月にも同じ洋中に於て同樣な憂目を見た學者がある。それは國學者として名高い中島廣足で、矢張り長崎から熊本への渡航の途中であつた。同じ暴風雨でシーボルトが歸航の蘭船も危難に瀕して遂に彼の有名な疑獄事件を出來させた。廣足は此際一身は幸ひに樺島に免れ得たが、書稿の類は悉く藻屑と爲し終つたのである。此事は自ら樺島風浪記と題して流麗なる和文に敍し、傍らシーボルトの難に及んでは、紅毛舶を引回さしめた此浪風を蒙古船を吹戻つた神風に比した。斯くの如く歲を隔てゝ山陽と同じ水難に遭うた橿園は、歌人として瓊浦に關する若干の長歌を詠んで能く此地方の色彩を發揮し、一部の橿園長歌集をして玉の浦の異光を放たしめて居る。第一に山陽の荷蘭船行に對して、詠紅毛舶入貢歌といふ萬葉ぶりの非常に長い長歌があり、冗漫單調の嫌ひはあるが、入津の景趣を精緻に描いた。次に南國の珍禽を詠じて詠食火鳥歌があり、支那の事物に關しては唐船をよめる歌と觀淸人戲場作歌とを以て崎陽の趣味を傳へた。此觀劇の長歌と蘭船入津の長歌とは、圖を附けて單行本としても出た樣子であるが、或は未刊とも云ふ。此等の長歌は、南畝の筋書や山陽の詩と併せて茲に記載すると面白いと思ふが餘り冗長に渉るから略する。

　山陽に接踵した星巖があつた樣に、廣足には青木永章といふ長崎の歌人が親友であつた。諏訪神社の大宮司で、下園集といふ歌集がある。其の長歌集上下二卷を見ると、頗る詠史の歌に富み、廣足と同題の作も若干ある。別に

詠蠻舶入貢詠といふ頗る長篇の作もあるが玉園の歌、或は福園の歌を凌駕して居る。集中で同吟の長歌には詠食火鳥歌を數へ擧げるに止めようが、玉園の長歌に異彩を放つて居るのは、紅毛女歌の一篇たること疑ひ無からうと思ふ。詞に、文政十二年七月紅毛商舶白藏女子來とあるが如く、別離の情禁じ難くして萬里の船路を遙々夫を慕うて渡來した妻が、國法如何ともすべからず、上陸するを許されぬので、獨り船中に在つて夫を待暮らす情を抒べたのが此の長歌である。南畝が瓊浦雜綴に阿蘭陀の役人アゲイイゲスといふ者、其の妻の像を刻して蔭臘を据ゑて心を慰み、又愛別離苦の情を露はした文句を擧げてあるが、之と正に好一對を成すもの、恨むらくは當代の抒情詩人が陳腐の想を棄て常套の句を脫して此の好題目を詠ずるに清新の趣を寓しなかつたのである。右二件の間にも、文化十四年七月新甲比丹ブロムホフも其の妻子乳母家婢を携へて來任したが、國法に沮まれて妻子を還した事があるが、鎖國の嚴法は獨り日本人の間に所謂ジヤガタラ文といふ文學的書簡を産出させたには止まらない。

斯る情趣の、詩人歌人の心を動かし行旅の客の意を惹くも、蘭船泊する間に多く、而も其の時日は甚だ短くて、彼の延寶の評判記にも、早き物の品々に阿蘭陀船の歸帆とあるが如くである。毎年阿蘭陀の白帆隱れ（石楠堂隨筆）と呼びて、七十里ほどの沖合に帆の隱れるのを見屆けた後は、紅白旗飜百尺竿、崑崙奴僕役和蘭、鋪氈日勸茴香酒、歩屧閑過花藥欄（巴人集拾遺）の趣あるばかり。館裡の油畫物寂びて、硝子鏡に映る四季を象つた裸體婦人の彫刻肌寒う、新渡の珈琲に南國の高き香を嗅ぐ中に冬至祭と呼ばるゝ聖誕祭ともなつて、間もなく明けると、和蘭正月の御祝儀とて卯杖ならぬ棕梠繩で銘々打興ずるも、回顧すれば面白いと云へよう。

（明治四十五年正月三日、「大阪朝日」）

南蠻に關する俚謠その他（一）

（一）先年文藝委員會で編んだ俚謠集に載せてある盆踊歌のうちには佳品が少くない。志摩のさゝら節といふのにこんなのがある　三百餘年まへの情趣がたゞよふ。

われは十七、
わかい身なれど、旅も都もまだ見ず、
おやのかんどは、なほつても、
その身は、みやこまゐりは、せうずもの。
まづ一番に、奈良へまゐりて、
奈良の春日の、祭を見れば、
お馬揃ひに、よろひ道具に、
まづはすゝどい祭の、
奈良を出てから、堺つきそよ、
堺港にかゝるお船は、
いゝいゝなんば船とはあれェかの。
堺出てから、やがて程なく、
住吉のお宮にまゐりて
石の鳥居とは、こオれかの。
あとで親御が、なげきなすやら、
なんぼ今夜の、お夢に見えそよ、
いざやもどろや、ともだち。

和蘭勸酒歌

私は敢て酒を飲まぬのでもなく、さりとて飲むといふ方でもない。メリケンの國に生れぬ仕合せに、氣がすゝみさへすれば五杯や十杯くらゐはうまく飲めるといふ程度にすぎない。多く飲む人、飲んで亂れる人、共に愚だと思ふが、酒氣でない限り少量もやらない人は話せない。イン・ヴィノー・ヴェリタス、酒中に眞理あり、などや、若いうちには、こんな文句を並べて酒中の趣を味つたこともあつた。私はまた萬葉集卷三にある大伴旅人卿の讃酒歌十三首を愛誦して、酒を讃美したこともあつたが、まさか卿の如く酒壺になつて酒に染みなむといふ程に酒に浸たらうとも思はなかつたし、[illegible]來世には蟲や鳥になつてもいゝから樂しく飲みたくらさうとも考へない。むろん私はそんなエピキュレアンではないけれども、七賢人たちも酒を欲したにすぎないと歌つて賢人にあやからうとした歌人と共に、

酒の名を聖と負せし古への大き聖の言のよろしさ

と人口に膾炙したあの名歌によつて、支那の故事に白酒を賢人、清酒を聖人と見立てたのにはほゞ同感だ。白酒を賢人とは少々恐れ入るが、日本のうまい酒になると、確に聖人としてもいい。フランスの古葡萄酒もいゝ。シャンパンもありがたい。杯を擧げてイン・ヴィノー・ヴェリタスと、今でも讃美したくなることは春宵秋夕たりくある。陶淵明が作つたところの止酒歌の一首で、日々之を止めんと欲す、營衛止で理まらず、とも云ひ、その飲酒二十首などを誦しても、飲酒と禁酒についてはかなり執着と煩悶の跡が見える。そこに私は同感される。

「酒中に眞理」面白い言だ。宋に酒經、酒譜のといふ文があるが、其酒經を作つた蘇東坡の東坡志林や酒譜に、僧侶が酒の[illegible]を般若湯といつたとあるが、日本でも般若湯は中世近古このかた[illegible]家で適用されてゐる。この[illegible]は決して[illegible]家に限らないで、出所は[illegible]宋ではないかと思ふ。中世[illegible]文[illegible]を見ると、卷上に酒[illegible]名[illegible]、また卷上に酒に[illegible]といひ又竹葉といひ、[illegible]して、記述することがあるが、般若湯といふことは見えてゐない。近世の[illegible]に出所と[illegible]して、僧家に般若湯と[illegible]して專ら之を用ゐるは何事ぞといつて長々しく漢文で述べ立ててゐるこ[illegible]なほ中世[illegible]僧の詩文集などにも見えたやうに思ふが、今おぼえない、又調べる暇も有たない。出典はさておき、般若は梵語のプラジュニヤで智慧の[illegible]の意味になる。六朝あたりで酒を聖賢に見たてたのに比して、智慧の湯とはうまい名だ。日本の學者がそれを解釋して「是は般若の智慧をもてよく煩惱のまどひをやぶるといふ意とかや」といつた。面白い解釋である。西洋の諺の「酒中の眞理」これも愉快な表現だ。然し般若湯、智慧の湯、この方が更にうまい表現だ。實際一杯やるとうまい智慧が出ることが多いから。

酒の詩といふやうなもの、酒文學ともいふべきものは、古今東西[illegible]程多いが、こゝに[illegible]四[illegible]として、[illegible]いた一篇があるから、これ[illegible]に紹介しておきたい。それは[illegible]に現存する[illegible]すると、ほん

の二三葉にすぎない所の一册子である。延享二年春三月十一日青木敦書とあつて、「このごろ阿蘭陀人に聞く所の阿蘭陀勸酒歌譯の歌四曲を記し一小册となして和蘭勸酒歌譯と名づく」と題してある。青木文藏上ると別記してあり、書名の條下にヲランクワンシュカヤクと、和蘭流の羅馬字綴りが書添へてある。

延享二年にはまだ八代將軍吉宗が在職中であつた。有德公は當年六十二歲、その年の九月二十五日に隱居して以來大御所と稱せられて六年の後なる寶曆元年六月に薨去した。されば此の延享二年は公の在職中の最後の年であつた。蘭學開始の年といはれる寬保元年よりは四年後であり、禁書の一部解除の享保五年よりは二十五年後であつた。西曆にすると一七四五年にあたる。この年昆陽先生は四十八歲。

さて吉宗公在職最後の延享二年には、恆例の如く三月一日に蘭人の謁見があり、貢物には猩々緋や大羅紗や海黃の更紗のといふお定まりの染織物を主とし、外に酒二壺があつた。將軍への暇乞ひが六日とある。酒はチンタ葡萄酒かアラキ燒酎のたぐひであつたらう。青木昆陽が蘭人に會見して蘭語を學んだりしたのは、遲くも寬保二年春を初めとし、本年まで四年つゞいてゐる。前年の延享元年には和蘭文字略考三卷の業績が出來た程である。その延享二年の三月一日乃至六日さてはそれらの前後若干月のうちに、彼は蘭人や通詞に就いて和蘭勸酒歌を譯出したのであつた。甲比丹はヤコップ・ハンデル・ワァイであつた。野呂元丈の阿蘭陀本草和解の識語によれば當年隨行の和蘭外科醫はムスクルス、大通事は末永德左衞門、小通事は楢林重右衞門であつた。昆陽先生に和蘭勸酒歌の義譯を助けた人々はこれらの内外人であつた。

その歌は原題には單にドリンクリード即ち飮酒歌となつてゐる。第一曲以下原文はこゝに略して大意譯を左に錄する。

第一曲

これは酌する人酒をつぎ盃のふちまで酒をつぎ勢よく飮し酒の色のみごとなるかなと云ふことなり。

第二曲

これは盃のまはるによりて其元へ盃をさすと云ひて手取詞を用ゐて戲るゝなり。

第三曲

これは盃を脣へつけて盃の底までのこらず飮みたれば喉をあけて見よ酒が喉へ入りたると云ふことなり。

第四曲

これは酒を飮みをはり盃をさかさまにして見せて私はまだ酒が飮みたきと云ふことなり。

以上の四章は要するに酒間の小歌のたぐひ、日本の近古近世にもありさうな單純な歌曲にすぎない。能狂言で狂言師がよくあゝいふ小歌をうたふ。それをも思ひ起さしめる。この種の譯詩、といふよりは西詩の義譯といつた方がむしろ當つてゐようが、この種のものは遡つては元祿時代、下つては安永天明年代や、寬政文化時代、間散見してゐるけれども、今こゝには一々摘出しないことにする。

昆陽はこれより先き薩摩芋で名を揚げたことは人の知る所で、蕃薯先生と號したことも亦既に御承知の事柄である。それは延享二年よりは十年ほど以前にあるが、その蕃薯先生、兩刀使ひであつたと見えて、この和蘭勸酒歌譯の附錄に、和蘭本草に依つて薩摩芋の西説を略抄し、ジャガタラ芋のことにも及んでゐるのは頗る興味がある。昆陽先生のえらい所は、(いづれも簡單な解説だけにとゞまるけれども)第一

に和蘭貨幣考を譯し、次に和蘭文字略考に及び、それから第三にこの勸酒說を譯し、翌年には和蘭櫻木一角說といつて櫻樹やウニコルヌの事を譯した。貨幣から酒、酒から芋、芋から櫻、それから藥品たるウニコルヌ。先生なかなか隅におけない。酒も團子も花も金もすべてを取扱つてござる。先生實は經濟學者で、蘭學を開始したのもそのためであつた。八代將軍は有名な殖產興業の熱心家であつたが、その下に昆陽が出たのは尤も千萬だ。その昆陽は一方に幕府の書物奉行でもあり古文書の採訪者でもあつた。評定所の儒者でもあつて、一方には舊師の伊藤東涯が考訂した論語集解の出版をしたやうな事蹟もあつた。單純な學者ではなかつたのである。

これはしまつた、酒の禮讃から轉じて昆陽の傳記になつてしまつた。私は唯この先生が、堀川の流れを汲んだ古義學者であり、經濟學者でもあり、且つ本草學や古文書學、考古學の上に相當の貢獻をしたと共に、蘭學を開始した所の大功をのこした大學者でありながら、この和蘭勸酒歌四曲、一篇を譯しておいてくれた風流韻事を忘れがたいのである。

南蠻に關する俚謠その他（二）

處々通じにくい文句がある。三行目の「親の勘當はなほつても」は、むしろ「かぼつても」で、被るといふ意ではないか。「住吉のお寺」とあつたが、もとはお宮とあるべきだと思つて今書き改めた。十六七の青春の者が、田舍すまひに倦んで、友だちと誘ひあはせて、奈良から堺住吉とうかれ遊んで、行樂極まつた後、一旦は親の勘當を覺悟して家出はしたものの、さすがに故鄉を懷ひ、「なんぼ今夜のお夢に見えそよ、いざやもどろや、ともだち」と、あどけない結語に、無限の餘韻がこもる。こゝの「見えそよ」のそよは、前にある「堺つきそよ」のそよと同じく、「候よ」の頽化であつて足利時代の俗語に普通な形である。堺の港にかゝる南蠻船を見て、「あれエかの」といふ驚嘆も一句簡古である。

この謠の內容を、享樂的方面からみても、道學的方面から見ても、含蓄のある作であると思ふ。異國情趣からも面白い歌たるを失はない。

○序でに、伊勢の飯南郡の子をどり歌といふのに、長崎の唐船を詠んだのがあるから、それを併せ記さう。

長崎浦へ出で見れば、
からから舟が三艘來た。
さきなる舟には何つんだ、
い、い、
きんらんまきもの積んで來た、
めしてたもりやれ、若い衆だち、
處繁昌となる程に。
中なる舟には何つんだ、
い、い、
きぐすりなんぞをつんできた。
めしてたもりやれ、若い衆たち、
ところはんじよとなる程に。
後なる舟に何をつんだ、
い、い、
小間物なんぞをつんで來た、
めしてたもりやれ、若い衆だち、
處はんじよとなるほどに。

形式は、お船歌などによく見える對句をつかひ、平單な調子であるが、二百餘年間の長崎に於ける支那貿易の縮圖として棄て難いところがある。

ちやるめら

滅びたものはなつかしい。廢れたものには情がひかれる。昔、西洋から傳はつた樂器のうちにチャルメラといふ喇叭のやうな吹管樂器がある。今でも片田舍などには聞かれるであらうが、都會でもつい近頃まではよく飴屋などが吹いては頑是ない子供らを寄せあつめて居た。江戸時代には唐人笛とも唱へ、時にはラッパと同じに見做されたこともあつたが、どこか田舍びたやうな、いくらか異國の感じを起させるやうな、物がなしさうで又悠長な響きをもつてゐた。幕末のころは輕業師なども使つてゐたといふ。無論最初傳はつた本場は長崎あたりであつたに違ひない。

長崎では九州の他の地方と同じくこれをチャンメラと發音して、チャンメラ吹きと稱する職業もあつて、毎年正月中には、この樂器と共に銅鑼や片張の太鼓をたゝいて市中の家々を歩きまはつたといふ話である。なほ長崎歲時記によると、チャンメラを吹きあるくものは、無刀で古袴を着てゐたので、役懸りの者で袴の古ぼけたやつを穿いてゐるのを、殊にチャンメラ吹きとあだ名したものだとある。これは今から百二三十年前にあたる寛政年代の風俗である。その外、長崎では唐人の葬式のとき、葬列でこれを奏したものだ、今でも支那ではさうだと聞いてをる。

支那では明末以來この樂器の名が文獻に出てゐる、萬曆以後の諸書などに見えてゐるが、或は正德嘉靖の時代に、葡萄牙の船舶から南方の港などに傳はつて廣がつたのではないかとも思ふ。嗩吶とも鎖吶とも其他色々に文字をあてゝゐる。辭源には、もと回族の用ゐたもので、原名を蘇爾奈といふと出てゐるが、或はさうかも知れぬ。三才圖會によると、本何の代に起るかを知らず、軍中の樂であつたが、今は民間に多く用ゐると記してあるから、萬曆以前久しい傳來であるとすると、南蠻傳來說は間違ひとなるわけである。かういふ考證は他日別にすることとして、とにかくこの鎖吶は、軍中の樂器としてなり、民間の樂器としてなり、近世支那に用ゐられ、やがて日本にも傳來したのであるが、この漢字で書き傳へられたものでは、羅山文集に出てゐるのが最も古い。

羅山が慶長十五年長崎の港内で起つた有馬氏の媽港船擊沈事件を敍した文章に長崎道事といふ記事があるが、その時鼓譟の中に、嗩吶や喇叭などを奏して大騷動をしたといふ。但しその文字を誤つて、口偏に質の字としてシットッと振假名をつけてある位であるから、よしや後年の板本の誤りであるとしても、慶長年代にはまだ珍しい樂器であつたに違ひない。これは軍樂器としてゞあるが、徳川時代を通じて江戸城に參見に來た琉球使節が、城中で演奏した歌舞にもそれが幾度用ゐられた。また朝鮮使が幕府に參賀に來たときにも亦途中に之を吹奏した。朝鮮ではこれを太平簫と稱へた。いかにもその響きに泰平の趣が味へもしたらうが、朝鮮では李朝の初めに西北地方からこれを軍樂として傳へたといふから、支那に於けると同じく南蠻傳來でなくて北狄西戎系統といふ考を強める一資料になるかも知れない。

物と名とは往々くひちがふことがある。されば チャンメラといふ名に、たしかに葡萄牙語の轉訛であるが、後世支那から傳はつた同種異系

の哨吶を、此のチャルメラといふ名で呼んだといふのも怪しむに足らぬ。村上直次郎氏は哨吶のサナは、チャラの音を寫したものと考へられた。當時ラ行とナ行との混同は、南支那乃至南洋諸島等によく起つた轉音例でもあり、チャの音をサであらはすこと、又はシャ音サ音に訛ることもあるから、この音譯は不可能ではないが、未だ全然肯定しては早計であらう。

葡萄牙語では、この樂器をチャラメラといふ。印度西邊の某方言では、訛つてチェルメルといひ、南洋の島々でチャラメレといつてゐる處がある。いづれも葡萄牙語から出てゐるのだ。

從つて日本のチャルメラ乃至チャンメラといふ品の存在してゐることは、最初この樂器が、いかなる種類の樂器であつたにしても、葡萄牙から傳はつたといふことを證明してゐるわけであるが、江戸時代に行はれたこの樂器が、どの場合のでも、すべて葡萄牙傳統のものだと極めてしまふのは間違ひであつて、大部分は支那系統のものだと見ねばなるまいと思ふ。唯その支那に於て何時何處から傳へたものか遠い〳〵起源に遡つていくと、どこかで南方系統のと關合する所がありはせぬかといふ問題が殘るだけである。

支那に居る西洋人はこれを支那のクラリネットと呼んで居る。いかにも相當な對比である。古く日本ではラッパとも混同したことがあるが、まづ喇叭の一種と呼んでもゆるされるであらう。葡萄牙のチャラメラは佛語のシャリュモー、英語のシャルムまたショーム、獨語のシャルマイに當るので、語源は拉甸語のカラムスにまで溯るので、單に管といふ意味であつた。中世期まで普く用ゐられたが、段々進歩して遂にオボエにまで發達してしまつた。これらの吹管樂器の沿革については、專門家を煩はすより外はないが、古いところのものは東洋のチャルメル、或は哨吶と構成が似てゐる。よく古畫には見かける圖であるが、一寸その恰好が同じ樣に見える。遙か昔に溯つてゆくと、牧羊神パアンが吹く笛にまで達するので、近世のオボエ式、またシャルマイ系の吹管に進まずに、らぶな姿、をさない時代の名殘をとどめたまゝの牧笛風のものに、後代まであちこちに傳はり、時勢おくれの濁韻をひびかせてをる。パアンの笛の調べは、上田柳村の名譯であつた牧羊神の長詩にも見えて、人の知る所であるが、その題名の詩集のうちに、別にうたつてあるのを思出して、すたれた唐人笛の古調をしのばせた一節がある。

　薄日のかげも衰へて、
　風冷やかに雲低き
　鈍色空のゆふまぐれ、
　はつれの辻のかたすみに、
　ちやるめらの聲吹きおこる。

といふ句で誘ひ出した悲哀の曲の搖曳に

　みそらかけりて、あの山越えて、
　越えてゆかまし夢の里、
　よしや、わざくれ、身はうつし世の
　塵にまぎるゝとがめびと、
　有爲の奧山、路遠し。

かくて夕暮となつて飴屋の聲にそゞろいだ子供心もおのづからチャラメラの末の曲に涙をさそはれるといふ一ふしで終つてゐる。これにつけても想ひ起されるのは、ルッソーが十二三歳のころ好きなをばさんから聞いた俚謠の一節「樫の木のしたでおまへのシャリュモーを聞くのはいやよ」とあるのを、年老いたのち、おぼつかない記憶のまゝに懺悔錄にかきとどめてゐることである。

西鶴は好色一代男の首めの方に、京都六角堂の門前の景を叙して、「此所は洛中のお乳の人の集り遊ぶ所なり、鏡太鼓唐人笛の響を竹馬の

鈴の音もの騷がしき中」と、ざわつく大都の一區域の地方色を出す處にこれをあしらつてをる。祇園町の十替り踊りの光景にも、「喇叭ちやるめら萬の物の音」とやかましい刺戟的な騷音のやうに聞かせてをる。巣林子は國姓爺合戰のうちで、千里が竹の戰陣に、「怪しや數萬の人聲攻鼓攻太鼓喇叭ちやるめら高音を反しひやうひやうとこそ聞えけれ」と軍樂に使つてゐる。

こんな騷々しい形容では、しんみりとした氣分は浮ばぬが、この樂器の形に因つて名づけられたチャルメル草といふ草花のあることを附記して昔を偲ぶよすがとしたい。享保十八年に江戸の或る園藝家が出版した地錦抄附錄に「チャルメル草、花形五葩に切りさきてしやぐまの如く唐子のかぶり物に似てかきいろ、三月上旬咲く、落花の後、實の形また五葩の花の如くほそ長く唐人笛に似て花實ともに異形なり、葉は地に敷きてしげり、表は海松茶にて裏はむらさき色なり、秋は紅葉する、冬もかれず不斷ながめあり」と見えてゐる。このチャルメル草は「虎耳草」と書けばおそろしいが、「雪の下」といへば氣持のよいあの草花の一種である。地錦抄にはかはゆらしい圖があるがこゝには割愛する。

（大正十一年七月）

南蠻に關する俚謠その他（三）

○筑前韓泊の水主で孫太郎といふ若者が、明和の初年にボルネオに漂流して、歸つて來て南國の奇聞を語り、それを錄して考證を加へた南海紀聞といふのがある。藩の儒者青木定遠の著述である。孫太郎は島の南の港町バンジャルマッシンで聞いた黑坊の俗謠をおぼえて來て、その三首が卷末に書きとめられた。馬來系のボルネオ語の原歌は、こゝには引かぬが、編者定遠は、その一首を漢譯して、白鳥飛未過、少年白晳且歸支那、として、その義を釋して、崑崙奴之女、悅支那年少顏色白晳、惜其歸也と云つた。單純なもので、歌として取り立てるほどのものではないし、又實際やかましい銅鑼太鼓ではやし立てられながら蠻聲で謠はれたら堪へられたものではあるまいが、紀聞のうちに、

鸚哥。種類甚多し、紅白綠或は五色を備へしあり、孫太郎薪樵に行きしとき、山野にて每々見たり、三々五々聯翩として花樹の際に飛集す、奇觀云ばかりなし、バンジャルマッシンにも籠鳥にして愛玩す、甘蔗砂糖水にて飼ふとぞ。

孔雀。バンジャルマッシンにて各家これを畜ふ、早天より飛去り日中は虛空に翺翔す、仰いで是を望むに燕の大きさにも見ゆ、薄暮には家々のねぐらに歸り宿すとなん、云々。

とあるくだりなどを、連想しつゝ、あんな歌でも之を誦んでみると、黑女の戀も恰好な題材であることとおもへる。まして德川時代の氣分で味へば、別趣の感が湧き出でる。あの港町は、明朝のころより支那との貿易地で、海商の去來もあつた處で、東西洋考などにも文郎馬神の文字をあててある。從つて、この白鳥飛未過の小歌も、例の「松の葉」中の長崎の鷄はの一節を想起さしめるのである。

○このごろ琉球へ遊び、八重山宮古のはてへも渡つて臺灣を經て歸つて來た遊子から、「ひるぎの一葉」といふ小册子を得た。八重山の石垣島に二十年間も測候のことを勤めてをられる岩崎卓爾君の著で、八重山の童謠と民謠との集が附いてゐる。

更紗散錄

五年まへ本誌に更紗名義考をかいたことがあつた。五年の今復び更紗の話をすることを容されたい。私はあの後ずゐぶんサラサの語原についてはひとりで苦心もし、人の異說をも聞いたものだが、まだ徹底もせず完成もしない。故人森鷗外さんに、私と殆ど同時にサラサの語原研究の大略を發表されたが、結局不明であるとした。今も依然スラタといふ印度西海岸の港町の名から出たといふ舊說になづんでゐる人もないではないか、西班牙語だとして一とほりの所で滿足してゐる學者もある。その西班牙語も元來は亞剌比亞語から出たのだと追究する人もあるが、その考證は十分だとは云へない。私は和蘭の學者の考察によつて、サラサは爪哇のことばから出たといふ說を採つたが、傳來したのは葡萄牙語を介してのことであらうと思つてゐる。歐洲につたはつたのも、やはり葡萄牙語より西班牙語へと及んだ徑路を經てのことであらうと推定してゐる。

古くはマースデン、近くはキルキンソンの如き英國の馬來語學者は、馬來語にもあるサラサを波斯語としてゐる。考證は出てゐない。同じく英國の學者たるバーネルは、和蘭航海者リンスホーテンの東印度紀行の註に於てサラサを近世印度語たるヒンドスタン方言で解釋しようと試みた。原義は「優れたる」（英語のスューペリヨル）の意味だとしたが、別に考證もない。古賀十二郎氏の長崎方言集覽（長崎市史風俗篇）はこれに依つてをる。和蘭の有名な言語學者であつた故ケルン教授は、リンスホーテン航海記に註して、サラサは古爪哇語で「まんべんなく撒布したる」といふ意味で、モザイク模樣のバチック染をいふのだとなし、馬來語でセラサといふが、語根はササ（撒布）で撒布又撒布とくりかへす意味で強まつてサラサとなるのだと語根の上から說明した。私が先年引證した葡萄牙の言語學者ダルガード教授の淺薄な說よりは遙に進んでをり、バーネルの印度語原說よりも立優つてゐる。和蘭の更紗研究家ルーファールもこれに從つてゐる。一たい馬來語や爪哇語のうちにも印度の古語がまじり、又馬來語や印度語のうちにもサラサに似た語がみえるにはみえるが、今日のところ先づ私はケルン教授の爪哇語原說を採る。但し日本語に入つたのは、葡萄牙語からであらうことは前述のとほりである。文獻上では十七世紀のはじめ慶長のするからサラサの語が存することも亦以前に說いておいた所である。

更紗がその語を爪哇に發したにせよ、その技術をも同じく爪哇に發したとなしてはならない。印度や支那の古文獻の證明するとほり、それらの國々にあつては、蠟染法の源流は古いことである。支那から傳はつた奈良朝平安朝の蠟纈法、また今日苗族に見るところのそれなどは人の知れるところである。

牧野英一さんが爪哇更紗をうたつた歌が九首その旅日記に出てゐる。私はその二三首をこゝに錄して讀者と共に愛誦したい。

戀唄をうたひこめつゝ爪哇人が染めなす
といふ爪哇更紗かな

雨すぐる芭蕉の葉かげ少女子がさらさ描
くらしよき唄のきこゆ

人や戀ふる更紗や染むる纖細き唄のうら
みのなかくはるかなる

私は更紗が牧野さんをまつて初めて佳き歌をえたことを喜ぶ。尤も津輕夫人が歌集野の道のうちに、

南洋の更紗の前の青き壺きのふ悲しみ今日笑みて見ゆ

灯ともれば爪哇の更紗の人形かあやしう壺のかげにをどれる

と詠ぜられたことのあるのをも、忘れてはゐない。然しこゝには青き壺が中心になつてゐて折角のワーヤン人形の更紗模樣もかげにされたことは爭はれない。

吉原小歌鹿の子は萬治寛文ころの小歌をあつめたものであるが、そのうちに、

表みじかの更紗の小袖うらみながらも着ておよれ

といふのがある。其角の續五元集にみえる連句のうちに、

神は相撲にこほ／＼と鳴る

いゝいゝしやむろを外へ夜着のたゝみめ

といふのがある。元祿六年の作である。更紗は古くシャムロ染とも呼ばれた。小歌によまれた更紗の小袖に對して、こゝでは更紗の夜着が出てくる。

貞享の男色大鑑の卷五に、「舞臺衣裳も唐木綿に更紗の置形」といふ文句があり、享保の博多小女郎浪枕のうち、傾城の道行の條の排句に、「思案なサラサら云ふではないにラシャもない事」などともあり、又その中の卷には、金ザラサの財布があらはれてくる。寶永の松の落葉の武江の染色盡をみると、

うつぶし色の御所ぞめは皆おもはくの歌の文字ちらし小紋字浮世ぞめシャムロから染いろ／＼の千々の思ひやもゝ色に深き心をそめ入れて、

と、やはり更紗をあしらつてある。寛永以來、延寶から元祿に及んでは俳句にサラサはよくよまれるが、何といつても天明の蕪村が、

片町に更紗染むるや春の風

とよんだのが壓卷である。誰も知る更紗便覽や更紗圖譜が刊行されたる時代である。下つて文政年中になつて和泉利愛がその妻竹子と共に江戸の東龜井戸にあつて更紗をものするわざを能くして西洋の人のにもまさりて麗しく出來たといふ話が蜀山の氣吹舍文集二の卷に見えてゐる。それより前、天明より次の寛政には、やはり江戸で更紗孫右衛門といふ狂歌師、略して更孫とよばれて、その仕へた古主の家の一室を天井や壁また疊の緣まで殘らず更紗ではりつけ、それを更紗の間ととなへたといふ樣な話が天保の百家琦行傳二之卷に出てゐる。江戸の著名な蘭學者どもが天文臺内の譯局で譯出したショメールの厚生新編卷二十七に印華布のことが抄してあるのも、文政元年のことである。

こんな更紗の話はいくらもある。更に他日稿をあらためて書くとしよう。

南蠻に關する俚謠その他（四）

伊波君が先年「古琉球」の名著のなかに紹介して知れた鷲の歌は、記紀古調萬葉の雄篇をも凌ぐかと思はれる壯大なる吟詠であるが、この民謠集には、その歌詞の外に、曲譜をも加へてある。その他、内地の俚謠にも似かよひ、中世の古曲の面影もある作品がちらほら見える。

煙管の語源

其一

藤井紫影翁の狂歌に、「人ごとに一つの嫌ひあるものをわれにはゆるせ揮毫講演」といふ古歌のもぢりがあつて、翁はこれによつて幾分か揮毫と講演とを斷つてゐる。私はそれと逆に、「人ごとに一つの癖はあるものをわれにはゆるせ語源穿鑿」で、原稿をたのまれて窮するとかくこの語源癖を出したがるのである。其角の句に、「一ふぐ汁にまた本草のはなしかな」といふのがある。其角の父東順は醫者だつたから本草綱目だの食物本草だのといふやつを引つぱつてこられて其角も少時からおやぢの長談議に惱まされたに違ひない。閑散餘錄といふ儒者の品評や逸話を集めた隨筆に新井白石の故事來歷を說く癖をあげてゐる。「白石よのつね人を訪ひ又人に訪はれて物語りせらるゝに煙管をとればさてこの煙管といふものは何れの代に誰が初め一瞥したゞけ、國をとればこの國といふものは唐にては何れの時に誰が初めたりといふやうにその物々に從て出處來歷故事までを面白く說話せられたりとなん、博物强記の君子なることと想ひやられたりと見えてゐる。白石は私の崇拜してゐる學者であり、その語源說は私の最も尊重してゐる所であるが、その博覽强記と能文妙說とは固より私の及ぶ所ではないけれども、私にも物事にあたつてその來歷出典名義などを詮索したくなる癖だけは白石と同じく存するのである。キセルの例が白石にも出てゐたが、私もキセルの語源にはかなり苦心した。苦しまぎれに、獨逸語のケッセルが和蘭語のケテルのやうに火皿(雁首)をさすとしたらキセルに似てくるのだがなあと想つてみたり、獨逸語のワイクセルといふ櫻樹の枝がパイプに使はれるからそのワイクセルの上略がキセルになつたと考へるのはやはり言語傳來史上少々困るなあと口惜しがつたりしたことがある。近ごろ大阪で道友土屋元作君に會つたとき、キセルは小亞細亞の地名エスキセルから出たといふ說を人から聞きましたよといはれた。それは初耳だと早速調べてみると、成程小亞細亞の西部にあたつて交通の焦點にエスキシェルといふ人口二萬程の名にある都市があつて、そこには海泡石製のパイプ、いはゞ陶製のキセルが名産になつてゐる。いかにも〳〵と幾度か私はうなづいたが未だ全然腑に落ちたといふわけでもなかつた。然し私の架空な假想說のワイクセルなどに比べると遙に妙案だとこの新說を珍重したのであつた。この都會は古希臘のドリレオンであつて、「土耳古語で古都といふ名の示すが如く、古い由緒の町なのである。エスキが古いといふ意味、シェルが都市の義である。然し他國人には語源どほりには響かないからエスキ・シェルがエス・キシェルとなること、なほ辨慶がなあぎなたの類であつてもかまはない。卽ち略してキシェル製の陶煙管と呼ばれても不思議はないのである。けれども其地に海泡石製のパイプが盛に製造輸出され、東洋へ航海して來た南蠻船のマドロスたちに用ゐられてゐたといふ推定をし得るまでには、そのパイプ工業が十六世紀の末以前に相當繁盛であつたといふことがなければならない。然し小亞細亞の一小都市の工業史をしらべる材料はあいにく手もとにない。次にはポルトガル語かイスパニヤ語にエスキシェ[illegible]製パ

イプの名稱が出てゐるか、アラビヤなりペルシャなりの語にその片語があらはれてゐるかすると、この推考は確かめられるわけであるが、さうは問屋でおろさない。以上の諸國語に通用の名稱がなくとも、航海記や旅行記にでもエスキシエル製パイプが、昨今のいはゆるマドロスパイプのやうに行はれてゐたといふ記事の斷片でもあると面白いのだが、これも未だわからない。但し日本に於て天正慶長時代に用ゐられたキセルが必ずしもエスキシェル製の陶煙管でなくともかまはないけれども、少くとも同地製のパイプが歐亞に廣く知られたのは十七世紀以前でなければならないといふ要件がある。それにしてもエスキシェルは南蠻人の普通名詞ではなかつたやうであるから、それが日本に新外來語としてその物とその名とがほゞ同時に輸入されたと推定するには、或る偶然性といふことを假定しなければならない。即ち假令ば長崎あたりで無智な階級のものが南蠻船のマドロス風情から、パイプをさしてエスキシエル製だぜなどと誇示されたところから、ふと煙管をキシエルといふのかぐらゐに誤傳したやうな偶然性がありえないとはいはれまい。西洋犬をカメと呼んだ逸話なども幕末維新の際には横濱なり神戸なりではあつたゞである開港場のスラングにはかういふ類のものが多く、それが適者生存の理法で、普通語のうちにまぎれこんでいつしか昇格してしまつた外來語がいくらもあるに違ひない。

下手の長談議になつてしまつたが、白石先生にお願ひしたらもつと簡潔平明にやつてのけられるものをとつく〲恥入るが、キセルの語源談として一新説を紹介すると共に聊かその敷演を試みた次第である。私は當年乙丑の夏この狹い私の庭に、ある少年がくれた芭蕉の嫩葉のわづか四五寸ほどのを植ゑつけた。九月十日去來の命日のころには二尺ほどに延びてその廣葉に雨蛙がとまつたりして少し芭蕉らしい氣分がして來た。「芭蕉植ゑて書齋の窓を潤色す」とはそのよき私のよんだ句であつた。そこの書齋で芭蕉翁の年譜を作つたり去來の傳記を調べたりしてゐたが、いつしか風流氣がらせてしまつて「芭蕉」といふ語の語源探索の方に興味がそれていつて、芭蕉語源考とでもいふ方のノートが段々かさだかになつて來たが、翁の年譜や去來の傳記はそつちのけになつた。そこで「バナナ食うて獨り興がる語源論」と翁の年譜に朱筆で書入れをしてその方に一時別れを告げた。バナナは多分アラビヤ語、バセウは或は梵語にまで遡りはしないかと獨り興がつてゐたのであつた。

其二

キセルがカンボヂヤ語だと云ふことを知つたのはつい近頃のことであつた。

私は今年新年號の本誌に「煙管」と題してその語源考をあげて、某氏から傳聞した小亞細亞の一都邑エスキシェルから出たとは考へられないかといふ一案を提示しておいた。エスキシエル市は陶製パイプの名産地としてきこえてゐるのである。又獨逸製に一種の櫻の小枝で出來たパイプがあつてそれをヴァイクセルロール略してヴァイクセルともいふから、それをキセルといふ名に擬したこともあつた。土耳古語や獨逸語では縁が遠し、また陶製や木製としては證據が足らぬし、とても歷史的考證の域には入らぬと觀念しながらも、そのころは未だ適當な語源説を見出し得なかつたから、姑くかゝる臆説をあげておいたのである。

元來キセルの語は林道春の羅山文集卷五十六に侘波古希施隻皆番語也無義釋矣とある以來、多く學者はこれを外國語とみとめてゐる

が、どこの國の語かを指摘しなかつた。元祿における小野千里の本朝食鑑卷四、寶永における向井元端の煙草考の如き、さうである。同時代の槇島昭武の合類大節用集卷七にしても、寺島良安の和漢三才圖會卷九十九にしても、蠻語と註してあるのはかはらない。大槻玄澤の蔫錄には、「名づけて幾世爾といへるは皆此方の言にあらず、又諸書を校ふるに、漢にても和蘭にても波爾杜瓦爾にても、その他の西洋諸國語にてもあらず、然り而してその音頗る番語に近し、因つて竊かに此物を考ふるに、その舶來の初め、吾が土の人、誤つて番商の他物を呼ぶを聞いて、認めて此物と爲せるか、是亦未だ知るべからざるなり」とある。

ひとり蔫錄の後編ともいふべき目ざまし草にはキセルの語原を日本語で說明しようと試みた。慶長時代に行はれた長い鐵煙管は往々人を打つに用ゐられたことがあり、長崎詞にて人を打つことをキセルといふによつて、その鐵煙管をキセルと名づけるやうになつたのだといふ一說を擧げ、但しこれも亦的證とはなしがたしと云つてゐる。めざまし草の編者は更に註してラウ竹に眞鍮の頸をキセてつくるゆゑキセラウといひしが、キセルと呼べることになりしなるべしといふ京傳の考を引いて、關東方言に、カケル、オハセルの義あるキセルといふ動詞をもつて來た。この京傳の說はサトウ氏が一八七七年すなはち明治十年に發表した煙草傳來考(日本亞細亞協會報告第六卷)に採用したことがあつた。

明治になつてから、大槻文彦氏が十七年に學藝志林第十四號に出した外來語源考には、キセル(煙管)斯班牙語なりといふ、未だ原字を探り得ずとなし、後言海にもこれを襲踏して、西班牙語、管の義なりと云ふと註した。國史大辭典には蓋し葡萄牙語なりと推定し、日本百科大辭典には、外來語なれど其傳系未だ詳かならず、或は云ふイスパニヤ語にして管の義なりと、或は云ふオランダ語の轉訛ならん、と惑うてゐる。大日本國語辭典には、外來語なれど不詳と正直に逃げた。明治以來の諸說も要するに德川時代の舊說を出でなかつたのである。村上直次郎氏の「往時の西洋交通が國語に及ぼしたる影響」と題する外來語彙(明治三十六年)にはキセルの語は出てゐないが、その後諸家の合著で出版された日本外來語辭典にも省かれた。前田太郎氏の外來語の研究のうちにもこの語は問題とされなかつた。長崎の古賀十二郎氏も、長崎史の方言集覽でこの語に觸れなかつた。

然るに本年七月號の反響といふ雜誌第一卷第四號に於て渡邊修二郎翁は「サトウ氏と日本文化との關係」と題して、サトウ氏の業績を推賞し、その舊稿煙草日本傳來考證に及び、この一篇刊行以後數年の後の事であつたが、一日サトウ氏から渡邊氏への話に、同篇起草の頃は、キセルの語源について疑があつたが、その後マレー半島を旅行した時その語は東埔寨語から出たことを知つたと語られたことがある由を報告された。そしてその語源說は、渡邊氏は既に今より二十年前明治三十年出版の自著外交通商史談のうちに擧げておかれたといふことを、私に注意してくれられた。

私は早速、外交通商史談を一閱して、その通商事項と題する一章のうちに煙草の傳來を略說し、そこに左の一條があつたのを見た。

キセルは東埔寨語のクセルより出づ、管の義なり、キセルに用ゐる竹管をラウと云ふ、同地に近き羅宇より此竹を產するに因りて亦地名を假用せるものなり。

私は直に佛蘭西語對譯の東埔寨辭書を見た。カンボヂヤの舊教宣教師ベルナール師の編纂で

一九〇二年香港で出版されたものである。それには KHSIER と標して Pipe と譯してある。カンボヂヤ語のクシエルがピイプ（パイプ）それがキセルとなつたのは國語自然の轉化である。こゝに於てサトウ氏の考說の誤らぬのを明かにして、私は渡邊翁の注意に對して謝意を表する。

翁も既に一言した如く、カンボヂヤ國とラオ國とは土地が南北相近接してをる。北方のラオ國の土產の斑竹のことは、日本に於ては寛永時代より知られてゐるといふが、私は未だ確證をみない。種彥の足薪翁記卷三に寛永十五年撰の毛吹草にラウ竹とあればラウ竹といひしがさきか云々とあるが、私は同書卷四に豐後の國產を擧げて姥嶽のキセル竹の下に虎符有之と註したのを見ただけである。ラウ竹といふ文字はみかけない。或は私の見おとしであるかもしれない。尤も羅宇の國といふ名は寛永十九年六月二十九日附、爪哇駐在の阿蘭陀ゼネラル某よりの來狀の譯文に見え、その他の名產龍腦香を獻上したといふことがある。元祿八年の華夷通商考下卷に、ラーウの土產に斑竹色々黑き文ある竹なり、則是をラーウ竹と云、キセルのラーウ此より名る、と出てゐる。寶永の增補本卷四もほゞ同じで、卷一江西の土產、卷二雲南の土產、卷三暹羅の土產のうちにも散見する。同じ西川如見の四十二國人物圖說上卷羅烏の條下にもある。益軒の大和本草の附錄卷一にもラウ竹のことがあり、天野信景の鹽尻卷十一にも喜世留羅宇語也として羅宇のことが記してある。共に寶永年間の記である。

安南語ではキセルをレウといふと、明和二年の奧州漂民の聞いた安南語彙中にみえる。寛政の南漂記卷二にも同じ語が載つてゐる。天明七年蘭船便乘の安南人の語には煙筒をブレウとしてある。近藤正齋の安南記略稿卷一や大槻盤水の蔫錄などにもそれを引いた。サトウ氏の舊考にはこのレウから日本語のラウが出たやうに書いてあるが、實は安南語のレウも日本語のラウも、共に安南やカンボヂヤに接壤してゐるラオ國の國名から來たものとすべきである。南瓜の一種をカボチャといふのと同じである。

話が前後するが、元祿三年の人倫訓蒙圖彙卷五の細工人には喜世留張のほかに無節竹師が出てゐる。插畫をも加へてある。さればラオといふ語は元祿以前にさかのぼり寛永までは優にこぎつけることは出來るとおもふ。從つて、慶長、寛永頃の日本とカンボヂヤとの通商關係を知れば、キセルがカンボヂヤ語であることは、ラウの語の由來と思ひあはせていよいよ首肯かれるのである。

かくの如く印度支那諸國の言語が印度や南洋の言語と共に、ポルトガルや、オランダの言語の外裝の有無にかゝはらず直接間接に日本に輸入されたことは見のがしてはならない。サラサといふ語の外に、シャムロ染といふ語があるが、印華布の染法が暹羅からも日本に入つた事實があるが如く、葡萄牙船によつて傳來した煙草を吸ふ道具たる煙管がその材料のラウ竹と共にカンボヂヤから輸入され、從つてその名稱もカンボヂヤの名前を取つたといふ事實は、日南貿易史の一面を反映して甚だ興味が深いのである。

ぽんと町稱呼考

(一)

本居宣長が修業のため郷里松阪から京都に出て來て老儒堀景山に就いたのは、寶曆二年三月で、その時宣長は二十三歳、景山は六十五歳であつた。宣長はこれより前にも三度上京したことがあつた。現に其年の正月下旬にも來たが、その以前十六歳のときと十九歳のときに既に京の土を踏んでゐた。宣長が行李を落ちつけた旅宿はそのうち二回は先斗町であつた。延享五年卽ち寬延元年十六歳の四月十日の日記と寶曆二年二十三歳の正月二十五日の日記とを見ると、先の字のかはりに千の字を書いて千斗町糸屋久右衛門亭に泊ると出てゐる。いま先斗町に糸屋といふ店があるかないかは私の探究せざる所であるが、先斗町は元祿以前より開けはじめ元祿享保時代にあつては繁昌の遊廓地帶保養地帶であつたのだ。漢學修業中の宣長は酒が大好きで度々四條南北の芝居を見に出掛けてはその歸りには往々別な方へ外れていつたもんだ。その二十七八歳時代の寶曆六七年頃の在京日記を見ると流麗な和文でその享樂時代の消息をうかゞふことが出來る。

私は明治四十二年の春に京都の人となつた。その年の初夏の或る夕方東京の老先輩を案內して同僚と共に先斗町の菊水とかいふ鷄肉屋に出かけたことがある。同僚は京都の地理や飲食店については私に比して一日の長であつた筈であるが、新參の私と共に師を導いて四條の橋を東へ渡つて繩手邊を先斗町と心得てうろついてしまつた。人に尋ねるのも工合がわるいと云ふので、師弟三人の國語學者は、本居宣長の修學時代から百五六十年後の明治の末に當つて先斗町を加茂川の東と考へて迷ひ歩いたものだが、たうとう降參して橋を西へとわたりかへして大笑ひをした。其時にも幾多の人々が疑問をおこすやうに先斗と書いて何故ポントと讀むのかといふ話が出たかと思ふ。

爾來十六年になるが、その間先斗をポントと讀むに關して色々の人から樣々の說を聞いた。隨分珍な說も出たことがある。前に加茂川と後に高瀨川と兩方に川があることなほ鼓の兩面に皮がある樣だといふので鼓に因んでポンと呼ぶのだと云ふ樣な奇說もあり、平假名の異體でかんと書いた其のかんの二字が先の一字の樣に變形したのだと云ふ妙案も提出されてゐる。此地人家皆水に臨み裏は砂磧なれば先計りの意よりかゝる遊戲の名を命じたりと云ふ一說を擧げたのは、吉田氏の大日本地名辭書である。西側に人家なし故に先き斗りと云ふ意より呼なせりといふのが碓井氏の京都坊目誌に出てゐる說である。近頃に至つてもとの宮武外骨氏はこの町は江戸でいふ袋町であつたのを、京都の俗語で袋町のことをポントと云ふからポント町といふのだ、又袋町だから尻無だ、尻無の二字が草書にくづれて先斗の文字に變形したのだと云ふ樣に大正十三年五月號の變態知識といふ雜誌で一二の出典を示して考證を發表し、別に中田薫博士の提供された二つの材料を紹介した。外骨氏に從へば、元祿か寶永頃の板本で北條團水の作つた浮世草紙に尻無町と書いてほんとと振假名をつけてあるさうである。

また全く別說によると、あの邊はもと南蠻寺

の所在地であつたので、橋のことを南蠻語でポンテと云ふから南蠻關係の人が四條に架してあつた橋をポンテと云ひ、それからその橋の袂の町名をもポンテと云つたのがポントと云ふ様になつたのだと云ふ。この説はずつと以前に私も思ひ浮べたこともあり、又私と獨立に一二の人から聞いたこともあつた。故川島元次郎氏なども此の種の説を私にも尋ねられ又同氏自ら日出新聞あたりに書いたこともあつたかと思ふ。今でもポンテ説を信じてゐる人もないではない。私の研究では南蠻寺は加茂川邊でなく、むしろ堀川邊や北野邊であつたと思ふが、そればかりでなく、橋を南蠻語で呼ぶといふやうな事は當時の事情から推すと在りさうにもない。寺院をエクレジヤなどと原語で呼ぶことはあつたが、場所の名前などに而も俗稱に原語を用ひる例は聞き及ばない所である。

私の先斗稱呼考の一端は大正十二年四月の藝文に歌留多のことを述べたをり、又その後同年十一月或席で種々の語源考を講じた折にも言及したのであつて、共に近刊の拙著南蠻更紗に收録してあるが、私は本紙に於て今ノンキにそれを詳論する機會を與へられたのを喜ぶ。本居先生は地下に苦笑されるであらうし東京の老師はかゝれとてしもと舊阿蒙を何と評されることであらう。お正月氣分の筆のすさびとして咎めたまふまいと思ふ。

（二）

私はまづ先斗町の町名以前に先斗といふ文字とその稱呼とが如何にして起つたかについて述べなければならない。宣長と同國の先輩谷川士清の倭訓栞にはポントを釋していふに先斗と書けるは博奕の名目より出たりと載せてをるが、今詳に云はゞカルタの博奕に使ふ術語とあるべきである。現在いふ所のトランプ卽ちカード遊びにポントといふ用語が葡萄牙語にあつて、それが印度の沿岸から南洋の島々などで使はれてゐることは葡萄牙國の言語學教授ダルガード氏の著書に葡萄牙語がアジア諸國の言語に及ぼせる影響と題する本に出てをる。この書は一九一三年卽ち大正二年の刊行である。然し私は未だ葡萄牙語に於てポントと云ふ語が、カルタの遊戲に於て如何なる事物をさすかを精確に知らないが、ガンテイド・デ・フィゲレドの葡萄牙辭書に由るとポントはカルタ遊びの仲間同士の一人々々をばさすと出てゐるし、ミケーリスの葡萄牙辭典にはポントをカルタの術語としては英國のラップ卽ち、切ること、又切札のことをさす様にも見える。語源からいふと英語のポイントと同源であるが、日本のいはゆるトランプでいふポイント、卽ち特に一點、英語でいふエイスをさすのではない。カードや賽の目の點々を英語でポイントといふが、それが葡語のポントに當るのだ。英語のドットやスポットに當るのである。

然しながら徳川時代のカルタ語のポントの意味は右の通りの意味ではない様に見える。但しポントの用例は私の見た所では文獻上僅かに一二しか無い。西鶴の本朝二十不孝卷之三に「先斗に置いて來た男」と標題をして其傍に「堺にすつきり」仕舞たや」としてある一章に、

泉州堺の仕舞うた屋の八左郎といふ惡漢が、ある時小家にあつまり賀留多の勝負をはじめける、加様の人の小判を二十兩づゝ。先斗にはられしをみて、近所の人是を驚き、こなたには氣が違うてや、かゝる博奕業をあそばしける事思ひもよらずといへば、

といふ條がある　この本は貞享三年に出來て、右の本文は寫板本の第七枚目にあるが、第九紙のおもてには男が五人でカルタをしてゐる插畫があり、又卷三の目次のところにもカル

タの畫がカットに使つてある。舊校本は東京大學の國文研究室と大阪の渡邊霞亭氏との所藏を見たことがあるが、前者は美本であつたが燒けてしまつたさうである。帝國文庫本の西鶴全集では上卷の五二〇及五二一頁にあるが文字には原本と少々の相違がある。原本では目次と標題にはぽんとと出てゐるが、本文には半濁點がない。

さて右の場合で見ると、ポントは先頭とか眞先とかいふ樣な意味に見え、前記のダルガード氏やフイゲレドに擧げてある意味とは、趣が違ふ。本朝二十不孝と同じく貞享三年江戸で刊行された鬼之谷筆(卷五にも「ほんとこはる」といふ文句があるが、西鶴の用例と同じ樣である。次に全く博奕語とは云ふ反對の切支丹の方面の語にもポントといふのが徳川初期の文獻にある。一つは長崎の大浦天主堂に所藏のサクラメントのローマ字綴り書は慶長十年の出版であるが、それにも出てをり、又水戸の徳川侯爵家所藏の切支丹殉教記即ち第十二號と標するものにも書いてある。やはり要點とか個條とか箇條とか項とかいふ意味の樣である。水戸の彰考館所藏の切支丹法器と題する寛政の記錄にもホントといふ語を錄してゐる。いづれも英語のポイントと同義であらうと思ふが、公教會の用語として定譯があるものかどうか。とにかく何れの意味のポントもポイントも拉丁語から出て同じ語源であるが、日本語になつたポントの意義は、先頭また眞先などいふ意から出でたらしく思はれる。

(三)

英語にもポントといふカルタ用語がある。やはり南蠻語から由來した語でプントと云つたのが轉訛した形である。大英辭典にそれを收錄して十八世紀初めからの用例を示してあるが、赤札すなはちダイヤとハートの一點、いはゆるポイントと又エースをさすのである。さればポイントといふ語は同じカルタ言葉としても國々や時代によつて樣々に意味が變化してをると見える。南蠻語のポントでもプントでも英語のポイントでも元來種々の意味が多岐に派出してゐることは葡、西、伊、佛、英等の辭書を見ればよくわかる所である。

南蠻語にはポント及びプントの外に更にポンタ及びプンタの形があつて語原は同じである。共に拉丁語から出たのであるが、前二者はプンクトウムといふ中性單數から出た男性形であり、後二者はプンクタといふ中性複數から出た女性形である。佛語では前者はポアンとなつてゐる。英語ではポイントといふ形に併合されてゐる。さて今葡萄牙語でいふならばポントとポンタとの二語形のうちで前者は點の意味をあらはし、後者は先の意味をあらはすのであるが、日本語に於てはカルタ語のポントの語形のうちに先端といふポンタの内容が攝取されてしまつた樣である。徳川時代に愛用された洋酒にチンタ酒といふのがあるが、あれは實はチント酒といふべきで元來チント・ヴィニヨ即ち色酒、色づいた酒、赤酒の意味であるが、それがチンタと訛つたのである。それとは逆にポンタといふ語形はポントと轉じてしまつたと見てよいのである

近年長崎の武藤長藏君が古賀十二郎君が發見された東詞•集•解といふ珍重すべき寫本のうちに南蠻語を日本語に宛てた粗末な字引がある。そのうちに先の字をポンタとしてある。徳川初期に錄したものを後世傳寫した本であつて、處々誤寫、誤聞、誤記も見えるが割合に正しく南蠻語を傳へてゐる。次に慶長八年に長崎吉利支丹學校で出版した日葡辭典にはサキ(先)をポンタと譯し洲崎とか針先とか云ふやうな熟語もやはりポン

タとしてある、切先をポンタ・ダ・イスハダ等としてある。これらを以て先の字をもとポンタと讀ませたこと、次にそれがポンドと轉じたことの由來を了解することが出來ようと想ふ。

されば先斗をポントと讀んでゐるが其實先の一字がポントと讀まるべきもので斗の字は、いはゞ送り假名、捨て假名に外ならぬのである。とかく一字の漢字を二字に延ばしたがる日本人は、先の一字でよいところを二字に延ばして先斗としてしまつたのだ。ハネを羽の一字でよいのを羽根だの羽子だのとしたり、又ウツボを空の一字でもよいのを空穗だの空保としたりしたのと同一筆法である。前の場合では根や子には殆ど意味がなく後の場合でも穗や保には全く意義がない。その送り假名の萬葉假名をば文字に拘泥して字義を解釋したら笑ふべきの至りである。先斗にしても先バカリなどと斗の字をバカリだと解釋するのは大なる誤解である。英語のセイントに聖徒といふ譯字をあてた場合に徒の文字に多少の意味はあるとも見られるが要するに聖の一字の延長に外ならぬ。萬葉集にもシダリヤナギを垂柳とも爲垂柳とも兩樣に書いてある。シダリは垂の一字でよいのを物足らぬので爲垂と書いた。かういふ例は古來ちらほら用例がある。梵語の漢譯の場合にもかゝる例があつたかと思ふが今之を確かに見出し得ない。

（四）

私は先斗をポントと讀む所以は上述の如き次第であると信じてをる。ともかく鎖國以後半世紀に足らざる貞享三年卽ち西暦紀元一六八六年に出版された西鶴の本朝二十不孝にさういふ文字を使つて、かくの如く讀んでをる。事柄は有名な外國貿易港たりし堺港に於けることとして叙してある。これは偶然なることで大した因縁はないかも知れぬが一應注意を要すると思ふ。

カルタが慶長寛永時代は固より、元祿時代に流行したことは、延寳の色道大鑑、貞享の雍州府志京羽二重をはじめ元祿の人倫訓蒙圖彙、正德の和漢三才圖會等にも知られ、ケンペルの日本滯在記に由つても流行をうかゞはれる。前にも引いた貞享年間の江戸の鹿の卷筆でもよくわかる。談林派の句にも蕉風の作にも都鄙上下に於ける流行の形勢をとゞめてをるが今一々引證しない。從つて俗語中にもカルタ用語が使はれて來るに至つたのも自然の勢である。イスだのスベタだのといふのもカルタ用の南蠻語から出たのである。イスとは南蠻語のイスハダの略である。卽ち英語のスペードに當るけれども、鍬のことではなく、劍のことである。スベタは勿論イスハダの轉訛である。日葡辭書には切先、すなはち劍先のことをポンタ・ダ・イスハダと譯してあることは前述の如くである。蕉門の太白堂桃隣の編で元祿十年刊行の俳書陸奥千鳥に、

イスぬく骨牌けふも暮しつ

といふ句が出てゐる。かういふわけで先斗といふ語が町名にまで應用されるやうになつて來たのである。

碓井氏の京都坊目誌下卷乾下京第六學區九六ページ所説によると、二條四條間の鴨川西畔を開いたのは寛文十年から延寳年中にかけてであつて、延寳二年及び八年に至つて人家が建並ぶやうになつたといふことである。元祿より十年ほど前のことである。然し寛文五年開版の京雀を見ると、あの邊には旣に有名な旅亭もあり、二階座敷より東のかたを見れば北、東、南の山々隈なくみえわたり、ことに絶景の所とて都の人こゝもとに來り遊ぶ宿の隙なしと記してある。木屋町四丁目四條通に中島があつて、そこから東四條川原を見渡すやうになつ

てゐた。延寳年間には遊廓も出來るやうになつた。たゞ先斗町といふ名稱が何年に附けられたかは地誌や地圖では判明しない。寛永八年の寫本地圖の寫しといふを見るに、中島の如き形の區劃は見えてゐるが町名は見えぬ。私の見た所では享保年間の板行といふ大繪圖に初めてポントといふ町名がその區劃の北部に記入されてゐる。年代の明記してある所では寛保元年の大繪圖にも同樣であるが、この圖は貞享三年開板の圖を再板したものだと云ふが貞享の圖は未だ見ない。それにも出てゐるかも知れない。寛保以後では寳暦四年板の圖をはじめ幕末までの地圖には大抵出てゐる。もし果して貞享三年の古圖がポント町の名前の初見とすれば時代は正に合ふわけである。

西鶴本では本朝二十不孝の出版よりも四年以前の天和二年の刊行ともいへる好色一代男の巻六にぽんと町の名が見えるが、これは私の見た所では文獻上の初見だかも知れない。本書は巻末に天和二年神無月の末に云々といふ文句があるからそれ以後の作であることは明かである。但し同年の作とか版とか定めるのは早計であらう。從つて貞享三年の二十不孝との前後を直に斷定するわけにはゆかぬ。但し原本には先斗といふ漢字でなくして平假名で書いてある。島原の太夫三笠が落ちぶれて人目を恥らひ、ぽんと町の小宿にかへりぬといふ一くだりがある。それで其町内の情況を察することが出來る。

（五）

元祿六年西鶴が死んでから二十年ほど後の正徳時代になり、三十年ほど後の享保時代に入ると、先斗町の名は俗文學には續々あらはれて來る。元祿寶永頃の北條團水の作なる武道張合大鑑といふ浮世草紙の巻三には、尻無町の横車とあつてそれにはぽんと町の振假名がついてゐる由、外骨氏の引用に見えるが、この本は私の未見の本であるから、單に之を紹介するにとゞめておく。正徳二年秋の初興行といふ近松巣林子の長町腹切の中巻の首めに、

名は堅く人は和ぐ石懸町前には戀の底深き淵に憂身をほんと町都の四季の月花を愛にとゞめて通路や、

といふ文句があり、つゞいて其磧の作中にも二三ケ所に見えて居る石垣町の名は、西鶴の二代男巻八や胸算用巻三にもあり、共に二階座敷のにぎやかな騷ぎが描かれてゐる。前者は貞享二年、後者は元祿五年の版である。町つづきであるから先斗町邊の地誌資料として序に擧げておく。さて其磧の作では享保二年の自序のある世間娘氣質巻四の第三に「身のさがを我口から白人となる浮氣娘」の標題があつて、そのわきに頭ばかり血の多い先斗町云々とあり、本文には東山の見ゆる景氣よき先斗町の座敷をかりて養生に出しとある。振假名にはほんと町と半濁點なく書いてある。挿畫にもほんと町ざしきと出てゐる。中田薫博士の見出された其磧の世間手代氣質の巻四にも先斗町の借座敷と見えてゐる。これから推すと、享保時代には借座敷或は出養生の借間などのしやれた一郭であつたことが愈々明かである。

同じく享保年代では狂歌師の油煙齋貞柳の句に二つ見えてをる。いつれも七月中の句で、第一のは年代不明だが、

おもひきや踊の旅のほんと町死出のまつ坂きみ越んとは

とある。第二の句は享保十四年で、

音羽山音も涼しき河水や波の鼓のほん
ぽんと町

とある。こんな所から先斗町の名義を鼓の皮などにこじつけることも出て來たわけだ。尙ほ

外骨氏は享保十六年の京阪長ふくべの冠附中に、「よめた〳〵、尻の無いのでぽんと町」といふ句を見出した。かくて寶暦十二年刊行の京町鑑や安永九年刊行の都名所圖會には先斗町の名を明示し、文化十二年の序跋ある京都の醫者廣川氏の蘭例節用集といふ通俗書にまで登錄されるやうになつた。その間に於て本居宣長は二度ほどこの町の糸屋久右衛門といふ宿に泊つたことがあるのは前述の如くである。

私の考へではカルタ用語の先斗といふ名を、あゝいふ一廓では常に遊客が慣用するに違ひないから、寛文延寶以後新開の土地に遊戲的に命名されたものと思ふのである。鴨川の中に突出た洲崎地であるから先斗といふ俗語をあてはめたのであらう。殊更南蠻語として命名したのではなからうが、唯あゝいふ界隈であるからそれ相當の博奕語を以て名づけたに過ぎないのではなからうか。吉利支丹や南蠻人などが外國語を以て命じたのでは決してないと私は信じてをる。故にセイロン島だの印度の東海岸コロマンデル沿岸にもポント何々、プンタ何々といふ南蠻語の地名があり、又ダルガード敎授の研究によると　ポルトガル語のポンタ即ち崎又岬の語からポルトガルの影響を受けた印度あたりには類似の語が處々に存するが、それらは南蠻語からの直接の命名である。然し京都のポント町のは、少しまはりくどく一旦カルタ用語になつたのが、博奕などをやる遊客達によつていたづら半分、しやれまじりに命名されたものであらうと考へられる。唯指すところは兩方とも出端とか先端とか洲崎とかいふ類似の意味に外ならぬのである。大阪には古く元祿時代から既に劍先橋また劍先町の名があるが、命名の根柢は先斗とか洲崎とかいふ名の由來と異曲同工である。

南蠻に關する俚謠その他（五）

戀の花節などは、我が能狂言中の小咏を追想させる。更に土地の香りの高いのがありがたい。波照間の島節や崎山ゆんたの如き長篇は、こなたの盆踊歌にもまして田園の情致海島の趣味の溢るゝ傑作である。鳩間節といふのにかういふのがある。

鳩間中岡走り登り、
蒲葵の下に走り登り
美しや生いたる岡の蒲葵、
立派さ列れたる頂の蒲葵、
眞南端見渡せば、
濱の見るすや小浦の濱、
小浦の濱から通ゆる人や
藏元の前の人心、
伊武田福濱下離れ、
舟浦地やかましの地、
舟浦人の見るみん、
上原人の聞く耳、
稻ば作り實らし、
粟ば作り實らし、
前の渡よ見渡せば、
往く舟來る舟面白や、
なゆしやる舟のど通うた、
如何しやる舟のどかしやらくか、
稻ば積付け面白や、
粟ばつみつけさて見ごと、

琉語できこえ難い文句が多いが、漠然ながら意味は通する。

大典奉祝

はら／＼と氣をもんだ後の喜びの情はまた一しほである。十一月七日の午後二時鳳輦の着御を待ち奉るまでの緊張は、私ばかりではなく、何十萬人の心も同じであつたに違ひない。前夜の深更から降り始めた小雨は、當日の朝までには止みきらなかつた。六日の夕がたから詰めかけて烏丸の大路の兩わきに土下座して一夜半日を二十時間のあひだすわりつゞけねばならない民衆は、ほんとにいたはしい。それも、老若男女おしなべてのことである。私の老母の七十八歳になるのも、さすがに徹宵の野天でこそなかつたけれども、やはり夕がたから烏丸蛸藥師の西がはのS商店に泊めてもらつて、はや曉まへの三時ごろから出頭にすわらせられたさうである。同僚の一教授の家の女中も、模樣の一張羅を着飾つて深更から街頭にすわりこみ、七日の夕がた歸つて來て、着物の濡れたり汚れたりしたのにも全く無頓着で、龍顏を拜し得た嬉しさを聲高々と語つてゐたといふ。こんな話は決して珍らしくも何ともない、當日在りふれた例に違ひないであらう。

私が家を出たのは午前十一時半であつた。氣短かな私は十一時に出かけると主張したのであつたが、悠長な家内は、零時半までに驛に到着なさるのなら十二時でも大丈夫でせうと、こんな場合にも至極のんきなものである。娘は娘で、學校で習つた修身そのまゝで、忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず、とでも思つたか、父母の間に立つて、いぢや父さん十一時半になさいなと折衷策を提出し、自分で自動車屋に電話をかけて、半時間延期を通牒することとなつた。同乘してゆく約束のF教授にもその旨を報告ずみで、私は大禮服の着用にかゝる。十三年まへの大正天皇御即位のをりと、その後一二回ほど着た覺えもあつて、多少自信はあつたものの、二三日前、大學の食堂で、同僚のK君とH君とから、大禮服の帽子は、飾りが右へゆくのか左へゆくのかと問はれて、なに左へゆくのさ、まあ吾々のかぶつてゐる中折帽を見たまへ、飾りが左へついてゐるではないかと、何でも類推法でかたづけてしまはうとした。K君は僕の大禮服の帽子の飾りは左にあるやうだといひ、H君は自分のは確かに右にあると言ひはる。私は例の左右尊卑論などをかつぎ出して、問題を考證にそらしてしまつた。現在の問題を過去に轉じて收まつてゐた私は、七日の午前十一時十五分すぎ、大禮服を麗々と着用めされて、いざ帽子を被るとなると、やつぱり飾りが右に附いてゐる。これはしまつたと少々てれたが、そんなことは顔にもあらはさず至つて落着拂ひ、この日は自動車が玄關先や門前に横附けにならぬ身じめさを、日頃よりも何層しみ／″＼と味ひながら、ともかくも女房子供から、勢よく何とか言はれて出かけた。東京の先輩のS老博士は、本郷森川町一番地の舊居の門前か、やつと車一臺くらゐしか通らず、老博士百歳の後勅使が自動車でおん入りのをりに失禮があつては恐入るとかいつて、居を廣々とした大和村の文化區域に移されたと承はつた。かういふ用意周到な先輩も世間にはあるのだ。それはさておいて、私はいつも我が家の門前に自動車のつきかねるについては、枕草子にも出て來、渡邊崋山も畫いた所の漢の于公の故事が思ひ出されるが、

大禮服で出かける今に至つて、ます／＼我身に思當られけると言ひたくなつた。

車體は何といふ名かは知らないが、平素折々乘用する所の正しくそれである。たゞヘッドに小さな國旗が交叉してあるのと、主公が金ボタンの制服の樣な服をして、運轉手の左がはに席を占めて私に陪乘して來たのと、是だけが平素との違ひである。とにもかくにも、私の自動車は威風堂々と、我が鼻高の鞍馬口を通過して右へ烏丸の大路に曲つて眞ツしぐらに南下しはじめた。この邊の烏丸通りは、却つて平素よりも人通りさびしく、電車の乘客も最早すくなくなつて、例年の元旦のやうな沈靜と嚴粛とが支配してゐる。國旗のひらめきが、わづかに今日の行幸を表現してゐるにすぎず、閑寂な氣分がみなぎつてゐる。私の車が京都工業學校の前にさしかゝると、車の輪が電車のレールに觸れて爆發的な音を出した。言ふまでもなくパンクである。乘主は泰然自若として居たが、運轉手らは、すぐさま下りて修繕し、タイヤに活を入れはじめた。監督者は、どうもすみまへんと連呼した。私は、なアに時間はまだたつぷりあるから大丈夫だよ、と落着いて見せは見せたが、心中すこし不安にならざるを得なかつた。これから室町へはひつてF君が乘つて、それから先き烏丸がずうッと七條まで通つてゆけるかどうか覺束ないから、人込みのする狹い通りを縫つていつて、果して御指定の零時半までにこの自動車では乘込めるものかどうであらう。この場合パンクが奉拜者の密集してゐる烏丸の三條四條の晴れがましい大道の眞中で起らないで、幸ひこの人げの少い場處で發したればこそ、ほんの少しばかりの人だかり位で濟んだのだ。これはせめてもの仕合せである。それでも後から／＼と正裝した人々の乘つた自動車が駈けぬけつゝ、路傍にたゝずんでタイヤの修繕をしてゐる自動車と憐むべき乘客とを尻目にかけて疾驅し去るのを見送つて、私は氣が氣でなかつた。周圍の人だかりの中には、大學圖書館のK君もゐて、先生お困りですな、どうかなるでせうか、などと心配してくれる。なにまだ時間の餘裕はありますがね、と落着きぶりを示しつゝ、だから時間の餘裕はゆつたり取つておくべきものさと、腹のうちで稍得意げな態度で、家の方を睥睨したいやうな氣分でもあつた。

十五分も經つたかと思ふころ、目出たく修繕がとゝのつて車はひた走りに烏丸を走つて、今出川から室町へとかゝつて、F邸の前に着くと、待つてたとばかりにF君が乘つた。實は今途中でこれ／＼だと話してゐるうちに、車は同じ通りを一條か中立賣あたりまで走つて、いざ室町を左に回轉して再び烏丸へと思ふ頃、F君手を拍つて、これはしまつた、待つてくれ／＼入場券を忘れて來た、もう一ぺん還つてくれといふ。F夫人けふは奉拜のため早朝から一大隊を引率して、烏丸五條の某大家の店頭にお出向きでお留守とある。御主人の着附けは臨時囑託の掛員に命ぜられて首尾よく出來上り、あとは何人かの侍女に御一任であつたので、天晴れ御ン大將、肝心の入場券をおン忘れとある。かういふ御難がわれら兩人の上にふりかゝつたにはふりかゝつたが、兩人とも漸く危急を脱して再び今出川から烏丸通りを御苑の西に沿うて疾走するの榮を得た。今出川以南の烏丸は、並々の車や人をとほさぬところを、こゝあたりはまだ警備の薄い地帶といはゞいへ、それでも二三間四五間に一人ぐらゐの割で警官が左にも右にも見守りつゝあるらしかつた中を、私らの車はさきほど來の時間の空費をいくらかづつ取返すべく疾走したが、下立賣あたりから下は通過を許されず、再び横へそれ南にまが

つて室町をさがり、二條から烏丸へ辛うじて拔け得て、ほんとにほつと一息ついたのであつた。

烏丸の中央には、白砂が幅三間ほどにわたつて南北に敷きつめてある。左右の人道といはず店頭といはず、人で埋まりきつてしまひ、それが寂として一語を發しないやうに窺はれる。職務の執行に誠實を失はぬらしい所の警官たちの黑色、兵卒たちのカーキー色。幸ひ雨は止んだがどんよりとした日和で日の光はみえない。あまりに陰鬱な氣分がたゞよひはしないかと私かに感ぜざるを得なかつた。それも一つには天候の加減であつたであらう。日本語には、お天氣のせゐ、時候のかげん、重寶なことばがある。然しこの場合はほんとに天氣のせゐであつて、時つ風烏丸のプラターヌスの枝を鳴らさぬ雨止みの正午時、少し蒸すやうな氣味であつたものだから、高まらんとする人の氣分はとかく押へられがちであつたに違ひない。その上、忠誠の念はやゝもすれば歡喜の情の發露を壓せんとする。雨の落下を氣づかふ憂慮の感はどうかすると氣を惱ましげにする。況んや異常に嚴肅な心地と極端に緊張した期待とは、人を沈鬱に導きかけるものだ。その上私たちが自動車で一過する際の直觀を以て奉拜者一般の氣分を察してはならないことは勿論である。夜來朝來の疲勞は、さすがに知らず識らず現はれざるを得なかつたのかも知れない。むろん私たちは二三時間の後、これらの疲勞や沈滞の氣が、鳳輦の通御と共に一掃されてゆくにちがひないことは想像すべきである。

然し、何しろ國民性か場所柄か拜觀者の表情の見えない靜閑な烏丸大路の東がはを、私たちは晴れがましく且つ恐る／＼疾驅させて次第に南下した。後方はわからないが、前方には車の走るのを一臺も見かけない。たゞ賢所を奉安すべき御羽車の空虛なのを八瀨童子たちが擔いでしづ／＼と驛をめざして進んでゆくのを見とめたばかりであつた。わづかに殘されたか或は幸ひに讓られたかした一條の狹い通路を、私たちは敬意を表しつゝ過ぎ去ることが出來た。その前後において、私は家の老人の顏をもとめ、F君は奧さんや幼少な愛兒たちの面はをもとめたが、いづれも無效であつた。

七條を西へ新町を南へまがつて私たちの車は一進また一止のいくたびかを繰りかへした後、定めの地點で下車し、京都驛の構内に入り、やがて指定の位置に着いた。自動車のハンクも入場券の失念も既に過去に流れ去つた。私たちの奉迎所の柵内に先着の人々の顏つきには瑞氣がたゞようてゐた。平素毎日々々顏をみあはせて居る同僚と、今やかうやつて更まつて互に笑をかはしつゝ失敗談の交換などに興づいて和氣藹々としてみると、浮世を全く忘れたかのやうである。私が帶劍をチョッキの上から吊つた失態を人から、「君は何度も經驗したくせに、そりや何だ」とひやかされたに對して、「この方が工合がよい」と負惜みをいつたが始まらない。昔はからだつたんだよと頑張るほどの老年ではないが、去る大正四年の奉迎の折には、かうやつて柵のうちには入れられず、而も御發輦口まぢかに奉迎が出來た難有さを追想せざるを得ないのであつた。あの時は、季節相當な時雨日和で、ほんのぽつ／＼としぐれがあつただけで、今日の樣にかういふ心配な雨模樣ではなかつたのであつた。から私は回想して、ひたすら天佑を希つた。

二時近くまでは、奉迎者は多少うちくつろいで語りあふ後方のものや、或は前列に立ち並んで適當な地歩を占めつゝ鳳輦の奉迎を今か／＼と待ちわびるものや、あちこち地を更へて何處がよいかと迷ふものや、小砂利を靴でかき上げ

かき上げて程らひの高みをこしらへ已れの短軀を補はうと試みるものや、人さま〴〵であつたが、十五分前頃からそれらの人々の心の緊張も度合を増し來り、もう十分もう五分と近づき、驛の大時計が正二時をさすかさゝぬかと思ふころ、號砲がうしろの方の加茂川原あたりから聞えてくる。沈默、期待、而してまだ解放しきれぬ緊張。耳をそばたて固唾をのみつゝ汽車の進入をうかゞひ奉る心持。「驛にお着きになつた響きがする」とさゝやく耳のよい隣りの僚友、うなづきあふ周圍の老骨。あなたの西方には前驅の騎兵が既に勢揃へをはじめる、近くの東がはには海軍の儀仗兵が劍を銃につけて氣を付けの姿勢をしてゐる。すべての光景が嚴肅そのものである。それからの五分、十分、御着までの五分十分より遙に長い〳〵五分十分であつた。森閑として聲なき寂寞の境を、たゞ皇禮砲のみが連發される。十分、十二分、十三分、このまへ大正四年の時も驛から鹵簿の進發がこんなに長かつたのかしら。胸のとゞろき、心のさゞなみ、苦勞性な私をしてこの上かういふ緊張がつゞいたなら呼吸がとまりはしまいかと思はせた。仰げば西南の方にどす黑い雲がおほひかゝつてゐる。もう一時間は降らせたくないものだ。おゝ東北は雲が薄い、大丈夫だ大丈夫だ、安心だ安心だ。然し早く御發輦にならないものか、御故障はなかつたものか、降り出さないうちに、堺町門を建禮門を入御になればよいに。こんな翼々たる小心を以てお待ち上げ申したのは、決して私ばかりではなかつたに違ひない。すべてそれらが二分三分の極僅かな時の間の氣持である。

刹那々々に息づまつて來てはち切れさうに成つた私の胸は、海軍の軍樂隊の奏樂のねと、騎馬の前驅の眞ツ先に異常な凛々しさを以て、左右に列んで歩調を整へながら濶歩して來た陸軍士官の威風と、それによつて先づ聊か弛められた。嬉しさ難有さが込み上げて來る。騎兵の赤き肋骨の進行、御羽車の異采、天皇旗の輝き、それからの順序になると逐一數へても見す微細にも覺えないけれど、たゞ刹那々々に張りつめた心持が刹那々々にほぐれたるんでゆくのを感ずるばかりであつた。大まかに申すと、美しい壯嚴な繪卷物の展開とも申し上げたいやうな心持が浮んでも來たが、然し遙かに仄かに龍顏を見とめ奉ることが出來た時は、まあ嬉しいといふ情が先立つて來て、あの金色の鳳凰が輕くゆらぐ眞下に、陛下がやゝ前方に玉體を傾けさせられて臣下の方に御眼をくばらせられる御容子を見上げると、私はひたすら神々の威靈と、陛下の大御稜威とを讃仰せずにはゐられなくなる。私は多くを語ることを控へる。何度もくりかへすが、たゞ難有い嬉しいと萬歳を叫びたいばかりだ。皇后陛下のおほみ姿は奉拜いたしかねた。それより後の宮樣方、あれは秩父さま、あれは何樣と、眼のよく利く人々は見上げ得た每に私語してゐたが、私は先程の感激で眼がくらんでしまつたか、一々それをお見わけ申すことが出來なかつたのは遺憾でもあつた。けれども私はあれだけで十分ありがたいと思つた。ぼうッとしてゐる間に鹵簿は御通過になつてしまつて、印象された感銘がいつまでもつゞく。萬歳が叫びたい、萬歳が叫びたい。十日の午後三時の即位式の際の萬歳のまへに、先づ御安着の萬歳が叫びたい。十日の午後三時、紫宸殿の大前に於て、十三年前の如く萬歳を叫ぶことを得ない今度は、せめてこの場合心ゆくばかりの萬歳を叫ばせて戴きたくてたまらなかつた。色々の理由あるひは儀禮の上から、かゝる場合の臣民の歡呼の聲は禁止されてゐるとはいへ、私は一徹に萬歳を叫びたかつた。多くの人々も亦同感であつたらう。萬歳の

聲が、あの刹那に喉まで出かゝつたのを押へた情は、何人も同じことであつた筈でなる。

十一月七日は如何なる日か、知る人ぞ知るである。時雨また私どもの筆にするに堪へない所である。この時に方つて、われらの京都は、われらの天子様をお恙あらせられずしてお迎へ申すことが出來た。昨夜來の小雨は一時霽れて、而も今しも落下せんとして迫る。私たちの前に一滴の落下もなくして、われらの天皇陛下は龍顏うるはしく、鹵簿粛々と烏丸大路を北へお進みあそばす。私は感激のあまり、安心だ、大丈夫だ、さあ何でも來て見よ、いかなる魔の字でも近づいて見ろ、いかなる惡魔でもよいから北方よりも來い、西方よりも來い。天の神々、地の民草、大丈夫だ大丈夫だ。かやうに狂喜するばかりに私は氣がはずんだのであつた。私のみか、口にこそ出さね、心ある誰しもかういふ歡喜の情を抱かないものはなかつたと思ふ。

はら〳〵と氣をもんだ後の喜悦は更に一層切なものである。まづ雨も降らずに濟んだ。「實に心配したね」誰もがいつた。私たちは眼前の車の[illegible]から出て、今しがた還御のあつたその御道筋を横ぎつて、さ〳〵心地よく晴れ[illegible]、場外へ出て、F君と共にほつと息をつき、二行長く列をなした所の自動車群のうちに、私たちの乘るのを探しあてて、がつくりと重いからだをその中に推込んだ時には、微雨がふり出して來た。雨は斜に輕く自動車の硝子をかすめた。「まあ好かつたね、雲行からすると、雨はこちらの北の方から御所の方へ段々及ぶらしいから、大抵あちらは大丈夫だね」と私はかうF君に言つた。平素でも天氣を氣にする性分の自分は、何處までもこれを苦に病むのであつた。

重い禮装に疲れをおぼえ始めた私は、車に身を投ずるなり背ろに倚つかゝつてしまひ、漸く肩の凝るのを感ずるやうになつた。通御のときは帽子を脫せず右の手を擧げて何ぷんの間か最敬禮をしつゞけてゐたのであつたが、こんな結果が肩に來たのであつた。F君と話しあひながら、自動車の發するのを待つうちに、雨は少しづゝ加はつて來た。西洞院通りの四條までは自動車の行列が一進一止で隨分長くかゝつたが、それから四條を東へ、河原町を北へ、今出川を西へ、と大迂回して歸路に就いた時分は、降雨がかなりになつて、家々に還る人々の行き悩む姿はみじめに見えた。F君は室町の曲り角で此へ歸つてくる學生の多數にさゝへられて、そこで禮装のまゝ降車せねばならなかつた。氣の毒であつた。

私は家の玄關を入るや否や、出迎へた妻から、「お目出たうございました」と言はれたが、肩と頭とが痛くてたまらず、すぐさま大禮服をぬがせてもらひ、「お腹がおすきでしたら」といふ聲にも耳を假さず、いきなり次男を呼びたてた。自分の書齋で晏然と樂譜を按じてゐた次男は、のつそりと出て來て、何ですといふ。「肩をたゝくなり押すなりしてくれ、早く〳〵」と私がいふと、だんまりでそろ〳〵やり始める。私はひとり雙肩に重しとした禮服を脫いだ儘のシャツ姿で、肩をたゝかせ推させして一凌ぎ凌いだが、まだ頭がしん〳〵と痛い。歸つたのが四時半、これから一時間休むと、東京から來た人々の歡迎のために、六時までには大學へゆかなくてはならない。大宮人ならぬ宮仕へのつらさもこの邊であらうと、肩の凝りも頭の痛さも胸の惡さも、けふの目出度さに一切我慢して出かけた。有職模樣の禮装に、よくぞ日本に生れけると難有みを感じながら再び元の車に身を投じて出かけた。眼をつぶつてゐたから、何處の小路か知らなかつたけれど、自動車の通過の異

常に頻々たるを見守つて興じてゐたらしい一群の小兒が、私の乘つてゐるやつを指さしてか、あれは圓タクのだよと叫んだ。京童の此の一評語こそ下して妙となさざるを得ない。私は獨り微苦笑した。

八日も九日も雨がちであつて空は霽れさうにもない。私は天を仰いで十日の天氣を氣にしたことは相變らずであつた。暖氣がまだ去らずにゐる。われらの愁眉は容易にひらけない。所が天なるかな、九日の夕がたから陽氣が直つて來て、雲は薄らいでくる、星も隱見する、私をして明朝は必ず晴れるにちがひないことを豫感せしめた。

十日の朝は果して晴天であつた。麗らかな小春日和とは言へないが、微風に肌がひや〳〵する位の稍寒の上天氣。六時半に起きて庭を見ると、常磐木の綠も新鮮味か復活したかのやうで、薄らかな朝日を浴びてをる。まがきをまばらにまとふサネカヅラの色の濃さ。わかい山茶花の花が四五ひら雨じめりの土に今朝がた散つたらしいのも見すごしがたい。書齋の窓にからんでゐる蔦がほんのりまだらに紅葉したのも可愛らしい。我が家の小さな庭の草木も、いつになく今朝はなつかしく見える。近い野らから百舌鳥の高鳴きがきこえる。甲高い聲が身にしみ、私のめいりかける調子を刺戟する。日本晴だ、日本晴だ。これでこそ天子樣の御稜威だ。かうなくてはならぬ筈だ。から私は朝ッぱらから感激したのであつた。

來泊の舊師U先生は、七時半に綱ッぴきの人力車で參入を急がれていつた。綱は紅白によりわけた綱である。京都の常の曳子の顏も新調の法被姿で勇ましげだ。國旗は出したかと私がどなる。もう疾うに出しましたよと妻が應へる。雲はをり〳〵日をかすめて一時暗くなつては又明るくなる。曇ると私の心も暗くなり、晴れると私の心も明るくなる、或時は時雨がぱら〳〵と來る。なアに時雨だアと安心する。

出でましの春興殿にしぐれかな

と口吟みながら、今ごろは天皇陛下が純白なすが〳〵しい帛の御袍で春興殿の賢所の大前に出御ではないか、今度はまた皇后陛下が同じやうなおん裝ひで其の後に御參拜ではなからうか、などと私は往年の御儀の情景を回顧した。往年にはなかつた所の皇后陛下のおんいでましを想像申し上げつゝ、それと同時に往年には、今上陛下が未だ成年にお達しにならず、父帝らの後におかせられて、樺色に見上げた所の、缺腋の御袍を召して、下々の言葉で申さば頭巾の樣なものをおかぶりになつて、凛々しくお出ましになつた御態度を、今日しも回想して、今朝の御儀式と對照申し上げて、私は何ともかとも言へぬ悅喜の情にひたるのである。

もう十二時だ、そらもう一時だ。私は禮裝して宮內省出張所に參賀し、ひきつゞいて大學の奉祝場に急がなければならない。雲はあるが、雨は大丈夫だ、傘も要らない、おいてゆけ。雲は瑞雲だ、雨は喜雨だ。濡れるなら濡れろ。かくの如くして私は意氣揚々と他から見えたにちがひない所の感激的態度を以て、物古りて平和な我が家の門を、母や妻に送られて、例の自動車に乘つて烏丸大路を南走していつた。目ざすは第一に參賀の場所だ。

夜宴の感銘

十七日の夜宴の光景とその感銘とは、大典におけるこれ以前の一切の諸儀と全く趣きを異にしてゐるのではないかと思ふ。私に夜宴の感想を書けといはれた。書く段になると、無論それは謹記であらねばならぬと同時に、おのづからそれが欣記とならざるを得ない。十日の朝の森厳なる賢所大前の儀や、その午後の荘重なる即位式はもとよりのこと、十一日の夕がたへかけての賢所御神楽の儀、それから十四日の深夜から十五日の払暁へかけての神秘な大嘗祭、それに伴ふ十六日の大饗、それからの諸儀がお滞りなくお済みになつて今宵のおめでたい夜宴となる。

朝のおん儀、真昼のおん儀、夕つかたのおん儀、深夜中のおん儀、正午のおん儀、それらとは時刻もかはる宵の日の御宴、それに私は参列するの栄を得たのである。森厳や荘重や神秘を、今宴は稍感ずる事なしに、端的に欣喜の世界に御招待を賜はつたのである。

謹厳さほどけたゝつた喜びである。畏まりが弛みかける様な楽しさである。緊張がたるむ所の悦楽世界への躍進である。和会の宵だ。悦楽の晩だ。はめをはづしてはならぬが、この場合になつては、端然はめにはひつて固くなつて居てはならない。否むしろさうしては居られなくなる情緒にならざるを得ぬ。何事もお滞りなく済ませられたそのお喜びにお招きを戴いたのだといふ気がありありとして、私はこの十七日快晴の夕かた新月を西の空にをがみ、スバルの星の東天高く中する頃、きほふ車の列にはひつて雀躍しつゝ第二内集所に参入した。第二休所にあつて参進を待つ間はかなり長かつた。然し今宵の如く浮き立つた花やかな調子のなかに、同僚と軽く砕けた気分で話しあつたり、旧友と邂逅して互に昔を談じて交を温めたりしたのは何たる喜びであつたか。さういふ絶好、機会を与へて下さつたのも、夜宴の余沢でもあり又待つ間の長かつたお蔭でもあつた。他方には曾ては大正四年の大典に方つて相共に参列の栄を得た所の旧友をはじめ、在朝の人知名の人、先賢となく同友となく、幾多の人々の額が今宵の和会に欠けてゐることを感じては、私はともすれば様々の事を思ひ出さずには居られなくなつたが、それもほんの一瞬間のこと、この光明世界はすぐさま私をもとの明るい気分にひきもどさずんば止まなかつたのである。

時刻移つて十時ごろ私たちは舞楽場へ導かれた。場に入つて見ると、第一内集所から参進した諸員で殆ど満たされた座席には、私は腰をおろすことが出来ず、西がは即ち左庭から右がはにあたる舞台席に直接して先着者の背後に立ち列ぶことになつた。見渡せば青瓦のひさしと朱塗の太柱とを見せたばかりの舞台の真上から光線をとつてゐる。左庭の真横からややうしろにあたる所に私が立つてゐると、私たちの背後に更に十重ほどにも人がならぶ。それと同じく東がはにも南がはにも同様である。両陛下の出御に続いて右には皇族方が、左には外国使臣がすわられる。やがて萬歳楽と太平楽とが場中の空気を一千年前の中古へひきもどす。由緒あるこれらの古舞楽を百官諸臣と共にみそなはす聖上陛下を畏多くも親近に拝し上げつゝ私の心にひたすら一千年前にひきあげられる。たゞ私のすぐ前に坐する外国婦人

がヘリオトロープの高き香水のかをりを放ち、私の古典情致をみださうとされたのには困つた。
舞樂の太鼓の形と音とには誰しも耳目をとゞめる。めでたく勇ましやかな太平樂も舞ひ納められて入御の後私たちは一旦もとの休所にもどり、今度は速に夜宴の光明赫奕たる大饗間に導かれた。やはり西がはであつた。入御出御の前後にきこえる君が代、その中間にひゞく洋樂。
千成瓢箪のやうに吊した電燈が燦爛とあちこちに輝く。薄ぐらさと闇、それらは幽玄であり森嚴であつた。こゝは唯赫奕たる光明の世界。私は隣に席をとつたA君に、まあせめてシャンパンを一杯戴きたまへよといふ。A君やつと杯に受けたが、飲まうといはない。今宵は例外だよ、禁酒を破りたまへと勸めたが、どうしても承知しない。それでは僕が君の分をもいたゞくよと私はひとり一杯一杯又一杯と重ねつ擧げつ君臣融和上下一體の今宵のありがたさ嬉しさをしみ〴〵と身に味ふ。いづこを見ても金色ばかりのところに、賜はつた小さい燈籠形の銀製の菓子器、いぶし銀の燻んだ澁さ。
このまゝ入御になるのが何やら私たちの心にはうらさびしく、何となく物足らなさを感じてゐたところへ、南方の議員團あたりから起つた萬歳の聲、おぼえずそれに和して一同は退下の支度をした。私は一輪の白菊を手折つて頂戴して、胸にあててそのかをりにひたりながら車に乘つた。深更の午前一時、まだ起きて待つてた妻子に、戴いた菓子器から幾粒かを分けてやつた嬉しさ。

南蠻に關する俚謠その他（六）

（一）琉球のオモロ等の歌謠は誇るべき國華である。愛儂のユカラ等の如く日本の一大遺寶である。この南海の明珠につきては、往年田島氏が手を着けられた後を承けて伊波氏が大いに蒐集と註釋とに意を盡されたは多とせねばならぬが、吾々は更に規模を大にして完全なる結集を計り、周到なる研究を勉めねばならぬと思ふ。せめては、文部省で出した俚謠集ぐらゐなものでも欲しいのであるが、南北の二方とも古謠の研究が閑却されてしまつてゐるのは、遺憾の極みである。
〇朝鮮の古謠でも同樣な恨事である。李朝初期の龍飛御天歌の如きは、最近京都大學でその攷究に着手されてゐるが、屢々學者の口の端にのぼる三國遺事所載の新羅古歌十數首に對しては、未だ梨壷の五人も出ねば、まして仙覺も起たないので、この吏吐すなはち朝鮮の萬葉假名を交へて書いてある鄕歌は、よめずにゐる有樣である。その古義が闡明さるるに至らば、比較言語學上にも益する所がいかに多大であらうか、言ふを俟たぬのである。三國遺事卷五に彗星歌といふ一首がある。それは融天といふ僧の作である 新羅の眞平王（本朝にては用明推古時代にあたる）の代に、二三の靑年が山遊びをしようとした所が、彗星が心大星を犯した天象に出遭つたので、その行を罷めようとした。時に融天が次の如き歌を作つて歌つたので、星怪は忽ち滅し、侵入した日本兵は歸還し、國家慶福を來し、王も歡び、靑年も樂しく遊岳をしたといふ。

故人の思出

この春物故した藤代素人氏の遺稿集筆餘滴が出版されたのに因んで氏と互に相親しかつた二三家の思出話を書いて見る。藤代氏より二ケ月あまり早く亡くなつた芳賀龍江氏と、十餘年前に世を去つた夏目漱石氏と、それに藤代氏を加へてこれら三氏は年齢も學歴も互に伯仲してをり、明治三十三年歐洲留學の際にも同船で相提携していつた間柄でもあつたのだ。

夏目氏の全集は周知の所であるが、芳賀氏の集もそのうちに出るといふ話を聞いた。藤代氏のは今度出たのを加へて既刊の著書が少くとも三部あり、それに單行本に收められない二三の小著を加へても分量は多きに上らないやうだ。日記にしても、漱石氏のが斷片ながら多く殘つてゐるに對して、芳賀氏のや藤代氏のはどうなつてゐるか、まだ知らない。所が私の手もとに芳賀氏の西遊日記が一部分ながら傳はつて秘藏されてゐる事は既に二三の人にも語つた所である。内題を留學日誌と名つけた横綴ぢの小さい手帳で、明治三十三年九月八日素人漱石二氏等と共に獨逸船に乘つて西航した所に筆を起し、ヂェノアに上陸しパリの博覽會を見物して同地で漱石に別れ、あと二人は他の同友二人と共に獨逸に向つて伯林に着しそれ〴〵居を定めた。後自身が十一月三日の天長節の夜會に列したところで筆をとめてある。萬年筆の走り書きであるが、敍事と抒情と相まつて文章誦するに足り、また詩歌を挾んで吟懷をつくしてある。實は私が明治四十年三月獨逸船に乘つて西航獨國留學の途に就くとき、坦懷な芳賀さんは、何か役に立つこともあるだらうから持つてゆきたまへとこの手帳を出して與へられたのであつた。

藤代稻垣兩氏同室なり、夏目戸塚の二氏は隣室とす、八時奏樂と共に登船す、たゞしばしの別にも涙脆きは婦女の常、ハンケチをしぼる妹脊の別は余も人と同じかるべし、海上微風動き一些餘波なく霽れ渡りたる航海心地よき事いはん方なく、……遠州灘に入る頃より波浪頗る高く船體やゝ動搖す、同行の諸氏多少の船暈あり、夏目氏最も甚しく、晩餐に與からず、余幸に毫末の異感なし、夜十時浴衣に着換へて寢に就く、聊夢眠を攪することしば〳〵なり、

ふたとせの別をわびになく妻をあはれむ心なきにしもあらず

おほやけのみちのためぞとおもはずばけふのわかれもものうからまし

發航第一日の日記がかういふ調子である。私が西遊のとき芳賀さんそのほかの先輩と友人とで東京は江東柳島の橋本亭で私のために送別會を催してくれられたことがあつた。そのをり鯉こくの料理もあつたので芳賀さんから送別の即興歌を白扇に書いて下さつた。その歌は、

橋本のはしき妻をも鯉こくのこひしき子らも二とせは見ず

これを氏自身の留別歌と對照して見て私は當時感激したのであつた。

夏目氏の西遊日記は全集第十一卷に載せ、やはり明治三十三年九月八日に始まり、芳賀氏のよりも後れて翌年十一月十三日まできれ〴〵ながら續いてをる。横濱發航のところに、遠洲洋ニテ船少シク搖ク晩餐ヲ喫スル能ハズとあるの

は、芳賀氏の日誌に書いてある條と符節をあはす。十月玄海洋を過ぎて長崎に航するときにも床上ニ困臥シテ氣息奄々タリ直徑一尺許ノ丸窓ヲ凝視スレバ一星窓中ニ入リ來リ又出デ去ル船ハ波ニ從ツテ動搖スレバナリと誌した。十二日の條には、几董集と召波集とを取出して讀まうと思つたが讀めない、周圍が西洋人くさくて到底俳句など味ふ餘地はないとある。芳賀は詩韻含英などひねくつて居るが是も何も出來ぬらしいと見えてゐるが、芳賀氏の日誌には七言絶句が五首かいてあり、歌は三首ほかない。夏目氏の俳句も六句だけある。二氏の其日其日の記事や感想を對照してみると異同がいろいろ相反映して興味が甚だ深い。芳賀氏が九月二十八日の日記に、旭日曈々として海波を射る、快いひがたし、南方スマタラの島を見ると詞書して、

名にしおふ印度荒海波たちてみえがくれ
　するすまたらの山

といふ歌が見えてゐる。私の西航日誌をくりひろげると、洋中あちこちで氏の留學日誌を讀んだことが錄してある。自分もしば／＼腰折れを詠んで雅興にふけり郷愁をなぐさめてゐる。コロンボの旅舍に一泊して、

印地亞の遠つ島根にたびねして蟲の音き
　けばやまとしおもほゆ

とよんで東京のM博士におくつた繪葉書にかきつけたこともあつた。龍江博士の日誌中に、素人博士の歌が一つかきとめてあるのは面白い。十月六日の條に、コロンボを去る事一千三百四十一浬なりとあり、ソコトラの島近くにありといへどもみえず、藤代氏、

はる／＼もきぬるものかな見渡せばすぐ
　そことらの島もみえけり

夜藤代夏目二氏と甲板に談じて十一時にいたるとある。漱石氏の日記を見るに、此二三日風波頗ル穩ナリ今朝ハ殊ニ靜カニテ恰モ鏡ノ上ヲ行クガ如シ印度洋モ存外ナ者ナリ手紙ヲ故郷ニヤラント思ヘドモ面倒ナリ

雲ノ峰風ナキ海ヲ渡リケリ

午後大魚無數波間ニ躍ルヲ見ルとある。翌日の條に、滿月ニテ非常ニ美シとあるから、前夜三人で甲板で語り更かしたをりも月明に乘じての感興であつたに違ひない。芳賀氏の六日の日記にも、四時頃大魚の波間に飛躍するを見る、イルカなるべしといふと見えてゐた。それはともかく素人氏の、ついソコトラの島もみえけりに對して、私は、

長／＼し海の五日路こえくれば見るもうれ
　しきそことらの島

と、コロンボの發航後はじめて見る島影を讃した。たれもかれもかはらない情である。自分のには、朝在舷に遠く白帆三四艘を見る、いまだソコトラ島に近しともおぼえざれどいかなる舟にかあらん、をり／＼飛魚とぶと書き、翌日の條にも大魚の波上に飛躍するを認む、十七日の月出を見る、月明昨日に同じと記してある。

閑話休題、藤代氏が大正九年再度の外遊の吟詠は、今刊の鵞筆餘滴に收めてある洋行雜句波瀾と外遊句日記とにあらはれてゐる。和歌や狂句もあり俳句もあるが、最も多くは川柳が日記の骨子となつてをる。昨年の四月故人が文藝春秋に寄せた今は遺稿中に收められた病床雜句の如き川柳句集が、もう一度この春あたり本誌に投ぜられるだらうことを期待されたのであつたが、それが遂に果されなかつたのは殘念である。

話かはつて明治三十八九年の交にもどるが、夏目氏の猫がホトトギスに連載されてゐる最中のことである。全集では第一卷を占めてゐるあの猫は、この雜誌では八卷第四號の明治三十八年一月から掲載されはじめたが、丁度滿一年

になつた三十九年一月の九巻第四號に出た第六七回のうちに、私たちの言草がたねに使はれてゐるのを發見したことがある。猫のうちのモデルや資料に既に人の詮索したことでもあらうが、人のモデルは無論、いろ〳〵の人たちの言草文句態度論議等が、そのをり〳〵あちこちに養られてをることは推察に難くない。例へば三十八年十月號のホトトギス猫の第六回に出てくる「世の人に似ずあえかに見え給ふ富子嬢に捧ぐ」の文句(全集一の二七五頁)の如きは、故人上田柳村君のあの頃の詞章を連想させる。

一々の場合たしかにさうだと斷定も出來かねようが、私たちが文部省に設置してあつた國語調査委員會(前代の)に囑託を勤めてゐたとき、私どもは補助委員といふ名前で主査委員であつた大槻上田芳賀三博士の下で口語法の制定案を調査してゐた明治三十七八年ころ、段々調査も進んで殆ど最後に近い感動詞の部に來て、ワッと泣くとかニャンと鳴くとかいふやうな語例が出て、ホッと息をつくとかムッと怒るとかいふやうな場合や、ヤッと出來たとかハッと散るとかいふやうな場合などさま〴〵の例を詮議して品詞の所屬がどうのかうの、どれが感動詞でどれが副詞などといふやうな論が、打解けた仲間同士だから時々は笑談やまぜつかへしなども交つて議論に花が咲くこともないではなかつた。感動詞の調査が議にのぼつたのは三十八年の何月であつたか覺えてもゐないけれど、何しろその事があつて二三月たつかたゝぬ後に、ホトトギスに猫の主人公が細君に向つて「今鳴いたニャアと云ふ聲は感動詞か副詞か何だか知つてるか」とからかふ一條が出てゐるのを見て私たちで大笑したことがあつた。これは私たちの内輪話がテッキリ芳賀さんから何かの話のはしに夏目さんに傳はつた結果にちがひないと直感してしまつた。全集本の卷一の三二二頁―三二三頁を見るとわかる。細君が、どつちですかそんな馬鹿氣た事はどうでもいゝぢやありませんかと云ふ。主人公は、いゝものか、是が現に國語家の頭腦を支配して居る大問題だといふ。あらまあ、猫の鳴き聲がですか、いやな事ねえ、だつて猫の聲は日本語ぢやあないぢやありませんかと細君がいふと、夫だからさ、それが六づかしい問題なんだよ、比較研究と云ふんだと主人がまた皮肉つてみる。ホトトギスで讀んだのが明治の三十九年の春のことだが、爾來二十餘年になつてこの逸話を傳へた人書いた人共に世を去つてしまつた。

猫が大評判のうちに鳴きをさまつて間もなく、明治四十年の三月と四月とに素人氏は、おしやます物語と舶來猫物語との二篇を著して、大分漱石君の猫にあたつた。二篇とも同じ雜誌に出たかどうか忘れてしまつたが、一方はたしかに新小説に掲載されたとおぼえてゐる。今は共に鵜筆餘滴に收められて憂きれを歎つてゐるやうだ。舶來猫物語はホッフマンの作たる「牡猫ムルの人生觀より」から取つたとあるが、おしやます物語の方は、そのムルの鳴語としてムル口述素人筆記と銘が打つてある。今から七年程前巴里に世界博覽會があつた時日本から與者を出品した云々といふ述懐談がその中に出てゐるが、夏目氏や芳賀氏の西遊日記にも巴里の博覽會見物のことは、十月二十二日乃至二十七日の數日の日誌に散見してゐる。二十六二十七の兩日に相尋いで藤芳夏三氏が行を共にした記事が兩方の日記にあらはれてをり、その翌日に於て藤芳二氏は伯林へ夏氏は倫敦へと巴里を去つたことになつてゐる。

私は夏目氏とは相知るに至らなかつた。東京大學の教官室や會議室では稀に顏をあはせたことがあつたが相識にはならなかつた。同氏に私が西遊後程なく京都大學を尋ねて桑木

狩野二氏等に逢ひ、それから圖書館に來訪し、尊攘堂の遺物を見、その他象山の軸と明珍の兜とが格段眼にとまつたと見えて、全集第十卷（二五二頁）所收の日記にその事を錄してあるのはなつかしい。私の乘つた獨逸船は三月三日に神戸を發したのであるが、漱石君の京都日記は三月二十八日を以て始まり翌日京都大學を訪問したとある。虞美人草が東京朝日に連載されたのは、その後三月たつてからで、新聞は東京の留守宅から伯林に送られたのを、その小說を切拔いて一まとめにして妻のところに送りかへしたことなどもあつた。作中の小野さんに擬定されて自らは否定した白村君も不慮の死を遂げてもはや滿四年に近い。

南蠻に關する俚謠その他（七）

その歌は、まづこんな形である。

舊理東尸汀叱、乾達婆矣遊烏隱城叱肹良望良古、倭理叱軍置來叱多烽燒邪隱邊也藪耶、三花矣岳音見賜烏尸聞古、月置八切爾數於將來尸波衣、道尸掃尸星利良古、彗星也白反也人是有叱多、後句、達阿羅浮去伊叱等邪、此也友物北所音叱彗叱只有叱故、

この註解には、萬葉學者以上の智囊と氣根とを要するであらう。

（）こんな解き難い古歌とは異なり、自分が數年前薩南苗代川に舊朝鮮人部落の來歷土俗言語等を調べに行つた時に採集した近世の鮮歌一首を掲げてみよう。慶應四年戊辰二月に苗代川村の丁氏が寫したもので、漢字で綴つた本文の右傍に諺文と片假名とを附訓した一小篇である。今漢字のみを擧げる。片假名の傍訓も朝鮮語であるから載せぬことにする。

一、來日今日、毎日如今日、日者暮亦、
曙盆如今日、今日如今日、何世如也、

一、是遊哉遊哉、彼彼遊哉遊哉、我房家外、
遊木盛、如壹出、暮曙遊哉、

一、南山松閑、毎松鶴居與、西山日閑、
毎日爲此也、況、能生日故、

一、山好處、盞執直坐、彼處視、
彼山好處有、彼山好處、不遊何爲、

これでは原歌の調子は全く分らないのであるが、意味はぼんやり知れようと思ふ。これを苗代川の遺民は玉山宮といひて鄕土の神さまを齋きまつる社の秋の祭のをりに歌ふらしいのである。この祠堂の山の西に小さい岡があつて村民は春秋こゝに行樂をなし歌舞を催すといふ話である。これを山舞樂、ととなへてゐる。もと憐むべき捕はれ人たちが、薩摩の西海岸あたりの小山にのぼりて、甑島あたりでも晴天に遠望したものか、それを故鄕朝鮮の地と思ひて、やるせなく懷かしがり、互にはかなみあつて一日を樂み憂を遣つたものであつたのが、この年中行事の起りであらうと、苗代川の故老が物識りがほに物語つた。一日々々を優遊たのしくのんきに送り暮さうと歌つた、あの歌は、いかにも朝鮮の民族性を發揮してをるだけであるけれども、かういふ環境からかういふ氣分の裡に味へば格段の情致を感ずることが出來る。苗代川の鮮民については、往時今代薩藩の内外ともに、又詩人羈客としては愛陶好古の人々の間に於て、書きのこされた文獻は少くない。山陽の薩摩詞の中に、路遇朝鮮俘獲孫、蓄陶爲活別成村、可憐値得扶桑土、造出當年高麗盆といふ一首があるが、八田知紀や山田清安などの歌にはこの題材を取つたものは、みかけぬやうである。

（大正九年八月三日記）

上田君の思出

其一

過日は御邪魔を致しました。然し故人の追懐談はあの時分私にとつては此上もない心ゆかせでありました。あれから桑木さんを尋ねて又しきり追懐の物語に時を移しました。歸りには桑木さんが持つてゐる上田君の寫眞を借りてすぐさま東京驛へ急ぎ、その寫眞を携へて京都へ、歸つたのは十五日の朝でした。丁度初七日の法事が鹿ヶ谷の法然院で催される其前でしたから、すぐその寫眞を法壇の上に飾りつけることにしました。金色の位牌の面に墨いろ鮮かに書かれた含章院敏譽柳邨居士といふ戒名を眞下にして、その下に一三二、一三三、一〇三と自署された名刺を認めた時には、吾々の同僚は十日前に言語室で教官室で話しあつた其人がもはやからなくなつてしまつたのかといふ感じをしみじみ覺えずには居られなかつたでせう。法要は又なく莊嚴なものでした。寺からの歸りに私はちよつと大學圖書館に寄りました。新着書の中にカーネギー・インスチチューションから寄贈の大冊エドマンド・スペンサーの詩篇のコンコーダンスを見つけました。米國某大學の英文學教授の編纂で去年の新刊とありました。物はつまらぬのですが、こんな新着書があると上田君は欣んでくれたのでしたから、私はこの時にも之を見つけて無感じには過ごせませんでした。一體書物好きの上田君はこゝの圖書館に一番繁々と出入した教授の一人で、館員にも顏馴染があつた方ですから、館員も訃音を聞いたをりにも思出草が隨分多かつたやうであります。西洋の新聞雜誌の新着したとき第一に讀んだり借りたりするのも同君でありました。從つて當分は勿論のこと向後何かにつけて追憶する機會が多いだらうなどとその日にもつく〴〵感じたのでありました。

上田君と私との交情は高等師範以來十數年にも亙りますが、同僚關係以上に殊に親密といふほどのことはなかつたのです。然し私は一高の校友會雜誌このかた同君の名文はかなり愛讀をつゞけてゐましたし、又上田君も言語一般乃至國語の研究について理解と洞察とをもつてゐましたから、それらの點で接觸する機會は相當にありました。現に七月の初めにも言語問題について同君及他の一友と鼎坐で談りあうた時のことなどもあり〱と記憶に浮んで來ます。

巴里遊學中には私は上田君の下宿した後釜にはひりました。歸朝して京都に來任の初にも三本木の信樂で暫時同宿したやうな經歷はありますが、別に一所に散歩して面白く樂んだといふ經驗もありません。然し記憶に殘る逸事とでもいふのは、滯歐日記を披いて見ると丁度一九〇八年の三月十日上田君が巴里から伯林へやつて來て私たちと會談したをりのことであります。その日の日記には單に「上田敏氏をホテル、ベルビューに訪ふ、不在、……午餐後歸宅、上田氏來訪」とあるだけですが、その日來訪の際には同宿中の桑木君も居あはせて、そのをり初めて上田君の口から同君が京都大學の人となることを聞いたのでありました。私たち二人の喜びはたとへやうがありませんでした。そのをり東京大學の一友に宛てた寄せ書きの繪葉書に桑木君は欣喜の眞情を流露した文句を記

されたのであります。その文句もはつきり記憶してゐますが、今書く必要もありませんから略します。上田君は苦笑して頭を掻きながら、何とか即妙な受答へしてゐましたが、やがて俳句をかきつけてその場をすませたのでした。何でも「春の宵」とか「ヰオロン」とかいふ文句があつたことだけおぼえてゐます。その晩は伯林の音樂堂へ曲を聽きにゆくとかで桑木君から場所を敎はつたり何かしてゐた所ですから、自然ヰオロンを引合ひに出したのでせう。その繪葉書はその宛名の一友のもとにまだあるかもしれません。それから上田君は伯林からドレスデンやヰーンなどを經て伊太利に遊ばれたやうでした。ダンテの故郷、文藝美術の名蹟、フィレンツェから繪葉書を一枚贈つてよこしました。それはフィレンツェの唐草模樣の地にラファエロの名畫「腰掛のマドンナ」を色刷りに寫出した繪葉書で、上部の餘白に伊太利語でうつくしきフィレンツェから親厚なる挨拶をするといつたやうな文句を記してあり、他面の餘白には、

　ヱネチヤにはゲエテの住ひし家にやどり
　フイレンツエにはダンテの軒を仰ぎ見候
　明日羅馬へゆき月の末巴里に戻るべく候

と對句で書いてあります。末に「桑木さんへよろしく　三月十六日　上田敏」とありまして、全文紫インキの極めてうるはしき筆の蹟であります。私にとつては同君記念の隨一となりました。何故上田君からラファエルのあの畫を送つてくれたかといふと、同君伯林訪問のとき私の自室の壁にこの畫のコピーの安つぽいのが懸つてゐましたのを、口の惡い桑木君が戯れにこれは新村君の何とかが子供を抱いてゐる所で大いに新村君が何とかだといふやうなことを言つたのを、耳にとめてわざと本元のフィレンツェから送つてよこしたのであります。人に吹聽するのも面伏せな話ですが、こんな逸話の外に別段記憶に殘るやうな關係談もありませんから書加へておきます。

何れ其内何かに再び上田君のことを書くをりもありませう。こゝではとりとまらぬ想出ばなしと、先日お目にかゝつて以來の始末とを筆にして責を塞ぎます。

（佐々木博士宛書信、大正五年八月、「心の花」）

其二

上田君の文名を知つたのは第一高等中學の校友會雜誌に出た名作『春の夕に基督を憶ふ』の一篇などが初めてであつて、それ以來同君の文章は隨分愛誦したものであつたが、顏を見あはせたのは、自分が大學へ入つた明治二十九年の秋冬の頃であつたと思ふ。相識になつたといふよりも單に顏を見あはせるやうになつたと云ふだけである。それはケーベル先生の希臘語學の時間であつた。學年に於ても二年の長者であつた上田君は、一二年級の自分等三四名と共に希臘語の初歩を學ぶ必要は今更なかつた筈であるが、どういふものか、をり〳〵姿を十八番室あたりに現はして一所にキューネルの敎科文典でアウフガーベをやつて後進者を感心させてゐた。或時 ῥοδοδάκτυλος（薔薇いろの指したる）といふ語が出たのを、敎師から「上田君、これは何の形容ですか」と問はれて、曙の神の名を擧げて自分等を默聽せしめたことなどが、今も記憶にのこつてゐる。かういふ工合であつたから永く受業を共にするのは迂と悟つてか、間もなくその瀟洒たる金釦すがたは影を隱してしまつた。ケーベル先生は「上田君がしばらく見えないがどうしたか」と吾等に問はれた。たしか、二年生であつた吉田賢龍君が He is very *busy* とか何とか英語で云つたら、先生すかさず not *busy*, but *lazy* と皮肉な洒落で哄笑さ

せた。こんな逸話があつただけで、それ以來は自分は同君と再び路傍の人となつてしまひ、ただ帝國文學の上でのみ、或は希臘の思潮を、或は典雅沈靜の美術を、或は細心精緻の學風を論じた同君獨特の美辭に醉はされるだけであつた。又同誌上に吾等の愛讀した海外騷壇の如きは、上田君の獨舞臺であつて、當時の海外文學界には無二の新聲をひゞかせたものであるが、自分が今主として書いて見ようと思ふ故人の說話研究などの方面に於ても數種の新しい紹介をその欄內に見出し得たのである。當代の藤代文學士が同じ誌上で傳へたレッシングの名句「高潔なる簡素、深沈たる高大」(Edle Einfalt und stille Grösse)を引來りつゝも、騷壇の筆者が希臘傳說の變轉を論じたペエタアの遺著を閱覽して、來因河流の對岸に於てペエタア程の慧筆を揮つて能く古希臘思想の神髓を得たる人少なきを惜むべしと、獨逸の學者に一矢酬いたのは、三十九年のことであつた。レスボス島の傳說口碑集の佛譯を紹介すると共に希臘俗說神仙譚高照談等の研究が時的興味に豐富にして史學に裨益する所多きことを述べたのも、同年の冬であつた。この時分より既に京都講學時代の傳道たる「伊曾保物語考」や「小唄」は胚胎されたと云つてもよいのである。ケルト傳說を詩材に使つたスヰンバアンの新著と新希臘の俗諺戀歌集とを世に彰はしたのは、翌明治三十年の秋から冬へかけてである。アンドルウ・ラングの近世神話學も更に翌年九月の海外騷壇の欄に上された。これらの小論著は稍後れて盛んになつた明治三十年代に於ける神話傳說の研究、俚歌俗言の蒐集を刺戟する料になつたことは疑ひない。

　伊曾保譬喩談の考證が帝國文學の新年號に載せられると豫告されて遂に現はれなかつたのは、何年頃であつたか、明治三十五六年頃ではなかつたかと記憶するが、現に合綴してある同誌を探つた所では判明せぬ。予が三十五年春東京の高等師範に教授となつてからは、上田君と同僚關係が成立ち、學校で偶に口をきくことがある樣になつたが、文學上なり學問上なりの話をすることもなく徒爾に五年間をすごした。四十一年の春、予の伯林留學中、巴里から上田君が漫遊に來たとき、予の僑居に於て桑木君と落合ひ、三人鼎坐の席で、上田君自身より同君が京都大學の人となるといふことを聞いて、吾等は欣喜の情に堪へなかつたことを思出す。

　それから上田君は巴里でアナトオル・フランスに會つた話をする、桑木君は音樂や演劇の談を持出すといふ樣なことがあつたが、何の話ともつかず氣が異常にはずんだことだけ覺えてゐる。間もなくこの珍客は伯林を去り墺都を經て伊太利に入り、フィレンツェより記念すべき繪葉書を送つてくれた。今本誌の卷首に揭げるが卽ちそれである。こんな風にして上田君と交誼を結ぶやうになつた予が一年後に倫敦から巴里に轉學して同君の舊居に入つた時分には、君は既に歸朝して京都大學に講師となつて居た。

　その四十二年の五月には、予も歸朝後の假寓を三本木の信樂に求め、丁度君と一箇月餘同宿することとなつた。教授任命の辭令を受けたのもその際で而も同じく五月十七日であつた。こんな因緣で、いつしか話が伊曾保物語に及び、君は行李中から後年高等師範の所藏本たる寬永十六年板を謄寫させてあつたのを予に示し、これを翻刻し名譬喩談の出典を註して世に出したいものだと語れば、予もカバンの中より大英博物館所藏の天草板で、文祿に刊行した羅馬字綴本を自ら手寫した帳面を君に見せて、これを國字に書改めて出版して見たいなどと語すやうに進んで來た。然し當時予の同書に關する興味は桃山時代の國語資料としてゞあつて、

次いで異國情調の喚起と古書趣味とが主なものであつた。之に反して君の研究は專ら比喩譚の轉變由來に關する側であつたが、無論別趣の興味も伴はないではなかつた。やがて予の借りて居た京都大學圖書館の萬治版や、其後國文研究室に入つた元和活字版などをも參照し、新たに手づから「古版伊曾保物語」と外題せる板下の原稿を作り、既に七十餘枚に及んでゐる。即ち上中二卷は寫了つて、下卷の首め三枚ほどの所で筆がとまつてゐる。外題の下には、「上田敏校註」と手書してあるから、單に翻刻する計畫ばかりではなかつたことが明かである。將來もし物語の古版本を完全に翻刻し故人の考證を附し、其遺志を果たすことが出來るならば、定めて地下に滿足するであらうと思ふ。日本教育文庫（明治四十四年）十錢文庫（同）文明源流叢書（大正二年）の所收本は萬治繪入本であるから、上田君が寛永元和等の舊刊本の翻刻に手を着けたのは適當な企である。

文祿本の紹介は、既に慶應四年五月の遠近新聞、明治二年七月の中外新聞にあらはれてはあつたが、正確に精細に內外の學者にこの稀覯本のことを傳へたのは、明治二十一年に出たサトー氏の日本耶蘇會刊行書志であつた。爾來二三の人がサトー氏に據つて同書を世に傳播させたが、上田君も明治三十六年十月「外國文學の研究」と題する樗牛會の講演に於て之を紹介し、四十年三月その筆記錄を「文藝講話」中に收めたことがある。予が四十一年十二月より翌年正月にかけて大英博物館の讀書室に之を謄寫し、四十三年度の「藝文」に於てその國字還譯を試み、翌四十四年之を單行本として出版するに至つたのも、一にはサトー氏に負ひ、二には上田君の同情にも由ることである。四十四年の五月二十一日附の手簡を、本稿執筆中、而も今しがた予の文祿本の手帳中に發見したが、それには「ジェイコブス伊曾保二卷御使に託し候間御ゆるりと御參考被下度候」云々とあるので、今更この事を思出して當時を追懷するの情に堪へない。同君が四十三年十一月二十七日岡崎の京都府立圖書館樓上の北室に於て、史學研究會第三回の總會で『伊曾保物語考』を講演して、この譬喩談の傳統を東西に亙つて博搜したのは、今尚會員間の語草となつてゐる。講演要旨の自稿は、四十四年四月刊行の『史學講演集』第四冊に掲載せられ、又その拔刷も同志の人々に多少頒布されてゐる。上田君の研究の方面に就いては、四號活字十二行九十二頁に過ぎざるこの一小册子は忘るべからざる著述で、將來この種の說話の出典系統を考證する學者には缺くべからざる參考となるに違ひない。

この講演の稿案以前のものかと思ふ手稿に、伊曾保物語序論の細目と、本文及各項の比照と題する標目とがあり、更に類語細目などと書きちらした紙葉若干枚がある。これら日本紙に毛筆もて淨書したものの外、洋紙に書いた伊曾保關係の斷簡零墨は頗る多い。又ノート・ブックに書いた同種の稿本は、多少まとまつたものと斷片的に記入し又混同して書留めてあるものとを加へてざつと見わたした所で、京都の方に六册ばかり殘つてゐる。それらの斷簡、册子共に隨分古い手書もあり、又重複錯綜見わけかねる所も少くない。又前記のジェイコブスの名著をはじめ西洋の方の典籍も故人の架藏中に散在することは言ふまでもない。然し彼も此も他日の整理と調査とに待つの外はない。

今はまだ故人の遺著遺稿の書目を各その年代順に配して列擧するまでには進んで居らぬ。姑く說話研究の範圍だけに止めておくにしても、例へば京都府教育會の冬季講習會で演述した御伽話につきての講演（四十三年か四年か

不明などの事も、調べれば直にわかる筈だが、休暇中のこととて思ふやうにはゆかぬ。別に又外題を Folk lore（Märchen）と標し、内題に民俗傳說と書いて、目次をも掲げ、緒論本論結論の三篇より成る手稿本の一册子がある。故人の遺稿としては、大學講義稿本の外にはとにかくまとまつてゐる著述である。別に同文館（？）の「最近思潮教育冬季講習錄」の中に印刷された「民俗傳說」と題する講演要旨約十四頁のものがある。俗說學と傳說研究との二章に分れてゐる。以上二三の稿本刊本は今正確な年月は知らないが、直接に相關連してゐるものたるは明かである。「昔噺物語由來」と題する十頁餘の論文が「六條學報」に見はれたのは四十四年の正月であつた。

前に舉げた伊會保比喩談の研究に關する手稿中にも、其他の說話の攷究にわたるものあり、文友館の原稿用紙に「威尼斯商人の出典」と題する論文の淨書されたものが三頁殘つてゐる。これらの外既に公にした論述の中にもまだ存するであらうと思ふが、今一々取調べる材料に乏しい。希くは同好博雅の士より示教を得たいものである。近年はバアトンの亞刺比亞夜話集などをも購入し、進んではその說話の研究にも入つてゐたやうである。

之を要するに故人は典雅な趣味に富んでゐたと共に、說話俚謠の蒐集攷證に力を割いたやうに浪漫風の傾向が豐かであつた。吹田君の追懷錄中にも見えるやうにヘルデル振の趣を備へた所がある。故人が文壇に學界に又一部の社會に寄與した功績を稱へるのは予の任ではないから、今は單に故人が說話研究の造詣の一端を述べておくに止めた。他日幸に機を得て、故人が日本の言語文章の上に與へた若干の影響、さては故人が有つてゐた鋭敏な言語感情などのことを、稍精細に敍したい心地がする。

それにつけて想起されるのは、かつて文藝委員會に於ける一事業として擔任したダンテ神曲の翻譯のことである。日本に於いてダンテといへば、先づ上田君を偲ばざるを得ない。吾等は青年時代に「しがらみ草紙」に譯出された鷗外博士の「即興詩人」によつてダンテの聖曲なるものを知り、又なつかしき「文學界」の紙上で屢々上田君によつてダンテの閱歷を窺ふを得たことを記憶する。明治三十四年に『詩聖ダンテ』の撰述あつて以來、茲に十五年、其間歐洲留學中には伊太利南遊の擧あり、京都講學中には文藝委員會よりの委任あり、一とせ詩人記念祭の催しあり、故人の篤學なるや必ず神曲の翻譯に吾等を滿足せしむべく、又詩聖の研究に一歩を進むべきことを疑はしめなかつた。吾等は殊に故人の文才を以てして神曲翻譯の文體用語に一新生面を開くものあらんと期待してゐた。それにつき或時故人より口語譯を試みようかと云ふ話を聞いたことがある。然し頃日東京の[illegible]木氏を經て傳はつた消息によれば、神曲譯稿の一小部分が殘つてゐるのを鷗外博士が見出された趣であるが、譯文體はどうであるか、予の未だ知る能はざる所である。いづれにせよ上田君が神曲の譯を完うせずして他界したのは、日本文壇上の一大恨事である。

（大正五年九月、「藝文」、八月十六日稿）

其三

早いもので、もう上田君の三周忌が近づいた。記念に出版さるゝ遺稿のダンテ神曲も、僅に地獄篇の首めの七歌ばかりに過ぎないもので、而も未だ彫琢を經ざる粗い未定稿のまゝなものながら、知友門弟が故人を偲ぶよすがとしてはこよなきものであらう。歿後二年間に神曲の飜譯さては譯述が二種ほど出で、その外、[illegible]生の飜譯も世にあらはれ、ダンテ研究の論文もちら

ほら見えたが、格段の希望を以て上田君の譯の出現を待ちうけて居てくれた人は少くないことと思ふ。詩聖ダンテの著者として、又文藝委員會の囑を受けて神曲の繙譯を擔當した斯界の泰斗として、その譯稿の如何なるものなるかは、多くの人々の注視を洩れぬ所であらう。然しながら譯稿は、執筆中多少の添削は施されてあるものの、もと〳〵粗つぽい初稿であつて、文句の洗練を經てゐないのみならず、譯篇としても完備したものでないから、必ずや故人を知る者の期待に反くことが多大であらうと恐れる。一體上田君は文章の彫琢に凝り、用語文法にも中々意を用ゐ、假名遣などのはし〳〵をも等閑に附せぬ用心家の方であつたが、今度の譯稿には、急卒に筆を下した痕が見え、その邊の用意は聊か缺けてゐるやうに思はれる。ダンテ自身が一かどの國語學者或は國語論者であつたやうに上田君も亦單に一修辭家たるに甘んぜずして國語上百世の宗とならんとする抱負を懷き、隨分幾多の新造語や新譯語を試みて操觚界に供給したこともあり、或は文語口語の調和を謀り新文體の創始に意も悉した功もあつた。かういふ點についての功績も相當其筋に認められたらしく、臨終の際旭日章の加授を詮衡されたをりにも、新用語の供給といふ點なども算へられたのではないかと信ずる。言語文字の用ゐざまに關しては、殊に私などは故人と話合つたことが多い。故人と私等が西洋に居た頃、同君が南遊してダンテの古蹟から繪葉書を寄越したのに對して、稍後れて伯林より南下してフヰレンツェを訪うた私は、巴里に居た上田君と、東京大學なる同姓の恩師とに向けて、ダンテの大理石像の繪葉書に、

言靈の幸はふ國のみ民われ
ダンテの像をあふぎて立つも

と記して送つたことがある。故君の詩聖ダンテの名著は萬年博士にデヂケートされてゐることは讀者の知る處であらう。上田君が神曲の口語譯に關しても相當の考へもあり抱負もあつたことは、私も推察してゐたのであるが、それらの考案や抱負が十分實現されずに、いはゞ詩篇の劈頭にあるやうに同君が人生の半ばにして暗き他界にさまよひ入つたのは返す〳〵も殘念の至りであると言はねばならぬ。その外、故人の文章に故事や典據が多かつたこと、又政界社會の人爲に對する側面批判や輕き皮肉が微妙簡潔な言辭にあらはされたこと、傳說に關する興味の深かつたこと等、ダンテの詩篇と上田君の構文や趣味との間に、何やら似通ふ所があるやうに思當ると、同君本來の傾向がおのづから然らしめたに相違ないが、同君がダンテの研究も亦與つて力あると私は考へたいのである。日本のダンテ學史の上に今回の譯稿が記念せらるべきのみならず、上田君の文章用語趣味の一面がダンテに負ふ所あるとして特筆されねばなるまいと思ふ。伊太利初め西洋の主なるダンテ學會などに向けても、大阪の大賀氏等の介意を得て、今度出版の譯本を寄贈して西洋にも紹介したいし、又無論我國にありても相當の範圍にこの本を頒布したいものと自分は希望する次第である。來る大正十年即ち西暦千九百二十一年は、ダンテの六百年遠忌に相當するから、そのをりにもこの譯本は本邦に於て大いに意義のあるものとなるであらう。

（大正七年七月、「太陽」）

伯林の思出

新着の獨文ヘッベル號を無極君から借りて歸つた其晩、差當り短かさうな三篇を讀んで、詩人の偉才に今更驚嘆すると同時に、數年前伯林でヘッベル劇を觀たことを追想して、其折の印象や感興を喚起さうと力めてみた。期せずして私の用意に在た「マリヤ・マグダレーナ」の方は、ぼんやり記憶に殘るだけであるが、「ユウディット」には種々の處々印象が鮮明として殘る。殊に四幕目や五幕目の神殿の場は、演じた女優の技術で大分見ごたへがあつた。けれども、ホロフェールネスは俳優の柄や力に於て物足らない樣な感じを惹起させた。

遺憾に堪りながら、當時の日記を取出して見た。其頃の日記には懷中日記に書いてある、分一寸か其の半分ほどの欄の中に一日分の記事が書いてある丈だから、どうせ細かい資料を取ることは出來ないのだが、ぼつり／＼讀んでゆくと、伯林在留中の氣分が蘇活して來る。

一九〇八年の正月元日にK君H君と連立つて一番館や大使館に年始廻りを濟ませた後、並木通りのクライネス・テアーターで「マリヤ・マグダレーナ」を見た記事がある。除夜には大使館＝F書記官の家でシルヴェスター會に招ばれて、街頭の騒ぎどよめきを餘所にして家庭的の娯樂に耽つた。其盡しでK君が王立座の名優マトコウスキーもどきにハムレットの Sein oder nicht Sein の一句を獨唱し、自分が藝の無いにこ藝を缺いて猫の泣きまねをした事もある。「新年お目出度」を家々の窓から歡呼しあつて後、程なく歸つたのが曉の二時とある。寒がりの自分は、「天氣よけれど寒し」と書いて置いた。

二日の條には「曉や初夢語る人もなき」と拙劣びた駄句があつて、漱渊先の文典をさらつたなどの記事がある。四日には朝獨逸人の學友に史記の匈奴列傳を讀んでやつて、午後に舊版の古本を買つたとある。翌日H君とこの名劇をレッシング座の甘芝居で見て準備であつたと思ふ。この劇から受けた印象は强かつた。次の日の晩にK君はじめ同宿の三人と共に、ノイエスシャウシュピールハウスで「ユウディット」を觀たことは見えて居るが、何の感想も書いてなくて、「小雨あり街上凍る」など、と、不要な文句で其の日の日誌が結んである。然し此の一句で、自分だけには其の夜觀劇の歸りの感じが痛切に味はれる。其の夜の番附もしまつてある筈だと思起して、レクラム本に挾んで置いた番附の切拔を探出して見ると、ユウディットはゲルトルード・アーノルド、ホロフェルネスはアルトゥール・ヱッリンが勤めた。覺えない名である。

其頃の日誌には、グルーベ教授、フィンク師の名が屢々見えて居るが、共に今は故人となられて仕舞つた。感慨が深い。ヴェッフェンといふ人のラ論を讀んだ後、三日目の、正月十一日の夕食に伯林市外のフィンク氏から招かれた時、食事は實に惜しい、氏の尊族らしい老人と同行して市中に歸つて來る途中、兩人にはまつたラの話などをしあつた事が想出される。日誌には相變らず「雪後の半月時の如し」などと結んである。

十四日の…に接して意外に落ちた記事を讀んで、ほッとする……

一ケ月ばかり觀劇等の記事の見えるわけも

ない。二月七日にクルムバッヘルのビザンツ文學史を讀んだ覺書があるが、これは後に伊太利旅行の歸途、ミュンヘンに寄つてこの碩學を訪ふ因由を成したのだ。この老儒も今は易簀された。同じ日の晩H君と共に和獨會に出席してナホッドの日歐交通由來談やミュンスターベルヒの古書談などを聞いた。日本の活字印刷術に關してミュ氏の說に異論を挾んだ事もあつた。

　こんな事で、逆に前年度の日記を繰返して見るやうになつた。一九〇七年十二月の末から段々遡つて觀劇の記事を拾讀みにしてゆく。二十五日の降誕祭に、クライネス・テアーターに『人形の家』を見るとあつて、「雪ちら〱」と書添へてある。同二十一日にヘッベルの『ユウディット』を讀む、ブランデスの『イプセン』を購ふ、大通り聖誕祭の景氣賑かなりとあつて、「弘坊誕生日につき繪葉書を送る」と書いてある。其の次に「夜よくねられず」と見えて居る。この愛兒も今は骨となつた。十八日には、K君と獨逸座の別舞臺でイブセンの「亡靈」を觀た。觀劇料が豫期より高かつたので少しまごついたことを思出すと共に、アルギング夫人の好かつたことなども覺えて居る。この頃はイブセンに凝つて居たので、其樣な記事がちらほら見える。段々前へ〱と繰つてゆくと、『サロメ』や『ローエングリン』を聞いた記事などが、眼につく。あの淒婉な女王の舞ひが目前にちらついたり、あの序開の音樂が耳の底から波動して來たりする樣に思ふと、全く伯林氣分になつて、今この無趣味な生活を廢都に送る身を忘れさせる。十月九月と讀み返すと、イエナ事件について F君に急電すとか、F君イエナより追放の信に接すとか云ふ記事が眼を横ぎる。F君がこの名都の獄中で誦したといふシルレルの詩句を今想起さうと試みたが、忘れてしまつた。この邊で色々追懷に耽つて暫く小さい懷中日記を措いたまゝ默想した。

　再び翌年の分を繰返す氣になつて二月中旬の日誌を讀む。『アルトハイデルベルヒ』を新劇場で立見をして苦しがつた事が書いてある。高等學校時代に歌舞伎座の三階の大向で團菊の芝小屋を立見した時以來の苦しさであつた。二三日程經つてレッシング座で女優トリーシとライヒャーの「ロスマースホルム」を見た。半年經つて暑中休暇にエルベ河畔の小瑞西で催されたエスペラント萬國大會の遠足會でライヒャーに會つた時、この事を初對面の挨拶に述べた。此の大會の餘興にはエスペラント語でゲーテの『イフィゲニア』が演ぜられたが、ライヒャーと、米國から歸つて來た其の妹とが主なる役を勤めたのであつた。同じ年の二月の十日に伯林でH君の僑居で、君と共に、女優をしてゐる家の娘から同じ戲曲の一節を聞かせられた。ニーチェが好きで面白い女であつた。

　二月の記事にはこの外グーノーの『フワウスト』の歌曲を聽いたり、「ミニヨン」の正本を讀んだりした事があるが、三月の二日には、U君が訪れ、K君と鼎坐して談合つた新味が書留めてある。其の夜U君は音樂か歌曲かを聞きに行き、自分は『ヘッダ・ガーブラー』を見にいつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

　ヘッベルの記念から日記をくりかへして獨り興に入つて居る中に、夜は更けてひつそりとして來た。伯林の寂しみを偲ばせるばかり。

（大正三年四月、「藝文」）

花の名三つ四つ

太平洋は北の航路を選んだ爲、千島沖からアリウシャン灘へと弧なりに東へ進んだ船中は、晩春五月の半はとはいへ、冬の外套を着てゐてもふるへるやうに寒く、その上、波は荒く、日和はわるし、この十數日間の潮路は眞に堪へがたき旅であつた。亡友内田君が三年前の夏、愉快げにこの海を渡つて、ビクトリヤ港よりの初信に、その土地を讃美して、氣候中和、風物絶佳、人情敦厚と書き送られたのを想起して、早く渡り越してあのビクトリヤに着きたいものだと、あこがれぬいて居たのであつた。港に着いたのはたしか五月二十日頃の朝であつて、碇泊僅か三四時間ほどのことであるから、急いで一とほりの見物を果さうと思つて三々五々組合つては自動車に打乘り、一時間たらず、市中をぬけ公園を過ぎ屋敷町を通り海岸をつたひ、生きかへつた様な心地になつた。その癖に薄日和ではあつたが、うらゝかな氣持の好い日で、微風に南を拂ふことに、ほんのりライラックの香りおして來て、木陰にほふ日本の小春を郊外に散歩してゐるをりの様な氣分になつて、十數日が間のいやな旅路を忘れはてることが出來たのは嬉しかつた。ホイットマンが、

石灰で塗り白められた板塀のほとり、古い百姓家の戸口の庭に、
高々と生ひ繁つてライラ、クの木叢は立つ、ハート形の濃緑の葉、
空向きに、先きぼそりな、香の高いやさしい花、
一葉毎にその葉は奇蹟、——前庭のその木叢から、
やさしい色の花房と、ハート形の濃緑の葉の、
その一枚を、花もろともに私は折る。
(有島武郎氏の譯)

と、うたつたその花を十三年ぶりでこの異國に來て香をかぎ色を見ることが出來たのだ。何といふなつかしさであらう。獨逸ではこの花をフリーダと呼ぶ。私が瑞西のお花畠をとほつて伊太利の旅から再び獨逸にもどつてライプチッヒの殺風景な都會に落ちついたのは、やはり五月の初めころであつたかと思ふが、そのをりは正にこのフリーダとカスタニエ(栗)の花とが眞盛りであつたのだ。私の住んでゐた町の近所を流れるプライセといふ小川に藻の花が流れて來たのに見入つたのは、それより少し後のことである。あのころのわびしい生活のことを想出すと、きつとあの藤色をしたフリーダとこの白い藻の花とが眼に浮んでくる。今この北米の港に寄つて、垣根のそばなどに咲くこのライラックに出あふと、昔の人の袖の香ぞすると詠じた古歌の趣がして感興が高まらざるを得なかつた。

海岸の砂地や岩のはざまなどには、謙遜のしるしとスコットがたゝへたエニシダの花が、所せきまでに、あちらにもこちらにも咲きみだれてゐた。元來この黄色い花が、枝もたわゝに叢なして咲いてゐるところは、私ら日本人の趣味からいふと、あまり好ましいとは思へないが、をりにつけての興にそゝられて今だにその色を忘れることが出來ない。青つぽいその枝を一二本切りとつて見れば、なよ〳〵としたその姿に、支那では金雀兒と形容され、西洋ではハピリヨン(蝴蝶)のひるがへる狀に比べられた可愛けな

花がついてをるのは、成程羅馬の古詩人このかた往々近代作家の筆にも上つたのも道理だと思はせる。蘭英の語には、エニシダをはゝき花といふ。叢生するさまの箒のやうであるからだらうが、即ち詩興がさめぬでもない。之に反して昔日本に來た南蠻の伴天連は、これを日本語に譯することが出來ずに、萩に似たる小木と譯しておいてくれたのは有りがたい。

詩興がさめかゝると、專門がら私の頭はすぐ名義のせんさくに走るのを常とする。一體エニシダといふ名は、日本語か外國語か、又ライラックといふ語は、元來どこの語だらうなどと詮義だてするのは、何事ぞ花見る人のと云ひたくなるが、持つたが病の私のことゆゑ、われには許せと、この邊から少し語源論に入ることにする。尤もライラックやエニシダの語源を、あの眼のまはるやうに忙しい亞米利加三界で研究する樣な閑日月は、まさか私にも無かつたのであるが、今や歸朝して三ケ月、そろ〳〵又異國がこひしくなりはじめる時分になつた矢先きだから、思出草に花の名でも探つて見よう。ライラックといふ語が、西班牙語から英語に入つたこと、その西班牙語も段々それからそれへと遡ると、亞剌比亞語から傳來し、更に波斯語へとのぼり、畢竟印度の古語にまでも達する始末であることは、手間ひまいらず直にわかる話であるが、エニシダといふ語の出所は少し面倒である。先づ第一、日本外來辭典に、この名を擧げてないのに失望し、念の爲め村上直次郎氏の舊著、「往時の外國交通が國語に及ぼしたる影響」の題名下にあらはれた外來語彙にあたつて見ても出てゐない。上田、松井兩氏の大日本國語辭典にも、單に金雀兒の漢字を宛てたのみで、語源を擧げてなく、洋語か否かは知ることが出來ない。大槻氏の言海には、蘭學者のお家だけあつて、エニシダ、蘭語エニシタの轉なりといふ、原字索め得ずとことわつてある。俚言集覽の增補した部分には、語の來歷には觸れず、播磨の俗、きじのををいふと方言が出してある。雉の尾とは、面白い名づけ方だと少し感心した。倭訓栞には、洋語その他の外來語を擧げてあることが割合にあるにも拘はらず、エニシダの名は見えないのは遺憾である。去つて德川時代の節用集類を調べる。廣川氏の蘭例節用集（文化十二年）にはと思つて見ると無くて意外。槇島氏の書言字考合類大節用集（元祿十一年）にも見えない。たゞ寺島氏の和漢三才圖會（正德二年）卷八十四灌木の部に、金雀花の名を掲げ、之を單にキンジャククワと音讀しただけで、和訓も俗語も別名も註釋も擧げてないが、書譜を引いて、春初開黃花、甚可愛、儼如飛雀、云々とある。即ちこの文によつて、人をして宛然エニシダの花を思はしめるに止まるばかりだ。二三の古い本草書を見たけれど、まだこの名にぶつからぬ。いづれ蘭山慾齋以後の新代本草學者の書を參照せねばならぬことと思つてゐる。

言海の說は、多分大槻磐水の考に據つて成つた有馬元晁の蘭說辨惑（天明八年）に見えてゐる所に基くのであらう。それにはエニシダの本名はエニシタであると云つて、タの字を淸音に讀ませてあり、さて詳かなることは月池法眼の和蘭藥選といふ書にありと詳說を避けてある。そこで桂川甫周の和蘭藥選（京都帝國大學所藏の寫本）を見た所が、その寫本は不完全な端本で磐水が指摘した語詞どもが出てゐない。そこで甫周の弟に當る森島中良の類聚紅毛語譯、即ち後に蠻語箋と改名された小さい蘭語の分類體の字引を見た所が、金雀花にエニスタと傍訓し、その註語の下に假名で、ブレム・ブルームと蘭語を註し、更にその下にゲニスタと別語を加へてある。それ以外の解釋は出てゐ

ないのであるが、先づ見當がついて來た。この小冊書は寛政十年の編であるが、蘭語は片假名で入れてあつて蘭字が書いてないのを、後に弘化四年に箕作阮甫が増訂をすると共に蘭字を入れて嘉永元年に出版したのが、改正増補蠻語箋である。それには、金雀花（Genista（ゲニスタ））としてある。即ちこのゲニスタがエニシダの原語であらうと云ふことだけ推定がついた。但し中津侯の奥平昌高の蘭語譯撰（文化七年）といふ分類の辭書にも出て居ない。

蠻語箋の舊本に、エニシダの本名ニニスタをブレム・ブルームとしてあるのは、直譯すれば、箒花である。即ちブレムが蘭語で箒、ブルームは花の義である。Brem-bloem と綴るのである。蘭語のブレムは英語のブルーム Broom に當るのである。若し如上の探究を逆に試みたなら、英語のブルームから蘭語のブレムにも行當る筈であることは、言ふまでもない所である。それから蘭英兩語のシノニムを目つければ、容易にゲニスタといふ拉丁名を求めることが出來るわけである。とにかく森島氏が、兄桂川氏に負ふ所の多大なるは言ふまでもないが、エニスタといふ本名と、ブレム・ブルームといふ蘭語と、ゲニスタといふ拉丁語とを擧げておいてくれたのは、この語の來歷を研究する者の感謝すべき所である。

ブレム・ブルームは單にブレムとも云ふが、この語形でも又ゲニスタといふ拉丁語形でも、どちらでも、江戸ハルマ系統の藤林氏の譯鍵（文化五年）には出て居ない。長崎で甲比丹ドウフ及譯官の手で成つた所謂道譯ハルマ（文化十三年）乃至其刊本和蘭字彙（安政二年、江戸桂川氏）には、ブレムを草の名、未詳としてしまつて日本の通名を當譯しないのである。ゲニスタの方の拉丁名では、古く蘭學者間に用ゐられたボイスの學藝辭典やミルレル等の本草辭典などに詳説が出てゐるが、當時の蘭學家と本草家もそこまで攷究を及ぼさなかつたと見える。右の本草辭典（一七四五年版）を見ると、學名 Genista Juncea の下に、Brem 又は Genista と通稱を擧げて、撓み易い植物であるから、拉丁語のゲヌ Genu 即ち蘭語のクニー Knie 膝といふ言葉を以て名づけたのであると釋してある。それ或は然らんと思はれる。されば、そのたわやかな姿に比して、一五九五年、文祿四年、天草の耶蘇會學林で出版した拉丁語辭典では、このゲニスタ（葡語で言へばジェニスタ）を拉丁語で植物の名と訓した上に、更に丁寧に萩に似たる小木のたぐひ」と日本語で註解を加へたのである。一六〇三年即ち慶長八年長崎の耶蘇會學林で出版した日葡辭書には、無論このエニシダといふ樣な新參な語は出て居ない。

英語では、この花を一にジェニスタといふ。必ずしも拮屈な學名としたばかりでなく、多少は熟した語例のやうにも思はれる。何となれば、この原語は、プリニウスの博物志やヰルギリウスの詩文にも出てゐる古語であつて、近世の學者が作つた學名ではなく、あちこちのローマンス諸國語にも、その轉訛した語形か今も使はれてゐる。佛語ではジュネー Genet といひ、伊語ではヂネストラ（Ginestra）と呼び、葡語ではジェスタ（Giesta）などと稱してゐる。獨逸でも俗語の拉丁から取つてギンステル Ginster 又は單にギンスト Ginst といふ。日本語のエニシダは、蘭語のゲニスタ又はヘニスタ、或はむしろ佛蘭西流に發音したジェニスタの語頭父音が落ちてエニスタ又はイエニスタとなり、それが更に訛つたものだとも考へ得られぬでもなからうけれども、それはそれ以上證明がつかない場合に推定を許される所である。葡語のジニシタといふ音は、中間のニといふ音を脱してをる點に於て、日本のエニシダ、又はその本音エニ

シタといふ語形を生ずるには稍縁遠いといふ感がする。尤も三百年前の葡萄牙辭書が今座右にないから其語の古形如何を斷定しかねるが、多分右のやうに見ておいて差支なからうと思ふ。それに反して西班牙語では、拉丁のゲニスタを Hiniesta と訛り傳へてをる。これはエラスケスの發音附西英辭書にも明記されてある如くエネエスターと讀むのであるから、語頭父音もとれてをり、我國のエニスタ（即ちエニシダの舊名）に最も近いわけである。加ふるに金雀花の西班牙種といふのは有名であつて、前記の學藝辭典や本草辭典の如き十八世紀時代の舊辭書のみならず、近時の英佛獨の辭書類に由るも、その事は爭はれぬから、かた〴〵エニスタの語は西班牙傳來としてよからうと信ずる。西班牙種金雀花のことは、例へばラルースの十九世紀大辭書に參照してもわかる所である。

元來葡萄牙語と西班牙語とは、名辭の語形が似寄つてゐるのが多いのであつて、日本語となつた所謂南蠻語でも、葡西どちらから入つたか判明せぬ形が多いが、貿易史の上から推定して大抵葡語と定めておいて間違ひが少からうと思はれるのである。然るにこのエニスタの場合は、西班牙語から傳はつたと推定すべき徵證が十分であるから、他の類例、たとへばメリヤス（莫大小）が西語のメヂアスから來たか葡語のメイアスから來たか、どちらの九州訛りと說くよりも、たしかに蓋然性が多いわけである。然し、その名の本邦の文獻にあらはれるのが頗る遲く、尙後節に說く二三の花の名よりも遙に後れてゐるので、果して古く鎖國以前に西班牙から傳はつたのかどうかと人をして疑を懷かしめるのである。即ち鎖國以後百五十年以後の天明寛政時代までも文獻に載らずにゐたのであるから、その點の疑念は當然である。但し、一方には文獻上の調査が今十分に進んでゐないし、和漢三才圖會の所說もあることであり、或は又蘭人よりして、萬更緣がないでもない西班牙の語を單に名稱として傳へることが不可能ではないとも考へられるから、ともかくも爰に自分の說を提出しておく次第である。

亞米利加より英吉利に渡つた頃は六月の末であつたが、それより七月にかけては、日本ならば花菖蒲の季節であらう、倫敦は、薔薇のさかり、スキートピー、さてはカーネーション、それよりそれへとうつろひゆく花の會にも、つい日々の新聞で景況を知るばかり、たつた一ぺんスキートピーの競進會を見にいつた所、何十年ぶりとかの日でりつゞきで花はしをれ色あせて今更ながら一朝の榮と我身よにふる時代おくれに無常の聲を發したばかりであつた。家信の中には、女兒から今頃は何の花、かの花と、御疊でせうなどとをりにつけて羨望してよこしても、「花より語源」とこちらは古い語學書の上を蝶々と移つていつたのも笑止である。

カーネーションといへば、肉色が本義で、元來肉色の石竹をさしたものに違ひないが、後世には必ずしもさうでなくなつた。古くは阿蘭陀石竹と唱へ、又原語を少し訛つてアンジャベーイルとも呼んでゐた。今も國語の辭典や英語の字引にはこの蘭語の形をも出してある。松村氏の植物名彙などにも載つてゐたかと思ふ。享保五年の西川如見の長崎夜話草卷五の附錄に長崎土產物と題して、其地の品物を舉げてある中に、南蠻紅毛より傳へたる草木多しと云つて、數種の植物名を記してゐるが、そこにも紅毛石竹、らうざ花などが出てゐるのである。尙それより古くは元祿七年の貝原益軒花譜（卷中）四月の部にも、同じ著者の大和本草（寶永五年）卷七花草類中にも記載してある。大和本草の方には、

又紅夾石竹は大にして香あり、紅白千葉單葉、或紅白相まじるものあり、しぼりと云ひ染色の如し。

とあるから、今のカーネーションに同じだといふことがわかる。正徳二年の和漢三才圖會卷九十四濕草の部に瞿麥の條下に、阿蘭陀石竹を説明して、株葉大、葉硬强、花亦大、有數品として阿無之也闍伊流といふ原語が初めて掲げてある。新井白石の東雅(享保二年)の總論に、番語の今も世に行はれぬるはとて、數個の洋語を擧げてある中にも、玫瑰花をロウザ、石竹をアンジャベルと出てゐるばかりでなく、京都の本草家で名高い松岡玄達の用藥須知にも、阿蘭陀石竹をアンシャレン、又アンチャヒルと名づけると出てゐる。この書には、近來一種阿蘭陀石竹と云ありと見え、享保四年に江戸近在の植木屋か農夫かであつた伊藤伊兵衞といふ者の著した名高い廣益地錦抄にも、阿蘭陀石竹か朝鮮なでしこか、何方か又は兩方かが寛文年中に渡來した趣が出てゐるから、それやこれやで渡來の時代はほゞ見當がつく。早くも寛文頃に出來たと思はれる阿蘭陀南蠻一切口和といふ寫本の外來語彙がある。異本も多し、誤傳誤聞誤寫の誤も頗る多い書物であつて、色々の題名で傳はり、内容も少しづつ變つてゐる書物である。著者の名はわからぬが、長崎の通辭か外科醫者系統の者が編錄したもので、楢林の如き家の人の手か、乃至それに就いて學んだ舊式の人の著述であつて、あまり確實な字書とはいへぬ。然し、この口和げの書卽ち和譯の辭書中に、一いろは大集部といふ本文があり、それに「阿蘭陀南蠻ラテイ三ケ國の口和ゲ」と題して、和蘭葡萄牙及び拉丁三語の小字書があるが、その中に、フロウリストウニセイといふ拉丁的語形を掲げ、その下にヲランダ口としてステインバンフイシといふ語を對照し、最下に石竹といふ名を錄してある。フロウリスは拉丁語ケロースの第二格たる所屬格であり、花を示すことは、別の條に單語としても掲け、蘭語のブロムと對さしめてあるから間違ひないが、トウニセイといふ語は未だ思當らない。その下の蘭語はステインバンブイシとか、ステインバンブー(ス)とかいふ蘭語で、石竹といふ文字を直譯したものに相當する。されば右の字書からは、結局石竹の洋語はわからぬのではあるが、物の輸入の史的參考には資せられるわけである。

貝原氏は觀賞植物として掲け、松岡氏も、色甚深紅、香氣ありといへども少しく毒有、不可入藥劑と褒貶したが、江戸の本草家の後藤光生は、明治二年に紅毛談二卷を刊し、禁書の厄に遭つたといふ話であるが、アンジャベイル、和俗紅毛石竹といふ、其花香甚よく、其草和邦石竹より高し、其花の露をとり面部の腫物に付けると釋名して、これを外用に供すると誌した。天明八年の蘭説辨惑には、大槻磐水の説を掲げ、アンジャベルは本名アンゲリイルなり、詳かなる事は桂川甫周の和蘭藥選を見よと省略に附してしまつたが、前に述べた如くこの書は今こゝに完本がないから參照することが出來ぬのは殘念である。然しともかくも是に至つて初めて原名の確かな所でわかつたわけである。尤も桂川の流を汲んだ森島氏の類藥紅毛語譯には瞿麥ナデシコをアンゼリイルとしてあり、更にその書を増補した改正增補蠻語箋に於て箕作阮甫は、Angelier アンゲリールと當ててをるから、磐水の説は前後から裏書されてる有樣である。元來桂川甫周は、有名な瑞典の博物學者で蘭國外科醫の名目を以て日本に來朝し江戸にも一度參府したことのあるトウンベルクにも短い間ながら就いたこともあり、中川淳庵と共に日本植物學界の俊才である

と、この學者から譽められた人である。トウンベルクの來渡は安永四年のこと、江戸參府は五年の春で、その時は十六歳であつた。何しろ運よくもリンネウスの後繼者たる學者にぶつかつたので、その名を彼の紀行の中にうたはれ、後年伊勢の光太夫等が露國に漂流した際にも、桂川、中川の名は彼の土にも傳はつてゐたといふことである。されば この桂川から聞いたと思はれるアンゼリイルの名は、頗る由緒のあるものであると思ふ。尤も、純粹の和蘭讀みでないかも知れぬといふ疑がないでもないが、單に文字や綴字の上から讀んだ場合よりも、却つて信用するに足りはしないかと思ふ。之より先き青木昆陽が延享三年に錄した和蘭文字略考の卷二には、石竹をアンゼリールとして、原字 Angelier と共に發音を出してあるから、私は磐水や阮甫のアンゲリイルとよんだよりも、昆陽や甫周の、アンゼリイルと讀んだのの方が適當であつたと考へる。ハルマの辭書にもマーリンの辭書にも、Angelier と Anjelier 兩樣に出てゐる。これらは兩方とも十八世紀中に行はれて日本にも行はれた字引で、佛語と對譯してある。今のカリッシの蘭英辭書などには、一方の Angelier だけを取つてある。思ふに、十八世紀中にも、やはりアンゼリイルと發音されてゐたことと思はれる。精確にいふとアンジェリールといつてゐたに違ひない。即ち日本人が耳から傳へたアンジャベイルなどの音に近いわけである。

アンジェリールは更に簡約されてアンジェール・Anjer ともなつてゐる。一七四五年に出たミルレル等の本草辨書にも見え、日本外來語辭典にも並錄されてある。松岡玄達がアンシャレンとしたのは、アンシャレル即ちアンジェリールを訛つた形であり、アンチャヒルとしたのは、アンジェイルをアンジャイルとし、それを假名で書くときアンジャヒルとイ。の字をヒ。の字に書き、それが更にアンジャヘルと轉じ、遂にベルといふ樣に訛つたので、松岡のは比較的正確な寫音を傳へたもの、長崎夜話草のアンシャベルは訛りの甚しきもの、三才圖會のアンシャヘルは中間の形ではあるまいか。さもなければ、音韻變化の上からは、べの音は出て來さうにもない。然らば葡萄牙語とかに、類音の語形があるかと云ふと、全く見當らぬ。白石が東雅にアンジャベルを番語といつたのは、南蠻語の意味らしいが、それは誤であらう。參考の爲に記しておきたいが、慶長八年長崎版の日葡辭典には、ナデシコもセキチクも共に登錄してあるが、クラボ（Cravo）に似た花とのみ譯してある。クラヴォとは英語のピンクに當る語、原義は爪の義があるが、蘭語でもアンジェリール以外の異名の中には、ナーゲルブルーム即ちつめくさ（爪草）とでも云はうか。直譯すれば、つめばな（爪花）といふ名も別名として存在する。英語でいふとクローヴ狀の花の義であつて、花瓣の形狀から命名したものに違ひない。クローヴは丁香と譯し、又和樣の洋語アンジャベルを宛てた本邦の辭書もあるのは、偶然ではない。之に反して蘭語のアンジェリールの語原は、今こゝに和蘭の語原大辭書がないからわからないが、由來は或は古く佛語から來たものであつて、アンジュ又はアンジェル即ち天使の義かも知れぬと想像する。いづれ他日の攷究を待つことにしよう。若し、それが果して然りとすれば日本の宛字の撫子の字義にも似かよひ、石竹とか、つめ草とか云ふやうな殺風景な意味でなく誠に氣持のよい命名であると云はなければならぬ。但し日本語のナデシコが語原上、撫子であるかどうかは未だ調べて見ないから斷定は出來ぬけれど、文字だけについて云ふと、石竹のやうな可愛らしい感を覺ゆると云ふに過ぎぬので

ある。

「なでしこ、からのはさらなり、やまとのもいとめでたし」とは、枕草紙に見え、人の愛誦する一節の文章の起首であるが、それは唐を慕うた中古の好みで、徳川時代の趣味では阿蘭陀石竹、現代の鑑賞では肉色と名に負へるカーネーションと、花の名もうつろひゆくものである。一草の花は一の段の結末を見ると、薔薇を評して、

さうびは、ちかくて枝のさまなどはむつかしけれどをかし、雨などはれたる行きたる水のつら、くろぎのはしなどのつらにみだれさきたる夕ばえ。

とほつりと僅の筆で留めてある。サウビは古今集の物名に、貫之の詠んだつまらぬ歌が一首あるのを初めとし、源氏や栄花の物語には散見してゐる王朝にふさはしい花である。源順の和名抄や深根輔仁の本草和名などには未だその新しい名が載つてゐないのも當然である。和漢朗詠集に白樂天の階底薔薇入夏開の名句(文集巻十七)を引用してあるのに由つて、王朝の模倣的詩人はいづれもこの句をまねて薔薇と階とを連想してしまつた。本朝無題詩の[illegible]、[illegible]時綱、[illegible]敦光、釋蓮禪の七律をみるとわかる。また王朝のサウビの色香の濃艶さや、石竹と併せ詠ぜられた趣なども わかるのである。詩人のみではない、源氏にしても榮花にしても、はた枕草紙にしても、同じやうに階といふものから離して考へることが出來なかつたので、白氏の感化をこゝにも窺はしめるのである。榮花物語巻十八、玉臺(治安二年)の一節に、御堂の光景を描いて、

淨土はかくこそと見えたり。‥‥この御堂の御前のかたには、また池の方にからんたからして、そのもとにさうび、いゝ、ぼうたん、からなでしこ、れんぐゑの花どもうつさせ給へり、御念珠のをりにまゐりあひたれば極樂にまゐりたらん心地す。

とあるを讀むと、さうびを初め、唐の花いろいろ妍を爭つてゐる有樣は眞に極樂淨土の感が起る。そのサウビを愛した趣味もいつしか變つて、徳川時代になると、ロウザばらと名づけて西洋種の薔薇が輸入された。無論昨今のものとは異る種ではあつたが、新しものずきの日本人には、ロウザ花、阿蘭陀いばら、又は南蠻いげなどと唱へて注目されて居た。然し觀賞植物としてよりは、寧ろ藥用植物として珍重されてゐた樣である。卽ちロウザの油を取つて外用にしたり、ロウズワアトルと蘭語で唱へ、又薔薇露と稱し、香水にしたものを賞美してゐた。ロウザ、南蠻いげのことは、古くは上記の口和之書にも出てをるが、長崎夜話草に、南蠻紅毛より傳へた草木の名彙の中にもらうざ花として擧げ、東雅總論にも、玫瑰花を番語にロウザと唱へて今もその名を傳へてゐると云ひ、共にアンジャベルと並稱してゐる所など、王朝の昔に比べると面白い。この名稱は本草書、外科書などには、屢々見えて枚擧に遑あらざる有りさまである。板本の辭書類には三才圖會(巻九十六)などが古からうかと思ふが、それには阿蘭陀棘とあつて、原名はない。紅毛談にはいゝ、はらうざと舊名をあげ、蠻語箋には蘭語のロースで出てゐる。倭訓栞俚言集覽はもとより、言海や大日本國語辭典にもこの原語を逸し、外來語辭典にも閑却された。平賀鳩溪の物類品隲、寶暦十三年には、巻頭に薔薇露を出してあるのは大いにうれしい。森島中良の琉球談に、南島の年中行事を敍し、

三月上巳の節句とて往來し、くさもちを作りて餉る、石竹、薔薇、いゝ、罹粟共に花さく。

とあるのをよむと、さすが南土の時候の早さが想はれるが、薔薇に振假名して◦ら◦う◦ざ◦ばらとあ

るのが第一目につく。こゝにも赤石竹と並び擧げられてゐるのが奇縁である。小野蘭山の大和本草批正(地巻)には、ロウザは既にイバラの義であるからロウザイバラといふと重言になると、貝原氏の本書を批正しかた〴〵世俗の誤を正しゐるが御尤もである。重言ではあるが、西洋種のいばら、又はロウザ種のいばらの意味で、言語學的に云ふと、からいふブレオナズム即ち重言といふやつは言語生活上しば〳〵起る現象であるのだ。

これに引きかへ葡萄牙語では、日本のローザ、日本の薔薇、原語でいふと、ローザ・ド・ジャパン、又はジャパネイラといふことが、カメリヤ即ち椿のことになるのも面白いではないか。天正十九年に秀吉に聚樂邸で謁見した南蠻伴天連は、殿中の襖かなどに畫いてあつた牡丹の花をさして、大きな薔薇の花と記してをる。言葉の轉用や比喩といふものは妙なものだ。ローザといふのは、元來拉丁語で、葡萄牙語はそのままの語形を傳へ、日本語のローザは葡語から入つたものとも、拉丁語を使つたものとも、兩樣に考へられる。一體ローザの語原を更に遠く追究してゆくと、無論希臘語に遡り、又亞刺比亞語や、古波斯亞語や、埃及語にも連關するので、興味が更に深いのであつて、それには有名なヘーンの研究などもあるが、こゝではあまり深入りになるから割愛する。希臘語では薔薇はロドンであるが、エオリア方言ではブロドンとなる。日本語と希臘語とを結びつけたがる人には、ブロドンのブロはバラと類形であるから好資料を供するわけだ。而もこの比較などは、まづ〳〵穩當な方であらう。呵々。さて最後に追記しておくが、文祿の天草版拉丁辭書には、ローザを、拉丁語を以て花の名と註した上に、日本語で、イバラシャウビの類ひと釋し、更に「薔薇のたぐひをあはせたる油」と、その語の條下に於て、オレウムといふ名について附記してをる。

紫羅欄花、すなはちアラセイトウといふ荳科植物の名が洋語から出てゐるか否かを攷究して、原語を求め得ず苦心してゐる矢先に、小野蘭山の大和本草批正に、荒世伊登乎を、蠻流の外科、此を胡盧巴と稱し、蠻名の如く思ふは誤なりとあるのを見て、聊か腰を折られたが、未だ語原研究の餘地はある樣に思ふ。この語は近時の國語及び漢語の辭典にも載り、人の知る所であるが、節用集や俚言集覽や言海などには出てゐない。倭訓栞の後編には、蠻稱蠻名也、寛文中に來ると、輸入の年代を擧げてあるが、それより古く和漢三才圖會巻百四菽豆類に、阿羅世伊止宇を標出し、正字未詳として漢名を擧げずにたゞ番語乎と疑つてあるのが、私の見た出典では最古い。貝原氏の大和本草や花譜には荒世伊登宇と出てゐるが、まだ紫羅欄花とは別物のやうに考へて居た。倭訓栞には、はや紫羅仙巴と註してあるから、享保以後本草學が開けてから、漢名との對照が出來た次第であらう。蘭山は無論のこと、以後の本草書には皆知れてゐる。寛政十年の類聚紅毛語譯には、既に紫羅欄をアラセイトウと傍訓し、下にストックスフルームと註してある。箕作阮甫は、改正增補の際、蠻語箋からこの語全體を削除してしまつた。蘭語のStoksbloemであるが、このストックといふ名は、英語のストックStockで、ギリフラワー又はストックギリフラワー（Gillyflower）をいふのである。このギリフラワーは、語原からいふと、クローヴをさすこと、ブラッドレーが、かの牛津の新英大辭典の中に釋してゐる通りであるとすると、益軒の花譜や蘭山の批正に荒世伊登宇を胡盧巴なりとする說を否定したにも拘はらず、いくらか來歷のある考と見做すことが出來ると思ふ。

要するに、アラセイトウの語原は今のところ不明であると云ふより外はない。蘭語でこれをゴイボ（二三）といふさうであるが、語原の類似は全くないと云はなければならぬ。レミ・ド・グルモンの詩が長短あはせて六首、柳村君に譯されて『牧羊神』のうちに收められてある。多識の詩人とみえて草木の名や花の名が多く題材に使はれてゐるのが目につく。それとも故友がわざと自分の趣味でそんなのを撰んだのか、その邊はわからないが、『むかしの花』と題する長詩を誦むと、氣のせゐか、さきほど引いた清少納言の「草の花は」の一節を思浮べしめる。その中に匂阿羅世伊止宇、紫羅欄花をあちこち詠みこんである。

　牡丹、匂阿羅世伊止宇、亭環の花、女ざかりの妾よりも、おまへたちの方がわたしは好た、滅んだ花よ、むかしの花よ。
　瑠璃草、紫羅欄花、罌粟の花、どんなに繚亂の好い子よりも、おまへたちの方がわたしは好だ、滅んだ花よ、むかしの花よ。

といつたやうな調子である。同じ詩人が作の『柊冬青』といふ小篇にも、

　人家の軒にあやめくさ

　さてシモオヌよ、わが庭の
　春の花には亭環、遊蝶花
　唐水仙、匂の高い阿羅世伊止宇

といふ句で結んでゐる。おなじシモオヌをよんだ『髪』といふ詩にも金雀花その他の草が數多くよみこんであり、又『薔薇連禱』の長篇には、和漢の詩歌にはたぐひの無ささうな濃婉な情緒がくりだされてゐる。さあ、俳文にでもあるかしらと、首をかたむけながら、私は許六の百花譜を取出して見た。「當世の人の花過ぎ、古人の實すぎたる、いづれの時か、花實兼備の世あらん」と筆を起した所が、先づ氣に入り、だんだん誦んでゆくうちに、久しぶりでかういふがはの興趣がそゝられて、

　長春薔薇のたぐひは紅白うつくしく、粧ひたるには似たれど、元來いやしき花の殊にさかり久しきこそうたてけれ。たとへば惣嫁といへる辻君の、日のくるゝを待ち兼ね、世上に徘徊し、物心おぼえてより、其ながれをたてて、五十にちかき頃まで振袖を着し、始もなく終もなきこそうるさけれ、

とある、とげとげしい冷評も、どこやら佛蘭西の詩人が、「僞善の花よ、無言の花よ」と、毎節の結末に同じ文句をくりかへしつゝ、たゝみかけて薔薇を諷刺してゐるあの詩篇とほんに異曲同工だとおもひながら、ひとりで微笑した。

（大正十一年四月）

（補訂）本文中末段に於てアラセイトウを荳科としたのは十字科の誤記。荳科はエニシダの方にかゝるのであつた。アンジェリールの語原は、私の想像が違ひ、あれはその植物の産地の名から出で、北以太利はミランより三十八哩離れてゐるアンゲラといふ田舎町の名から起つたことを發見した。又用藥須知に出てゐる阿蘭陀石竹の原語は、アンジャレン及びアンヂャビルであることを、原板本で確めたから、假名の綴り樣に關する一條には多少の修正を要する。以上の二點については他日別に細説を期する。（本文脱稿の翌日追記）

ふれふれ粉雪

中古の童謠に「ふれふれ粉雪」といふ一句だけ傳つてゐるのがあります。これは今から八百年ほど前に御在位になつた鳥羽天皇が當時の童謠をお口ずさみになつたのを、御乳母の讃岐の典侍がその日記に書きのこしておいたのです。天皇はその時、六歳でいらつしやいました。御卽位になつたのは前年の十二月一日でしたが、歳も明けて翌年の正月二日の朝、御乳母が御前に出たところに、雪がこん〳〵降つてゐたをりに、御幼年の鳥羽天皇は、あの童謠をおうたひになつて興がつておいでになりました。さすがの乳母の典侍も少し意表に感じたといふことですが、その話は讃岐典侍日記の下卷にかきとめてあります。昨年あたり澄宮樣がかず〳〵の童謠をお作りになつてお示し下さつたことと思ひあはせて誠にゆかしく又うれしく覺え奉ることであります。日本の童謠の歴史中でも、この上もない味ひのある逸話だと考へられます。この童謠は、それから二百五十年ばかりの後の兼好法師の時代にも、まだ京都邊では口にされたと見えまして、徒然草の百八十一段に、やはりその斷片を載せてあります。そこには「ふれふれこゆき、たんばのこゆき」としてあつて、「たまれ粉雪」といふのを、「丹波のこゆき」と訛つたのであると解釋してあります。「垣や木のまたに」とある文句が、その後につくやうになつてゐますが、全體の童謠は錄してありません。どうせ短い形であることは勿論です。どこかに今でも全形が多少の轉訛はあつても遺つてゐはしないかと思ひます。俚謠集拾遺を見ますと、京都の童謠でかういふのが載つてをります。

　雪やこん〳〵、霰やこん〳〵、
　お寺の松の樹に、一つぱい積りこん〳〵

いくらか昔の文句の面影がかよつてはゐるやうです。關東でも以前これと同じ句調か文句のが聞けたとおぼえてゐます。私どもの小さいときには、「ゆきやこほり、おべたいこほり」とか何とかいつた言葉をうたつた樣な氣がしますが、こんな童謠もだん〳〵影をかくしてしまひさうで、なつかしくてたまりません。

夏ですからもう一つ雪の童謠を出します。やはり京都に、雪が降る日に空を仰ぎながら、兒童が、

　雪ばな散るはな、空に蟲が涌くはな、
　扇腰にさいて、きりゝと舞ひましよ。

とうたふさうです。俚謠集拾遺にさう錄してありますが、「空に蟲がわくはな」とは少し面白くない文句ですが、末句のひきしまりかたもよくつて、いかにも江戸時代の近世趣味がうかぶ心地がします。

今度はうめあはせに熱い方の文句ですが、「京の京の大佛さんは、天日で燒アけてなア、三十三間堂が燒アけ殘つた、アリヤドン〳〵ドン、コリヤドン〳〵」といふ文句を京都の街の兒がうたふのを聞きます。大へん調子のよい謠です。私たちのやうな歴史ずきには、慶長七年十二月の大佛殿炎上のことが想出されて、豐國祭りだの、大佛殿再建だのと、それからそれへと追懷させられます。また時候のよい頃の夕がたに街の片わきや軒下などで一群の兒供が寄り集まつて、その中でひとり鬼が眼をかくして背を向けてゐると、輪をなした群では、立ち場所をいろ〳〵變へながら、「でんこ〳〵」

と呼びかける鬼に對して「だれの次にはだれが居る」と節をつけていふ。鬼が當てそこなふと「どつこいすべつて橋の下」と合唱するのが、東京から移住した私たちには非常に珍しく感じられて、しばしば立留つては耳をかたむけたものです。十數年來何だかすたれ氣味になつたと思ひます。これは童謠とはいへませんが、殘しておきたい遊びだと考へます。「こをとろことろ」の遊びにしろ、「こゝはどこの細道ぢや」の文句にしろ、幼時自分たちが東京で遊んだり又聞いたりしたものであると、一層いひ知れぬなつかしみに絆されます。女の兒たちが、「天神樣の細みちぢや」「ちいつと通して下さんせ」などといふ掛けあひの文句は、今だに耳について、思浮べるとしみじみ昔がこひしくなります。

夕がた、夏にしろ秋にしろ、澄みわたつた大空に星をやつと一つ見つけ出して、「一つぼし見イつけた」とうたふ文句も詩的ないひぐさです。こんなのも今都會できけるでせうか。二十年ばかり前でしたが、駿河の海岸をある夏のたそがれ時に七八つぐらゐの男の兒の手をひいて散歩してゐたとき、その兒の即興か或はまた何かの傳統のはしくれか知れませんが、「一つ星が落ちたら、みんな星がおオちてしイまふ」といふ樣な文句を、ちよつとした節奏をつけてその兒が口吟したのを思出します。その時分、何かの雜誌にその文句を寄錄しておいたのですが、今は思出せません。哲人か大詩人かの零語にでも出て來さうで、無上にうれしかつたことを記憶してゐます。ほんとに宇宙の眞諦をいひあらはしたやうな氣がしました。

この六月、私ども選定に參與しましたが、雜誌『オヒサマ』で募集されて入選した小兒の童謠に、

工場のけむりは
くろいけむり、
お湯屋のけむりは
しろいけむり、
どこまでゆくの、
いつしよにお行き。

といふのがありました。いかにも現代的都會たる大阪の氣分をたゞよはせた上乘の作品だと思ひました。單純な構想で、技巧も極大まかで、而も幽幻な情趣が味はれます。全く都會的現代的であつて、見る人の方の考へを以て解すると、勞働者の生活をも思浮べられさうですし、最後の一句の如きも、子供らしい親しみをあらはすと共に社會的の協調を暗示するやうな含蓄に富んだ佳作と信じます。また古典趣味の私たちには、土地が浪華だけに「高きやに」の古歌をも想起させずにはおきません。現代的な詩では、ヴェルハアレンの「都會」の詩の或る一二句を偲ばせます。それからブラングヰンのエッチングにも私の想像は馳せてゆきます。これらの連想は私だけの勝手な感じであつて作そのものの評價としては過ぎてゐませうし、買ひかぶりでも力負けでもありませうが、少くとも兒童の童謠としては、自然であつて技巧を超越した點に於て特筆する價値はあらうと信じます。

（大正十一年九月）

雪のサンタマリヤ

數年前京都の西北、いはゆる西の京に於て發見された數個の吉利支丹墓碑のうちに、なにがしのパウロと呼ばれた信徒の墓石がある。姓名の右がはには、慶長八年六月二十八日と刻し、左がはには雪のさんたまりやの祝日と勒してある。この年月日を太陽暦になほしてみると、西暦一六〇三年八月五日に當る。このパウロといふ男は、當時の基督敎徒として何等の事蹟を殘した人ではないが、私たちは、その命日の美しい、やさしい名にほだされて、いつも大學の陳列館に立ち並ぶいくつかの墓標の前に來ると、とりわけこの一基に心がひかされるのを常とする。ミシヤ、ルシヤ、さてはマリヤなどと、婦人の墓が割合に多くあらはれたのに反して、これは男子のではあるけれど、彼はいかなる好運か吉祥の日に今生を去つて私たちをして聊かこゝに低徊せしめる。

雪のさんたまりやの祝日とは、その音調その連想がいかにも優麗哀婉であるばかりでなく、その日が、しかも極熱の八月五日なので、私たちに爽快の感を起させずにはおかぬのである。日本の吉利支丹が、昔の全盛時代にこの祭日を、いかに祝つたかはわからぬが、當時の曆本を見ると、それにはちやんとその祝日が載つてゐる。長崎附近の浦上、外海地方の信者間に傳はつて來た御出生以來千六百三十四年度の『日繰』によると、其年寛永十一年の陰曆七月十二日の條に、ゆきのサンタ丸やと書いてある。それも陽曆八月五日にあたる。註者はそれに聖マリヤの雪殿と註した。その外、私の見た所で東京の林氏の曆本に Augustus 5 の條にゆきのさんたまりやとあつたのを知つてゐる。小梅の德川侯爵所藏の抄本には、あいにく陽曆七月、「じゆりりよ」の二十三日までしかなく、餘は脱してをるからわからぬが、それにもこの祭日は出てゐたに違ひない。モリソン文庫所藏の西紀一五九五年、即ち文祿四年長崎開板の「サクラメント便覧」ともいふべき拉丁文の書物の首めに出てゐる祝日表にも、八月五日のところに、Dedicatio S. Msriae ad Nives と記してある。今も公教會祝日表に、この日は「聖マリアの雪の聖堂奉獻」の祭日と譯して載せてあるやうに、普くカトリックの人々の知つてゐる所で、私たちが事々しく書くのも、實はをこがましいと思ふ程である。然し「聖マリヤの雪殿」といふ稱呼は、私たちの古典味からはどうしてもよそに見過ごせない。私は時節からこゝにその來歷談を書きたくてならぬ。いくらか涼味の福分けになるであらう。

まづ吉利支丹宗門禁制の嚴しい最中、今から二百六十餘年昔の萬治元年の記錄にも、古風な文句で次のやうに緣起ばなしが見えてゐる。

「雪ノサンタマリヤト申コトハ、ロウマニテ有侍、子ヲ持不申候ニ付テ、金銀トラセ可申モノモ無之ニ付テ、サンタマリヤノ寺ヲ建可申ト女房ト相談申候處ニ、其夜ノ夢ニロウマノ外ニ、雪降タルトコロ可有之候ノ間其處ニ寺ヲ建候ヘト、夫婦ニサンタマリヤ夢ニマミエ給ヒテ被仰候ニ付テ、夫婦ナガラ右ノ所ヘ參リ見候ヘバ六月土用ノ中ニテ御座候ヘドモ雪降候テ御座候、其所ニ則寺ヲ建申候、夫ニ就雪ノサンタマリヤト申候。」

これは後年寛政年間、太田全齋といふ學者

が編した聖利斯督記に出てゐる所である。いかにも古雅な調子で書いてあるだけ益々興趣が深いのである。さてこの昔話をそれからそれへと辿つてゆくのも面白からうが、この傳說は十三世紀頃に起つたものらしく、その出來事が四世紀の中葉とすると、それから凡そ九百年後の、存外新しい緣起談となるわけである。青陵博士の示された或る羅馬古寺巡禮記に據ると斯うである。今は昔、四世紀の初めつかた、羅馬の都にジャンといへる時めける長者ありけり。年經て子なかりければ、といふ樣な發端で、さて夫婦は相談の上、繼嗣もないことであるから、神樣に財產をすつかりあげてしまふことに決心してゐた。夫婦は或る夜の夢に、サンタマリヤが、その相續者になつて下さるといふことを知つた。さてそのお告げによると、明朝雪の降りつもる羅馬の或る岡の上に、わたしの爲に伽藍を建ててくれよとのことである。而も同じ晩に、聖母は、法王リベリウスの前にも示現して、エスキリヌスが岡の、雪の降積るあたりに一寺を建立せしめよとの旨を厳命あつた。その時マリヤは、長者ジャンが法王に力を協すべきおやぞよと申渡された。かゝる御告げがあつたのは、炎熱燒くが如き八月の四日から五日へかけての夜間のことであつた。果して翌朝エスキリヌスが岡は白雪で蔽はれてゐた。いかにもマリヤの靈しき奇蹟であつたので、全都その不思議に驚嘆の眼をみはつたのである。長者ジャンは、かゝる不思議を目擊したので、直にラテランの法王殿に參上して逐一その御夢想を申述べた。法王リベリウスは神業あらたかなるを見て、羅馬の僧侶の總體引連れ、大勢の人々を從へてエスキリヌスの丘へと出かけた。かくて奇蹟の因緣も明かになり信心深い長者夫婦の力で一寺が建立され、その名を雪のサンタマリヤ寺と命じたが法王の名をも取つて別にリベリウス寺とも呼んだ。この寺は後にサンタ・マリヤ・マヂョーレ (Sancta Maria Maggiore) 即ち聖瑪利亞大寺といひ、羅馬の七大寺の一つで、ヴチカンの聖彼得寺やラテランの聖約翰寺などと並び稱せられてをる。これがこの寺の緣起であるが、日本風に緣起を書いたり、繪卷物にでも書いたら面白いものが出來ることであらう。

雪のサンタマリヤ寺の立つてゐるエスキリヌスが岡は羅馬七丘の一つで、今伊國王宮のあるキリナリスの岡よりは、丘一つ隔てて南方にあつて、バラチヌスからは稍東北に當る。伽藍はその岡の北邊に聳えてゐる。例の四井街の大道を西北から東南へと突當つた處がこの寺になる。八十もある羅馬の聖瑪利亞寺院のうちでこの寺が最も宏大なので大寺といはれてをる。私は往年伊太利旅行のをり羅馬滯留一週間のうち、この寺に參詣した筈であるが、記憶には全くなく、手控の紀行には纔かに五月五日の午後にテルメの博物館からギンコーリの聖彼得院へと行く途に立寄つたやうなことが記してあるばかりで、手帳にも伽藍の內外ともに何とも敍してない。素通りに急いで通つたものに違ひない。そのころは、案内記にさへ出てゐる雪の聖母のことは氣にとめなかつたものと見える。テルメでは、浮彫の女神ヴェネレ誕生の名作を見たことは、今もあり／＼と覺えてゐるのに、この寺の玄關にありといふ當寺の緣起を鏤めたモザイクはおろか、あの大伽藍を目にとめてなかつたのは、今考へると大いに惜しい氣がする。伊國大使館に在勤された〇男爵の私に書送られた或る羅馬名蹟志の一節に據ると、チョットの弟子ガッディ(Gaddi)の結構にかゝる當時のモザイクに、雪のサンタマリヤ寺建立の由來が現はれてゐるといふ。かへす／＼も私は惜しいことをしたものだ。

私がこの寺を過ぎた西暦一九〇八年五月五日には、朝は聖マリヤ・ソプラ・ミネルヴ寺にミケルアンヂェロの基督像を見た後で、パンテオンの殿堂に入り、その天井の穹窿を仰いで、上から射込む光線の美妙な印象にうたれ、堂内にある巨匠ラファエルの墓碑にぬかづき、堂前の月桂樹にいひしれぬゆかしさを覺えた。この堂は、巨大でこそはないが、やはりサンタマリヤ寺院の一つで、本名は殉教人のサンタマリヤ寺といふのであるが、俗稱の聖瑪利亞圓堂を以てきこえてをる。略して圓堂ともいふ。私の日數少き羅馬逗留中に見た所では、この圓堂の感銘は最も深いものであつた。

その日は更にテルメの博物館に、前記のヱヌス誕生の浮彫を見た外に、色々のモザイク、數々の彫像、さて又ミケルアンジェロが設計したといふ回廊などで、すつかり飽滿してしまつたと見えて、雪のサンタマリヤ寺を過ぎた頃は、もはや餘裕がなくなつてゐたものか、現在何の感じも浮んで來ないのは、今更是非もない。私の尋ねたのは五月の五日、それから三月後の八月五日には、古寺巡禮記によると、あの寺の拜堂の丸屋根の高みから、式の勤行中、花を投下して伽藍創建の由緒を記念させるやうな所作があるといふ。この散華は今でも行はれるらしいが、それが其の夏の而も眞晝間、午前十時から午後二時にわたる彌撒のあひだ、つゞけざまに、昔の夢幻を今の現實に、花びらを雪よと播きちらすのであらう。

私はあの日の夕かた、嘲風博士と出遭つて共にコルゾーを散歩し、翌日の行程を約し、當の六日には同伴してサンタマリヤ大寺よりずつと南のラテランの聖ヂョヷンニ寺を訪うた。バプチステリウムの條のところ／＼に、私の持つて往つた案内記には鉛筆の跡がついてゐるが、今は何もおぼえない。たゞ回廊を二人でめぐりめぐつて、柱の曲線やモザイクを見て感に入り、又禪院のやうな靜寂が身にしみて難有かつたことを、はつきり今も覺えてゐるだけだ。回廊で圍んだ中庭のあたりで摘んだ草花ではないか、私のベデカーの其の場所には十五年前の枯れた植物が挾んである。嘲風君の「花摘日記」にも、この日のことが書いてありはしないか、座右にないから判らぬけれど。

昔天正年間、大友大村有馬三家の使節が羅馬觀光のをり法王の御幸に隨行してこのラテラノ寺に往つたことは知られてゐるが、クラッセの日本西教史にもそれらの若い人々が羅馬の同じ寺を巡禮したことが載つてゐる所から察すると、雪のサンタマリヤ寺にも參詣して同伴の師父から前述の如き緣起談を聞いたことであらう。

「さつきのつごもりに雪いと白うふれり」とあるのも、「みなつきのもちに消ぬればその夜ふりけり」とあるのも、それは時しらぬ山の富士の高峯のこと、こゝは羅馬の都の一丘陵にすぎぬエスキリヌスに、燎ゆる火の八月五日に雪が降つたとは稀有な事に違ひないけれど、手近な日本にその例を求めるなら、史上にちらほら見當らぬでもない。先づ遠い所で推古天皇の三十四年には六月に雪が降つた。淸和天皇の貞觀十七年にも六月四日に雪花散落と三代實錄に見える。六國史以後中古中世の公私の記錄に散見する所に由ると、六七月中降雪の事は七八回もあつた。なほ太平記卷三十六を見ると、「大地震並夏雪の事」と題して康安元年六月二十二日、俄に天掻曇り雪降りて氷寒の甚しき事冬至の前後の如しなどとある。これらは皆陰暦であるから、陽暦にすると、大抵七八月のことになるわけである。傳説の考證に正史を引合ひに出すのも少し仰山すぎるが、序でに一言したのである。

淨光寺のパウロの因縁で飛んだ所まで話が進んでしまつた。その墓は京都帝國大學文學部考古學研究報告第七册に、他の墓石と併せて濱田博士が詳細な說明と比較研究とを悉され、鮮明な寫眞を添へて發表されてゐるので知られてゐるが、雪のサンタマリヤの祝日と原刻してある字の左側に、爲門基淨光法師追善也と後年の別手で補刻されてゐるのを、何人も異樣に思ふであらう。これは如何に解釋すべきであらうか。基督敎での法名をパウロと呼ばれた者に、俗緣又は單に關係の繫がる何人かが、後年淨光寺といふ淨土宗の小さな寺院を建立して、パウロ某を開基と仰いで其の追善の爲に、あゝ云ふ文字を追刻したものと見ることも出來よう。パウロ其人が淨光寺を建てたのでもなく、又生前、淨光法師と稱して居たのでもなく、それらの稱號はいづれも後年有緣者の與へた追稱と見傚してよいのではなからうか。邪宗徒の墓碑をその儘利用して、あゝいふ追刻をするのも奇怪ではあるが、それは一つは日本人が元來宗旨に案外淡泊な爲でもあつたらう。色々疑ふ餘地と解釋する餘地とがあるが、とにもかくにも墓標の主は、吉利支丹全盛期の慶長八年雪のサンタマリヤの祝日に世を去つたのである。

日本の吉利支丹寺で、この祝日を如何に祝つたかは、東西の記錄や抄物を博搜した上でなければわからないが、前記の如く『日繰』にも載つてゐるから、萬吏告朔の餼羊ばかりでもなく何等かの儀式が行はれたものと思はれる。契利斯督記中の所錄に特筆してある所から推してもさう思はれるのである。然しいかなる工合にミイサを營むか、いかなるオラショを行ふか、其の次第は知られない。攝州高槻在の舊家東氏所藏の吉利支丹抄物にも、かういふ末の方の儀式に關しては何とも記してない。私たちの手近には、此種の西籍參考本が甚だ乏しいのであるが、大學圖書館の所藏に、十七世紀中葉の巴里版『彌撒鈔』Missale がある、その書には、八月の祭日の中、五日の條に、サンタマリヤの雪の獻堂の祝日のをりに誦するイントロイト(入祭誦)やサルモ(聖歌)が錄してあるけれど、それとても取立てて言ふべき程のことはない。

之に反して、マリヤ一代記ともいふべき玫瑰花冠のいはゆる十五玄義となると、日本にも現に二三の繪畫版畫にも現はされ幾樣の文句にも綴られて殘つてゐる。前記の考古學報告書中にも私の登載又紹介しておいた如くである。

その後一見した林氏新得の抄物によると、「およろこびのくわんねん」の第一に、聖母受胎の告知を書綴つた文句に、

あんじよをもつておつうげなされ候あるじぜずきりしと、さんたまりやの御たいないにやどりたもふ事。

これはいつじぶんと申に、なんばんにて三月二十五日にさんがびりゐる・あるかんじよと申あんじよをもつてごつうげなり、……

などとある。これは仙臺附近から出た抄物ださうである。高槻在の方からの抄物には、次の如き文章を見る。

びるぜん女人にてまします也。もとよりでうすも其御ためにゑらび出玉へば、此きみ二八の春のすゑ三月二十五日のたそがれ時に、さんがびりゐる・あんじよをさんたのしんこうへ、てんの御使としてさし下し玉ふもの也。しかればさんがびりゐる、くわうみやうかゞやき、いきやうくんずるありさまにて、此きみの御前にかしこまり、いかに貴きまりやへ申上奉る、一切の人間の御たすけては御身の御たい内にやどり玉ふべし、とつげ申されたり。御返事

に、見玉ふごとく、われはつたなきでうすの御下女なれば、仰をそむくにあたわずとの玉ふと共に、かの御體内に御あるじぜすきりしとの御むまにだてやどり玉ふと。

アンジョは天使、アルカンジョは大天使、ビルゼンは童貞女、デウスは神、ムマニダテは人性の義である。サンガビリエルは聖ガブリエルたることは申すまでもない。文句がいかにも古めかしく近古の御伽草子でも讀むやうな氣がする。奈良繪本か西洋の光彩畫入の古寫本かを思浮べて、サンタマリヤ一代記を胸のうちに畫いて見たくなる。

雪のサンタマリヤ、そのまぼろしは私を驅つて、彼の雪のやうに純白な百合の花を捧げて天降つた飛仙の姿と、なやましげな童貞女マリヤの打驚く容態との追懷にまで及ぼしめた。私の知らぬパウロよ、祝福あれ。

(大正十二年八月)

北原白秋の『思ひ出』(一)

藝文の編輯會が濟んだ後の楕圓形の卓を圍んでTONKOの五人、Tはパナマを少し阿彌陀にかぶつたまゝ、新着の週刊タイムスを讀んで何か論じたげな顏をして居る。Kの前には國學叢刊といふ唐本の雜誌が開いてあつて、殷の時分に龜の甲に彫付けたとかいふ文字の摺物の所が出て居る。Kは對ひの第一のOさんを相手に今の詩に律があるとか無いとか論じ始める。第一のOさんは手に小本の詩集をもつてはぐつてる。卓上には風呂敷包、マイヤー、センチュリー、其間には煙草の吸ひがらが一杯になりかけた壺。新刊のアール・エ・デコラションの下になつたマッチを取つて、第二のOは、殘り少なの芙蓉に火をつける。見ればフィシアンの近世畫五十年史を讀んでるんだ。

T君は、「ワグネルの自敍傳が原書は二十五マーク、英譯が三十シリングか——」と云ひながら、タイムスの文學附錄を週刊と一しよに卷收めて、「何だ其小さな本は?」第一のOから詩集を受取つて、卵色の地に書名を赤で染抜いたさつぱりとした上被ひの紙をめくつて、ダイヤの女王のカルタを色どつた表紙の裝幀を一目して「はゝあ、大分新工夫だな、何、O-M-O-I-D-E」と、けげんな顏をして中の插畫や欄畫や寫眞版をはぐり〳〵「大分ローマ字も入つてゐるな…はゝア司馬江漢の銅版畫か。」…

第一のOさんは詩集を取戻して、「この人の詩は中々佳い、ほんとの詩人らしい所があるよ、足くびといふ題で、

ふらふらと酒に醉うてさ、
人形屋の路次を通れば
小さな足くびが百あまり、
薄桃いろにふくれてね、
可哀相に蹠には日があたる。
馬みちの晝の明るさよ。
淺草の馬道。

松の葉ぶりの調子もあつてね。」

ズローアガの、バルコンと題した插畫をのぞいて居たNも、それを見せて居た第二のOも、詩の讀誦の方に氣を取られる。第一のOさんは尙も讀みつゞける。

雲雀東風

芭蕉の十三回忌追善の俳諧を京都東山の雙林寺で催したことがある。時は寶永三年の三月、主催者は東華坊支考であつた。關西諸國の俳人から手向けた、表八句だけを數多く錄したのを、その上卷として東山萬句が出來た。そのうち安藝の海田市の流水と一故とが、互に連吟した八句は次の如くである。共に名もきこえぬ地方俳士だ。

見に行てよし野の花を手向かな
冬の法事を春に取越
雲雀東風吹ば日和のかたまりて
鹽やきたつる煙むら／＼
三引はどの大名の幕の紋
茶碗の灑に何の分別
名月は年に一度じや起あかせ
露がちるやら窓に篠の葉

發句は翁の吉野紀行を思ひ出したからであらうか、冬の法事を取越したといふのは、十月が祥月になる翁の追善を三月にくりあげたことをさす、第三句に流水が「雲雀東風ふけば日和の固まりて」とそへたその雲雀東風とは、ひばりごちとよむのであらうが、佳い造語である。この語は各地に弘く行はれてはゐない語で、安永の物類稱呼や明治の水上語彙の如き特殊辭書には、へバリゴチとして載つてゐるが、土地の方言を俳人が取上げて使つた新造語ではなからうかと思ふ。陽曆でも三月の彼岸前後になつて、麥が一二寸も伸び柳がほんのり芽ぐむ時分に、日もうらゝかになつて來て、そよぐ風もまだ寒いうちにどことなく親しまれさうな氣分がするやうになると、雲雀の聲が天の一方にきこえる、この頃の陽氣が、却つて四月になつてからの爛漫たる陽氣よりも私は好きである。ゆくさきの洋々たるものがあつて、一ころはこの早春の時候になると胸がはずんで嬉しくなつて來てたまらなかつた。私はこの時節の風をひばりごちと名づけてくれた、敏感な野人なり俳人なりをありがたく思ふ。詮索すきな私は、いつもの癖で、この語の古さや廣がりや用例を、文獻と方言とについて注意してゐるが、未だにこの句集外に見聞しない。

私はむかし、日本晴といふ造語を國民的感情のがはから見て興味をおぼえ、それがはじめて文之和尙の南浦文集の卷下、慶長己酉十四年の作詩に出てゐることを記しておいた。そこには三月十一日天氣新吹日本晴作俳諧以寄之といふ原詞がついて、狂詩七首が載せてある。日本晴を吹くといふ文句であるから、やはり風に卽いてである。寛永十年の犬子集卷一の元日の句に、「こぞは雨日本晴やけふの春」といふ春可の作がある。京都の俳人で、編者松江重頼の門下である。これら以後の作例では、延寶の西鶴の句は、南蠻記や續南蠻廣記に載せておいたが、その後、安永の大江丸の俳懺悔に、「紅梅に日本ばれの天氣かな」といふ佳句を見出した。少くも前の二例よりも佳い句だ。

すべてが俳諧師の造語といふのではあるまいが、俗間無名の言語創作家の新造語をとりあげてそれに風雅な味をそへ、新しい雅言として國語の語彙のうちに編入してくれた點に於て、俳人の功績は、國語を愛する人々、國語史を硏究する人々、相共に認めておかねばならぬことは、今から事々しくいふまでもない。

俳諧師が方言土語から拾ひあげて詩語に登つたものに河鹿といふ一種の蛙がある。萬葉集のカハヅがすべてカジカであることは先輩の確說があるとほりである。夏秋のころ靜寂なをり清流の石のはざまなどにさえた透つた聲で鳴く。一ころは賀茂川の中流にも雨もよひの夜更けに聞いたことがあつた。冬の千鳥とも對照してもよささうな聲である。その千鳥も今は鴨涯の冬の夜にもきこえなくなつたのではなからうか。萬葉卷七の詠鳥の歌、「鳴く千鳥河津と二つ忘れかねつも」とある。その集には、カハヅを河蝦とも單に蝦ともかいてあり、河津川津河豆などとしてあるが、語原は河出か河之かで、河の蛙の義であらう。卷十にはこの河蝦すなはち河鹿を詠んだ秋の雜詠が五首もある。集中には合せてカジカに關する歌を十七首見つけたが、地名がわかるものでは殆どみな大和の清流に住むものばかりである。伊勢あたりのも一首あるにはある。その外集中に一二首ある鹿火屋が下の鳴く川津のカハヅはカジカではなくてむしろ他の種のカヘルであらう。萬葉に蝦の字を別にカヘルの略稱に利用した例もある。古今集の序に、人口に膾炙する名高い文句の「花に鳴くうぐひす水に住むかはづ」とあるそのカハヅも、カジカのことであることは、これ亦定說があるが、カハヅとカヘルとは、平安朝初期以後混同してしまひ、識者の考證は別として歌では大抵カハヅもカヘルの意によんでゐる。萬葉時代の河蝦が、河鹿の名で更生したのは連歌師俳諧師が題材や用語の範圍を擴張してからのことである。川魚にもカジカといふ同名の小魚があつて、形狀こそ違ふが同じく清流や淺瀨などに住し、石のあはひに潛伏したりしてゐる樣態習性が相似てゐるところから、この小魚も鳴くと誤られてしまつた。蚯蚓や田螺がなくといふ類で誤認である。この魚は地方により色々の稱呼があり、又大同小異な種類が多く存するのであるが、平安朝以來きこえてゐるイシブシ、現に京都で呼んでゐる所のゴリ等も、やはりこの小さな川魚のカジカと同種だ。水から取上げて手にすると小さな音をたてるさうである。ギキウだのゴリなどといふのも擬聲から名つけられたのかも知れない。猿蓑にある「あやまりてぎきうおさゆるかじかかな」の句の如きは、魚のカジカとギキウとの小異を示してゐるものであるが、蛙類の河鹿ではない。元祿の蕉風の句には、河鹿の句をまだわたくしはみつけないが、これも博雅の人の教を乞ひたい。貞門の句では尙さら知らない。天明に至つて蕪村に二首ある。その一つは、「加茂川のかじかは知らず都人」といふ駄句である。も一つは、「かじかなく袖なつかしき火打石」といふ句である。風情ある句だ。闌更の「聲交はす河鹿へだつた川瀨かな」と同趣である。寶曆以後安永天明に至つて先づ京阪地方にて愛玩され、寛政を經て文化文政に至つて江戶でも飼養されたといふやうに推定されるが、果して如何か。安永の物類稱呼によれば、肥後あたりでは當時なほカジカのことをカハヅといひ萬葉時代の風韻を存してゐたらしい。今日はどうか。

河鹿に關しては德川時代中世以降いろ〳〵の研究があらはれてをり、私も一とほり調べておいたが、今は考證がかつたことは省くことにした。カジカといふ語の一ばん古い出典は、宗長の九々記といふ本だといふ。それには、詞書がそはつて歌が一首出てゐる。

庭の山水雨にもよほされて石ぶし
　かじかやらの聲きこゆれば
せきいるゝ庭の山水ころ〳〵と石ぶしか
　じか雨すさむなり

こゝの石ブシカジカは一の熟語であらう。石伏と河鹿との二つにわけて考へてはならない

のかと思ふ。この外に西行の歌と稱して、「秋風さむく河鹿鳴なり」とか、萬葉の歌と稱して、「河鹿鳴なる水の落合」とか、夫木集の歌と稱して、「かじかなくなる秋の夕ぐれ」とかいふやうな類の後世の作を、古歌としたやうな假託が二三あるが、いづれも採るに足らない。宗長の歌といふのも尚考へてみねばならぬが、これは西行などに假託するよりも相當に理がある。既に萬葉の歌にも、「上つ瀨に河津妻呼ぶ夕されば衣手寒み妻まかむとか」の詠蝦(卷十秋雜歌)の歌があるほどだから、雅人が近古それを妻こふ鹿の鳴くねに連想して、河の鹿といふ意味の造語をしたことも考へ得るが、語原說については尚一考を要すると思ふ。これを同じ習性をもつ石伏の小魚に轉用して魚の名ともしたのであらうか。

話が例のヒバリから秋のカジカに飛んでいつてしまつた。カジカの聲を駒鳥に似てゐると賞したのは、橘南谿の北窓瑣談である。これは洛北の八瀨大原あたりの溪流に住むのを取つて京人が飼養してゐたのを聞いての形容である。鹿の聲ともきこえ又鳥の鳴くともきこえるさうだと、これも人のうはさを書いたのが、俳人越谷吾山の物類稱呼である。ころ〳〵と云つたのは鳴聲に擬したのかも知れぬが、前述一二の歌に散見する。幕末江戶の士人片山賢の隨筆には、其聲ヒリ〳〵と長鳴すといふと、やはり人づての形容を加へた。コロ〳〵ともピリ〳〵ともきこえるといへばさうもきこえる。

(補遺) カジカの俳句を元祿期に見出さぬといつたが、その後涼莵の句に

　川音につれて鳴出す河鹿かな

とあるのを知つた。この作家は享保二年に沒した蕉門の一俳人である。次に吉野の奧宮瀧あたりでは、河鹿といふ語を知らず、それをカハヅとのみいふ由を一友から聞いた。

北原白秋の『思ひ出』(二)

「次はみなし兒、これも佳い、
あかい夕日のてる坂で、
われと泣くよならつばぶし……
あかい夕日のてるなかに
ひとりあやつる商人の、ほそい指さき舌のさき、
絲に吊られて譜につれて
手足顫はせのぼりゆく紙の人形のひとをどり。」

側に聽いてゐるNは、一ひんだのをどりを一躍り」とある飛彈組を思出して興に入つてくる。「人形つくりも異曲同工だが」と第一のOさんは紹介しかけて、「いや中々エキゾーチックで面白いのは……隣の屋根……見果てぬ夢……何しろ日本にもこんな詩人が出る樣になつたんだからね」と悅に入る。

白服の給仕が持つて來た茶をNは汲んで配けた後、詩集をOから取つて見る。ワットーの畫いたあれに似たピエローの思出の畫を隣の座の第二のOに一寸見せてそれからわが生ひたちの中を拾讀みし始めた。「日本でない樣な情趣でうれしいね」とNは更に末の方をはぐつて、酒の黴を讀んでゐる。

シーボルト先生と江戸の蘭友

一九二六年十一月十六日の午前、私は文藝春秋社の菅君と逗子から新橋まで乘合はせて、車中の雜談で吳博士の新著『シーボルト先生』に及んだ。この年は恰もシーボルトが江戸に參府した文政九年から、滿百年に當るのだから、吳博士の一大册がシーボルトを記念するためにあらはれたのも偶然でない。私はこのがはでの空前の一大著述に對して何か蕪辭を呈したいと思つてゐた矢先であつたから、そのことを口にした所、すぐさま菅君から文藝春秋にそれを書けといはれて、つい安請合をしてしまつた。然し考へて見ると、かゝる力作に關して漫然紹介の筆を執り感想の文を草することは愼まなければならないことを覺つたと同時に、本誌の紙面にとりては文章の委曲をつくすことの或は人の迷惑に陷る患はないかと一考した末に、私はつひにそれを保留することにした。こゝにはただ私がシーボルトの江戸滯留中の日誌で興味をひいた一節、而もそれは今より一年前に何かに書いて見たいと思つてゐたその一節を錄して責を塞ぐことにしようと思ふのである。

一八二六年四月十日、わが文政九年の三月四日、恆例のごとく和蘭甲比丹どもは江戸に入つた。大森まで蘭癖の殿樣として知られた薩摩の島津重豪侯と中津の奧平昌高侯と父子二人で迎へに來られた。そのほか島津齊彬公も同伴されたといふことである。シーボルトは薩摩の老公と色々の會話を交へた。品川までくると、桂川甫賢や宇田川榕庵の如き江戸の蘭學者が出迎へてゐる。一行は午後二時本石町三丁目の和蘭宿長崎屋源右衞門に着いた。

翌日は長崎屋に江戸の蘭友が續々尋ねて來た。ウイレム・ボタニキュスと名乘る桂川甫賢、中津侯の家來でピイトル・ハン・ストルプと蘭名をつけてゐた神谷源内をはじめ、有名な蘭學者の大槻玄澤、長崎から江戸の天文臺に在勤してゐた通詞サイジラウ夫婦が來訪した。

當年シーボルトは三十一歲、奧平侯が四十六歲、桂川甫賢も宇田川榕庵も共に三十歲、大槻玄澤は歿する前年で七十歲、なほ後に出てくるが天文臺の高橋作左衞門が四十三歲、シーボルトにアイヌ語や北邊のことを教へた最上德内が七十二歲といふ按配である。島津の老公は八十二歲であつた筈である。

シーボルトが日誌に通詞サイジラウと書留めたのを、吳博士は一七四頁に於て馬場佐十郎とされたが、佐十郎は博士が八三三頁および八四二頁に於て記された如くシーボルトが渡來の前年にあたる文政五年の一八二二年に歿したのであるから、こゝにサイジラウとあるのはむしろ馬場佐十郎に代つて江戸在勤を命ぜられた吉雄忠次郎とすべきであらうと私は思ふ。サイジラウとチウジラウと音は半ば似てゐる。

それはとにかく、中津侯は、その日の晚に長崎屋を訪れた。前年に致仕した後であるから、御隱居としての御微行であつたのである。シーボルトの記する所によれば、侯は自由に蘭人に接近するために致仕したのだといふが、果してどうか。蘭人たちがこの日の接待振りは西洋式であつた。侯の隨行には蘭學をやつた家來の神谷源内等がゐた。源内は侯をたすけて和蘭の辭書を編し、而も前世紀あたりまで西洋に行はれ

てゐた赤字（ルブリケート）入りのタイトルペイヂで假綴した。數本なども洋裝にしたのが今日に殘つてゐる。京都大學所藏には和裝と洋裝とがある。源内は蘭文の書簡を草し、和蘭流の姓名を使つてゐたほどのハイカラであつた。

シーボルトは記して云ふ。見よ、これらの日本人たちが、身心共に一切和蘭流になつた氣で、席上自分等仲間でも吾々蘭人どもとも、和蘭語のかたことを使つて話を交へ、でつぷり太つた家老（源内）の高笑ひと、歯の拔けた坊主頭で老いすぼれたハン・ギュルペン（柳營御用の菓子職）の氣張つた調子の話振りと、殿様の物珍しげな親しみのある生眞面目な態度と、かれこれ面白い組合はせをなし、それに百年昔の流行から取つた、ぎごツちない服裝をして吾等のそばに坐つてゐる。ひとり近侍なにがしは蘭語に達した老練な男であるが、殿様に對して顧問役を承つてゐた。かゝる光景が無上に滑稽的な效果を擧げてゐることは當然だ。

シーボルトはその夜の氣分を簡潔にから描いたが、その際甲比丹に向つて、「私はこんな珍妙な言葉を生れてから見たことがありませんね」と、佛蘭西語をもつてさゝやいた。何といふ人のわるいことであらう。あいにく殿様も家來も第二外國語の知識がなかつた。

それから殿様は客間から出て蘭人たちの居間へ入つて來た。こゝには色々の器械や書物などが、恰も歐洲學藝のムゼウムのやうにお客様の接待に向けられてあつた。シーボルトのピアノが特にお思召にかなつた。測時器や顯微鏡やその外の諸道具もやはりお氣に召した。

私はこの一夕の芝居を、元祿時代にケンペルが江戸城中に演じた喜劇と對照していつもひとりで苦笑する。カピタンもつくばはせけり君が春。これは芭蕉の句であると傳へられる。桐の花新渡の鸚鵡物言はず　これは其角が長崎屋の光景をよんだ名句である。元祿は享保を經て明和安永となり、轉じて文化文政となつた。蘭癖は段々高まつて來た。蘭人の内所話はなかなか皮肉である。城中でつくばはせられたシッペイがへしを暗にやられた姿である。西洋のまねがすきな蘭癖の御大名こそ物言はぬあふむであるとも言はれよう。私はシーボルトの江戸日記のこの一節をよむごとにこの一場の光景は狂言記にでもありさうな心もちがして獨り興がるのである。蘭客が江戸のかたきを長崎でうつ趣がないでもない。

越えて四月十六日、舊暦の三月十日、老いたる北方探檢家最上徳内がシーボルトを尋ねた。その記事を、シーボルトは用心深く、わざと拉丁語で書いた。後年疑獄をひきおこした蝦夷島樺太島に關する地圖を徳内から借りたことも、こゝに拉丁語でかきとめてある。蘭語に緣ある自國の獨逸語では危險だと思つたにちがひない。フランス語で私語し、ラテン語で祕密を記入したシーボルトも皮肉だが、そんなことに注意しなかつた當時の人々もおめでたいといはねばならぬ。

北原白秋の『思ひ出』（三）

「借りて歸つてゆつくり讀まう」とNは立上つた。紹介者の第一のOは風呂敷包に手をかけた。Tは阿彌陀のパナマを眞直にかぶり直してタイムスを握つて立つた、國學叢刊の持主もフィシアンの讀者も等しく卓を離れた。外は入梅中ながら薄日がさす、室の窓前には淡紅色の躑躅が咲いてる、廊下も二階もしんとしてゐる眞晝時。（TONKO JOHN）

（明治四十四年七月）

年譜

明治九年(一歲) 周防國山口に生る。舊幕臣關口隆吉次男。父が知縣の前任地たる山形の山の字と現任地たる山口の山の字とを合せて山と名づけらる。後に重山の號を與へられしは之に由る。襁褓の裡、前原一誠の亂起る。

明治十四年(六歲) 春父元老院議官に轉じて東京に移るに由り母及び姉妹と共に歸京して向島小梅に住す。途、遠州月岡村なる父の采邑の本宅に寄る。山口にて受けし初等教育の繼續を日本橋區本町藤木學校等に於てす。

明治十七年(九歲) 下總國佐原に下り、栗本栗里(義喬)先生の塾に遊びて、漢學を學ぶ。在塾約三年。

明治二十年(十二歲) 是より先、明治十七年九月父靜岡縣令に轉ず。此春佐原より靜岡に歸還し、縣の尋常中學校に入る。傍ら松山若沖氏の塾に入りて補習す。

明治二十二年(十四歲) 五月父汽車衝突の負傷に因りて歿す、五十四歲。十二月出でて德川慶喜公家臣新村氏(猛雄)に養はれ、紺屋町舊德川邸西隣に住す。

明治二十五年(十七歲) 三月靜岡縣尋常中學校卒業、五月上京、鹽谷青山(時敏)先生の塾に遊ぶ。九月推薦せられて第一高等中學校豫科第二級に入る。

明治二十七年(十九歲) 史學科入學の希望を懷き、博言學科志望を屆出で、獨逸語を努む。

明治二十九年(二十一歲) 七月第一高等學校を卒業して、東京の帝大文科大學に入り、九月遂に博言學科を修むることに決す。

明治三十年(二十二歲) 六月學年試驗論文として、『日本音韻研究史』を主任上田萬年教授に提出す。九月第二學年以降、パウルの『言語史原理』を同教授に就きて學ぶ。是歲十一月父主家に從ひて上京、駒込曙町に卜居。

明治三十一年(二十三歲) 一月「帝國文學」に昨年度の言語學界を評論す。「國語音調論」を草して主任教授に提出す。

明治三十二年(二十四歲) 六月論文『上古文字有無論』を提出す。七月卒業、直に大學院に入る。六月以降、岡澤鉦次郎氏と日本文法に關する論爭小文二篇。東亞同文書院の囑を受けて支那留學生に日本語を教授す。

明治三十三年(二十五歲) 八杉貞利氏と共に言語學會の創立經營の事に從ひ、二月言語學雜誌を起し、翌々年に至りて廢刊す。七八月の交、大學の命により八杉君と共に飛驒白川村方言の採集旅行をなす。十月文科大學助手に任じ國語研究室に勤務す。十一月荒川重平長女豐子と結婚、十八歲。

明治三十四年(二十六歲) 一月英人エドワーヅ E. R. Edwards 日本音聲研究のため來遊、高楠教授の介により八杉君と共に發音を聽かせ又口語法を授く。三月伊豆西海岸北部に、七月西駿遠參尾地方に、方言を採集す。十月文科大學講師囑託、文法學概論を講ず。七月及び一月田口卯吉氏と日本語を中心として比較言語學上の論爭。十一月『言語進步論』の抄譯を早稻田の『名著綱要』に寄せ、「敎育學術界」に『聲音學大意』を連載し始む。

明治三十五年(二十七歲) 二月東京高等師範學校教授に任じ先づスキートの『言語の歷史』を講讀す。四月文部省の國語調查委員會補助委員に擧げらる。三月長男秀一生。

明治三十六年（二十八歲）　三四月の交京阪出張、葛城の高貴寺に慈雲尊者の遺稿を探り、東寺觀智院金剛藏の悉曇書を調査す。

明治三十七年（二十九歲）　三月長女幸子生。七月大學院滿期。八月仙臺に赴き文部省主催中等教員講習會に聲音學を講ず。文科大學助教授に任。十二月、「國語に於る東國方言の地位」を言語學會に講演し、又「東西語法境界線概略圖」を作製す。

明治三十八年（三十歲）　一月國語學會に「足利時代の言語につきて」を講演す。四月足利學校の抄物を採訪す。八月次男猛生。長野に赴き上水内郡教育會のために聲音學を講ず。

明治三十九年（三十一歲）　四月新設の京都帝大文科大學に就任のこと決す。八月京都に出張し五山諸塔頭の抄物を採訪、初て京大圖書館に至り古書を見る。十一月言語學研究の爲英佛獨留學の辭令を受く。桃源瑞仙の事蹟を「史學雜誌」に寄す。三男弘生。

明治四十年（三十二歲）　一月京都帝大文科大學助教授に轉任。三月三日横濱解纜、獨逸留學の途に上る。四月九日伊國ナポリ着、ゼノア下船、嶺北ミュンヘン通過、十七日伯林に入る。伯林大學に聽講して、Finck, W. Schultze, Grube 諸教授に就學す。出發以來の詠吟は載せて「南國巡禮」にあり。

明治四十一年（三十三歲）　一月十四日養父逝去の電報を受け悲痛切なり。四月十六日伯林を去り、行李を萊府に解き、次いで南歐に遊び、五月南獨の諸地に旅す。八月マールブルヒ大學の夏季講習會に聽講、同月ドレスデンに赴き第四回エスペラント萬國大會に日本代表者として出席す。九月伯林發、和蘭内國を經て、ロンドン着。主として大英博物館の考古及び圖書室に學修す。十一月オックスフォード大學に遊學一ケ月餘、ボドレア文庫の日本吉利支丹文獻を閲讀抄錄す。十二月及翌年正月に亙りてロンドンに在りて大英博物館に南蠻文獻を採訪す。

明治四十二年（三十四歲）　二月巴里に轉學、巴里大學に聽講の傍ら、國民圖書館に讀書抄書す。三月下旬巴里を去り、シベリヤ經由、四月初旬歸朝。五月京大文科大學教授に任ぜられ言語學講座を擔任す。上村觀光主筆の「禪宗」に「ギャ・ド・ペカドル」を解題し、歸京夏休中に天草本「平家物語」及び其編者を紹介す。九月一家を京都下切通新烏丸東の地に移す。

明治四十三年（三十五歲）　四月「藝文」を發刊、『文祿舊譯伊曾保物語』を連載、六月「南風」を寄す。同月文學博士に推薦。七月初て伊勢龜山、津、松坂に遊び又兩宮に詣づ。

明治四十四年（三十六歲）　四月三男弘歿す、六歲。六月「文祿伊曾保物語」單行本出版。十月京大附屬圖書館長に補せらる。

大正元年（**明治四十五年**）（三十七歲）　九月伊勢山田より名古屋、靜岡に訪書し、掛川天然寺和蘭甲比丹ヘンミーの墓を探る。

大正三年（三十九歲）　八月京城に至り秘閣の古書を覽る。

大正四年（四十歲）　五月熊本、佐賀、唐津の各地の圖書館大會に出席し、ハラチフスを患へて佐世保の病院に療養一ケ月に及ぶ。七月打出濱に靜養。八月「南蠻記」刊行。

大正六年（四十二歲）　六月鹿兒島より苗代川に朝鮮住民の舊蹟を探り且遺文獻を採訪す。歸途長崎に遊び、古社寺舊史蹟を巡歷す。

大正七年（四十三歲）　七月「朝鮮司譯院語學書斷簡」新刷頒布。神戸市史編纂顧問囑託。

大正八年（四十四歲）　九月朝鮮經由、奉天、天津より北京に入り、滯京見學十三日、十月初南京を經て、上海に下る。蘇杭の遊覽を

終り、十八日神戸歸着。吟詠は「南國巡禮」に附載す。又「遊支所感」の一篇を翌年正月の「太陽」に寄す。

大正九年（四十五歳） 四月水戸彰考館訪書、『水府紀行』等あり。土手町に移る。

大正十年（四十六歳） 歐米出張を命ぜられ五月初、横濱解纜、シアトルに着、紐育を根據としてプリンストン、ワシントン及びボストン、ニューヘヴンの諸大學諸圖書館博物館等を見學。六月十五日大西洋を渡りて入英、直に倫敦に到る。舊に由て倫敦、牛津の二大文庫の吉利支丹文獻を漁り、撮影を遂ぐ。九月佛白蘭三國を經て入獨。十月病みて空しく伯林に靜臥す。十月末マルセイユより航行 十二月十日頃歸洛。

大正十二年（四十八歳） 夏伊勢の白子若松に遊び、往年予の撰文を刻せる幸太夫の碑を見る。山田滯留間鳥羽に遊び、歸途伊賀名張上野を訪ふ。芭蕉の遺蹟を巡禮す。三月濱田耕作教授と合著の京大文科考古學研究報告第七冊の『吉利支丹遺物の研究』公刊 十一月「長崎再遊」。十二月、小山中溝町に定住。

大正十三年（四十九歳） 九月長女幸子、谷村順藏に適す。十二月「南蠻更紗」刊行。

大正十四年（五十歳） 三月「神戸市史」終刊。九月「南蠻廣記」、「典籍叢談」刊行。十一月「續南蠻廣記」刊。

大正十五年（**昭和元年**）（五十一歳） 一月「南蠻更紗」訂正修補版出づ。八月駿甲相に遊び、「東遊三ケ月」。松蔭寺と身延山詣で。十月仙臺再遊、狩野文庫を見る。

昭和二年（五十二歳） 五月『船舶史考』刊。十一月増訂再刊。六月龜井茲高纖字の「天草本平家物語」刊、序文及校閲。七月長崎島原天草の漫遊、「南國巡禮」あり。八月長男秀一を伴ひて初て高野山に登る、「法被を着ての一文中に紀行あり。先是、西彼島田に出講し、「島田土産」の小篇あり。十月福岡、鹿兒島、山口再遊、九州東岸を歸るとき日向青島を見て一泊す。十一月「海表叢書」初卷を刊し、南蠻紅毛の舊文獻を收む。十二月「東方言語史叢刊」を出版す。

昭和三年（五十三歳） 正月帝國學士院會員仰付けらる 四月生母靜岡に終焉、八十歳。七月伊曾保物語展覽、其目錄出版。十月「天草本伊曾保物語」刊行 十一月「海表叢書」六卷出版完了 聖駕を迎へて「大典奉祝」、大宴に列するの榮を得て「夜宴の感銘」の文あり。十二月「異國情趣集」刊。

昭和四年（五十四歳） 七月「兒童文庫」第二十七編に「イソップ物語」を刊す。八月再び高野山に登り訪書す、「南山訪書紀行」に詳にす。十一月濱田耕作教授と共に、「天正年間遣歐使節關係文書」の印影、及解説を公刊。「薩道先生景仰錄」の刊行は、吉利支丹研究史回顧に外ならず。先是四月水戸彰考館及び足利學校の古書再訪。

昭和五年（五十五歳） 五月「琅玕記」、八月「南國巡禮」刊。同月改造社版「日本地理大系」第九卷九州篇に、「九州吉利支丹史蹟概觀」、「長崎禮讃」其他の小文を草す。十月、石上宅嗣卿顯彰記念碑の撰文刻せられて、丹波市天理圖書館前に建設除幕式あり。十一月「東亞語源志」刊行。

昭和六年（五十六歳） 三月「藝文」廢刊、總目索引印行。六月岩波講座「日本文學」第一冊中に、「南蠻文學」を稿す。一昨年九月所刊、新潮社「日本文學講座」第十九所收の「南蠻文學概觀」「琅玕記」と相補益すべし。五月吉澤教授と近畿國語方言學會を創立。七月木曾より松本諏訪甲州を經由入京、房州を初訪す。

柳田國男集

遇を知る者には、是は言ひやうも無い寂しさであつた。

運命は此の如く、時としては人間の書齋までを支配する。古代の海洋民族が大移動を記念すべき、有形無形の不思議な遺物、彼等に拮抗して今尙聊かも衰へざる自然力、兩者の妥協を意味する文明の變化、就中血と言語との止む能はざる混淆が、著しい影響を與へた部曲組織宗教觀念、乃至は藝術様式の島々の特色が、從來曾て見ない强烈なる興味を、諸國の學界に喚び起して、次第に大規模の討査と比較研究とを開始するやうになつたのは、恰もこの疲れたる老學者が既に其生涯の學業を切上げた際であつた。是から大いに興らうとする新機運に向つては、彼は只一箇有益なる資料たるに止まり、其計畫と希望とには、もう參加することが出來ないのである。況やこの北太平洋の一角に於て、漸く今始まつたばかりの若々しい運動、即ち島に生れた者自らが、島と島との生活の連鎖を、昔に溯つて考へて見ようとする學問の如きは、假令それが先生の深く愛した日本であり、且つ先生の感化が暗々裡に、働いて居ることは確かであつても、其悦びを我々と分つことが、最早出來ない迄に弱つてしまはれた。以前先生が名を聞きながら、手を著ける機會を得なかつた「おもろ御草紙」は、伊波普猷君などの辛苦に由つて、今現代に蘇らうとして居る。是がたゞ沖繩一島の寶として羨むべきものでなく、此の如き信仰歸依、此の如き情緒を、島に家する者の祖先の心裡に、漲り溢れしむるに至つた最初の力は、獨り血を共にする大八洲の國々のみならず、同じ大海の潮に育まれて、北と南とに吹分けられた、遠い沖の小島の荒えびすの胸にも、尙一様に感じられて居たのでは無いか。之を推究してもらひたいのが引續いての我々の願であるが、久しい孤立に馴らされて小さな陸地を國と名け、渚から外をよそと考へた人々の、離れ〲の生涯の勞作が、果していつの世になつたら、融け合うて一箇の完成と爲るであらうか。私は斯ういふ外國の學者の老境を眺めるにつけても、散漫なる今までのディレッタンティズムの、罪深さを感ぜざるを得なかつたのである。

海南小記の如きは、至つて小さな詠歎の記錄に過ぎない。もし其中に少しの學問があるとすれば、それは幸にして世を同じうする島々の篤學者の、暗示と感化とに出でたものばかりである。南島研究の新しい機運が、一箇旅人の筆を役して、表現したものといふ迄である。唯自分は旅人であつた故に、常に一箇の島の立場からは、この群島の生活を觀なかつた。僅かの世紀の間に作り上げた歴史的差別を標準とはすること無く、南日本の大小遠近の島々に、普遍して居る生活の理法を尋ね、見ようとした。さうして又將來の優れた學者たちが、必ずこの心持を以て、人間の無用なる鬪諍を悔い歎き、必ずこの道を歩んで、次第に人種平等の光明世界に、入らんとするだらうと信じて居る。然らば又事業は微小なりと雖、やがて吹き香ふべきものの蕾である。歌ひ舞ふべきものの卵である。乃ち新しい民俗學の南無菩提の爲に、謹んで此書を以て日本の久しい友、ベシル・ホール・チェンバレン先生の、生御魂に供養し奉る。

大正十四年四月八日

柳田國男識

海南小記

一　からいも地帶

尋常五學年の小學讀本の中に、

> 甘藷ノ名ハ地方ニヨリテ異ナリ。關東ニテハ薩摩芋トイヒ、薩摩ニテハ琉球芋トイヒ、琉球ニテハ唐芋トイフ。名稱ノカク異ルヲ以テモ、此芋ノ次第ニ西方ヨリ傳來セシコトヲ知ルベシ。

とあるのは、ほんの些しばかりだが間違つて居る。琉球では甘藷を唐芋と謂ふ者は無く、一般に之をンムと呼んで居る。ンムは即ち吾々のイモと同じ語である。カライモ又はタウイモと云ふ名は、弘く南九州一帶に行はれて居る。從つて薩摩でも之を琉球芋と呼ぶことはない。琉球芋と謂つたのは九州の北の一角から、中國上方に亙る大區域であたつが、後漸く標準語のサツマイモに改まつて行かうとして居るのである。

此頃の誤は、子供たちにもよく判ることだから、單に其地方だけの爲にならば、之を訂正する必要は無いかも知れぬ。只氣になるのは之で以て、甘藷は南方よりと謂はすに、西方より傳來したとする推理法である。何となれば薩摩も琉球も、日本の南部である上に、甘藷は更に其南方の、南支那から輸入して來たことが確かだからである。

以前奧州などの田舍の料理には、所謂薩摩芋は椎茸や蓮根と、同等以上の待遇を受けたものだ。それが運送が手輕に成つたばかりか、氣仙あたりの島や半島に迄、とう／＼之を栽培する

（[illegible]から八重山まで）

遇を知る者には、是は言ひやうも無い寂しさであつた。

運命は此の如く、時としては人間の書齋までを支配する。古代の海洋民族が大移動を記念すべき、有形無形の不思議な遺物、彼等に拮抗して今尚聊かも衰へざる自然力、兩者の妥協を意味する文明の變化、就中血と言語との止む能はざる混淆が、著しい影響を與へた部曲組織宗教觀念、乃至は藝術樣式の島々の特色が、從來曾て見ない强烈なる興味を、諸國の學界に喚び起して、次第に大規模の調査と比較研究とを開始するやうになつたのは、恰もこの疲れたる老學者が既に其生涯の學業を切上げた際であつた。是から大いに興らうとする新機運に向つては、彼は只一箇有益なる資料たるに止まり、其計畫と希望とには、もう參加することが出來ないのである。況やこの北太平洋の一角に於て、漸く今始まつたばかりの若々しい運動、即ち島に生れた者自らが、島と島との生活の連鎖を、昔に溯つて考へて見ようとする學問の如きは、假令それが先生の深く愛した日本であり、且つ先生の感化が暗々裡に、働いて居ることは確かであつても、其悦びを我々と分つことが、最早出來ない迄に弱つてしまはれた。以前先生が名を聞きながら、手を著ける機會を得なかつた「おもろ御草紙」は、伊波普猷君などの辛苦に由つて、今現代に蘇らうとして居る。是がたゞ沖繩一島の寶として羨むべきものでなく、此の如き信仰歸依、此の如き情緒を、島に家する者の祖先の心裡に、漲り溢れしむるに至つた最初の力は、獨り血を共にする大八洲の國々のみならず、同じ大海の潮に育まれて、北と南とに吹分けられた、遠い沖の小島の荒えびすの胸にも、尙一樣に感じられて居たのでは無いか。之を推究してもらひたいのが引續いての我々の願であるが、久しい孤立に馴らされて小さな陸地を國と名け、渚から外をよそと考へた人々の、離れ〳〵の生涯の勞作が、果していつの世になつたら、融け合うて一箇の完成と爲るであらうか。私は斯ういふ外國の學者の老境を眺めるにつけても、散漫なる今までのディレッタンティズムの、罪深さを感ぜざるを得なかつたのである。

海南小記の如きは、至つて小さな咏歎の記錄に過ぎない。もし其中に少しの學問があるとすれば、それは幸にして世を同じうする島々の篤學者の、暗示と感化とに出でたものばかりである。南島研究の新しい機運が、一箇旅人の筆を役して、表現したものといふ迄である。唯自分は旅人であつた故に、常に一箇の島の立場からは、この群島の生活を觀なかつた。僅かの世紀の間に作り上げた歷史的差別を標準とはすること無く、南日本の大小遠近の島々に、普遍して居る生活の理法を尋ねて見ようとした。さうして又將來の優れた學者たちが、必ずこの心持を以て、人間の無用なる鬪諍を悔い歎き、必ずこの道を歩んで、次第に人種平等の光明世界に、入らんとするだらうと信じて居る。然らば又事業は微小なりと雖、やがて吹き香ふべきものの蕾である。歌ひ舞ふべきものの卵である。乃ち新しい民俗學の南無菩提の爲に、謹んで此書を以て日本の久しい友、ベシル・ホール・チェンバレン先生の、生御魂に供養し奉る。

大正十四年四月八日

柳田國男識

海南小記

一　からいも地帯

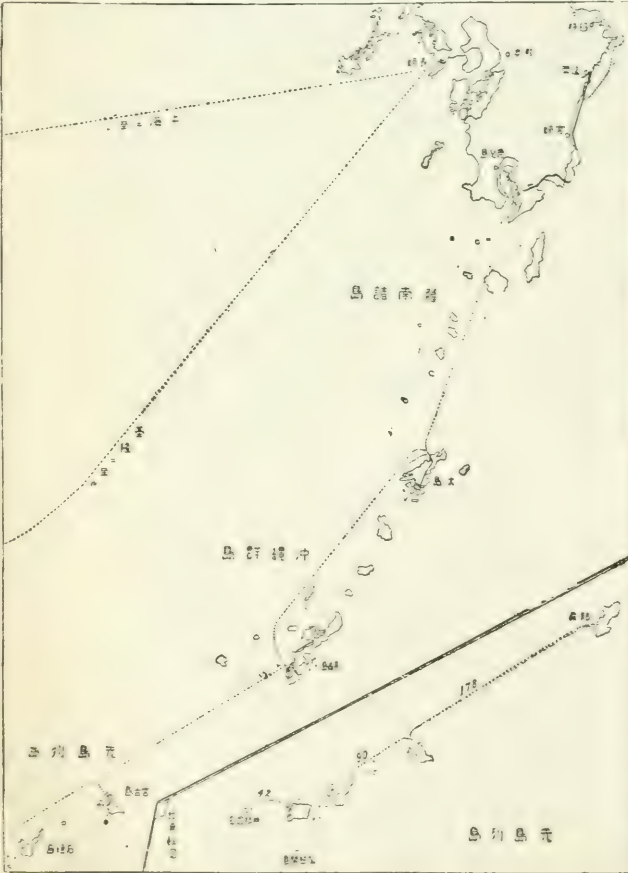
尋常五學年の小學讀本の中に、

甘藷ノ名ハ地方ニヨリテ異ナリ。關東ニテハ薩摩芋トイヒ、薩摩ニテハ琉球芋トイヒ、琉球ニテハ唐芋トイフ。名稱ノカク異ルヲ以テモ、此芋ノ次第ニ西方ヨリ傳來セシコトヲ知ルベシ。

とあるのは、ほんの些しばかりだが間違つて居る。琉球では甘藷を唐芋と謂ふ者は無く、一般に之をンムと呼んで居る。ンムは即ち吾々のイモと同じ語である。カライモ又はタウイモと云ふ名は、弘く南九州一帶に行はれて居る。從つて薩摩でも之を琉球芋と呼ぶことはない。琉球芋と謂つたのは九州の北の一角から、中國上方に亘る大區域であたつが、後漸く標準語のサツマイモに改まつて行かうとして居るのである。

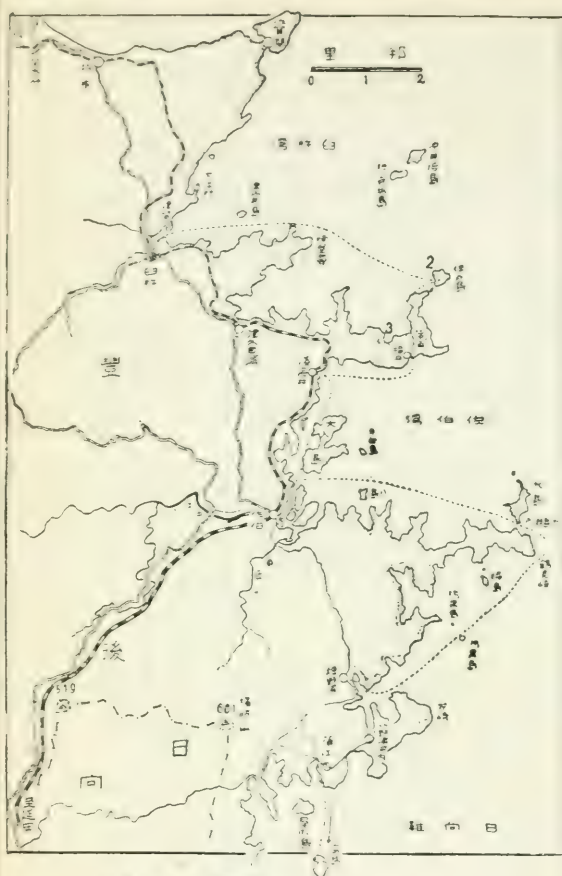
此類の誤は、子供たちにもよく判ることだから、單に其地方だけの爲にならば、之を訂正する必要は無いかも知れぬ。只氣になるのは之で以て、甘藷は南方よりと謂はずに、西方より傳來したとする推理法である。何となれば薩摩も琉球も、日本の南部である上に、甘藷は更に其南方の、南支那から輸入して來たことが確かだからである。

以前奥州などの田舍の料理には、所謂薩摩芋は椎茸や蓮根と、同等以上の待遇を受けたものだ。それが運送が手輕に成つたばかりか、氣仙あたりの島や半島に迄、とう／＼之を栽培する

（豐後から八重山まで）

やうに爲つた結果、大分近頃は平凡化しようとして居る。之に反して關東の大都會には、八里半の名聲遠く輝き、青木昆陽の墓の前に、燒芋屋の組合が感謝の祭を營むやうな時代が來た。
遠州御前崎附近は又事情が別で、藷種を輸入した大澤權右衛門の記念碑は、藷切乾生産業者等が、主として其建設の爲に奔走したやうである。同じ薩摩芋地帶の僅か數十年の歷史にも、よく見ると是だけの變化が有る。況や當初此物を沖繩に齎した野國總管、それをヤマトに招き入れた薩州兒水の繼川利右衛門、之を中國へ傳へた石見の薯代官井戸平左衛門等の、二百年前の心持では、果して今現に生じて居る社會上の效果の、どれだけの部分迄を豫期して居たものであつたか。到底吾々「おさつ」階級に屬する者の、完全に理解し得る所では無いやうに思はれる。
自分は考へる。少なくとも是だけは意外の效果では無かつたかと。甘藷考其他の宣傳書を見ると、主として不作の年の百姓飯米を補ひ、或は島の流人等が飢を救ふのを以て、諸の恩澤の至極と認めて居た樣である。それが今日では隨分宏大な地域に亙つて、凶年でも無い年に流人でも無い人々が、必ず作り必ず食ふ農作物とは成つて居るのである。斯の如き生活上の變化は、正しく大事業である。しかも二百何十年の歲月より他に、誰が企てて之を爲し遂げた、と云ふ人も別に無かつたのである。
カライモ地帶を旅行して見ると、又新たに國の運命と云ふやうなものを考へさせられる。海近く日の暖かい唐諸畠の一部分は、曾ては疑ひもなく浦人の粟生豆生であつた。こんな雜穀類の調製が面倒で、一人を養ふ爲の面積が多く入用なものより、甘いだけでも唐諸の方が好ましい。其上に世話も入費も概して少なく、凶作の患もずつと減じ得る。沖へ出て行く舟の辨當には、片手で食へるから便利だと云つた婦人もある。から云ふ考が元になつて、日本人なれども永年の箸と茶碗に分れ、藷の食事を常とする樣になつたのである。しかも所謂港田の遠く拓かれ、清水豐かに之を灌ぐやうな濱方に於て、必ずしも急にこの藷作りの生活に移らなかつたのは、何と謂つても米に勝る食物は無いからである。水に乏しい岬や島の陰で、以前は多分に人を住ましむる望も無かつた畠場が、この唐芋の輸入に由つて、初めて或意味に於ける安樂郷と爲り、瞬くうちに今日の如き人口密集を見るに至つたのである。甘諸先生と其先進とが若し出なかつたら、此等の海岸の岡は今尙萱立雜木立のまゝで、しかも吾々は夙に國内に溢れて居たであらう。勿論大いに苦悶しつつも、既によほどの人數を他國に出して居り、今更移民問題に行詰まるやうなこともなかつたであらう。實際この小さな島國の山國に、五千九百萬人を盛り得たのは、一半は即ちカライモの奇蹟である。或は激語してカライモの災ひと謂つた人さへもあるのである。
諸から米への代用食奬勵は、成績を擧げにくい事情が少しばかりある。なあに魚類さへ澤山捕つて食へば、營養には心配が無いと誰かは謂つた。或は又此頃の景氣なら、米を買つて食へぬことも無いが、それよりも藷で我慢して居つて、酒を澤山飮んだ方が幸福だと、謂つて居る人も有るさうだ。さうかも知れぬが其我慢だけは女房や子供にさせ、其酒は亭主ばかりが飮むのである。此の如き分配上の慣例は、默つて見ては居られぬやうな氣がする。
豐後では甘藷をトイモ又はタゥイモと謂ふ。しかも此邊は既に自分の謂ふ唐芋地帶に屬して居る。日隅薩の海添には、水に乏しい磯山の陰にも、藷に由つて多くの小樂天地が出來て居る。

薩南奄美の列島に渡れば、薯をトンと呼ぶ人々と、ハヌス又はハンスと謂ふ人たちとが、相接して住んで居り、其南は即ち沖繩のンム地帯である。更に南すると、之をアッコン又はウンティンなどと稱する先島の諸島があるが、生活の條件は諸島互に頗る相似て居る。南北三百何十里、中を隔てて廣漠の海がある。薯を此間に傳播し遂げたのは、果して皆偉人の力であらうか。或は又人間の安く活きる必要が、一部分は之を手傳つて斯んな作物を流行させて居るので無いか。自分は今でもまだ之を疑つて居る。

（海部郡の海岸）

二　穗門の二夜

近いうちに土佐の沖へ鮪釣りに出る支度に、臼杵の町へ買物に出て來た機動船に便乘して、風の寒い午後に保土の島へは渡つた。島の郵便局長の家で、此頃買求めた船であつて、前からの機關手の若い朝鮮人がまだ乘つて居る。他の乘組は何れも島の者で、自分などには解らぬくらゐの內地語で、何かこの故參の青年に對して小言を謂つて居る。しかし私に向つては極度に懇切なる人々であつた。又も來られまい、ゆつくり遊んで御出でるがよい、明日は保土の村の夜乞です、小さな神樣が御降りになるので、などと謂つてくれる。夜乞とは祭の夜宮のことである。祭禮のことを神の御降りと、まだ此島では謂つて居るのである。

斯んなうれしい島にならば、海が荒れて閉込められても本望だと、只ちよつと考へて見たばかりで、もう早其通りに爲つて居た。船が著いて見ると僅かな防波堤の陰には、早色々の小舟が避難して居る。正面の口からは、波がだぶりだぶりと入つて來る。地方の山は、闇と潮曇りであつた。あくる朝も裾を靡かす程の風が西から吹いて居た。對岸の四浦の鼻は手の届くほど近いが、此間はいつも潮が惡いのでよく船が覆る。とても今日は渡されぬと謂ふから、仕方なしに今一夜とまることにして、それから何遍も村の中をあるいた。全體に平地はちつとも無い島である。見上げるやうな傾斜地に、同

じ様な家が境も不分明に建て續けてある。二階と下と別々に、入口を路へ附けて、二戸三戸が一棟の中に住んで居る。肥前の鳥栖から來た藥屋がこんな事を謂つた。よほど氣を付けぬと、同じ家へ二度入つて笑はれると。家の方でも今一段と不必要な訪問者に對しては、おまへは先程も來たでは無いかと謂ふと。本當にさうかと思つて、慌てて還つて行くと村の者も謂つた。

家は近年に爲つて大分增加したものらしい。今でも行當るほど子供や女の數が多いのに、もう半月もすると壹岐左島の方から、三百何十人の男たちが、漁を終つて戻つて來る。其時だけは眞に寢る所も無いさうである。だから半分は人の家に往つて寢る。それを又樂みにして待ち待たれる若い者が多い。役場の當直室などもやはり借りられる。借ると謂ふよりは單に蒲團を持つて來て休むので、つまり島一つが大家內の一家のやうなものだ。だから其間に挾まつた旅の者には、居心地は決してよくない。

水は四百足らずの竈から、殆ど唯一つの寺の後の泉を汲んで居る。誠に感謝に價する淸水であつて、爰でもやはり御大師樣水と名け、しかも其由來はもう說明し得ぬやうに爲つて居る。この靈泉の一つの缺點は、水量が人口に比例して增して來ぬことである。今日の風が雨に爲らぬやうだと、二三日の中には番を附けて、順番で汲ませねばならぬと謂つて居た。尤も風呂の水だけは別にあるが、幾つかの錢湯では祭の日のせゐか、いつも裸の人の方が湯の量よりも多い。處々の井戶では洗濯をしながら、女たちが水の湧くのを待つて居る。かと思ふほど水が少ない。

時々は船に桶を乘せて、四浦へ汲みに行くさうである。燃料に至つては殆ど全部を外から持つて來ねばならぬ。周一里餘の島は、見た所九分通り畠で、タウイモばかり作るかと思ふ程だが、それでもまだ足らぬと謂ふ。野菜は自分たちと相乘りして、昨日も澤山に輸入せられた。島には何としても作る餘地が無いのである。段々畑の頂上には、それでも泉を養ふ少しの林が有る。その左手の小さな森は以前の物見所で、登つて見ると中には島人の墓がある。樹の間から伊豫の山が見え、又水之子の燈臺が見える。島の東側もやはり皆畑で、裾の方には四反ほど水田もあり、小舟で島をまはつて之を耕しに行く。之に灌漑する池もあり、折々はそれでも鴨が來て遊ぶ。又海岸の岩の陰には河童も居る。友達の聲をして寺の和尙を夜中に喚び起し、朝の勤めの木魚を叩かせた、といふ話もある。狸も何處から渡つたか夫婦二匹だけは居た。その一匹が殺されて、他の一つが大いに荒れたことがあつた。

こんな話を聞きあるいて、夕方に宿の郵便局に歸つて見ると、あの朝鮮人は靑い仕事着のまゝで、にこ／＼と藁仕事をして居る。宵祭の馳走がまだ調はぬうちから、三四人の老女たちがもう遊びに來て居る。賀茂樣の森には燈明がともつて、太鼓と石段の下駄の音とが聞える。ごろりと横になると、空には雲があるいて居る。終日白く騷いだ海面が、誰にも顧みられずに暮れてしまふ。其うちに下からは、婆さんたちの歌の聲が聞えて來る。伊勢踊と云ふさうだが、間の延びた伊呂波歌で、弘法大師の事を作つたものらしい。大層調子が揃ふなと思つて覗いて見ると、團扇を叩きながら婆が二人踊つて居た。それから又大いに笑ひ、今度は別の歌である。若い後家なら何とかだと歌つて居る。あれは私が可哀さうだから、元氣を附けてやると言つて歌ふのですと言ひながら、室を片附けに來た未亡人は、改めて又眼を拭つて居る。斯う云ふ生活も保土の島には有つたのだ。

次の朝に天氣であつたから、思ひ切つて小舟を下させた。するとこの婦人を初め二三の島の人が、今日の祭の案内に、四浦の村々へ餅を持つて一緒に乘つて行く。出て見ると浪はまだ高いが、祝類の客や土産の大根葱などを乘せて、もう戻つて來る島の船もある。自分の船にも夥しい重箱の包が有る。いつの間にこんなに搗いたかと思ふほどの餅である。今日の船は餅船だ、あんた方は餅に便船したやうなもんだと笑ひながら、島の人たちは別れて浦々に上陸し、船には自分等ばかりが淋しく殘つた。

三　海行かば

海で死んだ人の話を幾つも聞いた。越知浦では霜の深い冬の或日の朝、村の某の手繰網の小舟が、からつぽで波に漂うて居るのを見附け、それからその附近で倅の二十三になる青年の、厚い綿子を着込んだ亡骸を引揚げた。此あけがたに親子で出た船と、熱心に捜し廻ると三日目に漸く、父親の方も淺ましい姿に爲つて出て來た。常からどうも頑丈とは謂はれぬ息子であつた、多分は櫓の綱でも切れて水に墜ちたのを、後先も考へずに助けに飛込んだものだらうと、今に同情の噂の種に爲つて居る。

船の扱ひは小さいうちから、親が教へる習はしである爲に、折々此樣な情無い不幸がある。保土の島でも二三年前に、他の者より些し先に五島を出た、親子三人の船が戻つて來なかつた。別にひどい大荒れでは無かつたけれども、船が如何にも弱々しい古船であつた。仲間の人たちは蟲が知らせたか、之を氣遣はしがつて色々と忠告をした。もう僅か待つて皆と一緒に引上げようぢや無いか、何も一日を爭うて還るにも及ぶまいと謂つたが、どうしたものか仕事の都合が有ると、何でも構はずに出帆してしまつた。さうして永遠に何處へか往つてしまつたのである。この附近の村役場には大抵一件か二件、毎年の徴兵事務に際して、所在不明者の煩はしい手續を繰返さねばならぬ者がある。それが皆此類の、死んだに相違ない若者ばかりである。身寄や親しかつた人々には、死んだ者よりも猶一層の苦痛を與へる。明かに死んだ者には年忌が有る。假令其時は胸が裂ける程に悲しみ慕うても、月日が立つうちには間が遠くなり、年々の祭や供養が自然の垣根を作つてくれる。之に反してどうして居るか分らぬ人々の幻の始末は、司法や行政の法規よりも更に面倒である。其を考へての思遣りでもあるまいが、漁師たちの方でも行方不明になることを、死ぬより以上の不幸と感じて居るらしい。船の綱は大切な物だ、是さへ有れば死んでも分らなくなるやうなことは無いと、自分を載せた船方なども謂つて居た。さうして又斯んな話もして居つた。

今からちやうど二年前に、臼杵の近くに在るセメント會社の工場へ、粘土を運んで來る伊豫の八幡濱の船が、豐後水道で颶風に遭つて、六人の乘組は悉く死に、船と共に大濱村の浦に漂著した。其人たちは皆船の綱で、しつかりと身體を縛り附けて死んで居たと謂ふ。郡役所の吉野君は之を臨檢に往つたから、よく見て知つて居る。今思つても涙が出ると謂つて居た。よく〳〵働いたものと見えて、六人ながら手掌の皮が剝けて居た。十五六に爲る少年が先づ斃れたかと思はれ、綱の一番細い處で船にくゝり附けてあつた。四人の若者も同じ綱に順々に結ばれて死んで居り、四十二三歳の船長は最後に最も簡單に、太い綱で只一重だけ、腰の周りをゆはへて居たと云ふ。こんな立派な覺悟はこの仲間でもまだ見たことが無い。一切の帳面と書附類、それから濡れては居たが三百何十

圓の紙幣まで、悉く素肌に卷著けてあつたので、一行の書置も無かつたが、顚末は卽座にわかつた。えらい物である。

豐後は舞の本の、百合若大臣の故鄕と云ふことに爲つて居る。浦の男女は今旣に其歌を忘れてしまつたが、曲に現れた昔の愁と惱みとは相續して居る。玄界の離れ小島では、百合若はひたすらに故鄕の家を戀焦れた。ロビンソンクルソーの物語と比べると、先づ基調に於て全く異つて居るのである。綠丸はロビンソンの犬猫とは違つて、空中自在の靈鳥であつたけれども、主人の旨を承けて豐後の府中へ往來し、その妻子に安否を知らせるのを殆ど唯一つの目的として居つた。百合若單衣の白い袖を斷ち切り、紙筆と血で書いて此鳥に持たせて遣ると、世間知らずの奥方は、大きな硯までも入用かと思つて、之を翼に結附けて還した。綠丸は硯の重さに堪へず、終に玄海の渚に來て死んだとある。坪内先生の説では百合若は卽ちユリシスの作り換へと云ふことであるが、鷹の忠義の因緣を嗟歎したのは、恐らくは日本の方ばかりであつて、しかも征戰事繁き時代の、所謂春閨夢裡の人々に、新しい哀れを泣かしめたのは、まさしく艷に優しいこの島住居の一節であつたらうと思ふ。さうすれば此が又、我邦傳來の海の文學であり、且は海の民の深いなげきの聲でもあつたのだ。

雲海遠く隔つた宮古の水納島にも、ほゞ同じやうな大和人の漂流談が有つて、此は百合若とは謂つて居らぬ。硯を負うて流れ着いた鷹の墓は、後世一つの靈場と爲つて居た。秋每に此墓の上には、多くの鷹が海を渡つて來て休むので、永く新たなる感動を人に與へたと謂ふことである。綠丸の翼を休めたと云ふ松は諸國に在る。出羽にも奥州にも此鳥の爲に築いた塚がある。百合若が後に廻國して供養をしたなどと謂ふは作り事で、多分は遠き昔勇ましい鷹の姿を見て、何れの旅人の家でも之を生靈の音信を傳へるものと、考へた名殘であらう。絕海の孤島に獨り住む者、或はさうでもして生きて居るかと思ふ者の身内が、稍肌寒い秋なかばに、遙々と渡つて來る鷹の聲を聽いて、忘れ難い有りし日の面影を深めるのは自然である。それと言ふのが無始の昔から、故鄕は土であり、子孫は唯一の神主であることを、絕えず信じて居た我々の遺傳が、無意識に海の自由を制限してしまつた、その悲しい鎖國の名殘であるかも知れぬ。

四 ひじりの家

日向路の五日はいつも良い月夜であつた。最初の晩は土々呂の海濱の松の陰を、白い細かな砂をきしりつゝ、延岡へと車を走らせた。次の朝早天に出て見たら、薄雪ほどな霜が降つて居た。車の犬が叢を踏むと、其が煙のやうに散るのである。山の紅葉は若い櫨の木ばかりだが、新年も近いのにまだ鮮かに殘つて居る。處々の橋の袂、又は藪の片端などに、榎であらうか今散りますとでも云ふやうに、忽然として青い葉をこぼし始め、見て居るうちに散つてしまふ木がある。土持殿の御支配の頃から、否々皇祖御東征よりも更に以前から、海に近い縣の里の野原では、寒い霜夜の月の明方每に、斯うして物の綠が土に歸して居たのであらうが、或時或旅人が通り過ぎて、之を美しいと見るのは瞬間であるなどと、自分は有りふれた斯んな事を考へ出した。それといふのも自分が今尋ねて行く人の境涯が、餘り我々の生活と變つて居る事を、想像しながら來たからであつた。

南方の龍仙寺さんと謂つて尋ねて廻つたが、不思議と誰も知つた人には逢はぬ。そんな筈は

無いのだ。内藤家の御祈願所の、隨分名の有る法印さんだと聞いて居る。それならば野田の稻荷山の行者殿に違ひ無い。もう此邊には他に無いからと謂ふので、旭がさして來た松山の霜解を、こつ／＼と登つて見た。縞の著物に角帶の、髮は一寸も延ばした老人が、果して訪ねる谷山さんであつた。日向に移住して來て既に十七代に爲る。本國は大和で谷山堅右衛門と云ふ人、土持家の盛りの頃に兵法の師範として、子息の重右衛門を連れて下つて來た。所領は山の麓の大貫村で、野田山に砦を構へ、稻荷は即ちその城內の鎭守であつた。世中が改まつて內藤氏の藩が出來た時、只の臣下で居る代りに山伏に爲つてしまつたが、それでも火事に遭つてこの山上に移つた父の代迄は、大貫の元の屋敷に引續いて居たさうである。稻荷大明神の社前には廣い平地が有つて、その中央に井戸がある。之を前に取つて今の住居が、背戸を谷間に臨ませて、閑かながらも城地の俤を遺して居る。明治五年に修驗の職は廢せられたが、關東諸國の山伏のやうに、神主や只の農家に爲らうとはせずに、作州津山の在から潰れ寺の名跡を買ひ、表向き之を引移したのが龍仙寺で、土地の人もまだ其名を知らぬ位である。以前の名は明實院、それを法印は御自分の名にして御座る。

鎭守の稻荷様は御寺だけに、咜枳尼天として祀つてある。詣る人が今風だから、華鬘や提灯の眞赤なのも仕方が無い、自分は歸り途にその數多い鳥居の下を通りながら、是とは緣も無い遠い津輕の海岸の荒濱を思ひ浮べた。今年初秋の風の早大いに冷かな朝であつた。一つ事ばかり考へながら、獨りあの濱手の淋しい路を歩いた。曾て深浦沿革史を世に公にした海浦さんと云ふ人は、名が義觀だから或は僧侶だらうとは思つたが、あんな阿倍比羅夫の直系見たやうな、昔の儘の山伏だらうとは考へて居なかつた。自分迄でもう五十一代、肉親の相續で此十一面觀世音に御仕へ申すと謂つて居られた。一宗の事相は淵底を究めた篤信の聖である。日本の國風に此ほどよく適合した永い歷史の一宗派を、何で又取潰して只の眞言寺に編入してしまつたかと、六尺もある大きな體を前にのし掛かつて、まるで私がさうしたかの如く、眞正面から見詰められる。わしの寺は聖德太子様の時から、俗生活の儘で成佛する教に基いて、肉食もすれば妻子も育んで來たものだ。世中が變つたからもう宜しいと、それを大目に見て置かれる寺とは話が違ふ。世間が八釜しく無いだけで、只の寺に女房を置くのはあれは非如法ぢや、破戒ぢや。わしの方は教理ぢや。手を組んで竝んで行かれるわけが無いのぢやとも言はれた。貴僧を見ると昔を見るやうな氣がします、定めて戰國の頃などは、この地方の勇士の家々と緣組なされ、薙刀などで大いに働いた人たちが、この御寺からも何人か出られたことであらうと謂つて見ても、にこりともせずに、この宗派の獨立せねばならぬことを說く人であつた。一度逢つたら忘れ能はざる上人である。

日向の延岡の近くに谷山さんの居らるゝことは、この深浦のひじりから聞いたのである。修驗派獨立の初期の運動に、東京は神田の電車の交叉點の近くで、全國の行人たちが大集會を催した事があつた。其所に兜巾鈴懸の昔のまゝの姿で、即成同盟に馳せ加はつたのは、龍仙寺の法印一人であつたさうだ。自分の寺は舊藩公の時代から、この行裝で寺祿を食み祈禱を仰せ附かつて來た。世間を憚るべき道理は無いと、立派に言切つて居られたと謂ふが、自分の話をして見た感じでは、海浦さんと同樣小兒よりも無邪氣で、些しも山伏流の高慢な樣子などは無かつた。

其とは反對に寧ろ寂寞たる陰影が有つた。津輕の御寺でも二三年前に、自分等より大分若い篤學なる嫡子を亡なつた。次男は繪などを描く人である。さうして同志と爲る弟子達が少ない。自分は日向へ來てこの氣の毒な話をすると、頻に谷山さんの顏の色が曇つた。實は私の方でも、相續させる積りの倅が死にました。其次は實業の方に居る爲に呼戻しもならず、十五に爲る孫を是から仕立てることになつたとある。その少年は今戸口に立つて、いつ迄も歸る自分の後影を見て居るのがさうらしい。自分は旅人だから、勿論ずん／＼と往つてしまふ。しかもこの閑かな山の寺の人々とても、やはり亦世中の道をあるいて居て、一つの處に永く彳んでは居られぬのである。

五　水煙る川のほとり

飫肥の町へは十二年ぶりに入つて來た。町にはまだ貂狐猿羚羊などの皮をぶら下げて賣つて居る。やがて海に入る靜かな川の音、板橋を渡る在所の馬の蹄きまで、以前も聽いたやうな氣がしてなつかしい。城迹の木立の松杉は、伐つて又栽ゑた附近の山よりは大いに古く、曾て穴生役の技藝を盡したかと思ふ石垣の石の色には、歷史の書よりも更に透徹した、懷古の味ひを漂はせて居るが、今の小學校の巨大な建物に、引懸つて居るものは振德堂の額だけて、百數十年の學徒の勞作や蒐集などは、もう偶然の訪問者等には、ちよつと覗られぬやうな處に藏してあるらしい。さう何時までも昔に滯つては居られぬと感ずる時代は、どこの城下の町にも一度づつは必ず遣つて來る。或は此邊へは今恰も來て居るのかも知れぬ。九州は全體に人の智慧の、能く利用せらるゝ地方なるにも拘らず、政治の中心の地から稍遠過ぎると云ふ不安が、無用に生活の常の道を攪亂する傾きがある。況や海と高山とで遮斷せられた南の果の町が、今は却て昔の要害を悔み、しもせぬ世間の聲に聞耳を立てて、見馴れた眼前の物の意味を、假に暫く忘れて居たとしても不思議は無い。

のみならず或時代には、あんまり山から此方ばかりを、我天地として居た爲に、本意でも無い度々の戰をせねばならなかつた。外部を知ることの多少に從つて、同じ程の智者が成功もすれば蹉跌もした。しかも兎に角名の遺つたのは、此等少數の弘い世中と交涉の有つた人ばかりで、與へられたる平和を出來る限り樂み、安閑の生涯を送つて居た多數の高士は、永遠に歷史の表面から消え去つた。要するに斯う云ふ先例の集積したものが、卽ち町それ自身であつたのである。都會は一般に現代を小賣する場所だ。從つて飫肥ばかりが古い感情の姨捨山で無かつたら、其は寧ろ不自然な現象と謂はねばならぬ。

自分は旅の無聊を奈何ともする能はずして、町の端まであるいて何か見る物を搜した。伊東家は他の諸國の中大名の多數に比べて、更に一段と嚴肅なる墓域を、その舊領の地に構へる權利が有る。昔工藤犬房丸の子孫が、遠く下つて、此邊に盤踞しなかつたら、卽ち酒谷盆地の歷史は無いのである。人は省みないがそこいらの松よりも岩よりも、猶古い記念が溢れるほどもあるので、しかもその記念は此川の昨日の水の如く、既に流れて大海の潮にまじつて居る。それに比べると僅かに松風の一つの岡を隔てて、今も現代の人々が來て歎く一廟の墓の方は、さゝやかな淸水のやうなものであつた。日本を大きくしたと云ふ近世二度の戰役に、此ほども死んだかと驚く程、この土地からも多くの若者が、出て戰つて死んで居る。それから其隣の一區劃には、此人たちの叔父の列の數十人が、や

（日向の東南隅）

はり同じ位の若さで、當時賊と呼ばれた側で戰つて、さうして亦討死をして居るのである。三十二で腹を切つた惜い新人物、小倉處平の墓を中にして左右に、何れも健氣な名前ばかりだが、世を憚つて齡と斃れた場處の他は刻んで無い。其中にたつた一つ、二十八歳の平部俊彦だけは、祖父の嶠南先生が其碑文を書いて居る。十四で孤兒と爲つてから、先生が傍に置いて親ら之を教育した。夙く經學の要義を解し、文章も少年の作のやうでは無かつたので、東京に居た頃は安井先生も見込が有ると申された。郷里に還つて小學の教員をして居る中に、今度の事件が起ると何の躊躇も無く、直ちに出て往つて小隊長に爲つた。さうして立派な死に方をしたと書いてある。當時の遺族の立場は定めし辛かつたであらうのに、半句も疏明の辭が無いのは分つた人である。先生は此時六十三、四つに爲る曾孫が母と共に殘された。久しからずして其兒も亦歿したと書いてある。

若い人々の花やかな討死よりも、今に爲つて見ると老學者の生存の方が痛はしい。嶠南翁は明治五年に東京を引上げる前、郷里の家の六郷莊の記を書いて居られる。頤を支へ窓に凭つて山川を四顧し、遠く荒塋古壘の迹を眺めては戰國將士の勞苦を思ひ、城市萬戸の煙を望むときは昭代太平の恵を感ずる。夜は高根の月、川の瀨の音、之に對しては酒無くして憂を忘れ、藥せずして長生を求めつべし。後世子孫幸に之を荒すなかれと謂つて居るが、子孫は先づ絕え、もう其屋敷の地には何人が來て住むやら、尋ねて見ても一寸は知れさうに無かつた。翁の遺著には永く世に傳ふべきものが勿論ある。併し之に由つて曾て一たび此學者の切實であつた生活を、果して繫ぎ留めることが出來ようか。我々が求める平和の基礎には、やはり澤山の忘却が、必要なのではあるまいかとも思つて見た。

山が近いからか又は此頃の季節の爲か、今朝も大いに立つて居た水煙が、晩方にも酒谷川の流を掩うて居る。宿の欄干に出て立つと、河原

には薄々と月がさして、もう物を洗ふ人の影は無い。前に來て泊つた家も板橋の近くであつたが、二階は無くて門の脇にたしか柳が一本有つた。名を忘れたばかりに誰に聞いてももう分らなくなつた。あの時夜更まで來て話した郡長の田内氏を始め、僅か十二年の間に死ぬ人は死に、去る人は遠く去つてしまつた。さうして自分も亦偶然に、今一度過ぎて往くのみである。未來にも仕事がある。强ひてはつきりと此樣な昔を、思ひ出さうとするには及ばぬのかも知れぬ。

六　地の島

九州の東海岸には、忘れられた地の島が幾つも有る。沖の小島の遠く萬人に眺められ、夕日夕月に照され、歌に詠まれ、或時は漕寄せて蔭を求める船あり、淸水が有れば來て汲み神を祀り、後には人も住み、風待ちの湊とも爲つて盛衰するのに比べると、此方は目に立たぬ淋しい境涯であつた、いつでも海邊の山の裁ち屑の如く取扱はれて居る。關東で言ふなら相州の江島、安房の仁右衞門島、又は常州磯原の天妃山の如き例外は、日向方面に於ては靑島がたゞ一つ、是は幸ひにして滿山の蒲葵林が、ちよつと熱帶らしい感じを與へる爲に、見物も來れば繪葉書も出來て居り、何時の間にか彥火々出見尊の御召舟の、無目籠が化して成つたと云ふ、傳說さへも行はれて居る。

其よりも永くなつかしいのは、豐後では臼杵灣頭の津久見島である。山が險しい爲か此島ばかり、保安林に編入せられる以前も一向に斧斤を知らず、隙間も無く茂つた綠の樹の中から、色々の鳥の聲が遠く波の上の舟まで聞える。今は目白の名所だと謂ふが、ツグミと呼ぶのもやはり鳥の名から始まつたやうに思ふ。農家が只一戶對岸から渡つて小屋を構へ僅かの薯畠を作つて居る。シャアの村からも、稀に枯枝を拾ひに來る位で、人の歷史には緣の薄い島らしい。

そこから出て來ると、左手の海上に沖の無垢島と地の無垢島が見え、次第に前に話をした保土の島に近づくのである。保土の山に登ると佐伯灣を隔てて、南に鶴見崎に接して大島と云ふのが指點せられる。保土から移住したと云ふ舊家なども有るさうだ。この入海では大入島が最も大きく、幾つかの網代と美しい淸水とがある。娘たちが帆を操つて每日町に往來して居る村である。又人は住まずして耗地ばかりの島も有る。中浦の沿岸を東へ進んで、大島の瀨戶を通り拔けると、鶴見の鼻から芹崎までの間に、多くの小さな無人島が連つて居る。地の黑島と沖の黑島との中を船は行くが、沖の黑島の方には蒲葵が生えて居る。蒲江の港の口には島が又二つあつて、その遠い方の深島には、人も住み學校も有り、蒲葵の林も有ると云ふ話であつたが、もう夕方に爲つてその風情を見ることは出來なかつた。

日向路では東臼杵の富高の邊に、二つ三つの地の島が車の上からも見える。今や既に單純な草山である。其東の沖にも一の檳榔島があるのだが、懸離れて居て樣子が分らぬ。是から南はずつと靑島の邊まで、川每に砂を押出して長濱を作り、以前は地の島であつたらしいものが、多く地續きの岡に爲つて居る。內海港の南の巾着島なども、島は名ばかりで今は一個の岬である。九州一の良い港を、あたら僅かの新田の爲に淺くしてしまつたと謂ふ外浦の堤も、やはり大きな地の島を引寄せて繫いだもので、之を爲し遂げたのは人よりも二つの川の泥であつた。出雲風土記などでは國神の偉功に算へたほどの地變でも、時代が後であつたばかりに飫肥の海邊では、咲き榮えた靜かな文明を

一朝に滅したのである。油津の繁榮は恐らくは是から移つたものだらうが、依然たる昔の小場島大島は、此が爲に能く外洋の波濤を防ぎ、又參差たる入江の風光を衛つて居る。嘉永の頃迄はこの大島には人家は無かつた。藩の牧場として久しく良馬を產して居たと謂ふのは、多分駿馬を龍の種とする思想の繼續であらう。目井の津まで二十餘町、一の船著きも無かつた荒濱から、若駒を牽き出して往つた勇ましい光景が想像せられる。小場島は即ち亦蒲葵の島のことで、曾ては此島にも繁茂したものと思ふ。更に南に進んで市木村の築島にも、處々に同じ木の林がある。船から見える三四戸の農家が、塗壁瓦葺きの中國邊と同じやうな構で、蒲葵の青い葉の葉隠れに、立つて居るのは面白い。上つて遊んで行きたいやうな氣持がした。築島の陰を離れると、次に鳥島と幸島とが現れる。幸島は少し大きくて周りが二十何町、一段と陸地に近い。松の密生した背面を、船は廻つて行くのである。猿が多く居るので知られて居る。森の中に只一軒、番人見たやうに住んで居る人が、手船を漕いで時折陸の方へ往來する外に、あまり來て見る者は無いさうである。眞に淋しいところだけれど、遊びに出かけることがある、一匹ぐらゐは見えさうなものと、船窓に凭つていつ迄も眺めたが、こんな風の寒い日には出ますまい、夏ならば毎日のやうにあの邊の岩に降りて、蠣を採つて食べて居ますがとある。いつ迄斯んな小さな島に、平安で有り得るかと思ふと、猿ばかりの問題では無いやうな氣がして來た。

それから自分は都井の宮浦に上陸して、牧の野馬を見に岬の鼻まで往つた。高鍋藩の經營した、此も至つて古い海の牧場で、所謂福島馬の故郷である。今や馬種の改良が盛んに行はれて居る。御崎社内の野生蘇鐵と共に、「此山の猪捕るべからず」の制札を以て、天然記念物の野猪は保存せられて居るが、人作の福島馬のみはえらい虐待で、牡は悉く二歳に爲る前に、牧から追はれて試情馬などの淺ましい生活を送つて居り、之に代つて異國の種馬が、來つて極端の幸福を味つて居る。

此から峠を又一つ越えると、福島の町が見える。即ち中世の櫛間院の地であつて、クシは即ち亦岬の古語である。入海を隔てて志布志の蒲葵島が美しく、其向うには大隅の山が見える。大隅のスミはやはり亦、シマのことだらうと考へられた。

七　佐多へ行く路

島泊の漁村は僅かな磯山川の川尻に固まつて居る。爰にも小さな地の島が一つ、殆ど砂濱に續かんとする地位で、南海の風を遮つて立つて居る。昨夜夜半の大雨には、沿岸のボケ網舟は悉くぬれて戾つて來たが、此浦でも家の數より多いかと思ふ刺子の仕事著が、磯の大岩小岩にずらりと掛けて乾してある。さうして男たちはまだ寢て居るらしい。今日は大晦日だが、新で正月をする人は此村には居ない。

伊座敷の町からこの島泊まで、元は一番高い山の八分迄登つて越えるのが、近い故に唯一の通路であつた。然るに鄰の西方區を通つて、最近に一間幅の路を一建立で開いた人がある。それが豐後から來た炭燒だと聞いたときは、何だか古い物語のやうで嬉しかつた。炭燒は十何年の勤儉で拵へた家家敷を賣拂ひ、まだ入費が足らぬのでわざ〳〵國へ金を取りに行つて來た。さうして出來上つた新道の片端に、かの小五郎の小屋の如きものを建てて住んで居る。どうして斯んな志を立てたか、又末には如何なる果報が來るものやら、自分などには分らずに終り

さらである。
九州も爰まで來ると、眞に國の端と云ふ感じが強い。淺い山を拓けるだけは薯畠にした爲に、降るほどの雨が悉く谷川に出てしまひ、溢れて通路の草を漂はし、やがて皆海に呑まれて行く。徒渉りがすむと直に坂を登り、越えてしまふと又小川だ。坂も多いが曲り角も多い。三町と同じ方を向いて進むことが無い。樹の間からは大抵海が見え、淸々とした聲で頬白などは、沖を見ながら囀つて居る。風がいつでも少しづつ吹いて居る。

尾波瀨で一旦又海の渚に下り、村の後の放牧地を通つて、草山を十町ばかりも行くと、今度は外海の濱に出で、中央の山路と一つに成る。大泊と謂つて、むかし種子島へ渡つた船著きである。もう汽船の世中に爲つて、只の漁村に復つて了つたが、それでも松飾りをして春を迎へんとする帆船が二隻、入つて來て繫つて居る。歸りに見ると紅い國旗を立てて居た。小學校でも頻に式場を用意して居る。岬の端まではまだ一里半もある。燈臺の人たちに子供が有つたら、爰迄通つて來ねばならぬのだ。中間に田尻の部落はあるが、分教場すらも此には置いて無い。

田尻は廣々とした石の外い濱である。其名の如く峠道の左右に、若干の水田を持つて村人は登つて耕して居る。村の周圍には蘇鐵が多い。此が自然に繁殖して居るのを見ると、御崎神社を信仰した樺山權左衞門が、琉球からの凱旋に携へ還つて奉納したのが始めとは、先づ信じにくい傳説である。村から社まではまだ二十町もある。此が一團の綠の御崎山で、社に詣る一筋の徑を除くの外、今なほ完全に小鳥の世界である。田尻の土持氏に今夜の宿を頼んで置いて、自分は獨り午後の日影の洩れる樹下の路を歩んだ。暇有つて樹實の正に熟する季節に、折好くも此山に來て見たことを喜んだ。花よりも麗しい黃紫色々の大小の珠玉が、枝每に豐かに綴られて居る。之を啄みつゝ歌ふ者の聲である。諧々として自然の饗宴の樂みを、はてしも無く語つて居る。

同じ燈臺でも陸奧の尻矢の荒磯崎などでは、闇夜に迷うて來て突當つて落ちる鳥が多いと謂ふが、佐多に此事が稀なのは、是亦御崎の神の林の導く故であらう。秋から先は四方の渡鳥が、悉く爰に來て休むかと思ふ程、樣々の鳥が遊んで居る。靜かな日には二十五海里の海峽の迅潮を越えて、種子屋久の礒の島までか、岬の岩の上に來て漁つて居る。空から行く者には此山ほど、好い目標は無いのだらうと、永年鳥を友とする人たちは語つて居た。人に取つては船が大きくなるにつれて、港から港の間が愈々遠くなるが、實際此岬まで來ると、南の島の一列の飛石であつたことがよく分る。黑島でも竹島でも硫黃島でも、佐多の岬の端に立つて見ると、顧みて薩州の山を望むよりは猶親しい。島々に行けば次の島が又さうであらう。沖へ出て見たら倘一層、移る心が自然に起ることであらう。

御崎の山には蘇鐵と蒲葵とが多く、何れも實が熟して居る。親木の陰からずつと離れた場所にまで繁殖して行くのは、やはり稍大きな鳥が運ぶのだらうと、土地の人たちも謂つて居る。蒲葵も此邊まで來ると次第に民家の樹と爲り、殊に社や堂の近くに大木があるのは、是は古く此實を播いたものかと思ふ。併し笠や箒にする葉は、燈臺に近い小島から採つて居る。コバ笠コバ箒などと謂ふコバは、沖繩及び先島の、クバと同じ語である。

田尻の除夜は浪の音ばかりであつた。戸を立てぬ緣側から月がさして、障子の紙がふるへる程の微風が吹く。時計を見ると今將に歳が替ら

うとして居た。初日の出には眞直に向つた灘であ
る。おゆみと言ふ村の女に荷物を持つてもらつ
て出て來ると、袴をはいた學校の兒等、濱砂の
上に小さい足跡をつけて新年の式を歌ひに先へ
行く。大泊を過ぎて南の路にかゝると、南で
佐多の御崎が深緑に遠く見える。幾らでも遠
つて幾らでも登るかと思ふやうな路であつた。
處々に牛馬の爲に稍緩傾斜のつゞら折が新た

に開いてはあるが、使はぬと見えて草が生え、
人は昔からの急な坂を通るのである。頂上を
大泊のヨクと呼んで居る。ヨクは「いこひ」と
いふ意味で、誰でも爰へ來れば休む。三方の海
が見える。島々も見える。さあ行かうと立上る
と、おゆみが荷の上に結へ附けて、町へ持つて
出るコバの葉の束が、がさ〳〵と南國らしい音
を立てた。

(近 附 岬 多 佐)

八 いれずみの南北

七島南端の寶島と、大島の笠利岬との間の、潮の流れの最も迅い四十何海里は、土俗の上から觀てもやはり一つの境である。例へば中國四國の海岸で、カネリ或はイタヾキなどと名けて、女が物を頭に載せてあるく風習は、九州南部にも弘く行はれ、殊に小さな島では水汲もさうして運ぶが、爰に來るとそれがまるで無くなつてしまふ。奄美列島では一番隔れた與論島まで、それから沖繩の本島でも北部の三四箇村は、何れも幅二寸ばかりの苧の組紐を額に引掛けて、其を力に物を背負うことは、ちやうど内地の村の人たちが、胸の上部に引掛けて負ふやうに、石や薪の重い荷物でも、皆斯うして額に吊つて持つて出る。山坂があんまり險しい爲に、頭に載せてはあるかれぬからと、首里や那覇などの、イタヾキを常の習とする地方では説明して居るが、一方には又南北兩端の江の島の如き、爰に限つて肩には負はず、頭に載せて居る島に於ても、やはり坂が急だから頭に載せるのだと言つて居るから當てにならぬ。山は少ない沖繩から南にも、急な苦しい「坂」は隨分有

る。處々この方面では一般に、必ず頭の上に載くことに爲つて居るのである。額に掛ける風はアイヌの中にも行はれて居るが、それは偶合とも見ることが出來る。兩手を自由にして置いて物を運ばうとすれば、頭か額か兩脇か、先づ此以外には工夫が無いのである。鄰の人を見て眞似たのも亦不思議で無いが、其よりも不思議なのは眞似に境があることである。

他所の風習はさう容易に模倣せられるもので無い。白野夏雲翁が今から四十年ほど前に、寶惡石の島々を巡回した時には、手に入墨をした女を何人か見た。何れも大島から落附いて來た婦人だと、七島問答の中には書いてある。この海峽を越えて、嫁に來るだけの親しみは有つても、入墨の習は七島には入らなかつたのである。七島では手の甲の入墨の代りに、女が皆齒を染める。但し內地の方の昔風とは又ちがつて、十三の歲の五月に只一度だけ、鐵漿を附けるのである。若い女が女に爲つた印に斯うすると、後には鐵漿其ものが美しく感ぜられ、裝飾に爲り又道理が附添へられる 此點は南の方の島々の、入墨もよく似て居る

二十何年以前に沖繩を旅した人の話に、十二三の小學の生徒が、豆粒程の入墨を刺したのが、愛らしく見えたと謂つて居る。此頃から始めて段々大きくして行く習であつたと思はれる。處がちやうど其時分に、入墨を禁止する布令が出た。隱しては遣れぬ仕事なので、この禁制はよく行はれた。曾て美しかつた白い手が、もう追々皺になる年輩の女だけに、入墨が殘つて居る。もう頼んでも眞似をせぬ時代が來たしかも昔はまた老女の間に、はつきりと遺つて居る。

沖繩縣では一般にハジチと謂ふやうである。慶長の初に出來た琉球神道記にも、入墨の風俗を述べて針突と書いて居るから、ハッキの轉音であることがよく分る。大島では釘突と謂ふと南島雜話にあるのは、これも針突の誤寫では無からうか。何にしても二島分立の以前から、弘く行はれて居た風習であつて、其が時を經るうちに僅かづつの變化を見た。大島の方ではもう珍らしいと云ふ程に、針突をした人が少なく爲つて居る。村に入つて之を搜して行くうちに、折々は糸滿からの移住者を見出した。糸滿の女たちは何處に來ても、頭に物を載せて往來する上に、依然として南沖繩のハジチをして居る。四隅に區切つた菱形の花を、手首か甲の眞中に大きく彫り、指の根每に幅一杯の星形を附けて居る。之に比べると大島の入墨は、人に依つて大小が有り、模樣なども思ひ〳〵に、區々をして居るかと思はれた。詳しく尋ねたら村として又は家として、何か變化を附けるわけが有るのかも知れぬ。たゞ尋ねて答へてくれさうな人が、今は既に無いのである。

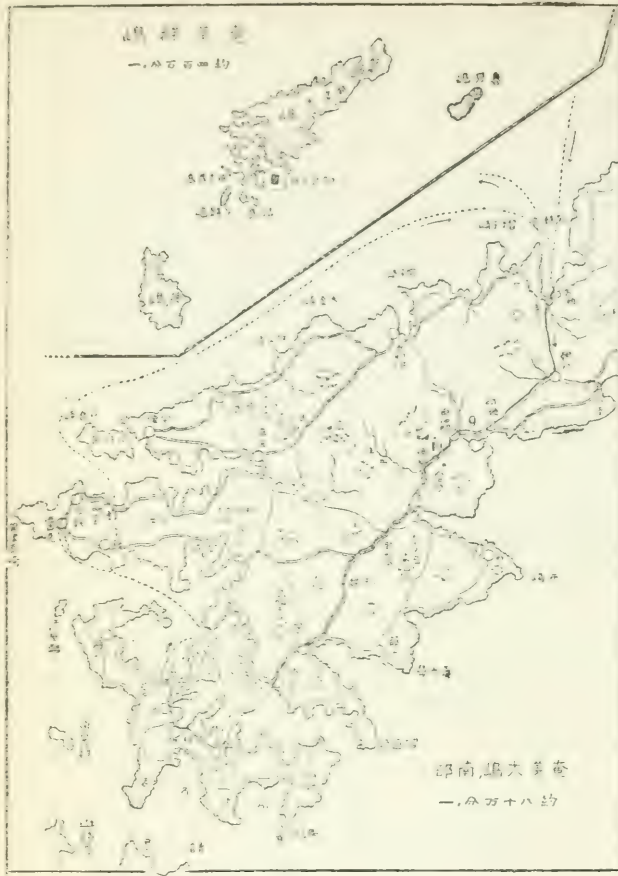
沖繩でも元は入墨に依つて、女の故鄕が大凡知れた位、少しづつの相違が有つた。島々には必ず其が著しかつたことと思ふ。しかも八重山の女たちの今のハジチには、沖繩とよく似た菱形や星が多いやうに見えた。其中でも與那國人の二三の例は、却つて遠く隔つた宮古の方に近く、宮古の入墨の沖繩と違つて居ることは誰が見ても分る。宮古の婦人は手首から、三四寸奧まで刺して居る。織つた上布の絣のがらを、一つ〳〵彫入れて記念にすると謂ふのは、多分簡單な小さな模樣を、多く並べて居るからの誤傳であらう。

此樣に複雜な變化の中に、たゞ一つ指の背を通した箭の形だけは、何れの島でも大方同じである。南の方では其箭に羽があり、沖繩より北に行けば、矢筈ばかりが著しく爲つて居る。恐らくは女性の物を指さす力が、宗教的に强かつた大昔の世の名殘であらう。それが何れの方

（奄美大島と佳計呂麻島）

た指して居たのは、今は既に普請に不明と爲り、人はただ有る限りの島々に、漫然として移つたものと考へて居る。是が果して島人の眞の歴史であらうか。千古の英傑に碑あり傳記ある如く、往て鈴のやうな形の笠を深く被り、乃至は白い窓の外に立つて、援助の手のみを差出したと云ふ神女の事蹟は、獨り此の將に消えんとする昔の文字無き記錄のみが、我々を喚び留めて之を語らうとして居るのである。

九　三太郎越へ

名瀬の港は大島の西北の海に向つて居る。名瀬を首府とする名瀬の兼久から、東海岸に越えて南へ行く路は、大概自動車の通ふ程に改修せられ、さうして少しく損じて居る。併し常には曲り角毎に人に逢ふ位の人通りが、今日は舊正月の元日である爲に、かくの如く静かに日が照つて淋しいのである。たまに向うから人が來ると、必ず頬被りをして大尾と尾の鯛を提げて居る。小湊附近は鯛の魚のよく捕れる處だ。除夜に大漁があつたから、今朝持つて出ると云ふばかりで、別に進物では無いさうだが、それでも何と無く正月らしい。里近くの谷に紅い山櫻が咲いて居る。絲芭蕉の畑が盡きると、まばらな蘇鐵の林が有る。蘇鐵とヘゴとは却つて國頭の山よりも多い。白い花の苺が咲いて居る。苺を此邊ではイチュビと呼んで居る。

和瀬の新峠には、もう茶店が二軒建つて居る。手前の方の店先では黒の木綿の紋付羽織の男が、褒められて嬉しさうな顔をして、ママアンマ節と云ふのを彈いて居る。例の蟒蛇の皮を張つた小さな三味線である。海のよく見える今一軒では酒を飲んで居た。地酒又はモロハクと名けて、味醂を薄めたやうな甘いので、薩摩で出來ると云ふことだ。盆の上にゆづる葉を二枚敷いて、白い盃を載せて自分にも勸めた。肴

は例のテイノイヨ(鯛の魚)であつた。下りて又登るべき岡が海に近く見える。亭主夫婦の話は新道の事ばかりだ。なる程此邊の景色は別莊を建てて見るにはよい。車が多く通るやうになれば、爰へ來て休まぬ旅人はあるまい。それだから今に〳〵と謂つて居るのである。爰を出て來ると伐り殘された松の樹に鳥が淸く囀り、外も誠に長閑な正月であつた。

併しこんな好い日にも搜して見ると、淋しい人は何處かに居る。東仲間村、橋の袂から、右手へ上つて行く一筋路は、是も明治になつてからの新路だ。取附の五六町が急な坂であるばかりで、奧には一本も伐らぬかと思ふ椎樹の山が、深い綠の塊を爲して並んで居る處を、谷川の向ひに眺めながら、緩々と行く長根である。如何にもよく考へて附けた路線だ。三十年餘り前に内地人の夫婦が、此峠に茶屋を建てて附近の林を開墾し始めた。肥後から薩摩に越える三太郎峠とは違つて、是は其翁の名に基いて、三太郎坂と呼ぶやうに爲つたのである。それほど世に聞えた三太郎ではあつたが、彼にも相談せずに世の中は變つた。事業の方は氣が長く、老ばかりはすぐ完成した。西仲間から昇る坂があまり眞直で左右に餘地が無い爲に、もら第二の新道は此峠を通らず、をめいても屆かぬやうな遠方の山をうねつて居る。畠を作る爲ばかりなら、何も斯んな高い所へは登らなかつたであらうに、三太郎は終に茶店を罷めてしまつたさうである。それから後は如何して居るだらうかと、峠に上つて來て其一つ家の前に立留つて見ると、二方から踏込む店はすつかりしめ切り、出入の戸をたゞ一尺ほど開けて、土間へ日が差して居る。正月だと謂ふのに婆さんは風でも引いたか、蒲團を被つた白髮の頭が見える。圍爐裏の此方には肱を枕にして、三太郎坂の三太郎はごろりと寢て居る。

大島が今の大島になる迄には、それは〳〵えらい苦鬪が有つた。僅か四五十年の昔を振返つて見ても、今の三分の一の幸福も此島には無かつたのが、既にどし〳〵と名士を島外に出すほどの活躍をして居る。島人全體としては、切拔けて出て來たのだから明かに捷利だが、よく聽くと其勝鬨のどよみの中にも、幽かな呻吟の聲がまじつて居た。例へば今通つて來た朝戸の村なども、紅い櫻が咲いて平和らしい家並であつたが、文化年間の記錄を見ると、佐念と朝戸の兩村は今人家無之とある。男女借財の爲に悉く身賣して他村に行き、跡は作地のみ也ともあるから、乃ち其以後の植民であつた。これと同樣の潰れ村が、他にも何十何箇村有つて、其儘故迹と成つてしまつたのもある。此は享和の頃の凶作の結果であつたが、其前後にも不幸は屢〻繰返された。

名瀨の近くの作大能とか云ふ處でも、或時の飢饉に男女山に入り、蘇鐵や阿檀の實を採つて食盡し、野山にはもう何も食ふ物が無くなつて、數十人の者が阿檀の木に首を縊つて死んだ。それから以後は毎年其月頃になると、亡靈が出て來て何とも謂はれぬいやな聲で、唄を歌つたと謂つて其唄が幾つも傳はつて居るのである。

いちゆび山のぼて、
いちゆび持ちくれちよ。
あだん山登て、
あだん持ちくれちよ。

是は恐らくは例の魂祭の踊に、深い同情から發した悲壯な歌を唱へたのを、亡者の聲なりと誤つて傳へたものと解するが、飢ゑて人が死んだ迄は事實であらう。最初から生れて來ぬ方がよかつたと思ふ者の魂魄の爲に、永く後々の弔ひをするのはをかしいが、此世で救ふだけの力の無い人々は、どこの國でも斯んな話を語り傳へて、只いつ迄も歎息をして居るのである。

一〇　今何時ですか

實に奇妙な子供の遊が流行して居る。見馴れぬ洋服の人などが通ると、時計を出させて見て、跡でみんなで笑ふ遊である。金か銀か大きいか小さいかを、前に言當てたものが勝になるらしい。自分にはもう何遍か諸處で之に出逢つて居る。この大島でも、宅の末の兒ぐらゐのよちよちと歩く子が、今何時ですかなどと謂つて附いて來た。たしか木村荘八君の紀行にも、大連で支那人の子供が、土塀の上から顔を出してさう叫んだと書いてあつた。彼等小兒は村から外へは滅多に出ぬ。さりとて誰が來てこんなくだらぬ事を教へようか。自分は何よりも先づ世の所謂流行には、まだ不明の原因が潜んで居ると云ふことを感じた。

土地の人にもさう謂つて來たことだが、大島の子供には全體におつとりとした處が少ない。一つには普通教育と云ふ特殊の事情の爲かも知れぬが、一體人に聞えるやうに仲間同士で喋る代りに、臆面なく旅人に話しかける者が多かつた。黄山の陰では四五人の子が目白を捕つて還るのをちらりと見ると、すぐに買ひませんかと謂つた。町へ持つて行くと一圓になりますよと次の子が謂つた。又或板橋の上で遊んで居る夕方の群に、戯れに此狗の子は誰のだと聞くと、其はワームン（吾物）だ、貰つてくれるなら縛つてあげませうと謂つたのが、ほんの十一二の生徒であつた。

其よりも驚いたのは、住用村の或部落の宿屋で、色々の青年少年が旅人を見かけてか、前の川端の路を往つたり來たりするのに、一人として胴間聲を立てて、わめいて通らぬ者は無かつた。正月だから仕方も無いが、大きい者は皆醉つて居る。さうして彼等ばかりの風流とする事柄を、隱語で怒鳴つて笑つて行く。子供にはそんな才覺も無く、又固より酒を飲む筈も無いが、出來るだけ醉つた先輩の荒い聲を眞似て、他には何にもわめく種も無いものだから、互に相手の子の苗字などを、呼捨てに呼びかはして居る。こんな氣の毒な正月か、果して何時まで辛抱し得らるゝであらうか。

此子供たちに、昔あれ程澤山にあつた正月の遊はどうした。ネンと云ふのは吾々の根木又は根ん棒と謂ふものと同じで、端を尖らせた二叉の枝を土に打込み、相手の木を倒さうとする勝負であつた。又イハと稱する遊もあつた。薩摩で金輪投げと謂ひ、東國では破魔ころなどと謂つて、圓い輪の類を飛ばして互に受留める遊は、蝦夷から南の何れの村にも有つたが、此島にも亦盛に行はれて居た。マウジヤと謂つたのがそれである。南島雜話には此以外にも、多くの遊の圖が載せてある。それは皆どう爲つてしまつたか。子供の趣味も變るから、是非残すと云ふことは六かしからうが、他の地方では何か代りが出來て後に、昔の遊が廢つて居る。處が此邊だけはさうで無い。

以前は童名には何カナと呼ぶものが多かつたさうだ。弘く八重山までも行渡つた風習で、即ち吾々の古語のかなし子、或は狂言に出て來るかな法師などと一つで、大切なものを意味するのだが、南の方では一般にオテダカナシ・オツキカナシ又は世の主カナシなどと、最も尊く且最も大切なものを、同じ語を以て敬うて居たのである。村の平和の爲必要な年に一度の祭に、毎に子供をして重い役を勤めさせた例の多いことは、起原に於て此と何か關係が有つたかも知れぬ。ヤマトの盂蘭盆に該當する八月甲午のドンガの祭の前に、シツチーガマと名けて十二三から十五六歳までの男の兒が、小屋を作つて田の神を祀る儀式が有つた。左義長の鳥小

屋などよりも今一段と嚴重で、其爲に特に白酒を造り、名瀬の間切では豐作を禱る祭文も有つた。それから九月十月の境に入ると、ハツブロと稱して種下しの祭があつた。竹の皮で作つた鬼の面を被つて、家々を巡つて餅を貰ひ集め、持つて還つて一つ處で烹て食べた。斯んな幸福な儀式も、もう無くなつたやうである。しかも沖繩の方では十二月八日のウニムチー(鬼餅)は、今もまだ子供が樂んで居る。

大人が信ぜぬやうになれば、祭の式は追々に遊戲に爲つて行く。其痕跡は他國にも多く遺つて居る。大島ではアツラネ若くはアスナネと名けて、蝮の害を拂ふと謂つた四月壬の日の祭などは、昔から旅人の迷惑する儀式であつた。他所から來る者に釜土の泥を投附け、或は石を打つて疵を附けたことさへもあつた。御用の役人とても、理由を話して入らぬと打たれた。其他の人々には或は火の燃切れを踏越えさせ、或は委細構はずに追拂つた。東京其他の兒童が今も唱へる、「御用の無いもの通しません」と云ふ歌なども、やはり是と似た風習の名殘であるが、今の大島の時計遊の如きも、ことによると是非とも何かをして樂まねばならぬ童兒たちの、外にすることが無い爲に、自然に引寄せられた新種の惡戲であらうと思ふ。但し誰がこんな島まで之を運んで來たかに至つては、やはり大なる一つの不思議である。

一一　阿室の女夫松

屋喜內灣內でも、阿室などは殊に古い村である。阿室には男松女松と名けて珍らしい二本の大木が有つた。遠方から聞傳へて見に來る程の松であつたが、惜い哉五年前の正月の大火事に、燒けてしまつて根株ばかり殘つて居る。御嶽の岡の昇り口に近く、トネヤ(殿屋)の西鄰の、神アシアゲの廣場の端に、小高い塚形の地が其遺跡で、火事後に生れた位の子供たちが、朝から晩まで來て遊んで居る。

神の御嶽の樹を伐つた祟りと、今でも村の人には考へられて居る。百二十戶の民家は何れも茅葺きであつた爲に、日暮方から燒け出して夜中には悉く灰に爲つたが、此二本の松樹だけは三日三晩の間燃えて居た。中がもう空洞になつて居て風がよく通るので、折々は焰を天に揚げて、非常な勢で燃えた。老人たちは之を見て、皆慟哭したさうである。村は既に建て直つて繁昌して居るが、今でも松の話をすると涙を流す者がある。

火元は濱近くに豚を飼ふ小屋であつた。山手へ吹き附ける風は强かつたが、岡一族の屋敷の奧に祀つた、辨天樣の脇の樹に、火の粉が盛にかゝる頃から急に風向きが一轉した。他の一方では、學校の大きな建物も燒け落ちたが、御眞影を御移し申した碇氏の新築が、たつた一軒だけ助かつたのも奇瑞であつた。斯う云ふ數々の不思議に感動した村の人は、先づ急いで御嶽の拜殿を立派に營んだ。今まではシマタテカミサマ(島立神樣)を拜んで居たこの拜所を、今後は秋葉神社と稱へ崇敬することにきめた。遠い遠州の奧の山の火防の靈神が、果して何人の說に基いて、阿室の昔の御嶽の神の名に爲つたかは、敢て聞いて見ようとしなかつたが、少なくとも是は我々の謂ふ勸請では無かつた。土地の人たちは決して新たに御迎へ申した神とは思つて居らぬから、卽ち單純なる改名に過ぎぬのである。社殿には御簾の中に黑く煤げな木像を安置し、又內地にしか見られぬ紙の御幣も立ててあつたが、構造は却つて宮古の漲水御嶽などの新しい拜殿に近く、殊に其建物を廻つて奧の方の靈地は、干瀨卽ち珊瑚礁の石を取繞らし、淨い白砂を敷きつめ、全然先島方面

の御嶽のオブと同じであつた。何でも大島の神道には、昔から此程度の歩み合ひがあつたらしい。不意の意識と云ふ特別の原因は有つたけれども、阿室の信仰には此以上に變化させる必要も無ければ、又其人も無かつた。

それ故に御嶽は依然として能呂（祝女）が之を祭つて居る。さうして再建以來一段と其信心は引締つた。能呂の數は此村は五人である。ワキガミと謂ふ者を加へて七人、白い祭衣を著て神の山に登り、祭を畢へて下りて來る迄、何人も之を窺ふことを許されぬ故に、式の樣子はただ彼等のみが知つて居る。最近の神秘は火災以後の五年間、年に何囘かの祭の日の夕毎に、能呂たちが下りて來ると直に其後に、御嶽の山で鉦の音がする。或は又鐵棒を曳く音とも謂ふ。つまり彼らが金屬の器を鳴らして、岡の頂上を行く音がするのである。村民は一人として之を人がするのだと思ふ者は無い。又女に相欺くほどの琉球の中では無い。稀に一度と謂ふことなら、耳の誤りとも思へるが、年に何囘となく小學校の先生も聞いて、佐賀から來て居る商人の江口君親子も聞いて居る。さうして御嶽の東に住む平田の人たちには聞えぬのである。以前信仰の今よりも盛であつた頃は、白い馬に騎つて神樣のお出でなさるのが、御嶽の昇り口の處までは見えたと謂ふ。トネヤ（殿屋）を葺換へる時の祭などには、殊に明かに拜まれたさうだ。其御姿を拜したと云ふ老人も、まだ何人か生存者で居る。

能呂は必ず血筋の者が相續するが、嫁に行くから家としては次々に移るのである。他の部落に縁附いた者でも、祭の日だけは還つて來る。數ある一族の婦人の中でも、相續すべき者は神樣には最初からきまつて居る。先づセイヲヒクと謂つて、生れた年月日に由つて合性がある。火性と金性とはまるで能呂に爲る資格が無い。木性土性の中でも亦條件があつて、山の上の土などには高過ぎてよくない。自分と對坐して居た親能呂の老女は、水性であつてイヂュン（泉）の水であつたと謂ふ。

泉の水ならば林の奥の泉では無かつたらうか。至つて物靜かな生れで、湧いて流れるやうな話は出來なかつた。幸ひに沖縄とはちがつて大島には、ゲジと名くる男の輔佐役があつて、オモロを語り傳へ、又少しは哲學が説ける。そのゲジの數も五人である。やはり性に由つて神から指名せられる。神のオモラヌ（在さぬ）日には、なんぼ信心しても無用である。天に七日、この婆婆に七日、龍宮に七日と昇りに七日とを御過しなされる。一月の中に七日しか無い祭の日を、私等だけは數へることができるのだと、その親ゲジの實本翁は自分に語つた。

二　國頭の土

加計呂麻は東西に細長い島だ。北に瀬戸を隔てた大島の多くの岬が、日を帶びて灣內の靜かな水に映る景色は、南の海では見られない趣であつたが、今斯うして冬の綠の山に分入り、切開かれた赭土の坂路を、昨日の雨の濕りを踏みながら登ると、再び國頭の遠い山村を巡つて居るやうな感じがする。其上に折々出逢ふ島の人の物腰や心持にも、まだ色々の似通ひがあるやうに思はれた。海上は二百浬、時代で言へば三百年、もう是以上の隔絶は想像も出來ぬ程であるが、やはり眼に見えぬ力が有つて、曾て繋がつて居たものが今も皆續いて居る。

獨り昔の生活の痕が、殘り傳はると云ふのみでは無い。沖縄では近年階級の制限が殆ど無くなつて、婦人の簪なども上下一樣に銀色のものを用ゐて居る。首里の王城の片隅にも、既に此ばかりを作つて居る小屋が有る。處が久しい

間沖繩の簪の制と、何の交渉も無かつた筈の道の島々の女たち迄が、悉く在來の簪を罷めて、今は銀色のを插し始めた。しかも其形が稍長く細く、又端が劒のやうには尖つて居らぬから、南の沖繩本島の流行を追ふのでも無い。言はゞ彼等の黑い髮の毛に、白くして光あるものを取合せたいと云ふ趣味が、雙方一度に表はれた迄であらうが、それにしても何人にも知られずに、雙方が久しく此傾きを保持して來たのは、少なくとも歷史の說明を超越した、寧ろ天然の原因があつたからである。

普通の歷史には、大島群島が琉球の屬島と爲つたのを、文明三年以後のやうに書いたものもあるが、此は誠に誤解の處有る說である。中山の世の主に些しの貢物を納めるか納めぬかは、單に或時代の浦々の按司の家の都合であつて、島人たちは夙に同じ衣を着て同じ語を話し、同じ季節と方法とを以て村々の神を祀つて居たとすれば、即ち國は始めから一つであつたのである。それ故に所謂君々の機關が王家の制御を受け、俗界の君主が宗教の力を利用して、之に由つて三十六島の統一策を行つたときには、北の方の島々も甘じて其節度を受けて永く渝らなかつた。即ち征服せられたのでは無くして、草木の風に靡くが如く歸服したのである。

大島では能呂久米の首領を御印加奈之と呼んで居た。御印とは首里から出した辭令書のことで、之を持傳へた能呂なる故に、御印加奈之とは謂つたものである。島津家の支配に爲つた慶長十四年以後も、尙暫くは祝女だけは沖繩から任命して居たのを、寬永の初に至つて禁止してしまつた。さうして以前貰つて置いた御印が、愈々尊いものに爲つた。それから後も百年ばかりの間は、一生涯に一度だけは大島の能呂久米、首里に出て往つて聞得大君に見えることを許されて居たのが、享保十何年かにはそれも亦禁ぜられた。併し小舟で荒海を淩いで、潛かに國頭の土をふむ者は絕えなかつたやうに思はれる。近世の記錄に依れば、大島の能呂は何時の頃よりか二頭に分れて居た。甲を眞須知組と名け大和濱から南は之に屬し、乙は須多組と謂つて北部名瀨の周圍の數間切を支配した。シウタは分家又は次男の筋を意味するやうだ。マスヂは素より嫡流と云ふことである。須多が多く傳來の法式を省略し、又大和人の刀自と爲ることを禁じなかつたに反して、他の一方は今に古法を執し、內地人に嫁することを許さなかつたとある。これが本島の南から佳計呂麻の村々にかけての、今日迄の宗教である。

屋喜內方には有名な湯灣五郎の話が有る。此一匹から金持に爲つた今昔物語の話にも似て居るが、史實で無い迄も昔の趣だけは傳へて居る。五郎は湯灣の村の生れで、家貧なるが故に人之を糠五郎とも呼んで居た。後に本琉球に渡つて、出世して按司の號を賜はり、佐渡山與名原の親方等は、彼が子孫であると傳へられる。其頃琉球の風習として、國王世子の始めての宮參りには、誰にてもあれ途中で最初に行逢うた人を賴んで父と爲し、それだけ結構に取立て、按司などにも召出すことであつた。五郎は其身の微賤を恥ぢて、遙に御神詣での行列を望んで、道を變へて遁げ隱れようとしたが、王子の御供の面々に於ても、あまり風體の良くない男が來るので、避けて間道を通つたが爲に、思はずも雙方行逢ふこととなつた。其名を問へば秋山の野夫湯灣の五郎なりと名乘つた。古の法なれば貴賤を論ずべきで無いと、終に王子の義父として、一躍して按司に爲されたと傳へて居る。

瀨戶の靜かな海へは木や絲芭蕉を積みに、多くの山原船が入つて來た。那覇の港のうかれ女なども來て稼いで居る。久高の島人も古くか

ら、こゝに來て永良部鰻などを捕つて居た。暇あるときは故鄉を思ひ出して、色々の歌を歌つたでもあらうが、彼等ばかりの平凡な空想からは、湯灣の蘇五郎は生れさうにも思はれぬ。

一三　遠く來る神

沖の永良部の後蘭村では、沖繩世の主の墓と云ふのが御嶽になつて居て、今も年毎に遺骨を洗ふ祭があるさうだ。近世の琉球語では、世の主は即ち國王であるが、骨を留める程の新しい世代に、海の北に流寓して果てられた王は無かつた上に、之と略似た昔語は亦處々の小島にもある。若し單純な能呂久米の夢で無かつたとするならば、即ち分水嶺を以て限られた多くの小さい社會に、曾ては個々の世の主が支配したこともあつたことを想像せしめる。しかも所謂百浦の按司たちの事蹟は、島の端々に行くに隨つて、痛ましい迄に埋もれて居る。中山の歷史家が始めて古傳を集成したのは、第五王朝も既に百數十年を過ぎて後であつた。祖先を慕うて止まぬ山北の遺民に取つて、今歸仁王都三代の榮華は、僅に一抹の山の霞の如きものであつた。

（國頭の山と島）

北山古城の本丸の迹には、勇猛なる最後の王攀安知、劍を拔いて斫つたと傳ふる、嘉那比武の神石が今尚在る。逆臣本部大原の謀計に由つて、闘ひに勝つて還つて見ると、城は空虛と爲り妃嬪は悉く縊れて死んで居た。護國の神今は何かあらんと、大いに憤つて其神石を劈き、分つて四塊と爲したと謂ふ。石の長さ五尺許、青色堅實なり、十文字に割れて居ると、遺老說傳などにはあるが、今見るところは二尺以内の灰色の石で、僅に只二つに割れて居る。遺老傳は二百年前の書物、其前がまだ三百年ほども有る。此だけ永い歲月の間には、幾ら石でもちつとは變化しさうなものだ。それにも拘らず、隔年夏秋の境には、遠近の村々から依然として嶺を超ゆる土民が、この古跡に登つて來て、家々の拜所に香を燒いて巡るので

ある。
　思ふに是も亦、至つて自然なる人の心であつた。昔は固より過ぎて形を留めざるものの名であるが、猶之を思ひ慕ふとすれば、眼に見え手に觸れる何物かに據つて、辿つて行かねばならぬ。しかも都城は覆り史書は絶えて無く、祖先の日は益々遠ざかつたのである。身内に別れて寂しい不幸の日を送つた者は言ふに及ばず、富榮えて眷屬の多い人々でも、田舍では徒然なる夜の物語などに、此世の始と我家の始を、もつと精彩に知らねばならぬと、考へる折が多かつたことと思ふ。さうしてこの要求に對しては、村々には物知りと稱する女性が居た。
　物知りは沖繩の方では、ユタと呼ぶのが普通である。大島佳計呂麻などでは正神、又ホゾンカナシとも謂つて居た。本尊と頼む神佛の力に由つて、只の人の目には見えぬ者を見る。故に其謂ふことが信ぜられた。今まで不明であつた高祖の名でも事業でも、之に聽けば忽ち闇の園の燈火であつた。乃ち導かれて處々の故迹を巡り、絶えて久しい祖先の俤に對面した。唯不自由なのは北に寄つた山邊海邊には花やかに延び榮えた思ひ出が如何にも少ない。優れた武士は戰つて多くは斃れて居る。又は南の平野から、遁げて來て世を狹めて居る。ユタとても信ずべからざることを語ることは出來ぬ。これ故に國頭の古い歷史は、終に晴れたる海の色の如くなるを得なかつたのである。
　尚圓王の興隆は此點から見ても世の濟ひであつた。此王は沖の小島の伊平屋から身を起して、以前の鮫川大主などの如く、直ちに小舟を遠い佐敷の濱に寄せず、海を横ぎつて宜名眞に移り、奥間に遁げて鍛冶屋に助けられ、漸く南して久志の間切に入つたが、美しい汀間のミヤラビ（少女）を娶つて、爰に又二男一女を儲けるほど永く留まつた。此傳記の何れかの部分は傳説かも知れぬ。しかも人は信じたいと思ふものを信じ易い。八郎爲朝は菊池幽芳君を須たずして、既に立派な沖繩の英雄であつた。況や國頭の物知りたちは、寂寞として久しく此の如きニライ神の、遠くの島より寄り來らんことを待つて居たのである。
　自分は雨のふる或日の午後、福木の高く茂つた汀間の里を訪れた。山には躑躅が咲き鳥が鳴いて居る。若い英雄の戀語りを傳へた金丸川の泉は今も流れ、若し此日が夢ならば尚更に美しいがとさへ思はれた。金丸御殿に仕へるのは由緒ある昔のノロであつた。久志村の青年等は、ユタをば最早正しい職務とは認めて居ない。もし彼女が新しい豫言と啓示をすれば、乃ち之を信ずまいとする故に、古くからの夢語りのみが、愈々歷史として固定して行くらしいのである。斯うして人間の空想を制限して行くことが、幸福なものかどうかにはやゝ疑ひがある。此から後の百世に對する我々の好意と期待、又自分ですらも忘れて行く數々の愁ひと惱みは、實は民族の感情に最も鋭敏な、やさしい女たちの力に依らざれば、とても文字などでは傳へて置かれないのである。
　汀間の入江の岸には、歌で名高い汀間の神アシアゲがある。壁も簀子も無い森閑たる建物で、二列に續つた澤山の柱の間から、遠い大洋の水が眺められる。初夏の曉の靜かな海を渡つて、茲に迎へらるゝ神をニライ神加奈志と島人は名けて居た。大島でナルコ神テルコ神と謂つたのも同じである。しかも北東に面した久志の沖は、餘りにも茫洋として居る。伊平屋久高が神の島として遙拜せられ、人界の英俊も亦之に據つて出たのは、やはり我々の空想にも、何か具體的な飛石のやうなものを必要としたのではあるまいか。

一四　山原船

恩納仲泊から美里の石川まで、島の幅が此邊では僅か一里しか無い。大昔、陸が未だ草木を以て此國を患へて居た頃、東海の波が西海へ打越し、西の波は又東へ越えたと傳へるのは、或は此近所の事かも知れぬ。今でもサバニと稱する小さな刳舟だけは、人が擔いで陸を上から往來し、遠く邊土名喜屋武の岬を廻る勞を避けて居る。内地の府縣で船越と云ふ多くの地名は、何れも曾て此方法に由つて、小舟を別の海へ運んだ名殘である。島尻郡の方にも玉城村富名腰が有る。又同じ郡の佐敷村、八重山石垣島の伊原間などに、フナクヤと云ふ地名があるのは、皆この船越のことだらうと思ふ。

運び易いサバニは、昔は國頭の山の松樹を刳つて造つて居た。糸滿の漁師たちは遠く屋久島の杉を買求めて、追々に其船を改造し、[illegible]に塗つて水を防ぎ、絶くまで[illegible]に[illegible]しようとして居る。しかし[illegible]良い[illegible]に乏しく、[illegible]丸木舟にも[illegible]、なほ一割の[illegible]線には他の材を[illegible]、其[illegible]間を白い漆喰で留めて居る。仍て又縫舟の名もあるのである。

道の島では小舟をスブネと呼んで居る。クルブニの名は今も有るが、もう其姿を見ることが稀で、之に代つて板附と謂ふのが多く用ゐられる。板附も形は糸滿人の刳舟に近いが、大小の板を釘で打附け、舳の方にも三角の板が角を下にして嵌つてある。此材には黒と二の繪具で、古風な模樣を描くのが習である。中でも瀬戸の入江で幾つか見た三本杉のやうな繪樣などは、本來南の島々には無い樣であるだけに、何か熊野の信仰とでも因が有るかと思はれてならなかつた。

遠い國地の珍らしい文明を、先づ見て來るものは船であつた。それ故に最初は蒲葵の帆を掛けて支那の物見の役人を驚かした島人も、久しからずして福州あたりの造船所に依頼して、新しい立派な進貢船を造らせ、次では那覇の船大工が其型に由つて、大きな船を工夫するに至つた。淋しい山原の磯山陰で作り出す船が、西南數百里の外を走つて居る支那のジャンクと、此樣によく似て來たのも偶然では無かつた。しかも其改造の更に以前を遡つて見ると、島人は出でて新しい物を覓める爲に、更に自ら渡海の船を持つて居たのである。

島では人よりも船の方が早かつたわけである。然るに八重の汐路の先島に於ては、アマミコが碧空より降つたと云ふ神話はもう無くて、却つて船の始の物語が傳はつて居る。竹富島では島仲栗醴志の幼き兄妹、或日濱に遊んで形半輪の月の如くなる物が、海上に浮び來るを見て、木を伐つて其制に倣ひ、始めて船と云ふものを作り、之を上包七包と名けて濱に浮べて樂みとした。其玩具の小船、後に又流れて、隣の黒島に行き、黒島の人は之を大きく拵へて、漕ぎ乘つて竹富に遣つて來て、始めて子供たちの神から學んだ術であつたことを知つたとある。

同じ話の變化かと思ふ話を、又宮古島の仲間御嶽にも傳へて居る。狩俣村で小船を造ることの好きな子供、父が中山に往つた留守に父の船を眞似て小舟を作り、父を思ひつゝ毎日海に浮べて遊んで居ると、或時風流に流れて小兒は溺死し、小舟ばかり百里の海を漂ひ、那覇の港に流れ着いて、父之を拾ひ上げて、我が船と同じいのみか、仲間樣の靈石が之に載せてあつたので、我兒の運命を知つて大いに歎き、その小舟と靈石とを携へ還つて、今に之を尊信すると謂ふのである。稚い兒と神とが此の如く、共に最

初の造船には干與して居たのである。
　昔の船の安全は半ば之を神の力に託して居た。八重山の船は蜈蚣の形を眞似て、イノー（龍卷）を制御する手段とした。今の山原の船にはちやんと眼球が描いてある。瞳を稍片脇へ寄せて、支那の船よりも一層眼球らしいが、如何なる理由でか之を艫の方に附けて居る。しかも害敵を防ぐの備としては、此だけでも十分であつた。現に十八年前にバルチックの艦隊が來た時にも、或山原船は港の燈火と見誤つて、洋上に假泊して居た怖ろしい敵艦の眞中に船を漕入れた。ところが其頃まで髻を附けて居た國頭の船方たちは、其語音を聞いても到底日本の愛國者とは見えなかつた爲に、何の仔細も無く放された。それから大いに走つて八重山に來て電信を打つたが、其時にはもう對馬海峽の大戰は終つて居たさうである。時間が其樣に大切な場合には、彼等も今は機關のある船に乘つて居る。糸滿の漁民なども刳舟を定期船に積んで、自分も船客と爲つて内地に往來する。さうして船に醉うたりなどして居る。昔の航海は年に一度の風をでも待つた。永い年月の間に、子が親となり祖父と爲る期間に、人は徐々として偉大なる變化をしつゝ進んだのである。

一五　猪垣の此方

　昔からの村には泉に據つて、山の中腹に住むものが多かつた。島が平和に爲つてから、次第に廣場へは下りて來たやうである。近世は又山林愛護などの爲に、法令を以て村を遷した場合も有つた。村の周圍には燃料其他の用に、若干のアタイバル（垣内山）を附與し、殘りの山野は公共の地であつた。原屋取と名けて首里那覇の困窮士族が、入込んでは新しい部落を立てたのも此原である。明治以後の屋取人は、今でも質素以下の暮しを續けて居る。彼等の大部分は元の侍であつたが、剛健なる山原の氣風を毀すほど、町風の生活には前からも染みて居なかつた。さうして爭うて好い兒を育て、家運を興さうとする努力が、附近に居る舊住民の爲にも一つの刺戟になつて來た。
　雷雪も知らぬ山ではあるが、やはり天然の力と闘はねばならなかつた。[illegible]きの隙間も無い林から、緩傾斜の一角をかこひ取つて畠に拓かうとするには、長い石垣を築き續らして、山から來り侵す者を防止せねばならぬ。紀州の南熊野、又は豐後日向の境の村などで見たものと構造が同じで、國頭に於ては之をイヌガキと呼んで居る。狗は内に在つて守る者、猪垣を猪垣と謂ふ語が無い、是は尚昔の語の名殘であつて、曾ては野猪を單にヰと謂つた時代に、ヰの垣と呼んで居たのが、意味無しに傳はつたものだらう。
　今日では野猪はヤマシシと謂ふのであるが、之に由つてシシガキと云ふ語を作るにはまだ故障が有つた。何となればシシは沖縄では、宍即ち食用の獸の肉の總稱であつて、今の我々のやうに只一種の山の獸だけを、意味しては居ないからである。
　内地の方でも田舍に往つて見ると、シシが宍人部などの宍と、もと一つの語であつたことが直に分る。例へば鹿をカノシシと謂ひ、羚羊をアヲシシ、カモシシ又はクラシシなどと謂ひ、九州の北の島などには、牛を田ジシと呼ぶ所さへもある。たゞ宍を食ふ慣習が夙に衰へた爲に、何故に肉を以て獸の名とするかを、久しく忘れて居たと云ふだけである。沖縄の方では引續いて宍を用ゐて居た。故に山のシシ即ち野猪に對して、牛を田のシシと謂つたのが最も自然である。鹿を産するは慶良間群島の、座間味の島だけに爲つてしまつたが、カノシシの代りに

之をカウノシシと呼んで居る。鬼の宍に一種の臭氣がある爲か、さうで無ければ其鳴聲に由つて附いた名であらう。

豚は一般にワと呼んで居る。チェンバレン氏の語典には、羅馬字で Wa と書き、鳴聲から來た名であることは、誰も之を疑ふものが無い。先島の人たちは Wo と謂つて居る。さうして見るとヰノシシのヰも、其理由は同じやうに簡單で、我々も一度は其ウヰー〳〵の聲に耳馴れる迄、親しく接して居たことが知れるのである。それを忘れてしまつて山に住むのをヰノシシ、家に飼ふのをヰノコなどと、區分したのはをかしかつた。尤も沖繩でも、區別の爲に一方をワ、又他の一方山に居るのを、ヰと謂つた時代があつたかも知れぬ、前に申したヰノガキの外にも、婚禮の式の改まつた料理に、必ず出さねばならぬ野猪の吸物を、ヰヌムルチなどと呼ぶ例が遺つて居る。

正月の食べ物には、餅よりも更に缺くべからざるは即ちこのワノシシである。暮には大抵の家でワを屠つて、我々の彼岸の牡丹餅のやうに、遣つたり取つたりを盛にする。此も久しい由來の有つたことと思ふのは、家の記憶は最早失つた內地の國々の武家に、春の初の野猪の料理を重んじたことである。支那と交通して居たから支那から來た風習だらうなどと、よい加減に珍しがつて置いて、今までは濟んで居た。さうして古い日本は埋もれて行つたのである。

北太平洋の島々には野猪は到る所に住んで居た。島に猪が居り又土人が居れば、必ず之を捕へて來て家に飼うて居る。野猪が家猪に爲るのはそれ程手輕であつた。馬や猿ならば藝を仕込まねばならぬが、猪は檻の中で繁殖さへしてくれゝば即ち家畜である。獨り馬來の島々の回教徒は之を惡み、山に居るのをも忌んで却つて跳梁させた。我々の島では少しづつ食つたが、活かして貯へる程の必要は無かつたから、そこで昔の猪養の徒は轉業した。田神の祭に供へ來つた白い猪の種も切れて、近江の山で生捕つたヰノシシに、胡粉を塗つて間に合はせたと云ふ話も殘つて居る。さうして山にも澤山の山シシが住むのに、同じやうな黑い小さいのを、遙々船に積んで沖繩だけへ、持込んだ人が有ると云ふことに、歷史家にきめられようとして居るのである。

奄美大島にも山にはヰノシシが居り、里にはワが孳殖して居る。少なくとも三百餘年の分立前から、ワは既に島人の生活に伴うて居たのである。更に今千年ほど以前に溯れば、大和の京でも其通りであつた。我々は只猪垣の此方の側で、寧ろ不自然なる生活を忍びつゝ、宍を食はずに居たのであつた。

一六　舊城の花

歌に名高い浦添城外の廣場は、後に久しくこの間切の番所であつたが、世が又改まつて爰に大きな小學校が建つた。さうして櫻が咲いて居る。桃よりも彼岸櫻よりももつと紅い花で、去年の葉の陰に咲いて居るのは殊に珍しい。眞靑な明るい大空が、花と故城とを蔽うてぢつとして居る。昨日が立春と謂ふ二月の四日だが、まるで吾々の內地の五月のやうな日の光である。

城の石垣の上に立つと、干瀨の美しい東西の海が一度に見える。島の歷史の八百年が見える。嘉津宇嶽の向うの麓が運天の港で、彼處には百按司の骨が朽ちて殘つて居る。身長が六尺何寸、弓は三十人力と云ふ青年將軍が、大和から漕寄せてそこに上陸し、諸傳ひにのつしのつしと遣つて來て、やがて此下の牧港を出て還つてしまつた。殘波岬の波は其時分から、今

に至るまで此島の女たちが、眺めては泣くべき波であつた。恩納岳は東へ靡いて山の姿がしをらしい。あの歌には女詩人の恩納なべが、戀を歌ひ又大臣の徳を頌した。

殘波を見下して座喜味の城山が聳えて居る。昔山北の鎭めに此城を築いた時は、鬼界大島からも人夫が來て石を運んだ。讀谷山に居た間は護佐丸も安泰であつたが、如何に堅固の要害でも、中城はあまりに勝連の城に迫つて居た。それ故に終に奸雄阿麻和利と、兩立することが出來なかつたのである。しかも今はそれかもう物語と爲つた。斯うして見て居ると唯香久山と耳梨山の、昔の爭ひを思ひ出すばかりである。

南は佐敷大里の山々にも、曾て幾度か矢叫び鬨の聲が山彥を喚んだ。英雄の郷里は必ず多事であつた。其間には又巫女の最も靈なるものが、夢から覺めて神異を語り、或は遠い國から小船に乘つて還つて來た。世治まつて人の信仰が稍平凡に流れようとすると、忽ち神女は與那原の沖に天降り、薄紅の狭霧に包まれて入江の水に浴みした。歷史は此ほど迄に單調を憎んだけれども、しかも今見る物は只の林と、海と砂濱との他に何が有るか。

此城なども榮えた時代よりも、淋しい間の方がずつと永かつた。あかい櫻が山に咲いて居た無爲の日に遣つて來て、恐らくは或日の大和の船頭殿那奈之なども、茫然として此昔を眺めたことであらう。如何なる種類の船頭殿であつたか、それも悉く今は不明に爲つたが、安波茶の友盛御嶽は卽ち此人の塚で、永く旅客の神として祭られたと謂へば、來て居たことだけは確かである。日秀上人の來た頃にも、もう沖繩は平和であつた。但し邑人か餘りに妖怪に惱まされるのを氣の毒に思ひ、一字一石の經を寫して經塚を築くと、それが後には又御嶽と爲つて拜まれる。爲朝公の北の方と若君が、船出の別を惜みに來たと云ふ牧港の岩屋なども、固より立派な拜所で、南に峙つ英祖の森城、此浦添の城の神、さては北の陰に世を隔てたヨウドレの古陵と共に、史蹟は總て皆香の煙を以て保存せられて居る。さうして史蹟でも無い空つぽの昔が、其煙のやうに薄れて行くのである

首里の岡には、松がまだ茂つて居る。浦添から見ると少し低くて、百浦の山を見渡す雄大な趣は此に及ばぬのに、夙に文明の中心が彼方へ移つたのは、單に風水の敎への爲ばかりでは無かつたらう。王都の氣勢を支持すべき海の津が、那覇と泊に於ては猶深く、安謝と牧港は先づあせた。山を拓けば土を流す、泉を汲めば流れが細る。つまりは早く榮えたが爲に先づ衰へたのである。併し處は衰へても、人は移つて猶榮えた。浦添の按司が立つて中山に王と爲れば、鐵を積んで牧港に來た大和の船も、やがて泊の橋の下に、紙や絹を運んだであらう。況や陸より行けば手が屆くほど近い。松を並木にした石道の珊瑚岩を、朝出ては暮に戻る幾千萬の男女の足が、斯うして石の角の圓くなる迄、登り降りをしつゝ、終に又新都を古くした。

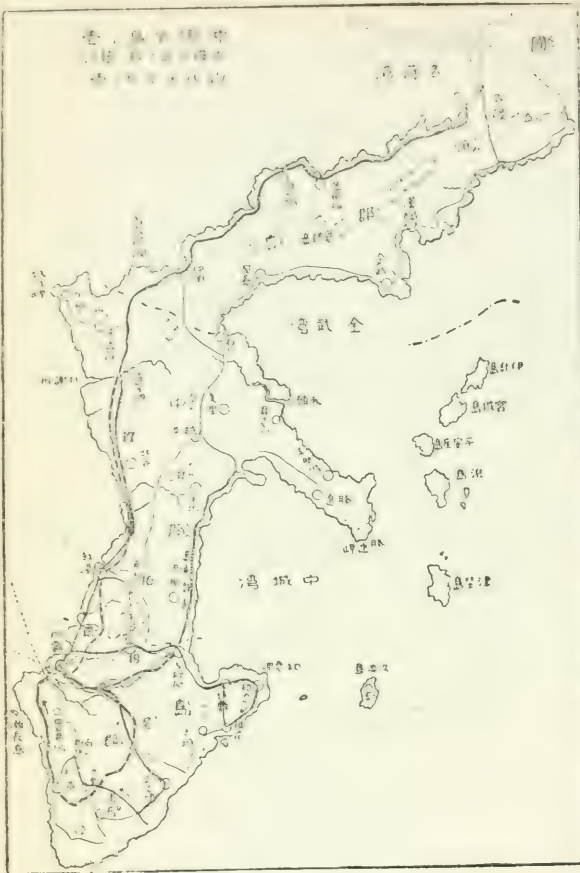
首里は清水の永久に美しい町である。しかも聞得大君は辭し王は去つて、百浦添の南の芝生には、盛に大葉酸漿の花のみが咲いて居る。

一七　豆腐の話

沖繩の新聞に依れば、那覇の遊女病院には、何時でも七八十人からの若い女が入つて居る。之を見舞ひに親切が三分、風流が四分と云ふ位な友人たちが、毎日何人か遣つて來る。見舞の品物は、以前は主として刻煙草であつたが、此頃では豆腐が多いと云ふことである。若い女には法律も怖いが、それよりも公然と煙草をのんで居ると、未成年者で無いと思はれるのが、猶

（首里附近）

一層こはいのであらう。それに比べると、豆腐は殊に罪の無い流行である。

暖かい南の國で有りながら、沖繩にはどうも白い色が豐かで無い。野山は一樣に冬も深い綠で、處々に花の紅を以て點綴する。島を取繞らす干瀨の浪だけが例外にして、大小の船の帆にも褐色のものが多い。國の衣の色も必ずしも白では無い。濱の黃砂の一文字も、遠く見れば所謂クリーム色であつて、之を運んで敷きつめた作り路も、リボンのやうで美しいが、やはり黃を帶びて綠に映じて居る。人間に在つても白を重んじ過ぎたと云ふものか、日常の生活には他の色のみが多く行はれ、島人は殊に年久しく山藍の香を愛して、其色に親しんで居たのである。普通の家の臺所などは、どこの國でも白いのは鹽ばかりで、勿論沖繩だけの特色とも謂はれぬが、實際これ迄の民家の色は、此島では頗るくすんで居た。今や因習の縛めが時代の手にほどかれ、ちやうど朝鮮で平民の衣服が、晒しから染へ復つて來るやうに、琉球の家庭で白の自由を求めるとするならば、趣味の變化が豆腐から始まるのも不思議では無い。第一には物が手輕である。それにあの白さと云ひ柔かな光と云ひ、古色に倦んだ永年の眼を休める爲に、假に豆腐が食ふ物で無かつたならば、見る物としても亦必要であつたのである。

豆腐の色は常に新しいが、其流行は殆ど極度に達して居る。西宿の名護街道などを通つて見ると、買ふ家の數よりも多くは無いかと思ふ程、どこの家でも豆腐を造つて賣つて居る。戸を閉うた石垣の片端、例のガジマルの樹陰などに、麥酒箱を少し毀してそれへ板硝子を嵌め、僅かの豆腐を並べて其箱を枝に吊り、又は杭の上に載せて居る。所謂人無しあきないである。傍に寄つて覗くと、多い時も二挺か三挺、或は庖丁で切つて半分だけ賣るものもある。買人が無ければ晩には引込めて、多分我家で食つてしまふのであらう。

以前は斯うでは無かつたさうである。察する所他府縣とは違つて、豆腐は家々で手作りに

するのだが、器の都合などで一日の用ゐには餘るのを、かうして置くよりは望み手が有れば讓つてしまつて、明日は又新しく作らうと云ふ、家刀自の才覺からで、しかも考へて見ると海道の軒の草鞋や馬の沓、元は斯ういふ類のあきなひが他にも多かつたのである。それが豆腐を食ふ家の多くなるに比例して、軒並に小さな豆腐屋を見るやうに近頃爲つた。有名な「豆腐屋へ二里」の狂歌などは、まだこの心安い境涯を知らぬのであつた。

肥後では球磨の下駄ふみ豆腐などと謂つて、人吉領では低い木の臺に載せて賣つて居た。沖繩でも同じやうな臺を用ゐて居るので、よく見るとそれは豆腐を作る箱の蓋を逆さにしてその儘用ゐて居るのであつた。此邊の豆腐は搾つてから後に煮ると謂ふ。箱も蓋も共に釜の中へ入れると見えて、その押鮓の蓋のやうな下駄が、黒く水じんで居る。或は又我々の雪花菜の如く、大きな桃の形をした豆腐もよく見かけた。それを四つにも八つにも切つて賣る。野武士の如き剛健なる豆腐である。華麗纖細なる都の絹漉どもをして、面を伏せ氣差えしむべき豆腐である。それをに不幸なるアングワたちは食べて居る。

辻の一郭には按摩の笛は無い。又ちりん／＼と鈴を鳴らして通るのは、只三世相の先生だけである。併しトーフイの聲は今や衢の夕を壓せんとして居る。田舍の邑里にも一里一里の間に、眞の豆腐屋が今に出來るだらう。そんな未來には構はず、村々の貞淑な女たちは、默つて豆腐を作つて半分を賣つて居る。首里から岡を越えて那覇へ出る道を、晴れた日には幾人と無く桶を頭に載き、泊の製鹽場に鹵汁を汲みに往來するのは、何れも白い豆腐の樂みを鄰人と分たんが爲に、勞苦する所の女性である。以前は濱に下つて海の水を汲んで還つたさうだ。松風村雨の昔とても、潮汲むわざはさう風流では無かつた筈である。

一八　七度の解放

平敷屋朝敏、才華は在五中將の如く、生涯は猶遙かに數奇であつた。どこの國でも策略を以て、老いたる政治家と鬪へば敗れる。彼が十四人の同志と共に安謝の濱邊で斬られたのは、その三十六の歳であつた。妻は官に沒せられて婢と爲り、孤兒は與那國の島に流され、今はもう家の衰運を歎くべき子孫も殘つて居らぬ。

天久の人里をすこし過ぎて、安謝の悲しい故跡へ下りて行かうとする坂の口に、道に面してナ、エーフイの墓が有る。近世式の見事な墓穴の前に、石を建てて詳しく故事を録して居る。ナ、ユーフイは七度身を賣つて奴と爲り、七度身を贖つて後終に長者と爲つた人である。父に事へて斯程迄に苦しんだ故に、至孝には天の御褒美が有つて、其末永く昌えて所謂血食の幸を享けて居る。

路を隔てた岡の田を、又七ユーファとも呼んで居る。孝子が月の光で耕作をした遺蹟だと謂ふさうである。即ち連綿とした同じ家に、傳はる物語であらうのに、しかも遺老說傳の七與平利富を此地であつたとすれば、二百年前には全く別の由來記が有つたのである。漢文で書いた爲に精確で無いが、往昔の世天久に七人の男あり、共に身を某家に賣つて僕と爲る。家主は安謝の境に在る百二十歩の田疇を彼等に與へて、其利用の費に備へしめた。七人は善く主家の爲に勤め、暇ある時には兼て私用の田を耕し、數年の中に若干の米を貯へ、之を納めて七人一度に身を受けた。之を聞く人皆奇且異なりとし、遂に其地を名けて七僕贖身之圃と謂つた。俗に七與平利富と稱すとある。ユー

道灌同然の從容たる態度で、辭世の三十一文字を遺したことにせられて居る、其歌が大出鱈目で、今評判の笑ひ話であるが、猶辯護をすれば中世の沖繩武士に、假に此種の文雅と高尚な名譽心が有つたと見ても、それだけは必ずしも無理な空想でなかつた。支那の學問に向つては、沖繩には五山僧以上の獨占者が有つた。久米村三十六姓の末は即ち是で、彼等は之に由つて此方面の交通を立塞いで居たのである。その階級を除いた一般の上流に取つて、文藝の標準はやはり山城の京であつた。關東奥羽の果よりも、更に因緣が薄く見えるのは、單に路の遠近に比例した迄である。

二百餘年前の混效驗集を見るに、伊勢や源氏の物語類から、徒然草太平記など迄が豐富に引用せられて居る。是が慶長の琉球入以後に、悉く薩摩を經て持込まれたものと考へる人は誰も有るまい。舊文明の誇りとしては、大和にも例の無い平假名文の石碑が、十幾つかも殘つて居る。何れも唐風景慕の最も盛んな十六世紀に屬して居て、しかも借物とは思はれぬ程度に、島の言語を書現して居る。公式令から頽れた我々の唐風に反して、此時代の下文も假名書きであつた。書體は世尊寺様だと謂つて居る。月の十八日の和歌會の式に、細道の文臺を說くなどは、大內菊池等の風流大名たちと、異なる所が無かつたのである。

聖禪二道の僧も多く入つて居る。權現の信仰は專ら熊野の系統であつた。彼等に假令傳道の志は有つても、互に湊に訪ひ寄る船が無かつたら、又その船人の胸の中に、似通ふ何物かが無かつたら、萬里の波濤を越えて來る因緣は結ばなかつたらう。後に航海が自由で無くなつて、寺も增さず名僧も出ず、古來の神道のみが引續いて全盛であつた爲に、沖繩の文明史を研究する人々に、この影響は至つて輕く見られて居るが、少なくとも名目なり外形なりに、今存する大和文化の痕跡も決して幽かでは無い。況や宗教こそは平民一般の風潮に、根を持たねばならぬから衰へもしようが、彼等歸化の大和人は、必ずしも此ばかりを携へては來なかつたのである。

例へば袋中大德の琉球神道記の如き、內地へ持つて還つて久しい後に上木をしたが、沖繩の見聞錄に費したのは其一小部分だけで、主としてはあの時代の普通學とも謂ふべき天竺震旦の略史、佛教の傳來や十三佛の由緒などを、島の人たちに語らうとした說教の種本のやうなもので、神々の緣起は專ら安居院の神道集に依り、舊記のまゝを書置くとあるを見れば、その目的は推測が出來る。所謂有識階級に接近して善根を栽ゑしめる爲には、恐らくは先づ彼等のゆかしかつた大和の事を多く語らねばならなかつた。此點に掛けては九州の偏土も事情は大差が無いのである。番にも訴訟にも京へ上らなくなると、遠國の莊園へ文化を普及する方法は、內地に於ても旅の法師以外には、もう無かつたのである。

かゝる個人的の交通でも、久しく續いて居れば生活の上に影響した。鑛山に乏しい島の社會にも、悲しいかな武器と金銀とは夙く入つて居た。絹と珠玉とはやはり重んぜられた。歌や言語の上にも鎌倉趣味が傳はつて遺つて居る。浦々の按司を都に住ましめて、中央集權の實は大いに擧つたが、尙言語の統一が十分には行はれず、首里の官話が常に特別に上品と認められたのは、即ち外來語の採用に由つて、爰ばかり著々と物言ひが變つて居たからである。チェンバレン氏の琉球語研究は誠に辛苦の著であるが、其中に「う入りみしえびり」や「いめんしえびらん」などの二三の敬語の例を示して、日琉の言語の間に大分の隔絶が有るやうに、

於て、まだただけは無理であつた、此は都で近代に發達したいらつしやいませ一の類であつて、たゞ首里那覇の上流のみが之を用ゐ、宮古八重山は勿論、すこし田舍へ行けばもう常人は、今尚之を用ゐて居ないのである。

下

沖繩人が沖繩語に愛著するのは當然の話である。所謂普通語の如何に達者な人たちでも、互に間では之を使はぬやうにする。今の程度で二通りの語が、併用せられて行くことを望んで居る。伊波君などの沖繩口の講演は、非常に好い感じを以て聽かれて居る。やがては此で書いた本なども出ることと思ふ。自分は是が一種の國語運動であつても、猶賛成をする積りであるが、しかも殘念ながら終には徒勞に歸するだらうと思ふ。その理由は極めて簡單である。沖繩語にはまた統一の事業が完成して居なかつた。統一の基準と爲るべき首里那覇の語には活力が有るか、それが有り過ぎて却つて盛んに變化して居る。是では何方へ追付くことが出來ぬと思ふ

今後は益々さうであらうが、以前とても久しくこの變化を續けて來たのである。島の外には新しいものが常に在る。一つの事物乃至は心持が入つて來る度に、必ず二つづつの語を用意することは不可能である。新語の採用には我々も豐かな經驗を持つて居るが、支那で製した耳馴れぬ名稱などを、何とかして歌に詠めるやうな、風雅な語に引直さうとして見たけれども、自轉車をオノコログルマと謂ふ類は、とう〳〵通用しなかつた。所謂和歌和文の特殊文學が有つて之を註文してさへも、漢語の跋扈を制御することが難かつた。ましてや沖繩の方では眼の言語は、ずつと昔から大和と共通であつたのである。中でも官府の記錄文書などは、如何して斯う迄に練熟し得たかと思ふほど、完全なる罷在や奉存を綴つて居た。偶々一二の變つた用語が有るかと思へば、それも西國一帶の特色を傳へた迄であつた。この文章は勿論勉強して學んだものだが、鹿兒島の腕力だけで、之を押付けたとは思はれぬ。最初から語脈の一致が有つて、表現の順序が同じかつた上に、社會關係の複雜緻密に爲るにつれて、之を意味する語の不足分を、追々に内地から取寄せて、補充して行く久しい仕來りがあつたから、別に此以外に沖繩一流の文章を、發達させる機會が無かつたのである

或種の公文には文章を揭げて、文字の無い者にも讀聞かせることが屢々あつた。之を繰返して居るうちに、我々の所謂切口上の如く、文章の語を會話にも採用する。チェンバレン氏の僅かな語彙を見ても、この經路を通つて入つて來た、時代々々の痕のある語が中々多い。それを雙方で別々に支那から輸入でもしたやうに、又は互に獨立して案出したかの如く、同氏は說き人々は信じて居る。

音韻の變化などは、離れて住めば何處にも起る。一所に住めば又次第に一致して行くだらう。しかも今日のやうに新規に使はねばならぬ語が多いと、歩みの遲い學者たちがもう十分に研究したと謂ふ迄、元の形を遺して居ることは困難であらう。我々から見れば沖繩は言葉の庫である。書物も無かつた上古以來、大略出來た時代の符徴を附けて、入れて置いた品が大抵殘つて居る。内地の方で損じたものが島では形を完うして居る。それを整理をして引合せて見る爲には、先づ小さな誤解から片附けて行かねばならぬ

今の正しい首里語なるものに耳を傾けると、律義な九州邊の武士に對するやうな感じがする。我等の應酬に多く用ゐられた、「些と」「隨分」「全く」などの副詞が、意外に最初の意味に

近く使はれて居る爲でもあらう。又何々の「やうな」をグトールと謂ひ、何々する「ならば」をドンセーと謂ふ類は、今も存する九州の方言であるが、或は本來の沖繩語かと思ふ程、盛んに用ゐられて居る。聽きたいをチヽブシヤン、無いだらうをネランハジと謂ふブシヤンやハジも、「欲しい」と「筈」との中世の用ゐ方の儘であるが、我々の俗語が却つて變つてしまつて、今では向うの方の一つの特色と見られて居る。「筈」は慥かに弓矢から出た武家の語で、きつと間違はぬと云ふ場合に用ゐたかと思ふのに、現在此方では「だらうと思ふが」位の處に使つて居る。それを忘れてしまつて沖繩人の辭令は婉曲過ぎる、明白な時にもハジと謂つて、斷定の責任を避けようとするなどと、飛んだ批評をする者のあるのは、是も亦一個の小さい誤解である。

我々の悲しまねばならぬ大きな誤解は、元を忘れるのが幸福に生きる手段、通說を批判せぬのが永遠の賢明と思つて居ることである。この私の解說なども誤つて居ても、學問さへ進めばすぐ訂正せられる。あんまり難有くは無いが日本なども、今やこの小誤解則に入つて居る。それを訂正するのも骨が折れるが、丸きり盲蛇のまゝで捨てて置かれるよりは少しはいゝ。

二〇　久高の屁

東西古今の屁の文獻の中で、哀絕又艷絕なるもの、久高の島に殘つて居る。久高では外間の根人間仁牛に、女の同胞が二人あつた。姉の於戸兼は外間の祝女で、島の御嶽の御祭に仕へて居た。妹の思樽は巫女であつた。首里に召されて王城の巫女と爲り、日夜禁中に住んで神の御役を勤めて居る中に、國王の御心にかなひ乃ち入つて内宮の人と爲つた。性貞靜にして姿は花よりも更に美しかつた故に、一人の寵愛と幾多の恨み嫉みと、悉く此君の身に集まり、宮中眼を峙てて物言交す友とては無かつた處に、どうした惡い拍子であつたか、多勢の居る中で、飛んでも無い不調法な音がしたさうである。

宮女たちは之を聽いて大いに悅び、寄ると障るといつ迄も此噂のみをした爲に、何分にも辛抱して御前には仕へ兼ね、終に御暇を賜はつて故鄕の島に還つて來た。さうして久しからずして王子を産んだ。尊貴の御胤なれば、尋常に以て遇するは恐れありと、新たに一棟の產屋を建てて之を育み、御名を思金松兼と附け申すとある。

思金松兼八歲の童子と爲つて、日夜に我父は誰ぞと母に尋ねたまふ、人は皆父ありて生るるに、我ばかり母一人の子と云ふ道理は無い。必ず之を匿さるゝならば、生きても味氣なしと食事を絕つて、憤り且哭いて御責めある故に、是非も無く昔の宮仕へのつらかつた日の話をした。さりながら田舍の果に人となりたまふも御運である、とても都に出て父の王と御名乘りかはしは叶ふまい、詮も無い素性語りをしなかつたのも其爲と、强ちに諫め申されたが、王子は之に耳をも掛けず、直ちに伊敷泊の濱に出て、七日の間東を向いて神々に禱られた。

其七日目の夜明け方に、沖の方から光り輝いて、寄つて來る物がある。衣の袖を展べ掬ひ取つて見ると、不思議や黃金の瓜であつた。大いに喜んで之を懷にし、母に別を告げて遙々と首里の都の、王城の門の前に立つて、世の主加奈之に對面がしたいと申さるゝ。髮は赤く衣は粗く、姿はしかも氣高い童子が、斯く〳〵の次第と聞し召して、何事の願ぞと御前近く呼上げたまふに、懷中よりかの黃金の瓜を取出し、此は是國家の寶、天甘雨を降し沃土已に潤ふの時、

曾て見をしたことの無い女をして、此種を播かしめたまふものならば、繁茂して盛んに實を結ぶべしと申上げた。國王大いに笑ひたまひ、そんな女が此世に有らうかと仰せられる。然らば此で御咎めを受ける者も無い筈と、先づ御心を動かし奉る。やがて内院に左右の人を遠ざけ、御尋ねに由つて詳しく久高の母が歎きを言上した。此王他に御子とては無かつた故に、後に思金松兼を世子と定めたまひ、終に王の位に登つて百の果報を受けたまふと語り傳へて居る。

第四王朝の尚金德王は、即ち此思金松兼の御事かと云ふ說がある。それでは僅か四百四十年程前であるが、或はもつと古い話であつたかも知れぬ。中山國王が年毎に一度、海を渡つて久高の島の神を御拜みなされたのも此時からで、其例が絕えて後も久しい間、外間の根人と外間の祝女には、每年上つて來て魚を獻じ御目見えをした。其時根人には黃金貫一雙、祝女には葉茶と煙草とを賜はるのが例であつた。

尚德王と云ふ若い武勇の世の主が有つた。或年の行幸に、此島の祝女の艷なる色香になづんで、永く逗留ある間に、都は亂れて王妃王子も亂軍の中に失はれ玉ひ、衆に推されて英傑金丸は立つて王と爲る。之を聞いて尚德王は、或は憤つて自ら世を早められたとも謂ひ、或は還御に船覆つて海に隱れたまふとも傳へられる。尚巴志王の花やかな統一事業は、斯うして跡が絕えてしまつた。しかも今に至る迄久高の島人が、前朝を慕ふの情はまさしく一篇の詩であつた。八十年程前には此島の濱で、網を曳いて黃金の菊の花の簪を得た。それを王尚德の遺物とすることに、一人も反對する者が無かつたが、實は簪の制度には變遷が有つたので、是は實際は此王以後のものであつた。外間の根人の家には、思金松兼の産屋を今でも保存して居る。母の思樽の衣裳も大切に傳へて居る。はかまと謂ふのは即ちカヽンであるらしい。白い羽二重のやうな絹であつて、昔に象つて後に製したので無い證據は、紐に結んだ皺があり、又ほんの少しばかり汚れて居る。即ち曾ては此美女の溫かい肌を包んだものだといふのである。

二　干瀨の人生

上

干瀨はさながら一條の練絹の如く、白波の帶を以て島を取卷き、海の瑠璃色の濃淡を劃して居る。月夜などにも遠くから光つて見える。雨が降ると潮曇りが愛でぼかされて、無限の雨の色と續いてしまふ。首里の王城の岡を降る路などは、西に慶良間の島々に面して、遙々と干瀨の景を見下して居る。虹が此海に橋を渡す朝などが若し有つたら、今でも我々は綿津見の宮の昔語を信じたであらう。

俊寛僧都や成經康賴の輩は、憂ひ憤りに心が亂れてゐた爲か、この大瀨の波を見て泣いたと謂ふ。少なくとも平家物語にはさう書いてある。京の小さな陰謀に沒頭してしまつて、島を最も美しく又最も安全にせんとした天の大神の政治には、意を注ぐ餘裕が無かつたのである。何人が見て名けたものか、鬼界と云ふ語も天涯の孤客を劫すに足りた。それに沖繩より北の潮はまだ冷かで、珊瑚の生活が活潑で無かつたものか、大瀨の隱れ岩は海底に潛む魔物のやうに、其背を只處々に露すばかりであつた。暗夜に海の鳥などが其上に居て鳴くと、馴れたる船人すらも怖れをのゝいたと謂ふから、めゝしい都人にはこの美しさはわからなかつたことであらう。

斯うして久しく疎まれた南方の海にも、尚靜かなる文明の成長は有つた。薩摩の坊津秋日

の浦々では、暮春初夏の凪の日に、花瀬見物と名けて小舟を漕ぎ出し、遠く岬の外の澄み透つた潮の底に、青赤黄紫色々の岩の、立ち並ぶ風情を賞美しに行くやうになつた。七島大島でも磯が有れば種々の砂を沖から吹き寄せて、いつと無く處々の兼久(砂原)を作り、今見る多くの村里は其兼久の上に立つた。港の奥が豐饒なる田と爲つたのも、ひる木の林の次第に入江を蔽うて茂つたのも、悉く大瀬が荒海の怒を鎭めた力であつた。殊に沖繩では干瀬と呼ぶ迄に此岩が高く、不斷の白波が島の姿を淨く尊くすることは、恰も佛菩薩の御像に光焔を取附けた如くであつた。しかも斯うして外難から保護せられて居ても、干瀬から内の生活が、やはり亦或時は至つて樂しく、或時は悲しく辛かつたことだけは致し方が無い。

世界の海の荒れ狂ふ日には、餘波は寄せ來つて此干瀬を打越した。島ばかりが獨り平穩なるアトールのやうな世中を、維持して行くことは不可能であつた。空と海との縫目の絲も、時あつて綻びざるを得なかつた。日を經て南の風の吹く頃は、遙かなる常夏の國から、椰子の實が流れて來る。之に細工をして瓢に代へ、泡盛の芳烈なるものを掬んで樂む中に、次第に島人の心は廣くなつた。沖に出て見ると渡り鳥はどこ迄も取んで行く。雲より外には又幽かなる次の島の影があつた。小舟にクバの葉などの帆を掛けて、知らぬ島々を見に往く者は、やがて又大きな船を誘うて戻つて來る。岡に登つて送る者待つ者、我と海上に漂ひあるく者も、いつと無く此干瀬の白い波を、眺めては憂苦するやうになつたのである。

寶貝は此あたりの海に、珠や錦よりも尚美麗な、様々の種類を産する。それを貨幣の用に立てることは、沖繩では知らなかつた。又何處からも求めには來なかつたらしい。糸滿の漁民等は、たゞ其中の大きな一種を採集め、之を刺網の錘に用ゐて干瀬の魚を捕り、さうして大いに富んで居た。貝の種は盡きないが、人が多くなつては魚が不足する。乃ち友船を誘つて年毎に大海を横ぎり、南は石垣基隆の浦にも移り住み、或は遙々と唐柔金華山の、寒い磯までをあさるやうになつた。しかも故郷が有り家がある爲に折々は還つて來る。さうして又新たなる願を大小の船に積み、港の出入の追々と繁くなるにつれて、風や潮の響も昔の響では無くなつた。干瀬にも色々の悲しい記念が附添はつた。多良間は夢ほどの小さな沖の小島であるが、既に十幾つかの錆びた錨が、其干瀬の岩の間に沈み、空しく白波に洗はれて居る。

併し島人が島を出なかつた以前の世中でも、干瀬と生活との交渉は極めて繁かつた。生れてから死ぬまで、死んでから祀られる迄、家々の柱の礎、石垣の石、更に大島などではモヤと名けて、古風な葬の作りには、悉く干瀬の石を引揚げて用ゐて居た。御嶽の靈地もナバ石を以て圍うて居る。ウブの入口には宮古でも八重山でも、特に蒼明石の類を弓形に斫つて、小さな石の門を覆うて居る。濱から運んだ美しい眞砂も、もとは皆干瀬のものである。新しい道路にも之を敷詰めて、次第に野山を開いて行く。さうして其野山も畠もやはり亦、洪荒の世の干瀬であつた。

下

石垣島の大濱では、西瓦東瓦の兄弟が祀られて居る。カハラは久米島の笠末若茶良などのチヤラと同じく、又運天の百ぢやなのヂヤナと同じく、部落の長を意味した語であらう。此兄弟二人の瓦の時代までは、八重山には鬪爭と搶奪の他何物も無かつた。獨り彼等が相愛して、平和の草の庵を結んで居た爲に、招かざるに四鄰の男女、來つて　の頭目の傍に居を構へ、

遂に集まつて宮良白保の二村と爲つた。然らば垣を築き禽獸を防ぐべしと、東は川原より西は富山まで、仲嵩の靈地を中にして二里の間、始めて五尺の高さに大瀨を積繞らしたと傳へられる。干瀨は此の如くにして此島の神代から、文化生活の爲には必要であつたのである。

併し其以前、人の大いに闘ひ爭つたのも、やはり亦干瀨の上であつた。宮古は珊瑚の島だけに、干瀨が我々の綾錦山に爲つて居る、西銘の主慈播の親の三人の男子、老いて盲目と爲つた父を嫌んじ、魚捕りて慰め申さんと僞り欺いて、沖の干瀨に伴ひ行き、引汐の際に置き捨て、其上で酒宴をした。やがてよい頃を見て各〻小舟に取乗り、父を殘して還つて來ると、潮は滿ち瀨は毀れて、盲翁の身は浪の上に漂うた。島には鱶を神とする多くの昔話が有るが、此時も忽然として大きな鱶は現れ、背に老翁をのせて安々と濱に送り來る。兄とはちがつて孝行な三人の娘、先づ牛を宰して大魚の勞に謝し、家には人々を集めて饗応の宴を開いた。三人の兄弟は之を聞いて其恥に堪へず、怨は鱶に在りと干瀨をさして漕いで行くのを、盲目の父屋上に出でて之を咀へば、一陣の暴風起つて三艘を海に覆へ入れたと今も傳へて居る。

或時には父干瀨の遊びにかこつけて、仇家の孤兒の心を試さうとした武士があつた。陸で闘ふならばとても敵すべくも無かつたのを、却つて水中に機會を得た爲に、十歲の童子に偶然に親の怨を報いたと謂ふ。但し此話にも類型が尚有つて、必ずしも史實とは認められぬが、此以外にまだ二つ、どうでも此邊の島で無ければ、起り得ぬやうな話が語られて居る。干瀨を見て過ぎる後の世の旅人が、いつかは思ひ出すやうに此序に書いて置かう。

其一つは伊良部の島の漁夫、登佐と云ふ者の話である。登佐にはあでやかなる妻が有つた。或時干瀨に出て此男、岩の穴に手を差入れて蛸を捕らうとすると、其手がどうしても拔けない中に、潮が大いに滿ち來つた。爰で死なねばならぬかと、獨りで悲しんで居る處へ、神谷の仁屋德と云ふ者、通りかゝつて之を見附け、私の望を只一つ、許してくれるならば助けよう。命を救ふ禮として、御前の女房を讓つてくれと言ふのであつた。死ぬよりはましと思つて之を承諾し、二人連立つて戻つて其話をすると、妻は一笑して約束なれば是非も無し、吉日を擇んで婚禮の用意をしたまへと謂ふ。さうして數日を延ばした後に、或日美酒と肴とを調へ、登佐の妻は神谷の德を招いて、斯う云ふ風な話をした。人の妻を取るのは善いことで無い。さうして唯一時の樂みである。併し約束を破るのも惡いことだ。何と二人で夫婦に爲つたと云ふ歌を作つて、之を島々にはやらせ、約束も破らず男も棄てさせず、さうして登佐と私とは、元の夫婦で居てはどうかと謂ふと、德も感心して其意見に從ひ、神谷の仁屋が人を助けて、美しい妻を得たと云ふユンタばかり永く殘り、登佐の幸福は元の儘であつたと謂ふ。

第二の話も亦干瀨の蛸に關して居る。石垣の四箇から米山の沖に、牛の方干瀨と謂ふ怖ろしい岩がある。近い頃の大風の日に、一艘の傳馬船が此近くへ流れたのを、取りに往かうとした刳舟が先づ覆つた。三人の乗員の二人は行方知れず、今一人も死んだことと思つて居ると、風が鎭まつて後に、向ひの竹富の島から還つて來た。干瀨の上をあるいて自分で上陸したのださうだ。二島の端と端とは一里に近い。干潮には淺瀨が見える程の深さであつて、只三箇所ほど泳がねばならぬ切れ目があつた。この長い岩橋の上を、夜の十一時から次の日の午後二時までに、一足づつ拾つて歩いて來た。島でインミと稱する海の魔物をかけて居た。眼がへると

蛸を見附けて捕つて食べたと謂ふ。こゝの糸滿人にも好い女房があつた。竹富の島から夫の乘つて來る舟が見えると、待遠しさと悦びの餘りに、海に飛込んで中途まで泳いで迎へに出たと云ふ話である。干瀬の附近には今でもまだ、此樣な生活がいくらでも有るらしい。

三　島布と粟

沖繩の芭蕉布だけは、自ら織つて著る者がまだ多いが、北では奄美諸島の絣の紬、南は先島の紺白の上布などは、殆ど皆他所の晴著となつてしまふのが、昔からの習はしであつた。島の女に布を織らしめる制度は、勿論近世の發明では無いが、其發達の跡を尋ねて見ると、今も遣瀬無い記念が遺つて居る。

以前田舍でよく聽いた子守唄に、七つ木綿の絲の數と云ふのがあつた。單純な村の娘に取つては、經絲の數を算むだけでも、辛氣臭い仕事であつた。それで物の綿々として盡きざることを、之に譬へて歌つたのである。處が南の果の島々へ來て見ると、妹背山のお三輪が持つやうな緒環を片手にして、小屋の石垣に差込んだ二本の竹の串の間を往來しつゝ、一筋ならべに機の絲を綜て居る。つまりは布一匹の絲の長さだけ、素足で同じ路上を歩かねばならぬのである。僅かばかりの機道具ぐらゐは、工夫し出されぬやうな社會では無いのだが、昔から人の力は俵藤太の卷絹の如く、取れども盡きぬものと考へたのが癖で、斯うして銘も落款も無く島を出て行く物に、優しい女性の生涯を潰させて居るのである。

但し島で上布を織る程の女は、敬はれもすれば又羨まれもした。二十桝の紺縞になると、一反が並の白布の七反分にも評價された。其家は言ふに及ばず、村でも之が爲に貢納が樂になる。それ故に名人の機の傍には、若い娘たちが多く見習ひに遣つて來て、次の代の苦勞の下拵へをした。宮古は今でも藍染の布を誇りとする。布織る女の手は遠くから見ても黔い。是も何とかすれば指を汚さぬ工夫は附くだらうが、凡そ此島で手の眞白な女などは、人中に出ても物を言ふことは出來なかつた。どこの家でも嫁に取らうとしなかつた。針突なども同じことで、是が亦女同士の、伊達名聞にも爲つて居たのである。實際に宮古の人の黥には、絣の柄と似た模樣が多い。さうして若い女にも黥をする風が、まだ中々止まぬさうである。亭主に附いて島から外へ出ようとすると、これが何時でも妨げになると謂つて居る。併し他の島でも內地でも、黥をせずとも女はやはり多くは機などを織つて、家にばかり居るのだから、まだ現實の問題とは認められぬ。

甘藷の種の輸入せられる迄、此島では專ら粟を食べて居た。四[illegible]年間の人頭稅も、すべて此粟であつて、只布を納め得た者だけが、布に換算することを許された。中山の方でも以前は先島の穀類を以て食料の一部に充てて居たのであらうが、ンムの世界と爲るに及んでは、澤山の粟は皆酒屋に拂下げられたさうだ。此が本來の泡盛であつて、米で造つた今の燒酎よりは、ずつと辛く又強かつたと謂つて居る。兎も角も無くて濟みさうな物ばかりの爲に、並の百姓の餘分の骨折は、一通りでは無かつたらしいのに、古くから有る宮古の記錄では、島の土地が餘りに豐沃で、穀類の有餘る處から、人民が放埒で喧嘩爭鬪の止む時が無い。是は何でも大國に御願ひ申し、少し重い年貢でも取立てて戴いたら、自然に勤勞の必要を感じて來て、惡い考を起す餘裕が無くならうかと、よく〳〵思案の後に沖繩に從屬を申出でた、と言ふことに傳へて居る。卽ち最初から現在の民意などは、特に少

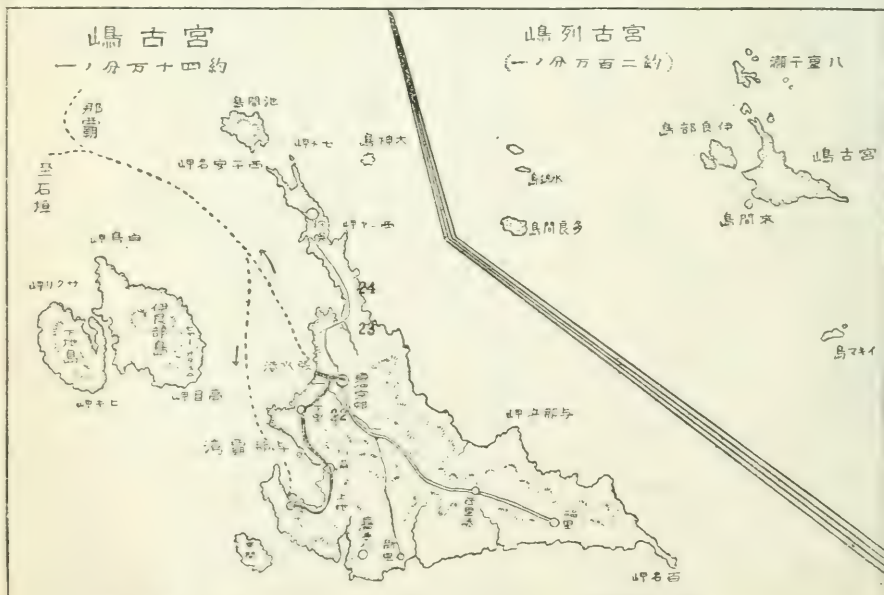
しも代表せぬ積りの仕事であつたが、記錄は要するに有識階級のものである。沖繩に對する忠臣は同時に、島でも永く恩人として之を仰いで居るやうに、書殘されてあるのである。

さうして役人には課稅の減免があつた。上布の評價にも此人々のみは之に參與した。之に反して布織る女たちの境涯は、元は一つしか改良の途が無かつた。卽ち若く且つ面影の淸らかな間に、沖繩から來る高い官吏に愛せられ、子を生んでそれが男であつたら、後に士族と爲ることが出來たのである。尤も士族に爲つても立身をせぬ限り、布はやはり織らねばならなかつた。さうして又今でも織つて居る。勿論今日の勞働は自由であるが、小泉八雲さんの所謂先代のゴストが尙憑いて居る。島の只人が默つて忍んで居る辛勞は幾つか有る。島の布の價は織つてしまつてもまだきまらぬ。商人の知らせて來る相場がどんなでも、そんなに廉くては賣らぬと言ふことは今日でも出來ぬ。布を賣つて貢はねばならぬ物が多いからである。粟の耕作に適し、米は始から少ない故に、飲むとすれば泡盛なども買はねばならぬ。宮古諸島は人口が五萬人で、毎年一萬圓の酒類が輸入せられる。此だけの泡盛までも夫に飲ませねばならぬ。

一三　蘆苅と竈神

老いて目盲ひて子に棄てられ、幸に救はれ孝女に迎へられた宮古島のキングリヤ、西銘の主嘉播の親の前半生には、尙二つの傳說が纏綿して居る。それが三つともに大和の中昔を、故鄕とするらしいのは如何なる因緣であらうか。

此長者、若い時の名は炭燒太良、荒野の草の一つ屋に、獨り炭を燒いて住んで居たのを、守護神の導きあつて幸運の妻を貰ひ當て、終に島隨一の有德人と爲つた話は、以前炭燒長者の硏究に於て之を述べた。北は津輕の戶建澤、南部最上の山谷から、中國九州にも行渡つた物語で、分けても豐後の臼杵領の、石佛を以て評判せらるゝ深田の滿

（宮古諸島）

月寺、同じく三重の内山觀世音などが、夙くから有名である。

宮古では長者の女房は出戻りであつた。良く無い本の夫とは稚い頃からの約婚であつたが、緣盡きて別れたことに爲つて居る。野崎の長井に住む二戸の民、一人は漁を業とす。嘗て前離の干瀨に小舟を滯寄せ、磯に寄木の有つたのを枕として、潮合を待つて居るうちに、半夜に神々の話の聲がする。寄木大氏、今宵は長井の村に、鄰同士で子が生れる。いざ參つて運を定めてやりませう。いや此方には來客が有つて、今宵の御伴は致し兼ねる。どうぞ宜しきやうにと斷つて返すと、暫くあつて以前の神又立寄り、男の方は乞食の運、女の方は產屋の作法にかなつたれば、一日毎に粮七升と述べて還る。漁師は思ひ當ることあつて急ぎ戻つて見ると、我家には男子出產し、鄰の家の女の赤兒には、生れると直に額に鍋の墨を附けて居た。心の驚きを包み隱して、斯く時を同じくして生れたのも天緣と、やがて鄰同士の緣組を約束した。

此話は他の府縣でも屢〻聞くが、多くはもう此だけで終つて居る。さうして山の神と道祖神の、御談合と云ふことに爲つて居る。宮古の島で之を寄木の神と云ふのは、如何にも自然な變化である上に、其話にはまだ續きが有る。此女の兒の名は眞氏、是か後には炭燒太良の妻である。振分髮の夫は放埒で身の運を知らず、或年新妻の初穗祭に、世の習ひの麥粉の供物を庭に投附け、女房に惡口した咎で、愈〻ユリ穀靈と云ふ福神に見放され、妻は離別せられて西銘の村に往つてしまひ、自分は次第に零落して、終に家々の門に立つて、餘りの食物で命を繫いだと謂つて居る。

宮古島では二百年も前から、之を大昔の族長が家の物語として語り傳へ、且つ色々の異傳をさへ生じて居る。斯ういふ全國に遍滿する昔話が、如何にして此島だけの歷史とは爲つたか。勿論何人も推斷することは出來ぬが、袋中和尙の琉球神道記には、竈神の由來として、殆ど是と同樣の話を載せて居る。近江國は甲賀郡、由良の里に住む二人の民と謂つて居る。夜の假宿りに神の話を洩聞いたこと、前夫が無慈悲で好い女房を失つたのも、宮古の古傳と一樣で、しかも尙其先の話がある。前夫の名を箕作の翁と謂つた。後に乞食と爲つて長者の家の臺所に來り立ち、施しの食を受けて喰はうとして、ゆくり無く前の妻の姿を見た。慚と恥との情に堪へかねて、終に竈の傍に斃れて死んだのを、夫の長者に見せまい爲に、下人に言附けて竈の後の土を掘つて埋めさせたのが、後には此家の火の神と爲つて、愈〻長者の福分を豐かにしたと云ふのである。

長者の傳說は殊に斯う云ふ風に、次から次へ續いて行くのが例である。しかも神道記の方が遺老說傳よりも百年早く、宮古の方にも鍋の墨を、生れ兒の額に附けると云ふ點に於て、幽かながらも竈の信仰に緣を引くのを見ると、さう古くから雙方別々に、發達した口碑では無いのかも知らぬ。離別の妻の出世談は、今沖繩の組踊に、末めでたしの「花賣の緣」がある。更にヤマトの方では大和物語の時代から、蘆刈の話と云ふものが知られて居た。あしかりけりと云ふ秀句が使ひたさに、之を難波の浦に持つて往つたのかとも思ふが、近江の方でも箕作の翁と謂ふのが、蘆を苅る業體と稍近い上に、豐後の炭燒長者には前の夫の話は少しも無くて、やはり又蘆刈某と云ふ子孫の苗字が傳はつて居る。

竈神に醜い神像を作るのは、今尙東北一般の風である。之を火男と謂つたのがヒヨットコと爲り、火吹きと謂つたのが潮吹の面と爲つた

かと思はれる。善い妻と惡い夫の單純な物語は、此から發生して、同じ民族の行く限り、野の果島の果までも、火を焚く度に繰返されたものでは無いか。さすれば南海の沖の島に漂著した昔のものは、獨り平家の落人の口碑のみでは無かつたのである。

二四　はかり石

南の島では到る所、多くの石敢當を見てあるいた。鹿兒島まで還つて來て石敢當の話をすると、其がどう誤つて傳はつたものか、土地の學者の折田翁が、何とも合點の行かぬ點で非難をせられた。自分は口碑も只の石碑と同じく、後には苔蒸し漫漶するものだとは感じて居たが、斯くまで早速には變化しようとは思はなかつた。

そこで此序に石敢當の事を報告する。

石敢當の石を建てる風は現に東京にも在る。東京から北にも捜せばあるらしい。長崎には勿論ある。鹿兒島では名物に算へる位もある。つまり日本一圓の近世の流行であつた。從つて沖繩縣下の島々に在るものも、何處の眞似とも言ひにくいと共に、[illegible]同樣に[illegible]人の水口とも言はれぬ。只此石の文字は支那から學んだもの、さうして餘り古くからの風で無いことは、推定して置いても大抵よささうに思ふ。

此推定を更に有力にするのは、八重山に於ける自分の實驗であつた。石垣島の四箇村でも、石敢當の立ててあるのは鹿兒島邊と同じく、丁字路の突當り、人家の表口又は石垣の角などで、石の形にも著しい變化は無いが、たつた一つの珍しいことは、文字を刻して無い石敢當の有ることで、是をも土地の人は八重山風に、イシガントウと呼んで居る。年寄や女は又ビジュルとも謂つて居るが、是が石敢當の古い名稱と思はれた。或は二つ別々の物を、混同したのでは無いかとも思つて見たが、其石の在り處、其高さが二尺と三尺との間で、上の方が少し細り、頃合の自然石か、若くは僅かの人工を加へたものなることも雙方全く同じで、之に對する信仰も亦同じである。相異は單に文字の有無で、文字あるものは概して新しい。且つビジュルと云ふ名前も、必ずしも無文の石だけに限るのでは無い。

沖繩本島にも字を刻せざる石敢當は有つたのかも知れぬが、自分には心附かなかつた。只國頭郡誌を見ると、國頭地方には別にビジュルと名くる信仰上の石があつた。是は內地の村々に在るハカリ石、岐阜縣などで重輕樣と云ふのと同樣に、祈願有る者が兩手で持上げ、重さ輕さの感じに由つて、心中の祈念が叶ふか否かを卜する爲に用ゐられる。即ち上古以來の石占である。石占の信仰が絶えて形式のみ殘る地方では、一方には力石と謂つて、一種青年の運動具と爲り、又他の一方には辨慶の礫石だの、牛若の脊競べ石だのの傳說と爲つて居る。石を靈物として神意を之に問ふのは、日本には普通の習俗だから、其類例を沖繩のビジュルに見出すのは、不思議とは思はなかつた。しかも國頭郡誌の著者島袋君などは、ビジュルと石敢當とは別の物だと、今でも信じて居られるさうだ。

處が八重山のビジュルは石敢當である上に、此にはまだハカリ石の信仰がやゝ遺つて居る。即ち此石が倒れると雨が降ると信じて居る。之を轉用して雨乞には此石を倒す。內地の方でも村の石占には、晴雨は主要なる一問題であつた上に、石占に用ゐる石は今の石敢當と同じく、魔除の效を具ふる地境の立石が、やはり亦多かつたのである。

そこで自分は進んで斯う推論しようとした。丁字路の衝などに石を立てて、目に見えぬ邪神の侵入を防ぐ風習は古く、其石に石敢當の三字

を刻する行事は新しい。支那から輸入したのは此文字を彫入れる風だけである。支那でも南部の市邑には弘く石敢當の石が存るが、恐らくはこの刻字の選定は古いことであるまい。以前は多分魔除の石神を武神と考へ、朝鮮などの如く石將軍と彫つて居たのが、歴史上の人物にちやうど此場合に似つかはしい、石敢當と云ふ將軍あることを知つて、始めて此文字が流行したのだらう。實在の人であると否とは、迷信者流の問ふ所では無かつた筈である。まづ此だけのことは確かに鹿兒島の史談會で述べた。

又、石敢當何人ぞやと云ふことは、如何にして日本に此種の石を建て始めたかの説明に、ちつとも役立たぬと今以て信じて居る。さうして我々の問はんとするは後者である。宮古の東仲宗根の海際の芝生に、ぽつんと一つ文字の無い石が立ててある。むかし少年を此傍に連れて來て脊丈を檢し、石より高く爲つて居たら、人頭税を課し始めたものだと傳へて居る。卽ち是も亦はかり石の一口碑である。石占の方法は重さだけでは無く、或は高い處へ投上げて乘るか落ちるかを試みたり、或は繩などを持つて行つて長さを比べたりもした。その信仰が廢すると、次いで又斯んな説明的の傳説も起る。江戸期の隨筆の石敢當説も、多くは之に近い附會の説明を信じたものであつたから、顧る價値が無いのである。

二五　赤蜂鬼虎

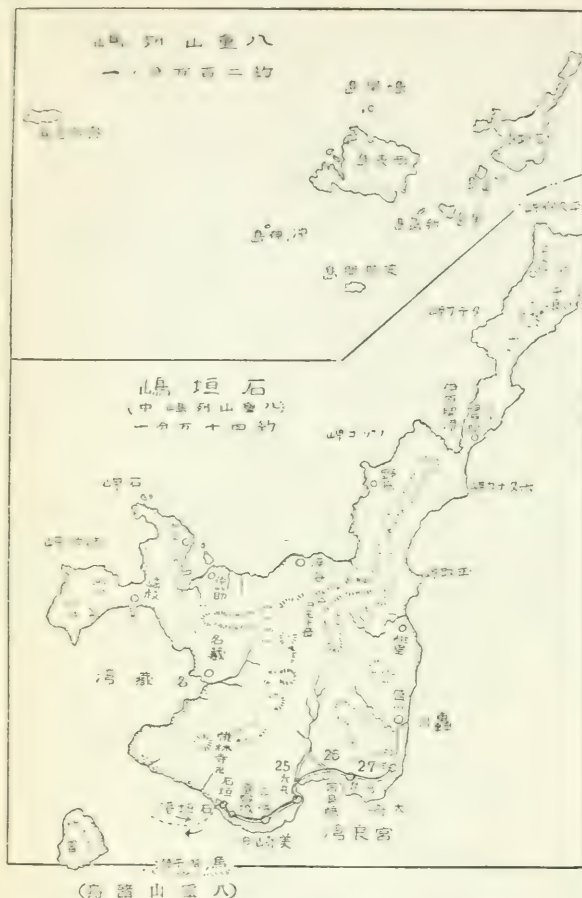
靜かに考へて見ると、赤蜂本瓦も八重山の愛國者であつた。或は少なくとも獨立黨の領袖であつた。處が石垣村の士族には、之を征伐した宮古の勇士の血筋が多かつた。然らざれば反對派の長田大主が子孫である。島の記錄は此人々と、中山政廳との間だけに交渉の有つたもので、之と兩立せざる口碑は採用せられなかつた。其上に四百有餘回の春秋は此事蹟を蔽うて居る。しかも昔の島の酋長にして、所謂酒色に耽り下を虐げた者は、赤蜂一人には限らなかつた筈である。他の島々に對しては別に無法を働いたのでも無い。年貢は以前とても沖繩へは納めて居なかつた。尚眞大王の征服欲以外に、自分は彼の所業が叛逆と爲るべき理由を知らぬのである。

赤蜂滅亡して四十年の後、與那國島には又鬼虎の亂なるものが起つた。鬼虎はもと宮古の狩俣村の者で、飢饉の歳に粟一斗で與那國へ賣られたと云ふ説が有る。然らば彼も亦一個外來の冒險者であつた。附近の諸島が既に王化に潤うてしまふと、斯んな懸離れた島の謀叛人までが征伐を受ける。多くの勇士は功有つて賞せられたと謂ふよりも、寧ろ賞を得んが爲に其功を立てたやうに見える。西表の島の古英雄祖納堂の如きは、身の丈六尺猛勇膂力ありとあつて、彼自身が既に赤蜂鬼虎の類であつた。天色淸明の日に高山の峯に登り、遙かの西天に小島有つて雲の如く又霧の如く、波濤の間に隱見するを望んで大いに喜び、急に數十人の精兵を船に乘せて、攻めて討取つたのが與那國であつた。其酋長二三人を擒とし、中山に捷を奏して其支配の下に附けたとあつて、結局後援者ある第二第三の鬼虎は子孫迄も繁昌し、孤島は一人の赤蜂が居なくてもやはり亦征伐せられたのである。

赤蜂は八重山の語では、アカブザーと呼んで居る。ブザーは蜂を意味し同時に又平民を意味して居る。平民と士族との差別の八釜しく爲つたのは、弘治十三年の平定から後の事らしい故に、恐らく先住民の最も永く反抗したものを、ブザーとは呼んで居たことであらう。赤ブザーと本カハラとを、二人のやうに書いた歴史もあ

るが、其行動の跡を見れば一人である。さうしてカハラは前にも出つた如く、島では脅長を意味する古語であつた。

殊に赤蜂は恐るべきカハラであつた。威風赫々たる宮古の仲宗根豊見親すら、一時は其謀計を以て欺かれ之に通じて居た。川平の仲間みちけも終に彼奴が爲に殺された。後に御嶽の神に爲る程の美宇底御嶽さへ、逃れて波照間の島に赤蜂を避けて潜伏された。獨り長田の大主のみは古見の山に身を潜め、辛うじて時節の到來を待ち得たけれども、殆ど源頼朝以上の艱苦を嘗めて居る。後に二人の弟は先づ殺され、美しい妹の二人の中、眞乙姥は助かつたが、古乙姥は赤蜂の妻と爲つて、後に夫と共に誅せられた。政治の不幸が家庭に及んだ點は、我々の戰國時代も同じであつた。

(八重山諸島)

此裏面には又宗教の争闘があつた。八重山も沖繩と同じく巫女の神道であつたが、部落の隔絶する如く信仰の系統も別であつた。赤蜂征討の將軍には、特に君南風と稱する久米島の巫女の長を乘組ませ、舳先に立つて朝敵退治の禱を捧げ、將士の勇を勵まさしめたのには仔細があつたらしい。久米島は單に土地の八重山と最も近いのみで無く、互に姉妹の御神を祭ると云ふ傳へもあつて、本島の君々よりは幾分か縁も近かつた。それでも愈々四十六艘の中山の兵が、石垣の濱に上陸しようとすると、婦女數十人手に樹枝を持ち、天に號び地に呼ばはり、咒罵萬般にして法術を行ふかと思はれ、味方の士氣も爲に頗る沮んだと記してある。それ故にこそ眞乙姥が忠誠の情から、無事の凱旋を沖繩軍の爲に禱らうと申出た時にも、一般たりとも後れて那覇に著くならば、曲事たるべしと云ふやうな難題を掛けられた。即ち彼女を尚ブザー方の巫女と、疑つて見たのである。幸ひにして美崎御嶽の神德と、多田屋おなりの助力とに因つて、船は悉く恙無く還つたので、二女は相次で大阿母即ち巫女の頭に命ぜられ、爰に始めて聞得大君の神道に統一せらるゝことになつた。

しかも大濱の百姓にちは、今以て村の殿内に赤蜂を祭つて居る。赤蜂實は死せずの傳説さへさゝやかれて居る。阿蘇の金八坊主が居られて御祭らるゝ如く、大隅の大人彌五郎が、祭禮の行列に刀を差して擔ぎ廻られるやうに、鬼ながらも彼は尚慕はれて居る。

二六　宮良橋

八重山の神代は第十五世紀の終、宮古の豐見親が沖繩の兵船を嚮導して、石垣に攻め寄せた時分まで垂れ下つて居る。即ちこの赤蜂の騷亂なるものも、つまりは所謂神々の東雲であつた。島々には二十何所の御嶽があるが、一半は唯祭神の御名に由つて、其由來の至つて古いことを知るのみである。或は又之に事へた美女と英傑との物語も有るが、彼等は既に其信仰を異姓の民に讓つて、遠く雲煙の彼方に去つたものが多い。オーン（嶽）とファオーン（御子嶽）との關係の如きも、今では全く不明に歸して居る。祀る人が屢々改まつたからである。

此間に於いて活々とした新しい歌が又起つた。節には大昔の人のすさびも遺つて居るらしいが、之を承繼いで花やかな粧ひをさせたのは、亦次の代のビラマ（若殿原）であつた。琴は石垣一島に今十四面ほど有る。其中の唯一面が、ヤマトの三越呉服店から取寄せた五尺八寸のもので、他は悉く島の樂人が、島の桐を以て永い間に作り上げた傳來の名器である。沖繩の制と略同じく、我々の用ゐるものより四五寸も長い。三線の方でも、目下輸入する材料は殆ど蟒蛇の皮ばかりで、何れも黒木其他の堅い材を利用し、島の内で立派な樂器を造つて居る。島人が音律に精しいのは、全く天性であらうと言はれて居る。閑だと云ふだけでは斯んな細工は出來ない上に、此等の樂器の制は共に近昔に、沖繩の方から移したものである。神の發明では無いのである。

實際此島の生活には、せめて新しい歌や樂器を以て、慰問でもしてやりたいやうな不幸が有つた。獨り戰亂の悲しい思ひ出のみでは無い。嵐や海嘯や怖ろしい疫病などが、其後幾度か歎きの島を訪れた。朝夕の水汲む業さへ辛かつた。或年には鍋で煮るべき物が全く盡きて、藷盗人が畠の眞中に、寧ろ殺されたいと横はつたこともあつた。憂を忘れるには歌と音樂に優るものは無かつたが、たゞ其恩澤が亦全島には及ばなかつたのである。島には我々の白拍子盲法師の如く、之を職業として流派を分つ者が居なかつた代りに、士族に非ざる者が古曲を保存し、又は之を發達させることは許されなかつた。同じ所謂ユカルピト（上流）の中でも、婦人は又琴三線に手も觸れなかつた。島々の歌には早い又は緩やかな、舞の手が必ず附いて居た。一揃ひの舞衣裳は何れの村でも、村として之を備へ附けてあつた。しかもその面白い舞を舞ふ者は、悉く皆無系無姓の百姓の、髮黑く色白き好い娘のみであつた。喜舎場永珣君の調査に依れば、石垣の藏元から任命せられて、遠く近くの村々に在勤した役人の士族たちが、此等無數の島ぶりの歌の作者であつた。中にも青色の鉢卷に紗綾の大帶をした、目差と稱する若い補佐役が、艶麗なる多くの戀の曲を殘して居る。歌に表れた涙と溜息との主は、何れも舞に巧なる平民の娘であつた。即ち奈良朝の淺香山の采女のやうに、出でて貴族に給仕した前代のミヤラビであつた。

宮良の里は既に片田舎と爲つて、南に漫々たる若波に面して居る。曾ては蝦夷の日高の沙留と同じく、爰に風流のカハラが居を占めて、幾多の宮童の歌を養つたものらしいが、明和の大津浪に故の民の種は盡きて、今は幽かなる口

碑も遺つて居らぬ。村の西の荒野を、宮良川は靜かにひる木林の陰を流れて居る。歌に詠まれたヤクチャマと云ふ蟹が、ひる木の實と同じ色の紅い爪を、三線彈くやうに上下して居るのも此岸である。干瀬の大きな石を斫つて來て、茲に架けた宮良橋は、島の一つの名所である。四十年前に巡視に來た大和御主前が、

珊瑚疊み作す五橋村
鶴葉千株短くして苔に似たり
是れ神仙の下り遊ぶ處なる莫らんや
萬年の青嶂流に映じ來る

と詠んだ萬年青岳は、此五枚橋の川上に遠く、萬古の愁の色は今も尚神秘に包まれて居るが、ある一つの事件があつて以來、次第に島も今の世と爲つたと謂つて居る。それは最後の宮良のミヤラビが三人連で、夜深く石垣の村から戻つて來ると、之を戒告せんとして村の青年の群が、此橋の袂に待つて居た。それが怖ろしさに下流を徒渉しようとして、浪にさらはれて三人ながら溺れた。手を繋いだまゝ濱に死んで居たさうである。この悲壯な出來事が昔語となる頃には、島の[illegible]も淋しくなるだらう。花染手拭の色の褪せるやうに、詩人は老い歌は古くなつて行くだらう。併し此が爲に新しい力の日に豐かなるを恨むには及ばぬ。元來八重山の音樂には、世の始から悲調があつたのである。

二七　二色人

ナビントウは路の右手の海際に、僅かの木杜を負うた崖の岩屋である。毎年六月穂利祭の二日目の暮方に、赤又黒又の二神は此洞から出て、宮良の今の村の家を巡つてあるく。必ず月の無い夜頃を擇ぶことに爲つて居る。夜どほし村の中をあるいて、天明には又洞の奥に還つて行くと、次の日は村の男女が此に參詣する。佐事と稱する六人の幹問役が、杖を突いて其途に立つて居り、常々行ひの正しい者で無いと、何と言つても通ることを許さぬ。

宮良の人々は神の名を呼ぶことを憚つて、單にこれをニイルピトと謂つて居る。それを赤と黒と二色の人と云ふことであると謂ふが、ニイルは即ち常世の國のことだから、是も遠くより來る神の意であらう。此村の舊家の前盛某が、平日は此神の裝束を嚴重に預かつて居る。木を削つて作つた怖ろしい面で、赤は黒よりも猶一段と怖ろしいさうだ。茅や草の葉を身に覆うて、人が此面を被ると云ふことだが、自分は信徒に對する敬意から、強ひて拜見を求めなかつた。實際新宮良の住民は、祭の日には人が神と爲ることをよく知りつゝ、しかも人が神に扮するといふことは知らぬやうである。

此夕は家を清め香を燒いて、早くから神の來臨を待つて居る。二色人が前盛の家へ來て、謂ふ詞は一定して居るが、其他の家々では形式が色々ある。不幸の有つた者は慰める。無事の者は激勵する。さうして何れも次に來る年の、更にめでたく又豐かであることを、親切に且つ面白く、謂つて聞かせるのださうである。初春に吾々の門に來る春駒鳥追、其他種々の物吉ほぎ人と違ふ點は、單に家主が豫言者の前に跪いて、一句毎に丁寧に其受答へをするばかりでは無い。彼等は之を直接に神の御詞と信ずるが故に、如何な事が有つても村外の者に、其文句を知らしめぬ。是非とも之を聽かうとすると、うそを教へるさうである。

しかも彼等の間に於ては、最も精確なる傳承が有る。村の青年の強健にして品行正しい幾人かが、毎年新たに選ばれて祭の役を勤める爲に、其練習と準備をして居る。殊に赤又黒又は式の間一切酒食を口にせず、終夜踊り且つ歌ふ骨折の役であれば、兼ての精進も一通

りで無いが、それが又男として此上も無い面目と考へられて居る。老人などの此祭を大切に思ふことも、殆ど想像を越えて居る。ゆかしいなつかしいと云ふ人間の感情の全部を、氏神に集注すると謂つても可い。夜も早東雲に近くなり、愈々もとの洞に還らうとするのを見ては、又來年もおはしませと、落涙する者すらも尠くは無いさうである。

宮良の二神は新城の島から、此村の前濱に上陸なされたと云ふ昔語もある。併し此村は明和八年の大海嘯の後に、悉く小濱の島から移された民である。草分と呼ばるゝ前盛氏でも、第一世の仁屋が八十三歳で沒したのは、ほんの百年前の文政元年である。疑ひも無く故郷の島から持つて來た祭であつて、現に又其小濱にも新城にも、西表島の古見にも、此と同じ祭が今に行はれて居る。石垣島の方では川平と桴海の二村に、舊の八月又は九月の己亥の日、よく似た儀式があつて、之を「まやの神」と名け、マヤとトモマヤとの二神が出現する。マヤは方言に猫を意味する所から、普通は牡猫牝猫の面を被つて來ると謂ふが、舞にも詞にも猫らしい信仰は現れて居らぬ。阿檀の葉の蓑を著て、蒲葵で編んだ笠を深く被り、戸毎を巡つてやはり明年の祝言を述べる。其章句には農作の道を説くことが多く、沖繩本島のミセセリなどと共に、澤山の古い言語が、此中に保存せられて居るらしい。

吾々は無邪氣な童子等の口を假りて、せめては春の初には耳に快い祝福の言を聽かうとしたが、根本に於て既に縋るべきものを忘れた爲に、是も亦古臭い戯れごとと爲つてしまつて、正月は更に不安を新たにする。之に比べると絶海の小島は幸であつた。都鄙の區別を教へる講師も國司も居なかつた故に、永く神の御幸の昔の悦ばしさを味ふことが出來た。さうして其神は又果知らぬ海原から、天に續いた地平線の向うから、安々と其小舟を島の渚には漕寄せることを得たのである。

二八　龜恩を知る

南々と謂つて居る中に、もう引返すべき汽船が入つて來た。石垣の端舟は帆ばかりが力で、只淺い灣内を右左にまぎつて行く。其間に見送りに出てくれた岸の人は、一人づつ還つてしまひ、海を曇らしむる雲の影ばかり、次第に多くなつて來る。晴れて水底に日の光のさし込む朝ならば、蒼白い砂地の處々に、深緑の珊瑚岩が二尋ぐらゐ迄は覗かれるのだが、けふは一圓にたゞ淋しい灰色である。昔の大津浪の日の旱天には、稍強い地震があつて潮は遠く退き去り、五彩の光眩き此海底の祕密が、悉く白日の下に露れたと云ふことだが、今はそれも喚び起し難い夢のやうに感じられる。

本船に乘る迄に、もう天氣はすつかり惡く爲つて居た。此浪では今夜はとても出せませぬ、明日の又今頃まで斯うして繋つて居ますから、も一度此傳馬で上陸なされては如何と言つて來たが、大抵の客は舌打ちなどをするばかりで、或は傳言を賴んだり、刻煙草を取寄せたり、碁盤を借りたりして、還つて見ようとは言はなかつた。眼の前に毎日見て居ながら、終に渡つて見ることを得なかつた竹富の島は、砂濱以外に何物も無いかのやうに、寂寞として船の右手に横はつて居る。もう今夜は月も近い。それに濕つた風が甲板を吹いて、永く立つて別を惜むことも出來なかつた。

萬年青は千古の靈山であつて、今も尋常の旅人には、たゞ遙かに山の姿を仰ぐことを許して居る。しかもその裾野の南の一角が、殆ど全部の八重山文明の舞臺で、其尖端の最も低い臺

地に據つて、石垣四箇の邑落は在るのである。ケビンの窓の圓硝子越しに、折々首を擧げて覗いて見ると、船は搖ぐとも思はれないで、下瀬に續いた陸地の一文字が、譬へばアイヌの髭箸の如くに、上へ下へと動いて居る。此があの莫大な戀歌の國、利害と人情との無暗に錯綜した、泣いたり怒つたりの浮世なのか。何だあかい、りがたつた七つしか見えないぢやないか。僅かな者だけが餘分に利巧なばかりに、此島も常に苦勞をして居る。さうして不必要に早く老いて居る。

たゞ些しばかり世間を知つた不幸ほど、始末の惡いものは無い。もう此社會には新しい不思議が現れて、人の心の向き方を變へるやうな、機會はまあ無いものと私などは思つて居た。處が人間界にはまだ見盡されぬ隈があつたのである。自分等より二船ほどおくれて、前の富士屋旅館の女主が、八重山から引き揚げて來てこんな話をした。虛誕だと思ひなはるなら、思ひなはつても仕方がありませんが、私が船に乘りますと、大きな龜が三つで、送つて來てくれましたよ。

みんなが一所に見たのですから、今度誰にでも聞いて御覽なさい。役所の人達や女たちも、同じ傳馬で賑やかに送つて來てくれました。おいおかみ、僕等こそ斯うやつて見送りをするが、あれ程助けて置いた龜はどうだい。どうぞ御無事でとも何とも言つて來ないぢや無いか。だから龜を助けるなんか詰らぬ事なんだと、言つたか言はぬかに舳先の方に乘つて居た誰かが、あつ龜が出たと大きな聲で申しました。私が見たときにはもう二番目のが、斯うやつて手を動かして船のすぐ脇を通りました。それから又一つ今度は少し小さいのが、背中を出す位にして蒸汽に乘る時まで附いて來ましたといふ話である。

是には蒼くなつて驚かぬ者は無かつたさうである。ちやうど自分が淋しく別れて來たあの海だ。常は海龜などの入つて遊ぶ場所でも無い。卵を産む季節だけは、この近くの濱にも上つて來て捕られるのを、土地の漁師は料理して肉を賣つて居た。其を助けて放すやうに爲つてから、何時でも糸滿が先づ富士屋へ擔いで來た。門から中へ擔ぎ込んだからは、値が高からうが安からうが、買はずに返したことは無かつたさうだ。其爲に三年あまり、一枚だつても新しい衣類は、こしらへたことがありませんと謂つて居る。

何でうそだと思ふものかおかみさん。おかみさんは寒國の生れだから知るまいが、日本の大海にもそんな龜が昔は居たのだ。浦島でも山蔭の中納言でも、氣を長くして居た爲に、ずつと立派な答禮を受けて居る。おかみさんが女の癖に鐵砲をかついで、島で鳥打などをしてあるきながら、龜だけは性の有るものと思つて助けたくなつたのも、又内地の町の年寄たちが、小さな石龜でも放さうかと思ふのも、誰も知らない不思議の遺傳が有るからで、其が又暖かな南の海で無ければ、最初から經驗することの出來なかつたことなのだ。我々がとうの昔に忘れてしまつたことを、八重山の人たちは今ちやうど忘れようとして居るのだ。

二九　南波照間

西常央翁から聽いたと、南島探險記には書いてある。波照間の島は即ちハテウルマで、うるまの島々の南の果の、意味であらうと云ふことだ。なるほど氣を附けて見ると、八重山郡の東の海には多良間があり、宮古群島には來間島あり、沖繩の西南に近く慶良間があり、更に大島に續いて作計呂麻の島がある。南北三つのエ

ラブ島も其轉訛かもしれぬ。語尾のよく似た島の名が、此ほど迄多いのは偶然ではあるまい。或は曾て島をウルマと呼ぶ人民が、爰にもやまとの海邊にも多く榮えて居て、自然に都の歌や物語にも、「ウルマの島の人なれや」などと、口ずさまれるやうに爲つたのでは無いか。さうで無くても昔なつかしい言葉である。

波照間島は石垣から西南、猶十一里餘の海上に孤立して居る。此から先は只茫々たる太平洋で、强ひて鄰と謂へば臺灣が有るばかりだが、しかも茲へ來れば更に又、ハエハトローの島を談ずるさうである。ハエは南のことで、我々が南風をハエと呼ぶに同じく、パトローは卽ち波照間の今の土音である。この波照間の南の沖に今一つ、稅吏の未だ知つて居らぬ極樂の島が、浪に隱れてあるものと、かの島の人は信じて居た。

昔百姓の年貢が堪へ難く重かつた時、此島の屋久のヤクアカマリと云ふ者、之を濟はんと思ひ立つて、遍く洋中を漕ぎ求めて終に其島を見出し、我島に因んで之を南波照間と名けたと傳へて居る。徐福が大帝の命を承けたのとは事かはり、此は深夜に數十人の老幼男女を船に乘せて、竊かにその漂渺の邦に移住してしまつた。其折に只一人の女が、家に鍋を忘れて取りに戻つて居る間に、夜が明けかゝつたので其船は出去つた。鍋掻と云ふ地は其故跡と云ふことに爲つて居る。取殘されて歎き悶え足摺し、濱の眞砂を鍋で掻き散らした處と謂ふのである。

新たな島を求めんとする心は、人の世中が住みうくなる更に以前から、久しく島人の間には傳はつて居たものだらう。さうで無ければ太古の時から、既に此世は住みうい處であつたのか。兎に角にどの海のどの小島にも、人が渡つて今はもう住んで居る。島は盡きても求める心は絕えなかつた。獨りこの波照間のみでは無い。沖繩でも南に大海を望む具志頭村の銀河原に、俊寬僧都同系の悲慘な話が有つて、磨小塘の遺跡は亦南の果ての島の鍋掻と對して居る。

昔此里に住む夫婦の者、家計の不如意を愁ひて居る折柄、一人ある僕、釣に出でて颶風に遭ひ、珍しい島に上つて數月を過した後、或日南の風に乘じて還つて來た。こんな結構な島があります、御伴をして參りませうと、五穀の種や色々の道具と共に、既に女房をも乘せ了つてから、僞つて主人に向つて、石臼を持つて來てくれよと賴んだ。主人は急ぎ戻つて臼を持つて出て見ると、もう其小舟は沖中に漕ぎ出して居て、追附くことも出來なかつた。女房は涙の聲を張揚げ、惡い僕に騙されて、私ばかり斷うして連れて行かれます。聞けばあの島には大きな蘆が茂つてゐるさうな。其蘆の莖を採つて本を切り末を切り、海に流したのが此濱に流れ著くならば、私はまだ生きて居ると思つて下さい。其が來ぬやうに爲つたら、死んだと思つて下さいと、泣いて約束をして汐路遠く往つてしまつた。亭主は只ぼんやりとして臼を此水中に投込み、還つて來たと云ふのはしやうも無い話だ。

併し此話は又一方に、今昔物語の土佐の妹兄島の話にも似た所がある。船で田植に行く幡多郡の海岸の農夫、苗と兄妹の子供とを船に乘せ、一寸家に戻つて居るうちに風が吹いて、船は沖に出てしまつた。二人ばかり其島に漂著して、せん方も無く其苗を植ゑて、後に同胞で夫婦に爲つたと謂ふのである。臺灣の生蕃には殆ど各蕃社每に、之に似た兄妹漂流の事件を以て、部落の始とする口碑がある。神の怒りの大水で、臼に乘つて居た二人の外は皆死んだ。其臼の隅に挾まつて居た穀物の種を播いて、新たに次の世の親と爲つたと傳へて居るの

である。

波照間島の人類の始も、やはり亦災後の兄妹で、神の恵に依つて子孫を儲けたと傳へられる。但し爰では大水の代りに火の雨が降り、臼の代りに白金の鍋を以て、身を覆うて免れたと語つて居る。臼も鍋も要するに皆、ノアの箱舟に他ならぬ。時の大海原を如何なる風に乗つて、その箱舟の物語が、廣く遠く西東には吹分れたのであらうか。今ではもう具志頭の濱に、蘆の莖も流れて來ず、有名な與那國の大草鞋も、誰が何の爲に流したかが不明に爲つた。併し此等の物語は、決して其全部が夢では無い。石垣島では波照間島のヤクアマカリに該當する英傑を、本宮良と謂つて今も深く慕つて居る。即ち慶長の南蠻船漂著の頃に、切支丹の故を以て刑せられたと云ふ名士である。本宮良が自在に海上を去來して、さき〳〵で妻を持つて居たと云ふ、其島々の名は何人も知らぬが、彼が携へ還つた葉の紫な南蠻萬年青だけは、今も尚此島人の庭や石垣に、日に照つて美しく榮えて居る。

與那國の女たち

一

石垣島では與那國のことを、ユノーンと呼んで居る。かの島の人々自らはヅナーンと謂ふさうである。同じ八重山郡の内ながら、石垣からは何れの岡に登つても、與那國の島の姿を見ることが出來ぬ。西表の高い島山が、中を隔てて居るからである。さうして海上が五十幾里、冬は殊に浪が荒いと云ふが、それでも折々はあちらの船が、前觸れも無しに鳥などのやうにやつて來る。それに又便船すべく行く人や還る人が、もう來さうなものだと謂つて待つて居る。

自分が石垣島に上陸した日の午後にも、ちやうど一艘の朝來た船が還るので、旅館の主人の石本氏は、急に支度をして乘つて往つた。此人は數年前に上方から來て、島々の間で商賣をして居る。留守を預かる帳場の男は鹿兒島の者、其外に那覇から來た少年と、臺灣の打狗で生れてまだ内地を知らぬやまとの娘とが働いて居る。それだけでも既に珍しい取合せであるのに、若い美しいおかみさん、即ち土地で刀自と稱する婦人は、與那國の生れであつた。刀自の名はクヤマ、髪かたちは島風であるが、「いらつしやる」と精確に使ひ得るほどに、内地の語には通じて居る。

二

この若いクヤマを訪ねて、一人二人の與那國の女性が、夜分などに來ては物靜かに話をして居る。今朝の船で著いたと云ふ者も居たが、自分たちとは違つて少しも旅人らしい樣子は無く、まるで鄰家の人のやうに落著いて居る。

二十七八の小柄の、子供のやうな口元をした女は、この石垣村の小實業家の某と云ふ人の、與那國の刀自であつた。某君が病氣になつて、とんとあの島へも往かれぬやうになつてから、一年に二度か三度、斯うして向うから渡つて來ては　ゆつくりと遊んで還る。年は若いが手に入墨をちやんとして居る。北の方の島々の黥とは又形式が變つて居るらしいので、よく見て置かうと思つて眼を著けると、之をすぐに覺つて頻りと左右の手を揉み合せ、私などは昔者だから、ヤマトウシュメーにはをかしいだらうと、傍の人を向いて言つて居る。それでも根氣よく頼んで居るうちに、かなり高い聲を揚げてションガネ節を歌つてくれた。さうして其歌の文句に表れた島の情合ひを、説明して聞かせようと力めてくれた。

今一人、どうしても歌つてきかせようとせぬ婦人が居た。年は又七八つも上であらうのに、此方は手に入墨をしては居なかつた。行政廳が針突の風習を制止したのが、明治三十一二年の事と謂ふから、此年齡の女ならば、して居らぬ方が當りまへである。それに家柄なども稍良い方であるらしかつた。與那國では苗字よりも屋號の方が、普通に行はれて居ることは沖繩の農村と同樣で、家毎に尙一種の記號のやうな繪をもつて居る。それを集めた帳面を、自分が取出して見せると、皆で寄つて來て其中から、是が此人の家の符牒だ、これは其本家で、他所から來る人のよく泊めてもらふ家だなどと、一つ殘らずに知つて居た。此婦人は只一人ある男の子を、那覇の中學校に入れる爲に、試

驗を受けさせに石垣へ來たのであつた。首尾よく試驗が通れば沖繩まで自分が附いて行く。與那國の島ではこれで三人目とかであると謂ふ。父親族には醫者の免狀を取つて、島に還つて開業をして居る者もある。其人の刀自は香川縣の生れであるとも謂つた。さすれば所謂女護の島にも、既にやまとの女性が來て住んで居るのである。他の島々と特に變つたことは無いのである。

三

首里や那覇でも內地と一樣に、與那國に就ては徒らに奇拔な評判ばかり高いが、自分の聽いて見た所では、實は爰も新しい日本國の一島で、弱い者が餘分の苦みをすると云ふ以外に、何も特殊の社會組織が有るわけでは無いやうだ。唯やまとなどに比べると今一般と、歷史が新しくて昔が近い爲に、まだゴンボウを大切にする風が、少し殘つて居ると云ふばかりである。ゴンボウとは何であるか、はつきりとした意味は、自分にも說明し難いが、少なくとも與那國の島では、島人を父とせずに生れた子を、さう呼んで居るのである。那覇の色町などでは、只の浮氣と云ふ意味に此語を用ゐて居るらしいが、多分はもと假初の妻と云ふやうな心持であつたのが、轉じてはさうして生れた兒の名にもなつたのであらう。

與那國には限らず、近い昔までは琉球の島々では、在番役人の子を產めば、平民が士族に爲つた。さうして士族には經濟上の特權があつた。それ故に最初から、或時限りの刀自なることを承知の上で、滯在の人にかしづくことを厭はなかつたのである。今はもう其樣な誘因が、勿論何も無いのであるが、生活は至つて簡易なり、女は如何なる境遇に在つても働きさへすれば生きられる故に、やはり安心して色々の子を育てるのである。わざ／＼ゴンボウを產ませる爲に、此島に渡つて來る人は有る筈が無いのだが、海が荒れたり用事が片附かなかつたり、今も昔の如く圖らざる永逗留をするうちに、自然は此の如き大きな仕事をしてしまふのである。島の現在の有力者は、何だか大部分はゴンボウの子孫であるやうに、自分に話した人もあつた。そんな理由は無からうと思ふが、兎に角に外部から、何の攪亂をも受けなかつた家の血が、平和なれども又平凡に流れ易い傾きはあつたかも知れぬ。それだけは殆ど何れの離れ島でも、免れ難い通弊であつて、たゞ島が小さいほど其結果が早く見えるのかも知れぬ。

現在此島で指折りの物持の中に、一人の婦人が有る。噂によればずつと以前の、駐在巡查の刀自であつた。別離に臨んで幾人かの子供と共に、若干の金子を其母の手に遺して來た。其高は何れ莫大では無かつたに相違無いが、島には現金の入用が無暗に多く、しかも人は皆義理が固い爲に、少しの危險も無しに其元金が次第に成長した。目前に斯う云ふ生活の例があるに由つて、旅の人をゆかしがる氣風が今に止まぬのであると云ふ。ところがをかしいことには、此噂を自分にして聽かせた男も、第二の噂に依れば此島に七歲ばかりの落胤があつて、やはり若干の金を其母に殘して、間も無く遠方へ去つてしまつたと云ふことであつた。

四

沖繩の文人の先島情調を說く者は、必ず其例としてウヤンマーの一曲を擧げるが、八重山は歌の國だと云ふ世評を悅ぶ島の人にも、之を以て彼等の音樂を代表せしめることだけは絕對に承認しない。ウヤンマーのアンマーは阿母加奈之などの阿母と同じく、地位ある婦人のこと、ウヤは親方親雲上などの親と同じく、つ

まりは令夫人とも譯すべき沖繩の語であつて、チエムバレンが琉球語研究の附錄には其全譯を載せて、此語をマイレデイと譯して居る。任期三年の八重山在番が、船出に臨んで假の妹脊の永い別を悲み、頑是無い穉兒に取縋られて涙の袖をしぼると云ふ、至つて單純な趣向であるが、歌の章句には南國のペソスが存る。しかも八重山人の言に從へば、第一ウヤンマーは此島の語では無い。石垣でならばカリヤヌアンマと謂はねばならぬ。假屋は卽ち在番の官舍のことである。第二には、このチヨーギン（狂言）の中の歌がまがひ物で、中にたゞ二つの本の歌も、元來石垣首邑の藏元の歌で無く、何れも與那國のションガネ節であり、その與那國には沖繩の官吏は在勤しなかつたから、乃ち別人の爲に發した愛慕の聲であつたのを、史實に反して此文學は横取りしたのである。

いとま乞ひともて（思ひて）
持ちゆる盃や
目なだ（涙）泡もらち
飲みのならぬ

是がその問題の歌の一つである。更に今一つの歌は、

片帆持たしば
片目のなだ（涙）落し
もろ帆持たしば
もろ目のなだ落し

と云ふのであるが、自分も現に與那國の女が、之を歌ふのを聽いたのだから、證人に立たざるを得ない。しかも此の如き剽竊は寧ろ孤島の面目であつて、淋しい島の女の無始の昔からの哀愁が、弘く世上の歌を好む人々をして、胸躍り袂沾はしめたのは嬉しいことだと思ふ。殊にはこの日本の果の果の島まで、曾て大いに都市ではやり、北は奧州の「さんさ時雨」の曲となつて傳はつた「しよんがえ」の歌の節が、一度は爰まで運ばれて更に又、沖繩の湊町に戾つて來たことをなつかしく感ずる。薩摩の海門に於ても、久しく土地の名物として同じ鄙ぶりがもてはやされ、「雲の帶してなよ〱と」云ふ歌は、多くの人が聽いて知つて居る。沖繩近海の船歌にも今もチヨンガエと云ふ囃子がある。海の荒し子どもはいつの世にか、遙々と之を携へて與那國を訪ひ、今歌ふ少女の曾祖母あたりを、慰め又悲しましめて居たのである。

五

所謂假屋のアンマの生活は、昔は殆ど島毎にあつたものらしい。島の平民の娘にして、眉目淸らに生れた者は、必ず何人かが勸めて化粧させ、新しい衣を著せて、目に立つ場處で布を織りつゝ、新任の官吏に見えしめた。狂言のウヤンマーの如く男の兒を儲けて、幸福な士族の家の先祖と爲つた者もあれば、不幸にして老人にかしづき、後に淋しく別れてしまふ者もあつたさうだ。與那國などの遠い島では、與人と目差と二人の役人が、藏元卽ち首邑の石垣島からやつて來て、やはり沖繩と同じ方法で、其在任期間の刀自を選定した。從つて島の女の別離の歌曲には、彼等の眞情から出たものもあれば、又音樂を愛する青年官吏から、强ひて此の如く歌はしめられたものもあるだらう。其人々は男も女も皆死に去つて、今では歌だけが前の歷史を語つて居る。强い者が曾て勝つたと云ふ、さびしい歷史を語つて居る。

與那國では平家の一族の末と云ふ部落があつて、今尙在來の島人の子孫たちと對立し、平和の競爭を續けて居ると言つた人があるが、果してさうであらうか。平家は北に四百里を隔てた南九州の山村から、島では川邊郡の十島を始として、どこへも上陸して遺蹟を留めて居る。モリは社地又は靈山を意味する普通名詞

であるが、之を祭る島では悉く、行の盛友の盛などの遺物を存し、更に系圖が出來、後裔が榮えて居て、此系圖を否認すれば恐らくは決闘を申込まれる。海は一續きであるから壇の浦の船の數だけは、落人の漂著した例も有り得るのであるが、實は其後の六七百年も、彼等をして優美なる由緒を保存せしめる程に、島の生活は無事單調では無かつた。

たとへば石垣島に在つては、赤蜂本瓦が非底の棟梁であつた爲に、宮古の仲宗根豐見親は、沖繩の船軍を嚮導して此島に攻入り、各村の舊住民を制御して之を只の百姓にしてしまつた。卽ち石垣のユカルピト(優越階級)は、少なくとも其血の三分の二まで宮古系になつたのである。之に反して與那國の島では、宮古出身と傳ふる酋長の鬼虎が、あまりに暴虐を振舞つた爲に、終に石垣からの遠征を受けて、忽ち全村の屈服となつてしまつた。其以前にも西表島の祖納堂と云ふ一勇士が、單に此島を發見したと云ふ理由のみで、攻めて來て占領した事實がある。慶田城の村に今もある祖納堂の家の火神は、それから以後與那國の船人等が、來ては拜んで行くことになつて居るのは、恐らくは此家の支系が、永く與那國の島に土著したこと、恰も宮古の勇士の末が、八重山の士族になつたのと、同じであることを意味するのであらう。

石垣の村にも亦與那國のオーン(御嶽)と稱して、かの島の島人だけが詣でては香を焼く靈地が、濱近くの人家の間に在つて、村では却つて之を顧みる者も無いのは、向うへ移つて後に本家が絶えて、子孫があちらにばかり有る爲であらう。近くは明和の大海嘯、それに引續いての疫病流行で、石垣本島の人口は一時四分の一に減少した。其時は命令を以て附近の島々から、無理に若干の民を此方へ移住せしめ、南に面した海岸の村々は、殆ど皆昔を知らぬ者ばかりが、廢墟の土を耕して居るのである。此以外にも次第に死に絶えたり、强ひて連れて行かれたり、人が乏しい爲に不自然なる婚姻もあれば、家の盛衰も亦異常であつた。斯うした永い年月の交通往來を重ねて居るうちに、人の血は愈〻混淆して、恨んだ者も恨まれた者も、たゞ忘却の一體となつてしまつたことは、恰もこの漫々たる大海の波濤の如く、永古に殘るものとては、獨り底知れぬ潮の力のみであつた。

與那國の女たちは、ほんの無邪氣な心持で、島の話をしたのであつたが、靜かに聽いて居ると幾らでも悲しくなる。生きると云ふことは全く大事業だ。あらゆる物が此爲には犧牲に供せられる。しかも人には美しく生きようとする願が常に在る。苦惱せざるを得ないでは無いか。

六

なか〳〵樂では無い島の生活だそうである。水は幸ひにして淸い谷川が流れ、宮古のやうに降川を登り降る煩ひは無いが、如何にも風の强い島であつて、稻の實にならぬ年が何年も續くことがある。阿檀の芽だけは石垣でも食べると謂ふが、與那國では蒲葵の木の芽も食べておいしいと謂ふ。蒲葵の實も此島では食べる。海からも少しづゝ食物を惠まれるが、たゞ困ることは金に代へるやうな生產品が少ないのに、外から買はねばならぬ貨物が、時世と共に增して來ることである。豚でも鷄でも世間の相場を知らぬ爲に、折角繁殖させてから、まるで目算の違つた取引をするやうなことが折々ある。斯う云ふ境涯に於て、女などが外へ出て住みたがるのは無理で無い。殊に此島の婦人には强い所がある。甲乙の組合を分けて競爭させると、道造りなどには篝を焼いて徹夜に働くこともあ

る。運動會の催される日には、旗を立てて男たちを迎へに來る。役場にもめ事でもあつて、村の男の押掛けて來るときには、垣根の外は此に聲援する婦人で、一杯になるくらゐであると謂ふ。もつと南の大洋の島々の、女の地位風習などと考へ合せると、どうして又此樣な、きつい氣性が根ざしたものか。はた又此が將來にどう云ふ運命を開いて行くものか。自分などにはとても判斷をすることが六かしい。

此島の風俗の中には、他の沖繩の諸島を中に置いて、始めて葦原の中つ國と、根原が一つであることを知るもの多いやうに思ふ。例へば門の口に文字の無い石敢當を建てる風、式日や葬祭の日に豬を屠る風などは、何れも大琉球の文化を透して見ないと、見馴れぬ我々にはあまりに異樣に感ぜられる。言語に於ても亦其通りで、不意に行逢うては本の由緣を心附かぬ程に、我々の常の話とはかはつて居る。是皆久しい間、島と島とが母の交通を、杜絶して居た結果である。我々は曾て大昔に小船に乘つて、この亞細亞の東端の海島に、入込んだ者なることを知るのみで、北から次第に南の方へ下つたか、はた又反對に南から北へ、歸る燕の路を逐うて來たものか、今尚民族の持ち傳へた生活樣式から、も一つ以前の居住地を推測する學問が進まぬ爲に、如何なる臆斷でも成立ち得るやうであるが、少なくとも此等の沖の小島の生活を觀ると、それは寧ろ物の始の形に近く、世の終の姿とはどうしても思はれぬ。即ち大小數百の日本島の住民が、最初は一家一部落であつたとする場合に、與那國人の今日の風習が、小島に窄んだから斯うなつたと見るよりも、やまとの我々が大きな島に渡つた結果、今日の狀態にまで發展したと見る方が、遙かに理由を說明しやすいやうに思はれる。北で溢れて押出されたとするには、平家の落人でも無い限りは、こんな海の果までは來さうにも無いが、南の島に先づ上陸したとすれば、永くは居られぬからどうかして出て來たであらう。さうして取殘された前の島の人を、必ずしも屢々想ひ出すことは無かつたかも知れぬ。假に此推測が當つて居たとすれば、我々は誠に偶然の機會に由つて、遠い昔の世の人の苦悶を、僅かながらも此あたりの島から、見出し得たことになるのである。

先島各地ではつい近い頃まで、何か仔細が有つてか沖繩本島のことを、惡鬼納の三字を以て書現して居た。士族に取つてはその惡鬼納への渡海が、戰陣にも相當する苦しい役であつた。王命とあれば唐へも大和へも行き向うたが、三つに一つは其船が還らなかつた。たま〳〵漂流して生きて戻つた者に、怖ろしい異國の島の話があつた。與那國の人たちはもう忘れたかと思ふが、毎年一度一丈二丈の大草鞋を作つて、海に流して外敵を畏嚇したと謂ひ、或は之と反對にそんな物が、何處からとも無く流れて來たとも傳へられる。斯うして五里三里の小さな孤島に閉ぢ籠り、限りある平和を樂しんだ時も永かつた。荒海は誠に堅固なる障壁であつて、之を守つて居れば外界の幸福と比較して、徒らに變へ憤るべき場合も起らぬ筈であつたが、悲しいかな不老不死の藥は、島の內では求め得られなかつた。徐福の船は又新たに、出でて蓬萊の島を求めねばならぬやうになつた。空しく待つ者と終に還らぬ者とに、島の民は再び二分せられんとして居る。

七

民族去來の悠久の足跡は、とてももう分らぬ問題として置いて、自分は尙石垣の港の町を、五十里を隔てた與那國を知らうとしてあるいて見た。庭に佛桑花の紅く咲く家に、まだ一人の

與那國の女が居た。其名をナサーと謂つて不幸なゴンボウの孤兒であつた。五つの年から母の島へは還つたことが無い。成長の後にある男に連れられて、與那國に住むつもりで渡つて往つたが、刑事事件が起つて又其船で男は引戻され、自分も終に獨り止まつて居ることが出來ぬので、石垣まで歸つて元のしどけ無い生存を繰返して居る。よく歌ひよく飲む妙な女だと云ふことを、幾度か土地の人から聞いただけで、自分は其以上の事を知る機會を得なかつた。

又一人の亞米利加へ往つて來た女がある。マクダ部落の貧しい家の外に、高く細い木の臼で、漆喰にする土をこつ〳〵と搗いて居た。あれがヴ ンクーバーと謂ふ女です、與那國の者です、一つ此方を向かせて見ませうかと言つて、親切な案内者がホーイと甲高い聲で喚んでくれた、早くから知つて居たか、振向きもせねば頰の肉も動かさなかつた。物ごしはすらりと上品な女であつたが、如何にも氣の毒な惡いきものを著て居る。歸つて來た當座には靴もあり帽子もあり、仕事著と云ふ洋服も持つて居たが、二三年の内に追々破れてしまつたさうである。是は亭主に棄てられて戻つて來たと云ふばかりで、最初からよく無い經歴の女では無かつた。それに年も若くて美しかつた。親類の者がたび〳〵與那國へ還るやうにと來ては勸めるが、何としても之に從はぬのは意地であらう。今ではこの石垣島の生活にも倦んで居る。こんな位ならば何をしてなりとも、カナダに殘つて居たものをと、折々は歎息するさうである。さうして是が後にはどうなつてしまふものか。やはり今までの多くの島の婦人の如く、早くしやうも無く老いてしまふのでは無からうか。子を持たぬと云ふ不幸は、島に於ては殊に堪へ難いもののやうに思はれた。

南の島の清水

むかし手にくだろ、なさきから出ぢて、なまに流れゆろ、ちゆ田の手水　（金武節）
昔手に汲だす、いつの代がやたら、水やなまでむ、澄みてをすが　（同上）

一

沖繩では組踊の「手水の緣」が、めつたに興行を許されぬやうになつても、晴れて日の照る日に許田の入江の村を通る者は、一人として昔其泉の側に於て、清水を手に掬して若き旅人に飲ましめたと云ふ美しい少女を、想ひ出さぬものは無いであらう。際限も無く古い親々の代から、一つ物語がしば〳〵其形を變じて常に清新に、幽艷の調は流れて永く絶えざること、恰も此里の泉の水のやうであつたのは、是にも亦二つの源頭が有るからである。其一つは卽ち清水を戀慕ふ島人の心もち、其二はどこ迄も泉に纏綿した、村の女性の生活に他ならぬ。自分は前にも諸國の姥が井の由來について、少しく此間の消息を說かうと試みたことがあつたが、今度は又南の島を旅行して、もう一ぺん誰かと此話がして見たくなつた。併し問題は込入つて居り、私は中々忙しい。うまく簡單に說くことが出來ればよいがと思ふ。

二

平和の綠の色に一様に取包まれた沖繩の村々も、水の一點だけには著しい幸不幸がある。概して言へば新しい村ほど、飲水の不自由を辛抱せねばならなんだやうである。那覇なども隨分古い湊であるが、當初今日ほどの繁榮を豫期しなかつた爲に、近く良い井戸の在る家は誠に少なく、他の多くは入江の對岸のウチンダ（落平）の泉から、遙々と汲んで來て用ゐて居る。町を貫く堀川に潮が滿ちて、翡翠の往來が次第に稀になる頃、ぎいと梶の音をさせて入つて來るのは、すべて水賣の船である。酒屋の庫にあるやうな大桶に幾つも汲入れて、家々に水を配つてまはるのである。又漆喰をよくした町屋の赤瓦は、その第二の目的として是で雨水を受留める。其末をタンクに貯へて、お茶の水にまで使つて居る家がある。

郊外に出て見ると庭の木に斜に繩を張つて、壺に僅かの雨の雫を集めようとした家もある。瓦葺きの多く無かつた時代には、是が最も普通の方法であつたらしい。八重山の石垣島などでも私の見たのは、福木の幹に一枚の棕櫚の葉を結びつけ、一尺ほど切殘した葉柄の端から、樹下の小瓶へ雨水の滴るやうにしてあつた。先島は一帶に水が十分で無くて、島布なども多くは海の水を以て晒して居るのである。

三

井戸をカハと謂ふのは、必ずしも沖繩の諸島だけでは無い。九州でも弘く之をヰカハと呼んで居て、飲水の供給が最初は皆天然の流からであつたことと、其流を堰き留めて水を一處に止住せしめたのが、卽ちヰと云ふ語の起原なることを示して居る。やまとの島で普通に見る掘り井戸を、宮古でも八重山でもツリカーと稱へて居る。釣瓶を以て水を釣る井戸の意味で、その釣瓶は蒲葵の葉を以て、巧みに鸚鵡貝のやうな形に縫うてある。大事に使へば一つが十日餘りも持つと謂ふ。此頃は葉鐵で作つた同じ形の釣瓶も出來たが、元の蒲葵で製したものは輕過ぎて、使ひ馴れぬ者にはとても水が揚らぬ。其

ばかりか深い釣井でも、水は幾らも無くて折々は新たに湧くのを待たねばならぬことがある。斯う云ふ井戸へ村中から、汲みに通ふ者は他の多くの民族と同じく、悉く村の女たちであつた。ツリカーに比べるとウリカーの方が更に苦しい。ウリカーは即ち降りて汲む井戸のことで、宮古の平良などには此ばかりしか無いやうである。それも舊記には十何箇處と記したものが、中にはもう丸で出なくなつたのもあれば、洗濯にしか用ゐられぬ濁り水もある。ほんの人家の片脇などに、追々に掘り窪めて九丈十丈と斜に降りて行く險しい石坂を、石の稜が滑かになるまで、毎日上下して僅かの水を頭に載せて來る。それが昔から皆女であつた。中世島と島との怖ろしい戰の時、八重山の島から捕はれて來て、深く危いスサカガー(白明井)の水を汲みに、日毎に追ひ遣られた美しい娘が、身の薄運を歎き親の家を慕うた古歌が、今も尙宮古の島には傳はつて居て、其清水は既に涸れたと「古琉球」の中にも書いてある。

四

或は斯うした水までも足りなくて、遙々船に乘つて貰ひに來る島もある。沖繩本島では國頭の古宇利の島、先島では多良間の北沖に在る水納の島などが、最も水に乏しい土地として知られて居るが、大きい島でも村によつては、旱の苦みを惱みぬく者が稀で無い。その色々の例を見た後に、島尻地方などの岡の根方に、珊瑚岩層の割れ目から、澄み徹つた清水が滾々として、湧き且つ流れて居るのを見ると、實際誰でも神の恩惠を考へずには居られない。中世の南山王國の廢墟は、今は神社と公園と小學校とに爲つて居る。其石崖の東北隅に立つて見下すと、屋古の古村の共同井がよく見える。大木の陰に石を疊み、泉の口では水を汲み、其側では器を洗ひ、其下では衣を滌ぎ、其末では馬を冷し、數十人の娘たちが面白さうに一所に働いて居る。カンヂャヤーと名けて旅の鑄物師が來ては仕事をする小屋なども、瓦で葺いて流の傍に建つて居り、尙下流に行くと川に橋があり、水車も此水に由つて廻轉し、數町步の稻田も此から灌漑せられて居る。凡そ一村の生活は皆此泉を中心とするかの如く、結局水汲み場の唯一箇所であるのも、寧ろ部內の親睦を增すの途であるやうに思はれた。

琉球國舊記其他の古い書物に、由來を傳へられた嘉手志川は、即ち此清水のことである。屋古は名を改めて今は大里と呼んで居る。古くは南山城の西の麓、即ち糸滿の港から登つて來る大手の口に在つたのが、此泉を慕うて次第に丘の北側に移つて來た。嘉手志は沖繩語で、人の集まつて來ることを意味すると謂ふが、果してさうであらうか。土地の一說では、古くは又カタリガーとも稱へた。即ち傳說の存する泉と謂ふことである。昔大旱の歲に人々船を仕立て、水を他處の岸に覓めんとして居る處へ、一匹の狗が全身濡れそぼたれてやつて來た。不思議に思つて暫く船出を見合せ、其狗を先に立てて林の奧深く入つて見ると、果せるかな此の如き立派な清水が湧いて居た。さうして狗は水中に入つて忽ちに石と化し、其石は今尙泉の上に安置せられて、鄕人の尊敬を受けて居る。古來の口碑は此の如くであるが、別に他村の靈泉にも同じ類の話がある上に、東方諸民族の間に於ては、是は寧ろ有りふれたる物語であつた。現に臺灣山地に住む幼稚なる部落の間にも、狗に導かれて清水を見出したと云ふ舊傳が、幾らとも無く存在するから、恐らくは此島に在つても亦、話の方が泉よりも尙一層古かつたのである。

屋古の語り井の歷史は、更に又南山王國の盛

衰とも深い關係があつた。最後の城の主島尻大里按司は智慮の短い人であつた。佐敷小按司尚巴志が祕藏する名劍を所望の餘りに、此泉を與へて之に交易したと謂ふことである。尚巴志は泉の水を自由にし得るに及んで、自分に懷く者の田にばかり、之を引くことを許した故に、終には南山城下の民は未だ戰はざる前から、既に敵の佐敷小按司に、歸服してしまつて居たと傳へられる。勿論是も亦物語ではあらうが、兎に角に泉の德は神の德であつて、兼て又王の德であつたことが、島に來て見ると大方は想像し得られるのである。

五

所謂白鳥處女の傳説は、曾て高木敏雄君に由つて、其起原と分布とを説かれたことがある。神が人間界に配偶を求めたまふこと、鳥の形をして此世と往來したまふことは、至つて弘く且つ久しい傳承であるが、其が進んで三穗の松原や、近江の余吾湖の様式を取るに至つたのには、又其地方に相應した何ぞの事情が有つた筈である。さうして沖繩の島では泉の神の信仰が、明白に物語の一要素を爲して居たことを認めざるを得ない。それにつけても玉城朝薫の銘苅子の一曲が、あまりに謠曲の羽衣に近いのは不本意である。沖繩の天女譚には、たしかに此島の地方色が有つたのを、かの才子は輕々に看過してしまつた。

銘苅子は那覇より程近い西海岸、安謝の村の農夫であつた。遺老傳の一説に今の天久の聖現寺の神なる熊野權現と辨才天とを、顯し祀り奉つたと傳ふと銘苅翁子と、恐らくは同じ人の事である。安謝の村では銘苅子の祠堂と謂ふものが、今も尚拜所の一つになつて居り、其由來談には謠曲の羽衣などには見られない、長い髮の毛の話が組入れられてある。銘苅子は或日田より歸りがけに、泉に臨んで手足を洗はうとすると、七八尺もある女の髮の毛が一すぢ、水の上に浮かんで居る。不思議に思つて折々其泉近くに身を潜めて窺ふうちに、終に嬋娟たる神女が衣服を樹の枝に脱ぎ掛けて、水に下つて頭髮を洗ふところを見附けた。仍て其衣を取隱し、捜してやると僞つて家に伴ひ還り且つ之を娶つた。後に一女二男を產ましむとある。其女の兒が稍成長して、弟の子守をするときに、泣くな、泣かぬなら、遣らうよ母の飛衣をと歌つた。六股の倉に、稻束の下に、置き古してあるからと歌つた。母の神女は之を聽き、夫の留守を待つて其衣を捜し出し、恩愛の絆を絶ち切つて、忽ち天界に飛び還つたと傳へて居る。

六

球陽には右の古傳を錄して、某の王妃は實に此神女の胤なりと謂つて居る。しかものんきな書物も有つたもので、殆ど全く此と同樣の物語を、更に尚二つまで同じ本の中に載せて居るのである。第三王朝の第一世に察度王と云ふ人は、微賤から身を起した浦添の按司であつたが、其家にも飛衣を隱されて凡夫の妻と爲つた天女の話がある。やはり泉の側で捉へられたことになつて居り、子供の歌から衣の所在を知つたのも亦同じである。

第三の話も多くの點に於て此と似て居るが、場處は鄰村の西原間切、我謝の烏帽子井と云ふ泉であり、農夫も小波津仁也と云ふ別の家の先祖であつた。この天女のみは天へ還る時に、二人の兒をつれて往つてしまつたと傳へられ、一つ話の一つ天女の事とは認めにくく爲つて居る。しかも此井は永く靈泉であつて、元祿三年以後にも三年に一度づつ、中山王國の齋宮女王たる聞得大君が、親しく到り拜したまふほどの崇敬であつた。井の上には神の御嶽があり、其

神の御名は「君が御水主が御水威部」、疑ふ所無く此泉の神であつた。以上三箇所の羽衣の物語の他に、琉球國由來記と琉球國舊記には、大里間切宮城村の、久場堂御嶽の下に在る遠蘇古井と云ふ泉にも、亦農夫に嫁したる第四の神女があつたことを記して居る。農夫此清水に近く家住みて、屢ゝ天を射るほどの光が此井からさすのを怪み、夜更け人靜かなる時之を窺ふと、此世ならざる清い女性が、五彩の衣を傍の枝に掛けて、只一人水際に立つのを見た。それから後の話は若菰子に同じく、此も一男一女を生んだとある。只異なる點は此神女は、終に飛衣を見附け出すことを得なかつたか、永く人界に留まり死して其骨を久場堂御嶽の大石の中に藏したと謂ふことである。御嶽の神の御名は「一つ瀬安眞遠禮司の御威部」と傳へられる。アマヲレは卽ち天降である。ツカサは神の名にして又神に仕ふる女のことをも言ふ。一つ瀬は其神女の骨を納めた大石の名と謂ふが、それは或は干瀨から運んで來た石を、大瀨などと呼ぶことに基く想像であつて、やはりもと內地と同じやうに、沐浴の場所を意味した語であつたかも知れぬ。すぐれた先祖の骨を保存し、洗つて之を祭ることは島の宗教の著しい特色であつた。此天女の生んだ女子、後に此村のノロ（祝女）と爲つたと云ふ傳へもあつて、人間に歸化してしまつた天女の家筋ではあつたが、やはりその最初の母を、天降る姬神として此御嶽には祀つたのである。

七

やまとの島々の神道に於ても、神は井の上、清水の滸なる靈地に、降りたまふと信ぜられた例は多いが、至極の篤信者で無ければ御姿を拜むことも出來ず、たゞ神を代表するよりましの女に由つて、間接の御聲を聽くばかりであつた。之に反して南の海の島々ほど、昔から天降の盛んであつた處は無い。世に大事の起る時、人に善惡の爭ひあるときは勿論のこと、何年に一度かある御祭の時にも、乃至は人の信仰の稍衰へんとする時にも、萬人一同に神の御姿を拜んだと云ふことは、段々の記錄がある。それが又決して大昔の世の事のみでは無かつた。今から百七十年前の寶曆年間にも、前年東宮殿下の御上陸なされた與那原の濱に、天女三人降つて多くの人に拜まれ、水などを浴みて長く遊んだと、大島筆記其他の本に述べてあり、其から更に四十何年の天保九年にも、久高の島に二柱の神顯れたまひ、全村之を拜せざる者は無かつたと球陽にはある。箇々の信者の見聞で無いだけに、普通の幻覺とも斷定してはしまはれぬ。自分の考では、是が古くから謂ふ所のミステリーなるもので、價値に於ては聊かも現實と違はぬ、特殊神聖なる演劇では無かつたかと思ふ。假に此推測の如しとしたならば、其神に扮した者は誰であらう。神に通じ且つ物忌の最も固かつたノロ卽ち村々の祝女で無ければならなかつたのである。大里宮城のノロの始祖が、御嶽に靈骨を藏する天降りの司である理由は、たゞ此解釋に由つてのみ、荒唐無稽で無くなるのである。

又次のやうな話も傳はつて居る。右の宮城に近く、同じ間切の稻嶺の村では、每年春の初の稻穗祭の日に、他の多くの村とは違つて、ノロが神々のトン（殿）を巡拜することをせぬ。其由來は、むかし鄰の部落の湧稻國の里に、容色絕世の若い祝女があつたのを、富盛城の主なる伊茶計按司深く戀慕して、百方之に近づかうとしたけれども許さなかつた。稻穗祭の前の頃に、此ノロ寒水井の泉に往つて神衣を洗ひ、之を岡の上に白々と晒して置いたのを、按司遙かに望み、詐つて、人を見せに遣つて之を

知り、時こそよけれと刀を帶びて進んで之に迫つた。若きノロは其威勢に怖れて、深く御獄の奥に隱れ、終に祭の日にも里に出て殿巡りをしなかつた。其が毎年の例と爲り、湧稻國と稻嶺ばかりは、祝女が此巡拜をせぬことになつたと傳へられる。

此物語の如きは、現實の歴史としても何の差支も無いのであるが、しかも泉と云ひ白き衣を乾すと云ひ、神を祭るべき美女と謂ふに由つて、亦是れ一箇失敗したる若狹子、乃至は小波津仁也の話では無かつたかを思はしめる。然らざればかの髮長き天女なるものが、夙く人間の最も氣高い者を意味して居たのでは無いか。人天の堺の線は本は必ずしも明瞭では無かつた。さうして恰も其境の上に立つて、所謂のろ〳〵は神に仕へて居たのである。知念間切の齋場御獄を始として、村々の靈地は悉く男子の立入ることを禁じて居た。島々の祭の中には、今でも男の見ることをさへ許さぬものがある。祝女は神にかしづく女であれば、本來人間の男の近づき得ざる清らものであつたのを、政治の權力が宗教のそれよりも一段と強くなつてから、押してその物忌の衣を取隱す者を生じ、次第に神の國を遠く考へねばならぬ世中に、なつて行つたのではは無からうか。國頭地方の村々には、今以て公然の夫を持ち得ない祝女が有る。祝女のサトと爲る男は長く生きぬと云ふ話も幾度か聽いて居る。神を娶ると云ふ如き奇拔なる空想も、古風な社會に於ては少なくとも不自然で無かつた。

八

此につけて偶思ひ合すことは、久高の島で最近まで行はれた刀自覓めの習慣である。此島では人の妻となる者は、必ず祝言の席上から遁げ走つて、十日二十日の間、新郎に捕へられぬやうに力めねばならなかつた。此頃向上會と稱する青年團の骨折で、遁げ隱れて居る期間は四日を越ゆべからずと申合せ、女たちは寧ろ竊かに之を喜んで居ると云ふことだが、今迄は早くつかまつた花嫁を、何かみだらな女ででもあるかの如く、嘲つて居たさうである。今の外間のノロクモイの如きは、七十二日の間見附けられなかつたと自慢して居る。周圍一里とすこしの小島の内ではあるが、御獄の中には男子が憚つて入らぬ爲に、此へ遁げ込めば何日でも捕へられずに居ることが出來た。多くの女はしばしば里へ食事に來たり、或は自分が先づ退屈して、そつと居所を知らせて來たりする故に、三週間とは續かぬのだと、此老女は謂つたさうである。斯う云ふ半は馴合ひの逃げ隱れであるが、それでも新郎は多くの友人の助力を賴み、實際血眼になつて搜しまはり、つかまれば又髮の毛を鷲づかみなどにして、手荒い折檻をするのが作法である。晝間捕へると一室に押込めて張番を附けて置き、夜見附けたら直ぐに寢てしまふ。此時に花嫁は必ず悲しい聲を立てて泣くことになつて居る。其聲を聞附けて附近の人々、どこそこの嫁もとう〳〵捉まつたと見える、隨分長かつたとか、又は少し早過ぎるやうだとか、とり〴〵の評判をすると謂ふ話である。

是は祝女でも無い只の女には、無用の手數のやうであるが、久高の島では實は全部の成長した婦人がカミンチュ（神人）である。十二年に一度づつ、午の年を以て行はるゝイザイ法と云ふ式の日に、七つの木の橋を滯り無く渡つて、一人より他の男は設け無かつたことを、神と村人との前に證明し得た刀自たちは、悉く其日から神に仕へる女と爲り、祭のたび毎に二日前から小屋に籠つて、至つて重い物忌をする。男に逢はぬは固よりのこと、乳呑兒までも引離して、時々小屋の外へ呼んで來ては乳を與へるばかりである。是ほど迄にしなければ、島の

神々の御恵みに答ふるには足りなかつた。久高の男は年中海に出て働いて居るので、農作は全部が女の手業であつた、しかも磯を忌むことがあまりに厳かなる爲に、冬分は島に肥料を施すことも出來なかつた。一度肥しを持てばすぐに海に下つて、髮の毛までもよく洗はねばならぬのが寒いからである。

九

銘刈子の天女が羽衣を泉の上の枝に引掛けた他に、長い／＼髮の毛を水の上に殘し留めたと謂ふのも、やはり沖繩諸島の神道と何かの關係があるらしい。宮古島にはツンネーリ（鼓練）と云ふ神祭りの尊い踊があつて、今も平良の村で形ばかり之を行うて居る。昔根間の伊嘉利と云ふ人孝心深く、父の墓の側に廬して晝夜泣き悲んで居ると、折しも天川崎と云ふ處に泉湧き出で、仙女天降りして此水に沐浴す。伊嘉利は之を知らず、夢に父蘇生したりと見て驚き喜んでそこへ往つて見ると、異香空に滿ち奇妙なる髮毛が二筋落ちて居た。之を拾うて還らうとすると、忽然として仙女現れ其毛を乞受けて去つた。鼓練の神の曲は其後磯邊をあるいて居て異人に逢ひ、二年の間海中の島に遊んで之を學んで戻つたと、宮古島舊史には記して居る。然るに別に沖繩の方へ傳はつた遺老の一說に於ては、話は著しく浦島子に近くなり、仙女は單に根間の伊嘉利の孝心を賞でたのみならず、長い三筋の髮毛の返却を德として、他日自ら來つて彼を龍宮の金殿玉樓に誘うた。只の三日と思つたのが、還つて見れば人の世の三年であつたとある。しかも此時に學んで來たと云ふ神踊は、それ以來十二年目に一度の九月吉日に、根所に集まつて嚴重に之を行うて居た。之に與かる者二十五人、內一人は冠に白鷺の羽を貫連ね白い裝束を著て、鷄の尾羽の冠に紺の衣を著た二十四人に取圍まれ、名藏草紙と云ふ詞を唱へ、拍子を取り鼓を打つて十三日の間踊るのが、中古までの例式であつたと謂へば、仙女が徒らに假初の緣を結びに、出現したので無かつたことは略わかる。

沖繩本島でも首里に近い南風原間切の與那覇に今一つ浦島に似た話がある。美しい女性に誘はれて龍宮に遊び、僅か三月と思つて還つて見ると、此世は既に三十三代を經て、もう子孫と云ふ者も無かつた。之を恠んで開くなと戒められた紙包を解くと、中には白い髮毛が有るのみで、それが皆飛んで此男の顏にくつつき、忽ち衰老と爲つて死んだとある。よく此だけ迄似たものだ、或は一方の輸入かとも思はれるが、しかも最初に仙女に逢うた因緣は、龜を放して助命したので無く、やはり宮古島の根間の伊嘉利と同じく、濱に出て異常なる髢を拾ひ、翌日落し主を探して美しい女性に返した爲で、是れ卽ち我物たり、汝は眞に善人と云ふことになつて、海の都には招かるゝに至つたのである。この沖繩の浦島太郎が、死して葬られたと云ふ地は後に御嶽になつた。其山には桑の木が多く野生し、もと此男の突立てた桑の杖が、成長して繁茂したと傳へて居る。杖は卽ち旅人のしるしであるが、しかも其杖を伐つて來た神の島は、もう何れの海にあつたかも不明である。

一〇

際限も無いから話は此邊で止めたいが、要するに沖繩諸島の神女は、殊に沐浴を愛した。恰も村々の祝女が靈泉に由つて、其清淨を保たうとしたのと同じである。其泉は又酒を醸すにも必要であつた。酒造りも亦女の仕事である。さうして仲城安里の佐久井などの如く、井の畔で神女に逢ひ、夕毎に一壺の酒を賜はつた話もある　女房が之を嫉んで往つて見ると、

壺の酒は乃ち變じて水と爲ると云ふこと、本州諸國の强清水と云ふ泉に、しば〳〵「親は諸白子は清水」の話を傳へるのとよく似て居るが、たゞ沖繩の酒泉傳說に於ては、其村のノロは永く此井の水を汲んで、稻祭の日に神に供へて居たのである。暑くして水の大切な島であるが故に、泉に伴ふ神の口碑が多いのか、はた又女性が祭と水とを掌るが故に、水の邊に神を拜するの風が、次第に戀しなつかしの情緒をさそふやうになつたのか。許田の手水を始として、美しい多くの夢物語が、往々にして清水と處女とを結び合せ、島人の文學に向つて無限の涼味と休息とを供與せんとして居る。何れにしてもその由つて來る所は久しいのである。

之に比べて見るとやまとの島の我々には、少しばかりきまりの惡いことがある。こちらの方でも海近くなどの水の戀しい地に、圖らず清冽甘美なる泉を見出すことはあるが、さう云ふ場合には多くは弘法大師を說き、且つ之に配するに一人の老婆子を以てする。あまりとしても彩色がくすんで居る。昔はきつと斯うでは無かつたらうと思ふ。大師が全國を行脚して、水ばかり求めて居たのもよろしい。たつた一杯の水の親切にめでて、立派な清水を善良なる老女に與へた迄はよろしいが、少しく不親切な鄰の婆があれば、すぐに又其制裁を下して芋を石芋にし、井戸を鹽水泥水にして往つてしまつたと云ふのは、佛法の祖師よりも寧ろ遙か以前の神樣の如き、烈しい愛憎では無からうか。沖繩へは幸にして斯んな弘法大師は渡らなかつたが、やはり若干の最も世話燒きなる、且つ中々機嫌の取りにくい旅人が昔あるいて居た。例へば佐敷間切の津波古の村に於ては、古くから稻の大祭を行はず、又五月六月の稻刈時に際して、決して驟雨が降らぬ。これは曾て此里の名水多和田井の側に於て、或老女が水を汲まうとして來て見ると、井戸の左手の石の上に立つて、水を一杯と所望した人がある。老女は乃ち持つて來たマガリ（碗）の緣をわざと打缺いて、それから水を汲んで進らせた。何の爲に打缺いたかと旅人が問ふと、私が平生用ゐて居る器で、穢があつては畏多い、どうかその缺いた所から飮んで下されと答へたので、旅人の機嫌は非常によくなり、此村では何か困ることは無いかとある、農作忙しき最中に二度の稻祭のあることが一つ、稻を刈乾す頃の夕立の難儀が又一つと答へると、よろしい此からは、五月六月に俄雨は降るまい、稻の大祭はせずともよしと、斯ういふ約束をして往つた以上は、神樣に相違が無かつた。故に井の左に在る石を記念として祀つて居る。僅か茶碗の緣を少し打缺いただけの誠意にも、此だけ十分なる恩惠が酬いられた。況や許田の手水は花よりも更に艷なる若い娘が、玉の手に透きとほる水を掬んで勸めたのであつた。其旅人が若し旅の神ならば、必ずや其泉をして、愈々澄み愈々甘くつめたからしめ、歌ともなり又物語ともなつて、流れて永遠に島人の情をやさしく、夢を清からしめんとしたことであらう。日本の神代史のわたつみの宮は、卽ち琉球のことだらうと云ふ說がある。然らば大昔、最も尊くして且つ若い神が、海で失せたる寶の釣針を搜しに、遙々と離れ小島の旅をなされた時、百枝さす湯津香木の樹蔭に於て、少女の手に持つた玉の碗から、樂しく御飮みなされたと云ふ清水は、今果していづこの海端に湧き且つ流れて居ることであらうか。平和豐饒なる村里の數が追々に多くなつて、必ずしも精確に神の御悅びの場處を記念し得ずとしても、我々は尙永く清き泉に對して、此民族の優雅にして敬虔なる性情が、自然に神に仕へる道に適して居たことを、想像することが出來るのである。

炭燒小五郎が事

一

大正九年の九月一日であつたかと思ふ。私は奥州の海岸を傳うて、とう〳〵尻矢崎の突角に辿り著き、燈臺裏手の岩に腰かけて、荒く寂しい北方の海を眺めた。三戸郡の鮫港から、此附近に來て事業をして居る本間君と云ふ人が、最も親切に世話をしてくれたので、別に臨んで今に南九州に遊びに行くから、南の端の大隅の佐多岬から、必ず通信をしようと云ふ約束をした。ちやうど丸四ケ月の旅行の後、豫定の如く佐多の田尻と云ふ村に宿して、元旦の鶏の聲を聽き、年始の狀を本間君へ出したときは、何か大きな仕事を終つたやうな、満足を感じたことであ[illegible]氏は、家は相州に[illegible]居た　尻矢や遠州の[illegible]水之子などでは、[illegible]に迷はされて、大[illegible]ちて死ぬと謂ふが、[illegible]て居る爲か、[illegible]なことが少ないと云ふ話をした。こんな[illegible]い日本の島が、一つの國である爲に生活事情も亦一つで、坐して千里の天涯に在る雪の荒濱を、恰も鄰家の事をする如く話し合ふことが、此日は特別に有難く思はれた。

佐多の島泊から伊座敷に越える山路を、豐後から來た炭燒が獨力で開いた話は、もう本文にも書いて置いたが、どう考へて見ても自分には、奇縁とより他は感ぜられなかつた。豐後は今に於て尚炭燒の本國である。其一半は進化してナバ師即ち椎茸作りと爲り、各地に招かれて、盛んにナバ木の林を經營して居るが、他の半分は昔ながらの炭を燒くべく、此頃は追と[illegible]して鄰國日向の、東臼杵の奥山に入つて居る。炭燒には人も知る如く、現在尚傳授を必要とする技術があつて、同じ悩なり窯なりを[illegible]も、土地と窯とに由つて出來る炭に上下等がある。しかも昔は今の民家に火桶を用ゐるに至[illegible]、煙草などよりも更に新しく[illegible]の山に炭を燒いた始には、必ず別に尋常ならざる需要があつた爲と思はれる。さすれば何が故に豐後の炭燒のみが夙く人に知られ、殊には小五郎長者の物語が、遠く久しくもてはやされるに至つたか。

大分縣方言類集に依れば、宇佐郡などで炭をイモジと謂ふとある。是が若し炭の最初の用途を語り、更に一歩を進めて宇佐の信仰の極めて神秘なる部分、即ち所謂薦の御驗、黄金の御正體の由來を解き明かす端緒ともなるならば、我々の學問は永く今日のしどけなさに棄てて置かれる患ひ無く、夢のやうな村々の歌が尚至つて大切なる昔を、忘却から救うて居たことを、追々に認める世中が來るであらう。

自分は尻矢外南部の旅を終つてから、船で青森灣を横ぎつて津輕に入り、弘前の町に於て始めてこの地方の炭燒長者の話を知つた。豐後に起つたことは疑ひが無い炭燒の出世譚が、ほんの僅かな變更を以て、本土の北の端までも流布するのは如何なる理由であるかを訝るの餘り、稍長い一篇の文を新聞に書いて置いて、九州の旅行には出て來たのであつた。豐後をあるいて見ると考へねばならぬことが愈々多かつた。其から途上に幾度と無く、断んだことを空想

しつゝ、この大隅の佐多の島泊までやつて で、さうして又豐後の炭燒の小屋の前を過ぎたのである。自分の想像では、豐後の國人は今でも炭燒を以て、微賤にして恥づべき職業と思つては居らぬやうである。聞いて見る機會は無かつたが、この小屋の主人なども或は炭燒だから斯う云ふ尊い事業をするのだと考へて居たのかも知れぬ。近年石佛を以て一層有名になつたが、臼杵の城下に近い深田の里には、小五郎が燒いたと云ふ炭竈の址あり、岩のくづれの間から炭の屑の化石と云ふ物が無數に出る。長者の後裔と稱する家には、俵のまゝ燒けた炭が二俵と鉈などを持ち傳へ、一年一度の先祖祭に之を陳列して人に見せる。或は又家傳の花炭と稱して、七十八代の間連綿として、之を製したと云ふ由緒書も傳はつて居る。即ち或特定の家族に於ては、この物語は今も決して單純なる文學では無いのである。

大昔小五郎の炭を燒いたのは、別に重要なる目的のあつたものと、推測する人は近年は既に多かつた。長者大いに家富みて後に、召されて都に登つた愛娘の船を、遠く見送つて、別を惜んだと云ふ姬見嶽から、この深田の村近くまで、現に皆金銅鐵の試掘地に登録せられて居る。前に臼杵の警察署長で、後に大分銀行の支配人と爲つた某と云ふ人が、傳說から思ひ附いて出願したのがもとであるが、今は或大阪人が買取つて權利を持つて居る。爰から七八里離れた大野郡三重町の內山も、內山觀音の緣起に依れば、小五郎の初の在所であつて、炭を燒いて居た故迹は、程近い神野の山家であつたと傳へる。しかもその燒いた炭をどうしたかと云ふことには考へ及ばずに、例の朝日さし夕日かゞやく云々の歌などに由つて、長者の寶を埋めた地を見附けようと、そこらを掘返した人が幾らもあつた。明治の少し前にもこの內山で、金の蒲鉾形の物を多數に發掘したことがあつたと謂ふ。それを買取つて外國人に賣り、後に發覺して獄に投ぜられ、維新の大赦で出牢を許された人のあることを、その實物を見たと云ふ人の子息から、匿名で知らせてくれたこともあつた。傳說と歷史とは、人がこれほど賢くなつてしまつた時代までも、まだ紛亂し混淆し、且つ身勝手に誤解せられて居るのである。況や鄕土を愛する人々は、多く一地方の古傳に割據して、目前の因緣關係をすらも否認する爲に、一層この問題が解きにくくなつてしまふのは、誠に是非も無い次第である。

二

炭燒長者の話は、既に新聞にも出したのだから、出來るだけ簡單に、その諸國に共通の點のみを列擧すると、第一には極めて貧賤なる若者が、山中で一人炭を燒いて居たことである。豐後に於ては男の名を小五郎と謂ひ、安藝の賀茂郡の盆踊に於ても、共通りに歌つて居る。即ち、

　筑紫豐後は臼杵の城下
　藁で髮ゆた炭燒小ごろ

なるものである。第二には都から貴族の娘が、豫て信仰する觀世音の御告げに由つて、遙々と押掛け嫁にやつて來る。姬の名が若し傳はつて居れば、玉世か玉屋か必ず玉の字が附いて居る。容貌醜くして良緣が無かつたからと謂ひ、或は痣が有つたのが結婚をしてから無くなつたなどと謂ふのは、何れも後の說明かと思はれる。第三には炭燒は花嫁から、小判又は砂金を貰つて、市へ買物に行く途すがら、水鳥を見つけてそれに黃金を投げ附ける。それが此物語の一つの山である。

　をしは舞ひ立つ小判は沈む

とあつて、鳥は鴛鴦であり或は鴨であり鷺鶴で

あることもあって一定せぬが、兎に角必ず水鳥で、其場所の池又は淵が、故跡と爲って屢々永く遺って居る。第四の點は即ち愉快なる發見である。何故に大切な黃金を投げ棄てたかと戒められると、あれが其樣な寶であるのか、

　あんな小石が寶になれば
　わしが炭燒く谷々に
　およそ小笊で山ほど御座る

と謂って、それを拾って來てすぐにする〳〵と長者になってしまふ。

右の四つの要點のうち、少なくとも三つ迄を具備した話が、北は津輕の岩木山の麓から、南は大隅半島の、佐多からさして遠く無い鹿屋の大窪村に至って、自分の知る限りでも既に十幾つかの例を算へ、更に南に進んでは沖繩の諸島、殊には宮古島の一隅に迄、若干の變化を以て、疑ひも無き類話を留めて居るのである。事小なりと雖、看過すべからざる奇事であって、自分が日本のフォクロア顯障の爲に、何とぞして其由來を究めたいと云ふ誓願を立てたのも、亦この不思議を因緣としてゞあった。

炭燒小五郎は黃金の價値を感得して後に、其名を眞野長者と呼ばれ、或は又萬之長者とも謂はれて居る。眞野長者の草紙の物語は、中世民間文學の眞只中であって、豐後と謂へば忽ちに此長者を想ひ浮べるほど、都鄙を通してよく知られて居たのであるが、不思議なることには其出世の始を語った、炭燒婚姻の一條のみは、之を豐後の出來事として、認めざる者が甚だ多い。現に津輕に於ては之を伯爵家の系圖の中に編入し、第四代左衞門尉賴秀、幼名は藤太、元仁元年九月生る。六歲の年父秀直、安東勢と津輕野に戰ひて討死す。仍て乳母に扶けられて姉の夫橘次信次の許に匿れたり橘次は新城の豪族にして、黃金を採掘して之を賣りて富を致す。藤太を常人と共に使役して敵を欺かんと、戶建澤の山中に遣りて炭を燒かしむ。故に人呼びて炭燒藤太と謂ふとある。民間に於ては近衞殿の女福姬、もと甚しい醜婦であったが、津輕にさすらへ來りて或川の水に浴し、忽然として美女となり、後炭燒藤太殿に嫁したまふなどと謂ふ。鳥に小判を投げたといふことも、有るといふ話である。此等の古傳の少なくとも一部分が、外部からの混入であることは、愛鄕心の強い學者たちも之を認めて居る。津輕と近衞家との關係の其樣に古くは無いこと、或は藤太の母が唐絲御前で、即ち最明寺時賴の落胤であったと云ふ說の無稽なこと等は、今や誰も之を爭ふ者が無い。しかも自分などが最も明瞭なる輸入の證とする點は、此の如き消極の材料では無くて、炭燒藤太と云ふ名前であり、又橘次と謂ふ金賣のあったことである。豐後の方では此事は更に說かぬが、東日本へ進むほどづつ、金賣吉次が突出して、炭燒の藤太と接近せんとする。就中羽前村山郡の寶澤と、岩代信夫郡の平澤とには、共に炭燒の藤太が住んで居た遺跡があって、水鳥に向つて小判を打附けたと云ふ池も、雙方ともにちやんと在り、更に緣あって遠國から來た花嫁の患言に由り、後に無量の黃金を得たときには、何れも此水を以て之を洗ったやうに傳へて居る。吉次吉內吉六三兄弟の金賣は、即ち藤太の子どもであって、彼等は單に父の幸運を以て授かったものを、都へ運んで居たに過ぎぬことも、二處同樣の口碑である上に、記念として今日に殘るものに、福島に在っては鄕村石那坂の吉次宮あり、山形の吉事の舊址は、後に南所宮と改稱して、鳥海月山の二神山を奉祀すと謂ふも、尚且つ義經が賴を受けて、吉次信高之を再建すと語り傳へるのである。兄弟の金賣が家の跡と稱する地は、勿論京都にもあれば、平泉の衣川の岸にもある。然るに陸前栗原郡の金成

村には、長者屋敷と名けて又一つ彼等の故郷があり、近世に入つてから殊に色々の珍しい財寶を掘出したと云ふ噂を聞くが、此地に於ても父は炭燒であつたと謂ひ、其炭燒の名は藤太である。清水の觀音の御告げを受けて、京から嫁に來た姫が徒渉りをしたと云ふ小棲川、藤太が姉齒の市へ米を買ひに行く路で、雁に小判を投げたと云ふ金沼なども、やはり有るので、理由は知らずずつと古い時分の、互に比較をする折も無い頃から、斯うして話は方々の土に、何れも立派な根をおろして居たのである。

それを移植若くは接木と見ることは、我々にはどうしても出來ぬ。第一には模倣をせねばならぬ理由も無く、又さうする機會も有りさうに無い。既に他郷でもてはやされて居ることを知れば、寧ろ語り傳へる張合ひが無くなるべきことは、近頃漸く同種の珍談が、他府縣にも有ることを知つた人々の、驚く傍失望する顏を見てもよくわかる。但し少なくとも古い清水、濠の跡とか無名の塚とか、所謂由有りげなる處には、其邊を浮遊する昔物語の破片が、いつの間にか來て取附くことは、恰も米を寢させると麴と爲り、木を伐倒して置けば椎蕈が成長するのと、ほゞ同じやうな作用である。口から耳へ傳承する文學の、書籍以上に保存が六かしく、何かの原因で保存を業とする者が無くなれば、忽ち散亂して原の形を留めず、たゞ其中の印象強き部分のみが、斯うして我々の記憶に殘ることは、今の世中でも普通の現象であつて、之を考へると此種の偶合は必ずしも奇異では無く、單に斯くばかり弘い地域に亙つて、如何なる事情が同じ話の種を、播いてあるいたかを尋ねて見る必要があるのみである。

三

前代の地方人が傳承に忠實にして、甚だ創作に拙であつたことは、四箇所の炭燒長者の名が悉く藤太であつたと云ふやうな、些細な點からも窺ふことが出來る。是が心あつての剽竊であつたならば、寧ろ名前ぐらゐは變へたであらう。然るに幾つかの山川を隔てゝ信州園原の伏屋長者なども、先祖は金賣吉次で其父は亦炭燒藤次であつた。阿智川の鶴卷淵は亦例の通り、鍔は飛び立ち小判は沈むと云ふ故迹であつて、是も物語の要點はすべて皆、豐後の長者譚の第一節と異なる所が無い。豐後の眞野長者は小五郎であるが、これは炭燒の子に養はれてから後の名で、童名はやはり藤治と呼ばれて居たとある。數多の國所を經廻つて、此だけの月日を重ねた後迄、話の興味とはさして關係も無ささうな、名前すらも變化をしなかつたと謂ふのは、恐らくは歌の口拍子の力であらう。

此序に尙少しばかり、名前の點に附いて考へて見たいのは、同じ盆踊の歌でも筑前朝倉郡に現存するのは、豐州に於て臼杵の小五郎を説くに反して、別に豐後峰内炭燒又吾と謂ひ、又吾さんとも謂はれる人が、こんな寶を知らいですむかともうたうて居た。峰内は即ち三重の内山觀世音の地をさしたものらしく、今も彼處に傳はつて居る長者の記錄では、又吾は小五郎を養育した親の炭燒の名であつて、爰に亦一代の延長を見るのである。大野郡の三重と海部郡の深田とは、山嶺を隔てゝ若干の距離がある。長者が船著きの便宜の爲に、海に臨んだ眞名原の地に、居館を移したと云ふのは説明であるが、然らば兩處で炭を燒いて居たと云ふ言ひ傳へは成立せぬ。兎に角に蓮城寺と滿月寺と、二箇の佛地の縁起には矛盾があり、之を流布した者の間にも、近世東西本願寺の如き爭奪のあつたことが、稍推測し得られるやうである。其上に更に一つの錯綜は、周防大畠浦の般若寺の方からも加はつて居るらしいが、是は

まだ日が届かず、且つ直接に炭燒の話とは緣が無いから殘して置く。之を要するに豐後の本國に於ては、卻つて後代の紛亂があつて、昔の物語の單純なる樣式は、別に四方に散亂した、首尾整然たらざる斷片の中から、次第に之を辿り尋ねるの他は無いやうになつたものと考へられる。

舞の本の烏帽子折の中に、美濃の青墓の遊女の長をして語らしめた一插話、卽ち山路が牛飼ひの一段は、文字の文學として傳はつた最も古い眞野長者。用明天皇職人鑑を始めとし、近世の語部は概ね範を此に採り、現に豐後に行はるゝ長者の一代記の如きも、或は翻つて其記に據つたかと思ふ節があるが、固より必ずしも之を以て、久しい傳承を改めざりしものと信ずるには足らぬのである。長者の愛娘が觀世音の申し兒であつて、容色海内に隱れ無く、天朝百方に之を召したまへども、終に御仰せに從はなかつたと謂ふのは、竹取以來の有りふれたる語り草ながら、之を假り來つて後に萬乘の大君が、草刈る童に御姿をやつして、忍び寄りたまふと云ふ異常なる出來事を、實際化しようとした所に文人らしい結構がある。然るに其皇帝を用明天皇とした唯一つの理由は、生れたまふ御子が佛法最初の保護者、聖德太子であつたと謂はんが爲であつたらうに、其點に就いては何の述ぶる所も無い。しかも牛若御曹司の東下りの一條に、突如としてこの長物語を併び入れたには、何等かの動機が有つた筈である。今は章句の陰に隱れて居る笛の曲に、山路童の神祕なる戀を、想ひ起さしむる節があつたか。或は海道の妓女たちが、眞野長者の榮華の物語を、歌にうたつて居た昔の習慣が、斯うして半ば無意識に殘つて居るのか、はた又金賣吉次三兄弟の父が、かの幸運なる炭燒であつたと云ふことが、將に漸く信ぜられんとする時代に、最後の烏帽子折の詞章は出來たのであらうか。何れにしても此中に保存せらるゝ山路と玉世姬の世にも珍しい婚姻は、卽ち豐後の長者の大なる物語の一節であつて、それも中世の語部の興味から、早既に著しい改作を加へて居たことを知るのである。

四

溯れば源は尙遙かである。神が人間の少女を訪ひたまふと云ふことは、豐後に於ては嫗嶽の麓に、花の本の神話として夙く之を傳へて居る。神裔は永く世に留まり、卽ち緒形氏の一族と繁衍したと謂ふ。緒形は又大神田とも書くものあり、大和の大三輪の古傳と、本は一つであらうと謂ふ說も、尙其據り所無しとせぬのであるが、更に之を隣國宇佐神宮の信仰に思ひ合せるときは、先づ其脈絡關係の殊に緊切なるもののあるを認めざるを得ぬ。八幡は最も託宣を重んじたまふ大神であつた。歷史の錄する所に從へば、其巫女の言は時代を逐うて進展し、現に朝家に在つては年久しく宗廟の禮を以て之を齋ひ祀られてあるが、當初は單に或る尊き御母子の神と信ぜられ、必ずしも記紀に傳ふる所の應神天皇の事績とは一致せず、恰も山城の賀茂に於て別雷神と其御母とを祀るが如く、蓋にも亦玉依姬は、其姬大神の御名であつた。大隅正八幡宮の如きは、後に宇佐より分れたまふ御社かと思ふのに、其社傳に於ては別に神祕なる童貞受胎の說があつて、頗る高麗百濟の王朝の出自と相類し、直接に日神を以て御父とすとまで信じられて居た。是れ日本の國家の未だ公けに認めざりし所ではあるが、少なくとも以前の信徒の多數に、此の如く語り傳へる者はあつたのである。眞野の長者が放生會の頭に選ばれて、門前に幡を樹てられた時、流鏑馬の古式を知る者無くして、誰にてもあれ此神事を

勸め得たらん者を、一人ある娘の聟に取らうと謂ふと、乃ち山路が進み出でゝ、始めて射藝を試みるといふ一段は、後に百合若大臣の物語にも、取り用ゐられたる花やかな場面で、此曲に聽き入つた豐後人の胸の轟きは想像にも餘りがあるが、其よりも更に驚くべかりしは、愈ゝ第三の矢を引きつがへて、第三の的にかゝらんとしたまふ時しも、天地震動して八幡神は神殿を搖ぎ出でたまひ、君の御前に畏まつて、自ら敬を十善の天子に致したまふと云ふ條である。卽ち神よりも尊い御身が、斯んな草刈童の姿を假りて、暫く長者の家に止まりたまふと云ふことが、果して尋常文藝の遊戲として、古人の口の端に上るべきものであつたか否かは、詳しく說明する迄も無いのである。宇佐が古來の傳統に基いて、次々に四所八所の若宮王子神を顯し祀り、遠い東方の郡縣に、絕えず活き〳〵とした信仰を運んで居たことを考へると、其力が山坂を越えつゝ、南鄰の國々へも早くから、斯うして進んで居たことは疑ひが無い。要するにもと山路が笛の曲なるものは、神が人間界に往來したまふ折の警蹕の音であつたのを、佛家が干涉して神子を聖德太子と解せしめんとしたために、是を何のつきも無く、用明天皇には託するに至つたのである。

此推定を更に確めるものは、姬の名の玉世であつた。宇佐の姬神の御名を玉依姬と傳へた理由は、久しい間の學者の問題であつて、或は之に由つて山に祀つた御神を、渡神の御筋かと解する者さへあつたが、神武天皇の御母君が、同じく玉依と云ふ御名であつたことは、唯多くの例の一つと謂ふばかりで、前にも云ふ如く賀茂でも大和でも、凡そ神と婚して神子をまうけたまふ御母は、皆此名を以て呼ばれたまふのである。玉依は卽ち靈託であつた。人間の少女の最も淸く且つ最もさかしい者を選んで、神が其力を現したまふことは、日本神道の一番大切なる信條であつた。神の御力を最も深く感じた者が、御子を生み奉ることも亦宗敎上の自然である。今日の心意を以て之を評するの餘地は無いのである。眞野長者が愛娘も、玉世であつた故に現人神は乃ち訪ひ寄られた。それが亦八幡の古くからの信仰であつた。

或は又別の傳へに、姬の名を般若姬と謂ふものがある。周防大畠に般若寺があつて、姬の廟所なりと謂ふ說と關係があらうと思ふが、尙さうしなければならぬ第二の必要は、姬の母長者の妻を亦玉世姬と謂ふ故に、之を避けんとしたものであつて、爰にも此物語の古い變化が認められる。烏帽子折の插話に於ては、長者の妻は其夫に向つて、「御身十八自ら十四の秋よりも、長者の院號蒙つて、四方に四萬の藏を立て」と謂ひ、山中に炭を燒いた以前の生活は、もう之を忘れしめられて居るやうであるが、此點は恐らく豐後人の承認し能はざる改訂であつたらう。長者の物語は其性質上、斯うして際限も無く成長し、後には繪卷の如く幾つかに切り放して、纒めて見れば一致せぬ箇條が、現れて來るのを普通とはするが、今若し母と子と二人の玉世の、何れが先づ知られたかを決すべしとすれば、自分は躊躇無く話の發端であり、發生の動機の不明であり、且つ類型の少ない炭燒の婚姻を以て、神を聟とした玉世の姬の奇緣よりも一つ前から存在した場面なりと認める。然らば宇佐の玉依姬の故事も、此には適用が無かつたかと謂ふと、それは唯記錄に現れてからの八幡の信仰が、第二の玉世の物語に近かつたと云ふのみで、神を尋ねて神に逢ふと云ふ更に古い炭燒口碑が尙古く存し、時の力で十分に人間化して、斯うして久しく殘つて居たとも、考へられぬことは無いのである。炭燒はなるほど今日の眼から、卑賤な職業とも見えるか知らぬが、

昔は其目的が全然別であつた。石よりも硬い金屬を制御して、自在に其形狀を指定する力は、普通の百姓の企て及ばぬ所であつて、第一にはタヽラを踏む者、第二には樹を焚いて炭を留むる術を知つた者だけが、其技藝には與つて居たので、之を神技と稱し且つ其開祖を神とする者が、曾てあつたとしても少しも不思議は無い。扶桑略記の卷三、或は宇佐の託宣集に、此豐國の峰菱潟の池の邊に、鍛冶の翁あつて金鷹を現す。大神の比義なる者、三年の祈請を以て之を顯し奉る。乃ち三歳の小兒の形を現し、我は是れ譽田天皇なりとのりたまふとある。若し自分などが推測する如く、比義は最初の巫女の名であつたとしたら、貴き炭燒小五郎が玉世姫の力に由つて顯れたと謂ふのは、極めて之と近い神話から、成長して來た物語と見ることができるのである。

五

大[illegible]の是れ多い古傳は、かの炭燒藤太の出世譚と同じく、亦弘く東北に向つて分布して居る。富士淺間の御社に於ては、竹取物語の一異傳として、赫夜姫は聖徳太子の御乳母なりと傳ふること、廣益俗說辨に擧げられ、有馬皇子が五萬長者の姫を慕ひ、下野に下つて暫く奴僕に身をやつしたまふといふことは、慈元抄に之を錄して居るが、其よりも更に類似の著しいのは、岩代苅田宮の口碑である。是は物語と謂ふよりも寧ろ現存の信仰であつた。用明天皇或年此國に幸したまひ、玉世姫を娶りて一人の皇子を儲けたまふ。妃薨じて白き鳥と化したまふ。祠を建てて祀り奉り白鳥大明神と謂ふ。水旱疾疫に祈りて必ず驗あり、土人は今も白鳥を尊崇して、敢て之に近づく者も無いとある　後世の學者には此說の正史と一致せざるを感じ、白鳥の靈に由つて日本武尊の御事ならんと論ずる者があつた。社傳も亦漸く之に從はうとして居るが、鄕人古來の傳承は、尙容易に動かすことを得ないやうである。此地方には一體に、鵠を崇敬する白鳥明神の例が多い。柴田郡では平村の大高山神社、之に鄰する村田足立二處の白鳥社は、相連繫してよく似た傳說を奉じて居る。但し緣起は何れも二百年來の京都製であつて、殊に別當等と神主側と互に相容れざる言立をして居るのは怪しいが、雙方の偶然に一致して居る箇條は、却つて最も荒唐信ずべからざる部分、卽ち乳母が[illegible]皇子を川の水に投じたるに、忽ち白鳥と化して飛揚り去りたまふと云ふ點に在る。此の如き一見無用なる悲劇は、固より後人の巧み設くべき物語で無い上に、苅田宮の方にも同じく兒宮・子捨川・投袋などの舊跡があつて、此と共通なるきれ〴〵の口碑の今も有るを見れば、何か尙背後に深く隱れたる神祕が有るのであらう。それは又別の折に考へるとして、兎に角に御父を用明天皇、御母の名を玉依媛とする尊い御子が、此地に祭られたまふ神なりと弘く久しく信ぜられて居たことだけは偶然の一致では無かつたらうと思ふ。以前平の[illegible]村、金瀨宿の總兵衞と云ふ者の家には、古風なる一管の笛を藏して居た。其先祖某、或時林に入りて大木を伐り、其空洞の中より之を見出したと傳へ、笛頭には菊の紋が彫つてある。是れ卽ち山路が用ゐる所の牧笛なるべしと、土地の人たちは謂つたとあるから、あの物語の愛でも歌はれて居たことは疑ひが無いのである

長者の娘、容顏花の如くにして、終に內裡に召され、妃嬪の列に加はつたと云ふ話は、備後の[illegible]津の新庄太郎、常陸の鹿島の鹽賣長者等其例少なからず、古くは又實際の歷史であつたかも知れぬが、特に之を用明天皇に係けまつるに至つては、乃ち亦豐後の影響なること

を感ずるのである。炭燒藤太の舊住地の一つ、陸前の栗原郡に於ては、姉齒の松の古事に託して、美女の途に死したる哀話を傳へて居る。氣仙高田の武日長者が一の娘であつたと謂ふ。其妹が後に代つて京に上らんとして、姉が墓の松に對して涕泣したと稱して、紙折坂の地名もある。用明帝の御代の事と謂ひ、因つてその側に神通山用明寺があつた。陸中鹿角郡小豆澤のダンブリ長者は、蜻蛉に敎へられて酒の泉を發見し、之に由つて富を積んだと謂ふ有名な長者である。唯一人ある愛女を皇后に召されて、寂寞の餘りに財寶を佛に捧げたと云ふことが、是亦眞野長者の生涯に似通うて居るが、彼地に於ては之を繼體天皇の御時と傳へて居る。嶺を隔てて二戸郡の田山に於ても、田山長者の事蹟は全く是と同じく、是は唯大昔の世の事とばかりで、何れも既に至尊巡狩の傳へは存せず、いよ／＼本の緣は薄れて居るが、尙此物語の獨立して起つたので無いことは、之を推測せしむる餘地が有るのである。

其理由の一つとして算へてもよいのは、所謂滿能長者の名が、遠く本州の北邊まで知れ渡つて居たことである。蜻蛉長者の例を見てもわかるやうに、大凡長者の名前ほど、變化自在なものは無い筈であるのに、說話中の長者の極度の富貴に住する者は、往々にして其名が滿能であつた。自分が始めて炭燒藤太の話を書いた後、八戸の中道等君が同處のイタコから、正月十六日のオシラ神遊びの詞曲を聽いて、手錄した所の一篇にも、やはり「まんのう」長者とあつた。イタコは奧州の村々に於て、桑の木で刻んだ男女の神に仕へ、神託を宣るを業とする盲目の女性である。世を累ねて曾て文字無く、授受を苟くもせぬ彼等の經典に、尙この名稱を存して居るのは、尋常流行の章句と同一視することが出來ぬのである。但し此曲に說く所は、炭とは何のゆかりも無い養蠶の起原であつた。長者の廐第一の駿馬せんだん栗毛、ただ一人ある姬君に戀慕して命を失ひ、其靈は姬を誘ひて上天し、後に白黑二種の毛蟲となつて現れたのを、十二人の女房と八人の舍人、こかひ母、桑取り王子と爲つて之を養ふと謂ふのが其大要で、之に續いて春駒によく似た文段がある。干寶が搜神記は中央の學者等に取つても、手に入り易い平凡の書では無かつたのに、如何なる徑路を經廻つていつの時から、それと同じい話が北奧の地にばかり、斯うして姬見嶽の長者の名と結合しつゝ、巫女の祕曲には編入せらるゝに至つたか、誠に過去生活の不可思議は、窺ふに隨つて益ゝ其渺茫を加ふるが如き感がある。

六

津輕最上其他の炭燒藤太が、遠く西海の濱から巡歷して來たことは、最初より之を疑ふことを得なかつたが、然らば何人が何樣の意趣に基いて、此話を運搬してあるいたかに就ては、解答は今以て容易で無い。自分が試に揭げた一箇の推定は、所謂金賣吉次を以て祖師と爲し、理想的人物と仰いで居た一派の團體、即ち金屬の賣買を渡世とした旅行者の群に、特に歌詞に巧なりと云ふ長處があつて、之に由つて若干生計の便宜を、計つて居たのでは無いかと云ふに在つたが、現存の資料は必ずしも之を助けるものばかりで無い上に、全體に亙つて世上の忘却が甚しく、年代の雲霧は頗る我々の回顧を遮るものがある。尙辛抱強い後の人の研究に、委附するの他は無いのである。

この自分の想像の第一の手掛りは、加賀の芋掘藤五郎の傳說であつた。野田の大乘寺の西田圃に在る二子塚を、藤五郎夫婦の墓と稱して、寛政九年には記念の石塔を建て、近年は又之を

市中の伏見寺に移したのみならず、金澤市史には之を富樫次郎忠頼の事だとまで謂つて居る。即ち津輕と同じやうに、大半はもう歴史化して居るので、最早口碑とも謂はれぬかも知れぬが、しかもこの黄金發見の顛末に至つては、全然豐後の小五郎と異なる所が無いので、之を土地の人かぎりの賞翫に委ねて置くわけには行かぬのである。藤五郎芋を掘つて、細々の煙を立つる貧な伏屋に、大和初瀬の長者の娘、觀世音の御示しに由ると稱して押掛け嫁にやつて來る。長者の名を生玉右近萬信と謂ふのは、或は父萬能では無いだらうか。娘の名は和五と謂ふとある。和五は和子であつて單にお孃さまも同じことだ。藤五郎は芋を掘る處の土が皆黄金であるのに、それが寶であることをちつとも知らなかつた。或時父の右近が贈つた一包の砂金を以て、田に居る鷺に打附けて還つて來た。妻女の注意を受けて始めて山に入り、莫大の黄金を持還つて、それを近くの金洗澤で洗つた。金澤の名も之より起り、兼六公園の泉の水は即ち其故迹であると云ふ。遠州濱松の近くにも、藤五郎とは言はぬが、やはり一人の芋掘長者が居た。奈良の某長者の信心深い娘が、遙々と嫁に來てから、俄にして長者になつた。鴨江寺の觀世音は芋掘長者の一建立で、附近には倘ほ金千杯朱千杯の噂もある。鴨江と謂ふからには、鴨の話も有つたのであらうが、書いたものには遺つて居らぬ。紀州の湯淺に近い小鶴谷の芋掘長者、是は町に出て廣川に遊ぶ鴨に、小判を打附けて居るところを、多くの人に見られた。何で其様な勿體ないことをするかと咎められると、うちの芋畑にこんな物なら、鍬で掻寄せる位あると謂つたので、其自慢から芋掘長者の字が出來たとは、少し六かし過ぎた説明である。此家の嫁は京から來た。隅櫓長者と謂ふのは角倉の聞き誤りか、信州園原の炭燒吉次も、京の角倉與一の遠祖であると傳へ、やはり炭から富を得た話の筋を引いて居る。但し此婦人の内助の功は傳はらず、只大さうな衣裳持ちで、山の屋形で土用干しをすると、淡路の海まで照りかゞやき、魚を捕れぬと云ふ苦情が來たなどと、花やかな語り草を殘し居るだけである。

芋掘りも一人で山中に入り、土に親しむ生活をして居るから、幸運ならば黄金を得たかも知れぬが、自分だけは此イモを鑄物師のイモであらうと考へて居る。即ち炭を燒く者ともと同じ目的で、必ずしも世に疎く、慾を知らぬ爲では無く、寧ろ現實の生活には滿足せぬ連中が、我境涯で夢想し得る最大限の福分、乃至は文字通りの過去黄金時代を、記憶し且つ語らざるを得なかつた結果が、自然に印象深く歌と爲り昔話と變じて、歲月の力に抵抗して來たのでは無いかと思つて居る。金賣吉次の黄金專門も、既に亦一つの空想であつた。あの頃に假に金賣りと云ふ職業があつたにしても、それは後世の金屋と同様に、タヽラの助けに由つて有利に古金類を買集め得る者を除く外、さういふ旅行者は想像することが出來ぬ。吉次の遺迹と云ふ地が京都平泉、奥州路の宿驛附近の他に、最上岩田の山奥、鑛山にも、庄内の津越後などの山村にも、下野の國府の近くにも、下總印旛沼の畔にも、武藏の片田舍にもあれば、京から西の安藝の豐田郡にまで分散して、兩立せざる色々の記念を留めて居ることは、即ち彼自身が運搬自在なる假想の人物であつた一つの證據で、更に推測を進めて見れば、中古實在の鑄物師に、吉を名乘に用ゐた人の多かつたことと、何ぞの關係があるやうにも思はれる。

金屋の旅行生活は、一方諸國に刀鍛冶の名工が輩出し、鏡や色々の佛具の技術が著しく進んだ後まで、尚持續して居たやうである。地

方の需要に應じて製品の輸送の煩しさを省くの利はあつたが、原料の蒐集が甚しく不定な爲に、生産を擴張することは六かしかつたので、便宜を得る毎に土著を心掛けたらしく、近畿の諸國を始として、中部日本には金屋と稱する小部落が多く、其住民が以前漂泊者であつたことは、彼等が忘れた場合にも尙證據がある。源三位頼政禁中に怪鳥を退治した時、仰を蒙つて百八箇の金燈爐を鑄て奉り、功を以て諸役免許の官符を賜はつたと謂ふ類の由緒書は、些少の變化を以て殆ど之を持傳へざる家も無く、何れも只の百姓から轉業したものとは考へられて居らぬ上に、尙鎌倉時代の東寺文書にも、金屋等が此大寺の保護の下に、五畿七道に往反して鍋釜以下、打鐵鋤鍬の類より、更にその序を以て布米などをも賣買し、利潤の一部を寺へ年貢に備進して居たことが、明瞭に見えて居る。甑が廢れて鍋釜の弘く行はるゝに至つて、彼等の大半は鐵の鑄物師と爲り、鑄懸と稱する一派の小民は、亦其中から次第に分れて、鑄工が地方の需要に據つて、諸國の空閑に定住の地を求めて後も、依然として遷移の生活を續けて居た。所謂イカケ屋の天秤棒の、無暗に細長く突出して居たことは、卽ち近江美濃等の多くの金屋村の文書に、「兼て又海道鞭打三尺二寸は、馬の吻料たるべし云々」とあるのと、必ず其根原を一にするものであつて、是亦此種の鑄物師の、久しく自由なる旅人であつた一つの證據である。

鋤鍬其他の打物類も、もとは兼て鑄物師の取扱ふ所であつた。鑄物師も鍛冶も等しく金屋と呼ばれ、金屋神は其の共同の守護神であつた。東海道の金谷驛は古くからの地名で、金谷の長者其一人娘を水神に取られ、金を湯にして池に注いだと云ふ口碑なども殘つて居て、卽ち亦一箇の金賣吉次かと思はれるが、後世此地の名産は矢の根だけであつた。釘鍛冶庖刀鍛冶などの手輕な作業は、各自踏鞴を獨立し原料を別にする迄も無く、土地の工人の不自由勝ちな設備を以て、田舍の入用だけを充して居た痕跡は、今日の金物店にも殘つて居る。旅をしてあるけばまだ其以上に、臨時のホドも選定せねばならず、又燃料用の炭から燒いてかゝる必要もあつた。斯ういふ生活が遠國偏土に於ては、かなり久しく尙續いて居たのである。

七

例へば江戸周圍の平原の如きは、村が少ない爲か採鑛地が遠い故か、いつ迄も金屋の移動が止まなかつたやうである。尤も鍛冶屋の方だけは國境の山近くに、領主の保護を受けて二戸三戸づつ、さびしく土著した者が農村の中にまじり、由緒は記憶し技藝は忘れてしまつて、後は普通の耕作者になつて居るが、鑄物師の部落は佐野の天明武藏の川口等、取續いて土著して居た者は至つて稀であつて、他の大部分の工人等の、地方の需要に應じて居た者は、空しく遺跡のみを殘留して、皆どこへか立去つてしまつた。現在武藏相模の中間の樹林地に、カナクソ塚などと云ふ名のある小さい塚の、附近から多量の鐵の滓を發掘するものが多いのは、何れも鐵の生産地とは關係無く、是より他に想像の下しやうも無い彼等の仕事場である。又カネ塚又はカナイ塚と稱して、小さな封土の無數に在るのも、或は之を庚申の祭場に託する人もあるが、他の府縣に在るカネイ場と云ふ地名と共に、是も金を鑄る者の假住の地であつたらしい。彼等は單に在來の塚に據つて、露宿の便宜を求めたのか、仕事の必要から時として自ら之を構へたか、はた又別に信仰上の動機でもあつたものか、之を決定することはまだ六かしいが、兎に角に是が塚の名になつて殘るのには、

單に稍長い滯留のみで無く、或期間を隔てて繰返し、同じ場處に訪ひ寄ること、富山の藥屋や奧州のテンバのやうな、習性があつたことを想像せしめる。殊に金吹きの勞作には、人の手を多く要した。今のイカケ屋のやうな小ぢんまりとした道具では旅は出來なかつた。猿簑集の附合の中に、

押合うて寢ては又立つかり枕

たゝらの雲のまだ赤き空

とあるのは、恐らくは貞享頃までの、武藏野あたりの普通の光景であつて、或は妻子老幼をも伴うた物々しいカラバン姿が、相應に強い印象を村の人に與へた結果では無いかと思ふ。

タヽラと云ふ地名も亦無數に殘つて居る。此徒は燃料の豐富なる供給を要とした他に、尙水邊に就てその臨時の工場を開設せねばならぬ事情が有つたと見えて、沼池の岸、淵川の上などに、タヽラと呼ばるゝ地があつて、前代の金屋の事業を語り、さうで無くにも鐵の滓を掘出すものが多く、しかも其主はもう行方を知らぬのである、水の神が鐵を怖れると云ふ話、或はそれと反對に、釣鐘其他の金屬の器を、極度に愛惜すると云ふ話は、鑄物師の殊に重きを置くべき言傳へであるが、今は一般の俗間に弘く分布して居るのも、何ぞの因緣らしく考へられる。炭燒藤太が將に運勢の絕頂に辿り附かんとするとき、必ず水鳥の遊ぶ水の邊を過ぎて、天下の至寶を無益の礫に打たずんば止まなかつたのは、所謂隴畝に生を送つた單純な人々には、寧ろ聊か皮肉に失したる一空想であつた。或は此話が金を好むこと彼等に越えた者の、草枕の宵曉に靜かな水の面を眺めつゝ、屢々想ひ起し語り傳へた昔の奇談であつたとしても、尙今一段と丁寧なる說明、例へば其鳥は神佛の化する所にして、夫婦を導いて新たなる發見の端緒を得せしめたと云ふ類の、信心の奇特などを附加へる必要があつたかと思ふが、旅の金屋は亦之を爲すにも適して居たやうである。關東地方に於けるカナイ塚の築造、殊に其保存と尊敬は、或はまだ宗教的の起原を、證するに足らぬかも知れぬが、次第に北に進んで下野の山村に入れば、金井神若くは家内神社などと書く神が著しく多くなり、福島宮城山形の三縣に於ては、其數が更に加はつて、その或ものは鍛冶鑄物師の筋を引く家に、由緒を以て祭られ、他の大部分は普通の村に、只の祠となつて祭られて居る。即ち此徒の第一の業體、若くは少なくとも旅行の補助手段が、斯う云ふ特殊の信仰の宣傳であつたことは、これでもう疑ひが無いのである。中部日本の金屋の神は、今は唯霜月八日の吹革祭に、近所の小兒たちが蜜柑を拾ひに參加するだけであるが、海南屋久島などに行けば、鍛冶屋神は村中から信ぜられて居た。白齒のうちに身持ちになる女があれば、必ず此神に賽錢を納めて鐵滓を申請け來り、此に唐竹と柳との葉を加へ、煎じて其婦人に飲ましめる。魔性蛇體などの種ならば忽ちに下りてしまひ、人の子であれば何の障も無いと謂つたさうである。屋久では此神を臺箒神、又は金山大明神と呼ぶと謂ふが、他の島々ではどうであらうか。中國地方の鐵産地に於ては、多くの村に金鑄護又は金屋子といふ祠あり、金屋既に去つて後も、神のみは留まり、此も學問ある神官に由つて、金山彦命などと屆けられて居るが、人は依然として之をカナイゴサンと稱へるのである。備後の雙三郡に行はるゝバンコ節は俚謠集にも出て居る。曾てタヽラの作業の折に歌つたものが、遺つて昔を語るのである。

たゝら打ちたや、此ふろやぶへ

鹽と御幣で、淨めておいて

いはひこめたや、かないごじんを

山脈を隔てゝ出雲の大原郡にも、叉別種のタヽラ歌がある。

ヤーむらげ樣がナー、よければナー
炭燒さまもよけれ
イヤコノ世なるでナ
その金が金性がよいわ

ムラゲは鎔爐のことであるらしい。炭燒樣も爰ではもう祭られる神であつた。

八

金屋が神と其舊傳とを奉じて、久しく漂泊して居た種族であるとしても、彼等と宇佐の大神との因縁は、此だけではまだ見出されないのである。又眞野長者を中心とした連環の物語が、其の不完の記録から出たと云ふことも單に一箇の推測であつて、炭燒の一條が果して最初より是と不可分のものであつたか否かには疑ひがある。自分はたゞ是ほど奇拔にして且つ複雜な話が、是ほどの類似を以て各地に偶發することは無いと信じ、何人かが運搬してあるいたとすれば、それは炭燒の業と最も親しかつた者が、古く信仰と共に或地方から持つて出たので、之を豐後とすれば比較的鑿目が合ふやうに思ふだけである。但しまだまだ解きにくい難題がいくらもある。

例へば芋掘藤五郎の、イモは鑄物師と見てもよいが、奥州三戸郡の是川村には、燕燒笹四郎と爲つて同じ奇談が、路の行く手のヤチの鴨に、花嫁の二分金を打附けることから、後に發見した大判小判を洗ふこと迄、あとは大抵其まゝで傳はつて居る。親の讓りのたつた一枚の畠地から、朝夕蕪ばかりを掘つて來て、燒いて食つて居たと云ふ點だけが違つて居る。遠くかけ離れて肥後の菊池の米原長者、是も名前が薦編みの孫三郎であつたのと、鳥が白鷺であつた點を除けば、長谷の觀世音の夢の告げと云ふことまで、符節を合したる小五郎であつた。黄金發見者の職業は、只何と無く少し替へて見たのかも知らぬが、肝要な點である爲に看過することが出來ぬ。尤も肥後方では程遠からぬ玉名郡の立願寺村に、四石野長者の舊記があつて、恰も中間の飛石を爲しては居る。此長者は貧しい炭燒別當であつた。花嫁は内裏の姫君、同じく觀世音の御夢想に由つて、女房十二人侍四人を從へて堂々として押掛けたまふ。但し此には水鳥の飛立つことは無く、青年は只一つの石塊をツチロとして、其炭薦を編んで居たとある。其ツチロは何處から持つて來たかと問ふと、斯樣なる石塊は此山中に何程もあり、炭燒が家では水石踏石まで皆此なりと答へ、乃ちそれが黄金であつたと謂ふ。此長者は早く退轉して、長者屋敷には瓦や礎が殘り、叉例の糠の峰・小豆塚等の遺迹の他に、金葉塚と稱して鐵滓多く出る塚もあつた。鐵の滓か出ただけでは、之を以て黄金發見者の實在を證することが出來ぬ次第であるが、よく似た話は羽前の寶澤村にも有つて、藤太の相續人が建てたと云ふ石寶山藤太寺は、是も炭燒男の言葉として、こんな石が三國の寶であるなら、私が山屋敷では藁打つ石まで、みんな此石だと謂つたのに基くと傳へて居る。偶然の一致では無かつたやうである。しかも炭燒が薦を編んだ、藁を打つたと云ふことも、よく考へて見ると仔細があるらしい。即ち單に炭を包む爲だけに斯んな物を作つたのでは無く、金屋は一般に其製品の輸送に附いて、特に薦を大切にしたかと思ふ。江州長村の鑄物師の神は、豐滿明神と稱へて其語音は宇佐の御伯母神に近いが、もと高野より移りたまふと傳へて居る。其時此地の米を獻上し、十符の菅薦を二つに切つて下された。今に至る迄其由緒を以て、鑄物師は五符の薦を以て包むと云ふ。此意味はまだよく分らぬが、荷造りにも作法のあ

つたことを謂ふのであらう。江戶深川の釜屋堀の鑄物師は、上總の五井の大宮神社に、十月十五日を以て始まる祭市と古い關係があつた。當日の神事のツク舞の柱に、高く結附けられる徑八尺の麻布の球は、必ず鍋釜を包裹する藁の殘りを納めて、其心につめたと云ふ話がある。此ばかりの材料から推測をするのは大膽であるが、宇佐神宮の以前の御正體が、黄金であつたと謂ひ、薦を以て之を包んだと謂ふ神祕なる古傳は、即ち亦薦編みの孫三郎が、後終に米原長者と耀ふべき宿縁を、豫め說明して居たものかとも考へられるのである。

　孫三郎も小五郎も、畢竟するに常人下賤の俗稱である。此物語の盛んに行はれた時代には、家々にそんな名の下人が多く使はれて居た。それ程の者でも長者になつたと云ふ變轉の面白味もあつたか知らぬが、尙大人彌五郎などの旁例を考へ合せると、特に八幡神の眷屬として、其名が似つかはしい事情があつたやうに感ずる。伹し其點までは今は深入りせぬことにしよう。炭燒男の名として既に列擧した藤次藤太の外に、尙河波の蝶の丸長者の傳說に伴うて、攝津大阪には炭燒女藏が住んで居た。長者の一人娘は父に死別れて後、家の守護神なる白鼠に敎へられ、遙々海を越えて尋ねて來て嫁となる。奇妙に光る石塊を井戶の傍に出て洗つて見て、是が黄金ですかと謂つた若者が、曾てあの大阪に住んで居たと謂ふのは、今更の滑稽である

　大隅鹿屋鄕大窪村の山で、からかねを發見したと云ふ觀音信者の炭燒きは、初の名が五郎藏であつた。炭は暖かい國に來るほど、段々と不用になる。故にもう是が日本の炭燒長者の、南の端であつても不思議は無いのだが、佐多の島泊の山に新たなる意外が起らんとしつゝある如く、更に又波濤の一千海里を隔てて、世にも知られぬ寂寞たる長者が住んで居た。宮古の島の炭燒太良は即ち是であつて、事は本文に既に詳かに述べてあるが、自分が爰に問題として見たい唯一つの點は、冬も單衣ですむやうな常綠の島に在つて、尙且つ炭を燒きつゝ終に長者と爲ることが、信じ得べき物語であつた根本の理由である。

九

　宮古群島の金屬の由來に關しては、現に二通りの古傳を存して居る。其一つは首邑平良の船立御嶽に屬するもので、昔久米島の某按司の娘、兄嫁の讒に由つて父に疎まれ、海上に追放されて兄と共に此地に漂著したが、かいかね世の主に嫁して九人の男子を產み、後に其子どもに扶けられて老いたる父を故鄕の島に訪れた。父は先非に悔いて親子の愛を盡し、還るに臨みて鐵と其技藝の傳書を以て引出物として娘に取らせた。其兄は之に由つて初めて鍛冶の工みを仕出し、ヘラカマ等を作つて島人の耕作を助けた故に、永く其恩澤を仰いで兄妹の遺骨を、此御嶽に納めたと謂ふのである。今は主として船路の安泰を禱るやうになつたが、男神をカネドノ、女神をシラコニヤスツカサと唱へ、其功績を記念して居る。第二には伊良部の島の長山御嶽、此はもう祭は絶えたらしいが、やはり神の名はカネドノであつた。鐵を持渡り候故にカネドノと唱へ申候とある。大和からの漂流人で、久しく此地に住んで農具を打調へて村人に與へた。仍て作物の神として其大和人を祭るのだと傳へて居る。鐵渡來前の島の農業は、牛馬の骨などを以て土地を掘り、功程はかどらず不作の年が多かつた。それが新たなる農具の助によつて、五穀豐かに生產し、渡世安樂になつたとあるのは、多分は現實の歴史であらう。荒れたる草の菴の炭燒太良が、忽ちにし

て威望隆々たる嘉播仁屋となつたのを、ユリと稱する穀靈の助けなりとする迄には、其背後に潛んで居た蹈鞴の魅力が、殊に偉大であつたことを認めねばならぬが、しかも鐵無き此島に鐵を持込んだ人々は、謙遜にも自分の功勞は之を說立てず、炭燒奇瑞の古物語を、そつと殘して置いて又次の或島へ、いつの間にか渡つて往つてしまつたのである。

宮古の炭燒長者は、島最初の歷史上の人物、仲宗根豐見親が六代の祖と傳へられる。之を事實としても西曆十四世紀の人である。沖繩本島に於てもちやうど其少し前に、鐵器輸入のあつたことが、半ば物語化して語り傳へられて居る。察度王が未だ其志を得ずして、浦添城西の村に侘しく住んで居た時、勝連按司の姫、夙く英風に傾倒して、往いて之にかしづくこと、政子の賴朝に於けるが如くであつた。王の假屋形は庭にも垣根にも、無数の黃金白銀が恰も瓦石の如く、雨ざらしになつて轉がつて居た。それを親與方が注意しても、笑うて顧みなかつたと傳へられる。其後鐵を滿載した日本の船が、牧港に入つて繫つた時に、察度は乃ち右の金銀をもつて、殘らず其鐵を買取り、農具を製作して島人に頒ち與へ、一朝にして人心を收攬したと謂ふのは、興味ある傳說では無いか。琉球の史家が此記事に由つて、然らば我島にも昔は金銀を產したかと、有りさうにも無いことを想像して居るのは、寧ろ孤島の生活の淋しさを同情せしめる。島の文化史の時代區劃としては、鋤鍬の輸入は或は唐芋よりも重大であつた。所謂金宮の夢がたりを傭ひ來るに非ざれば、說明することも六かしい程の、何かの方便を盡して、兎に角に農具は改良せられた。單に鐵を載せた大和船の漂著だけでは、文明の進化は見ることを得なかつた筈である。然らば此島現在の金屬工藝には、何人が先づ參與したのか。言ひ換へれば久米島の按司が、宮古の娘に與へた卷物は、最初如何なる船に由つて、南の群島へは運ばれたのであるか。それはもう終古の謎である。今はたゞ僅かに殘つて居る釜細工の舞の曲と、其行裝と歌の文句に由つて、彼等鑄工がもと旅人であり、物珍しい國から來たことを、窺ひ知るの他は無いやうになつた。江戶で女の兒が手毬の唄に、

遠から御出でたおいも屋さん
おいもは一升いくらです
三十五文でござります
もちつとまからかちやからかぽん

と謂ふのがあるが、之に附けても思ひ出される。斯う云ふ輕い道化は鑄物師たちの身上であつて、後に口拍子に眞似られたのではあるまいか。眞の芋賣りならば遠くからは來ない。所謂「取替へべえにしよ」の飴屋なども、潰れた雁首や剃刀の折れを、集めて持つて行くだけは古金買ひと聯絡があつた。併しもう忘れられようとして居る。此等に比べると釜細工といふ沖繩の舞は、まだ明瞭なる由緒を保ち、道具箱などは內地の鑄懸屋の通りであつた。或は流れ〳〵て金賣吉次の是も淪落の一つの姿であることを、推測しても差支が無いのかも知らぬ。

水に乏しい南の島々では、黃金を島に擲つ話は既に聞くことが出來ぬ。しかも大なる清水に接近して、所謂カンヂャヤーの石小屋を見ることは多い。カンヂャヤーは固より鍛冶から出た語であらうが、沖繩では鍋釜其他一切の鑄物を扱ふ者を總括して斯う呼んで居る。自分は南山古城に近い屋古の嘉手志川、或は石垣島の白保などで、幾度か好事の情を以て其小屋を覗いて見たが、曾て工人の働いて居る者に出逢はなかつた。恐らくは村から村へ、今も僅かな人數が移りあるいて、淡い親しみを續けて居るのであらう。彼等が炭の由來と黃金發見の信仰に

附いて、現に如何なる記憶を有するかは、自分の之を知らんとすること、恰も渇する者の泉を想ふ如くである。琉球國舊記等の書に依れば、炭には木炭と輕炭の二種があつて、輕炭を俗に鍛冶炭とも云ふ。大工廻村に炭燒勢頭地と謂ふ田地あつて、勢頭親部始めて之を製すと云ふ傳へあり。後世郷邑の宇久田と共に、毎年二種各二百俵の炭を王廷に貢した。其年代は不詳にして既に明白で無いが、三山併合よりも古いことでは無さゝうだ。

但し鍛冶以外の炭の用途も、勿論無かつたとは言はれぬ。島の神道に於ては火の神は即ち家の神で、所謂御三物の地位は、内地の近世の竈神、即ち三寳荒神よりも、遙かに高く且つ重かつた。今は僅かに火床の中央に、三塊の石の痕を留むるのみであるが、以前は祖先の火を此中に活けて、根所の神聖を保存したものと思はれる。火鉢の御せぢ（筋）は恐らくは之を意味し、火靈の相續は亦炭に由つて、爲し遂げられたかと想像する。此想像にして誤り無くんば、冶鑄技術の輸入は、則ち火神信仰の第二次の興隆であつて、民に銅鐵の器を頒ち賜ふが故に、其威德は愈々旺盛となり、終に王家をして之に據つて、能く民族統一の偉業を完成せしめたのである。之に反して内地の鞆遇都智神は、恩澤未だ洽からず、父雄族の之を支持するもの無く、天朝の傳承は寧ろ宮僕に不利なりし爲に、次第に其聲望を降して、終には炊屋の一隅に殘喘を保つに至つたが、是が果して東國九州の僻卑に住む民の信仰であり、殊には筑紫の竈門山の神などの、教へ導きたまふ所のものと、一致して居つたか否かは問題である。しかも此の如き地方的の大變化が、薪を一旦炭にしてから、再び之を利用する技術の有無に原因して居るとしたら、渺たる一個の小五郎の物語も、其の暗示する所は亦頗る重大である。

遠野物語の中には、深山無人の地に入つて、黄金の樋を見たと云ふ話があるが、其が火と關係あるか否かはまだ確實で無い。併し少なくとも火神の本原が太陽であつたことだけは、日と火の聲の同じい點からでも之を推測し得るかと思ふ。日本には火山は多いが、我民族の火の始は、之に發したのでは無かつたらしい。天の大神の御子が別雷であつて、後再び空に還りたまふと云ふ山城の賀茂、又は播磨の目一箇の神の神話は、此國のプロメトイスが霹靂神であつたことを示して居る。宇佐の舊傳が同じく玉依姫を説き、頻りに又若宮、相嘗を重んずるは、本來天火の保存が信仰の中心を爲して居た結果では無かつたか。岩窟に火の御子を養育すれば、第一の御惠は必ず炭と爲つて現れる。炭はまどろむ火であるが故に、之を奉じて各地に神裔を分つの風が先づ起り、金屬陶冶の術は則ち此に導かれたものでは無からうか。南太平洋の或民族、例へばタヒチの島人などの火渡りは、燃ゆる薪の中に石を燒いて、之を大きな竪坑に充たし、神系の貴族たちは列を作つて、其上を歩むのであつた。日本に於ても大穴牟遅神の、手間の山の故事のやうに、赤くなる造石を燒く習があつたとすれば、或種の重く堅い石が、猛火の中に滴り落つること、其石が凝つて再び色々の形を成すことは、所謂奥津彦奥津媛、即ち炭火の管理に任じた者には、殊に遭遇しやすき實驗であつて、之を神威の不可思議と仰ぐは勿論、更に進んで其使徒の大なることを諒解した場合には、必ずや新たに無限の歎を賦して、火の神の恩愛をたゝへんとしたことであらう。之を要するに炭燒小五郎の物語の起原が、もし自分の想像する如く、宇佐の大神の最も古い神話であつたとすれば、爰に始めて小倉の峰の菱形池の畔に、鍛冶の翁が神と顯れた理由もわかり、西に隣した筑前竈門山の姫神が、八

幡の御伯母君とまで信じ傳へられた事情が、稍明かになつて來るのである。所謂父無くして生れたまふ別雷の神の古傳は、至つて僅少の變化を以て、最も弘く國內に分布して居る。神話は本來各地方の信仰に根ざしたもので、其互に相容れざる所あるは寧ろ自然であるにも拘らず、日を最高の女神とする神代の記錄の、此ほど大なる統一の力を以てするも、尙覆ひ盡すことを得なかつた一群の古い傳承が、特に火の精の相續に關して、今尙著しい一致を示して居ることは、果して何事を意味するのであらうか。播磨の古風土記の一例に於て、父の御神を天目一箇命と傳へて、乃ち鍛冶の祖神の名と同じであつたことは、恐らくは此神話を大切に保存して居た階級が、昔の金屋であつたと認むべき一つの根據であらう。火の靈異に通じたる彼等は、日を以て火の根原とする思想と、いかづちと稱する若い勇ましい神が、最初の火を天より携へて、人間の最も貞淑なる者の手に、御渡しなされたと云ふ信仰を、持傳へ且つ流布せしむるに適して居たに相違ない。宇佐は決して此種の神話の獨占者では無かつたけれども、彼宮の神の火は何か隱れたる事情有つて、特に宏大なる恩澤を金屬工藝の徒に施した爲に、彼等をして永く其傳說を愛護せしむるに至つたので、炭燒長者が豐後で生れ、後に全國の旅をして、多くの田舍に假の遺跡を留めて置いてくれなかつたなら、獨り八幡神社の今日の盛況の、根本の理由が說明し難くなるのみで無く、我々の高祖の火の哲學は、永遠に不明に歸してしまつたかも知れない。然るに文字の記錄を唯一の史料として、上古の文明を究めんとする學者が、誤り欺き又は獨斷するに非ざれば、則ち絕望しなければならなかつた問題の眼目を、斯く安々と語つて聽かせ得る者が、隱れて草莽の間に住んで居た。さうして滿山の黃金が天下の至寶なることに心附かず、之を空しき礫に擲ちつゝ、孤獨貧窮の生を營んで居た。新しい學問の玉依姬は、今や訪ひ來つて彼が柴の戸を叩いて居るのである。

一〇

南の島々の金屬の始は、鑛物に豐かで無かつたばかりに、非常に我々の島よりはおくれて居た。それにも拘らずいつの間にか、炭燒長者は早ちやんと渡つて住んで居る。自分が本文の炭燒太良の話を聞いて後、佐喜眞興英君は其祖母から聽いたと云ふ、山原地方の炭燒の話を、南島說話に於て發表せられた。大體に於て宮古島の例とよく似て居て、此も亦女房の福分が、二度目の夫を助けたことを說くらしいが、濱の寄木の神樣から、赤兒の運勢を洩れ聽くことと、鍋のヒスコを額に塗る風習を、說明しようとした部分は落ちてしまつて、其代りとして前の夫が、死んで竈の神と爲つた點を詳しく傳へて居る。沖繩の宮古と二處の話を重ね合はすれば、ちやうど琉球神道記の江州由良里の物語に近くなるから、或は之を以て慶長の初頃に、袋中上人、旅の內地人から、聽いて記憶して居たものと見る者が有るか知らぬが、其では合點の行かぬ節々が少なく無い。殊に長者となるべかりし貧困なる第二の夫が、炭燒であつたと云ふ一條が、沖繩と宮古とにはあつて、中世京都附近に行はれた物語には見えず、しかも千里の海山を隔てた奧州の田舍で、現に口から耳へ傳承する話には、炭燒が又出て來るのは、如何にしても不思議である。

奧州方面の炭燒長者は、佐々木喜善君がその幾つもの例を採集して居る。今に書物になつて出るであらうが、さし當りの必要の爲に、二つだけ話の大筋を揭げて置く。一つは和賀郡に行はれて居るもの、他の一つは左々木君の居

村、上閉伊郡大角牛山の山口で、物知りの老女が記憶して居た話である。

（一） 木樵が二人山に泊つて同じ夢を見る。二人の家には男と女の兒が生れたが、女の兒は鹽一升に盃一つ、男は米一升の家福だと、山の神の御告げがあつたと思うて目がさめた。翌日還つて見ると果して子が生れて居る。成長の後夫婦となつて家が繁昌した。女房は一日に鹽を一升使ひ、盃には酒を絶さず、大氣で出入の人々に振舞をするので、小心の夫は之を見かね、離緣をしてしまふ。女房は出て行つたが、腹がへつたので大根畠に入つて大根を拔くと、其穴から酒が湧き出たので、

ふる酒の香がする
泉の酒が湧くやら

と歌ひつゝ、女房は其酒を飲んで、元氣になつて行くうちに日が暮れる。山に迷つて一つ家の鍛冶屋に無理にとめてもらふ。翌朝見ると鍛冶場の何もかもが黄金である。それを主人に教へて町へ持出し、賣つて長者になつたら、其あたりが町になつた。後に薪を背負うて賣りに來た父と子の木こりがあつた。それは女房の先の夫であつたと謂ふ。

（二） 或鍛冶屋の女房、物使ひが荒くて弟子たちにまで惜しげ無く黄金を與へる。夫の鍛冶屋はこの女房を置いては、とても富貴にはなれぬと思うて、三つになる男の子をそへて離別する。女房は道に迷うて山に入込み、炭竈の煙を見つけて炭焼小屋に辿りつく。小屋のヒホド竈に小鍋が掛つて居る。主人が還つて來たから泊めてくれと謂ふと、今夜此飯を二人で食へばあすはもう食ふ物が無いと當惑するので、明日は又何とかしますと、それを二人でたべて寢る。翌日女房は懐から金を出して、これで米を買うて來て下され。そんな小石で何の米が買はれべ、インニェこれは小石で無い。小判と謂ふ寶物だ。こんな物が寶なら、おれが炭焼く竈のはたは、みんな小判だと謂つて笑ひながら、それでも寶物に町へ出た。其あとで女房が往つて見ると、成程竈のまはりには黄金が山のやうだ。之を運ぶと小屋が一杯になつて、入口から外へ溢れる。そこへ町から爺が還つて來る。一俵の米が殘り少なくなつて居るから、わけを聞くと途中で腹がへつたので、俵から米をつかんで食ひ〳〵來た。後からも人が附いて來るから、其人にも一つかみづつ投げてやりながら來たと謂ふ。其人といふのは自分の影法師のことであつた。さういふ風の人なれども女房はさらはず、次の日から其金で米を買ひ木こりや職人を呼んで、家倉小屋を數多く建てさせ、そこで炭焼長者と呼ばれるやうになると、其邊も村屋になつた。ところが先夫の鍛冶屋は女房を出してから、鐵を打たうとすれば鉈になり、鉈と思へば斧になる。けちが附いてろくな仕事も出來ないので、乞食になつてしまひに炭焼長者の門に來る。女房がそつと見ると元の夫であつたから、米三升をやつて無くなれば又來よと謂つて返す。それから長者の夫にも話して、其々にすゝめて下男にする。何も知らぬから悦んで、一生この炭焼長者の所で暮してしまふ。

同じ老女の話したうちには、右の二つの物語が一つに續いて居るのもある。插話があつてあまり長いから拔錄をしなかつたが、それにも大根を拔いた穴から甘露のやうな酒が出て、之を賣つて自ら長者の女主となつたとあり、即ち一方には田山小豆澤のダンブリ長者の話とつゞき、他の一方には三戸郡の炭焼籐円郎の蕪を食べた話とも緣をひく。殊に面白いのは先夫に福分が無くて、藁に黄金を匿して、草履を作つて來いと謂つて渡すと、夜中に寒いので其藁を金と共に、ヒホドに燃してしまふ。握り飯

の中に小判を入れて遣ると、歸りに沼に下りて居る鴨を見かけて、其むすびを投げつけてしまふ。女房はさて〳〵運の無い人だと嘆息して、すゝめて我家の下男とする。さうして酒屋長者の家で一生を終ると云ふのである。但し此方では長者は濁身の女主で、黄金は發見せずに酒の泉を發見した。第一の話は後の夫が鍛冶屋、第二の話だけは炭燒であるが、やはり亦前の亭主を鍛冶屋にして居る。他の類例を集まる限り集めて見たら、必ず變化の中から一定の法則が、見出されることと信ずる。要するに話を愛した昔の人の心持は、一種精巧なる黄金の鏈の如きものであつた。

二

歌の豐後の炭燒小五郎が妻は、容みにくしと雖、都方の上﨟であつた。弘い世間に夫と頼む人が無いので、日頃信仰の觀世音の靈示に從ひ、遙々と鄙の山賤を尋ねて來たと云ふのが、物語の最も濃厚な色彩を爲して居るが、是は所謂佛法の影響であつて、又中代の趣味であらう。信心深い男女の間の前世の約束と云ふ單簡な語で、省略してしまつた身の運、家の幸福の説明は、話に此ほどの共通がある以上は、後に來つて附加はつたものとは考へられぬ。況や其背後にはどこ迄も、火の神の思想と古い慣習が、殆ど無意識に保存せられて居たのである。阿波の糠の丸長者の娘の嫁入には、觀音の代りを家の守り神の白鼠がつとめた。

陸中の話では旅の六部に敎へられて、月の十五日の朝日の押開きに、九十九戸前の眞中の土藏の屋の棟を見ると、紫の直垂を着た小人の翁が三人で、旭の舞を舞うて居た。うつぎの弓に蓬の箭をはいで之を射ると、小人は眼又は膝を射られて忽然として消去り、それから家の運は傾いた。或は又路に三人の座敷ワラシかと思ふ美しい娘に逢ひ行く先をきくと、この山越えあの山越えて、雉子の一聲の里へ行きますと、幸運の住家を敎へてくれる。それが宮古の島ではユリと稱する穀物の精と現れて、女性を炭燒の小屋に導くのである。沖繩本島に於ては又變じて雀(クラー)になつて居る。折目の祭の日に下男の言ふまゝに、新米で飯を炊いだのが惡いと謂つて、夫に追出された女房が、こゝに隱れかしこに遁げて去りかねて居ると、斯う謂つて雀は彼女を導いた。

クル、クル
クマホスダカラン(爰には住まはれぬ)
ヤンバルヤマカイ(山原山へ)
タンヤチグラカイ(炭燒のクラへ)

さうして炭燒の妻に爲つて、忽ち金持になつたのであるが、この古い古い公冶長系統の一節も、亦袋中上人所傳の外であつた。

第二に注意することは、炭燒を尋ねて來た女性に、別に一人の同行者があつた點である。宮古島の舊史には鄰夫を伴ひとあり、佐々木君の話の一つには下女を連れて行くとあるが、今一つの方では三つになる男の子を附けて離別したことになつて居る。或は又前の男が貧乏をしてから、其子をつれて薪を賣りに來たともある。何か仔細のあつたのが、もう忘れられたものと思はれる。佐喜眞君のおばあさんの話では、沖繩では女は姙娠の間に追出され、炭燒にとついでから男の子が生れたことになつて居る。零落の夫がもとの妻であることを知らずに笊を賣りに來ると、長者の子供が彼に向つて惡戯をした。女房に向つて御宅の坊ちやまが、惡さをなされて困りますと謂ふと、今まで知らぬ顏をして居たのがもうたまらなくなつて、自分の子供まで見知らぬとは、何と云ふ馬鹿な人だと歎息したので、始めて昔の妻子かと心附き、其まゝひつくりかへつて死んでしまつたとある。

此様な何でも無いこと迄が、手近の琉球神道記とは似ないで、遠い雪國の村の話と、一致しようとして居るのは何故であらうか。

不思議はまだ是ばかりで無い。沖縄では斯うして恥ぢて死んだ男を、其まゝそこに埋めて、上に庭の飛石を置き、それから茶を飲む度に一杯づつ、その石に灌いで手向にしたとある。其點が亦附いてまはつて居るのである。不運な前夫が知らずに來て、元の妻の世話になることは、何れの話も一樣であるが、奥州では單に勸められて下男に傭り、炭竈長者の家で一生を終つたとある。之に反して江州由良の里では、其作の翁は長者の臺所に來て食を乞ひ、別れた女の姿を見て恥と悔とに堪へず、忽ち竈の傍に倒れて死んだのを、後の夫に見せまい爲に、下人に命じて其まゝ竈の後に埋めさせた。それが此家の守り神と爲つたと謂ひ、それを竈神の由來と傳へて居る。清淨を重んずる家の火の信仰に、死を説き埋葬を説くのは奇怪であるが、越後奥州の廣い地方に亙つて、醜い人の面を竈の側に置くことが、現在までの風習であるから、是には倘さら傳へらるべかりし、深い理由があつたのであらう。廣益俗説辨には何に由つたか知らぬが、三寶荒神の始は、近江甲賀郡由良の里、百姓の夫婦と其婢女と、三人を祀つて竈の神にしたと云ふ、別の傳承を載せて居る。由良は通例海邊の地名であるから、近江は誤で無いかとも思ふが、何か此方面に、人の靈を火の靈として崇拜する、昔の理由が隱れて居るやうにも思ふ。

若し此推測にして誤無くば、宮古の炭燒の話の發端に、二人生れた赤子の中で、女の方は額に鍋のヒスコを附けてあるから、一日に糧米七升の福分を與へ、男の兒は其事が無かつたから乞食の運ときめたと、神々の談合が有つたと謂ひ、それ故にこそ今に至る迄、生れ子の額には必ず鍋のヒスコを附ける也と、北の島々で宮參りの日に、紅で犬の字を描き、又は作り眉をするのと、よく似た風習を説明しようとして居るのは、是と同じく竈の神の信仰に基くもので、竈と炭との關係を考へ合せると、假令京都近くの書物に傳はつた話には見えなくとも、長者を炭燒とした話の方が、一段古い樣式であつたと考へてよろしい。

諸の蘆苅の元の型は、今昔と大和と二つの物語に見え、その贈答の歌は既に拾遺集にも採擇せられて居る。それが純然たる作爲の文學で無かつたことは、大和物語に於ては前の夫が、上臈の妻を見知つて我身の淺ましさを恥ぢ、人の家に逼げ入つて竈の後にかゞまり隱れたとあるのを見てもわかる。蘆を刈つて露命を繋いだと謂ふのも、必ずしも「あしからじ」又「あしかりけり」の二つの歌が先づ成つて、これを能因法師の流義で難波の浦に持つて行つたと解することが出來ぬかと思ふのは、全然同種の近江の話に箕作の翁と謂ひ、沖縄に於ては竹を賣りに、奥州に於ては草履を賣りに、或はマダ木の皮を剝ぎ又は薪を刈つて、之を背負うて賣りに來たと謂ふのが、同じやうな侘しい姿を思はせ、事によると肥後の蘆編みや蓆綾り長者、筑前の藁打ち長者の因縁を引くかとも思はれる上に、更に偶合としては餘りに奇なることは、豐後の内山附近にも蘆苅と云ふ部落があり、同じく臼杵の深田村では、小五郎の子孫と稱して蘆苅俊蔵氏あり、更に同じ苗字が弘く宇佐地方に迄も及んで居ることである。曾て後藤嘉門太君が寫して示された、豐後海部郡の花炭の由緒書には、小五郎七十八代の後裔草苅左衛門尉氏次の名を錄し、豐鐘善鳴錄には長門國にも、草苅氏と云ふ一門が分れて居たと記してある。所謂山路の草苅笛の故事を連れば、蘆苅は寧ろ誤では無いかとも思つたが、

現に之を名乘る舊家がある以上は、爭ふべき餘地が無い。更に進んで其舊傳を、究めて見たいものである。

二

果しも無い穿鑿は、もうこの位で一旦中止せねばならぬ。他日若し幸ひに機會があつたら、宇佐の根原が男性の日の神であり、其最初の王子神が、賀茂大神同系の別雷であり、次の代の若宮が火の御子であり炭の神であつて、所謂鍛冶の翁は其神德の顯露であつたと云ふことの、果して證明し得べきや否やを究めて見ようと思ふ。現在の祠官たちの承認を得ることは難いが、八幡には今尚闡明せられざる若干の神祕があるらしく、是は只その一端だけである。自分の試みは單に文字記錄以外の材料から、どの程度まで大昔の世の生活が、わかるであらうかと云ふ點にあつて、殊に奈良の京以後突如として大いに盛んになつた宇佐の信仰が、本來は南日本の海の隈、島の陰に、散亂して住んで居た我々の祖先の、無數の孤立團體に共通した、至つて單純なる自然宗教から出たもので無いかどうかを知りたかつたのである。託宣集や愚童訓別本を見ると、宇佐の山上には最も神靈視せられた巨大なる三石があつた。火の神とは傳へて居らぬが、寒中の中にも曖昧ありといひ、又は金色の光を放つて王城の方をさすとも謂つて居る。さうして三箇の石は竈の最初の形であり、從つて火神の象徴であることは既に認められて居る。之に由つて所謂三寶荒神の思想も起つた。沖繩諸島に於ても御三物と稱して三石を火の神に祀つて居る。たゞ未だ其起源に關しての說を聽かぬが、三箇の略同じ大きさと形の石が、引續いて海からゆり揚がる時は、之を奇瑞として拜したやうである。この二つの信仰には恐らくは脈絡があるであらう。即ち南島の從兄弟たちは、未だ石凝姥・天目一箇の恩澤に浴せざる以前から、我々とよく似た方式を以て、根所の火に仕へて居たのである。炭燒長者の話がいと容易に受入れられた所以である。

遺老說傳には與那覇親雲上鄭玖、或日未明に久米村から、首里の御所に朝せんとして、浮繩美御嶽の前を過ぎ、一老人の馬に炭二俵を積んで來るに逢うた。老人は强ひて玖をして家に引返さしめ、且つ其炭俵を與へて去る。後に侍僮をして之を焚かしめようとするに、どうしても燒けず、よく見れば炭は悉く黃金であつたと謂ふ。信州樹原の伏屋長者が半燒けの炭を神棚に上げて置くと、それが忽ちに金に化したと云ふのと、全く同日の談であつたが、黃金を產せぬ島では、殊に此不思議は大きかつたことと思ふ。即ち千瀬の練絹を以て取圍んだ蓬萊山に在つても、父が炭燒藤太で無ければ、其子は金賣吉次であり得ないと云ふ理窟が、はつきりと其世の人の頭にはあつた。但し我々は今が今まで、もう之を忘れてしまつて居たのである。

阿遲摩佐の島

大正十年二月二十一日夜、久留米市中學明善校にて談話。
此夕大いに雪ふる。

一

十二年前に、一度私は此地を通つて矢部川の上流に遊び、冬野と云ふ村を經て、肥後の來民へ出て行き、それから段々と南の國を廻つたことがあります。阿蘇の火山を中心とした中央部の山地にも、三方四方から入つて見まして、今尚鮮明なる色々の印象をもつて居ますが、今回は島々の旅から還つて來たのであります故に、御聽き下さるならば主として海の方の話をしたいと思ひます。前回は鹿兒島ではちやうど今の大みかどがまだ東宮に御いでになつて、海を渡つて行啓を遊ばされたばかりの時でありました。縣の物産館に、其折獻上をした蒲葵の笠や團扇と同じ品が、記念の爲に陳列してあるのを見て、始めて私は舊日本の國土にも、此植物の在つたことに心附きました。さうして更に考へて見ると、山城の京の數百年の間、白く晒したビロウの葉を以て、美しい車を造り、之を牛に牽かせてあまたの貴人たちが、都大路や郊外の野山を、清少納言の所謂「のどやかに遣つて」居たので、勿論其原料の樹木が、國内の何れかの地に、成長して居たことを推測せねばならなかつたのであります。飾抄と云ふ書物には、檳榔は前關白近衞殿の御領、鎭西志摩戸莊の土産なり。仍て所望して之を用ゐると有ります。志摩戸は即ち今の島津家の名字の地で、大隅國の東の境、近世略して莊内と呼んで居た廣大なる莊園でありまして、現在は最早内陸の方には、此木は一本も無いやうでありますが、志布志の港町の前面、一里足らず離れた海上に、大なる蒲葵島があつて、高く抽き出た若干の松を除く外、全山すべて蒲葵であります。現に獻上の笠扇の類も、此地の住民が請まはつて製したものだと承りましたが、常から若干の住民が、今尚此職に携はつて居るのであります。

島津氏の所領は、中世以後次第に膨脹して、更に薩摩の西海岸に於て、幾つかの蒲葵ある島を包容しました。南から算へると秋目の港外に、優雅な姿をして立つ枇榔島、串木野村の海上十八町に在る羽島一名沖の島、阿久根の沖に在つて曾て島主が此と都島とを放したと云ふ蟶島一名桑島の如き、地誌や地圖に現れたものでも是だけあります。日向の東海岸にも、尚幾つかあるやうです。就中宮崎の市から僅か南、折生迫に接した青島は有名で、近頃は澤山の繪葉書も刊行せられ、汽車に乘つてみんなが見物に行く様になりました。即ち所望する人が有るならば、餘の檳榔毛の車の用ゐる料ぐらゐは、どこからでも之を採取することが出來たわけであります。しかも此物を特に大隅の島津莊からばかり出すことに爲つたのは、全く輸送關係の變遷からでありまして、決して此地方以外に蒲葵を産する島が無かつた故ではありません。距離は遠方でも島津莊は至つて大きな莊園で、年貢や人の往來の爲に兵庫境への船便が幾らも有り、近い處よりは却つて取寄せること容易であつたらしいのです。

延喜式の時代には、まだビロウで飾つた車は

流行しなかつたのですが、他に朝廷の御入用が有つて、九州では太宰府が、之を取揃へて貢進しました。即ち民部省式の下に、檳榔の馬蓑六十領、同じく螻蓑一百二十領とあるのがそれであります。車の代りに乘馬の飾りとして、賞玩せられたらしいのであります。太宰府は御承知の如く、九州二島を併せ支配して居りましたから、此も亦大隅薩摩などの島より取寄せたものとも想像し得られるか知れませんが、さう迄せずともずつと近くの海岸にも、處々に蒲葵は生長して居たのであります。それから又典藥寮の式には、太宰府より進する年料の雜藥十二種の内に、檳榔子二十斤と云ふのが見えます。是も多分蒲葵の實のことで、中世以後支那から輸入して香料藥用に供し、後には染物にも使はれたる本物の檳榔子とは、別の品であつたらうと考へます。蒲葵は元來檳榔とは全く別種でありまして、蒲葵をビロウと呼ぶのは混同の誤りかと思ひます。松村博士の植物名彙に依れば、蒲葵は Livistonia Chinensis Br. で支那の在來種、檳榔は Areca Catechu L. で輸入種だとあります。其檳榔は沖繩の島でも、首里の園覺寺に二三本、傳來の知れたものがある位で、内地の方には成長せぬものであつたのに、始めて漢字を日本に持込んだ時代、うつかりと蒲葵の木に、檳榔の字をあててしまつたのです。最も最初には、字音を以て之を呼んだので無く、別にアヂマサと云ふ語がありました。例へば檳榔之長穗宮と書いてアヂマサノナガホノミヤ、大山下狹井連檳榔と書いてサヰノムラジアヂマサと唱へて居たのでありますが、次第に漢字に親しくなつて、牛車の行はれる頃には、大かたの者が之をビロウ毛の車と謂ふやうになり、從つて此木もさう呼ぶに至つたのと見えます。或は説を爲して、檳榔の字とは關係は無い。比閭といふ漢語の音を移したものであらうと謂ふ人があります。新井白石先生なども其一人であるかと思ひます。枇閭は又栟櫚とも書き、即ち日本に多くある棕櫚のことでありまして、檳榔などよりは遙かによく蒲葵と似て居り、支那でも折々之を混同した人があると申しますが、併し判別は決して六かしくありません。一方は葉がこはく幾筋にも分れてをり、蒲葵は柔かくて續いて居ます。柔かい故に笠や團扇にも造ることが出來るのです。又棕櫚には繩にするやうな丈夫な毛が有る代りに、葉は決して白く美しく晒すことが出來ませぬ。それに一方は隨分寒氣にも堪へて、中部以北の霜雪の中にも繁茂しますが、片方は南の海邊だけの物で、今迄我々でも知らなかつた位であります。花や實を見ても、其香氣を嗅いでも、又單に樹の形だけでも、見分けることは容易ですから、比閭と云ふやうな耳馴れぬ漢語を採用する餘地も無く、又ビロウをヒリョと呼ぶ人は無かつたやうで、結局は檳榔と云ふ異國情調の豐かな文字に絆されて、千年前の古人も尙誤を遺したものであります。

二

九州以外の國からも、所謂檳榔の葉は之を朝廷へ納めて居りました。同じく民部省の式の次に諸國の年料別貢の雜物、伊豫國檳榔二百枚とあるなどが其證據であります。伊豫には西南に暖かい島が多く、現在土佐に屬して居る沖島あたり迄、昔は其管轄であつたから、幾らも之を採取することが出來たことゝは思ふが、果して今のどの島に産したものか、實地を見ないから想像が附きませぬ。流布本の延喜式は此條に誤りがあつて、檳榔の櫛二百枚となつて居る爲に、色々無用な想像説も出たやうですが、櫛には何としても製しやうの無い植物で、全く是は榔の字の重複を櫛の字と見た誤衍であ

り、二十四枚の數は蒲葵の葉を算へたものであります。そんなら其葉は何の爲に御用ゐになつたかと申すと、それも同じ延喜の内膳司式に、年料の十一月、向う一箇年の料として請受くる檳榔葉二十八枚、內八枚は御飯を扇ぎ涼す料、他の二十枚は炭火を扇ぐ料とあるなどが、其用途の一例でありました。禁中の御仕來りは些細な事でも、斯うして禮儀を定め置かれるほど、古風をよく守るものであるのに、どうして又御飯をさます扇までに、珍しい遠地の産物を御使ひなされたものであらうか。單純なる物好みとは私には考へられないのであります。或は尊い御方の御食物に當てる風は、特に蒲葵の葉より生ずる風で無ければならぬ、道理があつたのでは無いか。伊勢の齋宮でも每年御作所の料として、此葉を二枚づつ乞ひ請けて居られたと言ふのを見れば、或は何かもう忘れてしまつた特殊の事情が、あつたのかも知れぬと思ひました。此蒲葵の扇は今でも人がほしがるやうに、しやれたものでもあれば高貴な物でもありました。昔の不自由な時代に、之を扇にしようとしたのは自然であります。故に只の人も其扇を使つて居たことは、繪巻物などに折々現れて居ります。今日南支南洋からみやげに持つて還る團扇とは形がまるで違つては居ましたが、以前は山伏修驗者も必ず之を携へて居ました。しかも日常の家具としてでは無く、修法の時には必ず腰にさし護摩の爐には此で火を起す、言はゞ一種の信仰上のシムボルであつて、其名も陰陽道、因んで寶扇と謂つて居たのは、初め蒲葵扇の音に由つたものであります。國史大辭典の修驗道の條には、其蒲葵扇の繪が出て居ます。其形で仙人や隱者が手に持つ團扇とは、まるで形のかはつた、頭が小さく且つ三角なものであります。其昔内膳の司に於て用ゐられた蒲葵の葉も、果して此と同じ形であつたかどうかは知らず、とにかくに扇に編んで使つたことだけは疑ひがありません。

延喜式の出來た時よりもずつと前、光仁天皇の御代しろしめす寶龜八年の正月に、渤海國の使節史都蒙等が國に歸るに臨みて、かの國王に書を賜はり、海石榴油一缶、檳榔の扇十枚等を、請に任せて贈り賜はつたとあるのが、多分は記錄に此植物の名の顯れた初度であります。御承知かと思ひますが、渤海は高句麗の遺種で長白山の北麓から、今の浦潮斯德豆滿江の邊までを版圖として、獨立して居た一國でありますが、當時强大なる契丹に伸を遏られ、南出して支那の文明に接觸することが出來ず、艱難の海路を越えて遙々と我國に誼を求め、前後百六七十年の間も、參り通うて居たのであります。さうして雪深き彼等の本國に於て、海のこなたの綠の島をゆかしがつたことは、一つには又珍しい南方の産物が、望のまゝに給與せられた爲かとも思はれます。即ち渤海王朝の人々に取つては、我が一群のやまとの島々が、やはり所謂阿遲摩佐の島も見ゆ―であつたらしいのであります。

三

私は傍道へ進んで、この蒲葵と云ふ植物が、現在どの邊まで分布して居るかを知らうとしました。薩摩の西海岸のビロウ島のことは前に申しましたが、それから北に進んで肥後の八代郡にも、檳榔島といふ島がありました。八代城から西三里餘に在り、渡海の船の風濤を避くるもの、多く來り泊するを以て一に著島とも謂ふ。蒲葵の木多く、賞まし〳〵て此を採ることを惜みたまふ。又蛇多し。寶暦の頃より薩摩の土人、往々にして來り盜むと、肥後國志には書いてあります。かの國人が聽いたならば、必ず抗議すべき記事でありまして、私もそんな必要は無かつ

たやうに思ひます。不知火灘の沿海には、其後段々の埋立新田が出來て、此島も今は内陸につづいてしまつたやうでありまして、兎に角に此木の繁茂して居る島は、暫くあの邊を旅行して見ましたが、終に心附かずにしまひました。

それから有明海島原半島の沖などには、有るかも知れませぬがまだ聞いて居りませぬ。併し肥前には古風土記の松浦郡値嘉郷、小近大近島の條に産物として檳榔を擧げて居ります。即ち昔から既に知られて居たのであります。五島の中には亦一つの枇榔島のあることが、日本實測錄には見えてゐます。今は美良島と書いて、福江島の南の端に近くあります。平戸附近の島にも、近年出來た「平戸しるべ」と云ふ本に、アコウ・ビロウ・ヘゴ・チカラシバなどの亞熱帶植物が健全に成育するとありまして、上下阿値の小島などにも澤山在るさうです。貝原氏の大和本草にも、肥前平戸に蒲葵多し、對馬にてゴハと謂ふとあります。朝鮮全羅の多島海にも檳榔嶼或は蒲葵嶼と名くる小島が二つまで地圖の上に見えますから、それより緯度の低い對馬にあるのも不思議ではありませぬ。それよりも珍しいのはゴハと云ふ名稱が飛んで此邊の島にあることです。ゴハは事によるとコバの聽き誤りかも知れませぬ。沖縄縣の諸島では、到る處蒲葵をクバと稱し、ビロウと云ふ語を知らぬのでありまして、大隅日向の南端にも、尚コバと謂ふ名詞が殘つて居ます。今の沖縄語ではオ列は悉くウ列に發音し、現に書いた物には多くコバと爲つてゐますから、勿論一つの語であります。或はがば〳〵といふ葉の音から出た名稱かも知れませぬ。しかも京都の文人たちも、全然コバと云ふ語を知らなかつたわけでも無いのに、どうして又誤つたるビロウの方に移つてしまひましたか。今の若い人が英語を口にすると同樣な、輕々しい風流心にでも歸するの他はありませぬ。赤染衛門の歌の集に、人の許にコハの有るを一つ乞ふに惜みければ、出したるまゝに取りて還りて、云々とあつて「盜むともこは憎からぬことと知れ」と云ふ歌があります。伊勢貞丈は右の大和本草の記事を引いて、コハは即ち蒲葵である。車の飾などの用途の爲に、京都に取寄せて貯へて居たものを、一枚だけ所望したのであらうと謂つて居ます。さすれば沖縄の島言葉が、後に内地の方へ移つたものとは、愈ゝ推定しにくくなるのでありまして、注意して居たならば地名か何かになつて、尚内地にも痕を留めて居ることが、見出され得るかも知れませぬ。

本土の海岸で此植物の成長するのは、現在の私の知識に於ては、紀州が北の限りであります。紀伊國續風土記の物産の部に、蒲葵ビロウ、在田郡處々に產す、北地には絶えて無しとあります。小野蘭山の享和二年作の日記にも、湯淺の町に近い廣村の八幡宮の社地に、巨大なる蒲葵の一本を見た記事があつて、是は確かであります。和泉には何處かに此樹があるといふことが、白石手簡の中には謂つてあるが、此方は噂ばかりで、まだ實跡を得ませぬ。併し必ずしも空な話で無いことは、大昔仁德天皇の淡路島行幸の折に、御眺望に入つた阿遲摩佐の島が、是より遠からぬ海上に在つたと云ふ一事からでも認められるのです。近世に右の御製の註釋をした橘守部は、斯う云ふことを書いて居ります。大阪の商人で淡路島の産と云ふ蒲葵の葉を賣つて居る者があつたので、其店に就いて問合せて見たところが、實は淡路の近傍に一島蒲葵のみを生ずる小島がある。其島から持つて來るのだが、世間の人が普く知らぬ島だから、假に淡路からと謂つて賣ると答へた。多分は其島が大昔のアヂマサの島であらうと謂つてあります。其在り所がはつきりとせぬ限り、何故

とも云ふことは出來ませぬが、兎に角に近い頃まで、瀨戸內海の東部に此樣な島があつたものかと思ひます。現在はもう跡形が無くても、それで此話を疑ふわけには行きませぬ。保安林の制度が定められた前、一時盛んに島の木は伐られました。名ばかりビロウ島と稱して其木の絶えた島が、既に幾つかあるのです。土佐の西南幡多郡柏島から一海里ほど沖に、地圖にもビロウ島とある岩山があります。土州淵岳志には之を蒲葵島と記し、地方の人民が舟で渡つて蒲葵の葉を採り來り、笠に縫うて賣買する、地は狹くして漁民も住み得ず、今は殆ど他の植物が無いと謂つて居ますが、其は悉く昔の事實で、前年私の友人關田健一郎君が、行政裁判所から臨檢に往つて來ての話には、ビロウは今はもう三本しか無い。全島繁る寒菅の大きな株が繁茂し、俗にカツヲ鳥と稱する大水凪鳥が、無數に其陰に子を育てて居るのを見たと云ふことであります。同じ書物の中には此植物、土佐には此島より外に無しとありますが、それは亦信じられませぬ。現に土佐國の內陸に關する地名にも、蒲葵と云ふところがありました。斯うして考へて行くと、ビロウ即ちコバは我々の祖先の生活と、遙かに今よりも親しかつたこと、其が次第に都近くから消えたのは、寧ろ餘りに之を賞用した爲であつて、天然は必ずしも其生長分布を妨げて居たので無く、只幾分か繁殖の條件が南の方よりは惡かつた結果、此の如く需要に追附かなくなつた迄だと云ふことが、漸く明かになるやうに思はれます。所謂檳榔毛の輿や車は、蒲葵の葉が手に入らぬ場合には、菅の葉を以て之に代へたさうであります。菅は素より京畿以北の日本に、盛んに茂つて居た水草ですから、菅の笠には之を用ゐてよかつたのですが、それにしても笠を作ることを縫ふと謂つたのは、菅と云ふ草から始まつた語とは思はれません。伊勢の神官の御田植の神事か何かに、必ず蒲葵の笠を著て居た例があると云ふことを、白井教授から承つたことがありますが、後にはどう變化して居るものか、尋ねて見たいと思つてまだ其儘になつて居ます。伊勢には限らず國々の社の神態には、昔は笠が大へん重要な裝束の一つでありました。其笠がもと何物で縫はれてあつたかは、我々の信仰の由來を究める爲に、至つて大切なる問題であります。次には中世の流行であるにしても、車を蒲葵の葉で葺き又は飾ると云ふ風習は、つきも無く卒然として始まるべきものでありません。是にも何か今一つ前の代から、其根ざしに爲つた古い生活の法則があつたのではありますまいか。古事記の垂仁天皇御宇の條に本牟智和氣御子出雲國に到り、檳榔之長穗宮に坐すとある記事は、凡そ二つの場合を想像させます。即ち當時はあの國の海にも蒲葵島があつたか。さうで無ければ大分の遠方から、此葉をたてまつらしめて、兎に角に御假宮はアヂマサを以て葺き且つ圍はれてあつたか、或は又其宮を斯く稱へるだけの別の理由、例へば菅などを以て白くと、美しく淸らに屋根を蔽うて、人をして永く此植物の名を記憶せしめたのか。何れにしてもこの葦原の中つ國に、久しく住み著いた後までも、コバは尙我民族に屬した樹木であつたのであります。

四

大正二年の春、郷土研究と云ふ雜誌に、私はこの蒲葵島の話をざつと書いて、如何にして蒲葵が古くから日本の土地に分布して居たかを考へて見ようとしました。それには此木の形がいかにも南洋くさく、琉球のやうな低い緯度には似附かぬやうに思はれたことと、其從兄弟の棕櫚なるものが、中世以後の歸化植物であるらし

いことから、稍一種の豫斷を作つて居たかも知れませぬが、兎に角に豐後水道の兩側の島々、或は朝鮮半島の一端から五島平戸甑島の內側にかけての一列と、何れも略南北線の上に連つて居るのを見て、是は春秋の渡り鳥が種子を運搬するのでは無いかと推測しました。海沿ひの地の温度濕度が特に繁殖の條件であるならば、島と相對した內陸にも有るべき筈なのに、獨り人住まぬ靜かな島だけに此物を見るのは、無心無感覺の運搬者では無いだらうと考へたのであります。殊に此推測を強めてくれたのは、天野信景の隨筆鹽尻の記事でありました。同書(帝國書院本)卷五十三にはこんな事が書いてあります。日向の海にビロウ島がある。毎年朝鮮の方から鵯千萬と無く渡り來つてビロウの實を食ふ。其後鷹集りと稱して、何日か續いて薄雲の空を蔽ふことがある。土地の人たち鷹來るべしと謂ふに、必ず鷹多く韓地より飛び渡る云々。日向の人から聽いたらしい話で作り事とは考へられず、又東部日本に於ても、椋鳥鵯などの來る路と期日とは一定して居りまして、從つて食料などの約束も不變ですから、今まで蒲葵の無かつた遠方の島にも、いつかは此種を運んで繁茂せしめることが有つたらうと、考へて見たのであります。

　ところが久しからずして、此說の弱點は露れ始めました。先づ第一著には本多林學博士が、蒲葵の實は大きくて、とても鵯には食へないと申されました。實は最近まで、私はビロウの實は見たことが無かつたので、この專門家の横槍には頗る閉口いたし、且つはつく〴〵と書齋の學問の、しやうも無いものであることを感じました。そこで今回の南日本の旅には、最初から團子爭ひのおどけ話のやうに、ビロウの實コバの實と口癖に唱へながら、島々を經廻つたのであります。さうすると第二に行き當つたことは、蒲葵の分布が豫ての想像よりも、ずつと廣かつたと云ふことであります。即ち紀州の湯淺邊にもちやんと古木の蒲葵がありました。又人の住む島にもやはり立派に成長して居ました。豐後の姫島にもあると云ふことを教へてくれた船乘りがありましたが、それは自分で見たのではありませぬ。同じ國の中浦半島、即ち鶴見崎の鼻を南へかはりますと、眼の先に沖の黑島が現れ、そこにはもう此木がありました。それから下入津の村を横斷して蒲江の港に出れば、海上四里ばかりに深島と云ふ島があり、日向へ行く船は其近くを走ります。此には住民も二十何戸、蒲葵林の傍に小學校の分教場まであるのです。日向でも青島から南には處々に此木を見かけます。油津を船で乘出すと、少し行つて築島と云ふ島は、やはり小さな部落があり、土藏の白壁に蒲葵の緑の影が搖いて、ちよつと珍しい風情を見せて居りました。此對岸は南那珂郡市木村の山地ですが、僅かながら處々に蒲葵が生えて居るさうです。青島の如く保護せられて居らぬ爲に次第に無くなると申します。現に近頃の共進會にも、根附きのまゝ出品するやうに、郡長が勸誘を受けたけれども、入費が高くつくので中止したとも聞きました。都井の岬の御崎神社は野生の蘇鐵を天然記念物として保存して居ますが、蒲葵はもと無かつたやうです。それを新たに築島から移植しようと試みて、思ふ通りに根を下さなかつた、半枯れの木を幾つか見ました。併し今暫くすれば、爰も一つの蒲葵の名所となるかも知れませぬ。大隅半島に入つて見ると、島で無くても蒲葵は多く、殊に神社の境內には、必ずと謂つてもよい位にあります。佐多の岬の御崎神社は、島津家で尊崇せられた航海の保護神でありますが、社頭には蘇鐵よりも蒲葵が多く、其の見事なる老木を以て靈境を取圍み、私が參詣した十二月晦日

には、よく熟した實にあまた落ちこぼれ、又去年、實から新芽を抽き出して居ました。此社の信仰に於ては、みだりに之を採ることを禁じて居るやうであります。其代りには岬の前面に小さな一つのビロウ島があつて、土地は燈臺に屬して居ますが、村の者の葉を採ることを大目に見てゐます。年にざつと三百圓ほどの物で、下駄の鼻緒や笠などを造つて賣ると云ふ話であります。

私はこの九州の南の端まで往つて、漸く氣附いたことが三つありました。一つにはいくら土地の人の謂ふことでも、一から十まで其儘は信じられぬこと、殊に彼等が知らぬと云ふのを、直ちに無いとは解すべからざることです。例へば私が試みに此木の名を問ふと、ビロウと答へてコバとは謂はないと明言した者が、少し間を置いて又試みに此葉は何に使ふと聞いたら、コバ笠を作るのだと謂ひました。斯んな經驗は沖繩の方でも何度か有つた。多くの人は忘れたと云ふことを忘れて居るものであります。第二には此植物の用途が、南日本の田舍に於ても思ひの外弘くして、屢々繁殖が間に合はぬらしいことであります。從つて今は少しも無い地方にも、昔から蒲葵が成長しなかつたと思ふことは、誤りの斷定を導く虞があります。第三に蒲葵が我邦に固有であつたことは確かとしても、どれが野生でどれが栽植であるかの差別は、さう容易には立てられぬことであります。ちがつた言現しをするならば、コバの樹の分布に就いては、鵯などよりも遙かに貴く且つ價ある者が、其運搬及び保護に參與して居たらしいことであります。此點は南の島々を巡つて、愈々之を確かめましたが、南九州の各地に於ても、今日蒲葵の存在する場處は、若干の人家邸內を除きましては、他は殆ど皆神の社の地であります。佐多でも御崎神社の他に、大字郡の神社などは殊に大木の林を爲して居ます。路傍の小さき社にも一本二本が眼に著きます。他の地方で申せば、前に擧げた肥後八代の著島を始め、薩州秋目の蒲葵島も戸柱大明神と稱して祇園を祀り、六月十五日が祭日であります。日向の青島にも權現の社あり、彥火々出見尊と仰がれてゐます。殊に著しいのは大隅志布志の沖の島です。港の石垣に凭つて眺めると、手に取るばかり鮮かに見えますが、島には蛸や蚊が多いと謂つて、稼ぎに行く者の他は常には渡つて見ませぬ。島の頂上に檳榔御前、或は瀧權現とも書いてある領神の社があつて、正月中の日には行つて祭りました。天智天皇の御娘女乙姬宮、御母は玉依姬と傳へて居ますが、元祿の初年には瀨多尾權現の別當小野寺の祖樸坊、島津殿の代參として此島に祈を籠め、三略書と云ふ一卷を天狗から直傳したと云ふ話もあつて、恐ろしい神樣であります。恐らくは笠團扇の原料を採りに行く人々も、深い信心と約束とを以て、漸くのことで之を許されて居たのでありませう。社は建てなくとも其他の島々でも、蒲葵は只徒らに繁茂して居たのでは無いやうです。

五

それから立戻つて、果して鵯が蒲葵の實を食ふかの問題でありますが、成るほど是は些し六かしいことになります。私は處々で此實を採集し、具さに考察して見ましたが、色も形も略食卓のオリーブ位のもので、大きさから言へば樫の實ほどですが、あれは容易に二つに割れるに反して、此方は棗などの如く、中に大きく堅い核がある。かけ離れた島まで攜へるのには、鳥は一旦之を嚥下せねばならぬわけですが、それは鵯には望みにくいと思ひました。併しそれでも尙懲りずに、逢ふ人ごとに色々の

形で此事を尋ねました。例へば礒山の中腹に、或は灌木の林にまじつて、ぽつんと一本の蒲葵がある。あれは誰かが栽ゑたのか。いゝや生えたのぢや。併し近くに親木も無いのに、どうして種が落ちるかね。大かた鳥ぢやらう。斯う云ふ問答をしたこともあります　又或人は鴉が蘇鐵の實をくはへて飛んで行くのを見たと敎へてくれました。奄美大島は本年は蘇鐵の實の收穫の年で、どこへ行つても累々として蘇鐵の林が美しく、殊に此話を何度も聞きました。鴉は黑いもの蘇鐵の實は丹色ですから至つて目につくのです。是と鵯のビロウの實と、何も關係が無いやうですが、蘇鐵の實はほゞ二錢銅貨大で、厚みがあの四倍ほどあり、蒲葵の實は對鵯と大よそ同じ比例である上に、中の核の硬く大きいことも一樣です。故に若し鹽尻の記事が、日向の人のうそで無かつたら、食べる以上は外の地へも持つて行くだらうと思はれますが、只私が遙々と大海を越えて、熱帶の島からでも來るやうに想像したのは、根據の無いことでありました。さうすると結論は斯うなります。蒲葵は南九州ほどの溫度には、本來相應せぬもののやうに見えるが、實際は始めから日本國の木であつた。但し人の入用が多い爲に、屢〻根絶する虞があつたのを、幸に神の森に保存せられて居り、又或力がそれを意外の地にも運び、意外な繁殖を見ることもあつたらしい。さうして敬虔なる昔の人が、我々とは別様な態度を以て、其事實を觀察して居たかと思ふことに、此から尙少しく考へて見ようとするのであります。

鹿兒島灣を船で横ぎりますと、大隅半島の西岸では大根占村の民家に、始めてよく成長した蒲葵の木が、高く聳えて居るのを見かけます。南するに從つて次第に多く、何れもよく耕された畠の畔か、さうで無ければ人の垣根の中であつて、其他は皆神地のみであります。さうして只の家でも此木の無い處では、皆其葉をほしがつて居ります。佐多から戻つて來る時に、私の荷物を背負つてくれた女なども、其序に伊座敷の親類を訪ねると謂つて、手土産とも言はれないビロウの葉を十枚ばかり、鞄の上へがばがばと結はへ附けました。野生とは申してもちやうど今日の京都附近で、松蕈を保護する程度の人爲が加はつて居ます。法律が之を顧みぬ代りに、神樣が世話をして下されます。不思議なことには沖繩本島に渡つても、事情は正に之と同じやうでありました。ビロウの團扇は琉球から來たと謂ひ、若くは少なくとも其製法を彼に學んだと思ふ者が多い位だから、南だけに此木も澤山有ることと思つて居ますと、やはり舊家らしい人の庭に、庭木として大切に育てて居るもの外は、殆ど皆御嶽の茂みの中に在るばかりで、寧ろ此木を遠く望んで即ち御嶽なることを知ると云ふ有樣でありました。奄美大島と佳計呂麻の島では、それが一層少なくなつて居ります。村の屋敷にも神社にも、探してやつと見附けると云ふ程しかありませぬ。是は此島の信仰に稍近世の變化があつたことと、同時に生活の促迫が一段と切であつたことに、歸しても誤りが無からうと思ひました。大島と薩摩との間に碁布して居る所謂道の島々に於ても、やはり蒲葵は今將に種を絶たんとして居るやうであります。孤島の飢饉と云ふものは、我々が想像にも及ばぬ怖ろしいもので、殊に此方面には近年野鼠の害が多く、此獸が繁殖した年は、有る限りの靑い物を食ひ盡さねば止まぬこと、大陸の蝗の害と似て居ります。そんな場合には人も亦爭うて野生の草木を採つて食ふのです。僅かに神の杜の森嚴を以て、盜伐を制止し得たと云ふのは寧ろ哀れであります。三國名勝圖繪卷二十八に、黑島の黑尾大明神、御神體は大

小の存するも、其の山には蒲葵多し。土人は神木として其落葉をも取らず。同じ島管尾大明神、或は黒島大明神とも謂ふ。海岸に接し蒲葵多し。土人神木として伐り取ることを忌む。昔は此木山中到る處に多かりしが、皆伐り盡して僅に山の外多く所無しとあります。之に類する竹島、俊寛を祭つて居る硫黄島、其他の神の小島に於ても、事情は似たもののやうに思はれます。此三國名勝圖會が出來てから、今は百年になりなんとして居ます。殊に其後の變遷に由つて、早一本も影を止めず、渡り鳥が徒らに往來するやうになつてしまつて居るとしても、私は些しも之を怪しまぬのでありますが、事實は恐らくはまだ此記事の通りでありませう。

六

コバの木の分布と保存に、神が參與して御出でることを知る爲には、どうしても沖繩の島々を見てあるかなければなりません。もとは異國の如く考へられた此島の神道は、實は支那からの影響は至つて尠なく、佛法は尚以て之に比して無勢力でありました。我々が大切に思ふ大和島根の今日の信仰から、中代の政治や文學の與へた感化と[illegible]とを除き去つて見たならば、斯うもあつたらうかと思ふ節々が、色々あの島には保存せられてあります。必要なる片端だけを列擧しますならば、先づ第一には女性ばかりが、御祭に仕へて居たことであります。家の神が一族の神となり、次第に里の神・地方の大神と、成長なされたらしきことであります。巫女を通しての神託に依つて、神の御意と時々の御心持とを理解し、之に基いて信心をしたことであります。神の御名は神御自らが託宣を以て之を顯したまひ、從つて割據の時世に於ては、御嶽毎に各々異なる神が出現なされ、諏訪八幡の如き勸請分靈の沙汰の無かつたことであります。八百萬と申し居ながら、古事記日本書紀の神代卷に由つて、神の御名を訂正しようとするが如き、企ての無かつたことであります。神は御祭の折のみに降りたまふものと信じて居たことであります。神を社殿の中に御住ませ申さず、大和の三諸の山と同じやうに、天然の靈域を御嶽として崇敬して居たことであります。

其上に尚神人と人神との差別が、明白に有りました。すぐれた人は死して祭られて、神と同じ尊きに上りますが、其他に尚最初から神であつた神が、人に憑いて年毎に此世に出現なされました。さうして其出現の場處を、神自らが選定なされたものが、それが即ち御嶽であるのです。現今の沖繩人は、ウタキ（御嶽）とウガン（拜所）とは同じ物だと、誰に訊ねても答へますが、私は尚疑ひをもつて居ります。事によると山の神又は海の神が、御降り成されると云ふ考へ方が、世を經て漸くうとくなり、内地と同じやうに、次第に二種の神靈を差別せぬやうになつた結果、人を葬つた一個の塚、人の建てた一基の石塔をも、御嶽と呼んでもよいことに爲つたのでは無からうか。即ち前代に於ては、拜所と謂へばすべての靈場で、其内の或より降り神とより寄りたまふ神の祭場、即ち琉球神道記に所謂拜林だけを、取分けて御嶽と稱へたのでは無いかと思つて居ます。沖繩で一番大きく且つ大切な齋場御嶽なども、其内は一町歩以上もあつて、其中には五つも六つも拜所が分れてあります。其の一々の石又は岩窟を、更にウタキとは呼び得ないもののやうであります。

御嶽は必ずしも我々が此文字に由つて想像する如き高山の頂ではありません。寧ろ多くの場合には里に接した僅かの丘、又は平地の林でありますが、周圍も無く草木が茂り、其内景は

神秘であります。普通は前面の空地に石の香爐を置き、そこを拜所又は祭場にして居り、林の中へは入込む徑も無いかの如く見えますが、祭の日にはノロ（祝女 カミンチュ（神人）などの婦人のみが、式法に遵うて此に出入し、神を御迎へ申して來たと謂ひますから、尙林の奥にも一定の結構があつたものと思はれます。祭に仕へる者の詞をオタカベと謂ひ、之に答へたまふ神の御詞をミセセリと申します。其中に屢々繰返されたオウタモト、シキタモトと云ふ語は、即ち中央の祭壇と外側の祭壇とを意味して居るのかと考へます。宮古八重山の二主島、又は大島の二三の村に於ては、御嶽の構造が少しく沖繩の本島と異なり、外の入口に鳥居に似た門があり、普通の拜所が其内に在ります爲に、我々は稍立入つて中の樣子を窺ひ知ることが出來ました。靈場の中央は更に又珊瑚礁の石を以て、一區を劃してあつて、之をオブと謂つて居ります。僅かの地積ながら樹木深く、極めて屈曲して細路が附いて居ます。八重山の宮良村で、處々の御嶽を案内してくれましたのは、前盛某と云ふ最も順良な青年でありましたが、オブの中へ入らぬは勿論、其正面に立つことをさへ避けました。理由を尋ねると、只どうしてもさうする氣になれぬと、しをらしくも答へました。宮古の方では此内陣の門は、干瀨の石を斫つて造つた高さ二尺程のもので、這はなければ入られぬやうに最初から出來て居ます。併し強ひて見ようとすれば、中の樣子は石垣越しに樹の間からでも見られるのです。學問の爲憚る所無く申すならば、其細い徑の行き止りに、何か樹木があつてそれが屢々コバでありました。樹下には形の尋常で無い海石を、置いてあることがあります。正面僅かばかりの地には、清淨の砂が布いてありまして、其上にマガリと謂ふ素朴な土器を置き、或は二尺もある硨磲の貝が、仰向けにしてあることがあり、さうして又香爐があります。香爐の一點を除けば、他は悉くコドリングトンの、メラネシヤ誌などに在る寫眞などと同じ光景であります。

七

沖繩本島の神の林の奥に於ても、蒲葵は亦往々にして、先島同樣の重要な地位を、占めて居たのでは無かつたか。是が私の今抱いて居る想像であります。其想像を強めしめる材料は、第一には御嶽の名であります。單にコバ森コバの嶽と呼ぶものは、恰も蒲葵あつて蒲葵島と謂ふに同じく、在來の地名に依つたものとも思はれますが、それにも久高島のコバウの森のやうに、神がコバの種を蒔かしめたまひし口碑あるものがあります　眞壁のコバ森の神にコバウの御イベ、西原間切翁長のコバの嶽にコバツサカリノ御イベを祭るの類は、決して偶然の名とは見られませぬ。又兼城の安波根にはコバモトの嶽、宜野灣の安仁屋にはコバツクリヨリアゲ森があります。淘り揚げと云ふ御嶽は多く渚に臨んだ靈地で、海がもたらした奇瑞の石を、齋ゝものかと思はれます。常に前兆と啓示とに基いて、祭典を經營した民族に在つては、稍普通で無い樹と石との行動は、すべて皆神の言語として受容れられたのです。數あるコバウ嶽の中でも、山北今歸仁のコバウの嶽は、殊に神山でありました。昔君眞物の出現せんとする時には、謝名のアフリノハナ（天降岬）に赤日傘が立てば、此御嶽には黄なる日傘が、彼に黄色なるものが立てば、此御嶽には赤いのが立つたと傳へて居ります。其日傘と云ふものも、紙の無い時代には、必ず亦コバの葉であつたらうと思はれます。

次に見逃すことの出來ぬのは、嶽々の神の御

名であります。康熙五十二年即ち日本の正徳三年に、王命を奉じて編纂した琉球國由來記には、傳ふる限りの御嶽の神名を錄してありまして、其十八年後に成つた琉球國記附錄は、之を不備々に漢字に書改めたものです。もと御嶽の神は、村々の巫女が顯しまつりしもので、次の託言を以て改められる迄、敬虔に最初の御名を守り傳へた筈ですから、地方的に變化をして居てもよいのですが、事實は里を隔てて相似たる御名の神が多く、略之を六七種に分類することが出來ます。中に就いて最も多いのは蒲葵に因む神名であつて、六百足らずの御嶽に在つて、八十ばかりがそれであります。殊にコバツカサノ御イベとあるのが、又其大部分を占めて居ります。イベは琉球の神道に於て、最も概念を得にくい古語であります。或は我々の諱といふものと語原を同じくし、即ち叨りに口にすべからざることを意味するかとも思ひますが、八重山諸島では御嶽毎に、必ず神の名と威部の名と、二つづつ有るのが不思議です。ツカサは略我々の用ゐ方と同じで、高い位置を謂ふらしく、今も巫女のことをさう呼ぶ地方があります。

コバノツカサと對立して、次に多い神の御名は、イシラコ及びマシラコの御威部であります。是は石に依りたまふ御神かと思はれます。浪と嵐の次の朝などに、ゆくりなく海の岸に見出した石體に由つて、神々の御出現を知つたと云ふ例は、大倭の舊記にも幾つか有りますが、沖繩ではそれがまだ現在の信仰の一部を爲して居ます。多くの靈石は今尚神の御座であります。神の御名之に基くものとしますれば、コバツカサの方の由來も推し測ることが出來るのです。神が二柱ある場合には、他の一座をマネツカサの御威部と稱へ、具志川間切宇堅村のコバウノ嶽、同じく宮里村のコバノカタ嶽、勝連間切濱比嘉村の久場島の御嶽の如きは、共に一つある神をマネツカサノオイベと唱へてゐます。マネは眞根であつて、コバの同事異稱かとも思ひますが、伊波君などは明白に、それはコバによく似たクロツグと云ふ植物だと申されます。

御嶽成立に關する古い傳承の中からも、蒲葵の繁茂が神意に由ると解せられた痕跡を、見出すことが困難でありません。例へば南風原間切宮平村の善繩御嶽の如きは、もと善繩大屋子と云ふ人の屋敷でありました。此人或日我謝の海邊に出でて魚捕る柵を見廻る時、一つの龜を見附けた。そこへ一人の女性現れ來つて、龜を大屋子の背に負はせ、家に持ち還らしめたところ、龜途中に於て大屋子の首に嚙み附き、其傷に由つて大屋子は死んだ。葬送の後三日にして其墓所を往つて見ると、大屋子の亡骸が無い。之を不思議と驚いて居ますと、乃ち空中に聲あつて大屋子は死んだのでは無い、ギライカナイに參つたのだと呼ばはります。神託ならんと思つて居るうちに、忽ちにして彼の屋敷に薄マネコバ生ひ立つに由りて、御嶽として祭つたと申します。ギライカナイは又ニライカナイとも謂ひまして、海のあなた天の外の、神々の御住國であります。沖繩人の Valhalla であります。此薄マネコバを琉球國舊記の文には、薄草及野葡萄と漢譯して居りますが、どうしても信ずることは出來ませぬ。

それよりも今一層適切な例は、久高島に於ける穀物起源の傳說であります。昔此島の根人アナゴの子なる者、伊敷の泊に出でて海原を眺めて居ると、白い壺が一つ濱近く浮び寄る。取揚げんとすれども取られず、そこで家に歸つて妻のアナゴの姥に事の由を語れば、女房は行水して身を清め、白いきものを著て濱に出で、袖をひろげて迎へると、壺はたやすく流れ寄つて、其袖にすくはれました。家に還つて之を開いて見れば、中には麥粟黍遍豆の種の外に、

倘薩コバとアザカシキョとの種子が入つて居ました。此等の種を處々に播いて、生ひ立つたのを見ると食べ物でありました。コバとアサカシキョとは二三年してから生えました。人に踏ませぬやうに大切にして居るうち、コバは高く秀でアサカシキョは茂り、其頃君眞物出現してたびたび此山に託遊なされた。誠に神遊の處と見えたり、念願を祈りければ驗あり、それより御嶽と崇め始むとあります。神祕の壺も之を土中に埋め、石を積み廻らして後々までありました。之を掘り出さうとして病を得、死んだ者もあつたと申します。由來記には之を久高島の二つの御嶽、中森とコバウの森との由來として載錄して居るのでありますが、どちらが白い壺の中の種から始まつた森であるか、甚だ精確でありませぬ。只コバウの森の條下に、此森阿麻美久作りたまふと也とあるだけであります。アサカシキョは草の名でありますが、和語の何に當るか、說明してくれる人がありませんでした。只所謂森の下草として、隙間も無く茂つて居ると云ふことを謂つた人があります。

阿麻美久は此島最初の御神としてあります。久高の靈地と相對する知念の齋場御嶽、玉城百名村の藪薩の嶽、それから北では今歸仁の城内上の嶽の如き、何れも阿麻美久の作りたまふと云ふ口碑がありますが、是は單に起源が極端に古いと云ふを意味するの他は無かつたかも知れませぬ。しかも八重山の島などでは、今日倘神が蒲葵の實を播きたまふことを、信じて居る者があるらしいのです。此島々の多くの御嶽は、四百年前の征服の時既に儼然として在つたのですが、征服者側の記錄のみ傳はつて、其由來がはつきりと致しません。石垣の里に近いクバントオーン(コバ太御嶽)の如きは由來記にも其名が見えず、又近年まであつたコバの木も枯れてしまひました。登野城の宮鳥御嶽は、由緒最も尊き豐見タトライの大神でありますが、今は後の山が小學校になつて、嶽の茂りの中に生徒の近路が生じて居ます。此嶽のオブでは、蒲葵を神木としてありました。後に此神に仕へるツカサの老女に逢つて、色々として此木の理由を尋ねましたが、僅かに知り得たことはコバは樹か高いから、神樣は之に由つて登り降りをなされると云ふことと、神は御降りになる場合に、自らコバの木を御立てなされると云ふことだけでありました。此の「宮鳥」が何鳥であつたかは、知りもすまいし語ることも出來まいと思つて、私はもう其以上を問ひませんでした。

八

誠に閑人の所業のやうに見えますが、此の如く永たらしく、コバと我民族との親しみを說きますのも、畢竟は此の唯一つの點を以て、もと我々が南から來たと云ふことを、立證することが出來はしまいかと思ふからであります。勿論斷定は致しませぬ。私の攻究方法に缺點が有るならば、御注意に由つて先づ之を改良し、次には又此問題に必要なる知識を追加することに、御助勢を請ひたいのであります。地球の表面に於て、日本及び其諸島が占めて居る緯度經度、山の高さと在りどころ、島の形と大きさ、島と島との互の遠さ、よく吹く風とよく降る雨との季節、其他萬般の天然事實は、それこそ無二亦無三のものでありまして、しかもそれが我々の歷史を決し、運命を動かして居たのであります。如何なる國の學者に追隨しても、此點に關して模倣し得べき研究はまだ無かつたわけであります。自ら新たに考へて見なければならぬことが多いのです。さうして蒲葵も亦一つの著眼點であります。

回歸線北の太平洋では、波濤は無始の昔から高かつた。小舟の航路は常に艱苦を以て充さ

れてあつた。從つて第二の移住者の來り侵すことは間遠であり、初めの文化、初めの生活樣式は保存せられましたが、其代りには島から出て行く者も、頻々として海上に死し、人は別れることを死と同じく怖れて、終に徒らに小島の中に居りあまり、其末に自ら拯ふ爲に鬪ひ又は殺戮するの必要を見ました。復讐は一種の經濟組織とさへなつて居ました。島が小さければ小さいほど、此苦惱は更に甚しかつたやうでありまして、先島二郡に屬する大小の島では、神代史として傳はつて居る物語は、其大部分が兇暴と武勇との交錯でありました。さうして彼等の神々は、正に其間へ御降りになつたのであります。同胞の中の最も弱く且つやさしい者、即ち男兄たちの若い妹が、毎にオナリと稱して神に召され、神の御心を群衆に傳へる習でありまして、おのづから信仰の助に依つて、權力が稍久しく一つの家門に止まつて居るやうになりました。家の優越はやがて又家の神の優越であり、一郷一島の祭祀は、此の如くにして次第に統一せられて來たのではありますが、御嶽の神は高い年代の霞を隔てて眺められる頃になりますと、家は衰へ滅びても神のみは永く光り耀き、土壤を守り住人の祈願を御容れなされて、終には内外の境も無くなること、恰も我々の國魂郡魂の神々が、天朝の幣帛に參與し得たのと、同じ傾向を具へて居たのであります。只漫々たる海洋は永く特殊の制限でありました爲に、地方の神を奉じて遠く從つて行くことが、此方面の人々には出來なかつたのみであります。人が住む以上は如何なる小さい島でも、おの／＼其島限りの歴史をもつて居るのは、この理由からでありまして、島限りの神代がこの歴史に導かれて、現世に入込んで來た時代にも、誠に著しい遲速があつたのですが、しかもその所謂黎明期の横雲の下にそよいで居たものは、常にコバの葉でありました。

但し我々の稍訝しく思ふことは、三十六島の大昔に於ても、或は大隅の島津の沖、又は日向の青島などの如く、全山此木を以て蔽はれたコバ島があつたのか、但しは又何ぞの理由を以て、最初から今のやうに、コバは乏しい樹であつたかと云ふ點であります。之に就て先づ考へて見るべきは、此木を食料とする風習であります。與那國の人の話に依れば、あの島では今も雌コバの若芽は食べるさうであります。又コバの實も鳥ばかりで無く、人が之をゆでて食べると申します。イリキヤアマリの大神の手から、八重山人等が賜はつた種の中には、既に此物が有つたので、久高の開闢の玉の壺に、穀類と共にコバの種を入れ置かれたのも、同じ御趣意からでは無かつたか。一旦食用にして居た植物を、後に他の品に見かへた事情は想像に難くありません。コヽ椰子の若芽なども、此上無く結構であることは、熱帶の島人がよく記憶して居りますが、もう之を食物に利用することは敢てしませぬ。若芽を盛んに食へばコバは早く盡きます故に、寧ろ次第に年々の作物に、向つて行つたものとも考へられます。コバの實に至つてはどう考へても、さほど旨からうとは思はれませんが、若芽の方は試しに與那國の人に尋ねて見た上で無いと、果して或學者の推測する如く、アヂマサと云ふ古語の起原が、其味ひから出たものであるかどうかを、決することが出來ぬのであります。

九

沖繩本島では國頭の多くの村に於て、大折目と云ふ祭の日に、百姓はコバ餅を造つて之を神アシアゲの神に供へます。其數を七十本百本と算へるのは、多分我々の茅巻笹巻と同じく、此葉を以て餅を包んだものと思はれ、是も

亦一つのコバの用途であります。島尻地方に於ても、舊十二月八日の鬼餅は、サンニンの葉でも包みますが、又蒲葵をも用ゐる習でありまして、其前日には村々に於て、多くのコバの葉をかついであるく者を見かけました。鬼餅は鬼を退治た古い嘉例に遵ふと謂ひますが、此日尚蒲葵を以て鬼の形を造り、之を門戸に懸けて邪魔を攘ふと、琉球國記の附卷にあるのは、是かやはりコバの葉の一つの用途であつたことと思はれます。

蒲葵が棕櫚とちがつて葉の間の連なつて居ることは、久水を汲む者の大なる助けでありました。先島では今も此葉を曲げ綴ぢて、葉柄に縄を附け、釣瓶の代用にしてをります。其形は南洋の鸚鵡貝の如く、や〻平めなる圓い袋です。島では井戸をカハと謂ひ、オリカハとツリカハとの二種があります。ツリカハは堀井戸のことで勿論此器の用があり、オリカハは横井戸で坂路を地下に下りて汲むのですが、屢〻水が深くして此釣瓶を使ふ必要があります。竹も少なく桶の材料も無い島では、コバより他には水を汲む方法がありません。此頃ブリキ板を以て釣瓶を作るやうになりましたが、永年の習から、其形が今尚コバで造るものと同じです、注意して使ふと七日十日は、一つの葉で製したものが用ゐられるので、多くの家では金屬の釣瓶は買ひませぬ。

第四の用途としては船の帆があります。今では用ゐる人が少ないので編み方を知りませぬが、布の至つて貴かつた時代が、島々には永く續き、しかも小舟を走らしむる必要は常にあつたのです。昔多くのコバの葉を積んで、支那に貢物としたといふ傳へは信じ難くとも、此を帆にして福州あたりの港までも、通はんとしたものは多かつたのです。船出に先だつ祭と祈禱とは、何よりも嚴肅であつて、しかも風の心は屢〻測り難かつたのです。神の御許しを得て神山のクバの枝を採り、此に一半の平安の望みを託したことも、無かつたとは謂はれませぬ。

同じく神風のかしこさを仰いだものに、又コバの葉の扇がありました。大和山城のおほやけに於ても、久しい年代を經て扇の料に、此葉を求められたのでありまして、單に後世の形式の變化のみに由つて、之を南島の慣習を學んだ風流の好みと見ることは出來ぬのであります。コバの葉は先づ天然の形が、其儘に扇でありました。之を手草に採つて打揮ふときは、則ち涼しい風を感ずることを得たのですから、製作の要は無かつた筈であります。さうして巫祝の輩は、よく之を手に持ちました。例へば尚眞大王の差遣した兵船が、遠く石垣の島に赤蜂本瓦を討伐したときにも、數十の巫女が各〻枝葉を手にして濱に下り、天に號び地に呼はつたと傳へられます。是は多分今も下民のツカサに由つて拜祀せられる宮鳥の御嶽、若くはクバントオーン即ち蒲葵樹下の靈地から、攀ぢ折り來つたる神の枝であつたらうと思ひます。併し此葉を扇に製したのも新しいことでは無く、それが又信仰に基いた儀式でありました。由來記の佐敷間切の條に、稲穂祭三日崇の次の日、間切中の巫々、其の掌る所の嶽々へ五水一對づつ之を供へ、タカベ仕り、扇コバ取申す也とあるのを見ますと、其扇が尋常の家の道具に、用ゐられたので無いことが察せられます。最近に群島南端の波照間島に渡つて、七月十日の穗利祭を見て來た者の話では、各村の御嶽の前で二人の神女が稲藁の鉢卷をし純白の神衣をはおつて、蒲葵の葉で作つた團扇を以て、神を招き下す作法を行つたと申します。大倭の中古の修驗者が、所謂簠簋扇で護摩の火を扇いだのも、さては又最も尊き大君の日々の御食

物を、此葉を以て扇ぎさましたと申すのも、すべてさう無ければならぬ理由のあることが分りまして、從つて大隅の佐多や志布志の扇造りの業も、由來する所極めて古いこと、更に窮北渤海國の國王に、所謂十枚の檳榔扇を下し賜はつた御趣旨も、單簡では無かつたことが窺はれるのであります。

コバ蓑とコバの笠も、やはり亦此葉で無ければならぬ仔細が、有つたやうに考へられます。八重山部の島々で、或はニイル人と稱して、一年に一度の節日に、ニライカナイの常世から、人の世界を見舞ひたまふ神があります。我々の眼から見れば、それはまさしく村内の二人の青年でありますが、彼等がこの蒲葵の葉を以て身を取裝らて來るときは、村の者は乃ち之を神として迎へました。或部落ではニイル人の代りにマヤの神と稱する二柱の神が、家々を廻つてあるかれます。マヤの神も深いコバの葉の笠を被り、蓑を著てあるくのが定まりであります。北は奄美の諸島に於ても、昔は箭のやうな形の笠に顔を隱し、助けの手ばかりを窓からさし入れて、百味を嘗めたまひし神があつたと語り傳へて居りますのが、多分同じ慣習の記憶であり、尚やまとの島々の正月十五日の夜に、ホトノヘ又はカセトリなどと名けて、顔を包んで餅を貰ひに來る遊戯も、元は一つであつたらうかと思ひます。何れにしても祭に携はる者の蓑笠は、決して南の島ばかりの奇風俗では無かつたので、恐らくは一月笠著る、八幡種蒔く、いで我等は一と高く唱へて神を迎つて來た時代よりも以前から、近くは我々の田舍の盆の月夜に至るまで、神に代つて踊り又は舞ふ者の、必ず隱れ笠に由つて現世と遮斷し、先づ我が心靈を滌く且つ高くせんとした、素朴な信仰の原の形であるやうに思はれます。內地の御社の諸神體の中にも、往々にして笠を召した馬上の御姿を拜しますのは、即ち御一物などと稱へて祭の日の行列に、依坐の童兒に面ざしの隱れる迄、まぶかく笠を被らしめる習はしに由つて、說明することが出來ますが、久高伊平屋の島々に於ても、ニライ神ガナシ或はアマミヤ神ガナシと謂つて、遠い常世の國から船を漕ぎつつ、祭を享けに現れたまふ大神がありまして、其御裝が亦色々の點に於て、是とよく似て居りました。素よりノロと稱する人間の女性が、假に神を裝うて出るのではありますが、信仰厚き者の笠の內の心持は、扮すると謂ふよりも寧ろ成ると謂ふ方が當つて居たやうでありまして、此の如き精神作用には亦コバの葉の力が多いのであります。

それから今一歩を進めて考へて見ますと、昔國頭三座の靈山の頂上に、君眞物新たに出現したまはんとする年の八九月に、赤又は黄色の大きな涼傘が、必ず立つたと云ふ言傳へは、是亦コバの葉の被り笠と、關係が有つたらしうございます。涼傘は尚巴志王の治世に始まると、琉球國舊記にはありますが、それは支那からの輸入であつて、之を島內に製したのは康熙五年、即ち日本の寛文六年を以て始とし、紙を漉く技術は更に二十年おくれて、薩摩の方から學んだとあります。即ち所謂キミテスリの信仰が、寧ろ稍衰へてから後に、今見るやうな大傘は行はれたので、以前久しく島の人が仰ぎ望んで居たものは、必ず此物では無いのであります。袋中和尙の神道記は、慶長初年の記錄ですが、此には只國頭の深山にアヲリと云ふもの現る、其山をアヲリ嶽と謂ふ。五色鮮潔にして種々莊嚴せり。大さ一山を覆ひ盡すとありまして、赤黄の傘とは無いのです。アヲリは疑ひも無く我々のアモリであつて、神の天降る豫報なるが故に、後は嶽の名ともなつたものでせう。其出現は只の一日だけで、之を見た村

では飛脚を馳せて首里の王廷に報告をします。其十月には神乃ち現れ來り、宮殿の前なる庭に於て、託女群臣と共に鼓を撃ち歌ひ舞ふとあります。其折には三十本餘の涼傘を列ね立てました。最も大なるものは高七八丈、輪の徑十尋餘とありますが、これも亦蒲葵の葉を以て張つたのでは無いかと思ひます。或はそれには紙を用ゐるやうに早くなつたとしても、少なくとも山北の三つの御嶽に於ては、古い世からのコバの葉であつたらうと思ふのは、單にコバウ御嶽の名に由つて、推測するのみではありません。君眞物は六年に一度、若くば十年を隔てて降りまたまふ神もありました。神が託女の手を假りて、豫て人知れず影向の地を點定することは自然であるに反して、斯る邊土に新式の大傘を用意することは、紙を輸入したやうな時代には想像することが難き故に、是も亦山中に生長する靈木の葉を材料として、神即ち神の人が、豫め結構したもので無いかと思ふのであります。

一〇

沖繩では世の始りのことを、クバヌファアユー（蒲葵の葉世）と申すさうであります。其世には衣服と云ふものが無く、男も女もコバで作つた簑のやうなものを腰に纏うて居たと傳へられます。近世まで用ゐられて居た、ナヽフィジャカヽン（七襞袴）は、襞の極めて多い麻の裳でありますが、佐喜眞君などは之をクバの腰卷の遺制だと認めて居ます。今でも生れ兒に名を附ける時だけは、老女が此袴を頭に載せて出る習であるさうです。コバの葉の世代には衣類ばかりで無く、住居にもコバが多く用ゐられたかと思ひます。今でも久高の島などでは、イザイ法と稱して、女性に最も大切な神祭の式に先だち、前五日の物忌をする爲に、家族の者と嚴重な隔離をしますが、其時に彼等の入つて住む小屋は必ず蒲葵を以て葺くと申します。此例はまだ外にも有らうと思つて居ます。

兎に角に南海の島に於ては、蒲葵を淸く且つめでたいものとした考へが、却つて稍其繁殖を制限したと云ふことは、略斷定してもよいやうであります。私が見てあるいた限りに於て、コバの林を爲した地が何處にも無かつたことは、如何にしても島最初の天然の儘とは考へられません。那覇の港の色町などに於て、今もてはやされて居る鳩間節は、特にコバの林の美しさを歌つて居る爲に、永く我々の耳に殘りますが、其鳩間は遠い八重山の小島であつて、最も世離れた寂しい村でありました。

鳩間中むり（中岡）ぱり（走り）ぬぶり（登り）
くばぬ（蒲葵の）下にぱりぬぶり
かいしや（美しや）むい（生ひ）たるむりぬくば
ちゆらさ（淸らさ）ちり（列り）たるちぢぬ（頂の）くば
まんがぱいばた南端見わたせば
濱ぬ見るすやくらぬ（小浦の濱）

斯う云ふ章句を以て其歌は始まつて居ります。此等の島の同胞と我々が袂を別つ以前、コバの淸らさと美しさは、既に共通に感じられて居たものと見てよいのは、コバ無き國に移り住んで何世紀を經た後世まで、あらゆる便宜に由つて遠く其葉を求め、之を愛用した貴人の多かつたことが證據であります。更に他の方面から說くならば、爰に一夕私が諸君と相會して、斯うしてコバの歴史を語ることを許されたのも、やがて又我民族が、永く此植物と親しかつた結果だと見ることが出來るのであります。

私が此前日向の靑島を訪ひましたのは、明治

四十一年の七月中頃の事であります。當時の東宮樣は船で此島へも御立寄りになりましたので、青島神社の背後、大海に面した東の岸に、七八本の蒲葵の木を伐つて平地を作り、蒲葵を柱とし屋根とした、御休息の四阿屋が建てられてあります。島の永遠の眉目として、此樹は惜むに足らぬのみならず、尙考へて見れば大昔、出雲國の或海邊に、旅の皇子の爲に結構せられた檳榔の長穗宮といふのも、遙かな年代を隔てて、相似たる國人の心つくしを語るものの如く思はれ、且は民風の久しく傳はること、斯くばかりであるかと驚いたのであります。都の風流の一つに數へられた所謂檳榔毛の車なども、後には青色の簾に錦の緣、下簾は蘇芳の末濃にして轅は黒漆、榻に金銅の金物といふやうな、花やかなる装飾を以て、淡白なるコバの葉の光りが潤色せられたと謂ひますが、古く其起原を想像すれば、是も野山の春秋の遊びなどに、暫しは假宿りの素朴なる情趣を、味はうとした人の好みに出でたこと、恰も尾花刈り葺く御射山の故事が、譬にも歌にも永く傳はつたのと、同じやうな心理からでは無いかと思ひます。果してさうだとすれば是も亦、神に學んだと謂つてもよい島の、年久しい生活樣式の一つであります。

所謂天然記念物の保存事業には、記念の趣旨のはつきりとせぬものも折々有ります。日向の青島では土地の人は彦火々出見尊の沖津鳥鴨著島は爰だと謂つて居ります。或は又島は悉くヘゴの根を組んだ浮島であつて、即ち鹽土翁の目無籠と謂つたのは、是のことであるとも申します。それは何れにしても、少しく島の樹の年代を新しく、推定し過ぎたかの感があります。但し天然は默して終に語らず、人は之に對し、餘りに物を考へる日が短い故に、忘れ〳〵て後には記念の道までを誤るのであります。殊に我々の旅行は渡り鳥の如く規則正しく、之を繰返すことが出來ませぬ。私なども漸く十二年餘の月日を經て、尙一度だけは此島の、冬の緣に面することを得たのですが、それは唯大海の神秘が、愈々漂渺として測り知るべからざることを、今更の如く感ぜしめたばかりでありました。

あぢまさの葉うつくしき青島を渡たちか
へり又見つるかも

附記

一　書物のこと

南方研究に關する文獻は相應に豐富であるが、手に入り難い古寫本などを參考書として勸べるのも無用である。近年の刊行書も數多い中に、興味ある讀物としても、又研究の出發點としても、第一に擧げねばならぬのは、伊波普猷君の「古琉球」である。近年其三版が東京で出た。同君の著には又「古琉球の政治」、「沖繩女性史」、「おもろ選釋」などがある。眞境名安興君との共著「琉球の五偉人」も近代の島生活を語つて居る。眞境名氏と島倉龍治氏との共同事業たる「沖繩一千年史」は、親切周到なる編述で、少なくとも最近迄の學問の成績を纏めて居る。部分的の新研究としては、島出身の篤學者佐喜眞興英君の「南島說話」と、「シマの話」とを推薦する。後者は古來の村共產制の實例を詳述したもので、新發見に富んで居る。宮良當壯君の「沖繩の人形芝居」は中世移住民の痕跡を髣髴せしめる。

地誌的の勞作には、既に「島尻郡誌」ありと聞くが見たことが無い。島袋源一郎氏の「國頭郡誌」は、精細なる編輯であるが、惜しい哉初版は殆ど盡し、二版がまだ出ない。大島には坂口德太郎氏の「奄美大島史」がある。是も多くの文獻を涉獵した苦辛の編纂である。さうして珍しく色々の題目を提出する。先島方面には比嘉德君の「先島の研究」はあるが、至つて不完全なものである。之に比すれば八重山の在住者岩崎卓爾翁の「ひるぎの一葉」は、遙かに大なる功勞がある。是も殘念なことには、久しく絕版になつて居るが、必ず增補再刊せらるべきものである。八重山では又島の學徒、喜舍場永珣君の「八重山民謠誌」が最近出た。言語と社會制度を研究する者にも、興味多き參考書である。宮古に關しては二三の有意義なる著述が計畫せられて居るのみで、現在は尙甚しく寂寞である。內地人の巡遊記の類には、まだ自分の知らぬものが多さうだ。菊池幽芳横山健堂二君の著は、既に非常に有名であつて、紹介の必要も無いが、それよりも以前のもので、大なる影響を我々に與へたものには、弘前の人で後に大島の島司になつた笹森儀助氏の「南島探險記」がある。明治二十六七年の交には、實際島の旅行は探險であり、從つて旅人の感想記には色々の興味がある。しかし此本はもう求めることが容易で無い。近年になつても宮島田邊八田伊東などの各方面の學者が、研究旅行をして居るのだが、その見聞記はまだ本の形を以て發表せられて居らぬ。これ等も次第に保存の方法を講じたいと思ふ。なほ最近の事業としては、本山桂川君の「南島情報」と「與那國島圖誌」とが今將に出ようとして居る。

二　旅行のこと

「海南小記」の二十九章は、地圖の順序であつて、自分の旅行の順序では無かつた。故に參考の爲にごく簡略に、旅の經過を錄して置きたいと思ふ。自分は大正九年十二月十九日の朝、大分から臼杵に來て、汽車と別れて以來、半分は汽船や小舟を利用して、次第に九州の東岸を、都井岬の突端まで下つた。それから十二年前の舊路を自動車で走つて大隅を橫斷し、一旦は灣を渡つて鹿兒島に出て見たが、暮の町の混雜を避けて、沖繩行の船を待つ間、再び引返して大隅の南端を究めたのである。一月四日には南航の船が出た。翌日は大島名瀨に寄るのだが、此時は町を見物しただけで、永く留まらなかつた。那覇では人と逢ひ書物を見る日が多くて、深山の旅行は出來なかつたが、それでも二週間ほどの滯在中に、島袋源一郎君に援助せられて國頭の山には入つて見た。今歸仁の諸喜田と、大宜味間切の鹽屋浦と、久志の瀨嵩とに各一泊して、草鞋もはき刳り舟も試みた。其他は只首里附近の村の一日の逍遙だけで、東西の離れには渡つて見ることが出來なかつた。一月二十日には先島行の船が出た。これもあはたゞしい旅で、宮古には往返を合せ一晝夜しか居なかつた故に、川滿與那覇の方面の二三の村を、馬で通つて見たのみであつた。多良間は船の都合で干瀨の外まで往つて見た。水納の島も沖から眺めたのみであつた。八重山の石垣島にはそれでも五日居た。同じ汽船の基隆から引返すものに乘らうとした爲に、他の小島へは行く時間が無く、今に殘念に思ふが、それでも南海岸の村々と御嶽のみは訪れた。二月の二日かに宮古を經て那覇には還つて來た。それからの一週間は、主として日返りの田舍を一人であるき、或日は齋場御嶽に詣でて、久高を望み、知念小學校の新垣孫一君から其島の話を聽いた。九日にはいよ〱沖繩を辭して、名瀨まで來て上陸した。こゝでも見物したのは瀨戶の南北の二島だけであつたが、山を行き海を越え、大小さま〴〵の船にのつて、苦しい且變化ある數日を過して、次の船で鹿兒島に歸著し、又鐵道の厄介になつたのである。新聞に出した觀察記を少しなりとも紀行風にしようとした爲に、却つて印象も知識も前後し錯綜して、一度あの邊を旅した人で無いと、はつきりとどの邊の話をして居るのかがわからぬことになつたのは、不本意なことである。そのうちに簡單な案內記を誰かに書いて貰ひたいと思つて居る。

（著　者）

年譜

明治八年七月三十一日夜、今の兵庫縣神崎郡田原村、辻川といふ百戸餘りの部落に生れた。

家は生野銀山に通る國道に面し、二つの人力車立場の中間に在り。日夕新らしいものゝ往來を見て育つ。父は松岡約齋、本名は操、其頃は神職、壯年には姫路の町學校熊川舎の漢學師範、その前は醫者。母は尾芝氏、衰へたる舊家の出。二人とも傳承者型、父は殊に素朴なる記傳性をもつてゐた。八人あつた兄弟の六番目、家計は豐かならず。三つの年に惡い種痘が祟つておできだらけとなり、それから蟲氣が出て、よく引付ける虚弱な兒となる。滿足に大きくなつてくれゝばよいがと言はれる。

明治十七年の冬、家は二里ほど東の加西郡北條町に移り、そこで翌年の十一歳の時に、小學校の課程を終る。家庭の教育も此時が限りで、先の村の三木氏といふ藏書の多い家に預けられる。

明治二十年の九月、二番目の兄に伴はれて十三歳で上京、但し東京には十日ほど居たのみで、更に茨城縣北相馬郡布川町の、長兄が家に送られてそこに丸三年住む。病身の爲に學校に行かず、善惡色々の書物を勝手に讀んで暮らす。そのうちに兩親と弟たちが國から出て來て、暫らくの間一處にをる。

二十三年の冬上京、一年半ばかりは下谷御徒町の次兄の家に同居、依然として圖書館などに行つて雜讀を續ける。兄の友森鷗外氏を知り其感化を受ける。「しがらみ草紙」に二三の歌文を寄せたのが、雜誌生活の始めである。歌を學ぶ爲に松浦萩坪翁の門に入り、田山花袋君等と交る。後に田山君が有名となるにつれて、多く當時の文人たちを知ることが出來たが、自分だけはいつ迄も只の讀者であつた。

明治二十六年に無理をして第一高等中學校に入つた。最初商船學校に入つて船長になる積りであつたが兄に止められ、急に共立學校郁文館等で準備をして、大學豫科の入學試驗を受けた。中學校を知らぬので柔弱な風が目につき、お孃さんといふ綽名を受け、それから大いにいぢめられて反抗心を養つた。

二十九年に一度に二親を失つて、色々の計畫が變つた。一時は山林の技師になつて山に住まうと企てたが、數學が劣なので林科を斷念した。農政を專門にしようとしたのも同じ動機からである。

旅行は早くから好きで明治三十年に伊勢海に遊び、其前にも田山君等と日光山中の生活をした。

三十三年に學校を出て農務局に入り、其以後偶然にも地方をあるくことの出來るやうな境

過にばかり居た。

長い旅行では四十一年の夏秋に、九州四國を百日近くもあるいた。『後狩詞記』は其旅中の見聞に成るもので、是を縁として山村に興味を抱き、又山神の信仰の隱れたる大きな影響を人に說くやうになつた。『遠野物語』は單に遠野人の談話を筆記したに過ぎぬが、是が刺戟となつて『石神問答』といふやゝ混亂した書簡集を公にすることになつた。

大正二年の春高木敏雄君と協力して鄕土研究の月刊雜誌を出し、程無く高木氏は去つて是を四年の間支持した。

次で大正十四年の冬に、「民族」といふ隔月雜誌を出したが、是も三年の間事實獨力を以て其編輯に任じたと明言し得る。但し一方は役人の片手わざであつたに反して、後の方は既に閑散の地に就いてからであつた。

大正八年の末、いやになつて二十年の官界生活を打切り、思ふさま旅行をしようとした。『海南小記』、『雪國の春』は共に、その漫遊時代の日記であつて、いづれも『東京朝日新聞』に連載したものである。

其他『山の人生』、『日本昔話集』、『日本傳說集』などの雜著があるが此等は略世に知られて居る。

吉村冬彦集

私には書く事即考へる事である
頭の中で考へたことを紙へ書きならべて
見るとつじつまの合はぬ処や穴の明いた
箇所がよく見えて来るそれを直して
居るうちに又次の考へが喚び出されて来る

吉村冬彦

電車と風呂

電車の中で試に同乘の人々の顏を注意して見渡してみると、餘り感じの好い愉快な顏はめつたに見當らない。顏色の惡い事や、眼鼻の形狀配置といつたやうなものは別としても、顏全體としての表情が十中八九迄兎も角も不愉快なものである。晴れ〴〵と春めいた氣持の好い表情は、少くも大人の中にはめつたに見付からない。大抵神經過敏な緊張か、左もなくば過度の疲勞から來る不感が人々の眼と眉の間や口の周圍に殘忍に刻まれて居る。適には面白さうに笑つて居る人があつてもその笑は多くの場合には笑はないよりも一層氣持の惡い笑である。此等の澤山の不愉快な顏が醸す一種の雰圍氣は強い傳染性を持つて居て、外から乘り込んで來る人の心に、すぐさま暗い影を投げないでは置かない、そして多くの人の腹の蟲の居所を違へさせようとする傾向がある。

自分が此ういふ感じを初めてはつきり自覺したのは外國から歸つた當座の事であつた。二年振りで神戸へ上陸して、埠頭から停車場へ向ふ途中で寛濶な日本服を着て素足で歩いて居る人々を見た時には、永い間カラーやカフスで責めつけられて居た旅の緊張が急に解けるやうな氣がしたが、此の心持は間もなく裏切られてしまはねばならなかつた。其夜東京の宿屋で寢たら敷蒲團が妙に硬くて、まるで張り板の上にでも寢かされるやうな氣がした。便所へ行くとそれが甚しく不潔で顏中の神經を刺戟された。翌朝久し振りで足駄を買つて履いて見ると此れが又妙にぎごちないものであつた。そして春田のやうな泥濘の町を骨を折つて歩かなければならなかつた。其内に天氣が好くなると今度は強い南の風が吹いて、呼吸もつまりさうな黃塵の中を泳ぐやうにして驅けまはらねばならなかつた。そして帽子をさらはれない爲に間斷なき注意を餘儀なくさせられた。電車に乘ると大抵滿員——それが日本特有の滿員で、意地惡く押されもまれて、其上に足を踏みつけられ、おまけに踏んだ人から「間拔けめ、氣を付けろい」などと罵られて默つて居なければならなかつた。此のやうな——當り前ならば多分何でもないと思はれるべき事が、しばらく忘れて居ただけに非常に強く當時の自分の頭に印象された。その時分から妙に電車の乘客の顏が不愉快に陰鬱に或は險惡に見え出したのである。そして色々な事を考へて見た。餘り確實な事は云はれないが、西洋の電車ではこんな心持のした事はなかつたやうに思ふ。勿論疲れた眠い顏や、中には隨分緊張した顏もあるにはあつたらうが、別にそれが爲に今のやうに不愉快な心持はしなかつた。人種の差から免れ難い顏の道具の形や居ずまひだけが此のやうな差別の原因であらうか、何かもつとちがつた處に主要な原因があるのではあるまいかと考へて見た。

先づ堅い高足駄をはいて泥田の中をこね歩かなければならない事、それから空風と戰ひ砂塵に惱まされなければならない事、このやうな天然の道具立にかてて加へて、文明の産み出した此の滿員電車に割り込んで踏まれ押され罵られなければならない事、唯此の三つの條件だけでも自分のやうな弱い者には可也に多く神經の不愉快な緊張を感じさせる。此れが毎日日課のやうに繰返される間には、自分の顏の皺の一つや二つは増すに相違ない。

近頃アメリカの學者の書いたものを讀んで居たら、其の中に、「英國人に比べて見ると米國人の顏なり擧動なりは餘り緊張し過ぎて居る。此れは心に餘裕のない事を示す。其の原因は氣候の險惡などといふ爲ではなくて、人と人との間に養成された習慣が第二の天性に變化したのである。此れを治療するには矢張り餘裕のある人を模倣する事によつて習性を改める外はない」と論じて居る。此れを讀んで成程と感心した。

併しまだどうも此の說には十分に腑に落ちない處がある。もし東京にあの風が吹かなかつたら、もし東京の街の泥と塵がなかつたら、そして電車の數を增すか、或はいつその事に全部無くしてしまつたら、それだけでも東京市民の顏は幾分か柔かく快いものになりはしまいかと思はれる。から考へる理由が一つある。

東京市民の顏の緊張がやゝ弛んで見える場所がある、それは外でもない風呂屋である。日本に特有な此の有難い公共設備の入口の暖簾を潛つて中へはひると、先づ番臺から懸けられる聲からが既に餘程ゆるやかなものである。そして柔かく溫かに濕つた湯氣の中に動いて居る人の顏にも、鏡の前に裸で立ちはだかつて頰を膨らして見たり腹を撫でて見たりして居る人の顏にも、湯槽の水面に浮んで居るデモクラチックな顏にも、美醜老若の別なく、一樣に淡く寛舒の表情が浮んで居る。

此の有難い設備と習慣とがなかつたら東京市民の顏は今頃どんなものに變化して居るだらう。

錢湯の湯槽の中で見る顏には帝國主義もなければ社會主義もない。

若し東京市民が申し合せをして私宅の風呂を悉く撤廢し、大臣でも職工でも皆同じ大浴場の湯氣にうだるやうにしたら、存外六ケしい世の中の色々の大問題がヤス〳〵解決される端緒にもなりはしまいか。此んな事を考へて見たこともある。

風呂場が人間に與へる微妙な影響の中で面白いのは、多くの人が歌を唱ひたくなる事である。英國の有名な物理學者が近頃倫敦のローヤルインスチチューションでやつた講演の中で、「人は何故浴場で歌ひたくなるか」といふ問題を提出したら聽衆は大に笑つたさうである。して見ると浴場で歌ふといふ傾向は江戶ッ子に限らないと見える。此の學者の說によると、第一に水の流出する音が人の聲を誘ふ、第二には浴場の壁は普通の家のやうに音波を擾亂するものがない爲によく反響して聲が充實して聞える爲だといふ。しかし此の說が日本の浴場にも通用するかどうか少し疑はしい。自分の考では溫浴の爲に血行がよくなり、肉體從つて精神の緊張が弛んで聲帶の振動も自由になるのが主な原因であるまいかと思ふ。緊張した時には咳拂ひをしなければ聲が出にくいのは誰れも知る通りである。いつか伯林で見た歌劇で幕があくとタンホイゼルが女神の膝を枕にして寢て居る、そして Zu viel！ zu viel！と歌ひながら起上る時に咽喉がつかへて妙な聲になりさうなので咳拂ひを一つして始末をつけたのを記憶して居る。專門家でさへさうである。自分の經驗でも風呂から出たすぐ後で唱歌をやると、自分の聲かと思ふやうに樂に大きな聲が出る。そして平生は出ないＥの音が骨を折らずに自由に出る。

電車の走る音の中にも種々な樂音が含まれて居る事は少し注意して見れば分る。モーターの早い規律正しい廻轉から起る音の中には可也純粹な樂音がいくつかある。しかし電車の中で歌ひたくなる人は餘りなささうである。假令取締規則が此れを許しても、又二三の變り者が

實際を示して鼓吹したにしても、餘り流行はしさうもない、してもあの緊張した空氣の中で好い聲が樂に出ようとは思はれない。

　電車のゴウ／＼鳴る音のエネルギーの源を段々に搜して行くと思ひ掛けない甲州の淋しい山中の谷川に到着する。氣持のいゝ谷川の瀬の音と電車の音とは實に從兄弟である。それから電車のポールの尖端から出る氣味の惡い火花も、日本アルプスを照す崇嚴な稻妻の曾孫位のものに過ぎない。併し同じ源から出たエネルギーはせち辛い東京市民に驅使される時に苦しい唸き聲を出し、いらだたしい火花を出しながら驅使者の頭上に黑い呪を投げて居る。

　科學の示す可能の範圍は、多くの人の豫想意外に廣いものである。それにも拘らず現代の應用科學の產み出した文化は天地間のエネルギーを驅使して多くの唸り聲や叱聲を製造するに忙しい。此のエネルギーの小部分を割いて電車の乘客の顏を柔げる目的に使用する事は出來ないものだらうか。科學がキャピタリズムやミリタリズムや乃至ボルシェヴィズムの居候になつて居る内は、まあ當分見込がなささうに思はれる。

　滿員電車にぶら下つて居る人々の傍を自動車で通る人があるから世の中に社會主義などといふ者が出來るといふ人がある。一應尤らしく聞える。何とかいふ芝居で鑄掛屋の松といふ男が、兩國橋の上から河上を流れる絃歌の聲を聞いて飜然大悟し其場から盜賊に轉業したといふ話がある位だから、昔から似よつた考はあつたに相違ない。しかし又昔は隨分人の榮華を見て奮發心を起して勉强した人も澤山あつて、さういふ事の方が多く讃美され奬勵されて居たやうでもある。

　南向いて居る豚の尻を鞭でたゝけば南へ驅け出し、北向いて居る野猪をひつぱたけば北へ向いて突進する。同じ鑄掛屋がもしも一風呂浴びて此處を通りかゝつたのだつたら、同じ絃歌の音は却つて彼の唱歌を誘ひ出したかも知れない。から考へると日本の或種の過激思想の發生には滿員電車も少からず責任があるやうな氣がする。不幸にして多くの文明の利器は時々南向いた豚さへも北へ向かせるやうに出來て居るのが多い。況んや北へ向いて居るのを驅け出させるやうな刺戟は到る處にころがつて居る。此の刺戟を柔げるには、どうも風呂が一番有效なやうに思はれる。

　こんな話を友人のA君に話したら、A君のいふのに、昔羅馬を滅したのは風呂場である、餘り風呂場を鼓吹するのは危險ではないかと。しかし又考へて見ると昔羅馬には滿員電車といふもののなかつた事も確である。

　獨逸に居た時は、どういふものかいつも心持が緊張し過ぎて困つた。交際した學生でも下宿の婆さんでも皆それ／＼に緊張して居た。他の國を旅行して歸りに獨逸の國境を超えると同時に、此の緊張がいつも著しく眼についた。凡てのものがカイゼルの髭のやうに緊張して居た。英國へ渡るとなんだか急に呑氣になつた、巡査を見ても牛乳屋を見ても誰れを見ても一樣に呑氣な顏をして居た。餘り緊張が弛んだ爲に眠くなつて困つた。米國へ渡つても矢張り人の顏が間延びがして呑氣に見えた。前に引合に出した米國の學者が緊張し過ぎて居るといつてるのが自分にはよく分らない。此れは多分自分がさういふ社會に顏を出さなかつた爲かも知れない。東京へ歸ると英國人のやうに呑氣な顏も少いが獨逸式に緊張した顏も少い。何と云つて形容したらいゝか分らないが、兎に角滿員電車の上り口につかまつてぶら下つて居るやうな一種の緊張が到る處に見出された。例へば飛行機に乘つて此れから蒼空へ飛び出さうといふやう

な種類の緊張は餘り見つからなかつた。
　日本でも田舍へ行けば、東京とちがつた顔が見られるかも知れない。此れから旅行する機會があつたら其の積りで注意して見たいと思つて居る。尤も田舍には滿員電車のない代りに完全な風呂がない。どうかすると風呂場が肥溜と一つになつて居る。併し田舍には又人工的の風呂の代りに美しい自然に圍まれた日光浴場がある。如何に鐵道が擴がつても製絲工場が增しても、未だ〳〵そこらの山蔭や川口には此んな浴場はいくらも殘つて居るだらう。

＊　＊　＊　＊　＊

此んな取り止めも付かぬ事を色々な人に話して見た。
　二三の先輩は怒つたやうな顔をし、或は苦笑して何とも云はなかつた。B君は默つて聞いてしまつてから物價騰貴と月給の話をした。C君は日露戰爭と歐洲大戰を引合に出して緊張と寬舒の利害を論じた。D君は現在教育制度の缺陷を論じて、日本人は小學から大學迄唯滿員電車にぶら下る術を教はるばかりだと云つた。E君は、國民の哲學的宗教的背景が缺けて居る事を痛論した。
　X君とZ君だけは自分の大浴場說に贊成した。しかし浴場に附屬した禮拜堂と圖書館と畫廊と音樂堂と運動場の建築が必要であると云つて、それで三人で此の假想的浴場のプランを畫いて見たりした。併し其の費用の出處については誰れにも何の目あてもないので、おしまひにはとう〳〵三人で笑ひ出してしまつた。

丸善と三越

子供の時分から「丸善」といふ名前は一種特別な餘韻をもつて自分の耳に響いたものである。田舎の小都會の小さな書店には氣の利いた洋書などは固よりなかつた、何か少し特別な書物でも欲しいと云ふと番頭は早速丸善へ註文してやりますと云つた。中學時代の自分の頭には實際丸善といふものに對する一種の憧憬のやうなものが潜んで居たのである。註文してから書物が到着する迄の數日間は何事よりも重大な期待と何とも知らぬ一種の不安の戰であつた。そして其れが到着した時に感じたあの鋭い歡喜の情は最早二度と味ふ事の出來ない少年時代の思ひ出である。

東京へ出るやうになつてからは時々此の丸善の二階に上つて棚の書物を隅から隅へと見て行くのが樂しみの一つであつた。欲しい本は澤山あつても財布の中はいつも乏しかつた。併し唯書棚の中に並んで居る書物の名を硝子戸越しで眺めるだけでも自分には決して無意味ではなかつた、唯それだけで一種の興奮を感じ刺戟と鞭撻を感ずるのであつた。神社や寺院の前に立つ時に何かしら名狀の出來ない或る物が不信心な自分の胸に流れ込むと同じやうに、此等の書物の中から流れ出る一種の空氣のやうなものは知らぬ間に自分の頭に滲み込んで、丁度實際に讀書する事によつて得られる感じの中から具體的な凡てのものを除去したときに殘るべき或る物を感じさせるのであつた。今でも覺えて居るがあの頃此處の書棚の前に立つて物色して居る時には自分の眼が妙に上釣りになつて顏全體が緊張するのを明に自覺した。そして棚の硝子戸に朧氣に映る自分の顏をひそかに注意して見た事もある。それから又或る時自分にしては比較的高價な本を買つた時に應接した店員の顏の何處かにちらと閃いたと思はれた冷笑の影が自分に不思議な興奮を與へた事も想ひ出される。

あの頃には書物の値段は正札でなく一種の符牒で記してあつた。尤も其の符牒は大抵誰れでも知つて居たので、秘密の暗號でも何でもなく唯數字の代りに片假名を使つたといふだけのものであつた。例へばアンカナといふのは一圓二十五錢の事であつたが、此れが自分の頭によく殘つて居る。伊太利の地名のやうだと思つた事があるから其のせゐだか、或は此の符號のついた本を比較的に多く買つた爲だか、兎に角此のアンカナの四字が丸善其物の象徵のやうに自分の腦髓の隅の方に刻み付けられて居る。

昔の丸善の舊式なお店風の建物が改築されて今の堂々たる赤煉瓦に變つたのは何時頃であつたか思ひ出せない。多分自分が二年ばかり東京に居なかつた間の事であらうと思ふ。元の薄暗い窮屈な室に較べて、天井の高い窓の多い今の二階の室は比較にならない程明るく氣持がいい。併し自分にはどういふものか昔の陰氣な方が、少くも自分の頭に巢くつて居る「丸善」といふ觀念には相應しい。今の室は餘りに明るく餘りに樂に廣々として居る爲に其處に陳列された書物が普通のデパートメントストアの商品のやうな感じがしないでもない。此れに反して以前の窮屈な室へはひつた時には、何となく學者の私有文庫を見せて貰ふやうな氣がした。此れは、或る友人が評したやうに、つまり自分の頭が舊式であつて、書物と其の内容を普通の商品と同樣に見做し得る程に現代化し得ない

爲かも知れない。

色々の理由から所謂散歩といふ事に興味を持たない自分の日曜日の生活は、殆んど型にはまつたやうに單調なものである。晝飯をすませて少し休息すると、僅ばかりの紙幣を財布に入れて出掛ける。三田行の電車を大手町で乘り換へたり、或は其處から歩いたりして日本橋の四つ角迄行く。白木屋に繪の展覽會でもあると這入つて見る事もあるが、大概はすぐに丸善へ行く。別にどう云ふ本を買ふあてがある譯ではないが、唯何かしら久し振りで仲のいゝ友達を訪ねて行く時のやうな漠然とした期待を懷いて正面の扉を押しあける。

正面をはひつた右側に西洋小間物を賣る區劃があるが自分はつひぞ此處を覗いて見た事がない。どういふものか自分は此處だけ、他所の商人が店借りして入り込んで居る氣がする。どうして此の洋品部が丸善に寄生或は共生して居るかといふ疑問を出した時に、P君はこんな事を云つた。『書物は精神の外套であり、ネクタイでありブラシであり歯磨きではないか、或人には猿股でありステッキではないか。』から云はれて見ればさうであるが、自分は唯何となく此處を覗く氣にならないで何時でもすぐに正面の階段を登つて行く、そして二階の床に兩足をおろすと同時に輕い呼吸切れと興奮を感じるのである。

階段を上つて右側に帳場がある。或人は此れを官衙の門衞のやうだと云つたが、自分もどちらかと云へば多少そんな氣がしないでもない。此れは建築者の設計の中に神經過敏な顧客の心理といふ因子を勘定に入れなかつた爲であらう。

自分は何時でも此の帳場の前を通つて先づ獨逸書の在る處へ行く。此處は一寸一つの獨立な區劃になつて居る、戰爭前には哲學、美術、科學とそれ〴〵の部門に亙つて系統的に分類して陳列されて居たのが、此頃ではもう目欲しいやうな物は大概賣り切れてしまつて、色々な部門のものが雜然と入り亂れて居る。獨逸自身の缺乏と混亂とがこんな處迄も波及して居るかといふ氣がする。實際鷄卵や牛乳や靴の缺乏は聞くも氣の毒な狀態であるらしいが、唯驚くのは彼の國の科學者、特にペンと紙の外には物質的材料を要しない種類の科學者が、依然として極めて重要な研究の結果を着々發表して居る事である。

獨逸書の棚の前で數分を費した後に佛蘭西の書物の處へ出た時は丁度伯林から夜汽車で巴里へ着いたといふやうな心持がする。此れは恐らく唯簡單に自分だけの或る經驗から生じる連想の爲ばかりではあるまい。獨逸書の裝幀なり印刷なりには獨逸人のあらゆる歴史と切り離す事の出來ないものがあると同樣に佛蘭西の本にはどうしてもパリジアンとパリジエンヌの匂ひが浮動して居る。假令一字も讀めない人に見せても此の著しい區別は感じられないでは居られまい。自分は獨逸で出版された佛文の本をもつて居る。可也佛蘭西臭くこしらへてあるが、併しどう見てもそれは矢張り獨逸の本である。表紙に畫かれた人物にもクラナッハやヂュラーの影法師が見える。

何時だつたか此の佛書の處で佛蘭西の飛行將校が小說か何かをひやかして居るのを見かけた事がある。其時唯何となしに好い氣持がした。此の將校の顏から髮から髭からページを繰る手付から、大きく肥つた指先までが、其の書物と自然に調和して全體が一つの纏まつた材になつて居た。今の日本の書物は何處となく英吉利や亞米利加臭いところがある、そして昔の經書や黃表紙がちよん髷や裃に調和して居るやうに今の日本人には矢張り此れがふさはしい

やうな氣がする。

佛蘭西の文學美術書が科學書と一處に露店式に並べてある處がある、シヤヴンヌやロダンが微分積分と雜居して其れに隨分塵が積つて居る事もある。それはいゝが其の隣りにガラスの覆蓋をして西洋向きの日本書を並べたのがある。あれを見ると自分はいつでも獨逸で模造した九谷燒を思ひ出す。

自分の專門に關係した科學の書籍を漁つて歩く時の心持は一種特別なものである。眞面目であると同時に at home といつたやうな心持であるが、しかし其處には自分の頭にある「日曜日の丸善」といふものが生ずる幻影はなく一つの常住な職業的の興味があるばかりである。

近來の新刊書を並べた露店式の臺が二つ並んで居る。此處を覗いて見ると、政治、經濟、社會其他あらゆる方面に亙つて重大な問題を取扱つたらしい書物が並んで居る。ロイド・ジョージとかウイルソンとかいふ名前が眼につく。さうかと思ふと飛行機の通俗講義があつたり探偵小說があつたり、ヘッケルの宇宙の謎の英譯の安價版がころがつて居たりする。此の露店の處へ來ると自分の頭が急に混雜して餘り愉快でない一種の壓迫を感じる。そして自分の日曜日の世界とは餘りにかけ離れた爭鬪の世界を覗いて見るやうな氣がして、つい落着いて見る氣になれない。又實際此處はいつでも人が込み合つて居てゆる〳〵は見て居られないのである。考へて見ると近頃世間で騷がしくなつて來た色々な社會上の問題が一部の人の信ずるやうに主に外國から流れ込んで來たとすると、其のやうな問題や思想の流れ込んだ少數な樋口の内でも大きなのは此の丸善の方數尺の書籍臺であるかも知れない。其れにしては餘りに貧弱な露店のやうな臺ではあるが、併し熱海の間歇泉から噴出する熱湯は方尺にも足りない穴から一晝夜僅に二回しかも毎回數十分出るだけであれだけの溫泉宿の湯槽を充して居る事を考へれば此れも不思議ではないかも知れない。此處から流れ出すものが澤山な樋に分流し其れに色々の井戸から出る水を混じて書物になり雜誌になつて提供される。溫度の下らない内にと忙しい人の手で忙しく書かれた著書や論文が忙しい讀者によつて電車の中や床屋の腰かけで讀まれる。それで二三ケ月も勉強すれば誰れでもラッセルとかマルクスとかいふ人の名前位は覺える事が出來るのだらう。

街路に向つた窓の内側に淋しい露路のやうになつて哲學や宗教や心理に關する書棚が並んで居る。

不思議な事に自分は毎年寒い時候が來ると哲學や心理がかつた書物が讀み度くなる。一體自分の病弱な肉體には氣候の變化が著しく影響する。それで冬が來ると身體は全くいぢけてしまつて活動の力が減退する代りに頭の方は却つて冴えて來て、心が兎角に内側へ向きたがる、其のせゐかも知れない。こんな氣分の時には此處の書棚を物色する事が屢々ある。讀んで見たい本はいくらでもあるが、時間と金との缺乏を考へる爲に、めつたに買つて讀む事はない。唯色々の學者の名前と本の名前を一わたり見るだけで滿足する場合が多い。誰れかが『過去の產出物の内で、眼に見られ、手に觸れる事の出來る三つのものの一つとして書物を數へて居るが、此の言葉を此處で屢々想ひ出す。そして書物に含まれて居るものは過去ばかりではなくて、多くの未來の種が滿載されて居る事を考へると、此等の澤山の書物のまだ見ぬ内容が雲のやうに又波のやうに想像の地平線の上に沸き上つて來る。其の雲や波の形や色が何であつてもそれは構はない。唯それだけで何かなしに

自分の眼は遠い處高い處にひきつけられる。考へて見ると自分も結局は一種の偶像崇拜者かも知れない。しかし此んな偶像さへも持たなかつたら自分はどんなに淋しい事だらう。

Ｐ君はmoralといふ文字とethicsといふ言語に對して不思議な反感を抱いて居る。そして此れに相當する日本語に對しては一層烈しい殆んど病的かと思はれる程の嫌惡を感じるやうである。それで自分は丸善の書棚で此の二つの文字を見るとよくＰ君を想ひ出すのである。Ｐ君は此等の言語を見るか聞くか――時に或る人達の口から此れを聞く場合には反射的に直ちに非常に醜惡な罪と汚れを連想するさうである。自分は十分に其の異常な心持を酌みとる事は出來ないが、唯昔の宗教革命者などといふ人の内には存外Ｐ君のやうな型の人があつたのではないかといふ氣がして居るだけである。

此の書棚の次には美術に關した書物がある。大抵版が大きくて値段も高い。自分は此處へ來た時によく餘分な錢が欲しいと思ふ事がある。此の棚の前には小さい美術書を並べた臺がある。此處で自分は時々買物をするが、其度にいつでも店員の中の或るものが一種の疑の眼をもつて自分を注目して居るやうな氣がしたり、或は自分の美術に對する嗜好に同情をもつて居ないらしい或る人達の誰れかが、不意に自分の肩をたゝいて『相變らずやつてるね』とあびせかけられはしないかといふ氣がする。いつかクルイクシャンクの評傳を買つた時に、傍に立つて居た年少の店員が、『クルイクシャンク〳〵』と云つてクス〳〵笑つた。その時自分は何故か顏面が急にほてるやうな氣がした。此の少年は多分此の畫家の名前が可笑しいから笑つただけだらうが、自分はあの時どうしてあんな氣がしたのだらう。こんな感じのする人は外には少いかも知れない。併しよく考へて見ると、自分は自分の手近な「義務」と餘り直接の關係のないあらゆる享樂を味ふ時には、假令其事自身が卑近な感覺的なものでなくても何だか一種の不安を感じる場合が多い。いつか田舍から出て來た親戚の老婦人を帝劇へ案内して菊五郎と三津五郎の舞踊を見せた時に、其の婦人が、『餘り面白くて、見て居る内に、私はこんなに面白くてもいゝのかしらんと思つて、なんだか空恐ろしくなりました』と云つた。此の婦人は隨分人生の不幸を嘗め盡したやうな人であつたから、特にさう思はれたのかも知れない。併し此の一例から考へても、同じやうな經驗は存外多くの人に共通なものかも知れない。ウイリアム・ジェームスの心理學の中に、『音樂の享樂に耽る事でさへも、其人が自分で演奏者であるか、或は其の音樂を純理智的に受け入れる程に音樂的の天賦を有するのでなければ、其人の人格を弛め弱めるといふ結果を生ずるだらう。……此の弊を矯めるには演奏會で受けた感動を、其後に何か主動的な方法で表現しないでは措かないといふ習慣をつければいゝ。それはどんな些細な事でも構はない。例へば自分の祖母にやさしい言葉をかけるとか、乘合馬車で座席を讓るとかいふ位な事でもいゝが、兎に角何かしないではおかないやうにするがいゝ』といふ一節がある。此れを讀んだ時に成程と思つた。昔から世界の色々な人種の間に行はれた禁慾主義の根本に横はる一面の眞理に觸れて居るとも思つた。併し美しい藝術が人の心に及ぼす影響はすぐ其場で手取り早く具體的な自覺的行爲に兩替して、それで濟まされるものだらうか。それでは餘りに物足りない。假令音樂會の歸りに電車の中で喧嘩をし、宅へ歸つて家族を叱つたりする事があるとしても、其日の音樂から受けた無自覺な影響が、後に想ひもかけない機會に、或る積極的な効果として現はれる場合が可也多いの

ではあるまいか。此れは自分に取つては可也に痛切な問題であるか、未だ十分斷に落ちるやうな解釋に到着する事が出來ない。

丸善の二階の北側の壁には窓がなくて、其處には文學や藝術に關する書籍が高い處から脚元までぎつしり詰つてゐる。文學書では、どちらかと云へば近代の人氣作家のものが多くて、それ等が最も眼につき易い處に並んで居る。中學時代に吾々が多く耳にしたやうな著名な作家の名前は此處では餘り目に立たない。丁度西洋の書齋で古い書ばかり見て、日本へ歸つて初めてキユービストやフユチユリストを見せられたやうな心持がする事がある。實際今の日本の文學者の前でホーマーとかミルトンとかいふ名前を持ち出すのは誰れでも氣がひける事だらうと思ふ。文學に限らず科學の方面でも今時ベーコンやニウトンの書いたものを讀むのは氣がさすやうな風潮の狀態である。古いものを新しい眼で見るのや、新しいものを古い眼で見るやうな閑つぶしの仕事は、忙しい今の時代には、閑人の道樂でなければ、能率の少い事業として捨てられなければならないと見える。

Everyman's Libraryなどのぎつしり詰つた棚が孤立して屏風のやうに立つて居る。自分が一番多く買物をするのは先づ此處らである。實際此んな有難い叢書はない。容易に手に入らないか、さもなければ高い金を拂はなければならない物が安く得られるのである。戰爭の爲に、此の本の代價までが倍に近く引き上げられた事は、自分ばかりでなく多數の人の痛切に感じる損失であらうと思ふ。

此の叢書の表紙の裏を見ると“Everyman. I will go with thee and be thy guide in thy most need to go by thy side.”といふ文句が記されてある。此の言葉は今日の所謂專門主義の鐵門で閉された圍ひの中へは餘りよくは聞えない。聞えても其れはやゝもすれば惡魔の誘惑とする聲としか聞かれないかもしれない。それだから丸善の二階でも各專門の書物は高い立派な硝子張りの戶棚から傲然として見下して居る。片隅に小さくなつて居るむき出しの安つぽい棚の中に窮屈さうに此の叢書が置かれて居る。

例へば、昔の人は、見晴しのいゝ岡の頂に建てられた小屋の中に雜居して、四方の窓から自由に外を眺めて居た。今では宏大な建築が、澤山の床と壁とで蜂の巢のやうに仕切られ、人々は銘々の室の唯一つの窓から地平線の僅かな一部を見張つて居る。唯さへ狹い眼界は度の強い望遠鏡で更に狹められる。此等の人の爲に、此の大建築から離れた處に、小さな小亭が建てられて居る。此處へ來れば自分の住つて居る建築が目ざはりにならずに、自由に四方が見渡される。然るに折角建てた此の小亭が餘り利用されないで徒に風雨に曝されて居るとすれば、此れは惜しい事である。此れは人々が餘り忙し過ぎるせゐかも知れない。さうだとすれば此等の人々を驅使して居る家主が責任を負はなければなるまい。併し中には暇はあつても不精であつたり、又わざ〳〵出かけるよりも室の片隅で茶をのんだり骨牌でもやる方がいゝといふ人があるならばそれは其の人々の勝手である。

此の叢書の邊迄見て來ると、可也草臥れる。特に此處で何か買ひでもすると、もう急に根氣がなくなつて地理や歷史などの處はほんの覗いて見るだけでおしまひにする場合が多い。決して此の方面の書物に興味がない譯ではないが、唯自然に習慣となつた道順の最後になる爲に、いつでも此處が粗略になるのである。一度位は、此の何の理由もなしに定めた順序を變へ、或は逆にしてもよささうなものであるが、實際には其のやうな試をした事はない。眞逆に、右利きの人間は右廻りの傾向があるとかいふ譯

でもあるまいし、體操の時に「廻れ右」をするが「廻れ左」はやらない事と關係がある譯でもないだらうし、唯自分に限られた習癖に過ぎないかも知れない。併し誰れか物好きな人があつて丸善の二階で見張つて居て、澤山の顧客の歩く道筋を統計的に調べて見たら、存外面白い結果が得られはしまいか。心理學者や生理學者の參考になるやうな事が見付からないとも限らない。それ程でなくとも、少くも丸善の經營者が書棚の排列を變へる時の參考には確かになるだらう。漁業者がたて網の中にはひつた魚の廻游する習癖を知つて居るから、一度はひつた魚が再び逃げ出さないやうな網の形を設計すると同じやうに。

階段を下りる時に、新刊雜誌を並べた臺が眼下に見下される。此處には、同じやうな體裁で、同じやうな内容の雜誌が、發音まで似かよつた色々の名前で陳列されて居る。表紙だけすりかへて置いても人々は何の氣もつかずに買つて行くだらう。少年や幼年の讀物にしてもどれを開けて見ても中は同じである。そして若い柔かい頭の中から、美に對する正しい感覺を追ひ出す爲にわざ〳〵考案されたやうな、如何にもけばけばしい、繪といふよりも寧ろ臟腑の解剖圖の樣な氣味の惡い色の配合が並べられて居る。此樣な雜誌を買ふ事の出來ない程に貧乏な子供があれば、其の子は少くも此の點で幸福であるかも知れない。何といふオリヂナリテイのない不健全な出版界だらう。

階下の日本書や文房具の部は、大抵もう草臥れてしまつて、見ないですます事が多い。それに此の方は、寧ろ神田あたりで別な日に見る方がいゝといふ氣がするので、すぐに表の通りへ出てしまふ。そして大通りの風に吹かれると、別の世界に出たやうな心持になつてほつとするのが通例である。

丸善を出てから銀座の方へぶら〳〵歩いて行く事もあるが、又時々三越へ行く事がある。白木屋の邊から日本橋を渡つて行く間によく廣重の「江戸百景」を想ひ出す。あの繪で見ると白木屋の隣りの東橋庵といふ蕎麥屋がある。今は白木屋の階上で蕎麥が食はれる。こんなつまらない事を考へたりする。「駿河町」の繪を見ると、正面に大きな富士が聳えて、前景の兩側には丸に井桁に三の字を染め出した越後屋の暖簾が紫色に刷られてある。繪に記録された昔の往來の人の風俗も、吾々の眼には珍しく面白い、中でも著しく自分の眼につくのは平和な町の中を、兩刀を插して歩いて居る武士の姿である。

富士山の見える日本橋に「魚河岸」があつて其の南と北に「丸善」と「三越」が相對して居るのは何だか面白い事のやうに思はれる。丸善が精神の衣食住を供給して居るならば三越や魚河岸は肉體の丸善であると云つてもいゝ譯である。

三越の玄關の兩側にあるライオンは、丸善の入口にある手長と足長の人形と同樣に寧ろない方がよいやうに思はれる。玄關の兩脇には何か置かなければいけないといふ規則でもあるのなら、さういふ規則は改めた方がいゝと思ふ。

入口をはひると天井が高くて頭の上がガランとして居るのは氣持がいゝ。櫻の時節だと此處の空に造花が一杯に飾つてあつたりして、正面の階段の下では美しい制服を着た少年が合奏をやつて居る事もあつた。色々な商品から出る匂と、多數の顧客から蒸し出される瓦斯とで、すつかり入場者を三越的の氣分にしてしまふ。

自分が用のあるのは大概五階か六階であるから、多くの場合にすぐ昇降機で上つてしまふ。しかし、時には凡ての階を隅から隅迄歩かせられる事もある。歩いて見ると、矢張り歩いて見るだけの價値は十分にある。隨分色々の物を思

え色々の問題にぶつかる、そして色々の人間の色々の現象を見せて貰ふ事が出來る。

世の中には隨分色々な事が自慢になるものだと思ふ。或る婦人は月に幾回三越に行くといふ事を、時と場所と相手とにかまはず發表して歩く。又或る學者は、未だ一度も三越に行つた事がないといふ事を宣言するのを、其人の或る主張を發表する簡易な方法の一つとして選んで居るやうに思はれる。併し自分のみならず多くの人は、三越に行く事を別に名譽とも恥とも思つては居まい。

正面の階段の上り口の左側に商品切手を賣る處がある。此處は何時でも人が込み合つて居て數百圓のを持つて行く人もあれば數十圓のを數十枚買つて行く人もある。さうかと思ふと一圓のを一枚威張つて買つて行く人もある。兎も角も此處には人間の好意が不思議な天秤にかけられて、先づ金に換算され、次に切手に兩替される、現代の文化が發明した最も巧妙な機關が据ゑられてある。此の切手を試に人に送ると、反響のやうに速かに、反響のやうに弱められて反つて來る。田舍から出て來た自分の母は東京の人に物を贈ると、まるで狐を打つやうに返して來るよ」といつて驚いた。此れに關する例のP君の説は矢張り變つて居る。「切手は好意の代表物である。しかし其の好意といふのは、可也多くの場合に、自己の虚榮心を滿足する爲に相手の虚榮心を傷けるといふ事になる。それで敵から砲彈を見舞はれて默つて居られないと同樣に、侮辱に對して侮辱を贈り返すのである。速射砲や機關銃が必要であると同樣に、切手は最も必要な利器である」如何にもP君の云ひさうな事ではあるが、若しや此れが幾分でも眞實だとしたら、それは何と云ふ情ない事實だらう。

一階から二階へ人を搬ぶ爲にエスカレーターを運轉して居る時がある。或人は間違へて此れをライスカレーといつた。此れは餘り氣持のいい物ではない。あの手欄の上を辷つて行くゴムの帶も何だか蛇のやうで氣味が惡いと云つた人もある。自分は或日此處で妙な連想を起した事がある。自分の子供を小學校へ入れてやると何時の間にか文字を覺える、算術を覺える、六年位は瞬く間に經つて、子供はいつの間にか一かどの小さい學者になつて居る、實に有難いものだと思はないでは居られない。丁度エスカレーターの最下段に押して入れてやれば、あとは獨りで、少くも二階迄は持つて行つてくれるのと同じやうなものである。此頃は中學や高等學校の入學が大分困難になつて來たが、それでも一度入學さへすれば兎に角無事にせり上つて行くのが通例である。此れから見ると、昔の人は、不完全な寺子屋の階段を手を引いて貰つてやつと上ると、それから先きは自分で階段を刻んだり蔓にすがつて絶壁を攀ぢるやうな思ひをしなければならなかつた。それで大概の人は途中で思ひ切つてしまつただらうが、登りつめた人の腕や脚は鐵のやうに鍛へられたに相違ない。

三越の商品の主なるものは何と云つても呉服物である。かういふ物に對する好尚と知識の極めて少い自分は、反物や帶地やえりの處を永い時間引き廻されるのは可也に迷惑である。そして此程迄に呉服といふものが人間に必要なものかと思つて、驚き怪しんだ事も一度や二度ではない。「東京の人は衣服を食つて居るか」と云つた田舍の或る老人の奇矯な言葉が思ひ出される。

何番といふ番號のついた賣場に妻子をつれて買物に來て居る人が幾組もある。細君の品物を選り分ける顏付や擧動や、其れを默つて見て居る主人の表情は樣々である。色々な家庭の一面が此處に反映して居る。所謂寫實小説を見るよ

りは此の方が遙かに興味があり、ためになる。同じ陳列臺の前を行つたり來たりして居る女の顔には、どうかすると迷や悶やの氣の毒な表情があり／＼讀まれる事もある。

婦人の美服に對する欲望は、通例虛榮心といふ簡單な言葉で說明されて居るやうである。嘗て何かの雜誌で「萬引の心理」といふ題目で大いに論じたものを讀んだ事がある、其の中にも此の虛榮心の事が大層長たらしく書いてあつたやうに記憶して居る。それを見ても通例女の虛榮心といふものは、人間のあらゆる本質的欲求の圈境の、ほんの表面の薄膜に生ずる黴位のもののやうに取扱はれて居るやうであるが、果してそんなものだらうか。此のやうな婦人が、美服に對した時に、あらゆる理智の束縛を忘れ、當然な因果を考へる暇もなく、盜賊の所行を敢てするやうになる衝動はそれ程淺薄な不眞面目なものばかりとも思はれない。其の衝動の背後には、卑近な物質的の欲望の外に、存外廣い意味に於て道德的な理想に對する熱烈な憧憬が含まれて居るかも知れない。若し例へば社會の組織制度に關する或る理想に心醉して、それが爲に奪ひ殺し傷ける事を敢てする團體があるとすれば、何處か其れと共通な點がないでもない。此の婦人の行爲は利己的である、社會的理想はそんなものと根本的にちがつて居ると一口に云つてしまつてもいゝものだらうか。一體普通に使はれる利己と利他といふ兩つの言葉程無意味な言葉は少い。元來無いものに附せられた空虛な言葉であるか、さもなければ同じ物の別名である。唯人を非難したり辯護したりする時や、或は金を集めたり出したりする時に使ひ分けて便利なものだから誰れでも日常使つては居るが、今自分の云つて居るやうな根本の問題には何の役にも立たないものである。誰れか此の疑問に對して自分の腑に落ちるやうな解釋をしてくれる人はないものだらうか。例へば所謂共產主義を論じる學者達が現在の社會に行はれて居る此の萬引といふものを如何に取扱ふかが聞きたいものである。

三越へ來て、數千圓の帶地や數百圓の指輪を見たり、或は萬引の事を考へたりして居ると、誰れかが云つた寢言のやうな謎のやうな言葉に、多少の意味があるやうな氣がする『富む事は美德である。富者は其の美德を餘り多く享有する事の罪を自覺するが故に、其の贖罪の爲に種々の癡呆を敢行して安心を求めんとする。貧乏は惡德である、貧者は其の自覺の抑壓に苦しみ、富の美德を獲得せんと焦慮する爲に働き或は盜み奪ふ……』

吳服の地質の種類や品位については全く無知識な自分も、染織の色彩や圖案に對しては多少の興味がある。それで注意して見ると、近頃特に歐洲大戰が始まつて後に、三越などで見かける染物の色彩が妙に變つて來たやうな氣がする。或る人は近頃はこんな色が流行すると云つた。併し或る人は又戰爭の爲に染料が缺乏したから據なくあんな物ばかり製造して居るのだとも云つた。もし此の二人のいふ事がどちらも本當であるとすると、吾々の趣味や好尙は存外外面的な事情によつて自由に簡單に支配され得るものだと思ふ。もし試みに十年位の期間でもいゝから、あらゆる染料の製造と販賣と使用を停止して見たら、吾々の社會的生活にどんな影響が生じるだらう。實行は六ケしいが、かういふ假設を前提として一つの思考實驗を行つて見る事は、甚だ面白くもあり有益でありはしまいか。尤もそんな事はもう社會學者や經濟學者達が疾の昔にやつてやり古した事かも知れない。多分さうだらうと思はれる。さうでなくては成り立ちさうもない學說やイズムが吾々の眼に觸れる程だから。

三越の四階に食堂がある、たしか以前は小さな室であつたのが、其後擴張されて今のやうな大きな部屋になつたと思ふ。一寸清潔に簡便に食慾を滿足させ、さうして時間をつぶすに適當なやうに出來て居る。普通の日本人の食事時間でない時でも不斷に賑はつて居る。草花鉢を飾つたり、夏は花を封じ込めた氷塊がいくつも据ゑられて居て、天井には大きな煽風器が廻つて居る。田舍から初めて來た人などに、此處で汁粉かアイス一杯でも振舞ふと意外な滿足を表せられる事がある。此處の食卓へ座をとつて、周圍の人達、特に婦人の物を食つて居るさまを見ると、一種の愉快な心持になつて來る、或人のいふやうに淺猿しいなどといふ感じは自分には起らない。呉服賣場や陳列棚の前で見るやうな恐ろしい險しい顏は餘りなくつて、非常に人間らしい親しみのある顏が大部分を占めて居る。此の食堂を發案したのは誰れだか知らないが、其人は色々な意味でえらい人のやうに思はれる。

食堂の外には食品を販賣する部が階下にある。人によると、近處の店屋で得られると同じ罐詰などを、わざ〳〵此處迄買ひに來るといふことである。買物といふ行爲を單に物質的にのみ解釋して、かういふ人を一概に愚弄する人があるが、自分は其れは少し無理だと思つて居る。

伯林のカウフハウスでは穀類や生魚を賣つて居た、倫敦の三越のやうな家では犬や猿や小鳥の生きたのを賣つて居た。生魚はすぐ隣りに魚河岸があるからいゝが、併し三越でも猫や小猿やカナリヤを販賣したら面白いかも知れない。少くも子供達に對する誘惑を無害な方面に轉じる事になるだらうし、大人に對しても三越といふものの觀念に一つの新しい道德的な隈取りを與へはしまいか。生物だから飼つて置くのは面倒だらうが。

三越に大概な物はあるが、日本刀とピストルがない」と何かの機會に大變興奮してP君が云つた事がある。「帶刀の廢止、決闘の禁制が生んだ近代人の特典は、何等の罰なしに自分の氣に入らない人に不當な侮辱を與へ得る事である。愚弄に酬いるに愚弄を以てし、當てこすりに答へるに當てこすりを以てする事の出來る場合には用はないが、無言な正義が饒舌な機智に富んだ不正に愚弄される場合の審判者として此の二つの品が必要である。」此れには自分は大分異論があつたやうに記憶する。併し其時自分の云つた事は忘れて唯P君の此の言葉のみが記憶に殘つて居る。

五階には時々各種の美術展覽會が催される、今の美術界の趨勢は帝展や院展を見なくても幾分は此處だけでも覗はれる、のみならずさう云ふ大きな展覽會に出ない人達の作品まで見られる便利がある、そして入場は無料である。

此處では又色々の新美術品が陳列されて居る。陶磁器漆器鑄物其他大概のものはある。此れも今代の工藝美術の標本であり又一般の趣好尙の代表である。何でもどちらかと云へばあらのない、滑つこい無疵なものばかりである。

いつか此處で大變面白いと思ふ花瓶を見つけて序のある度に覗いて見た。それは少し薄ぎたないやうなものであつたせゐか、永い間買手もつかず其處に陳列されて居た。此れと初めの内に同居して居た澤山の花瓶は段々に入り代つて行くのに、此れだけは木守の澁柿のやうに殘つて居た。ところが此間行つて見ると、もう此の自分の好きな花瓶も見えなくなつて居た。何だかやつと安心したやうな氣がしたが、果して賣れたのか、或は餘り賣れないのでどうにか處分されたのか、其れも分らないと思つた。

六階にあつた所謂空中庭園は、近頃取拂はれて、今では玩具の陳列所になつて居る。一階か

ら五階迄の間に群かつて居る澤山の人の皮膚や口から出る色々の生溫かい瓦斯が此處迄登りつめたのを上から蓋をしてしまつたせゐか、此處へ來ると空氣が惡くて長く居ると此れが頭に利いて來る。其のせゐでもあるまいが自分は此處にある玩具に對して餘り好い氣持はしない。例へばセルロイドで作つたキユーピーなどのてかてかした肌合や、ブリキ細工の汽車や自動車などを見てもなんだか心持が惡い。それでも年に一度位は自分の子供等にこんな玩具を奮發して買つてやらない譯ではない。玩具其物の效果については時々教育家や心理學者の講話を新聞や雜誌で讀んで見るが、具體的に何商店のどの玩具がいゝといふ事を教へてくれないのは物足りない。實際買はうと思つて見渡す時に、自分が安心して此れならと思ふ品が誠に少い。こんな親父を持つた子供等は不仕合でないかと思ふ事もある。自分の子供の時代に田舍で弄んだ自然界の玩具には十分な自信を以て子供等に與へ度いと思ふものが澤山あるが、此の三越にあるやうな玩具については、悲しい事に積極的にも消極的にも自信がない。玩具といふものに關して書いた書物も隨分あるだらうと思ふが、誰れかえらい人のさういふ著書があれば讀んで見たいものである、序に大人の玩具に迄も論及したのであれば猶更面白く有益であらう。

六階で以前の儘なものは花卉盆栽を並べた溫室である。自分は三越へ來て此の室を見舞はぬ事はめつたにない。以時でも何かしら美しい花が見られる。宅の庭には何もなくなつた霜枯れ時分に此處へ來ると生れかはつたやうに好い心持がする。一階から五階迄ありとあらゆる人工的商品をこま〳〵見せられて疲れ渇いた眼には、特に此等の草花が美しく見える。花ばかりでなく色々美しい熱帶の觀葉植物の燃えるやうな紅や、汚れのない綠の色や、典雅な形態を見れば、誰れしも蘇生する心地のしない人はあるまい。そして此の吾々の衣食住の必要品や贅澤品を所狹く煩しく置きならべた五層樓の屋上に此の小樂園を設くる事を忘れなかつた經營者に對して假令無自覺にしろ一片の感謝を表しない人はないであらうと思ふ。

併し此頃段々色々の人に聞いて見ると、中にはあの溫室へはひると氣持がわるくなるといふ人もあつた、花だつて貧弱なのばかりぢやないかと云つた人もある。

* * * * *

丸善から三越へ廻つて歸る時には、大抵いつも日本銀行迄歩いて其處から外濠線に乘る。どうかして電車がしばらく來ない時には、河岸の砂利置場へはひつて御堀の水をながめたり、吳服橋を通る電車の倒影を見送つたりする。丸善の二階で得た色々な印象や、三越で受けたさまざまな刺戟が此の河岸の風に吹かれて緊張の弛んだ時に、色々の變つた形や響になつて意識の上に浮び上つて來る。豫てから考へて居る著書を早く書き始めなければならぬと思ふ事もある。或は鄉里の不幸や親戚に無沙汰をして居る事を思ひ出す事もある。

併し又時として向う河岸に繫つて居る荷物船から三菱の倉庫へ荷上げをして居る人足の器械的に動くのを見たり、船頭の女房が艫で菜の葉を刻んだり洗つたりするのを見たり或は若芽を吹いた柳の風にゆらぐのを見たりして居ると、丸善だとか三越だとかいふものが世にもつまらない無用の長物だといふ氣がする時もある。

電車に乘つて歸つて宅の門を潜ると、もうこんな事はすつかり忘れてしまつて、其れで自分の日曜日、或は日曜日の自分は消えてしまふのである。

（大正九年春）

自畫像

四月の初めに山本鼎氏著「油繪のスケッチ」といふ本を讀んで急に自分も油繪がやつて見たくなつた。去年の暮に病氣して以來は、殆んど毎日晝から晩迄床の中で書物ばかり讀んで居たが、段々暖かくなつて庭の花壇の草花が芽を吹き出して來ると、いつ迄も床の中ばかりにもぐつて居るのが急に厭になつた。同時に頭の工合も寒い時分とは調子が違つて來て、餘り長く讀書して居る根氣がなくなつた。今迄は内側へ内側へと向いて居た心の眼が急に外の方へ向くと、其處には冬の眠からさめて一時に活氣づいた自然界が勇み立つて自分を迎へてくれるやうな氣がした。丁度そこへ山本氏の著書が現はれて自分の手をとつて引き立てるのであつた。

中學時代に少しばかり油繪を描いて見た事はある。圖畫の先生に頼んで東京の飯田とかいふうちから道具や繪具を取り寄せて貰つて、先生から借りた御手本を一生懸命に模寫した。カンヷスなどは使はず、黄色いボール紙に自分で膠を引いてそれにピチューメンで下圖の明暗を塗り分けてかゝるといふやり方であつた。可也澤山描いたが實物寫生といふ事は遂にやらずにしまつた。そして他郷に遊學すると同時にやめてしまつて、今日迄つひぞ繪筆を握る機會はなかつた。もと使つた繪具箱やパレットや畫架なども、數年前國の家を引拂ふ時に、もうこんなものは要るまいと云つて、自分の知らぬ間に母が屑屋にやつてしまつた位である。

其後都へ出て洋畫の展覽會を見たりする時には、どうかすると中學時代の事を思ひ出し、同時にあの繪具の特有な臭氣と當時描きながら口癖に鼻聲で歌つた或る唱歌とを思ひ出した、さうして再び此の享樂に耽りたいといふ慾望が可也強く刺戟されるのであつた。併し自分の境遇は到底それだけの時間の餘裕と落着いた氣分を許してくれないので實行の見込は少かつた。唯展覽會を見る度にさういふ望を起して見るだけでも自分の單調な生活に多少の新鮮な風を入れるといふ効果はあつた。

中學時代には、油繪といへば、先生のかいたもの以外には石版色刷の複製品しか見た事はなかつた。いつか英國人の宣教師の細君が舊城跡の公園でテントを張つて幾日も寫生して居た事があつた。どんなものが出來て居るか覗いて見たくてこは〳〵近づくと、十二三位の金髪の子供がやつて來て『アマリ、ソバクルト犬クヒツキマース』などと云つた。實際傍には見た事もないやうな大きな犬がちやんと番をして居るのであつた。

それから二十何年の間に自分はかなり多くの油繪に目をさらした。數からいへば恐らく莫大なものであらう。見て居る内に自分の眼は段々に色々に變つて來た。そして藝術としての油繪といふものに對する考も色々に遷つて行つた。唯其の間に不斷に懷いて居た希望はいつか一度は「自分の描いた繪」を見たいといふ事であつた。世界中に名畫の數がどれ程あつてもそれは構はない、どんなに拙劣でもいゝから、生れてまだ見た事のない自分の油繪といふものに對して見度いといふのであつた。

此のやうな望が起つては消え〳〵十數年も續いて來た。それが今年の草木の芽立つと同時に強い力で復活した。そして其の望を滿足さ

せる事が、同時に病餘の今の仕事として適當であるといふ事に氣が付いた。

それで早速繪具や筆や必要品を取揃へて小さなスケッチ板へ生れて初めてのダップレナチュールを試みる事になつた。新しいパレットに押し出した繪具のなま〳〵しい光と匂は强烈に昔の記憶を呼起させた。長い筆の先に粘い繪具をこねるときの特殊な觸感も更に强く二十餘年前の印象を盛り返して、其の當時の自分の室から庭の光景や、殆んど忘れかゝつた人々の顏を眼のあたりに見るやうな氣がした。

先づ手近な盆栽や菓子やコップなどと手當り次第に描いて見た。初めの内はうまいのかまづいのかそんな事は丸で問題にならなかつた。さういふ比較的な言葉に意味があらう筈はなかつた。畫家の數は幾萬人あつても自分は一人しか居ないのであつた。

思ふやうに描けないのは事實であつた。其の代り自分の思ひがけもないやうなものが出來てくるのも面白くない事はなかつた。とても描けさうもないと思つたものが存外どうにか物になつたと思ふ事もあり、譯もないと思つたものが中々六ケしかつたりした。それよりも面白いのは一色の壁や布の面からありとあらゆる色彩を見付け出したり、靜止して居ると思つた草の葉が動物のやうに動いて居るのに氣がついたりするやうな事であつた。そして繪を描いて居ない時でもかういふ事に對して著しく敏感になつて來るのに氣がついた。寢ころんで本を讀んで居ると白い頁の上に投じた指の影が、恐ろしく美しい純粹なコバルト色をして、其側に黄色い補色の隈を取つて居るのを見て驚いてしまつてそれきり讀書を中止した事もある。又或時花壇の金蓮花の葉を見て居る内に、曇つた空が破れて急に强い日光がさすと、澤山な丸い葉は見る間にすく〳〵と向きを變へ、間隔と配置を變へて、我れ勝ちに少しでも多く日光を貪らうとするやうに見えた。一つ〳〵の葉がそれ〳〵意志のある動物のやうに思はれて何だか恐ろしいやうな氣もした。

手近な靜物や庭の風景とやつて居る内に、描く物の種が段々に少くなつて來た。本當は同じ靜物でも風景でも排列や光線や見方をちがへればいくらでも材料にならぬ事はないが、素人の初學者の自分としては、少くも一わたりは色々ちがつた物が描いて見度かつた。一番描いて見たいのは野外の風景であるが今の病體では其れは斷念する外はなかつた。それでとうとう自畫像でも始めねばならないやうになつて來た。一體自分はどういふものか、從來肖像畫といふものには餘り興味を感じないし、殊に人の自畫像などには一種の原因不明な反感のやうなものさへもつて居るのであるが、其れにも拘らず遂に自分の顏でも描いて見る氣になつてしまつた。

それで或日鏡の前に坐つて、自分の顏をつくづく見てみると、顏色が惡くて頬がたるんで眼から眉の邊や口許には名狀の出來ない暗い不愉快な表情が泛うて居るので、描いて見る勇氣が一時になくなつてしまつた。其内に又天氣のいゝ氣分の好い折に小さな鏡を机の前に立てて見たら、其時は鏡の中の顏が晴れ〳〵として居て眼も何處となく活氣を帶びて、前とは別人のやうな感じがした。それで早速一番小さなボール板へ寫生を始めた。鉛筆でザット下圖をかいて見たが中々似さうもなかつた、しかし構はず繪具を付けて居る内に間もなく兎も角も人の顏らしいものが出來た。のみならず矢張りいくらかは自分に似て居るやうな氣もした。顏の長さが二寸位で塗りつぶすべき面積が狹いだけに思つたよりは造作なく顏らしいものが出來た、と思つて一寸愉快であつた。それで早速

家族に見せて廻ると、似て居るといふ者もあり、似て居ないといふものもあつた、無論此れはどちらも正しいに相違なかつた。

　此の初めての自畫像を描く時に氣のついたのは、鏡の中にある顏が自分の顏とは左右を取りちがへた別物であるといふ事である。此れは物理學上からは極めて明白な事であるが、寫生をして居る内に初めてその事實が本當に體驗されるやうな氣がした。衣服の左前な位はいゝとしても、又髪の毛の撫で付け方や黑子の位置が逆になつて居る位はどうでもなるとしても、もつと微細な、しかし重要な眼の非對稱や鼻の曲りやそれを一々左右顚倒して考へるといふ事は非常に困難な事である。要するに一面の鏡だけでは永久に自分の顏は見られないといふ事に氣がついたのである。二枚の鏡を使つて少し斜に向いた顏を見る事は出來るだらうが、それを實行するのはおつくうであつたし、又自分の技量で左右の相違を描き分ける事も出來さうになかつた。そんな事を考へなくても唯鏡に映つた顏を描けばいゝと思つてやつて居る内に着物の左衽の處で又一寸迷はされた。自分の科學と繪畫とは見た儘に描けと命ずる一方で、何だか畫として見た時に不自然ではないかといふ氣もするし、年取つた母が厭がるだらうと思つたので、とう〳〵右衽に胡魔化してしまつたが、それでもやつぱり不愉快であつた。

　此の自畫像No. 1は恐ろしく皺だらけのしかみ面で上眼に正面を睨み付けて居て、如何にも性急な肝癪持の人間らしく見えるが、考へて見ると自分にもさういふ資質がないとは云はれない。

　それから二三日たつて、又第二號の自畫像を前のと同大の板へ描いて見た。今度は少し顏を斜にしてやつて見ると、前とは反對に大變溫和な、のつぺりした、若々しい顏が出來てしまつた。妻や子供等はみんな若過ぎると云つて笑つたが母だけは此の方がよく似て居ると云つた。母親の眼に見える自分の影像と、子供等の見た自分の印象とには、事によつたら十年以上も年齡の差があるかも知れない。それで思ひ出したが近頃自分の高等小學校時代に教はつたきりで逢はなかつた先生方の寫眞を見た時に一寸それと氣がつかなかつた。寫眞の顏が餘り若すぎて子供のやうな氣がしたからである。よく〳〵見て居るとあり〳〵と三十年前の記憶が呼び返された。此れから考へると吾々の頭の中にある他人の顏は自分と一處に、しかもちやんときまつた年齡の間隔を保存しつゝ段々年をとるのではあるまいか。

　同じ自分が同じ自分の顏を描くつもりでやつて居ると、其の時々で此樣に色々な顏が出來る、此れはつまり寫生が拙な爲には相違ないが兎も角も面白い事だと思つた。No. 1にもNo. 2にも何處か自分に似た處がある筈であるが、1と2を並べて比較して見ると、どうしても別人のやうに見える。さうして見ると1と2がそれ〴〵自分に似て居るのは、顏の相似を決定すべき主要な本質的の點で似て居るのでなくて第二義以下の枝葉の點で似て居るに過ぎないだらうと思はれる。

　此れについて思ひ出す不思議な事實がある。或時電車で子供を一人連れた夫婦の向側に座を占めて、無心に其の二人の顏をながめて居たが、固より夫婦の顏は全くちがつた顏で、普通の意味で少しも似た處はなかつた。其内に子供の顏を注意して見ると其の子は非常によく兩親のいづれにも似て居た。父親の何處と母親の何處とを傳へて居るかといふ事は容易に分りさうもなかつたが、兎に角兩親の丸でちがつた顏か、此の子供の顏の中で渾然と融合してそれが一つの完全な獨立な極めて自然的な顏を構成

して居るのを見て非常に驚かされた。それよりも不思議な事は、子供の顏を注視して後に再び兩親の顏を見較べると、初め全く違つて見えた男女の顏が交互に似て居るやうに思はれて來た事である。此のやうな現象を心理學者はどう說明するだらうか。たしかに面白い問題にはなるに相違ないと思つた。それから又一方では親子の關係といふものの深刻な意味を今更のやうに考へたりした。もう一つ、此れはK君の話だが、同君の友人の二男が、父親よりも生母よりも却つて父の先妻、しかも亡くなつた先妻にそつくりなので、初めて見たK君は、一種名狀の出來ないショックを感じたさうである。K君の認めた相似が全くオブヂュクティヴだとすると、現在の科學は此の說明を持てあますだらうと思はれる。

一體二つの顏の似ると似ないを決定すべき要素のやうなものは何であらう。此の要素を分析し抽出する科學的の方法はないものだらうか。自分は自畫像を描きながらいろんな事を考へて見た。同じ大きさに同じ向きの像を何十枚も描いて見る。そして其れを一枚々々寫眞にとつて、其の各々を重ね合せて重ね撮り寫眞をこしらへる。若し各々の繪が實物とちがふ「違ひ方」が物理學などでいふ誤差の方則に從つて色々に分配せられるとすれば、重ね撮りの結果は丁度「平均」をとる事になつて、それが實物の寫眞と同じになりはしまいか。もしそれが實物と違へば其の相違は描き手に固有な所謂 personal equation を示すか、或は其人の自分の顏に對する理想を暴露するかも知れない。それは兎に角何十枚の肖像を大體似て居る度に應じて二つか三つ位の組に分類する。さうして其の一つ一つの寫眞を本物の寫眞と重ねて見てよく一致する點としない點とをいくつかの箇條に分つて統計表をこしらへる。こんな方法でやれば「顏の相似」といふ不思議な現象を系統的に研究する一つの段階にはなりさうである。

自畫像は No. 2 でしばらくやめて又靜物などをやつて居る內に、一日畫家のT君が旅行から歸つたと云つてわざわざ自分の畫を見に來てくれた。有り丈けの繪をみんな出して見て貰つて、色々の注意を受け、色々な面白い事を敎はつて大變に啓發されるやうな氣がした。自畫像の二枚については、餘り色が白過ぎるといふのと、もつと細かに見て、色や調子を研究して根氣よく描かなければいけないといふのであつた。成程さう云はれて見ると自分の描いた顏は普通の油繪らしくなくて淡彩の日本畫のやうに白つぽいものである。尤も鏡が惡い爲に實際幾分顏色が白けて見えたには相違ないが、さう云はれて後に鏡と畫と較べて見ると畫像の方はたしかに色が薄くて透明に見えて、上蔟期の蠶のやうな肌をして居た。そして如何にもぞんざいで薄つぺらなものに思はれて來た。それからT君は色々の話の內にトーンといふものの大切な事を話した。眼を細くしてよく見極めをつけてから一筆毎に新しく繪具を交ぜては置いて行くのださうである。或人は六尺もある筆の先へちよつと繪具をくつつけて、鳥でも刺すやうにして一點々々つけては又眺めて考へ込むといふのである。此の話を聞いて居る內に何だか非常に愉快になつて來た。さういふ仕事をして居る畫家と、非常にデリケートな物理の實驗をやつて敏感な螺子をいぢつては眼鏡を覗いて居る學者と全く兄弟分のやうな氣がして面白くなつて來た。そしてどういふ譯か急に可笑しくなつて笑ひ出すとT君も一處に笑ひ出してしまつた。

それから二三日經つてT君の宅へ行つて同君の昔描いた自畫像を二枚見せて貰つた。それは小さな板へ描いた習作であつたが、成程濃

の光で繪具をベタ／＼ときたならしいやうに盛り付けたものであつた。しかし自分ののつぺりした繪と比べて見ると此の方が比較にならぬ程いきいきして居て眞黒な繪具の底に熱い血が通つて居さうな氣がした。

尤も考へて見ると此の位の事は今初めて知つた譯ではない。此の自分の自畫像がもし他人の繪であつたとしたら恐らく初めからまるで問題にならないで打つちやつてしまふ程つまらないものかも知れない。唯それが自分の描いたのであるが爲に此んな分りきつた事が分らないで居たのをT君の像を眺めて居る內にやつとの事で明白に實認したに過ぎない。一體自分は、多くの人々と同樣に、自分の理解し得ないものを「つまらない」と名づけたり、自分と趣味のちがつた人を「常識がない」と思つたりするやうな事が可也ありさうであるが、幸に、或は不幸にして、自分の繪を一つの單純な繪として見て玄人のと比較する時に、自分の方がいゝと思ひ得る程の自信がないと見えて、T君の畫と說とにすつかり感心してしまつた。さうして頭を新しく入れ換へて新に自分の自畫像に取りかゝる事にした。

T君のすゝめに從つて今度はカンブスへやることにした。六號といふ大きさの畫布を枠に張つたのを買つて來た。同時に畫架も買つて來て此れに載せた。なんだかいよ／＼本式になつて來たと思ふと少し氣味の惡いやうな氣もしてすぐには手を付けられなかつた。居間の隅の箪笥の脇にある鏡臺の前へ坐つて左から來る光に半面を照らさせ、そして鏡に映つて居るものは畫架でも背後の箪笥でも其の上にある本や新聞でも、見えるだけのものはみんな其儘に描いて見ようと思つてやり始めた。

今度はなるべく顏を大きくする積りで下圖を始めたのであるが、どういふものか下圖を描いて居る內に思つたより小さくなつてしまつた。自分が大きくしようと思つて居るのに手と鉛筆とが其れを押さへ／＼て顏を縮めて行くやうにも思はれた。實物に近い程に書く積りのがいつの間にか半分足らず位のものになつた。實物と思つて見て居るのが實は鏡の中の虛像で、鏡より二倍の距離にあるから視角は可也小さくなつて居る。それに畫布の方に手近にあるものだから、假令映像と繪と同じ視角にしても寸法は實物の半分以下になる譯だと思はれる。それにしても人が鏡を見て自分の顏といふものゝ槪念をこしらへて居るか、左右顚倒の事實は別として顏の大きさといふものに對してでも正當な觀念を得る事は恐らく非常に困難だらうと思はれ出した。つまり吾々は本當の自分の顏といふものは一生知らずに濟むのだといふ氣さへした。誰れかが『自分の事は顏さへ分らないのだ。自分の背中だけは一生觸られない』と云つた事を思ひ出す。

下圖をすつかり消して描き直すのも面倒であつたし、又此の位の大きさのも一枚あつていゝと思つて其儘進行する事にした。妻と長女とに下圖を見せて違つた處を搜させるとおきに色々な誤が發見された。他人が見ればそんな容易く見付かるやうな間違が、描いて居る自分には中々分らないのであつた。

下圖はとう／＼餘りよく似ないまゝで繪具をつけ始めた。描いて行く中によくなるだらうと思つたが、中々さう行かない事は後で段々に分つて來た。

勿論顏から塗り始めた。初めに大體の肉色と影をつけてしまつた時には、似ては居ないが大變感じのいゝやうな顏が出來たので此れは調子がいゝと思つて多少氣乘りがして來た。そして段々に細かく筆を使つて似せる方と色の調子とに氣を配り始めるとそろ／＼六ケしくなる事か

豫覺されるやうになつて來た。先づ第一に困つた事は局部々々を見て忠實に寫して居るといつの間にか局部相互の位置や權衡が亂れてしまふ。右の眼の恰好を一生懸命に描いて大體よくなつたと思つて少し離れて見ると其の眼だけが顏とは獨立に横に脱線したり釣り上り捻れなどした。どうも右を描いて居る時と左を描いて居る時とで顏の傾斜が變る癖があるらしかつた。其の爲に左右の眼は互に自由行動をとつてどうしても一つの顏の中に融和しない。仕方がないから何れか一方をきめてから他の一方を服從させる外はないと思つて先づ比較的似て居るらしい向つて右の眼を標準にする事に決めた、そして左を描く時は一生懸命に右との關係を考へ〳〵描いて行つた。

コムパスや物差しを持つて來て寸法の比例を取つたりしたが、鏡が使つてあるだけに此の仕事は靜物などの場合のやうに簡單でない。なにしろ本當の顏と鏡の顏と、本當の物差しと鏡の中の物差しと此の四つのものの内の二つを比較するのだから時々頭の中が錯雜して比較すべき物を間違へたりする。それからもう一つ鏡の工合の惡い事は、靜物などと同じ積りで、眼を細くして握つた掌の穴から覗くと、鏡の中の顏も其の通り眞似をするから結局眼の近邊を描く時には此の方法は無效になるのであつた。

右の眼を標準にして段々に進行して行く内に間もなく鼻から顏全體の輪郭迄大改造をやらなければならない事が分つて來たので此れは大變だと思つた。顏全體が大分傾斜しなければならぬ事になるらしい。それでは困るから結局肝腎の右の眼をもう一遍打ち壞して、すつかり初めからやり直す外はないと思ふと、はりつめた力が一時に拔けて繪筆を投げ出してしまひ度くなつた。一先づ中止としてカンヴスを室の隅へ立てかけて遠方から眺めて見ると、顏中妙に引き釣りゆがんで、初めに感じのよかつた眼も恐ろしく險相な意地惡さうな光を放つて睨んで居るので、どうも其儘にして明日迄置くのは堪へられないやうな氣がした。それで、もう大分肩が凝つて苦しくなつて來たけれども奮發して直し始めた。

其れから殆んど毎朝起きて部屋の掃除がすむとすぐに此の自畫像No. 3に手を入れる。餘り凝り過ぎても身體に障るから午前だけにし度いと思つたが、午前中に一段片付けた積りで晝飯を食ひながら眺めて居ると間違つた處が眼に付いて氣になり出す、もう一筆と思ふ内にとう〳〵午後の時間が容赦なく經つてしまふ。

それでも少しづつは似てくるやうであつた。時としては描きながら近くで見ると非常によくなつて、殆んどもう手を付ける處がないやうな氣がして愉快になる。しかし畫架から外して長押の上に立てかけて下から見上げると丸で見違へるやうな變な顏になつて居るのでびつくりする。どうかすると片方の小鼻が途方もなく垂れ下つて居るのを手近で見る時には少しも氣付かなかつたりする。

不思議な事には此のやうに毎日見詰めて居る畫の中の顏が段々に頭の中に滲み込んで來て、其れが兎に角一人の生きた人間になつて來る。其れは自分のやうでもあるし又他人のやうでもある。時としては畫の顏の方が本當の自分で、鏡の中のが嘘のやうな氣がする。特に鏡と畫面とから離れて空で考へる時には、鏡の顏はいつでも影が薄くて畫の顏の方が強い〳〵實在となつて頭の中に浮んで來るのである。此れでは駄目だと思つた。畫を見詰める時間をなるべく減じて鏡を見る時を永くしなければいけないと思つた。

畫の中に居る人間と描いて居る自分との間には知らず〳〵の間に一種の同情のやうなもの

が生じて來るやうな氣がし出した。畫像が口をゆがめて來ると、なんだか自分も口をゆがめなくては居られなくなるやうであつた。自分が眼を細くして居ると畫像も何時の間にかさうするやうに思はれた。畫の顏が氣持のいゝ日はなんだか愉快であるが、さうでない日は自分も機嫌がよくなかつた。

調子の極々いゝ日には、好い加減に交ぜる繪具の色や調子が面白いやうにうまくはまつて行く。繪具の方ですつかり合點してよろしくやつてくれるのを、自分は唯其處迄搬んでくつつけてやつて居るだけのやうな氣がする。こんな時には可也無造作に勢よく筆をたゝき付けると面白いやうに眼が生きて來たり頰の肉が盛り上つたりする。繪具と筆が勝手氣儘に繪を描いて行くのを自分はあつけに取られて見て居るやうな氣がするのである。こんな時には愉快に興奮する。庭を見ても家內の人々の顏を見ても愉快に見え、さうして不思議に腹がよくへつて來る。

此れに反して工合の惡い日は繪具も筆も申し合せて反逆を企て自分を惱ますやうに見える。色が濃すぎたと思つて直すと乾度薄過ぎる。直して居る內に輪郭も崩れて來るし、一筆每に畫が段々無慘に情なく打ちこはされて行く。其時の心持は隨分厭なものである。早く中止すればいゝと思はない事はないが、さういふ時に限つて未練が出て止めるに忍びない。丁度來客でもあつて止むを得ず中止する時には、困つたといふ感じと、丁度いゝ時に來てくれたといふ考とが一處になる。客が歸ると出來損つた畫をすぐに見ないでは居られない。

餘り自分が熱中して居るものだから、家內のものは戯れに此の繪は魂がはひつて居るから夜中に拔け出すかも知れないなどと云つて笑つて居た。ところが或晩床の中にはひつて鴨居にかけた自畫像を眺めて居ると、畫の顏が思ひがけもなくまたゝきをするやうな氣がした。此れは面白いと思つて見詰めると何ともない。しかし眼を外へ轉じようとする瞬間に又すばやく瞬くやうに見えた。此れは多分有り勝ちな幻覺かも知れない。プーシキンの短篇にも骨牌のスペードの女王が瞬をする話があるが、兎に角吾々の神經が特殊な狀態に緊張されると、こんな錯覺が生じるものと見える。其れよりも不思議な錯覺は、夜床の中で眼をねむつて闇の中を見詰めるやうにすると、そこに畫の顏が見えて來る事である。初めて氣のついた時はハルシネーションのやうにはつきり見えたが、其後は唯ぼんやり、しかしそれが畫像の顏だといふ事が分る位に現はれたり消えたりした。生理光學でよく研究されて居る殘像といふ現象はあるが、それは通例實物を見詰めた後極めて少時間だけに止まるし、又通例陽像と陰像とが交互に起るものである。此のやうに長時間の後に殘存してしかも陽像のみ現はれるといふのはまだ讀んだ事も聞いた事もなかつた。恐らく此れは生理的ではなくて、病理的に神經の異常から起るハルシネーションの類だらうが、それにしても妙なものである。人殺しをしたものが長い年月の後に熱病でもわづらつた時に殺した時の犧牲者の顏をあり〳〵見るといふが、それは恐らく自分の見た幻覺と類した程度のものが見えるのではあるまいかと思つた。

もう一つ不思議な錯覺のやうなものがあつた。或日例のやうに少しづつ眼をいぢり口元を直しして居る內に、描いて居る顏が不意に亡父の顏のやうに見えて來た。丁度畫の中から思ひがけもなく父の顏が覗いて居るやうな氣がして愕然として驚いた。しかし考へて見ると此れは敢て不思議な事はないらしい。自分は可也に父によく似て居ると云はれて居る、自分はさう

とは思はないが何處かによく似た點があるに相違ない。自分の顔の何處かを少しばかりどうか修正すれば父の顔に近より易い傾向があるのだらう。それで毎日いろ／＼に直したり變へたりして居る内には偶然其の「何處か」にうまくぶつかつて、主要な鍵に觸れると同時に父の顔が一時に出現するのであらう。

それから考へて見るに自分が毎日筆のさきで色々さま／＼の顔を出現させて居る内には自分の見た事のない祖先の誰れやそれの顔が時々そこから覗いて居るのではないかといふ氣がし出した。實際時々妙に見たやうな顔だといふ氣のする事さへある。

人間の具體的な個々の記憶や經驗は其儘に遺傳するものではないだらうが、それ等を煎じつめた機微な或物が遺傳して居るので、其の爲にこのやうな心持を起させるのではあるまいか。漱石先生の「趣味の遺傳」は正にかういふ點に觸れたもののやうにも思はれる。ラフカヂオ・ハーンの書いたものの中にも此のやうな考が論じてあつた。吾々の祖先を千年前に遡ると、今の自分といふのは其の昔の二千萬人の血を受け繼いで居る勘定ださうである。さうして見ると自分が毎日こしらへて居る色々の顔は、此の二千萬人の誰れかの顔に相當するかも知れない。こんな事を考へて可笑しくも思つたが、同時に「自分」といふものの成り立ちをかういふ立場から、もう一度よく考へて見なければならないと思つた。なんだか獨立な自分といふものは微塵に崩壞してしまつて、唯無數の過去の精靈が五體の細胞と血球の中にうごめいて居るといふ事になりさうであつた。

此の第三號の自畫像は、先づどうにかかうにか仕上げてしまつた。本當の意味では何時迄かかつても「仕上がる」見込のない事が分つて來たから、此處らで先づ一段落ついた事にして、しばらく放置して見る事にした。バックに綠色の布のかゝつた箪笥があつて、其の上に書物や新聞の雜然と置いてあるのが如何にもうるさくて畫全體を俗惡にしてしまふから、後からすつかり塗りつぶして其代りに暗綠色の幕を垂れたやうな工合に直して見た。さうしたら顔が急に引き立つて浮き上つて來た。のみならず、それ迄は雜誌の口繪にでもありさうな感じのあつた繪が、この改造の爲にいくらか落ちついた古典的といつたやうな趣を生じた。そして色の對照の效果で顔の色の赤味が強められるのであつた。しかし又同時に着物が矢張り赤つぽく見え出して氣に入らなくなつたが、もうそれを直すだけの根氣がなくなつて其儘にしてしまつた。

すぐに第四號の自畫像を同大の畫布にやり始める事にした。今度はずつと顔を大きくして、そして前よりも細かく調子を分析してやつて見ようと思つた。ところが下圖を描き始めには可也大きく描いたのが、眼や鼻を直し／＼して居る内に知らず／＼段々に顔が縮小して行くのが實に不思議であつた。大體出來た頃に寸法をとつて見るとやつと實物の四分の三位のものになつて居る事が分つた。それをもう一度すつかり消してやり直す勇氣がなかつたから今度も亦其儘でやり續けた。

最初の日は影と日向とを思ひ切つて強く區別して大體の見當をつけて見た。其時に出來た顔は不思議に前の第三號の顔に似て居た。何かしら自分の頭の奥にこびりついた誤謬が強い力で存在を主張して居ると見える。

此畫はとう／＼二十日餘りいぢり廻したが、結局矢張り物にならないで中止してしまはねばならなかつた。顔の面積が大きくなつただけに困難は前よりも一層大きかつた。局部に囚はれて全體の權衡を見失ふ事もいよ／＼多かつ

た。セザンヌが□□□りますと、ヴラール君、輪郭線が見る人から逃げる」と云つた本當の意味はよくは分らぬが、全くさう云つたやうな氣のする事が屢々あつた。右の頰をつかまへたと思ふ間に左の頰はずるずる逃げ出した。ずつと前にいつか或る畫家が肖像を描いて居るのを見た事がある。其時に畫家の筆頭を注意して居ると素人の自分には「□□の出來ないやうな事がいろいろあつた。例へば肖像の眼の尖端をそろそろ塗つて居ると思ふと、丸で電光のやうに不意に他の眼窩に飛んで行つたりした。油斷もすきもならないと云つた風に眼を光らせて筆をあちらこちらと飛ばせて居た。丁度羊群を守る番犬がぐるぐる駈け廻つて、列を離れようとする羊を追ひ込むやうな樣子があつた。今になつて考へて見ると、あれは矢張り輪郭線や色彩が逃げよう逃げようとするのを見張つて居たのだと思はれた。かういふ風にやらなければならないとなると中々大變だと思つた。

實際輪郭線が假に一筋だけどちらかへずれても全體の□□が死んでしまふのは恐ろしいやうであつた。或る場所につける一點の繪具が□すまいと□すまでも□がいびつに見えた。そのやうな實例は特に接近して見て居ては判つて分らない。少し離れて見ると著しく見えた。六尺の筆を使ふ意味が少し解りかけたのである。

どうにか繪らしいものが出來た時にはそれが奇妙にも自分の知つて居る某□學者によく似て居た。さうとも知らず家内の或る者が此畫を見て「大工か左官のやうな顏だ」といつた。

それから毎日いろいろと直して變化させて居る間に、いつの間にか又此の同じ大工の顏がひよつくり復歸して來るのが不思議であつた。逢ひ度くないと思つてわざと避けて居る人に偶然出くはすやうな氣が屢々した。或日思ひ切つて左の頰をうんと切り落して、から後は此の不思議な幽靈に脅かされる事は二度となくなつた。

何時迄やつても遂に出來上る見込はなささうに思はれ出した。或日或者に此頃得たいろいろの經驗を話して居る内に同君が次のやうな事を注意した。「一體人間の顏は時々刻々に變化して居るのを、或る瞬間の相だけつかまへる事は第一困難でもあるし、かりにそれを捕へて表現したとしても、それは其人の像と云はれるだらうか」といふやうな意味であつた。さういふ風に考へて見ると、單に瞬間寫眞のやうなものならば技巧の永い習練によつて仕上げられ得るものかも知れないが、或る一人の生きた人間の表現としての肖像は結局出來上るといふ事はないものだとも思はれた。或は其の方に行くと却つて日本畫の似顏とか或は漫畫のカリカチュアーの方が見込がありさうに思はれた。それ程ではなくても睫毛一本も見殘さず描いた、金屬製の顏にエナメルを塗つたやうな□□□肖像よりは、後期印象派以後の樣な繪の方が少くも狙ひ處だけは本當であるまいかと思はれてくる。此の考を段々に推し擴げて行くと自然に立體派や未來派などの主張や理論に落ちて行くのではあるまいか。

仕上がるといふ事のない自然の現象を捕へて繪を仕上げるといふ事が出來るとすれば、其處には何か手品の種がある。一筆繪ばかりでなく、靜物でも何でも、餘り輪郭をはつきりかくと繪が堅過ぎて却つて實感がなくなるやうである。例へばランプなどを一枚々々はつきり描いて見ると、どうもブリキ細工にペンキを塗つたやうな感じがする。此れは自分の技巧の拙な爲かと思ふが、しかし昔の大家の描いたのでもそれなのがあり易い。此れに反してわざと輪郭を暈して描いた作家が出て來て運動や遠近を

暗示する。此れはたしかに科學的にも割合簡單に說明の出來る心理的現象であると思つた。同時に普通の意味で、デッサンの誤謬や、不器用不細工といふやうなものが繪畫に必要な要素だといふ議論に稍確な根據が見付かりさうな氣がする。手品の種は此處にかくれて居さうである。

セザンヌは矢張り此の手品の種を搜した人らしい、しかしベルナールに云はせると彼の理論と目的とが矛盾して居た爲に生涯仕上げが出來なかつたといふのである。それにしてもセザンヌが同じ「靜物」に百回も對したといふ心持がどうも自分には分りかねて居たが、どうしても出來上らぬ自分の自畫像を描いて居る內にふと此んな事を考へた。想ふにセザンヌには一つ一つの「林檎の顏」がはつきり見えたに相違ない。自分の知つた人の中には雀の顏を見分ける人はあるが、それよりも一層銳い此の畫家の目には生きた個々の果物の生きた顏が逃げて廻つて困つたのではあるまいか。其の結果があの角ばつた林檎になつたのではあるまいか。

こんなさまざまの事を考へながら、毎日熱心に顏を見詰めては描いて居ると、自分の顏のみならず、誰れでも對して居る人の顏が一つの立體でなくて畫布に表はれた繪のやうに見えて來た。人と對話して居る時に顏の陰影と光が氣になつて困つた。或夜顏色の美しい女客の顏を電燈の光でしみじみ見て居ると頰や額の明るい處がどうしても未だ乾かぬ生の繪具をべつとり盛り上げたやうな氣がして仕方がなかつた、そして其の光つた處が顏の運動につれて色々に變るのを見惚れて居る內に、相手の話の筋道を取り外しさうになる事が一度ならずあつた。其後に、或日K君と青山の墓地を散步しながら、若葉の輝く樹冠の色彩を注意して見て居る內に、此事を思ひ出して話すと、K君は次のやうな話をしてくれた。ゴンクールの小說に、或る女優が舞臺を退いて某貴族と結婚したが、再びもとの生活が戀しくなるといふのがある。其の最後の條に、夫が病氣で非常な苦悶をするのを見たすぐあとで、しかも夫の眼前で鏡へ向つて其の動作の復習をやる場面がある。夫がそれを見て、お前は藝術家だ、戀は出來ないと云つて突きとばすのでお仕舞になつて居る。K君は此れを讀んだ時に餘りに不自然だと思つたが、自分の今の話を聞くとそんな事もないとは限らないやうな氣がすると云つた。此のやうな特殊な場合だけ考へると、實際世間で純粹な藝術が人倫に廢頽的效果を與へるといつて攻擊する人達のいふ事も無理でないと思はれて來る。併しさういふ不倫な藝術家の與へる藝術其物は必ずしも效果の惡いものばかりとは思はれない。つまり、かういふ藝術家や此れとよく似た科學者等は、極端なイーゴイストであるが爲に結果に於ては却つて多數の爲に自分を犧牲にする事になる場合もあるだらう。さういふ時にいつでも結局一番得をするのは、かういふ犧牲者の死屍に鞭うつハリサイあたりの學者と俗人達かも知れない。こんな事を考へて居る內に、それなら金儲けに熱中して義理を缺く人はどうかといふ問題にぶつかつて少し六ケしくなつて來た。

毎日同じ顏をいぢり廻して居る內に、時々は要領にうまくぶつかる事もあつた。何だか違つて居るには相違ないが、どう違つて居るか分らないで困つて居たやうな處が、何かの拍子にうまく直つて來る時には妙な心持がした。樂器の絃の調子を合せて行つてぴつたりと合つたやうな、或は嵌まりにくい器械のねぢがやつとはまつた時のやうな、何といふ事なしに肩の凝りがすうつと解けるやうな氣がするものである。

さういふ風にうまく行つた處はもう二度といぢるのが恐ろしくなる。それを構はずに筆をつける時には可也ヒロイックな氣持になる。しかしそれをやると乾度手が堅くなつていぢけて、失敗する場合が多い。進歩といふ事にさへ構はなければ、手をつけないで其儘に安んじておく方が所謂處生の方法とも暗合して安全であるかも知れない。

それで自畫像第四號もとう／＼仕上げずにやめてしまつた。第三號は第一號のやうに意地の惡い顏であつたが、此の第四號は第二號のやうに溫厚らしく出來た。二重人格者の甲乙の性格が交代で現はれるやうな氣がした。

今度は橫顏でもやつて見ようと思つて鏡を二つ出して眞橫の輪郭を寫して見たら實に意外な顏であつた。第一鼻が思つて居たよりもずつと高く如何にも憎々しいやうに突き出て居て、額がそげて、頤がこけて、おまけに後頭部が飛び出して居て、何とも云はれない妙な顏であつた。何處かロベスピールに似て居るやうな氣がした。兎に角正面の自分と橫顏の自分を結びつけるのが一寸困難に思はれた。嘗て寫眞屋のアルバムで知らぬ人の顏について同じやうな經驗をした事はあつたが、生れて四十餘年來自分の肩の上について居る顏に就いてこんな經驗をしようとは思はなかつた。

これから思ふと刑事巡査が正面の寫眞によつて罪人を物色するやうな場合には、目前に居る橫顏の當人を平氣で見逃がすプロバビリティも可也にありさうだと思つた。場合によつては抽象的な人相書によつた方が却つて安全かも知れない。或は寧ろ漫畫家の描いた鳥羽繪が一番有效かも知れない。上手なカリカチュアは實物よりも以上に實物の全體を現はして居るから。

此れと連關して自分が前から懷いてゐる疑問は、人間の顏が往々動物に似たり、反對に動物の顏が或人を思ひ出させる事である。實際、駱駝に似た人やペリカンに似た人がある。河豚、鱚、蟷螂、龍の落し子などに似た人さへある。古いストランド雜誌にいろんな動物の色寫眞をうまく色々の人間に見立てたのがあつた。或る外國人は日本の相撲の顏を見ると必ず何かの動物を思ひ出すと云つたが、其人の顏自身がどうも何かの獸に似て居るのであつた。レヴィンの描いたトルストイの顏などはどうしても獅子の顏である。

さうして見ると吾々が人の顏を見る時に頭の中へ出來る像は決してユークリッド幾何學的のものではないと思はれる。或る割合に少數な項目の、多數な錯列によつて色々の顏の印象が出來て居る。其中に若干「相似」を決定する爲に主要な項目の組み合せがあつて、此れだけが具備すれば殘りの排列などはどうでもいいのだらう。此の主要の組み合せを分析するといふ事は可也面白い、しかし六ケしい問題だらうと思つたりした。渾天に散布された星の位置を覺えるのに、星の間を適當に直線で連ねて色々の星座をこしらへる。それを一度覺えてしまへばいつ見ても其れだけの星が纏まつて見えるし、此れと大體に似た點の排列を見れば其れが實際にはかなりいびつになつて居てもすぐにそれと認められる。吾々の顏に對する記憶も此れと似たものではあるまいか。星座の連結法は寧ろ任意的だが或る場合には其れが必然的で凡ての人間に共通であるとすれば此れも一つの不思議な問題になる。

色々の「學」と名のつく學問、殊に精神的方面に關したもので、事物の眞を探究するとは云ふものの、よく考へて見ると物の本來の面目は矢張り分らないで、つまりは一種の人相書か鳥羽繪を描いて居る場合も多いやうに思はれるが、

其のやうな不完全な「像」が非常に人間に役に立つて今日の文明を築き上げたと思ふと妙な氣持がする。唯甲乙二人の描いた人相書がちがふ場合に、何方も自分の描いた方が「正しい」と云つて主張するのはいゝとしても、おしまひには苦々しい喧嘩になるのはどんなものだらう。物理學では相對原理の認められた世の中であるのに。

横顔は兎に角中止として今度はスケッチ板へ一氣呵成に正面像をやつて見る事にした。前十日間苦しんだ後だから少し氣を變へて見度いと思つたのである。今度は似ようが似まいがどうでもいゝといふ位の心持で放膽にやり始めて、唯一日で顔だけはものにしてしまつた。ところが却つて此の方が一番顔が生きて居て、そして一番藝術的に見えた。其の上此れが今迄の内で最もよく似て居るといふ者もあつた。なんだか餘りあつけなくて、前の繪にいつ迄もかじりついて居たのが馬鹿々々しいやうな氣がしたが、實は矢張り前の繪で得た經驗の效果が此のスケッチに現はれたかも知れない。

第一號から最後の五號迄ならべて見ると、隨分色々な顔である。そしていづれも偶然の產物である。此の偶然の行列の中から必然をつかまへるのは容易な事ではないと思つた。凡てに共通なのは眼が二つあるとかいふやうな抽象的な點ばかりかも知れない。尤も顔自身の日々の相が偶然のものではあらうが。

毎日變つて居る顔の歴史を順々に手繰つて行けば赤ん坊の時迄一つの「連續」を作つて居るが、此れを間斷なく見守つて居ない他人に向つて、子供の時の顔と今の顔とを切り離して見せて、其れが同人だといふ事を科學的理論的に證明しようとしたら隨分困難な事だらう。何十年來一つ家に暮した親にでも、自分が或る夜中に突然入れ換つたものでないといふ事を、證明しなければならないとしたら困るだらう。第一、自分自身にさへ子供の時と今との連鎖を完全に握つて居る人はありさうもない。こんな「證明」の必要はめつたに起らないから安心して居るだけである。しかし例へば生れたばかりで別れて三年後に逢つた自分の子供を嚴密な意味で確認し得る人があるだらうか。仕合せな事には世の中では論理的の證明は割に要求されないで、オーソリティの證言が代用され其のおかげで物事が澁滯なく進捗するのであらう。

＊　＊　＊　＊

自畫像を描きながら思ふやうに描けない苦しまぎれに、隨分いろんな事を考へたものである。それをもう一遍復習するやうな積りで書いて見ると隨分下らない事を考へたものだと思ふ事もあるが、又中にはもう少し深く立ち入つて考へて見度いと思ふ事もないではない。

小さな出來事

(一) 蜂

私の宅の庭は、割に脊の高い四つ目垣で、東西の二つの部分に仕切られて居る。東側の方は應接間と書齋と其の上の二階の座敷に面して居る。反對の西側の方は子供部屋と自分の居間と隱居部屋とに三方を圍まれた中庭になつて居る。此の中庭の方は、垣に接近して小さな花壇があるだけで、方三間ばかりの空地は子供の遊び場所にもなり、又夏の夜の涼み場にもなつて居る。

此の四つ目垣には野生の白薔薇をからませてあるが、夏が來ると、此れに一面に朝顏や花豆を這はせる。其の上に自然に生える烏瓜も搦んで、殆ど隙間のない位に色々の葉が密生する。朝戸をあけると、赤、紺、水色、柿色、さまざまの朝顏が咲き揃つて居るのは可也美しい。夕方が來ると烏瓜の絲のやうな淡い花が繁みの中から覗いて居るのを蛾がせゝりに來る。薔薇の葉などは隱れて見えない位であるが、垣根の頂上からは幾本となく勢の好い新芽を延ばして、此れが眼に見えるやうに日々生長する。此れに又朝顏や豆の蔓がからみ付いて何處迄も空へ／＼と競つて居るやうに見える。

此の盛んな勢で生長して居る植物の葉の茂りの中に、枯れかゝつたやうな薔薇の小枝から煤けた色をした妙なものが一つぶら下つて居る。それは蜂の巢である。

私が初めて此の蜂の巢を見付けたのは、五月の末頃、垣の白薔薇が散つてしまつて、朝顏や豆がやつと二葉の外の葉を出し始めた頃であつたやうに記憶して居る。花の落ちた小枝を剪つて居る内に氣が付いて、よく見ると、大きさはやつと拇指の頭位で、まだほんの造り始めのものであつた。此れにしつかりしがみ付いて、黄色い強さうな蜂が一匹働いて居た。

蜂を見付けると、私は中庭で遊んで居る子供達を呼んで見せてやつた。都會で育つた子供には、こんなものでも珍しかつた。蜂の毒の恐ろしい事を學んだ長子等は何も知らない幼い子にいろんな事を云つて警めたりおどしたりした。自分は子供の時に蜂を怒らせて耳たぶを刺され、さんしちの葉をもんですりつけた事を想ひ出したりした。あの時分はアムモニア水を塗るといふやうな事は誰れも知らなかつたのである。

兎に角こんな處に蜂の巢があつてはあぶないから、落してしまはうと思つたが、蜂の居ない時の方が安全だと思つて其日は其儘にして置いた。

それから四五日はまるで忘れて居たが、或朝子供等の學校へ行つた留守に庭へ下りた何かの序に、思ひ出して覗いて見ると、蜂は前日と同じやうに、軀を逆樣に巢の下側に取り付いて仕事をして居た。二十位もあらうかと思ふ六角の蜂窩の一つの管に繼ぎ足しをして居る最中であつた。六稜柱形の壁の端を顎でくはへて、ぐるぐると廻つて行くと、壁は二ミリメートル位長く延びて行つた。其の新に延びた部分だけが際立つて生々しく見え、上の方の煤けた色とは著しくちがつて居るのであつた。

一廻り壁が繼ぎ足されたと思ふと、蜂は更にしつかりとからだの構へをなほして、そろ／＼と自分の頭を今造つた穴の中へ插し入れて行つ

た。如何にも用心深く徐々と身體を曲げて頭の見えなくなる迄插し入れた、と思ふと間もなく引き出した。穴の大きさを確めて初めて安心したと云つたやうに見えた。そしてすぐに隣りの管に取りかゝつた。

私は此歳になる迄、蜂の此のやうな擧動を詳しく見た事がなかつたので、強い好奇心に驅られて見て居る内に、此の小さな昆蟲の巧妙な仕事を無殘に破壞しようといふ氣にはどうしてもなれなくなつてしまつた。

其れからは時々、庭へ下りる度にわざ〳〵覗いて見たが、蜂の居ない時は寧ろ稀であつた。見る度に六稜柱の壁は段々に延びて行くやうであつた。

或時は顎の間に灰色の泡立つた物質を一杯溜めて居る事が眼についた。そして壁を延ばす代りに穴の中へ頭を插しこんで內部の仕事をやつて居る事もあつた。しかしそれがどういふ目的で何をして居るのだか自分には分らなかつた。

其內に私は何かの仕事にまぎれて、しばらく蜂の事は忘れて居た。多分半月程經つてからと思ふが、或日ふと想ひ出して覗いて見ると蜂は見えなかつた。のみならず、巣の工事は前に見た時と比べてちつとも進んで居ないやうであつた。なんだか豫想が外れたといふだけでなしに一種の――極輕い淋しさといつたやうな心持を感じた。

其れから後は何時迄經つても、もう蜂の姿は再び見えなかつた。私はどうしたのだらうと色々な事を想像して見た。往來で近所の子供にでも捕へられたか、それとも私の知らないやうな自然界の敵に殺されたのかとも考へて見た。しかし又此の蜂が今現に何處か遠い處で知らぬ家の庭の木立に迷つて、あてもなく飛んで居るやうな氣もした。

私は親しい友達などが死んだ後に、獨りで街の中を歩いて居ると、ふと其の友が現に同じ東京の何處かの町を歩いて居る姿をあり〳〵想像して、云ひ知れぬ淋しさを感ずる事があるが、此の蜂の場合にも此れとよく似た幻を頭に描いた。そして強い眩しい日光の中にキラ〳〵して飛んで居る蜂の幻影が妙に淋しいものに思はれて仕方がなかつた。

或日何かの話の序にSに此の話をしたら、Sは私とは丸でちがつた解釋をした。蜂は場所が惡いから斷念して外へ移轉したのだらうといふのである。さう云はれて見れば或はさうかも知れない。實際兩側に廣い空地を控へた此の垣根では嵐が吹き通したり、雨に洗はれたり、人の接近する事が頻繁であつたりするので、蜂に取つては餘り都合のいゝ場所ではない。しかし果して蜂が其の本能或は智慧で判斷して一旦選定した場所を、作業の途中で中止して他所へ移轉するといふやうな事があるものか、ないものか、此れは專門の學者にでも聞いて見なければ判らない事である。

若しSの判斷が本當であつたとしたら、つまり私は自分の想像の中で強ひて憐れな蜂を殺してしまつて、其の死を題目にした小さな詩によつて安直な感傷的の情緒を味つて居た事になるかも知れない。しかしいづれにしても私は私の幻想を無造作に事務的に破つてしまつたSに對して、輕い不平を抱かないでは居られなかつた。そして此んな些細な事柄にもオプチミストとペシミストの差別は現はれるものかと思つたりした。

今日覗いて見ると蜂の巣のすぐ上には棚蜘蛛が網を張つて、其の上には枯葉や塵埃が一杯にきたなくたまつて居る。蜂の巣と云ひながら、矢張り住む人がなくて荒れ果てた廢屋のやうな氣がする。此の巣のすぐ向側に眞紅のカンナ

の花が咲き亂れて居るのが一層蜂の巣をみじめなものに見せるやうであつた。

私は兎も角も此の巣を來年の夏迄此儘そつとして置かうと思つて居る。來年になつたら此の古い巣に、もしや何事か起りはしないかといふやうな豫感がある。

(三) 乞食

或朝Qが訪ねて來た。

此の男は、私の宅へ來る時には、屹度何か一つ二つ皮肉なそして私を不愉快にするやうな暗示に富んだ言詞を用意して來るやうに見える。そして話して居る内に適當或は不適當な機會を捕へて其の言詞を吐き出してしまふ迄は落着く事が出來ないやうに見える。兎も角も其れを云つてしまふと、其れ迄ひどく緊張してきつい表情をして居た彼の顏が急に柔かになつてくる、そして平生氣持の惡いやうな青黑い顏色には少し赤味をへさして來て、見るから快いやうな感じに變化するのである。

私は此の男の癖をよく知つて居て、可也久しく馴らされて居るし、又そのやうな特殊な行爲の種類も十分に諒解して居るので、別に大して氣にしないつもりでは居るが、それでも此の男と話した後では何處か平常とはちがつた心持になつて居るものと思はれる。さうだといふ事が、其後に自分の身邊に起る些細な事柄に對する自分の情緒の反應によつて證明される場合があるやうに見える。

此日Qが用意して來た材料は、私の病氣に關した事であつた。つまり私が、わざ／＼自分の病氣をわるくして長引かしては密に喜んだりする一種の精神病者に似た心理狀態にあるといふ事を巧に暗示すると云ふよりは寧ろ露骨に押しつけようといふのであつた。自分はQに云はれる前から自分の頭の奧底にどこか此のやうな不合理な心理狀態が潛んで居るのではないかと疑つて見た事があつただけに此のQの暗示は可也のきゝめがあつた。

Qが歸つてから晝飯を食つた。それから子供部屋へ行つてオルガンをひいた。

其日はよく晴れて暑い日であつた。子供部屋の裏の縁先にある花壇には、強烈な正午過ぎの日光が眩しいやうに輝いて、草木の葉もうなだれて居るやうであつた。花豆の赤い花が火のやうに見えた。併し此の部屋は一番風がよく吹き通すので、みんなが此處に集つて居た。子供等は寢轉んで本を見て居るのもあれば、繪具箱を出して繪を描いて居るのもあつた。老人は椽に背をもたせて御伽噺の本を眼鏡でたどつて居た。私は裏庭を左にした壁のオルガンの前に腰かけて、指の先の鍵盤から湧き上る快い樂音の波の中に包まれて、しばらくは何事も思はなかつた。

涼しい風が、食事をして汗ばんだ頬を撫でて行くと同時に樂譜の頁を吹き亂した。そして頭の中のあらゆる濁つたものを吹き拂ふやうな氣がした。

手頃な短い曲をいくつか彈いてから、何時もよくやるペルゴレシの Quando corpus morietur といふのをやり始めた。此れは Stabat mater の一節だといふから、いづれ十字架の下に立つた聖母の悲痛を現はしたものであらう。私は此れをひいて居ると、歌の文句は何も知らないのに拘らず、いつも名狀の出來ないやうな敬虔と哀愁の心持が胸に充ちるのを覺える。

此の曲の終りに近づいた頃に、誰れか裏木戸の方からはひつて來て椽側に近よる氣はひがした。振り向いて見ると花壇の前の日向に妙な男が突つ立つて居た。

三十前後かと思はれる脊の低い男である。汚れた小倉の霜降りの洋服を着て、脚にも泥だらけのゲートルをまき、草鞋を履いて居る。頭髪は長くはないが踏み荒された草原のやうに亂れよごれ、顎には虎鬚がもじや〳〵生えて居る。しかし顏には寧ろ柔和な、人の好ささうな表情があつた。唯額の眞中に斜に深く切り込んだやうな大きな創痕が、見るも恐ろしく氣味惡く引き釣つて居た。よく見ると右の腕はつけ元からなくて洋服の袖は空しくだらりと下つて居る。一足一足進み寄るのを見ると足も片方不隨であるらしい。

彼は私の顏を見て何遍となく頭を下げた。そしてしや嗄れた、胸につまつたやうな聲で、何事かしきりに云つて居るのであつた。額一杯に暑い日が當つて汚れた額の創のまはりには玉のやうな汗が湧いて居た。

よく聞いて見ると或る會社の職工であつたが器械に喰ひ込まれて怪我をしたといふのである。そして多くの物貰ひに共通なやうに、國へ歸るには旅費がないといふやうな事も訴へて居た。

幾度となくおじぎをしては私を見上げる彼の悲しげな眼を見て居た私は、立つて居室の用箪笥から小紙幣を一枚出して來て下女に渡した。下女は臺所の方に呼んでそれをやつた。

私が再びオルガンの前に腰を掛けると彼は又緣側へ廻つて來て幾度となく禮を云つた。そして「旦那樣、どうぞ、御からだを御大事に」と云つた。更に老人や子供等にも一人々々丁寧に禮を云つてから、とぼ〳〵と片足を引きずりながら出て行くのであつた。

「どうぞ、御からだを御大事に」と云つた此の男の一言が、不思議に私の心に強く滲み透るやうな氣がした。此れ程平凡な、餘りに常套であるが爲に殆んど無意味になつたやうな言葉が、どうして此時に限つて自分の胸に喰ひ入つたのであらうか。乞食の眼や聲は可也に哀れつぽいものであつたが、唯それだけで此のやうな不思議な印象を與へたのだらうか。

嗄れた聲に力を入れて、絞り出すやうに云つた「どうぞ」といふ言葉が、彼の胸から直ちに自分の胸へ傳はるやうな氣がすると同時に、私の心の片隅の何處かが急に柔かくなるやうな氣がした。そしてもう一度彼を呼び返して、何かもう少しくれてやり度いやうな氣さへした。

默つて乞食の擧動を見て居た子供等は、彼が歸つてしまふと、額のきずや、片手のない事などを小聲でひそ〳〵と話し合つて居たが、間もなく、それ〳〵の仕事や遊びに氣を奪はれてしまつたやうである。子供等の受けた印象は知る事は出來ない。

乞食は私の病氣の事などは固より知つて居る筈はなかつた。恐らく彼は誰れの前にも繰返すお定まりの言詞を繰返したに過ぎないだらう。唯其れがQの冷罵とベルゴレシの音樂とのすぐ後に出くはしたばかりに、偶然自分の子供らしいイーゴチズムに迎合したのかも知れない。

併し私が彼の歸つて行く後姿を見た時に突然閃いた感傷的な心持の中には、後から考へると可也に色々なものが含まれて居たやうである。例へば自分が彼の乞食であつて門から門へと貰つて歩くとする。何處の玄關や勝手口でも疑と輕侮の眼で睨まれ追はれる。其の屈辱の苦味をかみしめて歩いて居る内に偶然或家へはひると、其處は冷やかな玄關でも臺所でもなく、そこに思ひがけない平和な家庭の團欒があつて、そして誰れかがオルガンをひいて居たとする。その瞬間に乞食としての自分の情緒がいくらかの變化を受けはしないだらうか。少くも此時の此の男はそんな心持がしたのではないかといふ氣がする。彼の顏の表情には私が此

れ迄見たあらゆる乞食に見られない柔かく温かい或物があつた。

彼はそれ切り来ない。もう一度来ないかしらとも思ふが、矢張りもう来てくれない方がいゝ。

（三）　蓑虫

八月の或日、空は灰色に曇つて雨気を帯びた風の涼しい昼過ぎであつた。私は二階の机に凭れてK君に端書を書いて居た。端書の面の五分の四位迄書いて、もう何も書く事がなくなつたので、萬年筆を握つたまゝ、しばらくぼんやり、縁側の手摺越しに庭の楓樹の梢を眺めて居た。すると私のすぐ眼の前に突き出て居る小枝に蓑虫のぶら下つて居るのが眼に付いた。それは此の虫としては可也大きいものであつた。よく見ると蓑は主に紅葉の葉の切れはしや葉柄を綴り集めたものらしかつたが、其の中に一本図抜けて長い小枝が交つて居て、其の先の方は蓑の尾の尖端から下へ一寸程も突き出て不恰好に反りかへつて居た。其れが此の奇態な動物の把柄とでも云ひたいやうな恰好をして居るのであつた。枝に取り付いて居る上端は眼に見えない程小さい点になつて居るので、風の吹く度に蓑はさまざまに複雑な振子運動をし又垂直な軸のまはりに廻転もして居た。今にも落ちさうに見えるが實は中々しつかりして居るのであつた。蓑虫自身は黙つて居るのか、或は死んで居るのか、兎も角も此の干からびた蓑を透して中に隠れた生命の断片を想像するのは困難なやうに思はれた。それで私は今書きかけた端書のさきへこんな事を書き加へた。

「今僕の眼の前の紅葉の枝に蓑虫が一匹居る。僕は蟻や蜂や毛虫や大概の虫に就いて其の心持と云つたやうなものを想像する事が出来ると思ふが、此の蓑虫の心持だけはどうしても分らない。」

此れだけで端書の余白はもうなくなつてしまつたが、これが端緒になつて私は此の虫について色々の事を考へたり想像したりした。

昔の學者などの中には殆んど年中、或は生涯貧しい薄暗い家の中に引籠つたきりで深い思索や瞑想に耽つて居たやうな人もあつたらしい。此んな人達はすぐ隣りに住んで居るゴシップ等の眼には或は丁度此の蓑虫のやうに気の知れない、又存在の愚かな者としか見えなかつたかも知れない。現世とは唯僅かな縁でつながつて、飄々として風に吹かれて居るやうな趣があつたかも知れない。唯蓑虫とちがふのは、幾年かの後に思索研究の結果を發表して、急に或は徐々に世間を驚かした事である。しかし中には纏まつた結果を得なかつたり、又得てもそれを發表しないで死んでしまつた者も澤山あるかも知れない。そんな人は傍目には此の蓑虫と違つた處はなかつたかも知れない。

此んな空想に耽りながら見て居ると、蓑の上に隙間なく並んで居る葉柄の切片が、なんだか此の隠れた小哲學者の書棚に背皮を並べた書物でもあるやうな気がした。

此の蓑について思ひ出すのは、私が子供の時分に、誰かに教はつたまゝに、蓑虫の裸にしたのを細かに刻んだ色々の布片と一緒にマッチの空箱の中に入れて、五色の蓑を作らせようとした事である。此の試験の結果は熱心な期待を裏切つて、虫は死んでしまつた。それにも拘らず、美しい五彩の蓑を纏うた虫の心象だけは今も頭の中に呼び出す事が出来る。ところがつい近頃私の子供が矢張り誰かに此の話を聞いて私の失敗した経験を繰返して居たやうである。一體此の話は事實であらうか。事實であるとしても稀有な事であるか、それとも普通な事であらうか。私の母自身にも實際自分で經験し

たのではないかも知れないが、つい今迄それを確めては見なかつた。又別に今すぐ確めようとも思つて居ない。さういふ種類の事が容易くたしかめられようとは思はないからである。

此んな事からつぎ〳〵に空想をたどりながら、私は人間のあらゆる知識に關する所謂オーソリテイといふものの價値に考へ及んだ。そして考へれば考へる程、今迄安心だとばかり思つて居た色々の知識の根柢が、脚元からぐらついて來るやうな氣がした。しかし其時考へた事は茲に書くには餘りに複雜でそしてデリケートな、そして纏りのつきかねるものであつた。

此のやうな事を考へた翌日の同じ時刻に私は例のやうに二階の机の前に坐つた。そして昨日の蓑蟲はと思つて大凡此邊と思ふ見當を搜して見たが見付からない。其内にずつと高い處の大きな枝に何か動くものがあると思つてよく見ると、それが昨日のあの把柄のついた蓑蟲であつた。唯意外な事には、昨日生死も分らないやうに靜まり返つて居たあの小哲學者とは思はれないやうに活動して居るのであつた。蓑の上端から黑く光つた頭が出て居た。それが波を打つて動くにつれて紡錘體は一刻みづつ枝の下側に沿うて下りて行つた。時々休んで何か搜すやうな樣子をするかと思ふと又急いで下りて行く、とう〳〵枝の二叉に別れた處迄來ると、其處から別の枝に移つて今度は逆に上の方へ向いて彼の不細工な重さうな蓑を引きずり〳〵這つて行くのであつた。把柄のやうな長い棒が如何にも邪魔さうに見えた。

見て居る内に段々滑稽な感じがして來てつい笑はないでは居られなくなつた。そして昨日K君に書いた端書は訂正しなければならないと思つた。昨日の哲學者も今日はやつぱり自分の家を荷厄介に引きずりながら、長過ぎて邪魔な把柄をもて扱ひながら、あくせくと歩いて居た。一體何ういふ目的で歩いて居るのだらうと考へて見たが、多分矢張り食ふ爲だらうとしか思はれなかつた。

其日の夕方思ひ付いて字引でみのむしといふのを引いて見ると、此の蟲の別名として「木螺」といふのがあつた。成程這つて行く樣子は如何にも田螺か或は寄居蟲に似て居る。それから又「避債蟲」といふ字もある。此れも中々面白いと思つた。それから手近な動物の事をかいた書物を搜したが、此の蟲の成蟲であるべき蝶蛾がどんなものであるか分らなかつた。英語では何といふかと思つて和英辭書を開けて見たが蟲の一種とあるばかりで要領を得なかつた。一體此の蟲が西洋にも居るだらうか。もし居れば、こんな面白い蟲の事だから、隨分色々な人が色々な事を此れに就いて書いたのがありさうなものだと考へたりした。昆蟲學者に會つたら聞いて見たいものだと思つて居る。

「蓑蟲鳴く」といふ俳句の季題があるのを思ひ出したから、調べ序に歲事記をあけて見ると淸少納言の枕草紙からとして次のやうな話が引いてある。「蓑蟲の父親は鬼であつた。親に似て恐ろしからうといつて、親のわるい着物を引かぶせてやり、秋風が吹く頃になつたら來るよとだまして逃げて行つたのを、さうとは知らず、秋風を音にきゝ知つて、父よ〳〵と戀しがつて鳴くのだ」といふのである。どういふ處から出た傳說だか、或は才女の空想から生み出された事だか、兎に角現代人の思ひも付かないやうな事を考へたものである。併し此の淸少納言のオーソリテイが九百年も其のまゝに保存されて來たとすると、自然界に對する日本人の知識が如何に長い間平和安穩であつたかといふ事を物語つて居る。

其後も二階へ上る度に氣をつけて見ると、蓑蟲の數は一つや二つではない。大小さま〳〵の

が少くとも七つ八つは居るらしい。長い袴の付いたのはまだ外にも居た。中には丁度一本足の案山子に似たのもある、或は二本の大小を横へた武士のやうなのも居る。皆大概はちつとして居るが、午頃には時々活動して居るのを見受ける。彼等にも一定の勞働時間や食事の時間があるのかと思つたりした。或時大きなのが丁度紅葉の葉を食つて居る處を見付けたが、頭をさしのべて高い處の葉を引き曲げ乍ら葉を食ふと同じやうにして片はしから食り食らつて居た。近邊の葉はもう大分喰ひ荒されて居るのであつた。此んな處を見て居る内に蓑蟲に對する自分の心持は段々に變つて來た。そして蟲の生活が次第に人間に近く見えて來ると同時に、色々の詩的な幻覺は片端から消えて行つた。

M君が來た時に、此の話をしたら、M君は笑つて、「大分暇だと見えるね」と云つた。併しM君自身も矢張り大分暇だと見えて、此間自分で蓑蟲の巣を底迄振り返して見た經驗を話して聞かせた。

（四）新星

毎年夏になつてそろ/\夕方の風が戀しい頃になると、物置にしまつてある竹製の涼み臺が中庭へ持ち出される。此れが持ち出される日は、私の單調な一年中の生活に一つの著しい區切りを付ける重要な日になつて居る。もう明日あたりは涼み臺を出さうぢやないかといふ事が誰れかの口から云ひ出される。しかし其の翌日が雨であつたり、さうでなくても色々の事に紛れたりしてつい一日二日と延びる。其内にいよ/\今日はと云ふ事になつて朝の内に物置の屋根裏から臺が取り下され、一年中の塵埃や黴が濡れ雑巾で丁寧に拭ひ清められ、それから裏庭の日影で乾かされる。そしていよ/\夕方になつてから中庭に持ち出されると、それで初めて私の家に本當に夏が來たといふ心持になるのである。

涼み臺の外に折り疊み椅子が三つ同時に並べられて一同が中庭へ集る。まだ明るい宵の内には縄跳びをする者もあれば、寫生帖を出しておばあさんの後姿をかいて居るのもある。明朝咲く朝顔の蕾を數へて報告するのもある。幼い女兒二人は縁側へいろ/\なお花を並べて花屋さんごつこをする事もある。暗くなると花火をしたり、お伽噺をしたり、おばあさんにお國の話をさせたりして居る。幼い子等には、未だ見たことのない父母の故國が、お伽噺の中の妖精國のやうに不思議な幻像に滿たされて居るやうに思はれるらしい。例へば鄕里の家の前の流れに家鴨が澤山遊んで居て、夕方になると上流の方の飼主が小舟で連れに來るといふやうな何でもない話でさへ、何かしら一種の夢のやうなものを幼い頭の中に描かせると見える。それでいつも「おくにの話」をねだつてはおしまひに「あたしもお國へ行きたいなあ」と一人が云ふと、もう一人が同じ言葉を繰返すのである。子供等の亡祖父の若かつた頃の昔話も屢々出る。私自身が子供の時分に幾度も聞かされた話が、又同じ母の口から出るのを聞いて居ると、それがもう遠い/\昔の出來事であつて、數年前迄生きて居た私の父に關する話とは思はれないやうな氣がする。まして祖父を見た事のない、或は朧氣にしか覺えて居ない子供等には、會津戰爭や西南戰爭時代の昔話は書物で見る古い歴史の斷片のやうにしか響かないだらう。そして其れだけに却つて祖父に對するなつかしみは淨化され純化されて子供等の頭の中の神殿に收められるだらうと思つたりする。

今年の夏初めに、涼み臺が持ち出されて間も

なく、長男が宵の内に南方の空に輝く大きな赤味がかつた星を見付けてあれは何かと聞いた。見るとそれは黄道に近い處にあるし、チラチラ瞬きをしないからいづれ遊星にはちがひないと思つた。そして近刊の天文の雜誌を調べて見るとそれが火星だといふ事がすぐに判つた。星座圖を出して來てあたつて見るとそれは處女宮の一等星スピカの少し東に居るといふ事がわかつた。それで其の圖の上に鉛筆で現在の位置をしるし、其の脇へ日付をかいて置いて、此の夏中の此の遊星の軌道を圖の上で追跡して見ようといふ事にした。

其れが動機になつて子供は空のよくはれた晩には時々星座圖を出して目立つた星宿を見較べて居た。其頃は未だ織女や牽牛は宵の中には可也に東にあつた。西の方の獅子宮には白く大きな木星が屋根越しに氷のやうな光を投げて居た。

星座圖にある「變光星」といふのは何かといふ疑問も出た。私は簡單な説明をしてやつて、丁度見えて居た「織女」のすぐ隣りのベータ、ライラの面白い光度の變化を注意させた。それから夜毎に氣を付けて見て居ると、果して天文雜誌にある豫報の通りに光が變るといふ事實が子供の頭にどういふ風に感ぜられたか、それは私には分らなかつた。

空を眺めて居る内に時々流星が飛んだ。私は流星の話をすると同時に、熱心な流星觀測者が夜中空を見張つて居る話をして、それから所謂新星の發見に關する話もして聞かせた。主だつた星座を諳記して居れば素人でも新星を發見し得る機會はあるといふ事も話した。

一秒時間に十八萬六千哩を走る光が一ケ年かゝつて達する距離を單位にして測られるやうな莫大な距離をへだてて散布された天體の二つが偶然接近して新星の發現となる機會は、例へば釋迦の引いた譬喩の盲龜が百年に一度大海から首を出して孔のあいた浮木にぶつかる機會にも比べられる程少さうであるが、天體の數の莫大な爲に新星の出現はそれ程珍しいものではない。唯光度の著しく強いのが割合に稀である。

此んな話よりも子供を喜ばせたのは、新星の光が數十百年の過去のものだといふ事であつた。我家の先祖の誰れかが何處かでどうかして居たと同じ時刻に、遠い〳〵宇宙の片隅に突發した事變の報知が、やつと今の世に此の世界に屆くといふ事である。

併しさう云へば一體吾等が「現在」と名づけて居るものが、唯永劫な時の道程の上に孤立した一點といふやうなものに過ぎないであらうか。よく考へて見るとそんなに切り離して存在するものとは思はれない。つまりは、遠い昔から近い過去迄のあらゆる出來事にそれ〴〵の係數を乘じて積分した總和が眼前に現はれて居るに過ぎないのではあるまいか。

こんな事を考へたりしながら、もう聞き古した母の昔話を今迄とは別な新しい興味をもつて聞く事もあつた。

八月になつてから雨天や曇天がしばらく續いて涼み臺も片隅の戸袋に立てかけられたまゝに幾日も經つた。

或朝新聞を見て居ると、今年卒業した理學士K氏が流星の觀測中に白鳥星座に新星を發見したと云ふ記事が出て居た。其日の夕方になると涼み臺へ出て子供と共に其の新星を搜したらすぐ分つた。しばらく見なかつた間に季節が進んで居る事は織女牽牛が宵の内に眞上に來て居るのでも知られた。そして新星は可なり天頂に近く白鳥座の一番大きな二等星と光を爭ふ程に輝きまたゝいて居るのであつた。

『しばらく怠けたので新星の發見をし損なつた

ねと云つたら、子供はどう思つたか顏を眞赤にして、そしてさも面白さうに笑つて居た。

私は冗談のつもりで云つたのだが子供には私の意味がよく分るまいと思つた。それで誤解をしない爲に次のやうな說明をして置かなければならなかつた。

新星の出現する機會は極めて少い。吾々素人が星座の點檢をする機會も亦甚だ少い。從つて先づ新星が現はれて、それから吾々がそれを發見するといふ確率は、二つの小さな分數の相乘積であるから、つまり極小さいもののまだ小さい分數に過ぎない。此れに反して毎晩缺かさず空の見張して居る專門家に取つては、「偶然」は寧ろ主に星の出現といふ事のみにあつて、吾々の場合のやうに星と人とに關する二重の「偶然」ではない。強ひて云へば天氣の晴曇や日常の支障といふやうな偶然の出來事の爲に一日早く見付けるかどうかといふ事が問題になるだけであらう。

此の說明は子供には、よく分らないらしかつた。

其のうちに又曇天が續いて晴晩はもう秋の心地がする。どうかすると夜風は涼し過ぎる。涼み臺もつい忘れられ勝になつた。從つて星の事ももう子供の頭からは消えてしまつて居るらしい。新星の今後の變化を研究すべき天文學者の仕事は此れから始まるので、學者達は毎晩曇つた空を眺めては晴間を待ち明して居る事であらう。

（五）幼い Ennui

夏休み中に一度は子供等を連れて近くの海岸へ日歸りの旅をするのが近年の常例になつて居た。其の以前には一週間位泊りがけで出かける事にして居たが、さうすると屹度きまつたやうに誰れかが轉地先で病氣をした。或る年は母がひどい腸加答兒に罹つて半年程後迄も祟られた。又或る年は父子三人とも熱が出たり腸を害したりして、不安心な怪しげな醫者の手にかゝらねばならなかつた。其の內に知人の或る者は保養地で疫痢のために愛兒を亡くしたりした。それでもう海水浴といふものが恐ろしくなつて、泊りがけに行く氣にはなれなくなつてしまつた。それでも一度も行かないのは子供等に氣の毒なやうな氣がするので、日歸り旅行といふ事を考へついてそれにきめて居たのである。子供等はそれでも十分に滿足して居たやうである。

今年は自分が病氣で行かれない事になつた。のみならず二人の男の子も健康に故障があつて旅行は餘り望ましくなかつたので、とう〱何處へも行かない事にきめた。其の代りに銘々に何か望みの本や玩具を買つてやる事にして、それで現代が生み出した此の一種の新しい父親の義務といつたやうなものを免して貰ふ事にした。

年とつた方の子供等は書籍を買つた。近頃繪が面白くなつた末から二番目の八重子は水彩繪具と筆とを買つて規定の金額は一度に使つてしまつた。末の冬子は線香花火や千代紙やこまこました品を少しづつしか買はないので、配當された僅な金が割合に長く使ひでがあるやうであつた。さういふ事實は多少小さな姉や兄の注意をひいて居るらしかつた。

學校へ出て居る子等は毎朝復習をして居た。まだ幼稚園の冬子は其の時間中相手になつてくれる人がないので、仲間はづれの侘しさといつたやうなものを感じて居るらしかつた。それで自分も祖母の膝の前へ習字帖などをひろげて矢張り一種の復習をして居る事もあつた。

此の四五月頃から父親が毎日繪を描いて居

たのが子供等に影響して、みんなが熱心な自由畫家になつてしまつた。誰れの發案だか小さな「繪の雜誌」をこしらへた。五人の子供が銘々に隱しあつて描いたのを長女が纏めて綴つた後に發表する事にして居た。「みそさゞい」といふ名前をつけて一週間に一回位づつ發行したのが存外持續して最近には第九號が刊行されたやうである。表紙畫は順番で受け持つ事になつて居るらしい。

出品畫を描いて居る内は、ひどく人の見るのを厭がつて、みんな方々の部屋の隅へ頭をつつこんで描いて居た。時々兄さん達が無理に覗きに來ていけないといふ訴へが小さい子等から母や祖母の前に提出されて居るやうであつた。畫家の内には未成品を人に見られる事を厭がる人が隨分多いやうであるが、此れには無論種々な複雜な實際的の理由もあるに相違ない、しかし其の外に矢張り子供の時から既に有つて居る一種の妙な心理作用も手傳つて居る場合がありさうに思はれた。

五人の描く繪が五人ながら、それぞれの小さな個性を主張して居るのが可也目立つて見えた。のみならず、銘々にもう既にきまつた一種の型のやうなものが芽を出しかけて居るのであつた。何んと云つても一番多くの獨創的な點をもつて居るのは一番小さい冬子の自由畫であつたが、その面白い點が一度認められ賞められると其れがもう十八番になつて、例へば富士山が出だすとそれが如何なる繪にでも必ず現はれるのであつた。今度は趣向を變へて驚かしてやらうといふやうな氣は流石に未だ無かつた。

其内に又「みそさゞい」文章號といふのが發行された。私が讀書して居る隣りの室で、八重子と宗二とがひそひそ話し合つては、宗二が何か半紙へ書いて居ると思つたら、其れは八重子作の御伽噺を兄が筆記して居るのであつた。出來上つたのを見ると、隨分色々の文章や歌があつた。長男のは感想的のもので姉や弟の繪や文章の傾向が論じてあつたりした。八重子の日記にはおやつやおかずの事が大分詳しくかいてあつた。冬子の「ホシ」と題した歌のやうなものがあつたが、意味のどうしても分らない全く未來派のやうなものであつた。

子供等が此んな事をして割合に仲よく面白く遊んで居る内に夏休みは容赦もなく經つて行つた。もう幾つ寢ると學校や幼稚園が始まるかといふ事が幼い子等によつて每日繰返されるやうになつた。さう思つて見るせゐか、子供等の顏にも何處かに倦怠の影がうかゞはれた。私は親類や知人の誰れ彼れが避暑先からよこした繪葉書などを見る度に、なんだか子供等にまだ何等かの負債をして居るやうな心持を打消す事が出來なかつた。

或る夕方一同が涼み臺と縁側に集つていろんな話をして居る間に、去年みんなで或夜銀座へ行つてアイスクリームを食つた時の話が出た。それを聞くと八重子と冬子が今年も銀座へ連れて行つてくれと云ひ出した。實際昨年行つた切りで其後一度も行かなかつたのである。

翌日の夕方は空もよくはれ夕立のおそれも無ささうであるし、風も涼しくて漫步には適當であつたから、妻に五人の子供を連れさして銀座へ遊びにやつた。末の二人はどんな好い處へ行くかと思はれるやうに喜んで、そして自分等の好みで學校通ひの洋服を着せて貰つて、一時間も前から靴をはいて勇んで飛び廻つて居た。私は此の二人の寧ろ見すぼらしい形ばかりの洋服を見比べて居る内に一種の佗しさを感じた。其の佗しさは恐らく吾々階級の父親が此のやうな場合に感ずべき共通のものだらう。

子供等が出て行つた後で私は涼み臺で母と唯二人で話して居た。座敷の電氣も大方消してし

まつたので庭は暗かつた。家中が珍しくしんとして表庭の方で蟲の音が高く聞えて居た。

十時頃に床へはひつて本を讀んで居ると門の戸が開いて皆がどや／＼歸つて來た。どうしたのか冬子が泣きながらはひつて來て、着物をきかへ床へはひつてもまだしく／＼泣いて居た。どうしたかと聞いて見ても何も云はないし、外のものにも何故だか分らなかつた。

銀座を歩いて夜店をひやかして居る内に、冬子が『どうして早く銀座へ行かないの』と何遍も聞いたさうである。此處が銀座だと說明しても分らなかつた。どうも銀座といふのはアイスクリームのある家の事と思つて居たらしいといふ事である。宅の門迄は元氣よく歸つて來たのが、どうしたか門をはひると泣き出したさうである。

私は『珍しく繁華な街へ行つたから癇でも起つたのだらう』と云つた。私が此れを云ふと同時に冬子は急に泣き止めた。そして何か考へてでも居るやうな風であつたが間もなくすや／＼寢入つてしまつた。

芝刈

私は自分の住家の庭としては寧ろ何もない廣い芝生を愛する。吾々階級の生活に許される程度の僅かな面積を泉水や植込みや石燈籠などでわざ〳〵狭くしてしまつて、逍遙の自由を束縛したり、唯さへ不足勝な空の光の供給を制限しようとは思はない。樹木も勿論好きである、美しい草花以上にあらゆる樹木を愛する。それで若し數千坪の庭園を所有する事が出來るならば、思ひ切つて廣い芝生の一方には必ずさまざまな樹林を造るだらうと思ふ。そして生氣に乏しい所謂「庭樹」と稱する種類のものより、寧ろ自然な山野の雜木林を選み度い。

併しそのやうな過剰の許されない境遇としては、樹木の方は割愛しても、芝生だけは作らないでは居られなかつた。さうして木立の代りに安價な八ツ手や丁子のやうなものを垣根の裾に植ゑ、それを遠い地平線を限る常綠樹林の代用として、冬枯れの荒涼を緩和する外はなかつた。仕合せに近所中一體に樹木が多いので、それが背景になつて樹木の綠にはそれ程饑ゑる事はない。

許され得る限りの日光を吸收して、芝は氣持よく生長する。無心な子供に踏み暴されても、酷しい氷點下の寒さに曝されても、此の粘り強い生命の根はしつかりと互にからみ合つて、母なる土の胸にしがみ付いて居る。さうして父なる太陽が赤道を北に越えて回歸線への旅を急ぐ頃になると、其の歸りを豫想する喜びに堪へないやうに浮き立つて新しい綠の芽を吹き始める。

梅雨期が來ると一雨毎に綠の毛氈が濃密になるのが、不注意なものの眼にも際立つて見える。靜かな雨が音もなく芝生に落ちて吸ひ込まれて居るのを見て居ると、本當に天界の甘露を含んだ一滴々々を、數限りもない若芽が、其の葉脈の一つ〳〵を歡喜に波打たせながら、呼吸もつかずに呑み乾して居るやうな氣がする。

雨に曇りに、午前に午後に芝生の色はさまざまな變化を見せる。或時は强烈な日光を斜に受けて針のやうな葉が金色に輝いて居る。其の上をかすめて時々何かしら小さな羽蟲が銀色の光を放つて流星のやうに飛んで行く。

それよりも美しいのは、夏の夜が更けて家内も寢靜まつた頃、讀み疲れた書物をたゝんで緣側へ出ると、机の上に吊した電燈の光は明け放された雨戸の隙間を越えて芝生一面に注がれて居る。眞暗な闇の中に擴げられた天鵞絨が不思議な綠色の螢光を放つて居るやうに見える。或時はそれが又底の知れぬ深い淵のやうに思はれて來る事もある。此れを見て居ると疲れ熱した頭の中がすうつと涼しく爽かに柔らいで來る。私は時々庭へ下りて行つて色々の方向から此の闇の中に浮き上つた光の織物をすかして見たりする。それから其の眞中に椅子を持ち出して空の星を點検したり、深い沈默の小半時間を過ごす事もある。

芝の若芽が延び始めると同時に、此の密生した葉の林の中から數限りもない小さな生き動くものの世界が產れる。去年の夏の終りから秋へかけて、小さなあはれな母親達が種屬保存の本能の命ずるがまゝに、そこらに產みつけてあつた微細な卵の内部では、吾々の夢にも知らない間に世界で一番不思議な奇蹟が行はれて居たのである。其の證據には今試みに芝生に足を入

れると、そこからは小さな土色の蝗蚱や蛾のやうなものが群つて飛び出した。蟋蟀や蜘蛛や蟻や其他名も知らない昆蟲の繁華な都が、蟲の眼から見たら天を摩するやうな緑色の尖塔の林の下に發展して居た。

此の動植物の新世代の活動して居る舞臺は又人間の新世代に對しても無盡藏な驚異と歡喜の材料を提供した。子供等はよく此等の小さな蟲をつかまへて白粉の空罎へ入れたりした。何の爲にそんな事をして小さな生物を苦しめるかといふやうな事は、少しも考へては居なかつた。それでも蟲の食物か何かの積りで、むしり取つた芝の葉を罎の中へ詰め込んで、それで蟲は十分満足して居るものと思つて居るらしかつた。其儘忘れて打つちやつて置いた罎の底にひつくり返つて死んで居る蟲を見付けた時は矢張りいくらか可哀想だとは思ふらしい。それで垣根の隅や樹の下へ二匹のお墓を築いて花を供へたりして、さういふ場合に大人の味ふ纖微な感情の斷片に類したものを味つて居るらしく見える。子供が蟲をつかまへたり、いぢめたり殺したりするのは、矢張り所謂種屬記憶と稱するものの一つであらうか。此のやうな記憶或は本能は人類種族からすつかり消え去らない限り、强者と弱者の關係はあらゆる學説などとは無關係に存續するだらう。

子供等は又よくかやつり草を芝の中から捜し出した。三角な莖を割いて方形の枠形を作ると云ふ六ケしい幾何學の問題を無意識に解いて、そして吾々の空間の微妙な形式美を味つて居る事には氣が付かないで居た。相撲取草を見付けて相撲を取らせては不可解な偶然の支配に對する怪訝の種を小さな胸に植ゑつけて居た。

芝の中から蒲公英や雛菊草や其他色々の雜草も生えて來た。私はなんだか其れを引拔いてしまふのが惜しいやうな氣がするので、其儘にして置くと、何時の間にか母や下女がむしり取るのであつた。

夏が進むにつれて芝は益々延びて行つた。芝生の單調を破る爲に所々に植ゑてある小さな躑躅やどうだんや薔薇などの根元に近い處は人に踏まれない爲に特に長く延びて、それが何となくほうけ立つてうるさく見え出した。母などは病人の頭髪のやうで氣持が惡いと云つたりした。植木屋へ端書を出して刈らせようと云つて居る内に事に紛れて數日過ぎた。

其内に私はふと近くの街の鍛冶屋の店に吊してあつた芝刈鋏を思ひ出した。例年とちがつて今年は閑である。そして病氣に障らぬ程度に身體を使つて、輕度な讀書に疲れた暇に休息を與へ度いと思つて居た處であつたので、丁度適當な仕事が見付かつたと思つた。芝の上に坐り込んで靜かに兩腕を動かすだけならば私の腹部の病氣には何の差支もなささうに思はれた。尤も一概に腕や手を使ふだけなら腹にはこたへないと云ふ簡單な考が間違ひだといふ事は既に經驗して知つて居た。例へばタイプライターをたゝいたり、ピアノを彈いたりするやうな動作でもどうかするとひどく胃にこたへる事が屢々あつた。殊に文句に絶えず頭を使ひながら急き込んで印字機の鍵盤をあさる時、彈き馴れない六ケしい樂曲をものにしようとして努力する時、さういふ時には病的に過敏になつた私の胃はすぐに何等かの形式で不平を申し出した。併し此れは手や指を使ふと云ふよりも寧ろ頭を使ふ爲らしく思はれた。芝を刈るといふやうな、器械的な、虚心で出來る動作ならば恐らくそんな事はあるまいと思はれた。少くも一日に半時間か一時間づつ少しも急いだり努力したりしないで、氣樂にやつて居れば差支はあるまい。こんな事を考へながら私は試みに兩腕を動かして鋏を使ふ眞似をして見た。まだ實際に

は經驗しない芝刈の作業を強く頭に印象させながら腕を動かして見たが、腹に力を入れるやうな感覺は少しも生じて來ないらしかつた。念の爲に今度は印字機に向つたつもりになつて兩手の指を動かして居ると何時の間にか横膈膜の下の方が次第に堅く凝つて來るのを感じた。

此のやうな假想的の試驗が、あてになるかどうかは自分にも曖昧であつたが、兎も角も、一つ實物に就いて試驗をして見て、もし障りがありさうであつたら、すぐに止めればよいと思つた。

風のない蒸暑い或日の夕方、私は一番末の女の子をつれて鋏を買ひに出かけた。燈火の乏しい樹木の多い狹い町ばかりの此邊の宵闇は暗かつた。めつたに父と二人で出る事のない子供は何かしら改つた心持にでもなつて居るのか、不思議に默つて居た。私も默つて居た。或家の前迄來ると不意に『山本さんの……セツ子さんの御内は此處よ』と云つて教へた。多分幼稚園の友達の家だらうと思はれた。『セツ子さんは毎朝お父さんが連れて來るのよ。』……『お父さんは何時になつたら御役所へ出るの。……出るやうになつたら幼稚園迄一處に行きませうね。』こんな事をぽつり〳〵話した。表通りへ出ると流石に明るかつた。床屋の硝子戸から洩れる蒼白い水のやうな光や、水菓子屋の店先に並べられた綠や紅や黄の色彩は暗闇から出て來た眼に眩しい程であつた。併しその隣りの鍛冶屋の店には薄暗い電燈が一つついて居るきりで恐ろしく陰氣に見えた。店にはすぐに數へ悉される位の品物——鍬や鎌、鋏や庖丁などが板の間の上に並べてあつた。私の求める鋏は唯二つ、長いのと短いのと鴨居から吊してあつた。

丁度夕飯をすまして膳の前で楊枝と團扇とを使つて居た鍛冶屋の主人は、袖無の襦袢のままで出て來た。そして鴨居から二つ鋏を取り下して積つた塵を口で吹き落しながら兩臂を動かして工合をためして見せた。

柄の短い割に刃の長く幅廣なのが芝刈專用ので、もう一つのは主に樹の枝などを剪るのだが芝も刈れない事はない、芝生の面積が廣ければ前者でなくては追付かないが、少しばかりなら後のでもいゝ、素人の家庭用なら却つて此れがいゝかも知れないなどと説明しながら、其處らに散らばつて居る新聞紙を剪つて見せたりした。『かういふ物はやつぱり呼吸ですから…。』そんな事を云つて、又幾枚も剪り散らして、其の切屑で刃の塵を拭いたりした。

芝を刈る鋏と云へば一通りしかないものと簡單に思ひ込んで居た私は少し當惑した。此のやうな原始的な器械にそんな分化があらうとは豫期して居なかつた。どちらにしようかと思つて交る〳〵二つの鋏を取り上げて工合を見ながら考へて居た。成程芝を刈るにはどうしても專用のものが工合が好いといふ事は自分にも明白に了解された。併しそれで枯枝などを切ると刃が缺けるといふ主人の言葉は本當らしかつた。

私は何だか試驗をされて居るやうな氣がした。主人は團扇と楊枝とを使ひながら往來を眺めて居た。子供は退屈さうに時々私の顏を見上げて居た。

とう〳〵柄の長い方が自分の今の運動の目的には適して居るといふ或る力學的な理由を見付けた。と思つたので其の方を取る事にした。

鋏を柄に固定する目釘を未ださしてないから少し待つてくれといふので、それが出來るまで其處らを散歩する事にした。暫く歩いて歸つて來て見ると、目釘はもうさゝれて居て、支點の軸に油をさして居る處であつた。店先へ中年の夫婦らしい男女の客が來て、出刃庖丁をあれかこれかと物色して居た。……私がどう云

ふ譯で芝刈鋏を買つて居るかが此の夫婦に分らないと同樣に、此の夫婦がどういふ經路からどういふ目的で出刃庖丁を買つて居るのか私には少しも分らなかつた。其の庖丁の未來の運命も無論誰れにも分らう筈はなかつた。それでも髮を蝶卷に結つた顏色の妙に黃色い其の女と、眼付の險しい男とを、此の出刃庖丁と並べて見た時は何だか不安なやうな感じがした。此れに反して私の鋏が何だか平和な穩かなもののやうに思はれた。

長い鋏をぶら下げて再び暗い屋敷町へはひつた。

今迄黙つて居た子供は急に饒舌になつた。いつ芝を刈り始めるのか、刈る時には手傳はしてくれとか、今夜はもう刈らないかとか、そんな事をのべつに饒舌つて居た。父が自分で芝を刈るといふ事が餘程珍しい面白い事でもあるやうに。

しかし私自身にとつても、それは矢張り珍しく新しい事には相違なかつた。

宅へ歸ると家内中のものがいづれも多少の好奇心と、漠然とした明日の期待を抱きながら交〻る此の新しい道具を點檢した。

翌日は晴天で朝から強い日が照りつけた。餘り暑くならない内にと思つて、鋏を持つて庭へ出た。

何處から刈り始めるかといふ問題がすぐに起つて來た。それは何でもない事であつたが又非常に六ケしい問題でもあつた。色々の違つた立場から見た答解は色々に違つて居た。出來るだけ短時間に、出來るだけ少しの力學的仕事を費して、與へられた面積を刈り終るといふ數學的の問題もあつた、刈りかけた中途で客間から見た時になるべく見にくくないやうにといふ審美的の要求もあつた。一番延び過ぎた處から始めるといふ植物の發育を本位に置いた考案もあつた。こんな事に迄現代風の見方を持つて來るとすれば、兎も角も科學的に能率をよくする爲に前に擧げた第一の要求を充す方法を選んだ方がよささうに思はれた。能率を論ずる場合には人間を器械と同樣に見るのであるが、今の場合には其れでは少し困るのであつた。もと〱自分の健康といふ事が主になつて居る以上、私は此際最も利己的な動機に隨つて行く外はないと思つたので、結局日蔭の涼しい處から刈り始めるといふ極めて平凡なやり方に歸つてしまつた。

すると又すぐに第二の問題に逢着した。芝生とそれより二寸位低い地面との境界線の處は芝の生え方も亂雜になつて居るし、葉の間に土塊などが交つて居る爲に刈りにくく面倒である。其の上に刈り取つた葉がかぶさつたりすると猶更厄介であつた。それで先づ此の境界線の生際を整理した後に平たい面積に掛る方が利口らしく思はれた。併し此の生際の整理は極めて面倒で不愉快であつて、見た處の效果の少い割の惡い仕事であつた。

おしまひにはそんな事を考へて居る自分が馬鹿らしくなつて來たので、好い加減に、無責任に、だらしなく刈り始めた。

蒼白い刃が垂直に平行して密生した芝の針葉の影に動くたびにザック〱と氣持のいゝ音と手ごたへがした。葉は根元を切られても矢張り隣り同士もたれ合つて密生したまゝに直立して居る。其の底を潜つて進んで行く鋏の律動につれてムク〱と動いて居た。鋏をあげて離すと切られた葉の塊はバラ〱に碎けて横に飛び散つた。刈つた跡には茶褐色にやけた朽葉と根との網の上に、眞白にもえた莖が、針を植ゑたやうに現はれた。そして強い土の香がぷんと鼻にしみるやうに立ちのぼつた。

無數の葉の一つ〱が極めて迅速に相次いで切斷される爲に生ずる特殊な音は色々の事を思

ひ出させた。理髮師の鋏が濃密な髮の一束々々を剪つて行く音にいつも一種の快感を味つて居た私は、今自分で理髮師の立場から又少しちがつた感覺を味つて居るやうな氣がした。それから子供の時分に見世物で見た象か、藁の一束を鼻で卷いて自分の前脚の膝へたゝきつけた後に、手際よく束の端を口に入れて藁のはかまを嚙み切つた、あの痛快な音を思ひ出したりした。併し何故此の種類の音が愉快であるかといふ理由はどう考へても分らなかつた。音の性質から考へれば此れは雜音の不規則な集合で、音樂的の價値などは無論無いものである。併し或は此れを聽感に對する音樂に對立させ得べき觸感或は筋肉感に關する樂音のやうなものではあるまいか。音自身よりは寧ろ音から連想する觸感に一種の快を經驗するのではあるまいか。それとも、又もつと純粹に心理的な理由によるものだらうか。或はひよつとしたら吾々の祖先の類人猿時代の或る感覺の記憶でないとも云はれないと思つたりした。

　鋏の進んで行く先から無數の小さなばつたや蛼が飛び出した。平和——であるかどうか、それは分らぬが、兎も角も人間の眼から見ては單調らしい蟲の世界へ、思ひがけもない恐ろしい暴力の惡魔が侵入して、非常な、目にも止まらぬ速度で、空を蔽ふ森を薙ぎ立てるのである。劇しい恐慌に襲はれた彼等は、自分の身長の何倍、或は何十倍の高さを飛び上つてすぐ前面の茂みに隱れる。さうして再び鋏が其處に迫つて來る迄はそこで落着いて居るらしい。彼等の恐慌は單に反射的の動作に過ぎないか、或は非常に短い記憶しか有つて居ないのだらうか。……魚の視感を研究した人の話によると海中で威嚇された魚は僅に數尺逃げのびると、もうすつかり安心して悠々と泳いで居るといふ事である。……今度の大戰で荒された地方の森に巣をくつて居た鴉は、砲擊が止んで數日經たない内にもう歸つて來て、枝も何も彈丸の雨に吹き飛ばされて坊主になつた樹の空洞で、平然と子を育てて居たと傳へられて居る。尤もさう云へば戰亂地の住民自身も同樣であつたかも知れない。又或島の火山の爆裂火口の中へ村落を作つて居たのが、或日突然の爆發に空中へ吹き飛ばされ猫の子一つ殘らなかつた事があつた。さうして數年の後には其の同じ火口の中へ何時の間にか又人間の集落が形造られて居た。此んな事を考へて見ると蟲の短い記憶——蟲にとつては長いかも知れない記憶を笑ふ事は出來なかつた。

　無數に群がつて居る蟲の中には私の鋏の爲に負傷したり死んだりするのも隨分ありさうに思はれて、多少酷たらしい氣がしないでもなかつた。併しどうする事も出來ないので構はず刈つて行つた。此等の蟲は害蟲だか益蟲だか私には分らなかつた。

　子供の時分に私の隣家に信心深い老人が居た。彼は手足に蚊がとまつて吸はうとするのを見付けると、靜かに其れを追ひのけるといふ事が金棒引の口から傳へられて居た。そして其れが一つの笑話の種になつて居た。私も人並に笑つては居たが、其の老人の不思議な行爲から一つの謎のやうなものを授けられた。さうして今日になつても其の謎は解く事が出來ないで其儘になつて居る。のみならず此の謎は長い間に色々の枝葉を生じて益々大きくなるばかりである。

　例へば人間が始まつて以來今日迄曾て斷えた事のないあらゆる鬪爭の歷史に關する色々の學者の解說は、一つも私の腑に落ちないやうに思はれた。……私には牛肉を食つて居ながら生體解剖に反對して居る人達の心持が分らなかつた。……人間の平等を論じる人達が其の平等

を年齡や體格以下におしひろめない理由がはつきり分らなかつた。……普通選擧を主張して居る友人に、何故女子にも同じ權利を認めないかと聞いて怒を買つた事もあつた。

今鋏のさきから飛び出す昆蟲の群を眺めて居た瞬間に、突然或る一つの考が腦裡に閃いた。それは別段に珍しい考でもなかつたが、其時にはそれが唯一の眞理であるやうに思はれた。――もう昆蟲の生命などは方則の前の一物質に過ぎなくなつた。私と私の鋏は其の方則であり征服者であり同時に神樣であつた。私は吾々人間の頭上に恐ろしい大きな鋏を振り廻して居る神樣の殘忍に痛快な心持を想像しながら、勢よく鋏の把柄を動かして行つた。

*　*　*　*　*

病氣に障る事を恐れて初めの日は三尺平方位にして止めた。一週間に行つて見ると、刈られた葉はすつかり乾き上つて、蒼白い干草になつて散らばつて居た。日向に曝されたまゝの鋏の刃は觸つて見ると暑い程にほてつて居た。

學校から歸つて來た子供等は、少からざる好奇心をもつて刈られた部分を點檢したあとで、我れ勝ちに爭つて鋏を手にした。暫くして見に行つて見ると、芝生の上には鼠が嚙つたやうに、三角形や、片假名や、ローマ字などが表はれて居た。九歲になる女の子は裁縫用の鋏で丁寧に一尺四方位の部分を刈りひらいて、人差指の根元に大きな可愛い肉刺をこしらへて居た。

色々の時刻に色々の人が思ひ〳〵の場所を刈つて居た。人々の個性は此んな些細な事にも強く刻みつけられて居た。大まかに不揃に刈り散らして虎斑をこしらへる者もあれば、一方から丁寧に秩序正しく、蠶が桑の葉を食つて行くやうに着々進行して行くものもあつた。或る者は根元までつめて刈り込まないと承知しないし、又或る者は或る長さの線を殘すやうに骨を折つて居るらしく見えた。

書齋で聞いて居ると時々鋏の音が聞えたが、其の音の工合で誰れがやつて居るかは大抵分つた。

午前に私が刈り始めようとするとよく來客があつた。さういふ事が三四回もつゞいた。來客を呼ぶおまじないだと云つて笑ふものもあつた。此れは無論直接の因果關係ではなかつたが、しかし全くの偶然でもなかつた。二つの事柄を制約する共通な條件はあつた。唯其の條件が必至のものでないだけの事であつた。

毎日少しづつ鋏を使ひながら少しづつ色々の事を考へた。色々の考は何處から出て來るか分らなかつた。前の考と後の考との關係も分らなかつた。昔ミダス王の理髮師が囁いた祕密を蘆の葉が再び囁いたやうに、今此の芝の葉の一つ一つが、昔誰れかに聞いた事を今私に囁いて居るのかも知れない。

例へば私は自分で芝を刈る事によつて、植木屋の賃銀を奪つて居るのではないかといふ問題に出會つた。そして色々もて扱つて居る内に、此れがもう可也に古い、ありふれた問題である事に氣が付いた。それかと云つて此れに對する明快な解決はやはり得られなかつた。

延び過ぎた芝の根元が腐れかゝつて居るのを見た時に、私はふと單純な言葉の上の連想から、餘りに榮え茂り過ぎた物質的文化の爲に人間生活の根本が腐れかゝるのではないかと思つて見た。そして其れを救ふには何とかして少し此の文明を刈り込む必要がありはしないかと考へた。併し芝と文化とは何の關係もない。芝を刈るのがいゝと云つても文明を刈り取るがいゝといふ證據にも何もならない事は明かであつた。餘りに皮相的な輕率な類推の危險な事を今更のやうに想つて見たりした。實際そんな

單純な考が熱狂的な少數の人の口から群集の間に燎原の火のやうに播がつて、「芝」を根元迄燒き拂はうとした例が西洋の歴史などにないでもなかつた。文明の葉は刈るわけにも燒く譯にも行かない。

* * * *

初めの中は面白がつて居た子供等もぢきに飽きてしまつて誰れも鋏を手にするものはなくなつた。唯長女と私とが時々少しづつ刈つて行つた。其内には雨が降つたりして休む日もあるので、一番初めに刈つた處はもう可也に新しい芽を延ばして來た。

最後に刈り殘された庭の片隅のカンナの葉蔭に、一きは濃く茂つた部分を刈つて居た長女は、そこで妙なものを發見したと云つて持つて來た。子供の指先位の大きさをした何かの卵であつた。つまんで見ると殼は柔かくてぶよ〳〵して居た。一つ鋏にかゝつてつぶれたのを開けて見たら中には蜥蜴の孵りかゝつたのがはひつて居たさうである。『人間のおなかの中に居るときとよく似て居るわ』と傍から小さな女の子が附加へた。私は非常に驚いて此の子供の知識の出所を聞き正して見ると、それが御茶の水で開かれた或る展覽會で見たアルコホル漬の標本から得たものである事が分つた。

子供等は此の卵の三つか四つを日當りのいゝ縁側の下の土に埋めて置いた。數日たつた後に掘つて見たらもう何もなかつたさうである。茲にも大きな奇蹟はあつた。

* * * *

十日程に亙つた芝刈がやつと終つた。結果は餘り體裁のいゝ方ではなかつた。刈り手の個性と刈り時の遲速とが芝生の上に不規則な斑を畫いて居た。休まず働いて居る自然の手が其の痕跡を拭ひ消すには未だ幾日か待たなければならなかつた。

保養の目的が達せられたかどうかは分らなかつた。大して身體に障りもしなかつた代りに別段のいゝ效果があつたとも思はれぬ。そのやうな效果が、秤や桝ではかれるやうに判然と分るものだつたら、醫師は嘸喜びもし又困る事だらうと思つた。——唯蜥蜴の卵といふものを初めて實見したのが恐らく此の數日の仕事の一番の獲物であつたらうと思つて居る。

厄年とetc.

氣分にも頭腦の働きにも何の變りもないと思はれるに拘らず、運動が出來ず仕事をする事の出來なかつた近頃の私には、朝起きてから夜寢る迄の一日の經過は可也に永く感ぜられた。強ひて空虚を充さうとする自覺的努力の餘勢が却つて空虚その物を引延ばすやうにも思はれた。

此れに反して振り返つて見た月日の經過は又自分ながら驚く程に早いものに思はれた。空漠な廣野の果を見るやうに何一つ著しい目標のないだけに、昨日歩いて來た途と今日との境が付かない。たま／＼記憶の眼に觸れる小さな出來事の森や小山も、どれといふ見分けの付かない唯一抹の灰色の波線を描いて居るに過ぎない。其の地平線の彼方には活動して居た日の目立つた出來事の峯々が透明な空氣を通して手に取るやうに見えた。

それだけに、最近の數ケ月は思ひの外に早く經つてしまつた。衰へた身體を九十度の暑さに持て餘したのはつい數日前の事のやうに思はれたのに、もう血液の不十分な手足の末端は、障子や火鉢位で防ぎ切れない寒さに凍えるやうな冬が來た。そして私の失意や希望や意志とは全く無關係に、歳末と正月が近づきやがて過ぎ去つた。さうして私は世俗で云ふ厄年の境界線から外へ踏み出した事になつたのである。

日本では昔から四十歳になると、すぐに老人の仲間には入れられない迄も、少くも老人の候補者位には數へられたもののやうである。併し自分はさう思はなかつた。四十が來ても四十一が來ても別に心持の若々しさを失はないのみならず、肉體の方でも此れと云つて衰頽の兆候らしいものは認めないつもりで居た。それでも或る若い人達の團體の中では自分等の仲間は中老連などと名づけられて居た。

餘り鏡といふものを見る機會のない私は、或朝偶然緣側の日向に誰れかがはふり出してあつた手鏡を弄んで居る中に、私の額の邊に銀色に光る數本の白髮を發見した。十年程前に或る人から私の頭の頂上に毛の薄くなつた事を注意されて、いまに禿げるだらうと豫言された事があるが、どうしたのか未だ禿頭と名の付く程には進行しない。禿頭は父親から男の子に遺傳する性質だといふ說があるが、それが若し本當だとすると、私の父は七十七歳迄完全に蔽はれた顱頂を有つて居たから、私も當分は禿げる見込が少いかも知れない。併し其の代りに何時の間にか白髮が生えて居た。

それから後に氣を付けて見ると同年輩の友人の中の誰れ彼れの額やこめかみにも、三尺以上距れて居てもよく見える程の白髮を發見した。未だ自分等よりはずつと若い人で、自分より多くの白髮の所有者もあつた。或時適々逢つて同窓と對話して居た時に、其の人の背後の窓から來る強い光線が頭髮に映つて居るのを注意して見ると、漆黑な色の上に浮ぶ紫色の表面色が或るアニリン染料を思ひ出させたりした。

又或日私の先輩の一人が老眼鏡をかけた見馴れぬ顏に出會した。そして試に其の眼鏡を借りて掛けて見ると、眼界が急に明るくなるやうで何となく爽かな心持がした。しばらくかけて居て外すと、眼の前に蜘蛛の絲でもあるやうな氣がして、思はず眼の上を指先でこすつて

見た。それから氣が付いて考へて見ると、近頃少し細かい字を見る時には、不知不識眼を細くするやうな習慣が生じて居るのであつた。

去年の夏子供が縁日で松蟲を買つて來た、そして縁側の軒端に吊して置いた。宵の内には鈴を振るやうな音がよく聞えたが、しかしどうかすると其の音が丸で反對の方向から聞えるやうに思はれた。不思議だと思つて懐中時計の音で左右の耳の聽力を試驗して見ると、左の耳が振動數の多い音波に對して著しく鈍感になつて居る事が分つた。のみならず雨戸をしめて後に寢床へはひるとチンチロリンの聲が聞えなかつた。すぐ横にねて居る子供にはよく聞えて居るのに。

私の方では年齡の事などは構はないで居ても、年齡の方では私を構はないで置かないのだらう。兎も角も白髪と視力聽力の衰兆と此れだけの實證はどうする事も出來ない。此れだけの通行劵を握つて私は初老の關所を通過した。そしてすぐ眼の前にある厄年の坂を越えなければならなかつた。

厄年といふものは何時の世から稱へ出した事か私は知らない。どういふ根據に依つたものかも分らない。多分は多くの同種類の云ひ傳へと同樣に、時と場所との限られた範圍内での經驗的資料と或る形而上的の思想との結合から生れたものに過ぎないだらう。例へば二百十日に颱風を聯想させたやうなものかも知れない。尤も二百十日や八朔の前後に亙る季節に、南洋方面から來る颱風が一旦北西に向つて後に拋物線形の線路を取つて日本を通過する機會の比較的多いのは科學的の事實である。さういふ季節の目標として見れば二百十日も意味のない事はない、併し厄年の方は果してそれだけの意味さへあるものだらうか。

科學的知識の進歩した結果として、科學的根據の明かでない云ひ傳へは大概他の宗教的迷信と同格に取扱はれて、少くも本當の意味での知識的階級の人からは斥けられてしまつた。勿論今でも未開時代其儘の模範的な迷信が到る處に行はれて、それが俗に所謂知識階級の或る一部迄蔓延して居る事は事實であるが、それとは少し趣を異にした事柄で、科學的に驗證され得る可能性を具へた命題迄が、一からげにして掃き捨てられたといふ恐れはないものだらうか。そのやうにして塵塚に埋れた眞珠はないだらうか。

根據の無い事を肯定するのが迷信ならば、否定すべき反證の明かでない命題を否定するのは、少くも輕卒とは云はれよう。分らぬ事として竿の先に吊して置くのは愼重ではあらうが忠實とは云はれまい。例へば厄年の如きものが全く無意味な命題であるか、或は意味の付け方によつては多少の意味の付けられるものではあるまいか。

此のやうな疑問を抱いて私は手近な書物から人間の各年齡に於ける死亡率の曲線を捜し出して見た。凡ての有限な統計的材料に免れ難い偶然的の偏倚の爲に曲線は例のやうに不規則な脈動的な波を描いて居る。併し不幸にして特に四十二歳の前後に跨がつた著しい突起を見出す事は出來なかつた。此れだけから見ると少くも其の曲線の示す範圍内では、四十二歳に於ける死亡の確率が特別に多くはないといふ漠然とした結論が得られさうに見える。

併し統計程確なものはないが、又「統計程譃をつくものはない」といふ事は爭はれないパラドックスである。上の曲線は確に一つの事實を示すが、此れは必ずしも厄年の無意味を斷定する證據にはならない。

科學者が自然現象の週期を發見しようとして被與材料を統計的に調査する時に、或る短い期

間については著しい潮期を得るに拘らず、僅り期間を長く採るとそれが消失するやうな事が往々ある。そのやうな場合に、短期の材料から得た潮期が單に偶然的のものである場合もあるが、又さうでない場合がある。或る期間だけ繼續する潮期的現象の群が濫發的に錯綜して起る時がさうである。

此れは唯一つの類例に過ぎないが、厄年の場合でも材料の選み方によつては或は意外な結果に到着する事がないものだらうか。例へば時代や、季節や、人間の階級や、死因や、さういふ標目に從つて類別すれば現はれ得べき曲線上の隆起が、各類によつて位置を異にしたりする爲に、凡てを重ね合すことによつて消失するのではあるまいか。

此のやうな空想に耽つて見たが、結局は統計學者にでも相談する外はなかつた。しかしそんな空想に耳を傾けてくれる學者が手近にあるかないか見當が付かなかつた。

それは兎に角として最近に私の少數な十に足りない同窓の中で三人迄、僅かの期間に相次いで亡くなつた。いづれも四十二を中心とする厄年の範圍に含まれ得べき合篤な年齡に病の爲に倒れてしまつた。

生死といふことが單に銅貨を投げて裏が出るか表が出るかといふやうな簡單なことであれば、三遍續けて裏が出るのも三遍つゞいて表が出るのも、少しも不思議な事ではない。もう少し複雑な場合でも、全く偶然な暗合で特殊な事件が續發して、プロバビリティの方則を知らない世人に奇異の念を起させたり、超自然的な因果を想はせる例はいくらでもある。それで私は三人の同窓の死だけから他のものの死の機會を推算するやうな不合理を敢てしようとは思はない。

さうかと云つて私は又全くさういふ推算の可能性を否定してしまふだけの證據も持ち合せない。

例へば或る家庭で、同じ疫痢の爲に二人の女の兒を引續いて失つたとする。そして死んだ年齡が二人共に四歳で月迄も略同じであり、其の上に死んだ時季が同じやうに夏初めの或月であつたとしたら、どうであらう。此の場合には最早偶然或は超自然的因果の境界から自然科學的の範圍に一歩を踏み込んで居るやうに思はれて來る。

さういふ方面から考へて行くと、同時代に生れて同樣な趣味や目的をもつて、同じ學校生活を果した後に、又同じやうな雰圍氣の中に働いて來たものが多少生理的にも共通な點を具へて居て、そして或る同じ時期に死病に襲はれるといふ事は、全く偶然の所産としてしまふ程に偶然とも思はれない。

此のやうな種類の機微な吻合が屢々繰り返されて、そして其の事が誇大視された結果として所謂厄年の說が生れたと見るべき理由が無いでもない。

或る柳の下に何時でも泥鰌が居るとは限らないが、或る柳の下に泥鰌の居り易いやうな環境や條件の具備して居る事も亦屢々ある。さういふ意味で所謂厄年といふものが提供する環境や條件を考へて見たらどうだらう。

「思考の節約」といふ事を旗じるしに押し立てて進んで來た所謂精密科學は、自然界に於けるあらゆる物並に其の變化と推移を連續的のものと見做さうとする傾向を生じた。そして事情の許す限りは物質を空隙のないコンチニウムと見做す事によつて其の運動や變形を數學的に論じる事が出來た。あらゆる現象は出來るだけ簡單な數式や平滑な曲線によつて代表されようとした。其の同じ傾向は生物に關する科學の方面へも滲透して行つた。そして「自然は簡單を愛

すと云つたやうな昔の形而上的な考が未だ漠然とした形で或種の科學者の頭の奥底の何處かに生き殘つて來た。

併しさういふ方法によつて進歩して來た結果は却つて其の方法自身を裏切る事になつた。物質の不連續的構造は最早假説の域を脱して、分子や原子、なほ其の上に電子の實在が動かす事の出來ないやうになつた。その上にエネルギーの推移に迄も或る不連續性を否む事が出來なくなつた。生物の進化でも連續的な變異は否定されて飛躍的な變異を認めなければならないやうになつた。

水の流れや風の吹くのを見ても、それは決して簡單な一樣な流動でなくて、必ずいくらかの律動的な弛張がある、此れと同じやうに生物の發育でも決して簡單な二次や三次の代數曲線などで表はされるやうなものではない。

例へば昆蟲の生涯を考へても、卵から低級な幼蟲になつてそれがさなぎになり成蟲になるあの著しい變化は、昆蟲の生涯に於ける目立つた律動のやうなものではあるまいか。

人間の生涯には、少くも母體を離れた後に此のやうに顯著な肉體的の變態があるとは思はれない。しかし或る程度の不連續な生理的變化が或る時期に起る事もよく知れ渡つた事實である。蟹や蛇が外皮を脱ぎ捨てるのに相當する程目立つた外見上の變化はないにしても、もつと内部の器官や系統に行はれて居る變化が矢張り一種の律動的弛張をしないといふ證據はよもやあるまいと思はれる。

其のやうな律動の或る相が、人間肉體の生理的危機であつて、不安定な平衡が些細な機縁の爲に破れるやいなや、加速的に壞滅の深淵に失墜するといふ機會に富んで居るのではあるまいか。

此のやうな六ケしい問題は私には到底分りさうもない。或は專門の學者にも分らない程六ケしい事かも知れない。

それにしても私は今自分の身體に起りつゝある些細な變態の兆候を見て、内部の生理的機能に就いても或る著しい變化を連想しないでは居られない。それと同時に私の心の方面にも或る特別な狀態を認め得るやうな氣がする。それが肉體の變化の直接の影響であるか、或は精神的變化が外界の刺戟に誘發されてそれが或る程度迄肉體に反應して居るのだか分らない。

厄年の厄と見做されて居るのは當人の病氣や死とは限らない。家庭の不祥事や、事業の失敗や、時としては當人には何の責任もない災厄迄も含まれて居るやうである。

街を歩いて居る時に通り合せた荷車の壓搾瓦斯容器が破裂して其爲に負傷すると云つたやうな災厄が四十一歳前後に特別に多からうと思はれる理由は容易には考へられない。併しそれ程偶然的でない色々な災難の源を奥へ〳〵捜つて行つた時に、意外な事柄の繼起によつてそれが厄年前後に於ける當人の精神的危機と一縷の關係をもつて居る事を發見するやうな場合はないものだらうか。例へば其人が從來續けて來た平靜な生活から轉じて、危險性を帶びた或る工業に關係した當座に前述のやうな災難に會つたとしたらどうであらう。少くも親戚の老人などの中には此の災難と厄年の轉業との間に或る因果關係を思ひ浮べるものも少くないだらう。しかし此れは空風が吹いて桶屋が喜ぶといふのと類似の詭辯に過ぎない。當面の問題には何の役にも立たない。

併し兎も角も厄年が多くの人の精神的危機であり易いといふ事は、可也に多くの人の認める處ではあるまいか。昔の聖人は四十歳にして惑はずと云つたさうである 此れが儒教道德に

養はれて來た吾々の祖先の標準となつて居た。現代の人間が四十歳位で得た人生觀や信條を何處迄も十年一日の如く固守して安心して居るのが宜いか惡いか、それとも死ぬ迄も惑ひ悶えて衰頽した軀を荒野に曝すのが偉大であるか愚であるか、それは別問題として、私は「四十にして不惑」といふ言葉の裏に四十は惑ひ易い年齢であるといふ隱れた意味を認め度い。

二十歳代の青年期に蜃氣樓のやうな希望の幻影を追ひながら脇目もふらずに藝能の修得に勉めて來た人々の群が、三十前後に實世界の闘技場の埒内へ追ひ込まれ、そこで銘々のとるべきコースや位置が割り當てられる。競技の進行するに從つて自然に優勝者と劣敗者の二つの群が出來てくる。

優者の進歩の速度は初めには目ざましいやうに早い。しかし初めには正であつた加速度は、段々減少して零になつて次には負になる。さうして丁度四十歳近くで漸近的に一つの極限に接近すると同時に速度は減退して零に近づく。そこで其儘に自然に任せておけばどうなるだらう。たどり付いた漸近線の水準を保つて行かれるだらうか。此のやうな疑問の岐路に立つて、或人は何の躊躇もなく一つの道をとる。そして爪先下りのなだらかな道を下へ〳〵とおりて行く。或人は何處迄も同じ高さの峯傳ひに安易な心を抱いて同じ麓の景色を眺めながら思ひがけない懸崖や深淵が路を遮る事の可能性などに心を騷がすやうなことなしに夜の宿驛へ急いで行く。併し少數の或る人々は此の生涯の峠に立つて蒼空を仰ぐ、そして無限の天頂に輝く太陽を握まうとして懸崖から逆さまに死の谷に墜落する。此等の不幸な人々の内の極めて少數な或るものだけは、微塵に碎けた殘骸から再生する事によつて、初めて得た翼を虚空に羽搏きする。

劣者の道の谷底の漸近線迄の部分は優者の道の倒影に似て居る。そして谷底迄下りた人の多數は其儘に麓の平野を分けて行くだらうし、少數の人は其處から又新しい上り坂に取りつき、或は更に失脚して再び攀上る見込のない深坑に落ちるのであらうが、其のやうな岐れ路がやはり略四十餘歳の厄年近邊に在るのではあるまいか。

* * * *

此のやうな他愛もない事を考へながら兎も角も三年に亙る厄年を過して來た。厄年に入る前年に私は家族の一人を失つたが、其後にはそれ程著しい不幸には會はなかつた。尤も四十二の暮から自分で病氣に罹つて、今でも未だ全快しない。此の病氣の爲に生じた色々な困難や不愉快な事がないではなかつたが、併しそれは厄年ではなくても不斷に私につきまとつて居るものと餘り變らない程度のものであつた。それで兎も角も生命に別條がなくて今日迄は過ぎて來た。

それで結局此れから私はどうしたらいゝのだらう。

* * * *

厄年の峠を越えようとして私は人並に過去の半生涯を振り返つて見て居る。もう過ぎた午後の太陽の光に照された過去を眺めて居る、そして人並に愧ぢたり悔んだり惜んだりして居る。「有つた事は有つたのだ」と幾百萬人の繰返した言葉を更に繰返して居る。

過去といふものは本當にどうする事も出來ないものだらうか。

私の過去を自分だけは知つて居ると思つて居たが、それは嘘らしい。現在を知らない私に過去が分る筈はない。原因があつて結果があると思つて居たが、それも誤りらしい。結果が起らなくて何處に原因があるだらう。重力があつ

て天體が運行して林檎が落ちるとばかり思つて居たが、此れは逆さまであつた。英國の田舍で或る一つの林檎が落ちてから後に、萬有引力が生れたのであつた。其の引力がつい近頃になつて獨逸の或る猶太人の鉛筆の先で新しく改造された

過去を定めるものは現在であつて、現在を定めるものが未來ではあるまいか。

それとも又現在で未來を支配する事が出來るものだらうか。

此れは私には分らない、恐らく誰れにも分らないかも知れない。此の分らない問題を解く試みの方法として、私は今一つの實驗を行つて見ようとして居る。それには私の過去の道筋で拾ひ集めて來たあらゆる寶石や土塊や草花や昆蟲や、假令それが蚯蚓や蛆蟲であらうとも一切のものを「現在の鍋」に打ち込んで煮詰めて見ようと思つて居る。それには古人が殘してくれた色々な香料や試藥も注いで見ようと思つて居る。其の鍋を火山の火にかけて一晩おいた後に一番鷄が鳴いたら蓋をとつて見ようと思つて居る。

蓋を取つたら何が出るだらう。恐らく何も變はつた物は出ないだらう。初めに入れて置いただけの物が煮爛れ煮固まつて居るに過ぎないだらうとしか思はれない。併し私は其の鍋の底に溜つた煎汁を眼を瞑つて呑み干さうと思ふ。さうして自分の内部の機能にどのやうな變化が起るかを試驗して見ようと思つて居る。若し私の眼や手に何等かの變化が起つたら、其の新しい眼と手で私の過去を見直し造り直して見よう。そして其の上に未來の足場を建てて見よう。もしそれが出來たら「厄年」といふものの意義が新しい光明に照らされて私の前に現はれはしまいか。

かう思つて私は過去の旅行カバンの中から手捜りに色々なものを取り出して並べて見て居る。

先づ色々の書物が出て來る、大概は汚れたり蟲ばんだりしてもう讀めなくなつて居る。樣々な神や佛の偶像も出て來るが、一つとして缺け損じて居ないのはない。茶褐色に變つたげんげやばらの花束や半分喰ひ缺いだ林檎もあつた。修學證書や辭令書のやうなものの束ねたのを投げ出すと、黴臭い塵が小さな渦を卷いて立ち昇つた。

定規のやうなものが一把程あるが、それがみんな曲りくねつて居る。桝や秤の種類もあるが使へさうなものは一つもない。鏡が幾枚かあるがそれ等に映る萬象はみんなゆがみ捻れた形を見せる。物差のやうなもので半分を赤く半分を白く塗り分けたものがある。私は此の簡單な物差で凡てのものを無造作に可否のいづれかに決するやうに敎へられて來たのであつた。骨牌のやうな札の片側には「自」反對の側には「他」と書いてある。私は時と場合とに應じて此の札の裏表を使ひ分ける事を敎へられた。

見て居る内に私は此の雜多な品物の殆んど大部分が皆貰ひものや借り物である事に氣が付いた。自分の手で作るか、自分の勞力の正當な報酬として得たものの餘りに少いのに驚いた。此れだけの負債を辨濟する事が、生涯に出來るかどうか疑はしい。併し幸か不幸か債權者の大部分はもう何處に居るか分らない。一卷の繪卷物が出て來たのを繙いて見て行く。初めの方はもうぼろ〳〵に朽ちて居るが、それでも處々に比較的鮮明な部分はある。生れて間もない私が龍門の鯉を染め出した縮緬の初着につゝまれ、未だ若々しい母の腕に抱かれて山王の祠の石段を登つて居る處があるかと思ふと、馬丁に手を引かれて名古屋の大洲觀音の廣庭で玩具を買つて居る場面もある。淋しい田舍の古い家の

臺所の板間で、袖無を着て寒竹の子の皮をむいて居るかと思ふと、其の次には遠い西國の或る學校の前の菓子屋の二階で、同郷の學友と人生を論じて居る。下谷の或る町の金貸の婆さんの二階に間借りして、うら若い妻と七輪で飯を焚いて暮して居る光景のすぐあとには、幼い兒と並んで生々しい土饅頭の前にぬかづく淋しい後姿を見出す。テイアガルテンの冬木立や、オペラの春の夜の人の群や、或は地球の北の果の淋しい港の埠頭や、さうした背景の前に立つ侘し氣な旅客の繪姿に自分の或日の片影を見出す。此のやうな切れ／＼の繪と繪をつなぐ詞書をおかなかつたら、此れが唯一人の自分の事だとは、自分自身にさへ分らないかも知れいな。

巻物の中には處々に眞黒な墨で塗りつぶした處がある。併し其處にあるべき筈の繪は、實際に描いてあるよりも幾倍も明瞭に墨の下に浮いて見える。

不思議な事には巻物の初めの方に朽ち残つた繪の色彩は目のさめる程美しく保存されて居るのに、後の方になる程繪具の色は溷濁して、次第に鈍い灰色を帶びて居る。

巻物の最後にある繪は、餘程奇妙なものである。そこには一つの大きな硝子の蠅取罎がある。其中に閉込められた多數の蠅を點檢して行くと其中に交つて小さな人間が居る。それが此の私である。罎から逃れ出る穴を上の方にのみ求めて幾度か眼玉ばかりの頭を硝子の壁に打ち當てて居るらしい。未だ幸に器底の酢の中に溺れては居ない。自由な空へ出るのには一度罎の底をくゞらなければならないといふ事が蠅にも小さな私にも分らないと見える。尤も罎を逃れたとしたところで、外界には色々な蠅打ちや蠅取蜘蛛が覗つて居る。其れを逃れたとしても必然に襲うて來る春寒の脅威は避け難いだらう。さうすると罎を出るのも考へものかも知れない。

過去の旅嚢から取り出される品物には殆んど限りがない。此れだけの品數を一度に容れ得る「鍋」を自分は持つて居るだらうか。鍋はあるとした上でも、此れだけのものを沸騰させ煮つめるだけの「燃料」を自分は貯へてあるだらうか。此點に考へ及ぶと私は少し心細くなる。

* * * * *

厄年の關を過ぎた私は立止つてこんな事を考へて見た。併し結局何にもならなかつた。

厄年といふものの科學的解釋を得ようと思つたが失敗した。主觀的な意味を求めて見たが、得たものは唯取り止めの付かぬ妄想に過ぎなかつた。

併し、誰れか厄年の本當の意味を私に教へてくれる人はないものだらうか。誰れか此の影の薄くなつた言葉を活かして「四十の惑」を解いてくれる人はないだらうか。

淺草紙

十二月初めの或日、珍しくよく晴れて、そして風のちつともない午前に、私は病床から這ひ出して縁側で日向ぼつこをして居た。都會では滅多に見られぬ強烈な日光が、ぢかに顏に照りつけるのが少し痛い程であつた。そこに干してある蒲團からはぽか／＼と暖かい陽炎が立つて居るやうであつた。濕つた庭の土からは、かすかに白い霧が立つて、それが僅かな氣紛れな風の戰ぎにあふられて小さな渦を卷いたりして居た。子供等は皆學校へ行つて居るし、他の家族も何處で何をして居るのか少しの音もしなかつた。實に靜かな穩かな朝であつた。

私は無我無心でぼんやりして居た。唯身體中の毛穴から暖かゝ日光を吸ひ込んで、それが此のしなびた肉體の中に滲み込んで行くやうな心持をかすかに自覺して居るだけであつた。

ふと氣がづいて見ると私のすぐ眼の前の緣側の端に一枚の淺草紙が落ちて居る。それはまだ新しい、ちつとも汚れて居ないのであつた。私は殆んど無意識的にそれを取り上げて見て居る内に、其紙の上に現はれて居る色々の斑點が眼に付き出した。

紙の色は鈍い鼠色で、丁度子供等の手工に使ふ粘土のやうな色をして居る。片側は滑かであるが、裏側は隨分ざら／＼して荒筵のやうな縞目が目立つて見える。併し日光に透して見ると此れとは又獨立な、もつと細かく規則正しい簾のやうな縞目が見える。此縞は多分紙を漉く時に纖維を沈着させる簾の痕跡であらうが、裏側の荒い縞は何だか分らなかつた。

指頭大の穴が三つばかり明いて、其の周圍から喰み出した纖維が其穴を塞がうとして手を延ばして居た。

そんな事はどうでもよいが、私の眼についたのは、此の灰色の四十平方寸ばかりの面積の上に不規則に散在して居るさま／＼の斑點であつた。

先づ一番に氣の付くのは赤や青や紫や美しい色彩を帶びた斑點である。大きいのでせいぜい二三分四方、小さいのは蟲眼鏡ででも見なければならないやうな色紙の片が漉き込まれて居るのである。それが唯一樣な色紙ではなくて、よく見ると其の上には色々の規則正しい模樣や縞や點線が現はれて居る。よく／＼見て居ると其中の或物は狀袋のたばを束ねてある帶紙らしかつた。又或物は卷煙草の朝日の包紙の一片らしかつた。マッチのペーパーや廣告の散らし紙や、女の子のおもちやにするおすべ紙や、あらゆるさう云つた色刷のどれかを想ひ出させるやうな片々が見出されて來た。微細な斷片が想像の力で補充されて頭の中には色々な大きな色彩の模樣が現はれて來た。

普通の白地に黑インキで印刷した文字もあつた。大概やつと一字、せい／＼で二字位しか讀めない。それを拾つて讀んで見ると例へば「一同」「圓」などはいゝが「邊」などといふ妙な文字も現はれて居る。それが何かの意味の深い謎ででもあるやうな氣がするのであつた。「蛤かな」といふ新聞の俳句欄の一片らしいのが見付かつた時は少しをかしくなつて來てつい獨りで笑つた。

どうして此んな小片が、よくこなれた纖維の中で崩れずに形を保つて來たものか。此紙の製造方法を知らない私には、分らない疑問であつ

た。或は此等の部分だけ滲のやうなものが濃く浸み込んで居た爲にとろけないで殘つて來たのではないかと思つたりした。

紙片の外にまださまざまの物の破片がくついて居た。木綿絲の結び玉や、毛髪や動物の毛らしいものや、ボール紙のかけらや、鉛筆の削り屑、マッチ箱の破片、此んなものは容易に認められるが、中にはどうしても來歴の分らない不思議な物件の斷片があつた。それから或る植物の枯れた外皮と思はれるのがあつて、其の植物が何だといふことがどうしても思ひ出せなかつたりした。

此等の小片は動植物界のものばかりでなく、鑛物界からのものもあつた。斜めに日光にすかして見ると、雲母の小片が銀色の鱗のやうにきら〳〵光つて居た。

段々見て行く中に此の澤山な物のかけらの歴史が可也に面白いもののやうに思はれて來た。何の關係もない色々の工場で製造された種々の物品がさま〴〵の道を通つて或家の紙屑籠で一度集合した後に、又他の家から來た屑と混合して製紙場の槽から流れ出す迄の徑路に、どれ程の複雑な世相が纏綿して居たか、から一枚の淺草紙になつてしまつた今では再びそれをたどつて見るやうはなかつた。私は唯漠然と日常の世界に張り渡された因果の網目の限りもない複雑さを思ひ浮べるに過ぎなかつた。

あらゆる方面から來る材料が一つの釜で混ぜられ、こなされて、それから又新しい一つのものが生れるといふ過程は、人間の精神界の製作品にも其れに類似した過程のある事を聯想させない譯にはゆかなかつた。

そのやうな聯想から私はふとエマーソンが「シェークスピア論」の冒頭に書いてある言葉を思ひ出した。「價値のある獨創は他人に似ないといふ事ではない」『最大の天才は最も負債の多い人である』こんな意味の言詞が思ひ出された。

それから又或る盲目の學者がモンテーニュの研究をする爲に採つた綿密な調査の方法を思ひ出した。モンテーニュの論文を悉く點字に寫し取つた中から、あらゆる思想や、警句や、特徴や、插話を書き抜き、分類し、整理した後に、更に此の著者が讀んだだらうと思はれるあらゆる書物を讀んだり讀んで貰つたりして、其中に見出される典據や類型を拾ひ出すといふのである。此の盲人の根氣と熱心に感心すると同時に、其の仕事が何處となく私が今紙面の斑點を捜しては其の出所を詮索した事に似通つて居るやうな氣もした。どんな偉大な作家の傑作でも――寧ろさういふ人の作ほど豐富な文獻上の材料が混入して居るのは當然な事であつた。其れを詮索するのは興味もあり有益な事でもあるが、それは作と作家の價値を否定する材料にはならなかつた。要は資料がどれだけよくこなされて居るか、不淨なものがどれだけ洗はれて居るかにあつた。

作中の典據を指摘する事が批評家の知識の範圍を示す爲に、第三者に取つて色々の意味で興味のある場合も可なりにある。該博な批評家の評註は實際文化史思想史の一片として學問的の價値があるが、さうでない場合には、批評される作家も、讀者も、從つて批評者も結局迷惑する場合が多いやうに思はれる。さういふ批評家の爲に一人の作家が色々互に矛盾したイズムの代表者となつて現はれたりするのであらう。

美術上の作品についても同樣な場合が屢々起る。例へば文展や帝展でもそんな事があつたやうな氣がする。それにつけて私は、ラスキンが一篇の問題について論じてあつた事を思ひ出して、も一度それを讀んで見た。其の最後の

項にはこんな事が書いてあつた。

『一般に剽竊に就いて云々する場合に忘れてならないのは、感覺と情緒を存する限り凡ての人は絶えず他人から補助を受けて居るといふ事である。人々はその出會ふ凡ての人から教へられ、その途上に落ちて居るあらゆる物によつて富まされる。最大なる人は最も屢々授けられた人である。そして凡ての人心の所得を其の眞の源迄追跡する事が出來たら、此の世界が一番多くの御蔭を蒙つて居るのは、最も獨創力のある人々であつた事を發見するだらう。又さういふ人々が其の生活の日毎に、人類から彼等が負ふ負債を增しながら、同時に同胞に贈るべきものを增大して行つた事が分るだらう。何かの思想或は何かの發明の起源を搜さうとする勞力は、太陽の下に新しき物なしといふあつけない結論に終るに極つて居る。さうかと云つて本當に偉大なものが全くの借り物であるといふ事もありやうはない。それで何でも人からくれるものが善いものであれば何もおせつかいな詮議などはしないで單純に其れを貰つて、直接くれた其人に御禮を云ふのが、通例最も賢い人であり、何時でも最も幸福な人である。』

此の文辭の間にはラスキンの癇癪から出た皮肉も交つては居るが、兎も角も或る意味では矢張り思想上の淺草紙の辯護のやうにも思はれる。

　エマーソンとラスキンの言葉を加へて二で割つて、もう一遍此れを現在の或る過激な思想で割るとどうなるだらう。此れは割り切れないかも知れない。もし割り切れたら、其答はどうなるだらう。あらゆる思想上の偉人は結局最も意氣地のない人間であつたといふ事にでもなるだらうか。

　魔術師でない限り、何もない眞空から假令一片の淺草紙でも創造する事は出來さうに思はれない。しかし紙の材料をもつと精撰し、もつとよくこなし、もう一層よく洗濯して、純白な平滑な、光澤があつて堅實な紙に仕上げる事は出來る筈である。マッチのペーパーや活字の斷片が其のまゝに眼につく內はまだ改良の餘地はある。

* * * * *

　ラスキンをはふり出して、淺草紙を又膝の上へ置いたまゝ、うと〳〵して居た私の耳へ午砲の音が響いて來た。私は飯を食ふ爲に此のやうな空想を中止しなければならないのであつた。

蜂が團子をこしらへる話

私の宅の庭の植物は毎年色々な害蟲の爲にむごたらしく虐待される。折角美しく出揃つた若葉はいつの間にかわるい昆蟲の爲に食ひ荒らされる。就中一番ひどくやられるのは薔薇である。羽根が黒くて腰の黄色い小さな蜂が、柔かい若芽の莖の中に卵を産みつけると、やがて其の横腹が縦にはじけ破れて幼蟲が生れ出て、驚くべき食慾をもつて瞬く間にあらゆる葉を食ひ盡さないでは置かない。去年は此の翡翠の色をした薔薇の蟲と同種と思はれるものが躑躅に迄も蔓延した。尤もつゝじのは色が少し黒ずんで居て、つゝじの葉によく似た色をして居るのが不思議であつた。

何とかして此の害蟲を絶滅する方法はないものだらうかと思ふだけで、專門家に聞いて見るでもなく、書物を調べるでもなく、つい其儘にして置くのである。いつか三越で薔薇を見て居たら、其れにもちやんと此蟲がついた儘に陳列されてあるのを發見して驚いた事かある。專門家でも此れを完全に驅除するのは困難だとすると、自分等の手に畢へぬのは當然かと思はれた。兎に角去年などは幾株かのばらとつゝじを綺麗に坊主にしてしまはれた。枯れるかと思つたら存外枯れもしないで、今年の春の日光を受けると又正直に若芽を吹き出して來た。今に又例の青蟲が出るだらうと思つて折々氣をつけて見るが、今年はどうしたのか、まだ餘り多くは發生しない。其の代り今年は此れと違つた毛蟲が非常に澤山に現はれて來た。

それは黒い背筋の上に薄いレモン色の房々とした毛束を四つも着け、其の兩脇に走る美しい橙紅色の線が頭の端では燃えるやうな朱の色をして、そこから眞黒な長い毛が突き出して居る。此れが薔薇のみならず、萩にもどうだんにも芙蓉にも夥しくついて居る。此れは青蟲程旺盛な食慾をもつて居ないらしいが、其の代り、今は少し贅澤な嗜好をもつて居て、ばらの蕾を選んで片はしから食つて行くのである。去年はよく咲いたクリーム色のばらも今年は此の爲にひどく荒されてしまつた。子供の時分に田舍の宅で垣根一杯に薔薇が植わつて居たが、つひぞ此んなに蟲害を受けた事を記憶しない。都會の空氣が濁つて居る爲に植物も人間と同じやうに唯さへ弱くなつて居る其の上にかう色々な蟲にいぢめられては、いまにかうした植物は絶滅するのではないかと思ふ事もある。

こんな蟲が段々に數を增して、それが皆人間などと平等な生存の權利を主張するやうになつたらどうだらう。さうなれば蟲の爲には人間の方が害蟲であるに相違ない。薔薇の花でも何でも蟲の爲には必要なる營養物質であるのを、人間が無用な娛樂の爲に獨占しようとして蟲をひねり潰すのは、蟲から見れば可也暴虐な事かも知れない。

或日の晝食のあとで庭へ出て、一番毛蟲の多くついた薔薇を見に行つた。そして見當り次第に箸でつまんで處分して居た。人間の立場からどうもかうしなければ仕方がないのである。

眞圓く擴がつた薔薇の枝の葉の上に、土色をした蜂が一疋横はつて居た。ぢつとして所謂甲良を干して居るといふ樣子であつた。併し恐らく、そんな仕澁い享樂の爲ではなくて、此れも亦、もつとせつぱつまつた生存の權利を

主張する爲に何かを期待して狙つて居たに相違ない。時々のそ〳〵這ひ出しては又ぢつとして意地のわるさうな眼を光らせて居る。事によると此れは青蟲でも捜して居るのではないかと思はれた、若しさうだとすると難有い譯だと思つた。

忽ち眼の前に一つの爭闘に活劇が起つた。同じ薔薇の上に何物かを物色して居た濃褐色の蜂か、突然殆んど何の理由とも分らず、又何等の豫備行爲もなく、いきなり此の蜥蜴の背に飛びかゝつた。そして右の後脚の附根と思ふ邊を刺したやうに見えた。

併し蜥蜴は殆んど何事も起らなかつたかのやうに、ぢつとしたまゝ、身じろぎ一つしなかつた。そして數秒の後に又のそ〳〵と這ひ出して一寸位も歩いたかと思ふと立止まつて小さな眼を光らせて居た。

どういふ譯で蜂が此のやうな攻擊をしたか、私には少しも見當が付かなかつた。人間ならば商賣敵といふ言葉で容易に說明さるべき行爲の動機が、此の場合に適用するかどうか、それは全く分らない。兎に角此の活劇は私に色々な事を連想させたが、併し、自然の事實からは人間の都合のいゝモラルは必然には出て來なかつた。

同じ薔薇の反對の側へ廻つて見ると、其處にも一疋の蜂が居た。そして何かしら或る仕事をして居るのであつた。

それは、さつき蜥蜴を攻擊したと同じ蜂かどうか分らないが、兎に角同じ種類のものであつた。廣い葉の上に止まつて、前脚で小さな毛蟲らしいものをしつかりつかまへて、それをあの鋭い鋏のやうな口嘴でしきりに噛みこなして居た。私が見付けた時にはそれがもう殆んど毛蟲だか何だか分らないやうな團塊になつて居たが、唯其の周りから突き出た毛束によつてさう考へられたのである。斷えず噛みながら脚で器用に團塊を廻して行くので、初めには多少いびつであつたのが、殆んど完全な球形になつてしまつて、もう何處にも毛などの痕跡は見えなくなつてしまつた。廻す拍子に一度危く取落さうとしてやつと取り止めた樣子は滑稽であつた。蜂はやがて此の團子をくはへて飛び出さうとしたが、どうしたのかもう一遍他の枝に下りた。人間ならばざつと荷物をこしらへて試みに一寸さげて見たといふやうな體裁であつた。そして又しばらく噛んで丸める動作を繰り返して居た。からだ全體で拍子をとるやうにして小枝をゆさぶりながらせつせと働いて居る處は見るも勇ましい健氣なものであつた。澁色をした小さな身體が精悍の氣ではち切れさうに見えた。二三分もすると急に飛び上つて一文字に投げるやうに隣家の屋根をすれ〳〵に越して見えなくなつてしまつた。

私は毛蟲にかういふ强敵のある事は全く知らなかつたので、此の目前の出來事から可也强い印象を受けた。そして今更のやうに自然界に行はれて居る「調節」の複雜で巧妙な事を考へさせられた。そして氣紛れに箸の先で毛蟲をとつたりして居る自分の愚かさに氣が付いた。そして吾々が僅かばかりな文明に自負し、萬象を征服したやうな心持になつて、天然ばかりか同胞とその魂の上にも自分勝手な箸を持つて行くやうな事を敢てする、それが一段高い處で見て居る神樣の目には隨分愚かな事に見えはしまいか。ついこんな事も考へた。

其れから二三日經つて後に、同じ薔薇で同じやうな蜂が大きな毛蟲を捕へる處を見る事が出來た。いきなり頭の方へ噛み付くと皮が破れて綠色の汁が玉のやうに吹き出した。それを引きずり〳〵高い葉へ〳〵と登つて行つた。其間にも噛みこなす事は休まず續けて居るの

で、毛蟲の形は段々に消えて緑がかつた黑色の塊に變りつゝあつた。其の内に蜂は一度羽根を擴げて強く振動させた。恐らく飛び上らうとしたのであらうが、蟲の重量は此蜂の飛揚力以上であつたと見えて、少しも動かなかつた。どうするかと思つて居ると、此の稍長味のある團塊をうまく二つに食ひ切つて、その片方を丁寧に丸めた後に、それを銜へて前日と同じ方向へ飛んで行つた。

立ち際に其の尾部から一二滴の透明な液體を分泌するのがよく見えた。恐らく噛みながら吸ひ取つた毛蟲の汁で腹が膨れた結果かも知れない。

殘りの半分を今に取りに來るのではあるまいかと思つたので、ものの十分程も待つて居た。其間に全く別の方向から同じやうな蜂が飛んで來て葉の上をしばらくあさつて居たが、さつきの團子の殘りの半分のつい近く迄行つても氣付かないで、其の内どこかへ飛んで行つてしまつた。

二時間もたつて見に行つた時には、毛蟲の半分の團塊はもうなくなつて居た。それは何者が持ち去つたかよくは分らない。併し多くの蜂について從來知られて居る事實から推して此の殘りの半分も、其れの正當な權利者の巣に搬ばれたものと思つてもいゝだらう。實際は他の巣の住民に横領されたかもそれは分らない。

私は此の蜂の巣を見付けたい、そして此の珍奇な蟲の團子が其處で如何に處理されるかを知り度いものだと思つて居る。

＊　＊　＊　＊　＊

蟲の行爲は矢張り蟲の行爲であつて、人間とは關係はない事である。人として蟲に劣るべけんやといふやうな結論は今日では全く無意味な事である。それにも拘らず、蟲のする事を見て居ると實に面白い。そして感心するだけで決して腹が立たない。私にはそれだけで十分である。私は人間のする事を見ては腹ばかり立てて居る多くの人達に、僅かな暇を割いて蟲の世界を見物する事をすゝめ度いと思ふ。

鼠と猫

一

今の住宅を建てる時に、どうか天井に鼠の入込まないやうにして貰ひ度いといふ事を特に請負人に頼んで置いた。十分に注意しますとは云つて居たが、なほ工事中にも時々忘れないやうに此點を主張して置いた。大工にも直接に幾度も念をおしておいたが、自分で天井裏を點検する程の勇氣は流石になかつた。

引移つてから數箇月は無事であつた。やかましく云つた甲斐があつたと云つて喜んで居た。永い間鼠との共同生活に馴れたものが、鼠の音のしない天井を頂いて寢る事になると何だか少し變な氣もした。物足りないと云ふのは云ひ過ぎであらうが、本當に孤獨な人間が或る場合には同棲の鼠に不思議な親しみを感ずるやうな事も不可能ではないやうに思はれたりした。

其内に何處からともなく、水の洩れるやうに鼠の侵入がはじまつた。一度通路が出來てしまへばもう其れ切りである。

夜遅く仕事でもして居る時に頭の上に忍びやかな足音がしたり、何處かでつゝましく物をかじる音がしたりするうちはいゝが、寢入り際を劇しい物音に驚かされたり、買つたばかりの書物の背皮を無慘に喰ひむしられたりするやうになると少し腹が立つて來た。

請負師や大工に責を歸していゝのか、在來の建築方式そのものに缺陷があるのかどうか分らない。考へて見ると請負師や大工に云つた位で鼠が防ぎ切れるものならば大概の家には鼠が居ない筈である。併し實際鼠の居ない家は稀であり、鼠が居なくなると何か其家に不祥事が起る前兆だといふ迷信があつたりする位だから、少くも吾々日本人は天井に鼠の居る事を容認しなければならない事になつて居るかも知れない。其れを自分だけが勝手に拒絶しようと思ふのは餘りに思ひあがつたハイカラの考かも知れない。或人の話では日々僅な一定量の食餌を鼠の爲に提供してさへおけば決して器具や衣服などをかじるものではないといふ事である。

或る經濟學者の説によると如何なる有害無益の劣等の人間でも一樣に「生存の權利」といふものがあるさうである。そんなら鼠だつて同じ權利を認めてやらないのはわるいやうな氣がする。併しさういふ權利が人間にさへあるのかないのか、自分には分らない。假りにあるとした處で兩方の權利が共立しない時に強い方の動物が弱い方をひどい目にあはせるのは天然自然の事實であつて如何なる學者の抗議も何の役にも立たないやうである。

科學の應用が尊重される今日に、天井や押入の内に鼠の入らない位の方法はいくらでも出來さうなものだと思ふ。或る學者は天井裏に年中電燈を點して居るさうであるが、此の方法は如何に有效でも吾々には少し贅澤すぎるやうな氣がする。もう少し簡便な方法がありさうなものである。誰れか忠實な住宅建築の研究者があつて、二三日天井裏に坐り込む積りで鼠の交通を觀察したら適當な方法はすぐに考へ付くだらうと思はれる。そのやうな方法は學者の方では疾の昔に分つて居るのを吾々が知らないのか、知つてもそれを信じて實行しないのかも知れない。住宅建築の教程に鼠に關する一章のない筈はあるまいと思ふ。

大工を呼んで鼠の穴に吟味をさせるのもおつくうであるのみならず、其の效果が疑はしい。結局矢張り最も平凡な方法で驅除を計る外はなかつた。

殺鼠劑が一番有效だといふ事は聞いて居たが子供の多い我家では萬一の過失を恐れて從來用ゐた事はなかつた。併し子供等も大分大きくなつたから、もう大丈夫だらうと思つて試に使つて見た。すると間もなく玄關の天井から蛆が降り出した。町内の掃除人夫を賴んで天井裏へ上つて始末をして貰ふ迄には可也不愉快な思ひをしなければならなかつた。其れ以來もう猫いらずの使用は止めてしまつた。猫入らずを呑んだ人は口から白い煙を吐くさうであるから鼠でも吐くかも知れない。屋根裏の闇の中で口から燐光を發する煙を吐いて居るのを想像するだけでも餘り氣持がよくない。

木の板の上に鐵の彈條を取り付けた捕鼠器もいくつか買つて來て仕掛けた。はじめのうちはよく小さな子鼠が捕れた。捕へ方が極めてぞんざいであるから、少し使ふとすぐに工合が惡くなる。それを念入りに調節して器械としての鋭敏さを維持する事は、さういふあたまのない女中などには到底望み難い仕事である。私にこのやうな間に合せの器械を造る人にも、それを平氣で使つて居る人にも不平を云ひ度くなるのである。

金網で造つた長方形の箱形のも屢々用ゐたが、あれも一度捕れると臭みでも殘るのか、あとがかゝりにくい。稀にかゝつても大抵は思慮のない子鼠で、老猾な親鼠になると中々どの仕掛にもだまされない。いくら鼠でも時代と共に智慧が進んで來るのを、いつ迄も同じ舊式の捕鼠器でとらうとするのがいけないのでないかといふ氣もする。

其れよりも困るのは、家内中で自分の外には鼠の驅除に熱心な人の一人も居ない事である。折角仕かけてある捕鼠器の口が、如何に入りたい鼠にでも入れないやうな位置に押しやられて居たり、蓋の落ちたのを其儘に幾日も臺所の隅に投り出してあるのを發見したりすると、甚だ心細い賴りないやうな氣がするのであつた。其處に行くとどうしても矢張り本能的に鼠を捕るやうに出來て居る猫に如くものはないと思はない譯にはゆかなかつた。

鼠の跳梁は段々に劇烈になるばかりであつた。晝間でもちよろ／＼茶の間に顏を出したりした。或日の夕方二階で仕事をして居ると、不意に階下ではげしい物音や人々の騷ぐ聲が聞えだした。行つて見ると、玄關の三疊の間へ鼠を二疋追ひ込んで二人の下女が箒を振廻して居る處であつた。やつと其の一疋を箒で抑へ付けたのを私が火箸で少し引きずり出しておいて、首のあたりをぎゆうと麻絲で縛つた。縛り方が強かつたのですぐに死んで了つた。其の最期の苦悶を表はす週期的の痙攣を見て居た時に、ふと近く讀んだ或る死刑囚の最期のさまが頭に浮んで來た。

もう一つの鼠は何處へかくれたか姿を消してしまつた。何も置いてない玄關の事だから何處にも逃れるやうな穴はない。念の爲に長押の裏を蠟燭で照して火箸で突つついて歩いたが矢張り其處にも居なかつた。唯一ケ處壁のこぼれた隅の方に穴らしいものが見えたが、光がよく屆かないのではつきりしなかつた。其れが穴だとしても、それを拔けて何處へ出られるかといふ事が明瞭でなかつた。若しや誰れかの袂の中へでも入つて居やしないかと思つて調べさせたが、勿論そんな處には居なかつた。なんだか不可思議な心持もした。小さな動物に大きな人間が翻弄されたといふ樣な氣もした。此處でも徹底した科學的の方法で明白な論理を追跡し

て行きさへしたら、直に此の何でもないミステリーは解けたであつたらうが、少しは馬鹿々々しくもなつてきたので、此の目前の、明かに物理の方則と矛盾したやうな事實を、假定的な「長押の裏の穴」で「説明」し、誤魔化してしまつた。尤も科學の方面でさへも此れに似たやうな例がないとは云はれない。明るみの矛盾を暗い穴へ押し込んで、安心して居る事がないでもない。若し之れが出來なくなつたら多くの學者は枕を高くして眠られさうもない。人生の問題に無頓着で居られない人々の間には猫いらずの妙な需要は益々多くなるかも知れない。

此の騒ぎが靜まつてやつと十分か二十分經つたと思ふ頃に、今度は臺所で第二の騒ぎが始まつた。人間の悲鳴だか動物の吠えるのだか分らないやうな氣味の悪い叫聲が子供等の騒ぎ聲に交つて聞えて來た。何事かと思つて見ると、年の行かない下女が茶の間の眞中に立つて大きな口をあけて奇妙な聲を出しながら、からだを色々に捻ぢらせて居る。其れを四方から遠卷きに取圍んで口々に何か云つて居るのである。

聞いて見ると、背中に鼠がはひつて居るといふのである。着物の間か羽織の下かどの邊かと聞いて見ても無意味な聲を出すだけで要領を得ない。鼠が動いたりする度に妙な叫聲を出してはからだをゆさぶるばかりである。そつと羽織の裾を持つて靜かにかゝげて見ると、可愛らしい子鼠が四肢を伸して、丁度貼り付けでもしたやうに羽織の裏にしがみついて居る。烈しく羽織を一あふりするとばたりと疊に落ちた。逃げ出さうとするのを手早く座蒲團で伏せて、それから後は第一の鼠と同じ方法で始末をつけた。此の可愛らしい生命の最後の波動を見て居る時には矢張り餘りいゝ氣持はしなかつた。今迄ちやんとそこにあつた「生命」がふうと消えてしまふ。此の極めて平凡で、しかも極めて不可解な死の現象をいくらか純粹に考へて見る事の出來るのは却つて此れ位の小動物の場合が最適當なものではないかといふやうな氣もした。人間の死や家畜の死には餘りに多くの前奏がある。本文なしの跋だけは考へられないやうなものである。

子供等は身動き一つしないで眞劍になつて凝視めて居た。かういふ事柄を幼少なものの柔かな頭に燒き付けるといふ事の利害を世の教育家に聞いて見たらどんなものであらうか。多分は餘りよくないといふかも知れない。それは固より子供の素質にもよるだらうし、前後の事情にもよるだらうと思ふが、實用的には矢張り、動物の生命を絶つ行爲は凡て殘酷でいけない事であるといふ事に取極めて置く方が簡單で安全だらうと思ふ。さうかと云つて此のやうな重大な現象を無感覺に觀過させない迄も其れを直視させるのを強ひて避けるのもどんなものであらうか。

鼠を縛り殺して居た時の私の顏が餘程平生とちがつた顏になつて居たといふ事を後で聞かされて少し意外な氣がした。こんな顏だつたなどと云つて鉛筆で描いて見せるものも出て來た。

後で聞いて見ると、玄關の騒ぎが終つた後に女中が部屋へ歸つて坐つて居るうちに妙に脊筋の處がぽか〳〵暖かになつて來たさうである。變だと思つて居る内に、其處に重みのある或るものが動くのを感じたので、はじめて氣がついていきなり茶の間へ飛び出し、奇妙な聲を出し始めたのださうである。

窮鳥は懷に入る事があり、窮鼠は猫を噛む事があるかも知れないが、追はれた鼠が追ふ人の羽織の裏にへばりつくといふ事はあまり此れ迄聞いた事がなかつた。併し後になつて考へて見ると、締め切つた三疊の空間から鼠が一疋消

え其の長押はなかつた。假定的な長押の穴はそれつきり確かめても見ないが、恐らく本當の穴でなかつたらうし、假令穴であつても其の背面には通つて居ない事が少し考へれば家の構造の上からすぐ分る譯になつて居た。それで誰れかの着物に隱れて居るといふ事は初めから自明的に分り切つた事であつたのである。

それにしても、着物の裏にしがみついて人間と背中合せにぶら下つた儘で十分以上も動かないで居た鼠の心持が分らない事の一つである。極度の恐怖が一部の神經を麻痺させて假死の状態になつて居たのか、それとも本能的の智慧でさうして居たのか、恐らく後者と前者が一つ事柄を意味するのではあるまいか。

此のやうな騷ぎがあつた後にも鼠族の惡戯は止まなかつた。恐ろしい程大きな茶色をした親鼠は、恰も智慧の足りない人間を愚弄するやうに自由な横暴な擧動を擅にして居た。

二

春から夏に移る頃であつたかと思ふ。或日座敷の縁の下で野良猫が子を産んで居るといふ事が、それを見つけた子供から報告された。近邊の臺所を脅かして居た大きな黒猫が、縁の下に竹や木材を押し込んである奧の方で二疋の子を育てて居た。一つは三毛でもう一つは雉毛であつた。

單調な我家の子供等の生活の内では此れは可也に重大な事件であつたらしい。猫の母子の動靜に關する色々の報告が屢々私の耳にも傳へられた。

私の家では自分の物心ついて以來かつて猫を飼つた事はなかつた。第一私の母が猫といふ獸を概念的に憎んで居た。知人の家にも、犬は居ても飼猫は見られなかつた。猫さへ見れば手當り次第にものを投げ付けなければならない事のやうに思つて居た。或時居た下男などは丹念に繩切れでわなを作つて生垣のぬけ穴に仕掛け、何疋かの野良猫を絞殺したりした。甥の或るものは祖先傳來の槍をふり廻して猫を突くと云つて暗闇にしやがんで居た事もあつた。猫の鳴聲を聞くと同時に槍を放り出しておいて奧の間に逃げ込むのではあつたが。

そんな樣な譯で猫といふものに餘りに興味のない私は、つい縁の下を覗いて見る丈の事もしないで居た。

其内に子猫は段々に生長して時々庭の芝生の上に姿を見せるやうになつた。青く芽を吹いた芝生の上の躑躅の蔭などに足を延ばして横になつて居る親猫に二疋の子猫がじやれて居るのを見かける事もあつたが、廊下を傳つて近付く人の足音を聞くと、親猫が急いで縁の下に駈け込む、すると子猫も殆んど同時に姿を隱してしまふ。盜賊猫の子は矢張り盜賊猫になるやうに教育されるのであつた。

或日妻がどうしてつかまへたか雉毛の子猫を捕へて座敷へ連れて來た。白い前掛ですつかりからだを包んで首だけ出したのを膝の上にのせて、顎の下をかいてやつたりして居た。猫はあきらめて餘り藻掻きもしなかつたが、前脚だけ出してやると、もう逃げよう／＼として首をねぢ向けるのであつた。小さな子供等は此の子猫を飼つて置き度いと望んで居たが、私はいゝ加減にして逃がしてやるやうにした。我家に猫を飼ふといふ事はどうしても有り得べからざる事のやうにしか其時は思はれなかつた。

それから二三日經つて妻は又三毛の方をつかまへて來た。處が此方は前の雉毛に比べると恐ろしく勇敢できかぬ氣の子猫であつた。前垂にくるまりなが烈しく抵抗し、一寸でも脚を出せばすぐ引掻き嚙み付かうとするのである。庭で遊んで居る時でも此方が雉毛よりずつと敏捷

で活潑だといふ事であつた。猫の子でもやつぱり兄弟の間で色んな個性の相違があるものかと、私には珍しく面白く感ぜられた。猫などは十疋が十疋毛色はちがつても性質の相違などはないもののやうにぼんやり思つて居たのである。動物の中での猫の地位が少し上つて來たやうな氣がした。

子供のみならず、今度は妻迄も口を出して此の三毛を馴らして飼ふ事を希望したが、私はやつぱりさういふ氣にはなれなかつた。併し此のきかぬ氣の勇敢な子猫に對して何かしら今迄ついぞ覺えなかつた輕い親しみ或は愛着のやうな心持を感じた。猫といふものが極めて僅かであるが人格化されて私の心に映り始めたやうである。

其れ以來此猫の母子は一層人の影を恐れるやうになつた。其れに比例して子供等の興味も增して行つた。夕食の後などには庭のあちらこちらに伏兵のやうにかくれて居て、うつかり出て來る子猫を追ひ廻してつかまへようとして居たが、もう大人にでもつかまりさうでなかつた。餘りに募る迫害に恐れたのか、それとも又子猫がもう一人前になつたのか、縁の下の產所も永久に見捨てて何處かへ移つて行つた。それでも時々隣りの離れの庇の上に母子の姿を見かける事はあつた。子猫は見る度每に大きくなつて居るやうであつた。そしてもう立派な一かどのどろばう猫らしい用心深さと敏捷さを示して居た。

鼠の惡戲は其間にも續いて居た。とう〳〵二階の押入れの襖を喰ひ破つて、來客用に備へてある一番いゝ夜具に大きな穴をあけて居るのを發見したりした。もう子鼠さへもかゝらなくなつてしまつた捕鼠器は、蓋の落ちた儘臺所の戶棚の上にはふり上げられて、餌に吊した薩摩揚げは干からびたせんべいのやうに反りかへつて居た。

三

六月中旬の事であつた。或日仕事をして居ると子供が呼びに來た。猫を貰つて來たから見に來いといふのである。行つて見るともう可也生長した三毛猫である。大勢が車座になつて此の新しい同棲者の一擧一動を好奇心に充されて環視して居るのであつた。猫に關する常識のない私には、凡て唯珍しい事ばかりであつた。妻が抱上げて顋の下や耳の周りを搔いてやると、胸のあたりで物の沸騰するやうな音を立てた。猫が咽喉を鳴らすとか、ゴロ〳〵いふとかいふ事は書物や人の話ではいくらでも知つて居たが、實驗するのは四十幾歲の今が初めてである。これが喜びを表はす兆候であるといふ事は、初めての私にはすぐにはどうも腑に落ちなかつた。『此猫は肺でもわるいんぢやないか』と言つたらひどく笑はれてしまつた。實際今でも私には果して咽喉が鳴つて居るのか、肺の中が鳴つて居るのか分らないのである。音に伴ふ一種の振動は胸腔全部に波及して居る事が觸つて見ると明かに感ぜられる。腹腔の方ではもうずつと弱く消されて居た。此れは振動が固い肋骨に傳はつてそれが外側迄感ずるのではないかと思ふのである。それにしても此音の發するメカニズムや、此のやうな發音の生理的の意義やについて知り度いと思ふ事が色々考へられる。中學校で動物學を敎はつたけれども、鳥や蟲の聲については雜誌や書物で讀んだけれども、猫のゴロ〳〵については未だ知る機會がついなかつたのである。此れは何も現代の敎育の缺陷ではなくて自分の非常識によるのであらう。デモクラシーを神經衰弱の藥、レニンを毒藥の名と思つて居た小學校の先生があつたさうであるが、自分のはそれより一層ひどいかも知れな

いふ作品のレーニンやデモクラシーや猫のゴロ／＼の本當に分つて居る人も存外に少いのではあるまいか。兎も角も此のゴロ／＼は人間などが食慾の滿足に對する豫想から發する一種の咽喉の雜音などとは本質的にも異つたものらしく思はれる。

此音は私に色々な音を連想させる。海の中にもぐつた時に聞える波打際の砂利の相摩する音や、火山の火口の奧から聞えて來る釜のたぎるやうな音なども思ひ出す。若しや獅子や虎でも同じやうな音を立てるものだつたら、此音は一層不思議なものでありさうである。それが聞いて見たいやうな氣もする。

疊の上におろしてやると、もうすぐ其處にある紙片などにじやれるのであつた。其の舉動はいかにも輕快で、そして優雅に見えた。人間の子供などはとても、自分のからだを此れだけ典雅に取扱はれようと思はれない。英國あたりの貴族にはどうだか知らないが。

それで居て一擧一動が如何にも子供々々して居るのである。人間の子供の子供らしさと、何處とは明かに名狀し難い處に著しい類似がある。

野良猫の子に比べて何といふ著しい對照だらう。彼は生れ落ちると同時に人類を敵として見なければならない運命を授けられるのに、此れははじめから人間の好意に絶對の信頼をおいて居る。見ず知らずの家に貰はれて來て、そしてもう其處を吾家として少しも疑はず恐れても居ない。どんなにひどく扱はれても、それは凡て好い意味にしか受取られないやうに見えるのである。

それはさうと、私はうちで猫を飼ふといふ事に承認を與へた覺えはなかつたやうである。子猫を貰ふといふ事について相談は屢々受けたやうであるが、積極的に同意は未だしなかつた筈であつた。しかし今眼前に此の美しい、そして子供々々した小動物を置いて見て居る内にそんな問題は自然に消えてしまつた。

子猫がほしいといふ家族の大多數の希望が女中の口から出入の八百屋に傳へられる間にそれが積極的な要求に變つてしまつたらしい。突然八百屋が飼主の家の女中と一處に連れて來たさうである。臺所へ來たのを奧の間へ連れて行くとすぐ又臺所へかけて行つて、連れて來た人の後を追ふので、暫時紐でつないでおかうかと云つて居たが、連れて來た人が其れは可哀さうだからどうか縛らないでくれといふのでよしたさうである。夜は懷へ入れて寢かしてやつてくれといふ事も賴んで行つたさうである。私が見に來た時はもう可也時間がたつて餘程馴れて來た處であつたらしい。

もとの飼主の家では餘程大事にして育てられたものらしい。食物などは中々めつたなものは食はなかつた。牛乳か魚肉、それもいゝ處だけで堅い頭の骨などは食はうともしなかつた。恐ろしい贅澤な猫だといふものもあれば、上品だと云つてほめるものもあつた。膳の上のものをねらふやうな事も決してしないのである。

子供等の猫に對する愛著は日增に濃くなるやうであつた。學校から歸つて來ると肩からカバンを下す前に『猫は』『三毛は』と聞くのであつた。私は何となしに淋しい子供等の生活に一脈の新しい情味が通ひ始めたやうに思つた。

幼い二人の姉妹の間には屢々猫の爭奪が起つた。『少しわたしに抱かせてもいゝぢやないの』とか『ちつともわたしに抱かせないんだもの』とか云ひ爭つて居るのが時々離れた私の室迄聞えて來た。おしまひにはどちらかが泣き出すのである。私は子供等が此の爲に餘りに感傷的になるのを恐れない譯には行かなかつた

猫も可哀想であつた。樂寢の出來るのは子供

等の學校へ行つて居る間だけである。間もなく休暇になるともう少しの暇もなくなつた。大きい子等は小さい子等が三毛を玩具にして居るのを見ると、可哀想だから放してやれなどと云つて居ながら、すぐもう自分でからかつて居るのである。逃げて縁の下へでも隱れたらいゝだらうと思ふが、何處までも從順に、いや〳〵ながら無抵抗に自由にされて居るのがどうも少し殘酷なやうに思はれ出した。實際段々に瘦せて、來た時とは見違へるやうに細長くなるやうであつた。歩くにもなんだかひよろ〳〵するやうだし、坐つて居る時でもからだがゆら〳〵して居た。そして人間がするやうに居眠りをするのであつた。猫が居眠りをするといふ事實が私には珍しかつた。大きな發見でもしたやうな氣がして人に話すと、知つて居る人はみんな笑つたし適に知らない人があつても誰れも此の事實を面白がらないやうであつた。併し私は猫の此の舉動に映じた人間の姿態を凝視して居ると、滑稽やら悲哀やらの混合した妙な心持になるのである。

此分では今に子猫は死んでしまひさうな氣がした。時々食つたものをもどして敷物を汚すやうな事さへあつた。夜はもう疲れ切つて、他愛もなく深い眠りに陷ちて、物音に眼をさますやうには見えなかつた。それでも不思議な事には鼠の跳梁は何時の間にか止んで居た。稀に臺所で皿鉢のかち合ふ音が聞えても三毛は何も知らずに寢て居た。恐らく未だ鼠といふものを見た事のない彼女の本能は未だ眠つて居るのだらうと思はれた。

あんまりいぢめると、もう何處かへやつてしまふとか、もとの家へ返してしまふとかいふ威かしの言葉が子供等の前で繰返されて居た。とうとう飼主の家に相談して、一兩日靜養させてやる事にした。

猫が居なくなるとうち中が急に淋しくなるやうな氣がした。折柄降りつゞいた雨に庭へ出る事も出來ない子供等は何時になくひつそりして居た。

いつもは夜子供等が寢しづまつた後に、どうかすると足音もしないで書齋にやつて來て机の下からそつと私の足にじやれるのを、抱き上げて膝にのせてやると、すぐに例のゴロ〳〵いふ音を出すのであつたが、其夜はもとより居ないのだから來る筈はなかつた。仕事がすんでゆつくり煙草を吸ひながら、靜かな雨の音を聞いて居る中に、妙な想像が浮んで來た。三毛が本當に何處かへ捨てられて、此の雨の中を濡れそぼけてさまよひ歩いて居る姿が心に描かれた。饑と寒さにふるへながら何處かの塵芥箱のまはりでもうろ〳〵して居る、そして知らない人の家の雨戸を洩れる燈火を戀しがつて哀れな聲を出して啼いて居さうな氣がした。

翌日の夕方迎へにやつて連れて來たのを見ると、たつた二日の間に見違へるやうにふとつて居た。尖つた顏がふつくりして、眼が急に細くなつたやうに見えた。眼の周りにあつたヒステリックな皺は消えて、おつとりした表情に變つて居た。どういふ良い待遇を受けて來たのだらうといふのが問題になつた。親の乳でも呑んだ爲だらうといふ説もあつた。

夏も盛りになつて、夕方になると皆が庭へ出た。三毛も屹度ついて來た。嘗て野良猫の遊び場所であつた躑躅の根元の少し窪んだ處は、何かしら矢張りどの猫にも氣に入ると見えて、ボールを追つかけたりして驅け廻る途中で、きまつたやうに其處へ驅け込んだ。そして餌をねらふ猛獸のやうな姿勢をして拔足で出て來て、いよ〳〵飛びかゝる前には腰を左右に振り立てるのである。どうかすると熊笹の中に隱れて永い間ぢつとして居ると思ふと、急に鯉のはね上

るやうに高くとび出して、そしてキヨトンとしてとぼけた顏をして居る事もある。どうかすると四肢の兩方に開いて腹をぴつたり芝生につけて、丁度もゝんがあの翔つて居るやうな恰好をして居る事もあつた。多分腹でも冷して居るのではないかと思はれた。

芝を刈つて居ると、何時の間にか忍んで來て不意に鋏のさきに飛びかゝるのが危險でしやうがなかつた。注意しながら刈つて居ると、時々猫がねらつて居る事を警告する子供の叫聲が聞かれた。此の芝刈鋏に對する猫の好奇心のやうなものはずつと後迄も持續した。もう紐切れやボールなどにはじやれなくなつた後でも、鋏を持つて庭に下りて行く私の姿を見るとすぐについて來るのであつた。どうかすると、しやがんで居る腰の下からそつと入つて來て、私の兩膝の間に顏を出したりした。そしてちよつと鋏に觸れるとそれで滿足したやうにのそ〳〵向うへ行つて植込みの八つ手の下で蝶を狙つたり、蟷螂をからかつたりして居た。

蟷螂では一番初めに失敗したやうである。多分喰ひ付かうとしてどうかされたものと見えて口から白い涎のやうなものをたら〳〵垂らしながら兩方の前脚で自分の口をもぎ取りでもするやうな事をして苦しんで居た。蛙が煙草をなめた時の擧動とよく似た事をやつて居た。其れ以來はもう口を付けないでたゞ前脚で蛙の頭をそつと抑へつけて見たり、横腹をそつと押して見たりしては、首をかしげて見て居るだけであつた。愚直な蝦蟇は觸れられる度にしやちこ張つて膨れて居た。土色の醜いからだが憤懣の團塊であるやうに思はれた。絶對に自分の優越を信じて居るやうな子猫は、時々脇見などしながら又ちよい〳〵手を出してからかつて見るのである。

困つた事には何時の間にか蜥蜴を捕つて食ふ癖が付いた。初めの内は、捕へたのは必ず疊の上に持つて來て、喰ふ前に玩弄するのである。時々大きな奴の尻尾だけを持つて來た。主體を分離した尾部は獨立の生命を有つもののやうに振動するのである。私は見付け次第に猫を引き捕へて無理に口からもぎ取つて再び猫に見付からないやうに始末をした。折角の獲物を取られた猫は暫くは疊の上を嗅いで歩いて居た。蜥蜴をとつて食ふのがどうしていけないのか猫に分らう筈はなかつた。私自身にも何故いけないかは説明する事が出來ないのである。それで後にはわざ〳〵疊に持ち上るのは斷念して、捕へた現場ですぐに食ふ事を發明したやうである。時々舌なめずりをしながら縁側へ上つて來る猫を見ると、なんだか氣持が惡くなつた。吾等の食膳の一部を食つて居る、我家族の一員である筈の此猫が、蜥蜴などをくふのは他の家族の食膳全體を冒瀆するやうな氣がするといふのかもしれない。其れ程にまで、此の四足獸は吾々の頭の中で人格化して居るのだと思はれる。

私は夜更けて獨り仕事でもやつて居る時に、長い縁側を歩いて來る輕い足音を聞く。そして椅子の下へはひつて來てそつと私の足を撫でたりすると、思はず「どうした」とか『何だい』とか云ふ言葉が口から出る。それは決して獨り語ではなくて、立派に私の云ふ事を理解し得る二人稱の相手にさういふ心持で云ふのである。相手は何とも答へないが、抱上げてやればすぐにあの音を立てはじめるのである。子供のない淋しい人や、自分の思ふ儘になる愛撫の對象を人間界に見失つた老人などが、只管に猫を可愛がり、所謂猫可愛がりに可愛がる心持が段々に分つて來るやうな氣がした。或る西洋人が猫を飼つて耕作の伴侶にして居た氣持も少しわかつて來た。孤獨なイーゴイストに取つてはこんな動物の方がなまじひな人間よりもどの位頼母し

い生活の友であるかもしれないのだらう。
不思議な事には、あれ程猫嫌ひであつた母が、時々膝に這上る子猫を追ひのけもしないのみならず、隱居部屋の障子を破られたりしても餘り苦にならないやうであつた。

四

我家に來て以來一番猫の好奇心を誘發したものは恐らく蚊帳であつたらしい。どういふものか、蚊帳を見ると奇態に興奮するのであつた。殊に内に人が居て自分が外に居る場合にそれが著しかつた。背を高く聳やかし耳を伏せて恐ろしい相好をする。そして命掛けのやうな勢で飛びかゝつて來る。猫にとつては恐らく不可思議に柔かくて強靭な蚊帳の抵抗に全身を投げかける。蚊帳の裾は引きずられながらに袋になつて猫のからだを包んでしまふのである。此れが猫には不思議でなければならない。兎も角も普通のじやれ方とはどうもちがふ。餘りに眞劍なので少し悽いやうな氣のする事もあつた。從順な特性は消えてしまつて、野獸の本性が餘りに明白に表はれるのである。

蚊帳自身か或は蚊帳越しに見える人影が、猫には何か恐ろしいものに見えるのかも知れない。或は蚊帳の中の蒼ずんだ光が、森の月光に獲物を索めて歩いた遠い祖先の本能を呼び覺すのではあるまいか。若し色の違つた色々の蚊帳があつたら試驗して見たいやうな氣もした。

じやれる品物の中で面白いのは帶地を卷いておく桐の棒である。前脚でころがすのは何でもないが、棒の片端をひよいと兩方の前脚でかゝへて後脚で見事に立ち上がる。棒が倒れると其れを飛び越えて、見向きもしないで知らん顏をしてのそ〳〵と三四尺も歩いて行つて、ちよこんと坐る。さういふ事を何遍となく繰返すのである。どういふ心持であるのか全く見當が付かない。

二階に籐椅子が一つ置いてある。其の四本の脚の下部を筋違に連結する十字形の眞中が一寸した棚の樣になつて居る。此處が三毛の好む遊び場所の一つである。何か紙片のやうなものを下に落しておいて、入り亂れた籐のいろ〳〵の隙間から前脚を出して其の紙片を捕へようとする。轉がり落ちると仰向になつて今度は下から隙間に脚を代り〳〵に差し込んだりする。

此のやうな遊戯は何を意味するか吾々には分らない。恐らくまだ自覺しない將來の使命に馴れる爲の練習を無意識にして居るのかも知れない。

里歸りの二日間に囘復したからだはいつの間にか又痩せこけて、肩の骨が高くなり、横顏が尖つて眼玉が大きくなつて來た。あまり可哀想だから、もう一疋別のを飼つて過重な三毛の負擔を分たせようといふ說があつて、此れには贊成が多かつた。

或日暮方に庭へ出て居ると臺所が賑かになつた。女や子供等の笑ふ聲に交つて聞きなれない男の笑聲も聞えた。「イー猫だねえ」と、「イー」に妙なアクセントを付けた妻の聲が明かに聞えた。それは出入の牛乳屋が何處からか貰つて、小さな虎毛の猫を持つて來たのであつた。

未だ本當に小さな、掌に入れられる位の子猫であつた。光澤のない長い初毛のやうなものが背中にそゝけ立つて居た。其顏が又餘程妙なものであつた。額がおでこで一體に押しひしいだやうに短い顏であつた。そして不相應に大きく突立つた耳が此顏に一層特異な表情を與へて居るのであつた。どうしたのか無氣味に大きく膨れた腹の兩側に吾々の小指位な後脚がつつかひ棒のやうに突張つて居た。何となしにすすきの穗で造つた木兎を想ひ出させるのであつた。

三毛は明かな驚きと疑ひと不安をあらはして此の新参の仲間を凝視して居た。ちび猫は三毛を自分の親とでも思ひちがへたものか、なつかしさうにちよこ〳〵近寄つて行つて、小さな片方の前脚をあげて三毛に觸らうとする。三毛は毒蟲にでも觸られたかのやうに、驚いて尻込みする。其れを追ひすがつて行つては又片脚を上げる。此の樣子が餘りに滑稽なので、皆の笑ひこけるのに釣り込まれて自分も近頃になく腹の中から笑つてしまつた。

すこし馴れて來ると三毛の方が攻勢をとつて襲撃を始めた。いきなり飛びついて首を羽搔締めにして、頭でも脚でも嚙みつき、後脚で引搔くのである。本當に鷹と小雀とのやうな爭であつた。ちびは閉口して逃げ出すかと思ふと、中々さうでなかつた。時々小鳥のやうなピーピーといふ泣聲を出しながらも負けずに嚙み付き引搔くのである。三毛が放すと同時に、向き直つて組つたまゝ短い尻尾の先で空中に∝の字をかきながら三毛のかゝつて來るのを待受けて居た。どうかするとちびは簞笥と襖の間に入つて行く、三毛は自分ではひれないから氣狂のやうになつて前脚をさし込んで騷ぐ。其間に小猫は落ちつき拂つて向側へ出て來る。さうして相變らず短い尻尾で、無器用なコンダクターのやうに色々な∝の字を描いて居た。

名前はちびにしようといふ説があつたが、さういふ家畜の名は或るデリカシーから避けた方がいゝといふ説があつてそれは止めになつた。いゝ加減にたまと呼ぶ事にした。雄猫にたまはをかしいといふものもあつたが、それぢや玉吉か玉助にすればいゝといふ事になつた。

二つの猫の性情の著しい相違が日のたつに從つて明かになつて來た。三毛が食物に對して極めて寡慾で上品で貴族的であるに對して、たまは紛れもないプレビアンでボルシェビキで身體不相應に烈しい食慾をもつて居た。三毛の見向きもしない魚の骨や頭でもふるひ付くやうにして食つた。そして誰れか一寸觸りでもすると、背中の毛を逆立てて、さうして恐ろしい唸り聲を立てた。ウー〳〵といふ眞に物凄いやうな、とても此の小さな子猫の聲とは思はれないやうな聲を出すのである。そして其處ら中にある食物を出來るだけ多く占有するやうに兩の前脚の指を出來るだけ開いてしつかりおさへ付ける。此點では彼はキャピタリストである。押しのけられた三毛は呆れたやうに少し離れて眺めて居た。鯖の血合の一片でもやると、それをくはへるが早いか、誰れも觸りもしないのに例の唸聲を出しながらすぐに其處を逃げ出さうとするのである。どうしても泥棒猫の性質としか思はれないものをもつて居るやうである。其の上に此猫は所謂下性が惡かつた。毎夜のやうに座蒲團や夜具の裾を汚すのであつた。其の始末をしなければならない臺所の人達の間には疾くにたまに對する排斥の聲が高まつた。さうでない人でも物を食ふ時のたまの擧動を淺ましく不愉快に感じないものはなかつた。殊に大人しい三毛が彼の爲に食物を奪はれたりするのを見れば猶更であつた。

たまを連れて來た牛乳屋の責任問題も起つて居た。たまは牛乳屋にかへしてもつといゝ猫を貰つて來ようといふ事が凡ての人の希望であるやうであつた。のみならず、もう候補者まで見付けて來て私に贊同を求めるのであつた。

併し牛乳屋が正直にもとの家に還したところで、又誰れか新しい飼主の手に渡るにしても結局は野良猫になるより外の運命は考へられないやうな此猫を、みす〳〵出してしまふの：可哀想であつた。下性の惡いのは少し氣をつけて習慣をつけてやれば直るだらうと思つた。それで先づボール箱に古いネルの片などを入れて

彼の寢床を作つてやつた。それと、土を入れた菓子折とを並べて浴室の板間に置いた。私が寢床に入る前に其處らの蚊帳の裾などに寢て居るたまを探して捕へて來て浴室の此の寢床に入れてやつた。何も知らない子猫はやはり猫らしく咽を鳴らすのである。土の香を嗅がせてやると二度に一度は用を便じた。浴室の戸を締切つてスキッチを切つたあとの闇の中に夜明迄の長い時間をどうして居るのか分らないが、ガラス窓が白む頃が來ると浴室の戸をバサ〳〵鳴し、例の小鳥のやうな啼聲を出して早く出して貰ひ度いと訴へるのが聞えた。行つて出してやると急いで飛び出すかと思ふと又もとの處へ走り込んだり、さうして丁度犬の子のするやうに人の足のまはりをかけめぐるのである。十日餘りも此のやうな事を繰返した後に、試に例の寢床のボール箱と便器とを持出して、三毛の出入する切穴の傍に置いて何遍となく其處へ連れて行つては土の香を嗅がしてやつた。翌朝氣をつけて見たが蒲團や疊の汚れた處はどこにも見付からなかつた。多分三毛に導かれて切穴から出る事を覺えたのであらう。其後は明け方に穴から這ひ上るたまの姿を見かける事もあつた。

異常に發達したたまの食慾は幾分か減つて、其れ程にがつ〳〵しなくなつて來た。氣持の惡い程膨れて居た腹がそんなに目立たなくなつて來ると痩せた腰から後脚が妙に見窄らしく見えるやうになりはしたが、それでもどうやら當り前の猫らしい恰好をして來るのであつた。そして矢張り何處か飼猫らしい鷹揚さと御坊ちやんらしい品のある愛らしさが見え出して來た。

夏休みが過ぎて學校が始まると、猫のからだは漸く少し暇になつた。午前中は風通しのいゝ中敷などに、三毛とたまが四肢を思ふさま踏み延して晝寢をして居るのであつた。片方が眠つて居るのを他の片方がしきりに嘗めてやつて居る事もあつた。夕方が來ると二疋で庭に出て芝生の上でよく相撲を取つたりした。晝間眠られるやうになつてから夜中によく縁側で騷ぎ出した。此れには少し迷惑したが、腹は立たなかつた。臺所で陶器の觸れ合ふ音がすると思つて行つて見ると、戸を締め忘れた茶箪笥の上と下の棚から二疋がとぼけた顏を出してのぞいて居たりした。

鼠は未だつひぞ捕つたのを見た事はないが、もう鼠の惡戯は止んでしまつて、天井は全く靜かになつた。

縁の下で生れた野良猫の子の三毛は、今でも時々隣りの庇に姿を見せる事がある。美しい猫ではあるが氣のせゐか何となく險相に見える。臆病なうちの三毛は野良猫を見ると大急ぎで家に驅け込んで來るが、たまの方は全く平氣である。いつか野良猫と一處に遊んで居るのを見たといふ報告さへあつた。『不良少年になるんぢやないよ』などと云つて頭をたゝかれて居たが、何の爲に叩かれるのか猫には分らないだらう。

＊　＊　＊　＊　＊

我家の猫の歴史は此れからはじまるのである。私は出來るだけ忠實に此れからの猫の生活を記錄しておき度いと思つて居る。

月が冴えて風の靜かな此頃の秋の夜に、三毛とたまとは縁側の踏臺になつて居る木の切株の上に並んで背中を丸くして行儀よく坐つて居る。そしてひつそりと靜まりかへつて月光の庭を眺めて居る。それをぢつと見て居ると何となしに幽寂といつたやうな感じが胸にしみる。そしてふだんの猫とちがつて、人間の心で測り知られぬ別の世界から來て居るもののやうな氣のする事がある。此のやうな心持は恐らく他の家畜に對しては起らないのかも知れない。

笑

子供の時分から病弱であつた私は、物心が付いてから以來殆んど醫者にかゝり通しにかかつて居たやうな漠然とした記憶がある。幸に命を取り止めて來た今日でも矢張り斷えず何かしら病氣をもつて居ない時はないやうに思はれる。簡單なラテン語の名前のつくやうな病氣にはかゝつて居ない時でも、何となしに自分のからだを厄介な荷物に感じない日は稀である。唯習慣のおかげでそれのはつきりした自覺を引きずり歩かないといふだけである。それで自分は、丁度色盲の人に赤緑の色の觀念が缺けて居るやうに、健康な身體に普通な安易な心持を思料する事が出來ないのではないかと思ふ事もある。尤も健康な人は、さういふいゝ心持が常態であつて見れば、病後でもない限り矢張りそれを安易とも幸福とも自覺しないだらう。すると結局日常生活の仕事の上には、自分のやうなものも健全な人も、身體の自覺から受ける影響は大したものではないかも知れないが、併し此れ程根本的な肉體的の差別が何處かに發露しない筈はない。

それで、此れから告白しようとする私の奇妙な經驗が何處迄正常な健康を保有して居る幸福な人達に共通で、何處からが私のやうなものに限つての病的な現象に連關して居るかは、遺憾ながら私自身にもよく分らない。此の一篇を書くやうになつた動機は寧ろ此點に對する私の不可解な疑念であると云つてもいゝ。

＊　＊　＊　＊

私は子供の時分から、醫者の診察を受けて居る場合に屹度笑ひ度くなるといふ妙な癖がある。此癖は大きくなつても中々直らなくて、今でも其の痕跡だけはまだ殘つて居る。

病氣と云つても四十度も熱があつたり、或は身體の何處かに堪へ難い痛があつたりするやうな場合は流石にそんな餘裕はないが、病氣の自覺症狀がそれ程强烈でなくて、起き上つて坐つて診察して貰ふ位の時に此の不思議な現象が起るのである。

先づ醫者が脈を抑へて時計を讀んで居る時分から、そろ〳〵此の笑の前兆のやうな妙な心持がからだの何處かから起つて來る。それは決して普通の可笑しいといふやうな感じではない。自分の差し延べて居る手を其儘の位置に保たうといふ意識に隨伴して一種の緊張した感じが起ると同時に、此れに比例して、身體の何處かに妙なくすぐつたいやうな頼りないやうな感覺が起つて、其れが段々からだ中を彷徨し始めるのである、云はゞ辛うじて平衡を保つて居る不安定な機械の何處かに少しの餘計な重量でもかゝると、その爲に機械全體の釣合がとれなくなつて、彼方此方かぐらついて來るやうなものかも知れない。實際からだが妙にぐら〳〵したり、それを抑へようとすると肝心の手の方ががくりと動いたりするのである。

弱い神經と云つてしまへばそれ迄の事かも知れないが、問題は此れが「笑」の前奏として起る點にある。

舌を出したり咽喉佛を引込めて『あゝ』といふ氣の利かない聲を出したり、眼瞼をひつくり返されたりするやうな何でもない事が、丁度平衡を失つてゆるんで居る際どい隙間へ出くはす爲だかどうか、よくは分らないが、場合によつては此んな事でも、兎に角既に「笑」の方に向つ

て、倒れかゝつて居る氣分に輕い衝擊を與へるやうな效果はあるらしい。

いよ〳〵胸を寬ろげて打診から聽診と進んで來るに從つて、身體中を驅けめぐつて居た力ない頼りないくすぐつたいやうな感じが一層强く鮮明になつて來る。さうして深呼吸をしようとして胸一杯に空氣を吸ひ込んだ時に最高頂に達して、それが息を吹き出すと共に一時に爆發する。すると其れがちやんと立派な「笑」になつて現はれるのである。

何も其處に笑ふべき正當の對象のないのに笑ふといふのが不合理な事であり、醫者に對して失禮は勿論甚だ恥づべき事だといふ事は子供の私にもよく分つて居た。傍に坐つて居る兩親の手前も氣の毒千萬であつた。それでなるべく我慢しようと思つて、脣を强く嚙んだり、こつそり膝をつねつたりするが、眼から涙は出ても此の「理由なき笑」は中々それ位の事では止まらなかつた。そのやうな努力の結果は却つて防がうとする感じを强めるやうな效果があつた。ところが醫者の方は案外何時も平氣で一處に笑つてくれたりする。さうすると、もう手離しで笑つてもいゝといふ安心を感じると同時に、笑ひ度い感覺はすうと一時に消滅してしまふのである。

胸部の皮膚に觸られるのが直接にくすぐつたい感覺を起させるので、其れが原因かと思はれない事もないが、實はさうではなくて、それよりは寧ろ息を吸ひ込まうとする努力と密接な關係のある事が自分でよく分る。腹部を揉んだりする時には實際却つてさう笑ひ度くならなかつた。

かゝりつけの醫者に診て貰ふ場合には、それ程困らなかつたが、初めての醫者などだと、もう見て貰ふ前から此れが苦になつて居た。氣にすればする程却つて結果は惡かつた。傍に母でも居て、此癖をなるべく早く說明して貰ふより外はなかつた。それを說明して貰ひさへすれば、もう決して笑はなくてもいゝ事になるのであつた。

『男といふものはさう無暗に何でもない事を笑ふものではない』といふやうな事を常に父から敎へられ、自分でもさう思つて居た。況んや何等笑ふべき正當の理由のないのに笑ふといふ事は許すべからざる不倫な事としか思はれなかつた。それで、或時誰れか他家の小母さんが『それは何處かおなかに弱い處のあるせゐでせう』と云つてくれた時には、何かなしに一種の難有い福音を聞くやうな氣がした。なんだか自分の意志によつて制すべくして制し切れない心の罪が、どうにもならない肉體の罪に歸せられたやうに思はれた。

所謂笑ふべき事がない時に笑ひ出すのは醫者に診て貰ふ場合には限らなかつた。

一番困るのは親類などへ行つて改まつた挨拶をしなければならない時であつた。殊に先方に不幸でもあつた場合に、向うで述べるべき悔みの詞を宅から敎はつて諳記して行つて、それを其通りに云はうとする時に、突然例の不思議な笑が飛び出してくるのである。其時の苦しさは今でも忘れる事が出來ない。中々をかしいどころではなかつた。

併しさういふ場合に私に應接した多くのをばさん達は子供の私が譯もなく笑ひ出しても、そんな事はてんで問題にもならないやうであつた。却つて向うでもにこ〳〵して『大變大きくなつた』などといふ。そんな事を云はれて見ると、もう少しも笑はなくともいゝやうになる。さうして同時に何とも云へない情ない自卑の念に襲はれるのが常であつた。

かういふ「笑」の癖は中學時代になつても中々直らなかつた。そして其れが屢々自分を苦しめ

恥かしめた。嚴かな神祭の席に坐つて居る時、眞面目な音樂の演奏を聞いて居る時、長上の訓諭を聽聞する時など、すべて改まつて眞面目な心持になつて身體をちやんと緊張しようとする時に屹度此れに襲はれ惱まされたのである。床屋で顏に剃刀をあてられる時も此れと似た場合で、此の場合には危險の感じが笑を誘發した。

年を取るに從つて多少自分の內部の心理現象を內察する事を覺えてからは此の特殊な笑の分析的の解說を求めようとした事は幾度あつたか分らない。併しそれは自分などの力にはとても合はない六ケしい問題であつた。決局自分の神經の働き方に何處か異常な缺陷があるのであらうといふ、甚だ不愉快な心細い結論に達するのが常であつた。

一體私にとつては笑ふべき事と笑ふ事とはどうもうまく一致しなかつた。例へば村の名物になつて居る癡呆の男が往來でいろ〳〵の可笑しい藝當や身振りをするのを見て居ても、少しも笑ひ度くならなかつた。寧ろ不快な悲しいやうな心持がした。酒宴の席などで色々滑稽な隱し藝などをやつて笑ひ興じて居るのを見ると、寧ろ恐ろしいやうな物凄いやうな氣がするばかりで、とても一處になつて笑ふ氣になれなかつた。尤も此れは單にペシミストの傾向と云つてしまへば、別に問題にはならないかも知れないが。

さうかと思ふと、例へば烈しい颶風が暴れて居る最中に、雨戸を少し開けて、物恐ろしい空一杯に樹幹の搖れ動き枝葉のちぎれ飛ぶ光景を見て居る時、突然に笑が込みあげて來る。そして嵐の物音の中に流れ込む自分の笑聲を極めて自然なもののやうに感ずるのであつた。

或は門前の河が汎濫して道路を浸して居る時に、膝迄も沒する水の中を渉り歩いて居ると、水の冷たさが腿から腹に滲み渡つて來る、さうして身體中がぞく〳〵して來ると同時に又例の笑が突發する。

いづれの場合にも、普通如何なる意味に於ても決して笑ふべき理由は見付からないが、それにも拘らず笑の現象が現はれ來るのを如何ともする事が出來なかつた。

もう一つの場合は、人から何か自分に不利益な誤解を受けて其れに對する辯明をしなければならない時に、其の辯明が無效である事が段々に解つて來るとする、さういふ困難な場合に不意に例の笑が呼び出される。此れは最も工合の惡い場合であるが、それを意志の力で喰ひ止める事は、とても他人に想像されまいと思はれる程私には困難である。

此種の不合理な笑は、凡て自分だけに特有な病的の精神現象ではないかと思つて居たが、其後段々に氣を付けて見ると、必ずしも自分だけには限らない事が分つて來た。子供の時分に不幸見舞に行つて笑ひ出した事や、本膳を振舞はれて食つて居る間に噴き出したやうな話をする人も二人や三人はあつた。

或時、火事で燒け出されて、神社の森の中に持ち出した家財を番して居る中年の婦人が、見舞の人々と話しながら、腹の底からさもをかしさうに笑ひこけて居るのを、相手の方では驚き怪しむやうな表情をして見詰めて居るのを見かけた事もある。

戰爭の慘劇が頂點に達した時に突然笑に襲はれるといふ異常な現象も何處かで讀んだ。

此れ等は寧ろ狂に近い例かも知れないが、併し兎も角も此んな色々の事實を綜合して考へると、一般に「笑」といふ現象の機能や本質について何かしら或るヒントを得るやうに思ふ。

笑の現象を生理的に見ると、或る神經の刺戟によつて腹部の或る筋肉が痙攣的に收縮して

肺の中の空氣が週期的に斷續して呼び出されるといふ事である。息を呼出する作用に其れを喰ひ止めようとする作用が交錯して起るやうである。處が或る心理學者の說を敷衍して考へるとさういふ作用が起るので初めて「笑」が成立する、笑ふから可笑しいので可笑しいから笑ふのではないといふ事になる。

私が初めて此說を見出した時には、多年熱心に捜し廻つて居たものが突然手に入つたやうな氣がして嬉しかつた。

笑ふ前に其の理由を考へてから笑ふといふ事は不可能であるとしても、笑つてしまつた後で少くも其の行爲の解明が付かないのは申譯のない事であると思つて居た。其の困難な說明がどうやら出來さうな心持がし出した。

それには此の學者の說と、昔他所の小母さんが云つた『何處かおなかに弱い處があるせゐでせう』と云ふ事とを合せて考へて見るといゝやうである。

以上に擧げた特殊な「笑」の實例を見ると、いづれも精神並に肉體に一種の緊張を感じるべき場合である。もし十分氣力が強くて、所謂腹がしつかりして居て、其の緊張狀態を一樣に保持し得られる場合には何でもない。併し身體の病弱、氣力の薄弱な爲に其の緊張の持續に堪へ得ない時には知らず〳〵緊張が緩まうとする。此れを引き締めようとする努力が無意識の間に斷續する。例へばやつと步き初めた子猫が、脚を踏みしめて立たうとする時に全身がゆら〳〵搖れ動くのも此れと似た處がある。さういふ斷續的な緊張弛緩の交代が、生理的に「笑」の現象と密接な類似をもつて居る。從つて笑によく似た心持を誘發し、それが本當の笑を引出す。とかういふやうな事ではないだらうか。かう思つて自分の場合に當つて見ると或る程度迄はそれでうまく說明が出來るやうに思はれる。醫者に診て貰つて深呼吸をする時などには最も適切に當て嵌まるし、其他の場合でも餘り大した無理なしに適用しさうである。

此の假說が確められる時は、自分の神經の弱さ、腹の弱さ、臆病さの確められる時であるといふのは極まりなく不愉快な恥かしい事である。併し同時に其の弱さの素因がいくらか科學的につきとめられて從つて其の療法の見當がつくとすれば、それは又此上もない心强い喜ばしい事である。

實際自分のやうなものでも、健康の工合がよくて精力の充ちて居るやうな場合に、此のやうな變則な笑の出現する事は稀であつて、病後或は精神過勞の後に最も顯著な事から考へても、此の假說は少くとも餘程見込がありさうである。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

此のやうな考から出發して一般の笑の現象を研究して見たらどうかといふ事は自然に起る次の問題である。

狂人やヒステリー患者の病的な笑はどうであらう。此れは第一自分の經驗もないし、又觀察すべき材料も手近にないからよくは分らないが、例へば女の身體の或る變化に隨伴して起り勝ちなヒステリーなどは、鬱積した活力が十分に發現されない爲に起る病的現象だとすると、前の假說の領域から全く離れたものとは思はれない。

併し其れは暫く措いて、もう少し正常な健全な笑を考へて見る。

さういふ笑の中で最も純粹で原始的だと云はれるのは、野蠻人でも文明人でも子供でも大人でも共通に笑ふやうな笑でなければならない。野蠻人が如何なる事を笑ふかといふ事が知り度いのであるが、此れは一寸參考すべき材料を持合せない。止むを得ず子供の場合を考へて

見た。子供の笑の中で典型的だと思ふのは、第一に何かしら意外な、しかしそれ程恐ろしくはない重大ではない事柄が突發して、其れに對する輕い驚愕が消え去らうとする時に起るものである。例へば人形の首が脱け落ちたり風船玉のやうなものが思ひがけなく破裂したり、棚のものが落ちて來たりした時のが其例である。第二に此れと密接に連關して居るのは出來事に對する大きな豫期が小さな實現によつて裏切られた時の笑である。ビックリ箱を開けてもお化けが破損して居て出なかつたり、花火が出來損つてプス〱に終つたとかいふのがそれである。

此の二つは世態人情に關する豫備知識なしに可能なものであつて、それ丈本能的原始的なものと考へられるが、此の二つ共に兎も角も精神並に肉體の一時的或は持續的の緊張が急に弛緩する際に起るものと云つていゝ。さうして仔細に考へて見ると、緊張に次ぐ弛緩の後に其の餘波の樣な次第に消え行く弛張の交錯が伴ふ樣に思はれる。併し弛緩が極めて徐々に來る場合はどうもさうでないやうである。

惰性をもつたものが其の正常の位置から引き退けられて、離たれた時に、之れをその正常の位置に引き戻さんとする力が働けば振動の起るといふのは物質界には極めて普通な現象である。そして多くの場合に於て其の惰性は恆同であり、彈力は變位に正比例するから運動の方程式は簡單である。併し此の類型を神經の作用に迄も持つて行かうとすると非常な困難がある。假りに或るものの變位がプラスであれば緊張、マイナスであれば弛緩の狀態を表はすとした處で、其の「もの」が何だか分らなければ其の質量に相當するものも、彈力に相當するものも分りやうはない。從つて此れが數學的の取扱ひを許される迄には餘りに大きな空隙がある。

其れにも拘らず笑の現象を生理的又心理的に考へる時に此の力學の類型が非常に力强い暗示をもつて私の想像に訴へて來る。さうして生理と心理の間の架け橋が正に此の問題に繋がつて居さうに思はれてならない。

此れを一つの working hypothesis として見た時には、其處から色々な蓋然的な結果が演繹される。例へば笑ひ易い人と笑ひにくい人などの區別が、力學の場合の「粘性」や「摩擦」に相當する生理的因子の存在を思はせる。粘液質などといふ言葉が何かの啓示の樣に耳にひゞく。或は笑の斷續の「週期」と體質や氣質との關係を考へさせられる。又假りに「笑」が人類に特有な現象だとすれば、他の動物では質量彈力摩擦の配合が週期運動の條件を滿足させない爲に振動が無週期的 aperiodic になるのではないかといふ疑も起る。

＊　＊　＊　＊

子供の笑と子供にはわからない大人の笑との間には連續的な段階がある。（A）尊嚴が損はれた時の笑、（B）人間の弱點があばかれた時の笑などは必ずしも此れを惡意な Schadenfreude とばかりは云はれない。此處にも或る緊張の緩みが關係してくる。

（C）望みが遂げられた時の喜びの笑、此れも無理なしに此處の假說の圈内にはひる。

少し六ケしくなるのは、（D）得意な時の自慢笑、（E）輕侮した時の冷笑などである。しかし（D）には（A）と（C）の混合があり、（E）には（B）や（D）の錯雜がある。

（F）苦笑といふのがある。此れは自分を第三者として見た時の、（A）と（B）とが自分を自分とした時の苦痛と混合したものでもあらうか。

こんな風にしてもつと色々な種類の笑がLMN・・・といふ工合に導き出されさうに思はれ

る。しかし此のやうな問題はもう純粹な心理の問題になつて肉體との緣が遠くなる。此れは自分の玆に云はうとする事ではなかつた。

＊　＊　＊　＊

此の「假說」は唯自分の奇妙な「笑」に對する少年時代からの疑を解く爲に考へたものである。此の考の普遍性を主張しようとして居る譯では決してない。しかしそれが少くも多數の人に普遍なものを含んで居なければ私は矢張り安心が出來ない。

物事を系統化する事の好きな人は、其の系統にはひらない事實に盲目になり勝ちなものである。私の現在の場合にもそんな傾向がないといふ事は斷言出來ない。それで此れはまだ〱十分に考へて見なければどうなるか分らないが、俳しよく研究して見たらいくらか物になりさうな見込はある。

讀者の内にもし專門の學者があらば、其の人は此の私の素人考を正してくれるかも知れない。もし又素人で同じ經驗を持つて居る人があらば、其の人は同じ問題の追求に加勢してくれるかも知れない。此のやうな考から、私は此の懺悔とも論文とも付かないものを書いてしまつた。此の全篇の内容が一般の讀者の「笑」の對象になつても、それは止むを得ないのである。

（附記）此稿を大體書いてしまつて後に、ベルグソンの「笑」といふ書物が手に入つて讀んで見た。成程面白い本である。此書の著者は、笑には凡て對象があるものと考へて居て、對象のない笑には觸れて居ない。そして其の對象は、直接間接に人間的なものと考へ、顏や擧動や境遇や性格やの滑稽になる爲の條件公式或は規約のやうなものをいくつも、科學的に云へば可也大膽に持出してはそれを實例と對照させ說明して居る。其れを基礎として喜劇といふものが悲劇並に一般藝術に對してもつ特異の點を論じたり、笑の社會道德的意義を目的論的な立場で論じたりして居る。

讀んで居る内に色々有益な暗示も受けるし、著者の說に對する一二の疑も起つた。しかし此れを讀んだ爲に私が玆に書いた事の一部を取消したり變更する必要は起らなかつた。

私の問題は「對象なき笑」から出發して、笑の生理と心理の中間に潛む鍵を搜さうとするのであるが、ベルグソンはすつかり生理を離れて純粹な心理だけの問題を考へて居るのである。

ベルグソンの與へて居る種々な笑の場合で、私の所謂「假說」とどうしても矛盾するやうなものはなくて、寧ろ此れに都合のいゝ場合が可也にあつた。そして此書の終に近くなつて笑と精神的の弛緩との關係に少しばかり觸れて居る一節があるのを見出して多少の安心を感じる事が出來た。

此等の讀後の感想に就ては誌したい事が色々あるが、此稿とは融合しない性質のものだから、それは別の機會に讓る事にした。

案內者

何處かへ旅行がして見度くなる。併し別に何處と云ふきまつたあてがない。さういふ時に旅行案內記の類を開けて見ると、或は海濱、或は山間の湖水、或は溫泉といつたやうに、行くべき處がさまざ〳〵有り過ぎる程ある。そこで先づ假りに溫泉なら溫泉ときめて、溫泉の部を少し詳しく見て行くと、各溫泉の水質や效能、周圍の形勝名所舊跡などの大體がざつと分る。しかしもう少し詳しく具體的の事が知りたくなつて、今度は溫泉專門の案內書を搜し出して讀んで見る。さうすると先づぼんやりと大凡の見當がついて來るが、いくら詳細な案內記を丁寧に讀んで見た處で、結局本當の處は自分で行つて見なければ分る筈はない。もしも其れが分るやうならば、うちで書物だけ讀んで居ればわざ〳〵出掛ける必要はないと云つてもいゝ。次には念の爲に色々の人の話を聞いて見ても、人によつて可也云ふ事がちがつて居て、誰れのオーソリティを信じていゝか分らなくなつてしまふ。それでさん〴〵に調べた最後には、つまり好い加減に、賽でも投げると同じやうな偶然な機緣によつて目的の地をどうにかきめる外はない。

かういふやり方は云はゞアカデミックなオーソドックスなやり方であると云はれる。此れは多くの人々にとつて最も完全な方法であつて、かうすれば滅多に大きな失望やとんでもない違算を生ずる心配が少い。さうして主要な名所舊跡をうつかり見落す氣遣もない。

併し此れとちがつたやり方もないではない。例へば旅行がしたくなると同時に最初から賽をふつて行く處をきめてしまふ。或は偶然に讀んだ詩篇か小說かの中で或る感興に打たれたやうな場所に決めてしまふ。さうして案內記などにはてんで構はないで飛び出して行く。さうして自分の足と眼で自由に氣に向く儘に步き廻り見て廻る。此の方法は兎角色々な失策や困難を惹起し易い。又所謂名所舊跡などのすぐ前を通りながら知らずに見逃してしまつたりするのは有り勝な事である。此れは危險の多いヘテロドックスのやり方である。此れはうつかり一般の人にすゝめる事の出來かねるやり方である。

併し前の完全な方法にも短所はある。讀んだ案內書や聞いた人の話が何時迄も頭の中に巢をくつて居て、それが自分の眼を隱し耳を蔽ふ。それが爲に折角わざ〳〵出掛けて來た自分自身は云はゞ行李の中にでも押し籠められたやうな形になり、結局案內記や話した人が湯にはひつたり見物したり享樂したりすると同じやうな事になる、かういふ風になりたがる恐がある。勿論此れは案內書や敎へた人の罪ではない。

しかしそれでも結構であるといふ人が隨分ある。さういふ人は勿論それでよい。

しかしそれでは、わざ〳〵出て來た甲斐がないと考へる人もある。曲りなりにでも自分の眼で見て自分の足で踏んで、其の見る景色、踏む大地と自分とが直接にぴつたり觸合ふ時にのみ感じ得られる鋭い感覺を味はなければ何にもならないといふ人がある。かういふ人は兎角に案內書や人の話を無視し、或はわざと避けたがる。便利と安全を買ふ爲に自分を賣る事を恐れるからである。かういふ變り者はどうかすると萬人の見るものを見落し勝である代りに、如何なる案內記にもかいてないいゝものを掘出す機會がある。

私が昔二三人連れで英國の某離宮を見物に行つた時に、其中の或る一人は、始終片手に開いたベデカを離さず、一室々々此れと引合せては詳細に見物して居た。其のベデカはちやんと一度下調べをして處々赤鉛筆で丁寧にアンダーラインがしてあつた。或室へ來た時に其處の或窓の前にみんなを呼び集め、ベデカの中の一行を指しながら、『此窓から見ると景色がいいと書いてある』と云つて聞かせた。一同はさうかと思つて、此の見逃がしてならない景色を十分に觀賞する事が出來た。

私は此人の學者らしい徹底したアカデミックな仕方に感心すると同時に、何だかそこに名狀の出來ない物足りなさ或は一種の果敢なさとでもいつたやうな心持がするのを禁ずる事が出來なかつた。なんだかこれでは自分がベデカの編者其自身になつて其の校正でもして居るやうな氣がし、そして其窓が不思議なこだはりの網を私のあたまの上に投げかけるやうに思はれて來た。室に附隨した歷史や故實などはベデカによらなければ全く分らないが、窓の眺めのよしあし位は自分の眼で見付け出し選擇する自由を許して貰ひたいやうな氣もした。

ベデカといふものがなかつた時の不自由は想像の外であらうが、併し稀には最新刊のベデカに欺される事もまるでないではない。或都の大學を尋ねて行つたら其處が何かの役所になつて居たり、名高い料理屋を捜しあてると貸家札が張つてあつたりした事もある。杜撰な案內記ででもあればさういふ失敗は猶更の事である。併し、かういふ意味で完全な案內記を求めるのは元來無理な事でなければならない。さういふものがあると思ふのが困難のもとであらう。

それで結局案內記がなくても困るが、あつて困る場合もないとは限らない。

* * * * *

中學時代に初めての京都見物に行つた事がある。黑谷とか金閣寺とかいふ處へ行くと、案內の小僧さんが建築の各部分や什物の品々の來歷などを一々說明してくれる。其の一種特別な節をつけた口調も田舍者の私には珍しかつたが、それよりも、その說明が如何にも器械的で、云つて居る事柄に對する情緒の反應が全くなくて、說明者が單にきまつただけの聲を出す器械か何ぞのやうに思はれるのが餘程珍しく不思議に感ぜられた。其時に見た寶物や襖の繪などはもう大概綺麗に忘れてしまつて居るが、其時の案內者の一種の口調と空虛な表情とだけは今でも頭の底にあり〱と殘つて居る。

その時に一つ困つた事は、私が例へば或る器物か繪かに特別の興味を感じて、それをもう少し詳しくゆつくり見たいと思つても、案內者は凡ての品物に平等な時間を割當てて進行して行くのだから、うつかりして居ると其間にずんずんさきへ行つてしまつて、其間に私は澤山の見るべき物を見逃してしまはなければならない事になる。それは構はない積りで居ても其處を見て後に、同行者の間で丁度自分の見落したいゝものに就いての話題が持上つた時に、なんだか少し惜しい事をしたといふ氣の起るのは免れ難かつた。

* * * * *

學校教育や所謂參考書によつて授けられる知識は、色々の點で旅行案內記や、名所の案內者から得る知識に似た處がある。

もし學校のやうな難有い施設がなくて、そして唯全くの獨學で現代文化の藏して居る廣大な知識の林に分け入り何物かを求めようとするのであつたら、其の困難はどんなものであらうか。初めから終り迄道に迷ひ通しに迷つて、無用な勞力を浪費するばかりで、結局目的地の見當もつかずに日が暮れてしまふのがおちであ

らうと思はれる。

併し學校教育の必要と云つたやうな事を今更新しく玆で考へ論じて見ようといふのではない。唯學校教育を受けるといふ事が丁度案内者に手を引かれて歩くとよく似て居るといふ事をもう少し立入つて考へて見度いだけである。

案内記が詳密で正確であればある程、此れに對する信頼の念が厚ければ厚い程、吾々は安心して岐路に迷ふ事なしに最少限の時間と勞力を費して安全に目的地に到着することが出來る。これに增す難有い事はない。併しそれと同時についその案内記に誌してない横道に隱れた貴重なものを見逃してしまふ機會は甚だ多いに相違ない。さういふ損失をなるべく少くするには、矢張り色々の人の選んだ色々の案内記を弘く參照するといゝ。唯困るのは、既に在る案内記の内容を其儘にいゝ加減に繼ぎ合せてこしらへたやうな案内記の多い事である。此れに反して、寧ろ間違だらけの案内記でも、其れが多少でも著者の體驗を材料にしたものである場合には、存外何かの參考になる事が多い。

併しいくら完全でも結局案内記である。いくら讀んでも諳誦しても、其れだけでは旅行した代りにはならない事は勿論である。

案内記が系統的に完備して居るといふ事と、それが讀む人の感興をひくといふ事とは全然別な事で、寧ろ往々相容れないやうな傾向がある。所謂案内記の無味乾燥なのに反して優れた文學者の自由な紀行文や或は鋭い科學者の纏まらない觀察記は、それが如何に狹い範圍の題材に限られて居ても、其中に躍動して居る活きた體驗から流露する或るものは、直接に讀者の胸に滲み込む、そして假令それが間違つて居る場合でさへも、書いた人の眞を求める魂だけは力強く讀者に訴へ、讀者自身の胸裡にある同じやうなものに火をつける。さうして誌された内容とは無關係に其處に取扱はれて居る土地其者に對する興味と愛着を呼び起す。

專門の學術の參考書でもよく似た事がある。何か或る題目に關して廣く文獻を調べようといふ場合には、色々なエンチクロペディやハンドブーフと云ふ種類のものはなくてならない重寶なものであるが、少し立ち入つて本當の事が知り度くなれば、もうそんなものは役に立たない。つまりは個々のオリヂナルの論文や著書を見なければならない。それで此のやうな參照用の大部なものを、骨折つて初めから終り迄漫然と讀み通し諳誦したところで、既に何等かの一題目を持つて居ない學生に取つては極めて效果の薄い骨折損になり易いものである。又此んなものから題目を選み出すといふ事も、出來さうで出來ないものである。此れに反して個々の研究者の直接の體驗を記述した論文や著書には、假令其の題材が何であつても、其中に何かしら活きて動いて居るものがあつて、そこから受ける暗示は讀む人の自發的な活動を誘發する或る不思議な魔力をもつて居る。さうして讀者自身の研究心を強く喚び醒す。かういふ意味からでも、自分の專門以外の題目に關するいゝ論文などを讀むのは決して無益な事ではない。

それで案内記ばかりに賴つて居ては何時迄も自分の眼はあかないが、さうかと云つてまるで案内記を無視して居ると、時々道に迷つたり、事によると瀧壺や火口に落ちる恐れがある。此れは分り切つた事であるが、其れに拘らず教科書とノートばかりを賴りにする學生が可也多數である一方には、又現代既成の科學を無視した爲に、折角いゝ考はもち乍ら結局失敗する發明家や發見者も時々出て來る。

＊　＊　＊　＊　＊

名所舊跡の案内者の一番困るのは何か少し餘計なものを見ようとすると No time, Sir！な

どと云つて引立てる事である。しかし此れも時間の制限があつて見れば無理もない事である。それで本當に自分で見物するには、もう一遍獨りで出直さなければならない事になる。唯其時に、例の案内者が「邪魔」をしてくれさへしなければいゝ。

しかし案内者や先達の中には、自己のオーソリテイに對する信念から割出された親切から、個々の旅行者の自由な觀照を抑制する者もないとは云はれない。旅行者が特別な興味をもつ對象の前に暫く歩を止めようとするのを、そんなものはつまらないから見るのぢやないと世話をやく場合もある。つまるとつまらないとが明かに「相對的」のものである場合には此れは困る。案内者が善意であるだけに一層困る譯である。此種の案内者は其の專門の領域が狹ければ狹い程多いやうに見えるが、此れは無理もない事である。自分の「お山」以外のものは皆つまらなく見えるからである。

一方で案内者の方から云ふと、其の率ゐて居る被案内者から餘りに信頼され過ぎて困る場合も隨分あり得る。何處迄も忠實に附從して來るはいゝとしても、眞逆に手洗所迄ものそ〳〵ついて來られては迷惑を感じるに相違ない。

ニュートンの光學が波動説の普及を妨げたとか、ラプラスの權威が熱の機械論の發達に邪魔になつたとかいふ事はよく耳にする事である。或る意味では確にさうかも知れない。しかし此の全責任を負はされては此等の大家達は恐らく泉下に瞑する事が出來まい。少くも責任の半分以上は彼等のオーソリテイに盲從した後進の學徒に歸せなければなるまい。近頃相對原理の發見に際して又々ニュートンが引合に出され、彼の絕對論が屢々俎の上に載せられて居る。此れは當然の事としても、それが爲にニュートンを罪人呼ばはりするのは餘りに不公平である。罪人はもつと〳〵外に澤山ある。云はゞニュートンは眞理の殿堂の第一の扉を開いただけで逝いてしまつた。彼の被案内者は第一室の壯麗に醉はされて其奥に第二室のある事を考へるものは稀であつた。つい近頃にアインシュタインが突然第二の扉を蹴開いて其處に玲瓏たる幾何學的宇宙の宮殿を發見した。しかし第一の扉を通過しないで第二の扉に達し得られたかどうかは疑問である。

此次の第三の扉は何處にあるだらう。此れは吾々には全然豫想もつかない。併し其の未知の扉にぶつかつて此れを開く人があるとすれば其人は矢張り案内者などの厄介にならない風來の田舍者でなければならない。第三の扉の事は如何に權威ある案内記にも誌してないのである。

＊　＊　＊　＊

想ふにうつかり案内者などになるのは考へものである。黒谷や金閣寺の案内の小僧でも初めてあの建築や古器物に接した時には恐らく樣々な深い感興に動かされたに相違ない。それが每日同じ事を繰返して居る間にあらゆる興味は蒸發してしまつて、すつかり口上を諳記する頃には、品物自身はもう頭の中から消えてなくなる。殘るものは唯「言葉」だけになる。眼は其の言葉に蔽はれて「物」を見なくなる。さうして丹波の山奥から出て來た觀覽者の眼に映るやうな美しい影像はもう再び認める時はなくなつてしまふ。これは實に其人にとつては取返しのつかない損失でなければならない。

此のやうな人は、單に自分の擔任の建築や美術品のみならず、他の同種のものに對しても無感覺になる恐れがある。例へば他所の寺で狩野永德の筆を見せられた時に「狩野永德の筆」といふ聲が直ちに此人の眼を蔽ひ隱して、眼前の繪の代りに自分の頭の中に沈着して黴の生えた自分の寺の繪の像のみが照し出される。假令そ

の頭の中の繪が如何に立派でも此れでは困る。手を觸れるものがみんな黄金になるのでは餓死する外はない。

職業的案内者が、此のやうな不幸な境界に陷らぬ爲には絶えざる努力が必要である。自分の日々説明して居る物を絶えず新しい眼で見直して二日に一度或は一月に一度でも何かしら今迄見出さなかつた新しいものを見出す事が必要である。其れには勿論異常な努力が必要であるが、さういふ努力は苦しい。それをしなくても今日には困らない。そこに案内者のはまり易い「洞窟」がある。

ニュールンベルグの古城で、其處に蒐集された昔の物凄い刑具の類を見物した事がある。名高い「鐵の處女」の前で説明をして居た案内者は未だうら若い女であつた。一體に病身らしくて顔色も惡く、何となく陰氣な容貌をして居た。見物人中の學生風の男が、「失禮ですが、貴孃は毎日何遍となく、そんな恐ろしい事柄を口にして居る、それで神經をいためるやうな事はありませんか」と聞くと、何とも返事しないで唯音を立てて息を吸ひ込んで、暗い顔をして眼を伏せた。私は隨分殘酷な質問をするものだと思つて餘りいゝ氣持はしなかつた。恐らく此の女も毎日自分の繰返して居る言葉の内容には疾に無感覺になつて居たのだらう。それが此の無遠慮な男の質問で初めて忘れて居た内容の恐ろしさと、それを繰返す自分の職業の不快さを思ひ出させられたのではあるまいか。

此れと場合はちがふが、吾々は子供などに科學上の知識を教へて居る時に、屢々自分が何の氣も付かずに云つて居る常套の事柄の奥の深みに隱れた或るものを指摘されて、職業科學者の弱點を際どく射通される思ひがする事はないでもない。案内者になる人は餘程氣を付けねばならないと思ふ。

＊　＊　＊　＊　＊

ナポリを見物に行つた序に、程遠からぬポツオリの舊火口と其中にある噴氣口を見に行つた。電車を下りてベデカを頼りに尋ねて行かうとすると、すぐに一人の案内者が追ひすがつて來て頻りにすゝめる。まだ三十にならないかと思はれる餘り人相のよくない男である。てんで相手にしない積りで居たが何處迄も根氣よくついて來て、そして息を切らせながらしつこく同じ事を繰返して居る。其れを叱りつけるだけの勇氣のない私は、結局其の五月蠅さを免れる唯一の方法として彼の意に從ふ外はなかつた。其の結果は豫想の通り甚だ惡かつた。初め定めた案内料の外に、色々の口實で少しづつ金を取り上げられて、そして案内者を雇つただけの效能は殆んどなかつた。唯一つの面白かつたのは麻絲か何かの束を黄蠟で固めた松明を買はされて持つて行つたが、噴氣口の傍へ來ると案内者は其れに點火して穴の上で振り廻した。そして「蒸氣の噴出が増したから見ろ」と云ふのだが、私には一向何の變りもないやうに思はれた。すると彼は、其處とは大分離れた後方の火口壁の處々に立上る蒸氣を指して「あの通りだ」といふ。しかし松明を振る前にはそれが出て居なかつたのか、又どれ位出て居たのか、丸で私は知らなかつたのだから、結局此の松明の實驗は全然無意味なものに終つてしまつた。併しさういふ飛びはなれた非科學的の「實驗」が恐らく毎日此處で行はれて、そして見物人の幾割かはそれで納得するものだとすると、さういふ事自身が可也興味のある事だと思はれた。

知識の案内者と呼ばれ、權威と呼ばれる人には流石にこんな人は無い筈である。其れでは被案内者が承知しない。併し名を科學に借りて專門知識のない一般公衆の眼を眩ますやうな非科學的實驗を行つた者が西洋には昔から隨

分あつた。そのやうな場合には、殆んどきまつて、平生科學に對して反感のやうなものをもつて居る一群の公衆、殊に新聞などによつて既成科學の權威が疑はれ、そのやうな「發見」に冷淡な學者が攻擊される。併し科學者としては事柄の可能不可能や蓋然性の多少を既成科學の系統に照して妥當に判斷を下す外はないので、もし萬に一つ其の判斷が外れゝば、それは眞に新しい發見であつて科學は其爲に著しい進歩をする。しかし其のやうな場合があつても、判斷が外れた事は必ずしも其の科學者の科學者としての恥辱にはならない。其の場合には要するに科學が一歩を進めたといふ事になる。さういふ風にして進歩するのが科學ではあるまいか。寧ろ見當の外れる方が科學者として妥當である場合がないでもない。

　此のやうな場合は別として、純粹な眞面目な科學者でも、やはり人間である限り千慮の一失がないとは限らない。そして不知不識にポツォリの松明に類した實驗や理論を人に示さないとは限らない。

　グラハムが發電機を作つた時は當時の大家某は一論文を書いて、そのやうな事が不可能だといふ「證明」をした。其れに拘らずグラハムの器械からは電流が遠慮なく流出した。其後に此の器械から電流の生ずるといふ方の證明が段々現はれて來たといふ話を何かで讀んだ事がある。しかし其の大家の論文をよく讀んで見なければうつかり其人の非難は出來ない。

　ヘルムホルツが『人間が鳥と同じやうにして空を翔る事は出來ない』と云つたのに、現に飛行機が出來たではないかといふ人があらばそれは見當ちがひの辯難である。現在でも將來でも鳥のやうに翼を自分の力で動かして、唯それだけで鳥のやうに翔る事は出來はしない。

　凡ての案内者も時々此れに類した誤解から起る非難を受ける恐れのある事を覺悟しなければならない。例へば、案内者が『此河を渡る橋がない』と云ふ意味で、渡れないと云つたのを、船で渡つておいて、『此通り渡れるではないか』と云はれるのはどうも仕方がない。此等は恐らくどちらも惡いかどちらも惡くないかである。意志が疏通しないから起る誤解である。

　併しあらゆる誤解を豫想して此れに備へる事は神樣でなければ六ケしい。此處にも案内者と被案内者の困難がある。

＊　＊　＊　＊　＊

　私の厄介になつたポツオリの案内者は別れ際に更に餘分の酒代をねだつて氣永く附き纏つて來た。それを我慢して相手にしないで居たら、最後の捨言葉に、『日本人はもつとゼントルマンかと思つた』と云ふから、私も『伊太利人はもつとゼントルマンかと思つた』と答へて、それ切り永久に別れてしまつた。私も少し惡かつたやうである。併しこんなのは流石に知識の案内者にはない。

＊　＊　＊　＊　＊

　考へて見ると案内者になるのも被案内者になるのも中々容易ではない。凡ての困難は「案内者は結局案内者である」といふ自明的な道理を忘れ易いから起るのではあるまいか。

　景色や科學的知識の案内では此樣な困難がある。もつとちがつた色々の精神的方面ではどんなものであらうか。此方には更に甚しい困難があるかも知れないが、或は事によると却つて事柄が簡單になるかも知れない。其處には「信仰」や「愛情」のやうなものが入り込んで來るからである。併しさうなるともう私が玆に云つて居る唯の「案内者」ではなくなつてそれは「師」となり「友」となる。師や友に導かれて誤つて曠野の道に迷つても怨はない筈ではあるまいか。

斷水の日

十二月八日の晩に可也強い地震があつた。それは私が東京に住ふやうになつて以來覺えない位強いものであつた。振動週期の短い主要動の初めの部分に次いでやつて來る緩漫な波動が明かに身體に感ぜられるのでも、此の地震が餘り小さなものではないと思はれた。此れ位のならあとから來る餘震が相當に頻繁に感じられるだらうと思つて居ると、果して可也鮮明なのが相次いでやつて來た。

山の手の、地盤の固い此邊の平家で此れ位だから、神田邊の地盤の弱い處では壁がこぼれる位の處はあつたかも知れないといふやうな事を話しながら寝てしまつた。

翌朝の新聞で見ると實際下町では庇の瓦が落ちた家もあつた位で、先づ明治二十八年來の地震だといふ事であつた。そして其日の夕刊に淀橋近くの水道の溝渠が崩れて附近が洪水のやうになり、其爲に東京全市が斷水に遇ふ恐れがあるので、今大急ぎで應急工事をやつて居るといふ記事が出た。

偶然其日の夕飯の膳で私達はエレベーターの話をして居た。あれを吊してある鋼條が切れる心配はないかといふやうな質問が子供のうちから出たので、私は其のやうな事のあつた實例を話し、それからさういふ危險を防止する爲に鋼條の弱點の有無を電磁作用で不斷に檢査する器械の發明されて居る事も話しなどした。其れを話しながらも、又話した後でも、私の頭の奥の方で、現代文明の生んだあらゆる施設の保存期限が經過した後に起るべき種々な困難がぼんやり意識されて居た。此れは昔天が落ちて來はしないかと心配した杞の國の人の取越苦勞とはちがつて、餘りに明白過ぎる程明白な、有限な未來に來るべき當然の事實である。例へば稍大きな地震があつた場合に都市の水道や瓦斯が駄目になるといふやうな事は、初めから明かに分つて居るが、又不思議に皆がいつでも忘れて居る事實である。

それで食後に此の夕刊の記事を讀んだ時に、何となしに變な氣持がした。今のついさきに思つた事と餘りによく適應したからである。

それにしても、その程度の地震で、そればかりで、あの種類の構造物が崩壞するのは少しをかしいと思つたが、新聞の記事をよく讀んで見ると、可也以前から多少龜裂でもはひつて弱點のあつたのが、地震の爲に一度に片付いてしまつたのであるらしい。そのやうな龜裂の入つたのはどういふ譯だか、例へば地盤の狂ひと云つたやうな不可抗の理由によるのか、それとも工事が元來餘り完全でなかつた爲だか、そんな事は今の處誰れにも分らない問題であるらしい。

それはいづれにしても、かういふ困難は何時かは起るべき筈のもので、此れに對する應急の處置や設備は豫め十分に研究されてあり、又其のやうな應急工事の材料や手順はちやんと定められて居た事であらうと思つて安心して居た。

十日は終日雨が降つた、其爲に工事が妨げられもしたさうで、とう〳〵十一日は全市斷水といふ事になつた。隨分困つた人が多かつたには相違ないが、それでも私のうちでは幸ひに隣りの井戸が借りられるので大した不便はなかつた。晝頃用があつて花屋へ行つて見たら凡ての

花は水々して居た。晝過ぎに、遠くない近所に火事があつたがそれも間もなく消えた。夕刊を見ながら私は斷水の不平よりは寧ろ修繕工事を不眠不休で監督して居る所謂責任のある當局の人達の心持を想像して、此れも氣の毒でたまらないやうな氣もした。

此のやうな事のある一方で、私の宅の客間の電燈をつけたり消したりする爲に壁に取りつけてあるスヰッチが破損して、明りがつかなくなつてしまつた。電燈會社の出張所へ掛け合つて見たが、會社專用のスヰッチでなくて、式のちがつたのだから、こちらで買つてからでないと附け換へてくれない。それで已むを得ず私は道具箱の中から銅線の切れはしを捜し出して、兎も角も應急の修理を自分でやつて、其夜はどうにか間に合せた。其時に調べて見るとぼたんを押した時に電路を閉ぢるべき銅板のばねの片方の翼が根元から折れてしまつて居たのである。

實は餘程前に、便所に取附けてある同じ型のスヰッチが、矢張り同じ局部の破損の爲に役に立たなくなつて、此れも其の當座、自分で間に合せの修理をしたまゝで、つい其れなりにして置いたのである。取附けてから未だ三年にもならないうちに、二個までも同じ部分が破損する處を見ると、此のスヰッチのこしらへ方は餘りよくないと云はなければならない。もう少し作り方なり材料なりを親切に研究したのなら、此れ程脆く出來る筈はないだらうと思はれた。銅板を曲げた角の處にはどの道可也無理がいつて居るから、あとで適當にたますとか、或は使用のたびに其處に無理が繰返されないやうに構造の方を工夫するとか、何とかして欲しいものだと思つた。

水道の斷水とスヰッチの故障との偶然な合致から、私は色々の日本で出來る日用品について平生から不滿に思つて居た事を一度に思ひ出させられるやうな心持になつて來た。

第一に思ひ出したのが呼鈴の事であつた。今の住居に移つた際に、近所の電氣屋さんに賴んで、玄關や客間の呼鈴を取附けて貰つた。處が、其れがどうも故障が多くて鳴らぬ勝ちである。電池が惡いかと思つて取換へてもすぐいけなくなる。よく調べて見ると、銅線の接合した處はハンダ附けもしないでテープも卷かずに一寸ねぢり合せてあるのだが、それが臺所の戸棚の中などにあるから眞黑く錆びてしまつて居る。其れを磨いて繼ぎ直したらいくらかよくなつたが、又直にいけなくなる。段々に吟味して見ると電鈴自身の拵へ方がどうしても本當でならしい。本當なら白金か何か酸化しない金屬を付けて置くべき接觸點がニッケル位で出來て居るので、少し火花が出るとすぐに電氣を通さなくなるらしい。時々其處をゴリ〳〵すり合せるとうまく鳴るが、毎日忘れずに其れをやるのは厄介である。此れは一體コイルの卷數や銅線の大きさなどが全くいゝ加減に出來て居て、無暗に強い電流が流れるからと思はれる。それだから一寸やつて見る試驗には通過しても、永い使用には堪へないやうに初めから出來て居る。それを二年も三年も使はうといふ方が無理だといふことが分つた。そして隨分不愉快な氣がした。かういふものが平氣に市場に出て居て、誰れでもがそれを甘んじて使つて居るかと思ふのが不愉快であつた。併しまさか此んな僞物許りもあるまいと思つて、試に銀座の或る信用ある店でよく聞訊した上で買つて來たのを附け換へたら、今度は先づいゝやうである。序に導線の接合をすつかりハンダで附けさせようと思つたが、前の電氣屋は疾の昔何處かへ引越して居なくなつたし、別のに賴んでみると面倒臭がつて、そしてハンダ附けなど必要はないと云つ

て中々やつてはくれない。

少々價は高くとも永い使用に堪へる本當のものが欲しいと思つても、そんなものは今の市場では中々容易には得られない。例へばプラチナを使つた呼鈴などは、高くて誰れも買人はないさうである。此れは實際それ程必要ではないかも知れないが、プラチナを使はないなら使はなくても好いだけに外の部分の設計が出來て居ないのはどうも困る。

私の頼んだ電氣屋が偶然最惡のものであつたかも知れないが、方々に鳴らない玄關の呼鈴が珍しくない處から見ると、私と同じ場合は可也に多いかも知れない。

若しこんな電氣屋が榮え、こんな呼鈴がよく賣れるとすると、其の責任の半分位は、餘りに大人しくあきらめのいゝ使用者の側にもありはしまいか。

呼鈴に限らず、多くの日本製の理化學的器械に就いて、よく似た事に幾度出逢つたか分らない位である。例へば玩具のモートルを店屋で一寸やつて見る時はよく廻るが、買つて來て五分もやればブラシの處がやけてもういけなくなる。

蓄音機の中の齒車でもぢきにいけなくなるのがある。此れは齒車の面の曲率などがいゝ加減な爲だか、材料が惡い爲だか分らない。恐らく兩方かもしれない。

此のやうな似て非なるものを製する人の中には、西洋で出來た品を大體の外形だけ見て、唯いゝ加減にこしらへればそれでいゝものだと思つて居るのが或はありはしまいか。或人の話では電氣の絶緣の爲にエボナイトを使つてある筈の所を眞鍮で作つて、黑く色だけをつけておいた器械屋があるといふ。これは恐らく唯の話かも知れない。併しそれと五十歩百歩のいゝ加減さは到る處にあるかも知れない。

五十年前に父が買つた舶來のペンナイフは、今でも砥石をあてないでよく切れるのに、私が此間買つた本邦製のはもう刃がつぶれてしまつた。古ぼけた前世紀の八角の安時計が時を保つのに、大正出來の光る置時計の中には、年中直しにやらなければならないのがある。

凡てのものが唯外見だけの間に合せもので、本當に根本の研究を經て來たものでないとすると、實際吾々は心細くなる。質の研究の出來て居ない鈍刀はいくら光つて居ても恰好がよく出來て居ても、眞逆の場合に正宗の代りにならない。

品物に就いて私の今云つたやうな事が知識や思想に就いても云はれ得るといふやうな事にでもなると、いよ〳〵心細くなる譯であるが、さういふ心配が全くないとも云はれないやうな氣がする。

水道の止まつた日の午頃、緣側の日向で子供が繪端書を並べて遊んで居た。其の繪端書の中に天文や地文に關する圖解や寫眞をコロタイプで印刷した一組のものが眼についた。取上げてよく見ると、それは隨分非科學的な、そして見る人に間違つた印象や知識を與へるものであつた。就中月の表面の凹凸の模様を示すものや太陽の黑點や紅焰やコロナを描いたものなどは丸で譃だらけなものであつた。例へば妙な紅焰が變に尖つた太陽の緣に突出して居る處などは「離れ小島の椰子の樹」とでも云ひ度かつた。

科學の通俗化といふ事の奬勵されるのは誠に結構な事であるが、かういふ風に墮落して迄通俗化されなければならないだらうかと思つて見た。科學其物の面白味は「眞」といふものに附隨して居るから、之れを知らせる場合に、非科學的な第二義的興味の爲に肝心の眞を犧牲にしてはならない筈である。併し實際の科學の通

俗的解說には、やゝもすると本當の科學的興味は閑却されて、不妥當な譬喩やアナロヂーの見當違ひな興味が高調され易いのは惜しい事である。さうなつては科學の方は借りもので、結果は唯誤つた知識と印象を傳へるばかりである。私は本當に科學を通俗化するといふ事は餘程優れた第一流の科學者にして初めて出來得る事としか思はれないのに、事實は之れと反對な傾向のあるのを殘念に思ふ。

此のやうにして普及された間に合せの科學的知識を賴りにして居る不安さは、不完全な水道をあてにして居る市民の不安さに比べてどちらとも云はれないと思つた。そして不愉快な日の不愉快さをもう一つ附加へられるやうな氣がした。

水道がこんな工合だと、うちでも一つ井戶を掘らなければなるまいといふ提議が夕飯の膳で持ち出された。併し恐らく此際同じやうな事を考へる人も多數にあるだらう、從つて當分は井戶掘の威勢が强くてとても吾々の處へは手が廻らないかも知れないといふ說も出た。

こんな話をして居る內にも私の聯想は妙な方へ飛んで、歐洲大戰當時に從來獨逸から輸入を仰いで居た藥品や染料が來なくなり、學術上の雜誌や書籍が來なくなつて困つた事を思ひ出した。そして獨逸自身も第一に智利硝石の供給が斷えて困るのを、空氣の中の窒素を採つて來てどしどし火藥を作り出したあざやかな手際をも思ひ出した。

そして、どうしても矢張り、家庭でも國民でも「自分のうちの井戶」がなくては安心が出來ないといふ結論に落ちて行くのであつた。

翌日も水道はよく出なかつた。そして新聞を見ると、此間出來上つたばかりの銀座通りの木煉瓦が雨で浮き上つて破損したといふ記事が出て居た。多くの新聞は此れと斷水とを一處にして市當局の責任を問ふやうな口調を漏らして居た。私は其れ等の記事を尤もと思ふと同時に又當局者の心持も思つて見た。

水道にせよ木煉瓦にせよ、つまりはさういふ構造物の科學的硏究がもう少し根本的に行き屆いて居て、あらゆる可能な障害に對する豫防や注意が明白に分つて居て、そして材料の質や其の構造の弱點などに關する段階的系統的の檢定を經た上でなければ、誰れも容認しない事になつて居たのならば、恐らく此れ程の事はあるまいと思はれる。

永い使用に堪へない間に合せの器物が市場に蔓り、安全に對する科學的保證の附いて居ない公共構造物が到る處に存在するとすれば、其の責を負ふべきものは必ずしも製造者や當局者ばかりではない。

もしも需要者の方で粗製品を相手にしなければ、そんなものは自然に影を隱してしまふだらう。そして誤魔化しでないほんものが取つて代るに相違ない。

構造物の材料や構造物に對する檢査の方法が完成して居れば、性の惡い請負師でも手を拔く隙がありさうもない。さういふ檢定方法は切實な要求さへあらばいくらでも出來る筈であるのに、それが實際には出來て居ないとすれば、其の責任の半分は無檢定のものに信賴する世間にもないとは云はれないやうな氣がする。

私が斷水の日に經驗したいろいろな不便や不愉快の原因を段々探つて行くと、どうしても今の日本に於ける科學の應用の不徹底であり、表面的であるといふ事に歸着して行くやうな氣がする。此のやうな障害の根を絕つ爲には、一般の世間が平素から科學知識の水準をずつと高めて贋物と本物とを鑑別する眼を肥やし、そして本物を尊重し贋物を排斥するやうな風習を養ふのが一番近道で有效ではないかと思つて見た。

さういふ事が不可能ではない事は、日本以外の文明國の實例が、此れを證明して居るやうに見える。

此んな事を考へて居ると吾々の周圍の文明といふものが段々心細く頼りないものに思はれて來た。何だか炬燵を抱いて氷の上に坐つて居るやうな心持がする。そして不平を云ひ人を責める前に、吾々自身がもう少しいゝ加減しなくてはいけないといふ氣がして來た。

＊　＊　＊　＊　＊

斷水は未だ何時迄續くか分らないさうである。

どうしても「うちの井戸」を掘る事にきめる外はない。

蓑蟲と蜘蛛

二階の縁側の硝子戸のすぐ前に大きな楓が空一杯に枝を擴げて居る。其枝に澤山な蓑蟲がぶら下つて居る。

去年の夏中は此蟲が盛に活動して居た。いつも午頃になると這ひ出して、小枝のさきの青葉をたぐり寄せては喰つて居た。身體の割に旺盛な彼等の食慾は、多數の小枝を坊主にしてしまふまでは滿足されなかつた。紅葉が美しくなる頃には、もう活動はしなかつたやうである。兎に角私は日々に變つて行く葉の色彩に注意を奪はれて、しばらく蓑蟲の存在などは忘れて居た。

併し紅葉が干からび縮れてやがて散つて仕舞ふと、裸になつた梢にぶら下つて居る多數の蓑蟲が急に眼立つて來た。大きいのや小さいのや、長い小枝を杖のやうにさげたのや、枯葉を一枚肩に羽織つたのや、いろ〳〵さま〴〵の恰好をしたのが、明るい空に對して黒く浮き出して見えた。それが其日〳〵の風に吹かれてゆらいで居た。

かよわい絲で吊されて居るやうに見えるが、如何なる木枯にも決して吹き落されない程しつかり取り付いて居るのであつた。縁側から箒のさきなどではね落さうとしたが、そんな事では中々落ちさうもなかつた。

自分は冬中此の死んで居るか生きて居るかも分らない蟲の外殼の鈴成りになつて居るのを眺めて暮して來た。そして自分自身の生活がなんだか此蟲のによく似て居るやうな氣のする時もあつた。

春がやつて來た。今迄灰色や土色をして居たあらゆる落葉樹の梢には何時となしにぽうつと赤味がさして來た。鼻のさきの例の楓の小枝の尖端も一つ〳〵膨らみを帶びて來て、それが丁度ガーネットのやうな光澤をして輝き始めた。私はそれがやがて若葉になる時の事を考へて居る内に、それ迄に此の蓑蟲を驅除して置く必要を感じて來た。

多分だめだらうとは思つたが、試に物干竿の長いのを持つて來て、たゝき落し、はね落さうとした。しかしやつぱり無效であつた。はねる度にあの紡錘形の袋はプロペラーのやうに空中に輪をかいて廻轉するだけであつた。惡くすると小枝を折り若芽を傷つけるばかりである。

今度は小さな鋏を出して來て竿の先に縛りつけた。それは數年前に流行した十幾通りの使ひ方のあるといふ西洋鋏である。自分は今其の十幾種の外のもう一つの使ひ方をしようといふのであつた。鋏の發明者も、よもや此れが蓑蟲を取る爲に使はれようとは思はなかつたらう。鋏の先を半ば開いた形で、竿の先に縛り付けた。圓滑な竹の肌と、ニッケル鍍金の鋏の柄とを縛り合せるのは餘り容易ではなかつた。

ぶら〳〵する竿の先を、狙ひ定めて蟲の方へ持つて行つた。そして開いた鋏の刃の間に蟲の袋の口に近い處を喰ひ込ませておいてそつと下から突き上げると、案外にうまくちぎれるのであつた。それでも可也に強い抵抗の爲に細長い竿は弓状に曲る事もあつた。幸に枝を傷つけないで袋だけをむしり取る事が出來たのである。

或るものは枝を離れると同時に鋏を離れて落ちて來た。しかし又或るものは鋏の間に固く喰ひ込んでしまつた。初めから面白がつて見て居

た子供等は、落ちて來るのを拾ひ、鋏に插まつたのを外したりした。二人の子が順番で交る交る取るのであつたが、年上の方は蟲に手を付けるのを厭がつて小さなショベルですくつてはジャムの空罐へはふり込んで居た。小さい妹の方は却つて平氣で指でつまんで筆入れの箱の上に並べて居た。

庭の楓のはあらかた取り盡して、他の樹のもあさつて歩いた。結局數へて見たら、大小取り交ぜて四十九個あつた。ジャムの空罐一つと筆入れは丁度一杯になつた。それを一遍庭の芝生の上にぶちまけて並べて見た。

一つ／＼の蟲の外殼には矢張りそれ／＼の個性があつた。割に大きく長い枯枝の片を並べたのが大多數であるが、中には殆んど目立つ程の枝片は附けないで、澁紙のやうな肌をして居るのもあつた。えにしだの豆の莢をうまくつなぎ合せて居るのもあつて、此れがのそ／＼這つて歩いて居た時の滑稽な樣子が自ら想像された。

就中大きなのを選んで袋を切り開き、蟲がどうなつて居るかを見たいと思つた。竿の先の鋏を外して袋の兩端から少しづつ蟲を傷つけないやうに注意しながら切つて行つた。袋の纎維は中々強靭であるので鈍い鋏の刃は屢々切り損じて上滑りをした。やつと取り出した蟲は可也大きなものであつた、紫黑色の肌がはち切れさうに肥つて居て、大きな貪慾さうな口嘴は褐色に光つて居た。袋の暗闇から急に強烈な春の日光に照されて蟲のからだにどんな變化が起つて居るか、それは人間には想像も付かないが、なんだか醉つてでも居るやうに、或は未だ永い眠りがさめ切らないやうに懶氣に八對の足を動かして居た。芝生の上に置いてもとの古巢の空き殼を頭の處におつつけてやつても、最早それを忘れてしまつたのか、這ひ込むだけの力がないのか、もうそれ切り身體を動かさないでぢつとして居た。

もう一つのを開いて見ると、それは身體の下半が干すばつて舍利になつて居た。蠶にあるやうな病菌が矢張り此蟲の世界にも入り込んで自然の制裁を行つて居るのかと想像された。しかし蓑蟲の恐ろしい敵は未だ外にあつた。

澤山の袋を外からつまんで見て居るうちに、中空で蟲の御留守になつて居るのが可也多くのパーセントを占めて居るのに氣が付いた。よく見て居ると、そのやうなのに限つて袋の橫腹に直徑一粍かそこらの小さい孔がある事を發見した。變だと思つて鋏で其の一つを切り破つて行く中に、袋の中から思ひがけなく小さい蜘蛛が一疋飛び出して來て慌しく何處かへ逃げ去つた。ちらりと見ただけであるが、それは薄い紫色をした可愛らしい小蜘蛛であつた。

此の意外な空巢の占有者を見た時に、私の頭に一つの恐ろしい考が電光のやうに閃いた。それで急いで袋を縱に切り開いて見ると、果して袋の底に滓のやうになつた蓑蟲の遺骸の片々が殘つて居た。あの肥大な蟲の汁氣といふ汁氣は悉く吸ひ盡され嘗め盡されて、唯一つまみの灰殼のやうなものしか殘つて居なかつた。唯あの堅い褐色の口嘴だけは其儘の形を留めて居た。それはなんだか兜の鉢のやうな恰好にも見られた。灰色の壙穴の底に朽ち殘つた戰衣の屑といつたやうな氣もした。

此の恐ろしい敵は、蓑蟲の難攻不落と賴む外廓の壁上を忍び足で這ひ歩くに相違ない。そして僅な弱點を搜しあてて、其處に鋭い毒牙を働かせ始める。壁がやがて破れたと思ふと、もう蓑蟲の脇腹に一滴の毒液が注射されるのであらう。

人間ならば、來年の夏の青葉の夢でも見ながら、安樂な眠りに包まれて居る最中に、突然脇

腹を喰ひ破る狼の牙を感じるやうなものである。此れを拂ひのける爲には蓑蟲の足は全く無能である。唯一の武器とする吻を使はうとすると餘りに窮屈な自分の家は身體を曲げる事を許さない。最後の苦惱に藻搔くだけの餘裕さへもない。生物の間に行はれる殺戮の中でも、此れは恐らく最も殘酷なものの一つに相違ない。全く無抵抗な狀態に於て、そして苦痛を表現する事すら許されないで、一分だめしに殺されるのである。

蟲の肥大な身體は其の十分の一にも足りない小さな蜘蛛の腹の中に消えてしまつて居る。殘つたものは僅な外皮の屑と、そして依然として小さい蜘蛛一疋の「生命」である。差引きした殘りの「物質」はどうなつたか分らない。

蓑蟲が繁殖しようとする處には自ら此の蜘蛛が繁殖して、其處に自然の調節が行はれて居るのであつた。私が蓑蟲を驅除しなければ、今に楓の葉は喰ひ盡されるだらうと思つたのは、餘りに淺墓な人間の自負心であつた。寧ろ唯其儘にもう少し放置して自然の機巧を傍觀した方がよかつたやうに思はれて來たのである。蓑蟲にはどうする事も出來ない此の蜘蛛にも、又相當の敵があるに相違ない。「昆蟲の生活」といふ書物を讀んだ時に、地蟻の或るものが蜘蛛を攻擊して、其の毒針を正確に蜘蛛の胸の一局部に刺し通して此れを痲痺させるといふ記事があつた。痲痺した蜘蛛の脇腹に蜂は一つの卵を生みつけて行く。卵から出た幼蟲は親の据膳をして置いてくれた佳肴を貪り食うて生長する、十分飽食して眠つて居る間に幼蟲の單純な身體に複雜な變化が起つて、今度眼を覺すともう一人前の蜂になつて居るといふのである。

或る蜘蛛が、或蛾の幼蟲である處の蓑蟲の胸に喰ひついて居る一方では、蓑蟲のやうな形をした或蜂の幼蟲が、他の蜘蛛の腹をしやぶつて居る。此のやうな鬪爭殺戮の世界が、美しい花園や庭の木立の間に行はれて居るのである。人間が國際聯盟の夢を見て居る間に。

或る學者の說によると、動物界が進化の途中で二派に分れ、一方は外皮に硬いキチン質を具へた昆蟲になり、其の最も進歩したものが蜂や蟻である。又他の分派は中心に硬い脊骨が出來て、其の一番發展したのが人間だといふ事である。私には此說がどれだけ本當だか分らない。併しいづれにしても昆蟲の世界に行はれると同じやうな鬪爭の魂があらゆる脊椎動物を傳はつて來て、最後の人間に到つてどんな工合に進化して來たかをつくぐ〜考へて見ると、つまりは吾々の先祖が蓑蟲や蜘蛛の先祖と同じであつてもいゝやうな氣がして來る。

* * * * *

四十九個の紡錘體の始末に困つたが、結局花畑の隅の土を深く掘つて其奧に埋めてしまつた。其中の幾パーセントには、屹度蜘蛛がはひつて居たに相違ない。かうして私の庭での蓑蟲と蜘蛛の歷史は一段落に達した譯である。

併しこれだけでは此の歷史はすみさうに思はれない。私は少なからざる興味と期待をもつて今年の夏を待ち受けて居る。

蓄音機

エヂソンの蓄音機の發明が登錄されたのは一八七七年に、丁度西南戰爭の年であつた。太平洋を距てて起つた此の二つの出來事には何の關係もないやうなものの、我邦の文化發達の歷史を西洋のと引合せて見る時の一つの目標にはなる。のみならず少くとも私には此の偶然の合致が何事かを暗示する象徵のやうにも思はれる。

エヂソンの最初の蓄音機は、音の爲に生じた膜の振動を、圓筒の上に螺旋形に刻んだ溝に張り渡した錫箔の上に印するもので、今から見れば極めて不完全なものであつた。或る母音や子音は明瞭に出ても、例へばSの音などはどうしても再現が出來なかつたさうである。其後にサムナー・テーンターやグラハム・ベル等の研究によつて、錫箔の代りに蠟管を使ふやうになり、更にベルリナーの發明などがあつて今日のグラモフォーン即ち平圓盤蓄音機が出來、今では此れが世界の隅々まで行き渡つて居る。若し誰れか極端に蓄音機の嫌ひな人があつて此の器械の音の聞えない國を搜して步くとしたら、其人は屹度苦々しい幻滅を幾度となく繰返した擧句にすご〲故郷に歸つて來るだらうと思はれる。

蓄音機の改良進步の歷史も面白くない事はないが、私にとつては私自身と蓄音機との交涉の歷史の方がより多く痛切で忘れ難いものである。

西南戰爭に出征して居た父が戰亂平定の後家に歸つた其年の暮に私が生れた。其の私が中學校の三年生か四年生の時であつたから、兎も角も蓄音機が發明されてから十六七年後の話である。或日の朝K市の中學校の掲示場の前に大勢の生徒が集つて、掲示板に現はれた意外な告知を讀んで若い小さな好奇心を動搖させて居た。今度文學士何某といふ人が蓄音機を携へて來縣し、今日午後講堂で其の實驗と說明をするから、生徒一同集合せよといふのであつた。此れは慥に單調で重苦しい學校の空氣を搔き亂して、何處かの隙間から新鮮な風が不時に吹き込んで來たやうたものであつた。生徒の喜んだことはいふ迄もない。面白いものが見られ聞かれて其の上に午後の課業が休みになるのだから、文學士と蓄音機との調和不調和などを考へる暇はない位喜んだに相違ない。其時歡聲をあげた生徒の中に無論私も交つて居た。

校長の紹介で講壇に立つた文學士は堂々たる風采をして居た。頭はいが栗であつたが、其の代りに立派な漆黑なあごひげは敎頭のそれよりも立派であつた。大きな近眼鏡の中からは智慧のありさうな黑い眼が光つて居た。引きしまつた清爽な背廣服も凡ての先生達のよりも立派に見えた。

先づ器械の歷史から、其の原理構造などを明快に說明した後に、いよ〳〵實驗にとりかゝつた時には、異常な緊張が講堂全體に充滿して居た譯である。いよ〳〵蠟管に聲を吹き込む段となつて、文學士は吹き込み喇叭を其の美髯の間に見える紅い脣に押し當てて、器械の制動機をゆるめた。さうして驚くやうな大きな聲で『ターカイヤーマーカーラア、』と歌ひ出した。

私は其の瞬間に經驗した不思議な感じを三十年後の今日でもあり〳〵と其儘に呼び返す事

が出來るやうに思ふ。其の奇妙な感じを完全に分析して說明する事は到底不可能であるが、種々雜多な因子の中には勿論緊張の弛緩から來る純粹な笑もあつた。其處此處に實際クスクス笑ひ出した不謹愼な人もあつたやうであつた。併しそれは必ずしも文學士其人に向けられた笑ばかりでは恐らくなかつたらうと思はれる。此の講堂建設以來此の壇上で發せられた人間の聲の中で、此れ位珍しいものはなかつたに相違ない。忠君愛國仁義禮智などと直接何等の交渉をも持たない「瓜や茄子の花盛り」が高唱され、其終りには彼の全く無意味でそして最も平民的な囃しのリフレインが朗々と附加へられたのである。私は其時何といふ事なしに矛盾不調和を感ずる一方では、又つめたい薄暗い岩室の中にそよ〳〵と一陣の春風が吹き、一道の日光がさし込んだやうな心持もあつた事を自白しなければならない。

吹き込みが終つた文學士は額の汗を押し拭ひながら其の裝置を取り外して、更に發聲用の振動膜と喇叭を取りつけた。器械が動き出すと共に今の歌がそろ〳〵出て來た。それは妙に押しつぶされたやうな鼻聲ではあつたが、兎も角も文學士の特徴ある「ラア、」などの抑揚を可也忠實に再現したので、講堂の中からは自然な感嘆の聲と抑へつけた笑聲とが一時に沸きあがつた。

此の一日の出來事はどういふものか私の中學時代の思ひ出の中に目立つて抜き出た目標の一つになつて居る。一つには此の泰西科學の進歩が齎した驚異の實驗が、私の子供の時から芽を出しかけて居た科學一般に對する愛着の心に強い衝動を與へた爲であらうが、その外にまだ何かしら或る啓示を與へたものがある爲ではないかと思つて居る。私は今でも事にふれて此の文學士の「高い山から」を思ひ出す。あの時にあの罪のない俚謠から流れ出た自由な明るい心持は三十年後の今日迄消えずに殘つて居て、行きづまり勝ちな私の心に有益な轉機を與へ、しやちこ張りたがる氣分にゆとりを與へる。此れは恐らく私の長い學校生活の間に受けた最も難有い教への中の一つではなかつたかと思ふ。業に疲れ生に倦んだ時に私は色々の形式で色々の「高い山」を唱ふ。さうして新しい勇氣と希望を呼び返すのである。

私には可也重大な、併し他人には恐らく下らなく些細な此の經驗を世の教育家達に捧げて何かの參考にして貰ひ度いと思つて居る。

エヂソンの發明から十數年の後に、初めて東洋の田舍の小都會に最新の驚異として迎へられた蓄音機も、いつとはなしに田舍でも餘り珍しいものではなくなつてしまつた。日曜毎にK市の本町通で開かれる市にいつもきまつて出現した、玩具や駄菓子を並べた露店、莚の上に鷄卵や牡丹餅や虎杖や甘蔗等を並べた農婦の賣店などの中に交つて蓄音機屋の店が自らな異彩を放つて居た。

器械から出る音のエネルギーが徒らに空中に飛散して錢を拂はない往來の人に聞える事のないやうに、錢を拂つた花客だけによく聞える爲に、幾對かの護謨管で分配されるやうになつて居た。耳に挿した管を兩手で抑へて首を垂れて熱心に聞いて居る花客を見下すやうにして、口の內で器械の音曲を囁いて居る主人は、狐の毛皮の帽子を被つたりして居た。彼は兎も角も周圍のあらゆる露店の主人に比べては一頭地を拔いた文明の宣傳者ででもあるやうに思はれた。

私は大道の蓄音機を聞いて見度いといふ希望を可なり強くもつて居たに拘らず、とう〳〵一度も聞く事が出來なかつた。私の知つて居る範圍の友達や市民で此の蓄音機の管を耳に插んで

居るのを見かけた事もなかつた。聞いて居るのは殆んど皆田舍の田舍から出て來たらしい最も文明と緣の遠い人達であつた。

大道で蓄音機を聞くといふ事が大して惡い事とは思はれない。林檎を嚙りながら街頭をあるくよりも、環視の中でメリーゴーラウンドに乘るよりも寧ろいゝ事かも知れないのに、何かしらそれを引止める心理作用があつて私の勇氣を沮喪させるのであつた。其の爲に此の文明の利器に親炙する好機會を見す〳〵取り逃しつゝ、そんなこだはりなしに面白さうに聞いて居る田舍の人達を羨まなければならなかつた。此のやうな「薄志弱行」はいつ迄も私の生涯に附纏つて絕えず私に「損」をさせて居る。

大道蓄音機が文化の福音を片田舍に擴めた事は疑ひもないが、同時にあの耳に插む管の端が耳の病氣を傳播させはしなかつたかと心配する。今ならばフォルマリンか何かで消毒するだらうが、あの頃さういふ衞生上の注意が行き屆いて居たかどうか疑はしい。併し今日でも文化の輸入傳播に附いて來る種々な害毒が可也激烈で、しかもそれを防ぐ事が出來ないのであるから、耳の病氣位は已むを得ない事であつたかも知れない。

改良を加へた蠟管蓄音機を聞き損つた私は、音色の再現がどの位迄完全に行つたかを經驗する事が出來なかつた。しかし可也迄完成に近づいて居たには相違ない。種々な樂器の音や特に昔から問題となつて居る人聲母音の組成要素を分析し研究するに適當な材料として此の蠟管記錄が種々に利用された。蠟管に刻まれた微細な凹凸を巧妙な仕掛けで廓大した曲線を調和分析にかけて組成因子の間の關係を調べたりして、聲音學上の知識に貢獻した事も少くない。此種の研究は平圓盤の發明によつて非常な進捗を遂げた事はいふ迄もない。蠟管記錄の壽命はせい〴〵千回位であるのに平面盤の原型の壽命は殆んど永久であると云つてもよい。それで例へば現在の或る國語の發音を記錄して置いて百年千年萬年の後のものと比較して其の變遷を調べる事も出來るので、實際さういふ目的で保存されて居る記錄がウインナにあると聞いて居る。

平圓盤によつて行はれた聲音學上の實驗的研究も澤山にあつて、今でも續いて熱心な學者が此れを追究して居る。カルソーの母音の中の微妙な變化やテトラッチニの極度の高音やが分析の俎板に載せられて居る。それにも拘らず母音の組成に關する祕密は未だ完全に明かにはならない。ヘルムホルツ・ヘルマン以來の論爭は未だ解決したとは云はれないやうである。此のやうな方面にはまだ澤山の探究すべき問題が殘つて居る。殊に日本人に取つては日本語の母音や子音の組成、又特有な音色をもつた三味線や尺八の音の特異な因子を研究するのは隨分興味のある事に相違ない。私は此種の研究が早晩日本の學者の手で遂行される事を望んで居る。

私が初めて平圓盤蓄音機に出會つたのは、瀨戶內海通ひの汽船の客室であつた樣に記憶する。其後大學生時代に神戶と鄕里との間を往復する汽船の中でいつも粗惡な平圓盤レコードの音に惱まされた印象が可也強く殘つて居る。船に意氣地がなくて、胸に込み上げる不快の感覺を僅かに抑へつけて少時の眠りを求めようとして居る耳元に、彼の劣惡なレコードの發する奇怪な音響と騷がしい旋律とは可也に迷惑なものの一つである。それが食堂で夜更迄長時間續いて居た傍若無人の高談が漸く少し靜まりかける頃に始まるのが通例であつた。浪が荒れて動搖のすさまじい時だけは流石に此音も聞えなかつたが、さういふ時には又船暈の苦惱が

更に甚しかつた。
汽船會社は無論乘客の無聊を慰める爲に蓄音機を備へてあるので、又事實上多數の乘客は會社の親切を十分に享樂して居るでもあらうが、此れが爲に少數の「除外例」が受ける迷惑も少しは考慮の中に加へて貰ひ度いと思つた事も幾度あつたか判らない。
此のやうな不平を起すのが間違つて居るといふ事は、其後段々に少しづつ判つて來た。汽船の夜の蓄音機は此頃どうなつたか知らないが、是れに代るべき更に強烈なものは今の世上に餘りに多い。いつ迄も此のやうな不平を超越しないで居ては自分のやうな弱い神經をもつたものは生存そのものが危くなるであらう。
汽船の外では西洋小間物屋の店先や、居酒屋の繩暖簾の奥から聞えて來るのを通りすがりに聞かない事はなかつた。さういふのは大概「金の逃出す音」の種類に屬するものであつた。併しそれは此方で逃げさへすれば追つかけて來ないから始末がよかつた。
蓄音機の喇叭といふのも私には餘り氣持のいいものではなかつた。器械全體の大きさに對して何となく均衡を失して醜い不安な外觀を呈するものである。一寸法師が尨大なメガフォーンを差しあげてどなつて居るやうな感じがある。是れが菊咲き朝顔のやうに彩色されたのなどになると一層恐ろしい物に見えるのである。
グラモフォーンに對する私の妙な反感が幾らか柔らげられる樣な機會が來たのは私が三十二の年に獨逸へ行つて居た時の事である。彼地の大使館員でM.といふ人と知り合になつたが、其人が喇叭のない、小さな戸棚のやうな形をした上等の蓄音機をもつて居た。そして彼地で聞く機會の多いオペラのアリヤや各種器樂のレコードを集めて、それを研究し修練して侘しい獨居の下宿生活を慰めて居た。其人の處で私はいゝ蓄音機のいゝレコードがそれ程恐ろしいものではないといふ事を初めて知つた。併しそれにしても當時耳にする機會の多かつた本物の音樂に比べては到底比較にならない物足りないものだといふ氣がした。曲の構想や旋律を研究し記憶して、次に本物を聞く爲の準備をするには非常に重寶なものであるとは氣が付いたが、之れを純粹な藝術的享樂の目的物とする氣にはどうもなれなかつた。
それで蓄音機と私との交渉は其れ切りになつて更に十年の歳月が流れた。
或年の十月に、私は妻を失つた。やがて襲つて來た冬は侘しい我家を更に侘しいものにした。大勢の子供をかゝへて家内中の世話をやく心忙しい淋しさの内に年が暮れて正月になつた。年頭の儀式は廢しても春は何處やら春らしくて、突きつまつたやうな心にもいくらかのゆとりが出來た。三ケ日過ぎた或日親類へ行つたら座敷に蓄音機が出て居た。正月の客あしらひかた〴〵何處からか借りて來たので、私が來たら聞かせようと云つて待つて居たとの事であつた。そこで御伽歌劇「ドンブラコ」といふのを聞かされた。
此の器械は所謂無喇叭の小形のもので、音が弱くて騷がしい事はなかつたが、音色の再現といふ點からは餘り完全とは思はれず、それに何かものを摩擦するやうな雜音が可也混じて居て耳障りであつた。それにも拘らず私の心は其時不思議に此の御伽歌劇の音樂に引き込まれて行つた。十分には聞きとりかねる歌詞はどうであつても、唱ふ人の巧拙はどうであつても、そんな事に構はず私の胸の中には美しい「子供の世界」の幻像が描かれた。聞いて居る内に何といふ事なしに、ひとりで涙が出て來た。永い間自分の眼の奥に固く凍りついて居たものが初めて解けて流れ出るやうな氣がした。

聞きながら私は、うちでも一つ蓄音機を買つてやらうと思ひ付いた。そして寒い雨の日に銀座へ出掛けて、器械と「ドンブラコ」のレコードを求めて來た。子供等の喜びは一通りでなかつた。品物の屆く時刻を待ちかねて門の外へ幾度か見に出たりした。

其夜の我家はいつになく賑はつた。何となしに子供の心を押しつけて居た暗い影が少くとも此夜は何處かへ行つてしまつたやうな氣がした。疲れて快く眠る子供の顏を見比べながら雨戶にしぶく雨の音を聞いて居る內に何時の間にか說明の出來ない淚が流れた。

當分の間は每日子供から蓄音機を〳〵と迫られた。子供等はもうすつかり歌詞や旋律を覺えてしまつて、朝起きると床の中からあちらでもこちらでもそれを唱つて居るのであつた。

小學生のよく唱ふやうな唱歌のレコードも買つて來たが、それ等はとても聞かれない妙な不愉快なものであつた。あゝいふ歌でもちやんとした聲樂家の唱つたのなら屹度面白いだらうと思はれるが、普通のレコードのやうに妙な癖のあるませた子供の唱歌は私にはどうも聞き苦しい。さうかと云つて邦樂の大部分や俗曲の類は子供等に餘り親しませたくなし、落語などといふのは隣りでやつて居るのを聞くだけでも私は頭が痛くなるやうであつた。それで結局私のレコード箱にはヴイクターの譜が大部分を占めるやうになつた。

妙なもので、初めの中は「牛若丸」や「兎と龜」などを喜んだ子供等も、ぢきに、さういふものよりは、矢張りあちらの名高い曲のいゝレコードを喜ぶやうになつた。今日は「アンヴイルコーラス」をやれとか、カルソーの「アヴェマリア」をやれとか色々の註文を持出すやうになつた。

普通の和製のレコードとヴイクターのと見比べて著しく目につく事は、盤の表面のきめの粗密である。其差は殊に音波の刻まれた部分に著しい。適當な傾きに光を反射させて見た時に一方のは何となくがさ〳〵した感じを與へるが、一方は油でも含んだやうな柔かい光澤を帶びて居る。是れは刻まれた線の深さにもよる事ではあらうが、兎も角もレコードの發する雜音の多少が此の光澤の相違と密接な關係のある事は疑ひもない事である。是れは材料其物の性質にもより又表面の仕上げの方法にも依るだらうが、少しの研究と苦心によつて少くも外國製に劣らぬ位には出來さうなものであるのに、それが出來て居ないのはどういふ理由によるものか、門外漢には分りかねる。しかし私の知れる範圍內では、蓄音機レコードの製造工場へ聘せられて專心其の改良に沒頭して居る理學士は一人もないやうである。尤も是れは別に蓄音機のみに關した事ではない。當然專門の理學士によつてのみ初めて出來得べき器械類が、さういふ人の手によらずして兎も角も造られて居るといふ奇蹟的事實は到る處に見受けられる事であるから。

いづれにしても今の蓄音機は未だ完全なものとは思はれない。誰れにでも一番に邪魔になるのはあのさゝらでこするやうな、又フライ鍋のたぎるやうな雜音である。あれを防ぐ目的で振動膜から發する音を長さ二十餘尺或は四十餘尺の幾度も折曲つた管の中を通過させて試驗した人もある。さうすれば雜音の短い音波は可也消却されるが、其の代り音が弱くなるのは免れ難いし、又同時に肝心の樂音の音色にも幾分かの變化を起すのは已むを得ないやうである。其外に驢馬の耳の形をした喇叭を使つた人もあるが、どれだけ有效であるかよく分らない。しかし此の雜音は送音管部のみならず盤や針や振動膜や凡ての部分の研究改良によつて除去し

得ない程の困難とは思はれない。早晩さういふ改良が外國の何處かで行はれるだらうと豫期される。

もう一つの蓄音機の缺點は、レコードの長さに制限があつて長い曲が途中で中斷せられる事である。此の中絶をなくする爲に二臺の器械を連結してレコードの切れ目で一方から他方へ切りかへる仕掛けが我邦の學者によつて發明されたさうであるが、一般の人には此の中斷がそれ程苦にならないと見えて、未だ市場にさういふ器械が現はれた事を聞かない。

音波によつて起された電流の變化を、電磁石によつて鋼鐵の針金の附磁の變化に飜譯して記錄し、隨時にそれを音として再現する裝置も既に發見されて、現に我邦にも一臺位は來て居る筈である。此れならば任意に長い記錄を作る事も理論上可能な譯であるが、何と云つても電氣裝置などを使はずに彈條と齒車だけで働くグラモフォンの輕便なのには及ばない譯である。

私の和製の蓄音機は二年位使つた後に齒車の故障が起つて使用に堪へないものになつてしまつた。近所の時計屋などではどうしても直し切れなかつた。もと買つた店へ電話で掛け合つたら、取りには行かれないが持つて來れば修繕してもいゝといふ返事であつた。買ふ時には店員迄附添つて雨の降る中を屆けて來たのに、それでは少しをかしいとは思つたが、どうにもならなかつた。併し遥々持つて行くのがおつくうなので永い間納戸の隅に押込んだまゝになつて居た。子供もおしまひにはあきらめて蓄音機の事は忘れてしまつた樣であつた。

或日K君のうちへ遊びに行つたらヴィクトロラの上等のが求めてあつて、それで種々のいゝレコードを聞かされた。レコードは同じのでも器械がいゝとまるで別物のやうに感じられた。今迄うちで粗末な器械でやつて居たのはレコードに對する虐待であつた事に氣がついた。うちの器械で鋼鐵の針でやる時に餘りに耳立ち過ぎて不愉快であつたピッコロのやうな高音管樂器の音が、いゝ器械で竹針を用ゐれば適當に柔らげられ、一方では又低音の絃樂器の音などが餘程正常の音色を出す事を知つた。

年の暮に餘分な錢のあつたのをヴィクトロラの中で一番安いのにかへて針も三角の竹針を用ゐる事にした。同じレコードの中から今迄聞かれなかつた色々の微細な音色のニュアンスなどが聞き分けられるのが不思議な位であつた。胡魔化しの八百倍の顯微鏡で覗いたものをツァイスのでのぞいて見るやうな心持がした。精妙ないゝものの中から、そのいゝ處を取り出すには矢張り其れに應ずるだけの精微な仕掛けが必要であると思つた。優れた頭の能力をもつた人間に牛馬のする仕事を課して居たやうな、濟まない事をして居たといふやうな氣がするのであつた。

鐵針と竹針とによる音色の相違は恐らく針自身の固有振動にも關係するだらうし又接觸點の彈性にも依るだらうが、此等の點を徹底的に研究すれば今後の改良に關する有益なヒントを得られるだらうと思はれる。

いづれにしても未だ現在の蓄音機は不完全と云はれても仕方のない狀態にある。三色寫眞が繪畫の複製術として物足りない如く、蓄音機は名曲の優れた演奏の再現器として物足りないものである。それだから蓄音機は潔癖な音樂家から輕視され或は嫌忌されるのも已むを得ない事かも知れない。私はさういふ音樂家の潔癖を尊重するものではあるが、それと同時に一般の音樂愛好者が蓄音機を享樂する事を咎めてはならないと思ふものである。

蓄音機でいゝ音樂を聞くのと、三色版で名畫

を見るのとは一寸考へると似て居るやうで實は少し違つた處があると思ふ。私の考では、三色版が色彩に對しても不忠實であるのみならず、畫面の微妙な光澤や組織に對し全然再現能力のないのに反して、良い蓄音機では音色や強弱の機微な差別が相應に現はれ、そして最も重要な要素と考へられる時間關係が可也嚴密に再現される。さういふ點で蓄音機の方が或る意味で三色版より進んで居るとも云はれる。唯困る事には今の蓄音機に避くべからざる雜音の混入が、恰も三色版の面に汚いしみの散點したと同樣であるやうにも思はれる。併し人間の耳には不思議な特長があつて、眼の場合には望まれない選擇作用が行はれる。即ち雜多な音の中から自分の欲する音だけを抽出して聞き分ける能力を耳はもつて居る。音樂家が演奏をして居る時に風や雨の音、時には自分の打つて居る鍵盤の不完全な槓杆の軋る音ですらも、心がそれに向いて居なければ耳には響いても頭には通じない。此の驚くべき聽感の能力のおかげで、吾々は喧騷の中に會話を取りかはす事が出來、管絃樂の中からセロやクラリネットや任意の樂器の音を拾ひ出す事が出來る。是れに反して眼の方では、白色の中から赤や緑を拔き出す事が不可能であり、畫面から汚點を除却して視る事はどうしても出來ない。

此のやうな本質的の區別がありはするが、蓄音機の餘りに甚しい雜音は矢張り耳障りには相違ない。併し一つの曲に修熟して其の和音や旋律を記憶して後に其のレコードの音を專心に追跡し或は先導して行く場合には、可也の程度迄此の選擇が出來るやうに思はれる。此れは修練によつて誰れでも自然に出來るだらうと思はれるが、嘗て或る學者の試みた樣に蓄音機から出る音を壁にかけた反射鏡から一度反射させて聞けば、恰も隣室の音樂を聞いて居るやうな心持がするので器械の雜音の氣になる事が更によく防がれるだらうと思ふ。

もう一つ音樂家に取つて不滿足であらうと思ふのは、假令音色よく再現出來て居ると云つた處で、是れを本當の樂器に比べればどうしても幾分の差違のある事は免れ難い事である。色々な音の相對的の關係は可也によく行つて居ても、全體にかぶさつて居る濁り或は曇りのやうなものがあつて其れが氣になるだらうと思はれる。しかし此れは例へば同一の繪を少し暗い室で見るとか、或は少し色のついた光の下で見るとよく似た事であつて、正常の光で見た時の印象が確實に殘つてゐない人に取つては其の區別は全然認識されない。もしさうでなかつたら曇り日に見たセザンヌと晴天に見たセザンヌは別物に見えなければならない譯である。同じやうな譯で八疊の日本室で聞くヴァイオリンと、廣い演奏室で聞く同じ彈手の同じヴァイオリンとも別物でなければならない。

不完全なる蓄音機から本物の音樂を聞き出さうとする人に取つてもう一つの助けになるのは、人間心理の特徴として知られた補足作用である。自分の文章の校正刷を見る時に顯著な誤植を平氣で讀み過ごすと同じやうな誤謬が、不完全なレコードを完全に聞かせるに役立つ場合も可能である。

畢竟蓄音機を嫌ひなものとするか、面白いものとするかは、聞く人の心の置き方で隨分廣い範圍内でどうにもなるものだらうと思ふ。此れは絶對的善美なものの得られない現世で、あらゆるものの價値判斷に關係して當嵌る普遍的方則ではあるまいか。それで私は蓄音機を嫌ふ音樂家のピュリタニズムを尊敬すると同時に蓄音機を愛好する素人を輕視する事はどうしても出來ない。

蓄音機が完成に近づくに從つて生ずる新しい利用方面が色々に考へられる中にも、從來既に行はれて居るやうな音樂や演說の保存運搬、外國語の發音の敎授などは別として、例へば學校の講義の或るものを悉皆蓄音機ですませる事は出來ないかといふ問題が起る。

學校の講義と云つても色々の種類があるが、其の内には唯敎師が懷手をして居て、毎學年全く同じ事を陳述するだけで濟む者もある。さういふのは蓄音機でも代用されはしないかといふ問題が起る。それから又黑板に文字や繪をかいたりして說明する必要のある講義でも、若し蓄音機と活動寫眞との連結が早晚もう少し完成すれば、それで代理をさせれば敎師は宅で寢て居るか或は硏究室で勉强して居てもいゝ事になりはしまいか、それでも結構なやうでもあるが又さうではなささうでもある。かういふ假想的の問題を考へて見た時に吾々は敎育といふものゝ根本義に觸れるやうに思ふ。

私は蓄音機や活動寫眞器械で置換へ得られるやうな講義は本當の意味の敎育的價値のないものだらうと思つて居る。もし講義の內容が拔目なく系統的に正確な知識を與へさへすればいいとならば、何も器械の助けを借る迄もなく其の敎師の書いた原稿のプリントなり筆記なりを生徒に與へて讀ませれば濟む場合もある譯である。甲の講義を乙が述べてもそれで澤山な譯である。

併し多くの人が自らその學校生活の經驗を振返つて見た時に、思ひ出に浮んで來る數々の舊師から得た本當に難有い貴い敎へと云つたやうなものを拾ひ出して見れば、それは決して書物や筆記帳に殘つて居る文字や圖形のやうなものではなくて、到底蓄音機などでは再現する事の出來ない機微な或るものである事に氣が付くだらう。

此れは恐らく誰れでも知つて居る事であらうが、餘りに敎育といふものを系統的科學的從つて器械的な硏究の對象とする場合に動もすれば忘られ勝ちな事である。一度此れを忘れゝば凡ての敎育は蓄音機や活動寫眞で代用する事が出來るやうになると同時に、敎育の效果は其の場限りの知識の商品切手のやうなものになる。生徒の生涯を貫いて其の魂を導き引立てるやうな貴い難有い影響は何處にもなくなるだらう。

十年一日の如き講義をするといつてよく敎師を非難する人が往々ある。併しそれだけの事實では、敎師の敎師たる價値は論ぜられないと思ふ。講義の內容の外見上の變化が少くとも其の講義の中に流れ出る敎師の生きた「人」が生徒に働きかけて、其の學問に對する興味や熱を鼓吹する力が年と共に加はるといふ場合もあるかも知れない。此れに反して年々に新しく書き改め新事實や新學說を追加しても、敎師自身が、漸次に後退しつゝある場合も考へられない事はない。此の二つの場合のどちらが蓄音機のレコードに適するかを一般的概念的に論斷するのは困難ではあるまいか。

蓄音機が完成した曉に望み得られる事のうちで私が好ましいと思ふ一つのものは、あらゆる「自然の音」のレコードである。例へば山里の夜明けに聞えるやうな鷄犬の聲に和する谷川の音、或は濱邊の夕闇に響く波の音の絕間をつなぐ欵乃の聲、さういふ種類のものゝ忠實なるレコードが出來たとすれば、塵の都に住んで雜事に忙殺されて居るやうな人が僅少な時間を割いて心を無垢な自然の境地に遊ばせる事も出來ようし、永い月日を病床に呻吟する不幸な人々の神經を有害に刺戟する事なしに無聊を慰め精神的の治療に資する事も出來はしまいか。かういふ種類のレコードこそあらゆるレコ

ードの中で最も無害で有益でそして最も深い内容をもつたものではあるまいか。若しさういふものが出來たら、私はそれをあらゆる階級の人にすゝめ度い。爲政家が一國の政治を考究する時、社會經濟學者が其の學説を組立てる時、教育者が其の教案を作製する時、忘れずに少時此のレコードの音に耳を傾けて貰ひ度い。あらゆる心と肉の勞働者も其の勞働の餘暇に是等の「自然の音」に親しんで貰ひ度い。さういふ些細な事でも其の效果は思ひの外に大きいものになる事がありはしまいか。少くもそれによつて今の世の中がもう少し美しい平和なものになりはしまいか。

蓄音機に限らず、あらゆる文明の利器は人間の便利を目的として作られたものらしい。併し便利と幸福とは必ずしも同義ではない。私は將來いつかは文明の利器が便利よりは寧ろ人類の精神的幸福を第一の目的として發明され改良される時機が到着する事を望み且つ信ずる。其の手始めとして恰好なものの一つは蓄音機であらう。

もし此の私の空想が到底實現される見込がないといふ事にきまれば私は失望する。同時に人類は永遠に幸福の期待を棄てゝ再びよぎる事なき門をくゞる事になる。

亮の追憶

亮の一週忌が近くなつた。豫てから思ひ立つて居た追憶の記を、此のしほに書いて置き度いと思ふ。

亮は私の長姉の四人の男の子の第二番目である。長男は九年前に病死し、四男はそれよりずつと前、未だ中學生の時代に夭死した。昨年又亮が死んだので、殘るは唯三男の順だけである。順は疾くに出でて他家を繼いで居る。それで家に殘るは六十を越えた彼等の母と、長男の殘した四人の子供と、そして亮の寡婦とである。淋しい人ばかりである。

亮の家の祖先は徳川以前に長曾我部氏の臣であつて、後山内氏に仕へた、所謂郷士であつた。曾祖父は劍道の師範のやうな事をやつて居て、其頃は可也家運が隆盛であつたらしい。竹刀が長持に幾杯とかあつたといふやうな事を亮の祖母から聞いた事がある。

亮の父即ち私の姉の夫は、同時に又私や姉の從兄に當つて居る。少年時代には藩兵として東京に出て居たが、後に南畫を川村雨谷に學んで春田と號した。私が物心付いてからの春田は、殆んど何時行つても畫を描いて居るか書を習つて居た。かきながら楊枝を竪に口の中へ立てたのを嚙む癖があつた。當時の所謂文人墨客の群が屢々其家に會しては酒をのんで寄せ描きをやつて居たりした。一方では又當時の自由黨員として地方政客の間にも往來し、後には縣農會の會頭とか、副會頭とか、さういふ公務にもたづさはつて居たやうであるが、さういふ方面の春田居士は私の頭に殆んど殘つて居ない。

枠に張つた繪絹の上に山水や花鳥を描いて居るのを、子供の私はよく傍で見て居た。永い間見て居ても、殆んど口を利くといふ事はなかつた。併し、さも樂しさうに筆を動かしては楊枝を嚙んで眺めて居るのを、側で默つて見て居るのが何となく氣持がよかつた。其處にはいつも長閑な春永の空氣があつた。

私のみならず、家内中の誰れともめつたに口を利いて居る事は稀なやうであつたが、唯夕飯の膳にきまつて添へられた數合の酒に醉つて來ると、丸で別人のやうに氣輕く物を云つた。四人の子供や私などを相手にして色々の昔話をした。若い時分に東京で習つたとかいふ講釋師の口眞似をしたりして皆を笑はせた。藩兵になつて日比谷の藩公邸の長屋に居た時分の話なども、何遍同じ事を聞かされても、其度に新しい面白味と可笑味を感じさせた。それで子供等は、さういふいくつかの取つておきの話の中から、あれをこれをと註文して話させては笑ひこけるのであつた。夏になると裏の畑に緣臺を持ち出して、其處で夜更ける迄子供を肴にして酒をのんで居た。どうかすると、其處で醉ひ倒れてしまつたのを、大勢で寢間迄かつぎ込んだものである。どうかすると機嫌の好くない時もあつて、さういふ時は子供等は近付いてはいけない事になつて居た。

春田は十二三年前に五十餘歳で喉頭癌のために斃れた。私の見た義兄は、珍しく透明な、いゝ頭をもつて居て、世態人情の奥の底を見透して居た人のやうに思はれる。それで居て殆んど俗世の何事も知らないやうな飄逸な風があつた。

郷里の親戚や知人の家へ行けば、今でも春田のかいた四君子や山水の畫の襖や屏風が見られる。私はそれを見る度に、楊枝をかみながら繪絹に對して居る春田居士を思ひ浮べる。其の幻像の周圍にはいつも長閑な春の光がある。

亮の生れた時の事を私は夢のやうに覺えて居る。當時亮の家には腸チブスがはひつて來て彼の兄や祖母や叔父が相次いで床に就いて居たので、彼の母は其の生家、即ち私の家に來て産褥についた。姉の寢て居た枕元の煤けた襖に、巖と竹を書いた墨繪の張付けてあつた事だけが、今でもはつきり頭に殘つて居る。

少年時代の亮について覺えて居る事は極めて僅かである。舌のさきを奥齒にやつて、それを噛みながら一種の音を立てる癖があつた事を思ひ出す。此れが父の楊枝をかむ癖と何か關係があつたかどうかは分らない。それから何かの折に、竹の切れはしで、木瓜の樹をやたらにたたきながら、同じ言葉を繰返し／＼怒鳴つて居た姿を思ひ出す。その時の妙に仙骨を帶びた顏をあり／＼見るやうに思ふが、此れは或は私の錯覺であるかも知れない。又或時は野良猫を退治するのだと云つて、槍か或は槍と一處に長押にかゝつて居た袖がらみのやうなものかを持出して意氣込んで居たが、猫の鳴聲を聞くと同時にそれを投げ出して座敷にかけ上つたといふやうな逸話もあつた。

三人の兄弟の誰れと思ひ比べて見ても、何處か世間をはなれたやうな飄逸な處のある點で、一番父の春田居士の風貌を傳へて居たのではないかと私には思はれる。

幻燈といふものがまだ珍しいものであつた頃、亮が硝子板に描いた繪を、其儘紙の小さなスクリーンに映寫し、友達を集めて幻燈會をやつた事もあつた。つまらないやうな事ではあるが、さういふ風の一種のオリヂナリテイもない事はなかつた。

たしか右の眉尻の上に眞紅な血ぼくろのやうなものがあつて、それを傷つけると血が止度もなく流れ出た。そんな思ひ出が、どういふものか、私には又なくなつかしいものである。

亮の存在が、私の頭の中で著しく鮮明になつて來たのは、私が國の中學校を出て高等學校に入學し、年々の暑中休暇に歸省した時分からである。

片田舍の中學生で、さき／＼高等學校から大學に進まうといふ志望を懷いて居るものに取つては、暑中休暇に歸省して居る先輩の言動は可也影響のあるものである。さういふやうな影響も或はあつたらうが、暑中休暇の間は殆んど毎日のやうに私のうちに往來した。當時どんな事が二人の話題に上つたかは思ひ出せないが、いづれ人生とか、運命とか、或は文學とか、藝術とか、さういふ種類の事が主なものであつたらしい。當時若々しい希望に充ちて理想の外何物も眼中になかつた叔父と、そろ／＼家庭以外の世界に眼をあけかゝつた感受性に富んだ甥との間には、夢のやうな美しい空想の國が擴がつて居た事であらう。

つまり何處か氣が合つて居たものと見える。南國の炎天に寫生帳をさげて、よく一處に水彩畫をかきに出かけたりした。自轉車の稽古をして、少し乘れるやうになつてから一處に市外へ遠乘りに行つて、歸りに亮が落ちて前齒を一本折つた事もあつた。

其頃の亮の寫生帳が保存されて居るのを今取り寄せて見ると、何一つ思ひ出の種でないものはない。第一頁には十七字集と題して、幼稚な、しかし美しい夢に充ちた俳句が、紫鉛筆や普通の鉛筆でかき並べてあつて、其の終りの餘白には當時はやつた不折流のカットが描いて

ある。又自刻の印章――ボート形の内に竪琴と星を刻したの――が捺してある。自分の家の門や庭の芭蕉などの精密な寫生があるかと思ふと、裏田圃の印象風景などもある。『くいし（山名）へ行くには何方ですか』『神社』『アツマコヲト』『小女山道』『午飯』『牛を追ふ翁』『蜜柑』『いこひつゝ水の流れを眺め居れば、せきれい鳴いて日暮れんとす』など、とり止めもない遠足の途中のいたづら書きらしいものもある。

亮のかいた繪に私が題句をかいたり、亮の句に私が生意氣な評のやうなものをかいたりしたのもある。私は其頃熊本で夏目先生に句を見て貰つて居た。そして歸省すると甥に句を作らせて自分が先生のつもりで居たものらしい。兎に角其頃の亮と私の生活は綯ひ交ぜたもののやうになつて居た事が此の帳面を見てもよく分る。

裏坪や臺所などのスケッチを見ると、當時のB家のさまがいろ／＼思ひ出されて、其頃から僅かに二十年の間に相次いで亡くなつた五人の親しい人々の面影を、つい其處らに見るやうな氣がする。

私が大學へ移つたのと入り代りぐらゐに、亮は熊本の高等學校へはひつた。同じ寫生帳の後半には其處の寄宿舍や、日奈久温泉、三角港、小天の湯などの小景がある。日奈久の温泉宿で川上眉山著「鳰の浮巣」といふのを讀んだ事などがスケッチの繪から分る。浴場の繪には女の裸體がある。又紋付の羽織で、書机に向つて鉢卷をして居る繪の上に『アーウルサイ、モー落第してもかまん、遊ぶ遊ぶ』とかいたものもある。

亮が後年迄殆んど唯一の親友として許し合つて居たM氏との交遊の跡も同じ帳面の繪から分る。

中學時代から一處であつたのが、高校の入學試驗でM氏は通過し、亮は一年おくれた。其時M氏に贈つた句に「登る露散る露秋の別れ哉」といふのがある。

高等學校では私もよく食つた凱旋饅頭を五十も食つて、あとでピットル散をなめたりして居たらしい。

大學は農科へ入學して、農藝化學を修めて居たが、其内に烈しい神經衰弱に罹つて學校を休學した。それ切りどうしても再び出ようとは云はなかつたのを、私が留學から歸つた時に無理にすゝめて出る事にはなつたが、それでも矢張り學校は缺席勝ちであつた。

其頃は私はもう青年ではなかつた。空想から現實の世界へ踏込んで、功名心にかられて懸命に努力し、あくせくして居た。さうして亮の學校をなまける心持には共鳴し難くなつて居た。私の眼から見ると唯自分の心の中へ中へと引込んで行く亮を、どうでも引き立てて外側へ向け直してやる事が自分の務めのやうに思つて居たので、機會ある毎に口を酸くして說法のやうな事を聞かせた。

其の當時の亮の日記のやうなものを見て居ると、こんな一節がある。

『明治四十四年十一月二十八日――昨日青山の宿から本鄕の下宿へ移つた。朝押入から蒲團や行李を引出して荷造をして居る間にも、宿を移つたとて私はどうなるだらうと思ふ。叔父さんや弟は、宿でも變へて氣分を新にしたら學校へ行けるやうな心持になるだらうといふ。私は學校の方へ一歩も向ふ勇氣はもうない。厭だ／＼と思ふ。室一杯に取散らした荷物を見るとやはり國へ歸りたい念が強く起る。今宿へ拂ふ金が十圓ばかりある。此れで、今日思切つて歸らうとしきりに思ふ。然し國へ歸つても自分のうちへ歸るのではない――兄と嫂の家――苦しい事は同じだ。私は自分

をどうする事も出來ない。併し私はかうして居ても、遂には田舍で貧しくとも靜かに生活するといふ、私が自分を省みての唯一つの望が滿さるゝ時が來る事はないやうに思はれる。この望が、もう全く活力のない私を自分に捨てかねる原因になつて居る。こんな望もなくなつて欲しい。前途が全く暗くなつて了つたら、とこんな事を思つてポカンとして居ると、弟が來てくれた。そして唯もう何と云ふ事なしに移つてしまつた』

『夜、弟と叔父さん所へ行く。こいつはもう駄目だと思ひながら、そのものに對する責任は盡して行くと云つた樣な態度や弱き者に對する輕侮の笑に對しては、生きて居る私は屈辱を感ぜずには居られなかつた』

私は此處迄讀んだ時に、當時の自分の何處かに知らぬ間に潛んで居た弱點を見拔かれたやうな氣がして冷汗が流れた。

其次に又こんな事がかいてある。

『自分を發展しなくてはやまない活力、此れが人生を樂む要素である』

亮がどうしてから烈しい神經衰弱にかゝつたかは私にはよく分らない。一つは其頃ひどく胃が惡くて絶えず痛んで居たといふ事が日記の中にも到る處に見出され、又いつであつたか一度は潰瘍の出血らしいものがあつたといふ話を聞いて居るから、此の病氣の爲もあつたに相違ない。實際其前から胃弱の爲に瘦せこけて、人からは肺病と思はれて居た。

此の記事より二年前明治四十二年十一月を起點とした「どうなりゆくか」と題した彼の日記の最初の頁からもう此の胃痛の記事が出て來る。そして學校の不愉快、人に對する不平、自己に對する不滿、さういふ感情の敍述と胃の痛みの記事とが交錯して出てくる。

併し此の消化器病の外に亮を惱まして居た原因も色々ないではなかつた。それは、第一には父の春田が當時不治の病氣にかゝつて居た事である。私は海外へ出て居て殆んど何事も知らずに居たが、日記を見ると其れに關する亮の煩悶のやうなものがいくらか窺はれる。四十二年十一月七日のには、

『……近頃身内のものから手紙が來ると、父の病氣が惡くなつたのかと何だか恐ろしい。……父の病氣に對して、私の心持は、唯何だか恐ろしいといふに止まる。それでいつも考へまい〳〵と努め、又さうして居られる。見舞の手紙も一度も出した事はない。不孝の子だ。……』

『弟と通りを散歩しながら、いつになく、自分の感情の美しからざる事等を投げ出すやうに話した。おれは自分を憐むといふ外に何も考へない。こんな事を云つた。そして弟の前に自分を踏みつけた時に少し心の安まるやうな心持がした。併し此の絶望の聲に對して少しの同情を期待したといふやうな弱い心持もあつたやうだ。……自分は自分の生命を左右するやうな大事は、恐れて忘れよう〳〵とつとめる。そして日々trifles によつて苦しめられて居る』

『高等學校の校醫の○○も、○○といふ體操教師も「君の兄さんはとても高等學校もよう卒業しまいと思つて居たが、大學へ行くやうになつたから、存外かまはないものだ」と云つたと弟が話した。それを聞いて何だか一種自分といふものに對する責任が多少輕くなつたやうな安心を覺えた』

第二第三の原因らしいものも考へられない事はないが、それ等は茲には書かない。

亮は自分の事を頭が惡い〳〵と云つて居た。

併し私の見る處では、寧ろ珍しい位いゝ透徹した頭腦をもつて居たやうに思はれる。可也複雜な科學上の事實や理論でも氣持のいゝやうに急所を呑み込んだ。世間に起つて居るいろいろな出來事でも、其の事柄の表面に現はれて居る現象よりも、其の現象の底にある原動力の方にすぐに眼をつけて居た。他人の言行でもそれを通して直接に腹の中を見透して居た。さういふ敏感さは子供の時分から既にあつたのが、病氣の爲に一層著しく病的に敏感になつて居たやうに思ふ。それだから、他人は勿論肉親の人々や又自分自身のでも、胸の奥底にある少しの黑い影でも見逃す事が出來なかつた。そしてさういふ美しくないものに對する極端な潔癖は、人に對し自分に對する無心な純な感情の流露を妨げた。さうして又其のやうな感情の拘束の自覺が最も酷しく彼を苦しめ惱まして居たやうに見える。併し人一倍美しいやさしい感情を持つて居なかつたのであつたら、此のやうな煩悶は恐らく有り得なかつたのではあるまいか。罪は頭のいゝ事にあつた。もう少し頭が惡かつたら、亮はどんなに氣樂であつたらう。

かういふ不安と煩悶を懷きつゝ、學校へ出ては醱酵化學の實驗をやり、バクテリヤの培養などをやつて居た。そして夜は弟と二人で、よく寄席や芝居や活動を見に行つて、やるせない心の淋しさを紛らせようとして居たらしい。胃の痛むのによく蕎麥や汁粉を食つたりしては、更に自分に對する不滿を增して居たやうに見える。

『本日は弟と歌舞伎座に行く事になつて居た。——父の病氣に對する「愛なき恐れ」、金に對する不安、母の辛苦、不孝の爲めに失はれたる親子の愛情、學業に對する不忠實、此のやうなものが入亂れて居る頭には、此の大芝居の忠臣藏も面白い筈はない。併し芝居のやうなざは〳〵して居る所が一番「忘れる」に適して居る』

其の翌日の記事には、

『昨日芝居から歸りに、そばやしるこを食ひ過ぎたため胃の工合が惡い。學校を休む事にきめる。弟も休んで居る。繪をかいて暮した。夜は末廣亭へ雨がどし〳〵降るのに出かける。可也大きな薄暗い小屋に二三人しか客が見えない。語る人も聞く人も淋しい。歸りは又そばやで酒を飲んだ』

心の淋しさが不養生をさせ、其の結果が淋しさを增して居たのである。

四十三年一月下旬に父の春田居士が死んだ。其年の三月から亮は學校へ出るのを全くやめて、あてもなく總州邊を旅行したりして居たらしいが、いよ〳〵神經衰弱がひどくなつて、とう〳〵四月に國へ歸つてしまつた。前に云つたやうに四十四年に再び引きずられるやうに上京して、私の近所の下宿から學校へ通つて居たが、翌年にそれでもどうにか卒業した。

『……今年で、はや、三度學校をしくじつて、今度やつと末席で卒業する事が出來た。然し卒業したのはやはり嬉しかつた。そして神田の西洋料理でやつた謝恩會へも出た。然し默つて隅の方へ引込んで居た』

こんな事が「どうなりゆくか」と題した日記のノートの最後の頁に書いてある。それで此の帳面は終つて居るのである。卒業は兎も角も亮にとつても一つの一大轉機であつた。

此の世の中で最劣等の人間の如く自分を感じて居た亮は、彼を教へて居た教授方の眼には決してさうばかりとは見えなかつた。或る先生などは特に彼の頭のいゝ事を確かに認めて居たらしい。それで、卒業席次が一番下の方であつた

に拘らず、先生の推擧によつてT縣のF町の農學校の教諭として赴任することとなつた。そして數年前に結婚して郷里に殘してあつた妻と、其處に初めて自分の家庭をもつやうになつた。

彼地に行つてからの生活については私は餘り多くを知らない。しかし其處での亮は大體に於て幸福であつたらしく私には思はれる。

交際といふ事には全く馴れず、あらゆる實務といふ事に經驗もなく趣味もなかつた亮の赴任當座は、隨分色々困る事が多かつたらうといふ事は想像するに難くない。恐らくあらゆる失敗を重ね、それに就いてあらゆる苦痛を嘗めたらうと想像される。『自己の頭の間違多きを恐れて、益々間違を生ず』といふ文句が入學式のあつた日の日記にあるのも、其邊の消息を語つて居るやうに見える。しかし格別の大失態といふ程の事もなくて、後には教頭や舍監も勤めて居るのを見ると、さういふ地位にでもどうにか適應するだけのものは矢張り備へて居たものと見える。亮の子供の時からの外見だけで彼を判斷して居た老人などは、さういふ役目の勤まるのを寧ろ不思議に感じて居たらしい。

いつだつたか、彼地からよこした手紙に、次のやうな意味の事があつた。

今迄は、何物にもぶつかるといふ事なしに、遠くから硝子の障子越しに眺めるばかりで、それでいろんな事を空想しては恐ろしがつてばかり居たが、今日ではもう否でも物にぶつからなければならない。さうなると空想をするだけの餘裕はなくなる。そして存外勇氣が出て來る。

又こんな事もあつた。『うまく物事をやらうといふやうな氣の出るのが一番困る』

卒業就職の後兎も角も神經衰弱は大部分癒えたやうであつた。唯彼地の冬の冷濕の氣候が弱い身體にこたへはしまいかと心配して居たが、割合に暫くは無事であつた。

彼地では追々趣味の上の友達が出來て、其の人達と寄合つて外國文學の輪講會をやつたりして居たやうである。畫もいろ／＼描いて居たらしい。或時は丹念に集めて居た切抜版畫などの展覽會をやつたり、兎に角相當に自分の趣味を滿足させるだけの環境はあつたらしい。靜かな田舍で地味な教師をして、トルストイやドストエフスキーやロマン・ローランを讀んだりセザンヌや親鸞の研究をしたり、生徒に化學などを授けると同時に圖畫を教へたり、時には知人の肖像を描いてやつたりするやうな生活は、恐らく亮が昔から望んで居た理想に餘程近いものではなかつたかと思ふ。前に出した「どうなりゆくか」の中にも『單純な仕事に、他の事は考へる隙なく、忙しく働いた後、湯にでも入つてゆつたりして、本でも讀むか、紅茶でも飲みながら、好きな繪でも見るやうな生活がやつて見たい』とあるが、此望はいくらか遂げられたのではないかと思はれる。

セザンヌの好きであつた彼の其頃の日記にこんな事がある。『セザンヌの繪のやうな境地に到りたいと思ひながら、今迄其の內容卽ち其れ迄に到る努力を考へなかつた。神に凡てをまかせて、安心して、自己の眞を打出して、運命を直視し、苦しみ悲みながら進まう。そしてシムプルな、落着いた、セザンヌの繪のやうな境地に達しよう』又こんな事もある。『トルストイは人生の歸趣を決めてしまはうとした。そこに不自然があり無理がある。そこに芝居氣が生ずる』

學校の職務について苦勞のない事はなかつた。學校にあり勝ちな大小の事件の爲に彼の健康には荷の勝つた辛勞もあつたやうである。さういふ時にどんな態度でどんな處置をとつたか

は全く私には分らないが、唯日記の斷片のやうなものなどから判斷して見ると、いつでもおしまひには自分の誠意や熱心や愛の足りない事を悔んで居たやうである。

生徒にはそれでも相當に嚴格であつたらしい。舍監としても可也きびしい方であつたらしい。スリッパをはいて見廻る、其の足音を生徒が煙つたがつてスリッパといふ渾名をつけて居たさうである。生徒は又亮に「たつのおとし子」といふ渾名をつけて居ると自分で話して居た。此れは彼の顏付や、瘦せてひよろ長く、猫脊を丸くして居る恰好などから名づけたものであらう。實際さういへばさうらしい樣子もあつた。しかし彼の風貌には何處となく心の奧底のやさしみと美しさが現はれて居たやうに思ふ。生徒の此の渾名から私はどうしても單純な憎惡や嫌忌を讀み取る事が出來ない。

友達と一處に酒を飮んだりする時には、どうかすると元氣がよくて、いつになく高談放語したり、鄉里の昔の武士の唱つた俗謠をどなつたりする事もあつたさうであるが、此れはどうも矢張り亮の主な本性ではなかつたやうに私には思はれる。唯もう少し健康で、もう少し體力が盛であつたら、からいふ方面がもう少し平生にも現はれたかもそれは分らない。

弱いからだにとう〳〵不治の肺患が喰ひ込んでしまつた。東京の醫師に診て貰ふ爲に出て來て私のうちで數日滯在してから、任地近くの海岸へしばらく療養に行つて居たが、どうもはかばかしくないので、學校を休職して鄉里の濱邊に二年餘り暮した。天氣がいゝと油繪のスケッチに出たりして居たやうである。本當に突込んで描きたいと思つても、つい面倒でいゝ加減に胡魔化してしまふのが殘念だと云ふやうな事を手紙の端に書いてあつたりした。其頃のスケッチ帳に亮の妻が亮の寢顏を寫生したのがあるが、よく似て居て、そしてやつれはてて居るのが淋しい。去年の春から惡くなつて、五月に某病院に入院すると間もなく亡くなつた。臨終は平穩であつた。みんなに看護の禮を云つて暇乞をして、自分の死後妻には自由を與へてやつてくれと遺言して、靜かに息を引きとつたさうである。

急を聞いて國へ歸つて居た亮の弟から其時の詳しい樣子を聞いた時に、私は何だかほつとしたやうな心持がした。殆んど豫期されて居た亮の最期が、それ程安らかで靜かで美しいものであつたと知つた時には、思はず「それはよかつた」といつたやうな不倫な言葉が自然に口から出た。さうして其のあとから水の滲み出るやうな淋しさが襲つて來るのであつた。

散るべくして僅かに散らないで居た桐の一葉が、風のない靜かな夕に、自ら枝を離れて落ちたやうな心持がした。自分の魂の一部分が脆く缺け落ちて、永久に見失はれたといふやうな心持もした。

亮の死の報知が傳はつた時に、F町の知友達は並々ならぬ好意を故人の記念の上に注いでくれた。生前から特別な恩典を與へて心安く療養をさせてくれた學校當局は、更に最後の光榮を盡さしてくれた。親しかつた人々は追悼會や遺作展覽會を開いてくれ、又いろ〳〵の餘儀ない故障の爲に親戚のもの誰れ一人片付けに行く事の出來なかつた遺物の處理迄も遺憾なく果してくれた。そして此の處理の中に一通りならぬ濃かな心遣ひの籠つて居るのを感じない譯には行かなかつた。

其外の知友の中でも、中學時代からの交遊の跡を追懷した熱情のこもつた弔詞を寄せられた人や、又亮が讀むべくして遂に讀む事の出來なかつた倉田氏の著書の卷頭に懇篤な追悼文を題して遺族に贈られた人もあつた。

私は此處でさういふ人々の名前を擧げて感謝の意を述べたいやうな氣がする。しかし私の頭にある故人の或る資質をかんがへると、却つてさうしない方がよいやうにも思ふ。

唯それ等の人達に對する遺族や一門の厚い感謝の念は、故人の記憶の消えない限り消える事はあるまい。

年取つて薄倖な亮の母すらも「亮は夭死はしたが、これ程迄に皆樣から思つて頂けば、決して不仕合せとは思はれない」とさう云つて居る。私は本當にさう思ふ。

此れだけの好意を人から寄せられるには、矢張り、よせられるだけの或物があつたに相違ない。其の或物が此世に殘つて居る限り、死ぬといふ事はそんなに淋しい事ではあるまい。

亮には一人の子供もなかつた。そして子供を欲しがつて居た時代もあつた。死の迫るを知つた時になつてどう思つたか分らないが、唯何となくそれが淋しくはなかつたかと思ふ。

亮はたしかに弱い男には相違なかつた。しかし自分一個と戰ふ戰士としては決して弱くなかつた。平靜な水面のやうな外見の底に不斷に巻つて居た渦卷が如何に強烈なものであつたかは今私の手許にある各種の手記を見れば分る。さういふ意味で亮は生れ付き強い人々よりも幾倍も強い男であつたかも知れない。

亮のやうな柔かい心臟と彼のやうな透明な腦とを同時にもつて生れるといふ事は、現世にあつては不幸な事かも知れない。防禦のない急所を矢彈の雨にさらすやうなものかも知れない。

その上に又亮は弱い健康には背負ひ切れない「生」の望を背負つて居た。さういふ不調和の結合から來る色々の苦惱は早くから亮の心を宗教に向はせた。初めは基督の教を通つて終には親鸞の門にはひつた。最後に何處迄進んで居たかは分らないが、唯彼の短い生涯が決してそれ程短いものでなかつたといふ事だけは云へるやうに思ふ。

年譜

明治十一年
十一月二十八日東京麹町區平河町三丁目で生れた。父利正、母亀。父は高知縣士族で陸軍會計監督、河村雨谷に教はつた文人畫をかき、茶の湯などをやつた。西南戰役從軍後此處に假寓して居た。

明治十二年
父の轉任で名古屋に移る。

明治十四年
父は單身で熊本鎭臺に轉任。祖母、母、姉と郷里高知大川筋の家に歸る。四年の間父に逢はず。

明治十六年
土佐郡江ノ口小學校入學。

明治十八年
父が東京へ轉任したので一同上京、麹町區中六番町に住む。番町小學に通ふ。

明治十九年
父退役。東海道を、人力車に乘つて高知に歸る。言語がちがふので村童にいぢめられる。

明治二十五年
高知縣立尋常中學入學。『佳人の奇遇』『經國美談』『歸省』などを讀み、又ミゼラブルやリンカーン傳などに印象を受けた。

明治二十九年
熊本第五高等學校入學。夏目漱石先生に英語と俳句を教はる。長崎に遊ぶ。

明治三十年
結婚。

明治三十二年
東京帝國大學理科大學物理學科へ入學。谷中の寺に下宿。正岡子規に會ふ。後に西片町に家をもつ。

明治三十四年——三十五年
病氣で休學、高知縣須崎の海岸で療養。妻夏子死去。

明治三十六年
大學卒業。漱石先生の家に出入、先生が「ホトトギス」に筆を執るやうになつてから小品文のやうなものを書いて同誌に出す。理科大學で實驗物理學を研究。音響學、磁氣等に關する論文を書いた。

明治四十一年
大學院卒業。

明治四十二年——四十四年
獨逸へ留學。諸國遊歷。歸朝後理科大學に奉職。

大正六年
妻寛子死す。

大正七年
冬、胃潰瘍に罹り三年間靜養。其頃より隨筆風のものをかく。又油繪を描く。
其後大學航空研究所、同地震研究所、理化學研究所等で物理學、地震學等の研究に從事し今日に到る。
近來松根東洋城、小宮豐隆と俳諧連句の作あり、雜誌「澁柿」に掲載す。
著書『地球物理學』『海の物理學』（ローマ字書き）『藪柑子集』『冬彥集』『萬華鏡』、他に學術論文、報告等がある。

齋藤茂吉集

歌人は歌を作り、「文章排悶」の道理だから、それでいゝ、訣であつて、萬葉集の歌人には歌論と云ふものはない。それだから本邦歌論史を論述するものは、為方なしに古今集の序ぐらゐからはじめるのである。併し、香川景樹の書いた門人詠草添削がきの文章などは景樹の歌より旨いところがある。奈何。

斎藤茂吉記

島木赤彦臨終記

一

大正十五年三月十八日の朝、東京から行つた藤澤古實君が、柿蔭山房に赤彦君を見舞つた筈である。ついで攝津西宮を立つた中村憲吉君が、翌十九日の午ちかくに到着した筈である。二十日夜、土屋文明君が東京を立つた。

翌二十一日の午過ぎに、百穂畫伯、岩波茂雄さんと僕とが新宿驛を立つた。たまたま上京した結城哀草果君も同道した。少しおくれて東京から高田浪吉、辻村直の兩君が立ち、神戸から竹鶴暁君が立つた。

上諏訪の布半旅館で、中村憲吉君、土屋文明君、上諏訪の[illegible]君と落合つて、そこで一夜を過ごした。中村、藤澤兩君の話に據ると、十七日に、主治醫の伴鎌吉さんが、赤彦君の黄疸の一時的のものでないことの暗指を與へたさうである。その夜、夕餐のとき赤彦君は、飯を見るのもいやになつたといつたさうである。十八日に攝津國を立つた中村憲吉君は、十九日に柿蔭山房に著いた。その時赤彦君は、煙草ももう吸ひたくなくなつた、ただ靜かにしてゐるのが何よりだと云つたさうである。翌二十日、中村、藤澤の兩君が諏訪上社に參拜祈願して護符を奉じて來た。赤彦君は、『ありがたう。おれにいただかせろ』といつた。こゑは既にかすかで、一語一語骨が折れる風であつた。夫人の不二子さんは護符を以て俯伏してゐる赤彦君の頭を撫でた。赤彦君は、『ありがたう』といつた。そして、『きたないとこに置くなよ』と云つたさうである。その夜、藤澤古實君に、言葉が跡切れ跡切れに、『己はな、いかんとも疲勞してしまつてなあ。餘病のために、黄疸のために、まゐるかも知れん』と云つた。その終りの『まゐるかも知れん』のところが急に大ごゑになつて、健康な時の朗々たるこゑを思はせたので、胸がぎくりとしたと古實君が語つた。

二十一日朝、赤彦君は首をあげて、皆に茶を飲みに來るやうに云つた。中村憲吉、藤澤古實、丸山東一、久保田健次の諸君、不二子さん、初瀬さんが集まつた。その時、藤澤君の美術學校卒業製作塑像の寫眞を見せると、『ありがたう。素直だな。しづかなのは一層むづかしいものだ』と云つたさうである。それから、

『どうもな。本病より餘病の方がえらいやうだ。齋藤もさう云つて來たよ。伴も同じ意見だ。餘病が、餘病が餘病だけですめばいいが、本病にはとりつけないで』とも云つたさうである。僕は、神保博士の意見として、どうも黄疸は單純な加答兒性のものでなく肝の方から來てゐることを手紙に書いたのであつた。それでも癌の轉移證狀であることは書けなかつたのである。赤彦君はそれゆゑ飽くまで黄疸を餘病と看做し、餘病を先づ退治して置いて、そして生きられるだけ生きようと覺悟したのであつた。それであるから、極力友人に會ふことを厭うて、靜かに身を保たむとしたのであつた。赤彦君は四五月の候になれば餘病を退治して、今度は樂しく友にも會はうと思つてゐたのである。赤彦君はその夜こんなことをも云つた。『伴さんは本當に熱心だからな。己ははじめは知らなんだ。一遍見て貰つたらもう伴さんに限るやうになつた』『自分ひとりではと思ふときには乾度ほかの人にも相談してなあ』『腕はあるんだ

からなあ』などとも云つたさうである。

二

二十一日に、中村憲吉君は校歌の話を爲出した。校歌といふのは、秋田縣角館中學校の校歌を平福百穂畫伯から囑付して赤彦君に作つて貰ふことになつてゐた。それを謂ふのである。すると赤彦君は、「北日本の脊梁の。千秋萬古やまのまに。偉靈の水を湛へたる。田澤の湖の水おちて。鮴瀬川とながれたり』云々と低いこゑで云ひ、憲吉君の批評をも求め、もう七分どほりは出來てゐることを云つた。その時、藤澤古實君が傍から、『ちよつと其を書いて置きませうか』と云つて、それから不二子さんもそれをすすめると、「書いちやいかん。それだでこまる』『みどころを取つて行かれるやうだ』と云つたさうである。

そのうち腰の痛みが出て來た。『水脈坊水脈坊。お客樣がゐていやかも知れんがおさへて呉れなくちや』と云つた。それから、『飲物も食物も皆さげてくれ。目のまへにあると溜まらんから』と云つたさうである。その時按摩が來たので皆が部屋を退いた。その時古實君に、『訂正を送つて呉れたか』と云つた。『はい、送りました』と答へると、『確だな』と念を押したさうである。この訂正といふのは、雜誌改造に出した、『風呂桶に觸らふ我の背の骨のいたくも我は痩せにけるかな』の下の句を、「斯く現れてありと思へや』と直し、憲吉・古實君の意見をも徵して、其をアララギの原稿にしたのである。それを謂ふのである。尙今雜誌を調べて見ると改造に出した歌をアララギでは少しづつ直してゐる。

信濃路に歸り來りてうれしけれ黄に透りたる漬菜のいろ　(改　造)

信濃路に歸り來りてうれしけれ黄に透りたる漬菜のいろは　(アララギ)

神經の痛みに負けて泣かねども夜每寢られねば心弱るなり　(改　造)

神經の痛みに負けて泣かねども幾夜寢ねねば心弱るなり　(アララギ)

二十一日夕七時ごろ、古實君との問答がある。

古實「中村さんは明日か明後日歸ると云つてゐました。どうも己が行つて赤彦を興奮させて濟まなかつたといつてゐました」

赤彦『中村は己が相手をしなんで不服らしかつたかな』

古實『そんなことはありません』

赤彦「己は一言いふにもつかれるのだ』

古實「……………」

赤彦『もう一度會ふさ』

古實』それでは明日でもお會することにしませう』

かういふ會話などがあつた。それから八時頃からいふことを云つたさうである。『畫伯、齋藤、岡、土屋、岩波――五人だなあ。……それへおれの病を君から委しく書いてやつて呉れ。まだ容態をくはしく書いてやらうとしてゐて書いてやらないから。……身のおきどころがない。……坐つてゐても玉のやうな汗が額から出る。いかんとも爲樣がないとさう書いてくれ。……そして物をいふと、それだけ疲勞するから、靜かにしてゐると書いて呉れ、醫者もさういつてゐるし、それが己には藥だ』から云つた。古實君は『かしこまりました』といふと、『用件はそれだけ』『あつちで寢て行つて呉れ』と云つた。

その夜の十時頃、妹の田鶴さん、不二子さん、水脈さん、初瀨さん、健次君、丸山君、藤澤君等を部屋に呼び、『おれはなるべく物を云はぬから、そつちでお茶を飲んで呉れ』と云つた。間もなく、辛うじて身を起し、『明治四十一年淺間山へのぼる。雲の海の上にあらはるる信

濃のやま上野のやま下野の山』（明治四十一年十一月）とおぼえておけ。日本新聞に出てゐる』と云つた。

その時、赤彦君のうしろに猫がうづくまつて喉を鳴らしてゐた。これは赤彦君がいつも猫を可哀がるので傍に來てゐるのであつた。皆が、猫の話をし、夏樹さんの猫をいぢめる話などをしてゐると、赤彦君は、「初瀬、歌の原稿を書け」と云つた。そして、『わが家の猫はいづこに行きぬらむこよひもおもひいでて眠れる』と云つた。暫くして、「ちがつた。ちがつた。猫ぢやない。犬だわい」と云つて笑つた。これは數日前に居なくなつた犬のことを氣にして詠んだ歌である。

わがいへの犬はいづこにゆきぬらむこよひもおもひいでてねむれる

その後は遂に歌を作らずにしまつた。この歌が赤彦君の最終の吟となつたのであつた。

三

二十三日朝、土屋君は僕を伴さんのところに連れて行つて呉れた。僕は初對面の挨拶をし、初診以來熱心の治療に對して謝した。伴さんはその前にも、赤彦君の病狀に就いて委しく通信され、また黃疸のあらはれた三月一日には態々電話で知らせて呉れたのであつた。午過ぎに、平福・岩波・中村・土屋の諸君と伴さんと僕と柿蔭山房に出かけた。

家に入るところの道は霜解がして靴がぬかつた。松樹はもとの儘だが、庭は廣げられてあつた。大正十年の夏に僕夫婦の一夜宿つた部屋には炬燵がかけてあつて、そこに諏訪の諸君があたつてゐた。暫くして先づ伴さん、中村憲吉君、僕の三人が部屋に入つて行つた。部屋は新築したばかりの書齋である。いままでのは、書齋も客間も一しよで、書きものなどの散らばつてゐる時には困るといふので、元の土間の處に書齋を造つたのであつた。その炬燵に赤彦君は俯伏して、頭のところに兩手を固く組んでゐる。伴さんは來意を告げた。すると赤彦君は辛うじて顏をあげ、それから兩手を張つて姿勢を正し、そして、『ありがたう』と云つた。このこゑは低くそして幽かであつた。そしてその儘また俯伏してしまつた。赤彦君の顏面は今は純黃色に變じ、顏面に縱横無數の皺が出來、頰がこけ、面長くて、一瞥沈痛の極度を示してゐた。

『だいぶ瘦せたなあ』と僕は云うた。すると赤彦君は、「冷靜だ。極めて冷靜だ」と云ひながらその儘俯伏してゐた。僕は咽のつまるやうにおぼえて唯『うん』と云うたのみであつた。僕はその時、三月十二日に、古今書院主人橋本福松君が柿蔭山房をたづねた時に、赤彦君がこゑを擧げて泣いたといふことを思ひ出したのであつた。赤彦君は暫くして極く靜かに、「伴先生は毎日診て下さるが齋藤君は久しぶりだから、どうか見て呉れたまへ」と云つた。僕は伴さんから聽診器を借りて型のごとくに診察をした。その間、赤彦君は我慢をして起直つてゐた。それからまた俯伏してしまつた。暫くして僕は、「壽伯も、岩波主人も來てゐるから、どうか會つて呉れたまへ」といふと、赤彦君は、『どこに』と大きなこゑを出して顏をあげた。そして黃色の大きな眼を睜つた。『此處に一しよに來た』といふと、今度はただ點頭いた。そこに平福・岩波・土屋の三君が入つて來、中村・藤澤の二君も交つて談笑常の如くにした。赤彦君は新來の客には一々丁寧に會釋をし、をかしい時には俯伏した儘笑つた。それから、「若い連中も來てゐるから會つて呉れないか」といふと赤彦君は、ただ點頭いた。そこに加納曉、結城哀草果、高田浪吉、辻村直の諸君が入つた。赤彦君は

一寸うなづき、『おれはなるたけ物を云はぬが、君等はいろいろ話してくれたまへ』と云つた。それでも種々歌話についての短評などをも云つた。氣になると見えて發行所のことなどをも云つた。それから、『おれも生きられるものなら生きたいのだが』といふ幽かなこゑも聞えた。その間に僕等に茶を饗することを命じたり、ぼいゝんたんを持つて來て食はせることを命じたり、いろいろ細かいところに氣が付いてゐた。そして僕等は諏訪湖からとれる寒鮒の煮たのを馳走になり、酒をも飲んだ。これは一々赤彦君の差圖によつたのであつた。僕等は病牀の邪魔をしたことを謝しながら、それでも二回まで會つた。その時赤彦君は、『何だかこれではあつけないやうだな』と云つた。僕等は、明日二たび邪魔するだらうことを告げて柹蔭山房を辭した。

その晩、急に氣のゆるんだやうにおぼえて、みんなは布半旅館で馬肉を食ひ、坐り相撲を取り、將棋などを差した。百穗畫伯は赤彦君の病顔の寫生圖を作つた。夜更けて温泉に浴し、靜かに眠らうとしたが、心が落付いて來ると赤彦君の顏容が眼前に髣髴としてあらはれて來た。諏訪の諸君も、それから中村憲吉君も、數日來の張りつめた心に幾分の緩みを得て、そして酒に醉うたのであつた。森山汀川君は今夜向うにつめてゐる。藤澤君は夜更けてから向うに宿りに行つた。

四

三月二十三日午前、皆して二たび柹蔭山房に行つた。ゆうべ、百穗畫伯の『丹鶴青瀾圖』の寫眞を赤彦君が見たときのことを森山汀川君が話して呉れた。赤彦君は努力して兩手を張つてそれを見た。そして、『これはたいしたものらしい』と云つた。それから、『どうも寫生に徹したものだ』とも云つたさうである。そこで、けふも赤彦君の枕頭でその繪の話などをし、時に諧謔談笑した。午餐には諏訪湖の鯉と蜆とを馳走になつた。これは、『どうも何もなくていけないが、鯉と蜆でも食べて行つてくれたまへ』といふ赤彦君の心盡しであつた。靜かに籠つてゐたい赤彦君の病牀を邪魔したのさへ心苦しい。然るに赤彦君は苦しいうちにかういふ心盡しをされるのであつた。僕等は悉く馳走になつた。

午後三時に伴さんが見えて、注射を二とほりされた。僕もそのとき同座した。注射の一つは强心の方の藥で、一つは神經痛のための藥であつた。この注射は赤彦君から進んで所望されるので、今朝から催促されてゐたものである。それから一時間ばかり經つて僕等は二たび病牀を見舞つた。その時には赤彦君は珍らしく機嫌好くていろいろの話をした。これは强心の方の藥にコフエンが入つてゐるので、それが神經に働いたためであらうか。角館中學校の校歌の話になつたとき、『つまり茶話會などの時に歌ふのもあつていいですね。何とか謂つた。佐竹義敦、小田野直武は日本洋畫の紅二點、といつた調子ですね。デカンショ式でも好し。男美術に女の美術、美術々々で苦勞する、と云つた調子ですね』『天にそびゆる秋田の杉も嚴を貫く根元から。それから、行つて見たかや田澤の湖へ、そこの浮木の下のみづ。かういふのは幾らでも出ます。校歌の方は一遍妻に書かせてみます』こんなことを赤彦君は俯伏しながら云つたので、皆が愁眉を開いて喜んだのであつた。けれども赤彦君は、このごろ眠りと醒覺との界で時々錯覺することがあつた。ゆうべあたりも、『おれの膝に今誰か乘つてゐなかつたか』などと問うたさうであつた。

そこで、赤彦君は皆に茶を饗することを命じ

た。その間に中村憲吉君は冷水を音させながら飲下して、『實に旨い。これが一等です』などとも云つた。僕は、この分ならば赤彦君の壽命は三月一ぱいは保つであらう。そして短歌の方の製作も幾つか出來るだらうと思つて、祕かに喜んだのであつた。そして、四月の四日過ぎには少し暇になるであらうから、その時また出直して來て邪魔するなどとも云つた。けれども僕の眼識は欲目のために鈍つてゐて、赤彦君は三月盡を待たずに歿し、短歌の製作も「犬の歌」以後は絶えたのであつた。

僕等は赤彦君のまへに僞を言ひ、心に暗愁の蟠りを持つて柿蔭山房を辭した。旅舍に著いて、夕餐を食し、そして一先づ銘々歸家することに極めた。それまで湯に入るものは湯に入り、將棋を差すものは將棋を差した。心が妙に興奮してゐて、思はぬ所ではしやいだりしたのであつた。

五

その夜十一時幾分かの上諏訪發の汽車で、中村憲吉君は攝津に向ひ、僕等は東京に立つた。平福百穗、岩波茂雄、土屋文明、高田浪吉の諸君同道である。

朝六時頃新宿驛に著くと、屋根瓦の上に霜が眞白に置いてゐた。今ごろなんだつてこんなにきびしい霜だらう。さうおもひながら僕は家に著いた。家には父母も妻も誰もゐなかつた。これはゆうべ妹の死報に接して、その方につめかけてゐたのであつた。妹は、ゆうべ僕らが上諏訪を立つて少し來たころに歿したのである。僕は實に混亂せんとする心を無理におししづめて暫く眠つた。それから外來診察をし、溜まつてゐる手紙端書を少し書いた。そこへ、今井邦子さんから電話がかかつて、どうしても一度、島木先生にお目にかかりたいといふことであつた。僕は直ぐそのことを否定した。今井さんは涙を流してゐる風であつた。兎も角今夜アララギ發行所に來てもらひたい旨をいつて電話を切つた。

午後に僕は妹を弔ひに行つた。妹は安らかな顏をして死んでゐた。妹が生んだ大きい方の女の子は珍らしい客が來るので切りにはしやいでゐるのも、ひどく僕を感動せしめた。夕刻に妹の家を辭して、途中で蕎麥を食ひ、その足でアララギ發行所に行つた。

發行所で今夜は、同人の重立つた人々に來て貰つて、今日まで祕して居つた島木赤彦君の病氣の經過を報告しようとしたのであつた。席には土屋文明君、橋本福松君もすでに見えてゐた。僕は同人の重だつた人々に赤彦君の疾病の經過の大體を話し、一月二十一日に伴さんから胃癌の宣告を受けたこと、二月二日に胃腸病院の神保孝太郎博士の診察を受けたこと、次いで佐藤三吉博士の診察を受けたこと、今はすでに重篤の狀態にあることをも云つた。そして、赤彦門下の三人の女流は岡麓さんと一しよに明日信濃に立つこと、そのほかの諸君は病氣の邪魔になるから行かぬことを約したのであつた。同人のうちにはこらへ切れない程赤彦君に會ひたい者もゐたが、僕は、赤彦君の壽命は三月一ぱいは保つやうに思はれたので、強ひてさう約束してもらつたのであつた。僕はなほその席で、これまで口を緘して赤彦君の病氣を通知しなかつた訣をも話した。「實は發行所に起臥してゐる高田浪吉君にも知らせなかつたのだから」といふやうなことも其時附加へたのであつた。夜ふけてから僕は家に歸つた。

翌二十五日午前の新宿發の汽車で、岡麓さんは今井邦子さん、築地藤子さん、森田幸代さんの三人を連れて信濃に立つた。午後に僕はアララギ發行所に行き、赤彦君と親交のあつた二

三の方々に赤彥君の病のすでに篤きことを告げた。なほ數人の方々に手紙を書かうとしてゐるところに、發行所宛に赤彥君危篤の電報が屆いた。僕は手紙を書くことをやめて家に歸つた。家にもやはり電報が屆いてゐた。その夕すぐさま岩波茂雄さんは信濃へ立つた。夕食後、アララギ發行所に行くと土屋文明君はじめ七八人の同人が集まつてゐた。留守居萬事を土屋文明君、高田浪吉君に頼み、十時幾分かの汽車で新宿驛を立つた。橋本福松、高木今衞、馬場謙一郎の三君同道した。夜が更けても目が冴えてなかなか眠れない。甲府驛で辨當を買つて食つた。

『おや。雪だ雪だ』暫くして汽車が信濃に入つたとおもふころ、かうひとりが云つた。

『成程たいへんな雪だ。いつこんなに降つたかな。ゆうべあたりかも知れんな』からまた一人が云つた。二日まへ此處を通つた時には雪はすつかり消えてゐたからであつた。

『おや。まだ降つてゐますよ。吹雪ですよ』『なるほど、こいつはひどい。かうして見ると信州の氣候はやつぱり鋭いんだね』こんなことをも云ひ合つた。島木赤彥君の息は既に絕えてゐるだらうとも思ひながら、こんな會話をするのであつた。曉天に近い信濃の國は一めんの雪で蔽はれ、それを烈風が時々通過ぎて、吹雪の渦を起させてゐるのであつた。

六

三月二十六日午前五時四十分に、四人は急いで上諏訪の停車場で降りた。町の家々は、未だひつそりとして居る。雪のさかんに降るなかを四人は布半旅館にたどりついて、戶を破れる程たたいた。

布半には東京から來た人々はもう誰も宿つてゐなかつた。赤彥君はもう駄目に相違ないといふ豫感が強く僕の心を打つたが、女中は、守屋喜七さんの宿つてゐられることを告げたので、四人は守屋さんの部屋になだれるやうにして入り込んだ。守屋さんは、赤彥君の息のまだ絕えないでゐることを語られた。赤彥君の親しい友である守屋さんは病をおして長野から來てゐたのである。

四人は女中をせきたてて、人力車を雇つてもらつた。雪の降るなかを人力車は走るけれども、それがもどかしい程遲い。高木村の入口で人力車から降りて坂をのぼつて行つた。息を切らし切らし家に著いた時には、もう雪は小降りになつてゐた。入口から直ぐの部屋には昨夜來赤彥君の枕頭をまもつた人々の一部が疲れて眠つてゐる。森山汀川君は直ぐ僕たちを赤彥君の病室に導いた。

赤彥君は今は仰臥してゐる。さうして、純黃色になつた顏面から、二日前に見たときのやうな縱橫無數の皺が全く取れて、そのために沈痛の顏貌は極く平安な顏貌に變つてゐる。そして平安な息を續けてゐるけれども、意識はすでに淸明ではなかつた。時々眼を半眼に開き、瞳はもはや大きくなつてゐた。

主治醫の伴さんは、きのふ以來歸宅せずに全く赤彥君の枕頭を護られたのであつた。伴さんはかういふことを語られた。赤彥君はきのふ迄は、いつもどほり神經痛のための注射を要求されたさうである。『今日もやはり注射をしませうか』と問うたとき、『もちろん』と答へたが、それが非常に幽かなこゑであつたさうである。今では神經痛のために仰臥することが出來ずに、おほむね炬燵に俯伏になつてゐたのが、昨夜以來は全く仰臥の位置の儘だといふことである。きのふ以來、急に脈搏が惡くなるので、虛脫の來るのを恐れたといふことである。さういふことを伴さんは語られた。昨夜十二時過ぎに狀

態が惡くなつて、みんなが枕頭につめかけたのであつたが、それが少しく持直して今日に及んだのであつた。

藤澤古實君はかういふことを話して呉れた。きのふ、岡麓さん、今井邦子さん、築地藤子さん、阪田幸代さんの見えられたとき、『先生。岡先生がおいでになりました』といふと、赤彦君は辛うじてからべを起して、銘々に點頭いたさうである。そして『ありがたう』といつたが、それが恐らく最後の言葉であつたのであらう、といふことであつた。

それからかういふことも話して呉れた。二十三日、僕等友人が皆辭して歸つた日である。その日の夕食後、長女初瀬さんが、『今夜はお父さんはえらい樂のやうだね』と云つたさうである。さうすると赤彦君は、『大敵退散した』と云つて笑つたさうである。『大敵』といふのは、赤彦君が靜かに靜かに籠つてゐたかつた病牀に、どやどやとつめかけた平福・岩波・中村・土屋・僕その他の友人、門人を謂つたのであつた。さうして赤彦君はつづいて、『來る人も遠いところを容易ではないよ。感謝しなければならないよ。齋藤はおれの體を氣にして來て呉れたし』と云つたさうである。その言葉は遲く、切れ切れで、幽かなのである。一語いふにも骨が折れるのである。

炬燵に俯伏して頭のところに手を組んでうつらうつらしてゐた赤彦君は、その夜の十時過ぎに居合せた家族、親戚の皆を枕頭に呼んで、『今晩おれはまゐるかも知れない』と云つたさうである。併し暫くすると、枕頭でみんなに茶を飲ませ、『これで解散だ』といつたさうである。それが二十三日夜のことであるから、二十四日なか一日置いて、二十五日には意識がすでに濁りかけたのであつた。

二十六日は午になり午後になり、赤彦君の狀態は刻々に變つて行つた。主治醫は、三時間おきに強心の藥を注射した。次男周介君は、いま入學試驗に行つて居り、けふの正午までに體格檢査が濟む筈である。そして直ぐ汽車に乘れば今夜の三時に上諏訪驛に著く筈である。それまで赤彦君の息を斷たせまいといふ主治醫の念願であつた。そこで夕刻、リンゲル氏液五百瓦をも右側大腿の内側に注入した。それから、息のあるうち寫眞も撮りたい。それから藤澤古實君が土を用意して來て居り、息のあるうち恩師の顏を塑にとりたいといふので、夫人不二子さんの許を得て、寫眞も撮り、面塑も出來た。そして二十六日は暮れた。

夕食後、九時になり、十時になり、十一時になつたころ、息も脈も細り體が冷えかけた。そのうち夜半を過ぎたので一まづ皆が枕頭を去つて休むことにした。主治醫の伴さんと僕と交る交る容態をまもつてゐたが、ふたりも少し休むことにした。午前二時に上諏訪驛まで周介君のむかひに行くやうに人を頼み、それから脈搏、呼吸の方を初瀬さんに看てもらふやうに頼み、僕もそのまま蒲團をかぶつてしまつた。さて小一時間も經つたかとおもふころ、しきりに赤彦君を呼ぶこゑがする。それは不二子さんのこゑである。それから初瀬さんのこゑである。それから周介君のこゑである。しかし、赤彦君は一言もそれに返辭をしない。呼ぶこゑは幾たびか續いて、それに歔欷のこゑが加はつた。僕は夢現の間にそれを聞いてゐるのであるから、何か遠い世界の出來事のやうに思へる。痛切に感じてゐるやうで、實は痛切に感じてゐない。けれども暫くそれを聞いてゐるうちに、僕は反射的に身を起して蒲團から顏を出した。これは何かの會釋でもするつもりであつたらしい。然るに僕が顏をあらはした時にはみんなの言葉が既に絶えてもとの靜寂に歸つてゐる。僕は急劇に

明るい電燈の光を目に受けたので、一語も發せずに二たび蒲團をかぶつてしまつた。蒲團をかぶつてしまふと意識がだんだん晴れて來るのをおぼえた。そして先程の赤彦君を呼ぶこゑのことが寫象となつて意識にのぼつて來た。氣丈な不二子さんは僕等のまへにつひぞ今まで涙を見せたことはなかつた。これは侍の女房の覺悟に等しい心の抑制があつたからであらう。然るに今は他人の盡くが眠に沈んでゐる。赤彦君の枕頭に目ざめてゐるものは皆血縁の者である。そして終焉に近い赤彦君を呼ぶこゑが幾つ續いても、赤彦君はつひに一語をもそれに答ふることをしない。血縁の者はいま邪魔なく、障礙なくして慟哭し得るのである。僕は蒲團をかぶりながら兩眼に涙の湧くのをおぼえてゐた。間もなく雞鳴がきこえ、曉が近づいたらしい。その頃から僕は二たび少しく眠つた。

七

二十七日の午前六時半ごろ、主治醫と二人で診察すると、脈搏はもはや弱く不正で結代があつた。息も終焉に近いことを示してゐた。そこで主治醫の注意によりみんなが枕頭に集まつた。赤彦君は稀に齒ぎしりをし、唸つた。その唸が十ばかり續くと、息が段々幽かになつて行つた。そして消えるやうになるかとおもふと、また唸がつづいた。それがまた十ばかりつづいてまた息が幽かになつた。そのうち八時になつたので、みんなが暫く休んで朝食をした。その間に赤彦君を看護つてゐたが、平安な顏貌に幾らか苦しみの表情が出て來た。それを僕が凝視してゐると、幾ばくもなくその表情が取れて行つて、もとの平安な顏になつた。ときどき唸があつて、それが矢張り十ばかり續いた。九時に脈搏が觸れなくなつたので、居合せた人々が盡く枕頭に集まつた。

嚴父、夫人の不二子さん、健次さん、周介さん、夏樹さん、初瀨さん、水脈さん、妹の田鶴さん、弟の葦穗さん、その他の血族。長野から來られた守屋喜七さん。諏訪の田中一造、五味繁作、森山汀川、兩角喜重、丸山東一、藤森省吾、兩角丑助、堀内皆作の諸君。東京から來た金原省吾、白水吉次郎、鹿兒島壽藏の諸君。京都から來た宇野喜代之介、竹尾忠吉の諸君。それに上に記した岡麓、岩波茂雄、橋本福松、藤澤古實、高木今衞、馬場謙一郎、今井邦子、築地藤子、阪田幸代の諸君。僕が姓名を知らずにしまつて、また間合せるのに時の無い約十名。あはせて約四十名が枕頭に集まつた。北海道の令弟塚原瑞穗さん、それから小原節三、平福百穗、森田恒友、中村憲吉の諸君はいまだ途中にあつた。

赤彦君の安らかな顏貌は、一瞬何か笑ふに似た表情を口脣のところにあらはしたが、また元の顏貌に歸つた。その時不二子さん以下の血縁者はかはるがはる立つて赤彦君の口脣を濡した。それから主治醫伴さんの靜肅な診査があり、赤彦君の息は全く絶えた。時に、大正十五年三月二十七日午前九時四十五分である。

續いて朋友、門人の銘々が赤彦君の脣を濡した。その時僕等は、病弱のゆゑに、師の臨終に參ずることの出來ない土田耕平君をおもはざることを得なかつた。けふは天が好く晴れて、雪がどんどん解けはじめてゐる。友島木赤彦君はつひに歿した。痩せて黄色になつた顏には、もとの面影がもはや無いと謂つても、白きを交へて疎らに延びた鬚髯のあたりを見てゐると、柿の村人時代の顏容をおもひ起させるものがあつた。

佛法僧鳥

大正十四年八月四日の朝奈良の宿を立つて紀伊の國高野山に向つた。吉野川を渡り、それから乘合自動車に乘つたころは、これまでの疲れが幾らか休まるやうな氣持でもあつた。これまでの疲れといふのは、比叡山上で連日「歌」の修行をし、心身へとへとになつたのをいふのである。

乘合自動車を乘り棄てると、O先生と私とは駕籠に乘り、T君とM君とは徒歩でのぼつた。さうして、途中で驟雨が沛然として降つて來たとき駕籠夫は慌てて駕籠に合羽をかけたりした。駕籠夫は長い間の習練で、無理をするといふやうなことがないので、駕籠はいつも徒歩の人に追越された。徒歩の人々は何か山のことなどを話しながら上つて行くのが聞える。それをば合羽かむつた駕籠の中に聞いてゐては、時たま眠くなつたりするのも何だかゆとりが有つていい。

駕籠は途中の茶屋で休んだ時、O先生も私も駕籠からおりて、そこで茶を飲みながら景色を見て居た。茶屋は斷崖に迫つて建つてゐるので、深い谿間と、その谿間を越えて向うの山巒を一目に見ることが出來る。谿間は暗緑の森で埋まり、それがむくむくと盛上つてゐるやうに見える。白雲が忙しさうに其間を去來して一種無常の觀相をば附加へる。しばらく景色を見てゐた皆は、高野山の好い山であるといふことに直ぐ氣がついた。徒歩の二人はもう元氣づいて、駕籠の立つのを待たずにのぼつて行つた。

併し、女人堂を過ぎて平地になつた時には、そこに平凡な田舍村が現出せられた。駕籠のおろされた宿坊は、避暑地の下宿屋のやうであつた。

小賣店で、高野山一覽を買ひ、直接に鯖を燒くにほひを嗅ぎながら、裏通にまはつて、山下といふ小料理店にも入つて見た。お雪といふ女中さんが先づ來て、それから入りかはり立ちかはり愛想をいひに女中さんが來た。

「一院化はんも時たま來なはります」

かういふ言葉をそこそこにO先生をはじめ山下を出た。私等はこの日靈寶館を訪ねる豫定であつたが、まだ雨が止まぬので此處に一休するつもりで來て、雨の霽れるのを待たずに此處を出たのである。併し女中さんが二人で私等を靈寶館まで送つて來た。靈寶館の廊下から振返ると、二人の女中さんは前の小賣店の所で何か話込んでゐるのが見えた。靈寶館では、繪だの木像だのいろいろの物を觀たが繪には模寫もあり本物もあつた。薄暗いところで佛像などを觀てゐると眠くて眠くて堪らないことがあつた。これは先刻麥酒を飲んだためである。

それから私等は、杉の樹立の下の諸大名の墓所を通つて奥の院の方までまゐつた。案内の小童は極く無造作に大小高下の墳塋をば説明して呉れた。

「左手向ふ木の根一本は泉州岸和田岡部美濃守」

「この右手の三本は多田滿仲公です。當山石碑の立はじまり」

「左手うへの鳥居三本は出羽國米澤上杉公。その上手に見えてあるのは當山の蛇柳です」

「右手、鳥居なかの一本は奥州仙臺伊達政宗公。赤いおたまやは井伊かもんの守」

からいふことを幕無しに云つて除けた。
『太閤樣が朝鮮征伐のとき、敵味方戰死者位牌の代りとして島津へらごの守よしひろ公より建てられた』といふ石牌の面には、爲高麗國在陣之間敵味方鬪死軍兵皆令入佛道也といふ文字が彫つけてあつた。さういふところを通りぬけ玉川に掛つてゐる無明の橋を渡つて、奧の院にまゐり、先祖代々の靈のためにさかんに燃える護摩の火に一燈を獻じた。これは自身の諸惡業をたやすためでもある。それから裏の方にまはつて、夕景に宿坊に歸つた。

その夜、奧の院に佛法僧鳥の啼くのを聽きに行つた。夕食を濟まし、小さい提灯を借りて今日の午後に往反したところを辿つて行つた。この佛法僧鳥は高野山に啼く靈鳥で、運好くば聽ける、後生の好くない者は聽けぬ。それであるから、可なり長く高野に籠つたものでも、つひに佛法僧鳥を聽かずに下山する者の方が多い。文人の書いた紀行などを讀んでも、この鳥を滿足に聽いて筆をおろしたものは尠いのであつた。

私等は奧の院の裏手に廻り、提灯を消して暗闇に腰をおろした。其處は暗黑であるが、その向うに大きな唐銅の鼎があつて、蠟燭が幾本となくともつてゐる。奧の院の夜は寂しくとも、信心ぶかい者の夜詣りが斷えぬので、燈火の斷えるやうなことは無い。また夜籠りする人々もゐると見え、私等の居る側に茣蓙などが置いてある。私等は初めは小聲でいろいろ雜談を始めたが、時が段々經つに從つて口數が減つて行き、そこに横になつてまどろむものもあつた。

「から開化して來ては三寶鳥も何もあつたものぢやないでせう」
『第一、電車の音や、乘合自動車の音だけでも奴等にとつては大威嚇でせう』
『それに、何處かの旅團か何かの飛行機でもこの山の上を飛ぶことはあるでせう』
『いよいよ末法ですかね』
『それに山上講演のマルキシズムと、先刻の女中の、院化はんも來なはるとで攻め立てられては三寶鳥も駄目ですよ』
「山はこれでも可なり深いらしいですがね。どれ、小便でもして來るかな」
『もつと奧の方でなさいよ。ここだつて靈場ですから』
『承知しました』

杉と檜と鬱蒼として繁つて、眞晝でも木下闇を作つてゐるらしいところに行き、柵のところで小用を足した。そのへんにも幾つか祠があり、種々の神佛が祭つてあるらしいが、夜だからよくは分らない。老木の梢には時々木兎と蝙蝠が啼いて、あとはしんとして何の音もしない。

それから小一時間も過ぎてまた小用を足しに來た。小用を足しながら聽くともなく聽くと、向つて右手の山奧に當つて、實に幽かな物聲がする。私は、「はてな」と思つた。聲は、cha―cha といふやうに、二聲に詰まつて聞えるかと思ふと、cha―cha―cha と三聲のこともある。それが、遙かで幽かであるけれども、聽いてゐるうちにだんだん近寄るやうにも思へる。それから二つゐるやうにも思へる。私は木曾に一晩宿つたとき、夜ふけて一度この鳥のこゑを聽いたことがあるので、その時にはもう佛法僧鳥と極めてしまつてゐた。

『O先生、いよいよ啼きだしました。T君もM君も來ませんか』
四人は杉の樹の根方の處に蹲踞み、樹にもたれ、柵の處に體をおしつけてその聲を聽いて

ある。僕は、木曾で聽いたのよりも、どうも澄んで朗かである。私は心中秘かに、少し美し過ぎるやうに思つて聽いてゐたが、その時に既に心中に疑惑が根ざしてゐた。併し聲は蔑るべからざる聲である。その澄んで切實な響は、晝啼く鳥などに求めることの出來ない夜鳥の特色を持つてゐた。

そのうち、聲は段々近寄つて來た。さうして聽くと鳥はまさしく二つ居て、互に啼いてゐるのである。鳥は可なり高い樹の梢で啼くらしいが、少くとも五六町を隔ててゐる。私等は約一時間その聲を聽いた。

「どうも難有い、ようございましたね。」O先生はかう云はれた。四人は踵を返した。

『これで愈々、後生も惡くはないやうなものだ』などと云ひ云ひ石段を下りて無明の橋のへんに差しかかつた頃であつた。

『どうですか、木曾のと同じですか』から突然T君が私にたづねた。

『いや、實は僕もさつきから少し美し過ぎると思つて聽いてゐたんだが』から答へた。その間にくどい思慮をめぐらすといふやうなことも無かつた。

「さうでせう、あれは怪しいですよ。ひよつとすると人工かも知れませんよ。ひどい奴だ」からT君が笑ひながら云つた。

「Tさんは鋭いからねえ、あれはどうも本物だと思はれる。やつぱり疑はない方が好いんですよ」からO先生が云はれた。

「いや、私ひとつ見破つて見せます」T君も今度は少し氣色ばんでゐた。

四人はもう一度奧の院のかげに行つた。鳥は相變らず啼いてゐるが、先程よりもつと近くなつて來てゐる。その聲は澄明で、林間に反響してゐるところなどは、或は人工的のものの やうな氣もするが、よくよく聽くと、何か生物の聲帶の處をしぼるやうな肉聲を交へてゐる。私は折角運好くて聽いた佛法僧鳥であるからなるべく本物にした方が工合が好い、强ひてさうしようとするのであるが、矢張り心中に邪魔をするものがあつていづれとも決定しかねてゐた。T君は途々にも、あれくらゐの聲は練習さへすれば人工でも出來る。それに高い月給を拂ひ一家相傳の技術として稽古させてゐるのかも知れないなどといふ說を建てた。そこでO先生を除くほかは、若い淨土宗門の僧侶であるM君も、それから私も、あの佛法僧鳥の聲は人工の聲だといふ說に傾きながら歸路についた。時は十時半を過ぎてゐた。

その途中で一人の青年に會つた。その青年は矢張り比叡山上で私等と一しよに歌の修行をし、會の散じてから單獨で高野に來、今やはり佛法僧鳥を聽きに奧の院に行く途中なのであつた。

「今しきりに啼いてゐるところだから、非常にいい都合だ。ただ君に賴むがね、何時ごろ迄啼き續けてゐるか面倒だが確かめて呉れませんか。僕等はKといふ宿坊にゐるから明日の朝一寸知らして呉れたまへ」

からT君が青年に賴み、何か期するところがあるやうな面持で步いた。その時にはもういつのまにか大きな月が出て、高野の滿山を照らして居り、空氣が澄んでゐるので光が如何にも美しく、惡どく忙しくせつぱつまつた現世でも、やはり身に沁みるところがあつた。私等はそれでも提灯をつけたまま、到頭宿坊に歸つて來、何か發見でもした様な氣分で一夜ねむつた。

翌朝T君は、起きると直ぐ高野山の地圖を買

つて來て調べてゐた。貧しい朝食をすまして橫になつてゐると、そこにゆふべの青年が報告に來た。青年はゆうべ奧の院に行つた時には、鳥の聲はしきりにして居つたさうである。それが十一時半になるとぴたりと止んで、午前一時まで二たび啼くのを待つてゐたが到頭啼かずにしまつたといふのである。

この報告は、T君の說を確かめるのに非常に有力であつた。それのみではない。T君の調べた地圖に據ると、ゆふべ鳥の啼いた方向にはさう深い森林が無い。寧ろ淺山と謂つて好い。それから、そこを通ずる道路がありそこに一二軒の人家がある。

『どうです。聲の發源點は此處ですよ』

かう云つてT君は大きな手の指で、その人家のところを壓しつけたりした。青年は最初は何の事だか分からず、怪訝の顏をしてゐたが、佛法僧鳥の聲の人工說だといふことを知つて、『實に惜い』といふ顏をありありとした。玆に於て私等の三人と一人の青年とを加へて四人は人工說に傾いてしまつた。

けれども、O先生はこの說を是認されなかつた。『それは、Tさんの說のやうに人工かも知れない。けれども人工であつたとしても、數百年間この事を他へ漏らさない一山の人々は偉いんです。やつぱり本物の鳥と思つてきくんですね。それが空海の德でせう。正岡子規先生ではないが、弘法をうづめし山に風は吹けどとこしへに照す法のともしび。ですよ』かう云はれるのであつた。

私等は雨の晴れ間を大門のところの丘の上に上つて、遙か向うに山が無限に重なるのを見たとき、それから其處のところから淡路島が夢のやうになつて橫はつてゐるのを見たときには、高野山上をどうしても捨てがたかつた。または金堂の中にゐて轟く雷鳴を聞きながら、空海四十二歲の坐像を見てゐたときなどは、寂しい心持になつてこの山上を愛著したのである。

併し或堂內で、疊の上にあがつて杉戶の繪を見てゐると小坊主に咎められた。そこにあたかも西洋人夫婦を案內して來た僧がゐて佛壇の內陣の方までも見せてゐる。『あれはどうしたのだ』といふ。『あれは寄附をしたのです』と答へる。『馬鹿いへ。僕らも寄附はして居るんだぞ』と云ふ。斯かる問答は如何にもまづい表出の運動であつた。けれどもこの機緣も佛法僧鳥人工說に一つの支持を與へたのである。

私等はかういふやうな經驗をして高野山をくだつた。そして和歌の浦まで來たが、もう海水浴も過ぎた頃なので旨い魚を直ぐ食はせるところも見當らず、近傍に和歌の浦にて追ひ付きたりといふ句境にも遠いので、其處に夕がたまでゐてO先生と別れ三人は那智の方に行く汽船に乘つたのであつた。

それから丸一年が過ぎた。私等は去年やつたやうな歌の修行の集まりをば武州三峰山上で開いた。然るに三峰山上には佛法僧鳥がしきりに啼いた。もう日が暮れかかると啼く。月明の夜などには三つも四つも競つて啼いた。その聲は如何にも淸澄で高野山上で聽いたのよりももつともつと美しかつた。それから三峰では直頭の上で啼くので、しぼる樣な肉聲も明瞭であり、人工說などの成立つ餘裕も何もなかつた。T君も私もしばらく苦笑して居らねばならなかつた。ただ私等はおもふ存分佛法僧鳥のこ

ゐを聽き、數日して〇先生が山の上にのぼつて來られたとき、T君も私も〇先生のまへに降伏してしまつた。

一

私の寫生文はこれでしまひであるが、約めて一言とすることが出來る。どうも高野山上の佛法僧鳥のこゑは、あれは人工ではなかつた。あれを人工だと疑ひ、それを立證しようとした學説には手落があつて、結局その學説は負けた。けれどもかういふことが云へるだらう。あいふ夜鳥は早晩高野山上から跡を絶つかも知れない。さうして玩具の佛法僧鳥をばあそこの店で賣る時が來るかも知れんとかういふのである。

（昭和二年十二月）

良寛和歌集私鈔の序

正岡子規先生が良寛の歌に就いて一寸言つたのを何かで讀んだやうに記憶してゐた。いま檢べて見ると、それは雜誌ホトトギス第四卷第三號（明治三十三年十二月）所載の病牀讀書日記中にある。『歌は書に劣れども萬葉を學んで俗氣なし』とか、いはゆる歌人に勝ること萬々などと云つてゐる。其の後伊藤左千夫先生が良寛の歌について稍精しく論じた（明治四十年日本新聞所載、宗武の歌と良寛の歌參看）。兩先生の讀まれた良寛の家集は、村上半數氏が編輯し越後新潟の書肆小林二郎氏が出版した僧良寛歌集（明治十二年三月）である。そのうち大宮季貞氏が編輯して東京の讀賣新聞社から、沙門良寛和歌集が出版された（明治四十一年三月）。この書は一番歌の數も多く編輯の爲方も親切であると思ひ、此書より予の好きな歌を鈔して見ようと思ひ立つたのは大正二年春のころである。それよりも先に、先づ良寛の生涯一般を知らねばならぬと思つて參考書を集めて居たが、なかなか思ふ樣にならず、中村憲吉君の盡力により、小林存氏の『彌彦神社。附、國上と良寛』（大正二年四月、越後新潟萬松屋出版）と中村隆治君の盡力により『僧良寛詩集。附、文學士山崎良平述、大愚良寛』（明治四十四年、越後新潟精華堂出版）の二書を得たに過ぎなかつた。そして、良寛和歌集私鈔と題して、雜誌アララギ四ケ月分の原稿を作つたのは、大正三年五月のことである。併し、詞書のあるべき筈の歌でありながら詞書が書いてないのが多い。さういふのは予には眞の解釋が出來ない。ただ疑問のうちに想像を以て補充してゐたに過ぎなかつた。そのうち、西郡久吾氏の沙門良寛全傳（東京及長岡の目黒書店發販、大正三年一月）を手に入れ、此書を讀んで良寛の生活を始めて明かにしたと同時に、良寛の歌を釋く上に是非知らねばならぬ貞心や定珍などいふ人の略傳をも知り得た。そこで予は本書によつて『私鈔』を訂正増補し得たのである。

（大正五年記）

佛法僧鳥の辨

一

時事新報の正月に載つた、僕の「佛法僧鳥」といふ短い文章が、はからずも一代の批評家片上伸氏の目に留まり、一つ二つの難癖を附けられてゐるのを、時事新報の二月四日、五日の文藝欄で讀んだから、ついでに一言を費さうと思ふのである。

第一。片上氏は、僕らが高野山上で聽いた佛法僧鳥は、實は佛法僧鳥ではなく鼯鼠のたぐひでも聽いたのであらう。肝腎の佛法僧鳥を聽きそこねながら、いろいろの邪推を並べてゐるのは笑止でもあり、不純な自惚で、謙虛な心を失つてゐる證據だ、とかういふのである。然し片上氏のかういふ言葉は實は無駄な心配に過ぎないのであつて、あの短文にもすこしづつ書いておいた如くに僕は三たび佛法僧鳥を聽いて居り、それが皆まことの佛法僧鳥なのであつた。ここで少しくそれに註を加へるなら、一度は木曾山中で聽いた。その時には木曾の研究家と一しよに聽き、夜が明けてからは佛法僧鳥の巣やら糞の落ちてゐるのやらをも見せてもらひ、剝製をも見せて貰つた。佛法僧鳥といへば高野山の獨壇のやうにいふが、やはり諸國の山中にも啼くことが分つたといふので、其時木曾の人々は得意であつた。二度目は高野山で聽いた。このことは僕の短文の主眼點であつたから、ここに繰返すまでもないが、その聲を聽くまでには山上でいろいろ問ひただしてからの末であり、あの中にも、私は木曾に一晩宿つたとき、夜ふけて一度この鳥のこゑを聽いたことがあるので、その時にはもう佛法僧鳥と極めてしまつてゐたことさへ明記してある。それのみではない。鳥の啼聲の工合をさへ說明してある。僕は高野山で聽いた夜鳥のこゑを佛法僧鳥の聲だと斷定してゐるのに、さうでないとはどうして云へるか。それから三度目は三峰山上で聽いてゐる。これも僕の文章に明記してあつて、疑ふ餘地も無い佛法僧鳥のこゑだと斷定してゐる。以上の事實を打破るべき根據を一つでも片上氏は持つては居まい。若しそれでもぐづぐづいふなら、一たび八月の候に三峰山上に行つて、片上氏が高野山上で聽いたといふ佛法僧鳥の聲と比較するがよい。

然し片上氏はかういふだらう。そんなら、高野山上の夜鳥の聲を佛法僧鳥と斷定して置いて、なぜ人工の聲だなどと云ふ疑問が成立するかと、かう云ふだらう。それは疑問を起したところで毫もかまはない。人間には多少の差別こそあれ、いつでもさういふ懷疑心の働きがあり得るものと看做していいのである。僕の文章は、さういふ一寸した心的過程に觸れたに過ぎないのであるが、さういふ心の萌しをさへ、自惚とか、謙虛な心がないとか云つて得々としてゐる片上氏の如きは、猫八の猫眞似を以て眞の猫の交尾のこゑとなし、魯西亞渡來の女人の手品を目して不可測の心靈作用となし、まかり違へば僧侶淋汗の垢を飲んでこれを醍醐水となすの徒ではあるまいか。

二

第二。僕は佛法僧鳥の啼聲を、Cha……Cha……Cha……と啼くと書いた。それが片上氏の腑に落ちなかつたので、僕の聽いた夜鳥は佛法

僧鳥ではなく、むささびでもあつただらうといふことになつたらしい。そこで片上氏は一面僕の不用意と準備知識の貧弱とを冷笑しながら、佛法僧鳥の啼聲の講釋をして吳れた。

片上氏に從ふと、「その名に佛法僧鳥と呼ばれる如く、Bupposo と鳴く』のださうであるが、さういふ初學向きでは困る。佛法僧鳥が佛法僧と啼くといふのは、故意にさう思つて聽くからさう聞えるのである。恰も慈悲心鳥が慈悲心と啼くといふ如きたぐひで、佛教僧侶のこじつけから、さういふ錯覺に導かれたものである。それであるから、假りに、南洋土人とか、普通の兒童とか、歐羅巴人とか、佛法僧といふ文字の禪有味を知らない者をしてあの聲を眞似させてみるがよい。決して佛法僧などとはいはぬであらう。

但し、佛法僧といふ名は、慈悲心鳥、ホトトギス、ツクツクホウシ、コホロギ、スイツチョ、ガチャガチャなどの名の如くに、擬聲に基いた名であるから、まんざら無根據ではない。無根據ではないが、その啼聲をば唯一の Bupposo だけが眞實で他が間違ひであるといふが如き說は、あんまり幼稚なのである。ホトトギスの異名の如きは地方によつて隨分違ふのがある。それらもみんな經驗から出た命名であるから、一をのみ採つて他を貶してはならぬ。實用の場合は杜鵑なら杜鵑のみを採用して好いが、廣く之を論ずる場合にはいろいろの異名でもそれが間違ひだとは云へない。

もう一つ具體的にいへば、例へばツクツクホウシの鳴きごゑが、地方によつていろいろになつてゐる。クツクツホウシともいふ。オーシンツクツク、ツクシシヨウ、ツクシコヒシなどである。歌などには、ウツクシヨシと詠んだのさへある。俊頼の歌に『女郎花なまめきたてるすがたをやうつくしよしと蟬の鳴くらむ』といふのがあるのがその一例であるが、或人は『美し好し』と聽き或人は『筑紫戀し』と聽く。慈悲心鳥でもまたさうである。或人は『十一』と聽き或人は『慈悲心』と聽く。さういふことをも片上氏は少しは知つておく必要があるとおもふ。

三

そんなら、なぜ僕は Cha……Cha……Cha……といふやうに眞似たか。これはいろいろに試して見たすゑに、佛法僧鳥の鋭い肉聲、聲帶の顫動をばあらはすに最も適當だと思つたからである。僕はこの鳥の啼聲をば種々に眞似て試み得るが、今でも Cha……Cha といふこの眞似方で佛法僧鳥のこゑをば彷彿せしめることが出來ると信じてゐる。片上氏のいふやうに Bupposo では絞るやうな肉聲があらはれないのが缺點であり、片上氏の說明したやうに、裂帛の勢ひで響くところが出て來ない。それから佛教語の概念が混じて來て、聲の感じに邪魔を與へる。さういふことを避けるために、僕はああいふ眞似方を取つた。

ちなみに云ふ。三峰山上で多勢の友人で佛法僧鳥の啼聲を眞似たことがあるが、銘々極めてまちまちであつた。カアーン……カアーン……カアーン……とも聽いた人さへゐた。その人は鳥聲の肉聲よりも林間に響く鳥聲の鑛物音の要素に重きを置いたためであつただらう。かう考へて來ると、僕の文章中の、T君がなぜああいふ說を樹てたかといふことに就き、自惚とか何とか一言にして貶してしまはずに、もう少しT君に卽しての看方を取つて見てもいいと僕はおもふのである。

四

第三。僕の「佛法僧鳥」といふ文章の如きは誠に果敢ないものであるから、まづいならま

づいと云つて詫れるのなら僕は恐縮して引下がつたのである。然るに、片上氏は單に中味一部の事實詮議に就て義憤のやうな難癖を付けたので、受動的に一言辨ぜねばならぬことになつた。

有態にいふと、あれは一つの懺悔話なのであつて、山上僧侶の惡口などをいふのが主眼ではないのである。それであるから、『寺僧の墮落』などいふ文字は一ケ所でも使つてない筈であり、ただT君の説を書き進めて行く關係上、寺僧のことにも、料理屋のことにも、魚の香にも氣を留め、それ等を有の儘に寫生したに過ぎない。然も最後に、

『約めて一言とすることが出來る。どうも高野山上の佛法僧鳥のこゑは、あれは人工ではなかつた。あれを人工だと疑ひ、それを立證しようとした學説には手落があつて、結局その學説は負けた』と、僕は文中の『私』に云はせてゐる。僕は最後まで夜鳥の聲の人工説を固守してゐるのならば、片上氏は彼此いつてもいいだらうが、僕は懺悔し恥入つて、人工説をば棄ててゐるではないか。それを僕と同じ結論を繰返すために『高野の寺僧いかに墮落せりといへども、まさか三寶鳥の鳴聲までウソを言つて教へはしなかつたらう』と云ふごときは餘り幼稚ではないか。一體、イデオロギーを力説する片上氏がこんな幼稚なことを云つて文章の批評になつてゐるつもりなのか知らん。

五

それから、片上氏は、『齋藤氏があの文中高野山寺院及び僧侶等の腐敗墮落を皮肉に見てをられるのは無理もないが』といひ、『僧侶が墮落したからだらうなどと高野の參詣人どもは惡口をきく』といひ、『高野の各坊も、經濟上の苦境から淺ましい狀態に在ることは事實であるにしても』といふ。この片上氏自身の文章中の『無理もない』『僧侶が墮落』『淺ましい』等は、念を押すが、文字どほりに解して別に差支ないのであらう。

さうしておいて、『寺院も墮落してゐるだらうが、近世の歌人輩が自らひとり純なりと自惚れて、いかにすなほな心に乏しくなつてゐるかをも思はせられる』といふ最後の結論は、どこから導かれ來るのか。『無理もない』と肯定しておきながら、直に、『歌人輩が自らひとり純なりと自惚れて』と續けたあたりは、少しく臆面が無さ過ぎたのではあるまいか。

片上氏は、『近世の歌人輩が』といふ。けれども、かういふ言葉は少しく愼むと好い。なぜかといふに、かういふ言葉づかひは僕以外の歌人、然も徳川時代あたりまでの歌人をも包含するきらひがあるからである。そして、徳川時代の歌人であつたら、鳥聲人工説の如きものをば、片上氏と同樣に單に『笑ふべき失敗』などとして仕舞ふであらうが、僕らはそれをば餘り義憤化せずに取扱はうとしてゐる。概念に生きるものと、個々の經驗を重んずるものとの差別はそこにあり、舊派歌人のいけなかつたのは其處にあるのであるが、近世歌人を罵る片上氏は丁度そのへんの程度に居るのではあるまいか。

それから片上氏は、僕の佛法僧鳥の記述に科學者としての不用意があると云はれるが、ああいふ種類の寫生文に向つて科學的、自然科學的の記述を註文するのは少々困ることである。恰も二月四日の朝日新聞で片上氏は青野氏の批評に答へてゐる文中、『もし青野君が、今少し親切丁寧に私の文章を全體的に理解、把捉することの勞をしまなかつたなら』といふのがある。これは片上氏としては僞りのない感慨であつたのであらう。議論文同士でさへ筆者の

側に立てば、かういふ讀者に對する慾が出るのであるから、單純化を必要とする寫生文に向つて、筆者の意圖をば細かく感受することを讀者の側に望んでも、あへて不遜ではないと僕はおもふが、片上氏はどうおもふだらうか。特に僕の文中にO先生といふのがある。片上氏はちつともさういふところには觸れて居らぬ。僕の眼には片上氏はそれほど單純で幼稚で無邪氣だと見えるのであるが、かういふことも僕の自惚のせゐに片上氏は結論してしまふか奈何。

以上、若し僕の言に間違つたことがあるなら、一通りの修身談ではなしに、骨髓を訓へてもらひたい。熟慮のうへ若し僕が惡ければ僕は片上氏にあやまるであらう。

實朝の歌二首

春雨はいたくな降りそ旅人の道ゆきごろも濡れもこそすれ

はるさめにうちそぼちつつ足引の山路ゆくらむ山人やたれ

『二所へ詣でし下向に春雨いたく降りしかば』といふ詞書がある。二所は、伊豆權現(伊豆熱海の字、伊豆山にある。一に走湯權現ともいふ、箱根權現(相模元箱根村にある)の二所である。この二ケ所の權現は頼朝が深く信仰し尊いで鎌倉の將軍、執權だちもみな尊崇があつたところで、將軍が時々參詣したことが吾妻鏡にのつてゐる。鎌倉から往復の日數は大抵は六日間を要したが、極早い時は三日間で往復したとある。第一の歌の『旅人』は稍ひろい意味で自分も入つて居り、そのほか供のもの、一般の旅人も含まつてゐるのであらう。第二の歌は、山人(杣など)の行くところを見て、かう云つたのであらう。或は、『山人』は實朝自身のことであらうと解する人もある。萬葉の『足引の山に行きけむ山人の心も知らず山人やたれ』といふ歌參考になる。この舍人親王の歌は、元正天皇の『足引の山ゆきしかば山人の我に得しめし山包ぞこれ』(萬葉卷二十)に答へ奉つた歌である。なほ實朝の歌に『み吉野の山に入りけむ山人となり見てしがな花にあくやと』といふのがある。二つとも平淡で厭味なき歌である。

なほ、『二所詣下向に濱邊の宿のまへに前川といふ川あり、なが雨ふりて水まさりしかば日暮れて渡り侍りし時よめる』といふ詞書で『濱べなる前の川瀨をゆく水のはやくも今日のくれにけるかな』といふ歌もある。

蟲類の記

大正九年の一月半ごろであつた。長崎にゐて重い流行性感冒に罹り、ひどく苦しんだ。けれども、幸ひに七十日ばかりで大體癒えた。

そのころの流行はなかなか猛烈で、同僚の一人の教授は、私と同じ頃に發熱し、これも幸ひに一時癒えたが、中耳炎より乳嘴突起炎を併發し、それから腦膜炎になつて遂に死んだ。その間に私のゐた學校の校長の如きは、發病してより七日も經たぬのに死んでしまつた。私は病後のまだ青い顏をして勤めてゐると、校長の容態が愈々わるいといふので、私の血を採つて校長に輸血しようといふ相談まで受けた程であつた。私の體は幸ひに重い病氣に持こたへたので、私の血の中には抗體が豐富に出來て居るだらうといふ考へからであつた。

併し、六月になつてから、私にも餘病が起つて、私の咽から血が出て來た。毎朝出る僅かばかりの血痰がなかなか止まない。そこで縣立長崎病院に入院してそこに二週間ばかりゐた。恰もその時に、私の教へた學生で腎の結核を患つてゐる青年が矢張り入院してゐて、毎日私の病狀を見舞つて呉れた。學生のは小便から血がくだるのであつた。「先生、そんなに心配しても、あかんですばい」等と云つて私をなぐさめて呉れたりした。

それから、退院をして、東中町の小さい借家で寢てゐた。内科の助手がひとり隔日ぐらゐに來て私の靜脈のなかにカルシウム劑などをさして呉れた。

その家には一坪ぐらゐの狹い中庭がある。その隅の方に棕櫚の木が一本植ゑてあつて、あとは木も草もなく、飛石が五つ六つあつた。私は午後になると二階から降りて來て、中庭のところの縁側に腰をかけて沈默してゐるのが例であつた。長崎の夏はなかなか暑いので時には丸裸になつてゐるときもある。その暑い日の太陽もやうやく傾きかけるころから、きまつて蜘蛛が軒端から巣をかけはじめる。蜘蛛は大小おほよそ三つぐらゐ居て、急がしく巣をかけ、かけてしまふと、中心のところに無生物のやうな恰好をしてをさまつてゐる。それを私は毎日見て、別に飽きるといふことはなかつた。さういふ現實を見てゐるだけでも何か生存の義務を私が果して居るやうな氣持で、幾らか心が和らいだ。

さういふ新しい蜘蛛の巣も、買物に出た女中が歸つて來、私も夕餐を濟ますころには、細かい生物が幾つか犧牲になつて、蜘蛛の巣の亂れかかるのが普通であつた。すこし大きい蛾などが飛んで來てかかると、蜘蛛はいかにも殘酷な本性をあらはしてそれを食つた。雨の降らぬかぎり、私はさういふ有樣を毎日見てゐた。そして時々いやな氣持を起す時もあつた。かういふ現實にくらべると、植物性の食物は殘酷でなくていいなどといふことをも思つた。物質說から行けば、草食でも肉食でも違ふ道理はないが、感味が違ふではないか。精進食は單に淫慾克服のためのみではあるまいなどといふこと

をも思つた。

そのうち、東京の島木赤彦が遙々見舞に來て呉れた。そこで連れ立つて温泉嶽に轉地した。七月二十六日に登山し、次の日赤彦は下山した。私は温泉嶽の温泉地に八月十四日までゐたが、血痰の出るのが、それでも止まらなかつた。

その温泉地の旅舘の縁のところに夕がたになるといつも蜘蛛が巣をかけて、蛾の類などには、ゆうべの巣の殘りに露の玉がたまつてゐることなどもあつた。私は妙に蜘蛛の行爲に氣を引かれて、夕方になるといつも蜘蛛の出て來るのを待つやうになつた。

血痰の出るのが途に止まらずに私は八月十四日に下山して長崎の家に歸つた。長崎はそのころ暑い日が續いた。或日いつものやうに蜘蛛が棲場から出て來て中庭の空中に巣をかけはじめて居ると、いきなりその蜘蛛を襲つて、一しよになつて中庭に下りたものがある。私は驚いて見るとそれは黒色の蜂である。蜂は蜘蛛を咥へてはゐるが、蜘蛛が重いので飛翔することが出來ず、しきりに翅を震動させて、それでも地べたに擦るやうにして蜘蛛を運んで行つた。蜘蛛は少しも抵抗することが出來ないで、囚はつたやうになつて蜂に運ばれて行つた。

私は蜘蛛に妙な敵のあることを知り、その夜は何だかいやな氣持でよく眠れなく、訪ねて來てくれた知人に無愛想にしたり、小さい事に氣をいらだたせて女中を叱つたりして床に入つたのであつた。併し、私は次の日も次の日も中庭で蜘蛛が巣をかけ生物を食ふのを見てゐたが、蜘蛛は一つ數が減つただけで、いつもの如くに行動して居り、黒蜂が二たび來て蜘蛛を襲撃することもなかつた。

私の血痰はそれでもなかなか止まなかつた。私は人と對話するのが惡いのかも知れんと思つて、それ以來無言で暮すやうにし、女中とも來客ともすべて筆談で用を濟ますことにした。煙草を喫むこともその頃から廢した。

それから、齒科醫者に通つて左の奧齒を一つ拔いた。これは約一年の間しじゆう氣にしてゐても、勤めの身分で齒科醫者に通ふ暇のなかつたのを、この機會に拔いたのであつた。齒科醫者には女人が紹介して呉れたので、私は矢張り筆談で濟ますことが出來た。

八月三十日に長崎を立つて肥前國唐津海岸に行つた。温泉嶽に轉地しても好くなかつたので、海岸に行つて見ようと思つたのであつた。助手のＴ君が薬等一切を持ち私を護るといふことにして唐津にも同道して呉れた。唐津海岸でも毎日寂しい日を送つた。晝のうちは海岸の日かげに行つて時を過した。ある夜滿島の遊廓などを見に行つたが、私にはちつとも興味が無かつた。古城址にも行つて見たが、そこで氷水などを飲んで戻つて來たに過ぎなかつた。

ある日の午後、私は海岸の砂原に來て茫然としてゐると、私の傍に一つの黒蜂が飛んで來た。黒蜂は意外にも蜘蛛を咥へて來てゐたので、私は突嗟の間に長崎の家の中庭で見た黒蜂のことを想起し、なるべく邪魔をしないやうにしてその黒蜂の行動を觀察した。

黒蜂は、咥へて來た蜘蛛を其處に置いて、しきりにそのあたりを歩いたかと思ふと、細い禾本科の草の生えて居るその根方のところの、小さい砂の斜面に口と足と翅とで穴を掘りはじめた。穴がだんだん深くなるに從ひ、蜂は穴の中

に入り足で砂を掻出すやうになつた。穴が、一二寸も深くなつたとおもふ頃、蜂は穴から出て來た。それから唖へて來た蜘蛛を二たび唖へて穴のなかに入つて行つた。だいぶしてから蜂は穴を出て來て、さうして穴の口をふさぎはじめた。口がふさがると蜂は暫くその邊をさまようて居たが、何處かへ飛んで行つてしまつた。斯うして見ると、蜂は蜘蛛を食ふのではなかつた。次の日、私は念のため穴を掘りかへして見ようと思つたが、さうせずにしまつた。

唐津海岸は潮風の強いところである。それに血痰もいまだ止まらぬので、思切つて此處を去ることにした。私は唐津海岸で、「爲刑死靈菩提。享保二丁酉歳九月十七日願主觀峰念徹居士、俗名關善左衞門」などと記されてゐる石塔の文字を手帳にとどめたぐらゐで、九月十一日に唐津海岸を立つた。それから、T君に長崎に歸つてもらひ、私ひとりになつて、佐賀縣小城郡古湯といふところに行つた。ここは川上川の上流にある、極くぬるい湯の湧く浴場で、多勢の淋病患者などの行くところである。

長崎で病んで、暑い暑いと云つてゐるうちに、此處の田の畔にはもう曼珠沙華が群がつて咲くやうになつた。

ある日、私は川上川の川原の石に腰をかけて谿流を見てゐた。苔くさい樣な水の香が幽かにして來たりして誠にいい氣持である。そのとき私は傍の二三尺ばかり丈のある薄に似た草にとまつて、一つの蟷螂が黑蜂をつかまへて食つてゐるのを見た。凝視するに、その蜂といふのはまがふ方なく長崎の家の中庭で蜘蛛を襲擊した蜂に相違なかつた。私は實に驚いてこの現象を見た。黑蜂は抵抗も何も出來ずに蟷螂から食はれてゐた。

私は十月四日まで古湯に居た。そしてその間に私の血痰は止まつた。私は何事にも感謝し、古湯を立つて長崎に歸つた。長崎では既に諏訪神社の祭禮が始まつてゐた。それから、十月十一日に長崎を立つて、西浦上、木場郷、六枚板といふところに行つた。ここには、ささやかな鑛泉旅館があるので、暫く其處に隱れて生を養ふつもりであつた。けれども此處は食物がまづいので流石の私も辛抱しかねた。それでも毎朝、鹽みづのやうな味噌汁を飲み、夜は油煙の立つランプのもとで西行の家集などに讀み入つた。

それから、この近鄕にはいまだ古の天主教徒の子孫が存續してゐるので、その墓なども見てまはつた。「ドメナ松下ヒサ墓。行年九十二歲」などといふ十字の附いた墓もあり、「ドミニカ柿本マキ之墓。行年九歲」などといふ墓などもあつた。

此處から山道三里を越せば、長崎の西山へ出られるといふので、或日その途中まで行つた。一つ峠を越して、のぼりつめると大きな谷間になる。そこを越せば西山の峠になるところまで行き、展望を恣にしたのであつた。

その途中で、一つの澤蟹が、蟷螂を殺して鋏で運んでゐるのを見つけた。これも私にとつては實に不思議な光景であつたが、若かすれば、その蟹は人間の足などに踏みつぶされはしまいかとも思ひ、藪の中に追ひ込んでやつた。

十月十五日に六枚板を立つて、小濱溫泉に行

つた。それから諸處をまはつて十月二十六日長崎にかへつた。朝宵は肌寒くなり、私の病は大體癒えた。そして、病中はからずも觀察した蟲類の世界は動物學者には當然のこととして受取られる平凡なものに過ぎないとおもふが、病中であつただけ私は強い感動を受けたのであつた。つまり、如是の小事件でも、無限に繰返るべき、生物爭鬪輪廻の一相と思へば思へたからであつた。「生存のための鬪ひ」Kampf ums Dasein といふ語は、何か威勢よく聞えて、寂しい響きの無いのが物足りないが、校長が愈々息を引取つて、皆が校長の家を辭して歸るとき、校長の臨終の呼吸の有様がシャインストックの型になつて、さうしてから息が絶えた。そのことを同僚の一人は『鯉が水からでもあがつた如ある』などと形容しながら歩いたことを思ひ出し、私は二たび學校にも病院にも勤めた。

大正十年三月になつて、つひに私は長崎を去つた。あそこに丸三年五ケ月ばかりゐた。それから十月に出帆して、伯林に行つて、たまたま、アルツール・シュニッツレルの作『輪舞』といふ芝居を見た。これは場面は維也納で、あそこのドーナウ運河の土手のところから兵士と家婢とが下りて行く光景にはじまり、愛慾輪廻をあらはしたものであるが、爭鬪は爭鬪でも甘美の心持に始終し居り、同じ輪廻でも蟲類の命のやりとりを見てゐるのとはまた全く別の興奮を惹起させる種類のものであつた。

此芝居も、私の見た時には既に演出法はだいぶ改良されてゐた。元はなほ露はであつたのだが、伯林の小劇場で演出した以來、警視廳の方面からも、それから一般觀客の方面からも議論が出て、そのために裁判まで開かれたのであつた。演出法の改良されたのはさういふ理由に基いてゐた。

そこで、『輪舞のための鬪ひ』(der Kampf um den Reigen)といふ書物まで出來た。これは裁判での議論の記録を集めたものであつた。何でも幕をおろしてから二たび上るまでの幕間が、恰もある感動を起させるにいい時間だといひ、家婢が二たび出て來て、衣裳の亂れを直す爲方が丁寧過ぎるといふごとき、いろいろの議論があつたやうに覺えてゐる。けれどもさういふ議論はさういふ議論に過ぎず、さういふ輪廻は畢竟戀愛に伴ふ輪廻に過ぎない。

私は幸ひに丈夫で歸つて來て、時折蟲類のことをおもひ出すと共に、「鯉が水からでもあがつた如ある」といふ同僚の言葉をも思ひ出すので一筆書きとどめて置かうと思つたのである。

（七月二十日記）

オウヴェル行

（上）

巴里にゐるうち、オウヴェルのポール・ガッセー（Paul Gachet）さんのところにあるゴオホの繪も見たいと思つてゐたのであるが、もう十一月にも入るし、巴里の街にも朝毎に濃い霧がおりるやうになつた。これではもう駄目かと思つてゐると、畫家の宮坂さんが骨折つて吳れたのでガッセさんを訪ふことにした。

西暦一九二四年十一月二日の朝、巴里の北の停車場から出發した。宮坂勝さん、安倍能成さん、板垣鷹穗さん、それに僕夫婦五人の同行である。

汽車が一時間ぐらゐ走るとオウヴェル（Auvers）の驛に著いた。朝來寒い雨が降つて、田舍道を歩く靴が隨分よごれた。宮坂さんの案內でゴオホが自殺したといふところに行つて、午食をすることにした。そこはカフェも食店も下宿も旅舍も兼ねてゐた、Café Restaurant ≪Maison blot≫ といふ古びて小さい店であつた。床の上には古びて頑丈な大きい卓が四つ五つ並んでゐる。その向うには玉突臺が一つある。反對の側には棚があつていろいろなものが載せてある。その方の側で咖啡を作り、食物を煮たりするらしい。

肥つた上さんが出て來て快活に話した。午の料理を註文したところが少し手間どるといふので、そんなら料理の出來るまでにゴオホの墓に詣でようと相談した。雨が降るから僕の妻を此處に殘して四人で出掛けた。この家の前に役場がある。これはゴオホが生前に寫生したことのあるもので畫集にも載つて居る。ゴオホは七月二十九日に死んでゐるが、七月十四日にこの役場の記念祭か何かを描いてゐるのである。ゴオホは、普通の畫家の顧みないやうなものをもどしどし率直に畫いた。役場の寫生などもその一つと看做していいとおもふが、弱い神經を持つてゐたゴオホは晩年になるほど、纖細甘美の境から離れようとしてゐる。『詩的』な畫因を好かぬやうになつたといふよりも、もつと端的になつて行つたやうにおもふ。

僕等は村の坂道をのぼつて行つた。その途中に古びた寺が一つある。多分加特力の寺であらうか。『ゴオホが死ぬ少し前にこの寺を畫いたのがガッセのところにあります。それは隨分つきつめたいいものだと私はおもひます』かう宮坂さんが話した。

それから畑と畑の間の道を僕等は步いた。雨は橫しぶきにしぶいて、延びた草の上を行く僕等のズボンは大分上の方まで濡れた。しばらく行くと一劃があつて、それがオウヴェル村の墓地であつた。かういふ、うすら寒い雨の日には誰も墓を訪ふものはない。ゴオホの墓は入つて左手の方に直ぐあつた。小さい二基の墓石が立つてゐる。向つて左がゴオホの墓で、ici repose. Vincent van Gogh. 1853—1890 と書いてある。それから向つて右が弟の墓で、ici repose. Theodor van Gogh. 1857—1891 と書いてある。二つの墓の前には延びた草が未だ枯れずにゐる。僕等はその草を踏んで墓石に近づき脫帽をした。

雨はまだ劇しく降つてゐる。僕等はなづみながら元來た道を歸つて來た。店に僕の妻は寂しさうにして待つてゐたが、料理はもう出來かか

つてゐた。「肉も野菜もわざわざ新規に仕入れて來たやうよ」こんなことを妻が僕にいつた。料理は鄙びてゐたけれども、分量が多く腹に飽くことが出來た。

ゴオホは西暦一八九〇年七月に、いまだ若い身空で此の家の中庭で自殺を企てたのであつた。ゴオホは短銃を以て自らを射てたふれた。家の者が驚いて寄つて來、ゴオホを玉突臺の上に載せて手當したと云つてゐる。ここにある玉突臺は即ちそれであつた。弟のテオドル・ヴアン・ゴオホが巴里にゐたのを電報で呼び寄せた。手當はやはりゴオホの恩人の醫師ガッセがして呉れたに相違なかつた。

ゴオホの自殺した中庭には、今は鶏を飼つてゐる。金網の圍があり、その中に多くの鶏が啼いてゐた。近くに便所があつて、日光の差すところには蠅がたかつてゐた。この便所は昔の儘であるらしく、小便所には尿の中の石灰分が附いてゐた。その向うの一段高いところが納屋になつてゐて、雜具や藁などを積んである。犬が一つそこに寝て居り、時々僕等を白眼に見たが吠えようとはしなかつた。客馴がしてゐて東洋人種でも不思議がらないのである。

階段をのぼつて、ゴオホが下宿してゐたといふ部屋を見た。中庭に面した窓のある狭い部屋で、木製の床があり、その外歐羅巴のいづこの田舎にもある家の部屋と變りはない、貧しい寂しい部屋である。

ゴオホは寂しく、氣がいらいらして、發揚と沈鬱と交々に、この部屋に起臥し、郊外に繪をかき、常規を逸した行動も多かつたに相違ない。つきつめて來ると眠れなかつた夜が幾晩も續いたとおもふ。ただドクトル・ガッセの暖い保護のもとに、その日その日が暮れ、藥も飲み、繪もかいたと看ることが出來る。けれどもとうとうゴオホは自殺してしまつた。

目下、獨逸ハイデルベルヒ大學の教授に、ヤスペルス（Karl Jaspers）といふ人が居る。この人は今は哲學を講じてゐるが、醫學をも修め一時精神病學を專攻した。その著「精神病理學汎論」の世に行はれてゐるのはそのためである。ヤスペルスは僕の未だ民顯にゐたころ、ゴオホとストリンドベルヒの病志を考察してゐた。ヤスペルスは多くゴオホの書簡を根據として、ゴオホの疾病を Schizophrenie だらうと斷じてゐる。Schizophrenie は精神乖離症の義である。その命名は瑞西のブロイレルから出でて、おほよそ、クレペリンの謂ふ早發性癡呆（Dementia præcox）に該當するのである。僕は民顯にゐたとき、その説を一讀したことがあつたが、にはかに承服することを欲せなかつた。その後諸國を歩いてゴオホのものを觀、和蘭でその多くを觀、このたび此處で多くを觀るに及んで、恐らく、躁鬱性のものではなかつたかといふ考を抱くに到つたのである。

ゴオホは和蘭ではホオホといふ。此處の上さんはゴオグといふ。現存のガッセさんもさう呼んでゐるから、ゴオホ在世中も、このあたりではやはりゴオグと呼んでゐたのであらうとおもふ。

勘定しようとすると、上さんは白墨を持つて來て何が幾ら幾らと僕等の食卓に大きい算用數字を書きはじめた。そしていい發音をしながらそれを加へて行つた。今は晝だから農夫の働きどきである。夜分になれば此處にも村の大勢が集まつて來て、茶を飲み咖啡を飲み葡萄酒を飲み、そして玉を突いて、談笑に時を移すだらうと思ふ。

（下）

今のガッセさんは、ゴオホの恩人であつた醫師ガッセ（Dr. Paul Ferdinand Gachet. Lille.

1828 – Auvers. 1909) の子である。
　ゴオホの描いた醫師ガッセの肖像は二つあつて、一つは獨逸のフランクフルト・アム・マイン市にある。僕は西曆一九二二年の夏の旅でそれを見てゐる。一つは現在ここのガッセさんのところにある。二つの構圖は殆ど同じであるが、獨逸にある方にはガッセの肘を突いてゐる卓の上に佛蘭西版の假綴本が二冊置いてあるが、ガッセさんのところの肖像にはそれがない。肖像は學生帽のやうな小さい白つぽいのを冠つた初老の人で、面長で髭も頭髮も明褐色である。左の手を卓に置き、右手を右の頰杖にして、肘を卓上に突かせてゐる。服は冬服で天鵞絨の黑襟がある。服は紺の濃淡の繪具をとり交ぜ、いつもの短い強い線を重ねて塗りつぶしてゐる。その上に白い線を懸けて色合を出してゐる。大きな紐釦が三つ見えてゐる。卓の掛物は赤く、コップに草花をさしてある。背景は丘陵のやうな恰好にして藍と綠と白で塗つてゐる。その上の空隙はそれよりも淡くやはり同じやうな短い勁健な線で塗つてゐる。晚年のものとしては矢張りいいものとおもふ。ガッセさんの處にあるものは、服の紐釦が畫いてなく、草花ばかり横はらせてあつて、コップがなく、前にも記した如く書物二册が畫いてない。僕等から見れば獨逸にあるものの方が稍好いと思ふが、本人は現在のものを殘して一つを手離したものの如くである。なほガッセさんの處には、醫師ガッセの後姿をセザンヌの畫いたものがあり、セザンヌとガッセと並んだところの鉛筆畫も殘つてゐる。

　から故人ガッセの面影を念頭に浮べて、その子の現存のガッセさんに對すると誠に興深く感ずるのであつた。僕等は店で、先程よごれた靴を出來るだけ拭つて、そしてガッセさんのところを訪れた。主人は喜んで盡くの繪を見せて呉れた。何しろ住宅の部屋部屋に懸けてある繪を見せてもらふのであるから、かういふ雨の日にどやどや入込んで見てまはるのに氣が引けた。併しそれだけ感謝の念も深かつたのである。

　もう其處の廊下にもゴオホの素描などが懸つてゐた。麥畑の收穫のところ、二人で落穗を拾つてゐるところなどは、元々はミレー尊敬などから來てゐるとも思ふが、勁く流動してゐる線で描いた全くの寫生であつた。

　そのほか、セザンヌの初期の靜物で、面と人形と林檎などのあるもの、ゴオガンの裸體童子の圖、マネの描いたクウルベの像、ゴオホのやつたエッチング、ドミエの小品、セザンヌのパステル夕燒風景圖、木炭畫、ドウミエの馬車馬の頭、セザンヌの初期靜物數點、鉛筆畫などが部屋部屋に懸つてゐた。

　ガッセのお孃さんのピアノひく圖は、ゴオホの死んだ前月あたりに描いたもので當時孃さんは二十一歲であつたさうである。背景などは單に青と赤の點で埋めてある。床の處は赤・黃・綠などの短線で塗り、袴のところもさうである。かういふ繪は、もはや詩的ではない。曲がない。器械的であつけないところがある。ヤスペルスの說はかういふ所に根ざしてゐるかも知れないが、さうばかりも行かぬ。

　なほ、ガッセの娘さんが花園の中に立つてゐるところの圖もある。前景には黃赤の花が咲いて居る、草花の葉は明るく淡い線で描いてゐる。娘さんの顏の目のかき方などは東洋南畫家の筆法に見る如き單純さがある。白衣で立つてゐる孃の前方に植木鉢が數個ある。その向手はるかに樹木が矢張り強く波立つて動いてゐるやうに描いてゐる。その向うに家の屋根が見えてゐるところである。この繪は筆觸丁寧ではなく、一見極く粗雜のやうに見えるが、いか

にも素樸簡素の趣がある。民顯から立つて、獨逸、英吉利、和蘭と多くゴオホの繪を見て來て、この繪に對したとき、直ぐ僕はゴオホの疾病のことを思つたのであつたが、僕はやはりゴオホの晩年の畫風をこの繪に見出したのであつた。この畫風は恐らく疾病のためもあつたのだらう。けれどもゴオホは承知してやつたものと思ふ。ゴオホよりももつと新しい時代の佛國畫家は果してこのへんの畫風を見免してはゐまいと僕はおもふのであつた。

だんだん見てまはるうち、冬の日は短く、部屋の中はうすぐらいやうになつた。僕等は何となし急がねばならぬ氣持で行くと、中ほどの部屋に一つの繪が目に立つた。これはゴオホの墓まゐりに行く途中、坂の中腹にあつた寺院を描いたものであつた。

寺院は岡の上に建つてゐる。眞中に聳えた塔があり、そのほかの寺の屋根は左右に低まつてゐるが、窓などはいかにも曲つて描いてある。寺の前手は岡で、暗綠・黃・藍・淡青などで草原を描いてゐる。坂道がついてゐて寺の方にのぼるやうに描いてゐる。黃土・褐・黃などの短線に白と藍の線なども交へ、隨分複雜な線で積上げてゐるが、全體は赤土道を描いたものである。坂の左手も草原で、綠や黃や白や黃土や種々の繪具が使つてある。坂をのぼりつめたあたりの向うに青樹が描いてあり、その間に紅い屋根の家が見えてゐる。向つて右の方の端にも、先方にある人家が一つ二つ低く描いてある。いま一人の女がその坂道をのぼつて行くところである。女は黑い袴を穿いてゐる。上半身は白い。空は非常に深く澄んだ藍色に描いてあり、その中に二ところばかり雲が湧いてゐるところがある。併しその雲もいつものゴオホの描く雲とは違つて、まだまだ深いいろを示してゐた。その深い紺色の空に突立つてゐる寺院は思ひ切り歪んで、今にも動き出しさうに思はれる。宮崎さんは、「實に突つめた、恐ろしいやうな繪ですね」と云つた。また、「空はオルトラマリンと少しのプロシャブリュとを交ぜてやつたやうに思はれます」などとも云つた。この繪はゴオホの自殺する少し前の作らしく、強い日光と澄切つた空の色とに、渦卷く魂を打込んだ、極々急迫した繪のやうにおもふ。さうかと思ふと、赤土坂にある陰影などは決して見免してないのであつて、また寺院の屋根の橙紅のところに一寸青綠の繪具を塗つてゐるあたりは到底鈍麻した精神の持主の成し能はざるところである。寺院が歪んだならば、それなりにこだはりが無く、おのづから迫つてくる動律を保たしめてゐる。聰明な巴里の現代畫家は、かういふ道を辿らないのは好い。併しかういふ繪は世界に一人二人は必ず出現せねばならぬものである。

舟夫の妻が子を抱いて夫の歸りを待つ圖などもあつた。妻の傍には火が赤く燃えてゐるところが描いてあつた。火は紅と黃の短い線法を描いてある。畫集にも出てゐる姉妹圖もあつた。背景が綠と白つぽい青綠で波渦形を描いたゴオホの自畫像などもあつた。帶黃褐色の髭が生え、藍と淡綠の繪具で服を塗つてゐた。そのほか、Arles時代に描いた景色畫も五六點はある。

前景に蘭のやうな葉の熱帶植物があつて、そのもとに小草が生え、その向うに渦卷くやうな筆法の木立があり、その向うは青野で、そのまた向うに紅い屋根の家が見え、空の際涯に白雲の湧いてゐるといふ、ゴオホ一流の構圖の小品を見た頃は、そろそろ部屋は暗がりに入つたやうな氣がした。

僕等はガッセさん夫婦に深く感謝してそこを辭した。雨の降る道を急いで、巴里行の汽車に

乘込んだ。

僕の寫象に、ゴオホがアール時代に描いた寢室(chambre a coucher)と題した油繪が浮んで來た。木製の寢床があり、窓際に鏡が絲で壁に吊してあり、小さい卓上には、手水盥と、水入と、コップと、ブラシと香水瓶のやうなものが置いてある。その左手の壁に釘が打つてあつて、それにタオルがぶらさがつてゐる。椅子が二つある。腰かけるところは麥藁のやうなもので編んである。これは主に佛蘭西で見る粗末な椅子である。床の上方の壁に肖像畫の額が二つ、向に風景、その下に服などが懸つてゐる。

ゴオホはオウヴェルで起臥してゐた部屋はもつと狹かつた。併し大體同じやうなものであつただらう。僕は畫家でないが、どうもゴオホの境涯の分るやうな氣もして汽車のなかに暫し沈默してゐたのであつた。

獨逸マグデブルグの美術館にある、畫家寫生に出かけるところの圖は、恐らくオウヴェル時代のもののやうに推測されるが、粗い筆法で、麥の秋の頃の往來に黑い影をおとしながら、兩手に物を持ち、肩に道具を荷つて歩くひとりの畫家を描いてゐる。恐らくゴオホはこんな工合にして時々歩いてゐたものの如くである。ゴオホを傳した種々の書物に、そのへんの消息は書いてあるとおもふが、どうも、割合にしじゅう興奮してゐて、"Autismus"といつた狀態は尠なかつたのではあるまいか、僕にはそんな氣がしてゐる。

巴里の北の停車場で皆とわかれた。妻は旅舍に歸つた。宮坂さんと僕は、ルクサンブウル公園の近くの支那飯店に行つて、支那語、日本語、佛蘭西語の雜然と聞えるなかで、蟹の肉と豌豆の入つた、どろどろしたものを註文して慌しく口中に飯を掻き込み、おもひだしたやうにオウヴェルの事をも話合つたのである。

茂吉歌話鈔

○作歌の態度

「君は近ごろ短歌の形式論などばかり書いて威張りくさつて居るが、一體あんな事を考へながら短歌を作るのか。成程、實は己が歌を詠むときは些ともあんな事は考へてゐない。併しあの形式論も己から出たのだから、つまりは己の作物と合致しなければならんわけだ。」

こんな問答から、『作歌の態度說』のやうなものを云ふ氣になつたのである。ただ予の作歌態度の說は、予の作歌經驗から得た斷片記述に過ぎない。態度說の如きは自己の經驗を云ふより他に行き途はないであらう。從つて說はおのづから單ならざるを得ない。又論としてつまらぬものとなるのが通例である。予は二三度作歌の態度に就いて簡單にいつてゐる。併しそれはつまらぬ。それよりも古來既成の短歌を誦し味はつて、一つ一つの具體手法の分類を完成しただけでも、論としては興味あり有益であると思ふ。予がこれまで書いたものの多くは、既成の短歌をば一作物と觀ての論である。從つて論が客觀的になり、表現法や形式などに就いて云々するに至るのは自然の行方である。予を目して單純な技巧論者と做すのは見の淺なるものである。

予が短歌を作るのは、作りたくなるからである。何かを吐出したいといふ變な心になるからである。この内部急迫（Drang）から予の歌が出る。如是内部急迫の狀態を古人は『歌ごころ』と稱へた。この『せずに居られぬ』とは大きな力である。同時に悲しき事實である。方便でなく職業でない。かの大劫運のなかに有情生來し死去するが如き不可抗力である。予が『作歌の際は出鱈目に詠む』と云つたのはこの理にほかならぬ。

予は嘗て、『短歌は直ちに生のあらはれでなければならぬ。まことの短歌は、自己さながらのものでなければならぬ。一首を詠ずれば即ち自己が一首の短歌として生れたのである。まことの歌人は一首を詠ずるのに身の細るをもいとはぬであらう』と云つたことがある。少し氣が引けるが、その後作歌當時のことを省みると、是等の言も盡くは妄でないやうである。一首なり連作數首なりを詠歎してしまつた後の心は、やみ難い心の搖ぎを吐出してしまつた後の心は、恰もかの Ejakulation の後のやうに一種の疲れをおぼえる。

透徹した自己客觀は鈍根の堪ふるところでない。それゆゑ予はおのれの分身をつくづくとながめて、かの淨玻璃にむかふが如く涙を落さねばならぬ。予の歌は予の分身なれば、時にまた自らの歌を讀返して、なるほど此は自分かとなつかしむことがある。いとしけれども醜さの暴露である。予は萬人に示さむがために歌は作りたくない。作歌の際は願はくは他人を眼中におきたくない。『無常の世の短い生涯に、願はくはまことの己の一部を殘したい』おのれに親しむがためである。

（明治四十五年一月）

○歌ことば

短歌に於ける言語の調は、吾等の內的節奏さながらであるときはじめて意義をもつ。その言語には古語・現代語などの外的差別に要らぬ。

かくの如き論は既に陳腐である。それにも拘はらず、歌人のもろもろは此點を體驗してゐない。そこで吾等に向つて、「古典に沒頭した頭には近代語の自然と之に伴ふ新しき聲調の響とは解し得られまい」などといふに至るのである。

吾はもや安見子得たり皆人の得がてにすとふ安見子得たり

思はぬに至らば妹がうれしみと笑まむ眉引おもほゆるかも

この二つは、共に男の歌であつて、ともに嬉しい情緒を歌つた戀歌である。しかも作者の感情の調によつて、表現された一首には、各おのづからなる特殊の調がある。短歌に於ける言語の調は、概念を離れて刹那刹那の流轉動律の調たるべきことは、この二つの短歌を味うても分る。

足引の山がはの瀨の鳴るなべにゆつきが岳に雲たちわたる

我が宿のいささむら竹吹く風の音のかそけきとの夕べかも

ともに天然を詠じた歌である。しかも作者が天然と相抱化し、天然と同じ鼓動を打つに及んで、表現されたる一首には、各おのづから特殊の調がある。

短歌の詞語に、古語とか死語とか近代語とかを云々するのは無用である。そんな暇あらば國語を勉强せよ。そして汝の內的流轉に最も親しき直接なる國語をもつて表現せよ、必ずしも日本語のみとは謂はない。それ以外の一切は無意義である。吾等の短歌の詞語は必ずしも現代の口語ではない。それが吾等には眞實にして直截である。吾等が血脈の中には祖先の血がリズムを打つて流れてゐる。祖先が想に堪へずして吐露した詞語が、祖先の分身たる吾等に親しくないとは吾等にとつて虛僞である。おもふに汝にとつても虛僞であるに相違ない。その虛僞をも敢てして、なほ近代語・現代語などいふ外的差別見に囚はれてゐる汝が業因のありさまは、恰も乞食の斷食に相似のものである。

（明治四十五年一月）

○子規の書簡

予は前に短歌形式の根本特質を論じて、「短歌の形式は詠歎の形式である。この境を切に體驗してゐる予は、正にこの事實の發明者である」、などと云つた。なぜ『發明』などと云つたか。少しく心中忸怩たるものがある。しかし當時の予にとつては僞ではなかつたのである。當時の歌壇には、象徵歌、印象歌、生活歌などをいふ人があつても、短歌形式の根本特質については何等の說も出なかつた。それで、短歌の形式の事を云々すると、すぐ「形式論者」の一語を以て排し去つたものである。その時に當つて、予は既成短歌の分類と、予の作歌經驗から、如上の結論を得たのであるから、實際嬉しかつたに相違ない。そして、短歌は抒情詩であると論じた人が幾らもあつたに拘はらず、予の結論は、もつと深い處まで達したやうに思つたのである。をかしいやうな話である。ところが今から十二三年前に、正岡子規が歌の事を論じて、「歌に繪の如きが爲めに面白きものと、繪の如くならざるが面白きものと二種あり」といひ、そのつづきに、

「右の如き意見は、一昨年も今年も少しも變り申さず候。只一昨年と今年と少しく考の變りたるは、短歌は俳句の如き客觀を自在に詠みなこすことの難き事、又短歌は俳句と違ひて、主觀を自在に詠みこなし得る事、此の二事に候、一昨年頃は、俳句に詠み得る景色は、何にても三十一文字に入れ得べきやうに信じ候ひしかども、實際經驗を積むに從ひ、短歌

は俳句の如く輕快なる微細なる景色を詠み歎きを發明致候」(下略)
(明治三十三年四月。心の華第三巻第四號。坂井久良伎氏宛書信)

などと云つてゐる。當時、明星の第二號か第三號かで、與謝野鐵幹氏が、此言を暗に冷笑してゐるし、服部躬治氏も、今頃になつて短歌が主觀を詠ずるに適するなどといふのは遲い、俺などは最初から歌は主觀に始まつて主觀に終るものだと信じてゐた、といふやうなことを云つた。子規は飽くまで實際經驗から得た結論でなければ承知が出來なかつたのである。それゆゑ、「發明」といふやうな語も子規にとつては眞實であつたのである。この事は予にとつて極めて興味ふかい。なほ井上文雄も、「歌は人々本性の風體ありといふは予はじめて心附きたる」などと云つてゐるが、こんな明白なことでも本人にとつては、「發明」であつたのである。おもふに歌の道は悟入であるから、短歌作法などを讀むにしても實は分らないのである。悟入は個人的なものであつて、人に強ふることは必ずしも出來ない。悟入は心の飛躍である、[illegible]である。予は予の自負言を今は少しく離れて見てゐる。しかも自身予の嘗言を嘲笑することを欲しない。

(明治四十五年三月)

○言語の順直

短歌に於ける言語の順直・平明といふ事は、言語の調べが、心の動きさながらといふ樣に解すべきであつて、單に調子がよいとか、解り易いとか、なだらかだとかいふ、單純な意味ではあるまい。この事は口でこそ容易であるが實際ではなかなか思ふやうに行かぬ。しみじみと自分の力の足りない事を嘆ずる場合が多い。この場合吾等は言葉について勉強修練するより他に途は無い。それには古人の作物を讀み味ふのは一番便利である。そして現在の吾等には急務の一つである。言葉を勉強しなくも、どんどん佳い歌が詠めるなら、そんな面倒臭い事する必要はないが中々さう旨くは行かぬ。ただ古人の作を讀む際に知らず識らず古人の影響を受ける。これはどうも致し方が無いが、注意のしやうによつてそれが忽ち無くなる樣にする事が出來る。處が面白いのは何時迄もその影響から脱する事の出來ない人がある。それに就て橘守部の言は味ひ深い。(藝文第三卷一號)

「ただ古言をもてよむを、かしこきわざと心得めれば、先づ詞よりおもひよりて、心を古人に委ぬるゆゑに、多くはふる歌の口まねびとなりて、むげに聞くべき所のなきが多かり。又そのまねぶ歌も、よきはまねびあへずして、あやにくにわろきをまねび出めるぞすべきなき」

これならば致し方がなからう。ただ吾等の歌に「けるかも」がある故に「ふる歌の口まねび」と許し去る論者があつたら嘸面白からうと思つてゐたが、「古典に沒頭した頭」などとわれ等の歌に向つて臆面もなく云つた論者が現出したので、面白いどころか論者が可哀想でならなかつた。「心を古人に委ぬる」事は詩人としてつまらぬ事である。それでもロダンがいつた樣な達者流の多い現代歌人に比して、どこかに愛すべき點があるやうである。

(明治四十五年六月)

○作歌の過程の一つ

事象にぶつかつて、變な心持になつて歌でも作らうとすると、その心持といふのは取留のないぼんやりしたもので、如何表はしてよいか分らぬ。それを無理に表はさうとすると、とんでも無い自分の心持とかけ離れたつまらぬ歌が出來る場合が多い。その時その心持をち

つと把持して三四日經つと、朝霧が晴れて美しい太陽が見えて來る樣に、心持の核點とでも云ふ樣なものが偶然と心に浮んで樂に歌が詠める場合が多い。予の衝迫といふのはその詠みたくなる變な心持をいふのである。衝迫があつたから直ぐ歌が出來るとは限らぬ。

（明治四十五年六月）

○ひとりごとの歌

獨り居の寂しさに堪へぬ人々にいはう。縱ひ獨語するときにも、公けの前にゐるごとく、つつましくなくば、矢張り其は不行儀なともがらである。

これはニイチェの、「曉紅」のなかの言葉である。さはれ、吾等のやうに氣の弱い、はにかみ勝のともがらは、ひとり言の間ぐらゐは我儘でありたい。物をいぢり遊びながら、獨り物いふ童幼の如く、公けにかかはりなき吾等の≪Selbstgespräch≫を人知れず尊重したい。この日ごろは、獨りゐて靜寂を味ふ暇すらもなき吾等である。

嘗て便利のため、既成の短歌をば、「對詠歌」と「獨詠歌」とに分つた。これは主として作歌態度論の必要から出でたのである。言語發生の因は吾等の孤獨ならざることに出發してゐる。古事記の歌は矢張り「對詠歌」から始まつてゐる。古人の歌に優秀な對詠歌のあるのは偶然でない。而して、廣い意味に云へば盡くの短歌は對詠歌の性質を帶びたものである。茲ではいうとするのはもつと深くもつと狹義にしたものである。末世に生きてゐる現在の吾等は、獨語の色を帶びた歌を詠む場合が多い。そして少しも苦痛を感じない境地にゐるのだ。しみじみと戀をした事もないゆゑに、縱しまたあつても古人の樣に對者にのみ示すやうな幸福を感じ得る世とは大分遠く隔つてゐる。獨語の色調を帶ぶるのはおのづからである。從うて、獨語本來の性質たる、無顧慮と純正とを希ふのである。

「瓶にさす藤の花ぶさみじかければ疊のうへにとどかざりけり」この無邪氣さを希ふのである。われ等の歌の大部分は、ひとり言の性質を帶びたものである。歌ごころの動いたたまゆらは、願なくは、公けの前に立つ時の赤面とはにかみの苦痛から脱して琥珀いろの水飴のとろとろと垂るごとくに、心のゆらぎを垂れしめたい。空向いて歩む傲岸なる公衆の世から離れて、獸の死なむとする山の峽の石のもとに住したい。拓殖博覽會のギヤマンの瓶のなかの穀物のやうに、我等の微小な作物は活版され校正までされて、歌壇の遊びのなかに漂動しようとも、おのづからなる心もて稔り果てたる穀物の、おのづからなる心を希ふのである。

（大正二年二月八日）

○歌の形式と歌壇

われ等の微小なる歌は活版されて「歌壇」のなかに漂動してゐる。歌壇とは一つの遊戲現象である。をさなごの石蹴り遊びである。そこにおのづからなる約束がある。短歌の形式は即ち一つの約束である。最もプリミチーブな自然的約束である。生物發達に知られたる限りの理法あるごとく、短歌の發達にもおぼろげながら一定の理法がある。それは古事記から萬葉集にかけて通讀すれば歸納する事が出來る。萬葉集になれば、もう約束が成立つてゐる。『からいふ形式にしてお互に遊ばうではないか』と誰いふとなく云つてゐる。

それであるから、短歌形式の發達史を貫くものは、群集暗指の理法であつて、不自然なる拘束の結果では無い。自然的約束と前言したのはこれが爲めである。約束は絕待自由では無い。

ところが群集はおのづからして其約束に投ずるのは、奇妙といはうよりは止みがたき嚴肅である。われ等は便宜のため、〝Psychotaxis〟なる語をもつてこれを說明しようと思ふ。

三十一音詩形は我國語の性質と關係してゐる。國語の性質を鮮明にする事が出來たならば、三十一字をばもつと力強く說明し得るであらうが、今は出來ない。芳賀矢一博士の『日本文學と和歌』(心の花一月號)は一寸この點に觸れてゐるが、要するに分らない。

現代のわれ等は一般に約束などを面倒臭がつて、獨りでどんどん步まうとしてゐる。さういふともがらは顧慮せずにどんどん步むがよい。短歌などを後へに置いてどんどん進むがよい。たださういふともがらとは一處に遊ばないといふに過ぎないのである。

短歌の形式は不自由である。そこに自由な心を盛るのは虛僞に陷るといふ。一應明白な理である。ところが實はその虛僞なところより力が湧いて來るのだ。虛僞の生ぜむとする刹那に其と鬪ふ力から光明が放射するのである。短歌の形式をいとほしむ心は力に憚る心である。短歌の形式に紅血を流通せしめむとする努力はまさに障礙に向ふ多力者の意力である。『多力に向ふ意志』である。

おのれが程度の眞力を出したいのである。小さいながら短歌形式の不自由な抵抗にぶつかつて、力を出すのである。作歌態度の純乎たらむ事を願ふ。いつも短歌の形式を念々に意識してゐる。而してこの二つの間に少しも矛盾の無い所以である。抵抗に衝突して苦鬪した擧句に、西方の人が云つて吳れた〝Feldapotheke der Seele〟の妙歡喜を味ふのだ。これまでわれ等が短歌の形式に執著して來たのはこの爲めである。

而して短歌形式の不自由は我等の力に相當したものである。鬼ごつこが童男童女に相當するごとくに、されば今後若しもつと多力者たらしめて吳れるなら、もつと大きな障礙に向つてぶつつかるかも知れない。(大正二年二月八日)

○『雁かへるなり』の結句

嶺こえて秋こし道やまよふらむ霞の北にかりかへるなり　(土御門院)

をしむべき花の都をふり棄てて鈴鹿のせきを雁かへるなり　(爲忠)

さざなみの比良の山べに花咲けば堅田に群れし雁かへるなり　(宗武)

この結句の同じな三つを並べて見ると、矢張り一番大切なのは感じ方である、畢竟作者の如何といふ事に歸著する。感じ方に就いて云へば、第一も第二も大人の感じ方である。大人といつても一寸一句ひねらうといふものの感じ方である。殆ど百人中の九十人迄は大凡かういふ感じを持つてゐる。第三だけは子供の感じに近い。萬葉あたりの上代人の感じよりも稚い。宗武は、縱ひ萬葉を耽讀したとしても、この樣な感じ方をするといふ事は實際不思議なほどである。この人はまことに恐るべき天稟を持つてゐたやうに思ふ。時代もよし、周圍もよし、師匠もよかつた爲めでもあり、又年もとつてゐた爲めでもあらうが、實朝よりも圓熟してゐるところがある。純な、そのままに圓熟したのが面白い。(二月八日)

○單純化

上で『單純化』のことを云つたが、それを單に技巧の點として解すると間違ふのであつて、抒情詩で短い形を有つて居る短歌の本來性質

はおのづからそれを要求してゐるのである。ことばを換へていへばそれが人類の自然なのである。與謝野氏の新派の歌は「複雜」を誇りとして知らず識らず陷つた弊は、人類の自然と短歌の本質とに眞に觀入しなかつたためであり、萬葉の優秀な短歌の性命はこの人類の自然に根ざしてゐるがためである。賀茂眞淵は萬葉を心讀して、『なほくひたぶるなるものは、ことば多からず』と云つたのは正に云ふべきことを云つたのであつて、また後進の予の言もこれに過ぎないのである。いや、予は自ら悟入したやうな面持をしようより先進の蹤跡をさぐりそこに共鳴の魂を得るのを樂しむのである。ひとり日本國とは限らない。„die echte Lyrik muss ein Abdruck des kernhaften, innersten Empfindens einer kraftvoller Persönlichkeit sein“ といふ獨逸人のことばも、そのなかの „Kernhaft“ の語の如きもおなじく共鳴の魂であるに相違ない。直截にして剛健な、生命直寫の短歌をおもふこと切なれば切なほど、三十一文字不自由說、不自然說などに顧慮せなくなつて來てゐる。それを不自然だと論ふのはそれは短歌制作に經驗を置かない閑人の空理論に過ぎないのである。三十一文字に不自然を感じないのはそれは迷蒙習慣に過ぎないと謂ふごときは、それはあべこべなのである。

（四月二十三日）

○象徵と短歌

現今我國の詩壇の一部に特別に象徵詩だと銘を打つて出てゐるものがある。其等の象徵詩は表現法が大分むづかしいもので、時によると摩訶不思議のものさへある。然し予は詩に關しては深い信念が無い所から只何となく、さういふ詩が偉いものの樣な氣がして讀み味つて居た。ところが其うち『象徵歌』を唱道し實行した人が出來た。其を讀んで予は直ちに頭を振つた。こんなものが象徵歌ならば、象徵歌といふものは下らないものだと思つた。

その後象徵詩に關する議論を幾つか集めて心を潛めて讀んで見た。一々皆もつともである。かういふ立派な議論があるならば、立派な象徵歌だとて出來ない事はあるまい、今まで象徵歌の下らないのは、中途半ぱにぶらついてゐるからだらうと思つた。

予は服部嘉香氏の詩論は餘程以前から尊敬して讀んでゐた。ところが氏は詩歌の三月號で、象徵を短歌に關聯せしめて論じた末に、『私は眞の象徵は短歌に有り得ないのではないかと思つてゐる』と結論した。さうして、短歌とても第二義的な淺い象徵はあるであらうが、作者と作品とを一元とし、作品のリズムに直ちに作者の生活靈性を彷彿せしめるやうな象徵は、三十一音律の約束がある以上短歌に盛らるべきものでは無い。どんなに微細なリズムが內在しようとも五七五七七の調子では駄目だと云ふのである。

一應もつともの說である。これで予はほつと安心した。象徵詩に關しては有力な力說者である服部氏の象徵歌（多分さういつてよからう）が如何にも予にとつて感心し難いものであつた時、これは服部氏は未だ歌人として多力者で無い爲めだと思つて居た。然るに服部氏は其罪を短歌形式に著せて居る。かく罪を著せられた短歌形式の側に立つて見れば、服部氏と永い訣をするのが至當であらう。

そこで予は思つた。短歌は獨立の藝術である。度々いつた如く、短歌は決して長詩の一部分でなく長詩中の一句では無い。象徵歌を作る場合でも是非とも現今の所謂象徵詩にあるやうな、ああいふ表現法を取らねばならんといふ理窟はあるまい。幾ら象徵歌の技巧が

全然在來の技巧から脱却せねばならぬと言つた所で、あの樣な、ねちねちした面倒臭い、煮え切らない表現法でなければ象徵詩と稱へられないといふ法はあるまい。西洋の所謂象徵詩をば、おぼつかない修練の足りない日本語で直譯して、そんな所から出發したつて駄目だ。

象徵歌といふものが尊いものである事を信じたならば、目ざめたる歌人は決して現代の象徵詩人などの模倣者であつてはならない。みづからの象徵歌を創造しみづからの命に立脚して、ひたぶるに一本の道を步まねばならぬ歌境にあつて此大道を切り開き光明をかかげて進む多力者は誰ぞ。

(四月二十五日)

○二たび短歌と象徵

服部嘉香君。予の「象徵歌」とは無論「象徵短歌」の意である。この場合に予は「歌」の概念を本居宣長や貴君の如く廣義にしない。又その象徵といふ事に就いても、今更に予に向つて其の概念を問ふ必要は無い。貴君が業に已に實行してゐる如く、象徵といふ語が文藝史上に一定の意義をもたらした以來のあらゆる西洋の書物を讀めばよい。又我國にあつて鷗外博士の著書以來の象徵を論じたあらゆる書物を讀めばよい。象徵主義の概念及び形容詞になつた場合の象徵主義的なる概念は、此語の初生以來幾變遷を經來つたとは云へ、論の場合にさう得手勝手に意味づけることは象徵といふ語の存在を無意義にする所以である。但し短歌制作の際の態度に就いてはこの前に言つた通りでなければならん。今は繰返さぬ。

貴君の論を待つ迄もなく、作者と作品とは渾一體でなければならない。詩の體に於てもさうである。句の體に於ける芭蕉の如く、短歌の體に於ける人麻呂の如く、詩の體と作者の生活靈性が渾一體となるに及んで初めて詩の體に命がある。短歌の體を單に束縛されたる因襲形式としか外見する事が出來なければ、短歌の體に命の無いのは無論である。予は短歌の體を愛敬し交合し渾一體に化する心願を有つてゐる。予の苦惱も信念もそこにある。

貴君の言の如く短歌の體は五七五七七の三十一音律だといふのに向つては大體に於て異論は無いが、其の三十一音律は三三四五等の音列の連續だと予は考へてゐる。結句の七音ですら三四、四三、二五、五二、三二二、二二三、などの場合がある。貴君は是等の一々の場合を如何に解釋して居るかを聞きたい。

短歌の體は忽然として湧いたものでは無い。又その變遷史は多種多樣である。予の作る短歌には因襲もイルージョン(もつと眼を淸明にすれば其實イルージョンではないのである)もあつて其因緣ふかくして遠い。予は予等の祖先の命を尊び味ひ常に感謝してゐるものである。予が創造などいふ語を用ゐて予の信念を表すに當つて常に此深大深遠なる因緣の上に立脚しての論である。此點は貴君と違ふのである。

『時としてそれが五七五七七に排列されてゐようとも短歌としてのあらゆるトラディションとイリュジャンとを拭ひ去つたものならば已に短歌的音律を忘れたものになる。それが肝腎な問題である』といふ貴君の言は正しく短歌の體の存在を全然否定したものである。それならば、「力なき夜の足音息すれば息ぞかなしくをぐらき灯かな」といふ貴君の作は、偶然にも期せずして全然我國の短歌的音律を忘れて出來たものかどうか、母より日本の言葉を敎はつた以來、百人一首を覺えた以來、古代今代の短歌を讀み覺えた以來のあらゆる其等の短歌的音律を忘却して出來たものかどうか。次に貴君の此作

は「作者と作品とを一元とし作品のリズムに直ちに作者の生活靈性を彷彿せしめるやうな象徴」になつてゐるかどうか。貴君自身そのつもりか。

若しそのつもりで無いとせば、なぜ貴君はかういふ作をするか、予の觀方によれば貴君の此作は短歌の體だと思ふが、短歌的音律を忘れて自由になれと叫ぶ貴君が何を思つて此作をしたか。いい加減なものだと思つて、短歌の體を弄品の如く思惟して試みに製造して見たのか。短歌の音律などは至極お安いもので其リズムも作者と一元たるを得ないものだと諦めて仕舞つての作か、予の不思議に思ふのは其處である。

人麻呂の、あしびきのやまがはのせのなるなべにゆつきがたけにくもたちわたる、といふ一首に就いて考へて見る。此一首は無論その來れる因の遠い三十一音律の短歌である。然し西洋人特に近代佛獨の象徴派詩人の發明に係る象徴主義的なる語を直接この一首に冠らせ得るかどうかは知らない。ただ作品と作者とを一元とするリズムを有する點に於て、又この作は作者と離すべからざる、いひ得べくんば象徴的なる點に於て、貴君の「力なき夜の足音」の歌よりも優秀であると予は思ふ。貴君は此點に就いてどう思考せられるか。

○交合歡喜

ニイチェは Rausch といつた。予は交合歡喜といふ。ここに受胎がはじまる。それより初生に至るまで一定の發育が要る。短歌を生む場合に於ても如是である。ゆくりなくもウェルネルはその著「抒情詩及び抒情詩人」のなかに於て受胎といふ語を使つてゐる。

○子規の言葉

明治四十四年子規忌記念に作つた牛喆文庫の端書に子規手蹟の寫眞版がある。「發句ハ丁寧ニ取扱フベシ。發句ノ下手ナモノハ發句ヲ麁末ニ取扱ヒ字ノ下手ナモノハ字ヲ麁末ニ取扱フヲ常トス。字ヲ丁寧ニ取扱フハ字ノ上手ニナル一法ナリ。發句ヲ丁寧ニ取扱フハ發句ノ上手ニナル一法ナリ。病子規識」といふ文句である。アララギの投稿歌のうちには作つた本人さへ分るまいと思はれるやうな歌が幾つも竝べてあつて、然も字も假名遣も甚だ亂暴なのがある。自分の歌ならばもつと可愛がつたら好ささうなものだと予はいつも不思議に思つてゐる。

子規いはく、「募集の俳句は句數に制限なければとて二十句三十句四十句五十句六十句七十句も出す人あり。出す人の心持はこれだけに多ければ、どれか一句はぬかれるであらうと云ふ事なり。故に之を富籤的應募といふ。かやうなる句は判者四句五句讀めば終迄讀まずとも其可否は分るなり。いな一句も讀まざる内に佳句なき事は分るなり。凡何の題にても俳句を作るに無造作に一題五六十句作れる程ならば俳句は誰にでも容易く作れる誠につまらぬ物なるべし。そんなつまらぬ俳句の作りやうを知らうより絲瓜の作り方でも研究したがましなるべし」健康な體を有つてゐるアララギ編輯同人が三人四人で投稿歌を選ぶとは同一には論じられないが、それでも、今少し作るのに苦心して呉れたならと思ふ事は毎回ある。

「讚められた」といふ事が動機になつて、その讚めた者と深い結縁を遂げる例はある。短歌雜誌などで會員を多く集めるには、讚め方の上手下手といふ事が大關係がある。但し此は天品であつて予等には如何とも爲難い。そして讚め方の下手といふ事は決して自慢にならない事

だ。

　短歌を主とする文藝雜誌は東京だけでも五六種はある。日本全國では二十種を下るまい。驚くべき事だ。不謹愼だと思ふからあへて嘴を容れないが、アララギに歌を投ずる人でゐて、なほ五六種の短歌雜誌に歌を投じてゐる人がある。さういふ人は恐らく眞にアララギを愛敬しては居まい。ところが該人はアララギを愛敬して呉れると明言する。どうも不思議である。いざといふ場合まで突つめた者にかういふ事が出來るものだらうかと思ふ。是樣な事を念に有つやうになつたのは、或人が投稿歌の優待法を唯一の武器として或人を口說落した話を聞いた以來の事である。今まで苦勞に苦勞を重て來たアララギである。いい加減なものゝ集合所にされてたまるものか。

　アララギに萬葉集の短歌を解釋したり、良寛法師の歌を紹介したりするのは、せめてあいふ類の歌を多く詠んで貰ひたいからである。然るにさういふ萬葉調の歌か一向集まらないで、鳥獸のつるむ歌や、戀人が戀しい歌や、無暗に涙をこぼす歌ばかり集まつて來る。生命の、生活のと鼻息ばかり荒くしたつて、物が物なら何にもなるものではあるまい。

○古代の諺と近ごろの俳句

　予は俳句を作らぬからして、近ごろの俳句の價値、碧梧桐氏に言はせれば「哲學」が全く分らないのであるかも知れぬ。分らなければ予の恥であるけれども、どういふものか矢張り十七字調の芭蕉あたりの方がよい。併し必ずしも十七字調でなくもよいが近頃の俳句の言ひぶりが、その語氣が說敎じみて、諺語くさくて不滿足に感じてゐる。それに就いて思ひ起すのは我邦古代の諺として傳へられてゐる二三のものの言振りが近頃の俳句の語氣に似てゐるといふことである。

堅石は醉人を避くる　（應神紀）

神の神庫も樹梯のまゝに　（垂仁紀）

海人なれや己が物から音泣く　（應神紀）

　これは「諺」にいはくとしてあるものであるが何となく他の歌謠の語氣とは違つてゐる。どう違つてゐるかと少し吟味してみると、例へば片歌の、「愛けやし吾家の方よ雲ゐ起ち來も」あたりでもそう違ふ。つまり歌謠の方は何かに切に訴ふる、古人のいはゆる「詠歎」の語氣があるのに、諺の方は何處かに堅い冷たいそして幾分氣取つた說敎のやうなところがありはしないだらうか。ことに結句でその特徴を認めることが出來る。一番痛切に響く結句にそれがおのづからあらはれてゐるといふことは予の興味を牽くのである。『詠歎』の意味が近ごろ惡い意味に取られてしまつてゐるから、碧梧桐氏などのやうに『僕らの俳句の哲學』などの語は少年間に好いかも知れないが、短歌や俳句では、うつたふる語氣と、その響とがおのづからなる性命ではあるまいか。人間切實の表出運動はさういふ短歌なり俳句なりに落著くのではあるまいか。

　予は記紀の歌謠を讀んでそんな氣がし、蕪村の句に何かの不滿の感あるのも、近ごろの俳句の大體の傾向を好かないのも、さういふ理由に本づくのではあるまいか。Sinnspruch heisst: „Sinn ohne Lied" とニイチェが歌つたのもこれであると思つてゐる。

○俳句寸言

　いま俳句のことをいふのは少し恐ろしいゆゑ、もし間違つてゐたら怒つて呉れてよい。正岡子規のした爲事は、あれは苦力の結果だ。芭蕉や蕪村の藝術に就いて開眼したのも、みんな

自力でやつたのだ。そして子規は、獺祭書屋俳句帖抄上卷の序で、「自分が十年でやつた程のことは今の人は半年で達するやうになつてをる。後生畏るべしといふもおろかなわけだ」と云つた。子規は死んで、生殘つた俳人にも、それ以後に現れ出た俳人にも、子規のこの悲痛の言が胸にこたへないやうに見える。そしていち逸くも子規の句は芭蕉や蕪村の模倣に過ぎないと公言して、ひとりで育つたやうな顏付をして、己が獨創家だといふやうな顏付をして、もう少年の前に教師氣取でゐる。何といふ恐ろしい態で、何といふあわただしい態であらう。子規が途中でへたばりへたばりしたのは、あれは自力でやつたからだ。そして默つて復自分で立つて歩いたのだ。その面影が今の俳人の頭に浮んで來ないやうに見えてならない。さうして、

若竹や橋本の遊女ありやなし　蕪村
筍や目黑の美人ありやなし　子規
道のべの木槿は馬にくはれけり　芭蕉
道のべの木槿にたまるほこり哉　子規
瘧落ちて朝顏淸し蚊帳の外　几董
瘧落ちて足踏のばす蚊帳かな　子規

こんなところで、子規が承知のうへでやつた事を、鬼の首でもとつたやうに嬉しがつて結論を急ぐのは淺薄で、かういふ類句があるから全體が模倣だといふのは凡俗の類である。實朝の如き本歌取があるために凡俗からは全く模倣者だと見られた。それに等しい。

僕は歌つくりだが俳句についても獨斷言を有つてゐるから、それを次に少し書かうと思ふ。

五月雨や上野の山も見飽きたり　子規

これは子規の晩年の句だ、そして子規自身でも棄て去るべき句ではないと思つて居ただらう。門間春雄君所藏の五月雨十句の軸の書きぶりを見ると、それがようく分る。僕の獨斷言によると、此は佳句であつて棄つべきものではない。そして、『雞頭の十四五本もありぬべし』など同じく、これから子規の進むべき純熟の句がはじまつたのである。もう寸毫も芭蕉でも蕪村でもないのである。そして、『夕顏の棚つくらむと思へども秋まちがてぬわが命かも』など晩年の和歌に比すべく、からなれば俳句も和歌も一如だと僕は思ふ。然るに此句は碧梧桐・虛子選の子規句集に收錄されてないばかりでなく、俳壇にゐるほかの人も眞に此句を論じたことはない。子規を祖述すると云つても何を祖述するのか。僕にはどうも變に思はれる。また『子規なんかもう古いよ』などといつて妙な風な日本語でないやうな日本語を並べて納まつてゐるのは僕にはどうも變に思はれる。

（大正五年十一月二十九日夜、石楠のために）

○語勢の響

伊藤左千夫先生は、晩年に、『叫びの歌』を唱道して、計らひなき直截な生の叫びを短歌に要求した。その幾つかの論文のなかに、言語の聲化、叫びの發露、叫びのこもり、生の叫び、感歎の響、聲調の響、語勢の響などの語があつて、『叫び』を論ずるに當り、聲化された詞の『ひびき』といふことを力說してゐる。そこで『叫びの歌』の說の詞論の一面は、『ひびき』の說であると謂つてもよいと思ふ。『韻文の上でいふところの叫びは、韻文が聲調の響を性命とせるものであるだけ、叫びの意義が散文に比してより多く具體的でなければならぬ』『叫びは聲の調を通じて叫者の心を傳へるものである』などの斷片を讀んでも其心が分る。

このごろ、日本歌學史を讀んで、海野遊翁の、『ひびきの說』を知つた。彼は晩年に香川景樹の歌論に心服して、景樹の『調』の說によつて、『ひびき』といふ思想を案出したのださうである。彼はかういふ。『古今の序に、歌とのみ思ひて

其さま知らぬなるべしとあるは、一うたの調のひびきをいへるなり。さまとはひびきなり。入る息出づる息によりて、歌のしらべのひびきあり」（伊勢記）

またこのごろ、菅茶山の「筆のすさび」になかに、「詩歌語勢強弱」の説いてあることを知つた。そして一、「あら海や佐渡に横たふ天の川」などいふ發句、興象は高なし。語つよくおもみありてたけ高く、今の人の句、語弱くかろく、格ひきく、僅十七字にても、その體のわかることは語勢自然の妙處なり云々。なほ、桂園大人詠草奥書や、歌學提要あたりにも、此事を論じてゐるのがところどころに散見する。

から集めてみると、左に聯鎖があるやうであるが、さうでない事を明記して置くのである。

芭蕉あたりが用ゐた、「にほひ」が愚案抄あたりの「にほひ」より恩賴を受け、芭蕉らが用ゐた「ひびき」が遊翁の「ひびき」に働き掛け、遊翁の「ひびき」が、左千夫の「ひびき」の礎をなしてゐるとは必ずしも謂はれない。少なくも、左千夫の「ひびき」の説は遊翁の歌論の恩惠を蒙つてゐないことを斷じておく。

それから、先進の歌論を讀んでみると、歌論に於てみんないいことを云つてゐる。そしていいざとなつて、個々の作物に當ると非常に違つたものになつてくる。

同じく『ひびきの説』でも、いざとなると、遊翁あたりは矢張り古今を宗とせねばならぬのである。左千夫の『ひびきの説』とちがふ所である。

○寫生、象徵の説

予の作は、根岸短歌會の血脈を承けてはゐるが、周圍文壇のイズムや運動に參ずる必要は毫末もない。しかし人ありて強ひて予の作を或る「流」に分類したくば、予の作は、「實相流」であると謂つてもよい。そして予が眞に「寫生」すれば、それが即ち、予の「寫生」の『象徵』たるのである。この意味で、予の作は「象徵流」だと謂つてもよい。

ここに謂ふ『象徵流』は、西洋の Symbolismus とは必ずしも合致しない。予の謂ふ『象徵』は『假ニ外丹一以徵ニ内象一所レ謂外丹成即内丹成也』（悟眞篇書）の意味であつて、予の場合は計略をもつて、——予の目から見れば一つの計略である——「象徵主義」らしい作を造る必要を認めないのであつて、自然を法爾に體し『わがはからはざるを自然とまうすなり』の境にゐておのづから予の生の『象徵』は成るのである。予の『象徵流』が流俗の説とちがふのはここだ。

或る人がゐて、芭蕉の句は『象徵流』だと謂つた。或る人また其を評して、それは間違つて居る、近代藝術上の『象徵主義』はそんなものではないと謂つた。この批評は西洋特に佛蘭西あたりに興つた、一つの運動だけに限局せしめて『象徵主義』を考へてゐるのであるから、それはそれでよいが、芭蕉句象徵説には當嵌らないのである。蕉芭句象徵説は、ぼんやりで幼稚な説のやうでゐて、痛切に自らに即せしめて考へた説であるから、單な西洋たふとびよりは深いのである。

○海上胤平

海上胤平翁が死んだとき、雜誌「わか竹」が追悼號やうなものとして發行した。翁が「三句切は歌にあらず」などといつたのを、海上は最初は三句切をどしどし用ゐてゐた、それを、橘守部の短歌撰格を讀んで遽かに變説したのだと云つて居る。下田義照氏はその證明までしてゐる。さうすると海上翁はいかにもずるいこと

になる。それから、橘守部の歌格の研究は、小國重年の長歌詞珠衣あたりの影響だといふ說がいま有力になつてゐる。さうすると橘守部もずるいことになる。此は文獻を明記しない罪であつて、ずるいと云はれても爲方がないのである。さもなければおのれの無智を表白するに過ぎないことになる。併し玆に注意すべきは、關聯がなく時を隔てて獨立して等しい考に到達することが可能である。短歌の『三句切』の問題の如きも、竹の里人がよく云つたものである。竹の里人は胤平の說も守部の說も讀まずに說を樹てたのである。先進者があるから、說のプリオリテートの問題は竹の里人に許し難いが、同時に竹の里人をば剽竊者とは云ひ難いのである。ゆゑは竹の里人が時を隔てて獨立に唱へた說であるからである。一體、歌の『三句切』の問題などは、大切な問題であるが、少しく歌にたづさはる者にとつて、直ぐ氣の付く問題なのであつて、實は誰でも氣付くといつてもよいのである。海上胤平翁の場合も、以前に持してゐた說をば橘守部の撰格によつて確め自信を強めたぐらゐに解する方がよからうと思ふ。翁と生前に劇しく論戰することなく隱忍してゐて、歿後いちはやくも、かかる批評を聞くのは、予には快くない。

○あよむ

阪口多藻津氏は、大正五年九月一日發行の雜誌詩歌のうへで、先づ自作の『春日山馬醉木木の間をあよみよわりたわやかひなを依する汝は』や『中の『あよむ』といふ動詞は阪口氏の新造語で、自然に湧出した言葉で、近ごろ雜誌に散見する『あよむ』の語はその模倣踏襲だと云つた。ついで、辭書『ことばの泉』を繰つて草根集に『しるかりき里がよひしてまじれども旅ゆく人のあよむ姿は』の例や、予の歌集赤光中の『飛びあよむ蠅のおこなひ』の先例のあることを發見して前言を訂正してゐる。この語は前出の僧正徹の集にすでにあり、また宇治拾遺あたりに『鬼はあよびかへりぬ』などとあるから、近ごろの新造語でないことは確かである。ただ近ごろ誰が此語を復活させてそれが雜誌などに散見するやうになつたかを書いて置く方がよいとおもふ。

此語の復活は恐らく先師伊藤先生の、『石ふみてあよむはくるし肉太のわがゆく道に石なくもがな』の歌に始まつてゐるらしい。少なくも此歌が原動となつて近ごろの雜誌などに散見するやうになつた事は正確である。此歌は觀潮樓歌會の席上吟であつて、また日本新聞の募集歌の選者吟として載つたものである。それは明治四十年で今から約十年を經過してゐる。その時先生は『足讀む』とも書いて他の歌をも作つてゐる。その『足讀む』が予等に珍らしかつたのでさかんに模倣した。それが引いて當時の日本新聞、馬醉木、アララギなどになかなか多く見えるやうになつた。『あゆむ』といふべきところにも『あよむ』と使つてゐる。それが現在のアララギの作者にも殘つてゐるのである。そのアララギの用例が知らず識らず他の雜誌に影響を及ぼしたのであることも確かである。われら仲間では『あよむ』などは陳腐になつしまつたために投稿歌中の『あよむ』などは『あゆむ』と直すことがなかなか多い。赤光を編むときも『あよむ』を『あゆむ』と直したのがある。それでも一つ二つ殘つてゐたものと見える。つまり阪口氏自身では新造語と思つても、一度はアララギか何かでそれを讀んだのを忘れてしまつてゐて、ある機會に浮んだ此語を自然に湧出した造語と思ひ込んだものと見える。さういふことが人間にはある。阪口氏は『勿論確かに既往に於て此言

葉をみた事がない』と造語說を固執しても其は駄目である。

それから、『あよむ』の語は萬葉集、古事記あたりにあるかどうかといふに、それは無いらしい。古事記の『不得步』は『えあゆまず』と訓んでゐる。なほ、『所由賣安我古麻』(萬葉十四)『安由賣久路古麻』(萬葉十四)『馬之步』(萬葉十六)『步黑駒』(萬葉七)などであつて、『あよむ』の音はどうも無いらしい。

古事記傳二十八に、『自其處發。到當藝野上之時詔者。吾心恒念自虛翔行。然今吾足不得步』の『步』を解して、『步は足讀の意の言ならむか、物の數を讀さまと似たればなり。吾が伊勢の國の山里人などは阿餘夫といへり』とある。伊藤先生の『足讀む』は本居說あたりから由來してゐるのかも知れない。本居說では『あよむ』が古いらしく聞えるが、古事記萬葉集に『あよむ』がなくて、後世に至つて却つて用例のあるところは少し都合がわるい。谷川士清は、『あゆむ。足綏の義成べし』といふが此は少し穿てある。かういふ分析語源說などは餘り當にならぬから、『あゆむ』は古く、『あよむ』はその轉と見ておけばよいやうである。

附記　大正五年十一月發行の雜誌海紅に、

子供あよませてはなしゆく稻の道かな　蕪哉

といふのがある。『ことば』の傳播はこんな工合にしていつのまにか、おもひがけないところに及んでゐる。『造語の創作權』などをしらべることの困難なのはこれを見てもわかる。歌壇などではいにしへも今もことわりなしに取つて使ふのを例としてゐるが、暇があり良心があつたら書きつけておく方がよいに相違ない。

○歌論

賀茂眞淵の、『丈夫ぶり』。『直くひたぶる』の說、小澤蘆庵の、『ただごと歌』の說、香川景樹の、『調べ』の說、かういふものを讀んでみると、みななかなかいい事を云つてゐる。そして、精しく讀んでみると皆おなじことに歸著してゐる。いひかへると歌の原論になると皆おなじことを云つてゐるといふことになる。

しかし原論は一つあれば足りる。何も先進の見に異を樹てる必要はない筈である。それにも拘はらず、蘆庵も景樹も眞淵に對して繼ぎつぎに異を樹ててゐる。これは興味ある現象であつて、また予にとつて極めて大切なところである。原論をいふ時は、みんなそれ相應の理を附けて、もつともの事をいふ。併し制作實行の點に逢著すると原論だけでは役に立たぬ。自己の性命を本位とするなどと立派な事を云つてはゐても、なかなか實際の役には立たぬ。そこで何時の間にか彼等の心の中に、具體的の作物が豫想せられて其がおのおのの樹てた原論と結びつく。つまり各の佛體が出來たのである。その一つは萬葉集の歌でなり、一つは古今集の歌であつた。

作家であつて見れば、一たびは此境を通過するのは自然である。和歌のやうな特殊の形式と歷史とを有つてゐるものに於て特にさうである。眞淵は若年の頃の考を全く棄てて高いところに目をつけた。彼の言論には野心家のつけ込み得る隙はあつても、確かなものを目がけてゐた。蘆庵も景樹も、自己自己と叫んでゐながら平俗なものに落著いて終つてゐる。此等の關係を予は何時も忘れないと思ふ。

○定家の歌一首

藤原定家の、『みわたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ』といふ歌は、新古

今集三夕歌の一つで古來有名な歌である。予は今まで何の註釋書をも見る必要を感ぜずに自分の解釋をつけて居つた。その解釋は、『遠く見渡すと、もう花も、また紅葉もない。うちわたす秋の海濱に、苫ぶきの漁家があちこちにあるばかりで、日も暮れがたである。まことに寂しい光景である』といふやうなものであつた。ところが本居宣長の「美濃の家つと」を讀むと變なことが云つてある。此は面白いとおもつて試に參考書をみると、なるほど説がある。

八代集抄に『此歌を三條西殿御説に、源氏明石卷に云。はるばると物のとどこほりなき海づらなるに、中々春秋の花紅葉の盛なるよりは、只そこはかとなう茂れる陰どもなまめかしきにと云々。此詞を浦の苫屋の秋の夕暮と取なされたる又深重なると一細流」に見えたり。是につきて兩儀有り。此浦の苫屋の秋夕を見渡せば花も紅葉もなきにいふよしなき景氣有といふ説あり。又此浦の苫屋の秋の夕の景には花も紅葉もいらずとの心と云々。然れども始めの説感深しと師説也」とある。つまり、誠に言ひ難いほどの好景だといふ説と花も紅葉も要らぬ程の好景だといふ説である。

本居宣長の「美濃の家つと」には、『二三の句、明石の卷の詞によられたるなるべけれど、けりといへる事いかが。其故はけりといひては、上句、さぞ花紅葉などありて、おもしろかるべきところと思ひたるに、來て見れば花紅葉もなく何の見るべき物もなき所にてありけるよ、といふ意なればなり。そもそも浦の苫屋の秋の夕べは花も紅葉もなかるべきは元よりの事なれば今更なかりけりと歎ずべきはあらざるをや。我ならば、見わたせば花も紅葉もなにはがた蘆の丸屋の秋の夕ぐれ、などぞ詠ましとぞ或人はいへる』とある。宣長の直覺では、此歌を寂寥の秋夕景と感じたのである、が、「抄」の説に囚はれて脱することが出來ない。どこまでも此歌を矢張り面白い好景であると解する念が纏つてゐる。この矛盾を解決するために、あべこべに此歌の表はし方が下手だと言放つた。他人の説にこびりつく者の陷る弊を明示した一例である。

石原正明の「尾張の家苞」に云ふ。『一首の意は、浦の苫屋の秋の夕暮を見渡せば、花紅葉の事も忘れて哀れにをかしき景色ぞと也。俗に謂はば、花も要らぬが紅葉も要らぬといふ程の事也。しか心うつす趣は、詞のうへにはなけれど、浦の苫屋の秋の夕暮といへる哀れなるさま言外に浮びて見ゆるなり』さうして浦の苫屋に花も紅葉も無いのは當然だと云つた、師の宣長の説を、辯護しながら訂正してゐる。それは、「浦の苫屋だといつて花紅葉の無いと極まつた事はない、かういふ事を云はれると磯山浦わの櫻楓共は面目を失つたと愁ふるであらう。しかし此歌は七月か八月の夕暮の景色であるから、花無きは勿論のこと紅葉も未だ染めあへぬ程の時である』といふのである。正明の説は「抄」の第二の説を採つたので、おとなしいが惜むらくは宣長ほどの直覺をも持つてゐなかつた。

故鹽井文學士の新古今和歌集詳解も、正明の説を再び踏襲したものであつて、「定家ほどの大家が、花も無ければ紅葉もないなどと、當然きはまる平凡な事をいふ筈がない」といふ意味の事をいつて、正明の説を確めようとし、そして此歌を褒めてゐる。

以上の主要な參考書に失望した予はもう參考書など見まいとしたが、念のため鴻巣文學士の新古今和歌集遠鏡を見た。すると「遙ニ遠ク濱邊ヲ見渡スト花モ無ク紅葉モ無カツタワイ。海邊ノ苫葺キ小家ガ立ツテヰル秋ノ夕暮ノ景色ハ誠ニ淋シイ』と解いてあつて「抄」の二説をあ

げ、『二説孰れを可とも言ひ難し。飜つて思ふに、秋の夕をおもしろしと説くは此時代の思想なりや否や、現に前の二歌(西行の歌寂蓮の歌)共に淋しみを歌へるにあらずや。然らばこれ亦淋しき方に見るべきにあらざるなきか。即前人の説を悉く退けて前述の解をなせり。敢て識者の高教をまつ』と云つてゐる。鴻巣文學士の説は予の解と合致するものである。ただ氏は前人の説を識つてゐたが爲めに、何も識らない予よりも苦勞するのである。

なぜ先進は此歌の解を誤つたかといふに、歌そのものに據らずに、源氏物語などを云々するからであつて、源氏の『なまめかしきに』の句に據處を置いたから、すでに出發點を誤つてゐる。そして平凡な解釋者が幾人出ても、皆前人の説に囚はれてゐるから、どこまで行つても同じである。宣長の直覺が危く前人の誤を訂すところであつたのであるが、力足らずに變な事を云つて終をつげた。第二の誤つた原因は、みんな此歌を買かぶつてゐる事である。極めて平凡な分り易い歌であるにも拘はらず、幽玄體の歌だと謂はれてゐるし、幽玄とか有心とかいつた定家のことであるから、何か意味があるであらうといふのでいろいろ考へゐるうちに變なものになつてしまふのである。明治になつて鴻巣文學士によつてはじめて前人の誤が訂されたと謂つてもよい。それを今まで知らずにゐたのは濟まないやうな氣がせぬでもない。

予らの解釋の方が、前人の解釋よりも此歌に對し寧ろ同情ある解釋だと思ふ。それでも予は此歌は大した歌ではないと思つてゐる。寧ろ平凡な幼稚な歌だと思つてゐる。花も紅葉もなかりけり』の大づかみは上の空である。この詠歎は極めて平俗な思はせぶりである。一首の聲調は、大どかで、ゆるやかで、おどけてはゐず、うつとりとさせるところはある。尺八の一流しの趣をもつて、それが此歌の取柄ではあるが、それがやがて滑かに失してゐる所以であつて、沁みいづる沈嚴の響きも迫りきたる魄力も、これを聽くことが出來ない。かかるものが『幽玄』ならば、むしろ『幽玄』の冒瀆であると思つてゐる。またかかる程度のメロディーにうつとりとして、かかる歌境に安住せむことは、予にとりて恐るべく悲しむべきことである。屏風に向うて歌を作り、白氏文集の句を誦して歌をつくるは、尊ぶべからざる如く、此歌の前にはかうべは下らないのである。冷然として此歌を見放たばよし、少しく己に即せしめて物いふと、斯る見となるのである。

『なむ』『な』『ね』の論

（1）『なむ』『な』『ね』に就いて

○文法の説

ことばあれば、そのなかにおのづから文法が具はつてゐる。それを學者が法則として整理するのであつてこれが「文法」である。それゆゑことばが變移すれば從つて文法も變移する　そのことばの變移のうちには、ある一人の謬智のために、自ら知らず識らず先代語法を破ることがある。この破つた語法をまた周圍の徒が模倣して、それがひろがつて一つの語法をかたちづくるに至ることがある。これは意識して語法を創め革めるのと趣がちがふ。知らずに好い積りでゐるのである。

三井甲之氏の「北風の吹き來る野面をひとり行き都に向ふ汽車を待たなむ」の、『なむ』の用ゐざまなども謬妄から來て居る。この誤謬は三井氏に限つたことではない。よく少年の徒の陷る誤謬の一つである。この誤謬を久保田氏から指摘されて、三井氏はそれに服せない。そしてさも意識して、萬葉歌人などの用ゐざまをよくよく呑み込んでの上の用法であるが如くに云つてゐる。これは痩我慢と謂はむよりは寧ろ妄執である。武者小路氏の文章にむかつて、『君らの日本語が』などといつてその語法の變則をわらつた三井氏が、こんどはあべこべに自分の誤謬に我を張つてゐる。このぶんに行くと、『新文法を創造して見せる』などと息卷くに至るかも知れぬ。創造もよい。それには「中心性」が要る。そしてその『中心性』は群盲に取り卷かれるといふことが先づ第一の要約であるに相違ない。

○萬葉集中の『なむ』の用例

むかしの文法學者だといつても、さう二三が四的にばかり行つてはゐない。たいがい用例から歸納したものである。その證據を示すために、萬葉集中から少しく用例を拾つて見よう。

さうすると、「咲かなむ」「有らなむ」を他に對する希望の意味に用ゐる語感を作つて來たのは平安朝以後であると做し、萬葉集へ溯つて自由な言葉を求めよなどいふ三井甲之氏の言がいかに萬葉集に無關係であるか、又その言がいかに謬妄であるかは、おのづから分つてくるのである。

海津路乃　名木名六時毛　渡七六　加久
多都波二　船出可爲八　（萬葉集卷九）

この歌を古來、「海つ路の和ぎなむときも渡らなむかく立つ波に船出すべしや」と訓んでゐる。この訓方は既に定説である。そして連用言から受けた『なむ』と、將然言から受けた『なむ』の二つを一首中に含んでゐる例である。古義でこの歌を解して、「歌の意は浪風靜まり、海路の平らかに和ぎたらむ。時を待ちて、海上の方へ渡り行き賜はなむ。かく風高く浪荒き時に臨て、船發したまふべき事かは、今暫く時を候て、船發し賜へとなり」と云つたのは正しい。これは高橋蟲麻呂が鹿島郡苅野橋で大伴卿に別れる時に詠んだ歌であるから、「渡らなむ」は大伴卿に對する願望なのであつて、萬葉集ですでに、連用言を受ける「なむ」と、將然言を受ける『なむ』の間には、意味のうへで截然たる區別があつたのである。

筑波ねにかか鳴く鷲の音のみをか奈岐和多里南牟あふとはなしに　（萬葉集巻十四）

打靡く春ともしるく鶯はうゑ木の木間を奈伎和多良奈牟　（萬葉集巻二十）

第一の歌の「鳴き渡りなむ」は、「鳴いて居るであらう」の意である。第二の歌の「鳴き渡らなむ」は「鳴いてくれればよい」で、他に對する願望である。第二の歌は、庭に植木を植ゑて、その觀宴に際して詠んだ歌であつて、鳴いてくれと鶯に對して願望の意を表はしたのである。三井氏の說の謬妄なる證である。

ほととぎす奈保毛奈賀那牟もとつひと懸けつつもとな我を哭し泣くも

ほととぎす此處に近くを來鳴きてよ須疑奈無のちにしるしあらめやも

この二首の例歌は共に萬葉集巻二十に所收のものである。そして、同じやうな形の二首の中に、將然言を受ける奈牟と連用言を受ける奈牟とを含んで居る。この二つは、元正天皇先の太上天皇と、薩妙觀との應答の歌であるが都合のよい例である。第一の歌は杜鵑に對する願望の意である。古義の著者は、「奈伎那牟と宣はずして奈加那牟とのたまへるは鳴けかしと希ひたまふ御意なればなり」と、いつたのは正しいのである。第二の歌の「過ぎなむ」は無論他に對する願望でない。

まどほくの野にも安波奈牟こころなく里のみなかにあへる脊かも　（萬葉集巻十四）

今までの例の他に對する願望は、行爲に關した動詞の場合でないからだなどと詭辯を弄する者が居るかも知れないから、『逢ふ』といふ動詞の例を引いておく、この歌の「安波奈牟は逢へかしとの意なり」といふ古義の解は無論當然である。拾穗抄の著者が、「里にて逢へば人目有。用心もなくと也」と云つたのは、この歌を理會した言である。この歌を解するには「心なく」に心をとめなければならぬ。この歌は、男の方から不用心にやつて來て女を引出して逢つた趣であつて、「心なく」は、萬葉集巻一の、「大和戀ひいの寢らえぬに心なくこの渚の崎に鶴なくべしや」などと同じく他に對する不滿をあらはしてゐるのである。そこでこの歌の「逢はなむ」は女の方で「逢ひたい」または、「逢はう」といふのでなくて、「逢つて呉れればよいのに」と男に對する希望すなはち他に對する希望をのべた「なむ」の例である。苦しまぎれに我執の解釋をつける者も居ないとも限らないから、少し委しく說明するのである。

あらたまの年の緒ながく照る月の厭かぬ君にや明日別南　（萬葉集巻十二）

よそのみに君を相見てゆふたたみ手向のやまを明日か越將去　（萬葉集巻十二）

この場合の「別れなむ」「越えなむ」は將然・連用同形であるが、この歌の場合は連用言を受けたものであることは、一首の意味の上から十分わかる。それゆゑに他に對する願望ではないのである。

かくだにも妹を待南さ夜ふけていで來し月のかたぶくまでに　（萬葉集巻十一）

この歌の「待南」は「待ちなむ」であつて『待たなむ』ではない。他に對する願望の意でないからである。自己の行動をあらはす動詞でも、『待ちなむ』と「待たなむ」と截然たる區別があるのである。なほ次の例を見よ。

情有南畝　（巻一）
梶之母有奈牟　（巻七）
後毛將鳴　（巻八）
久志呂爾有奈武　（巻九）
渡七六　（巻九）
時母鳴奈武　（巻十）
衣丹有南　（巻十）
奈保毛奈賀那牟　（巻二十）

これらは將然言から受けた『なむ』の用例であつて、悉く他に對する希望の意があるのである。

和何余須疑奈牟　（卷五）
許布夜須疑南　（卷五）
阿我和加禮南　（卷五）
伊能知周疑南　（卷五）
故非和多里奈牟　（卷十）
孤悲和多利奈牟　（卷十七）
知利賀須疑奈牟　（卷二十）
宿受屋奈里奈牟　（卷十四）
波夜久奈里那牟　（卷十七）
名木名六時毛　（卷九）
須疑奈無能知爾　（卷二十）
知里奈牟能知爾　（卷二十）
知里奈牟山爾　（卷十五）
都藝奈牟毛能乎　（卷十四）
阿須波吉奈武遠　（卷五）

これらは連用言から受けた『なむ』の用例であつて、他に對する願望の意のない場合である。
これらの例は、訓方に異見の入る餘地のないもののみを選んだのである。『面忘南』『戀度南』『相別南』『我藻將依』『我者將依』の類を書けばまだまだ多い。

百人一首にある『み幸待たなむ』の例は萬葉集のものでないにしろ、その用法は萬葉集のと違はない事は以上の實例を以て解明する事が出來る。この項の連續は來月號にて發表することにした。

○願望の『なむ』の用例　續き

萬葉集卷十七の『ほととぎす來啼かむ月にいつしかも波夜久奈里那牟うの花のにほへる山を外のみも』云々の用ゐざまが一寸變つてゐるやうに見えるところから本居宣長なども疑問をさしはさんでゐる。

これは『ならなむ』といふべき格なるを『なりなむ』といへり。但し上に『いつしかも』とあれば、いつかならむと思ひて待つ意としても見るべし。そのときは、つねの『なむ』なり。

この『なむ』の用例はよく味つて見ると矢張り推量が主で他に對する願望ではない。宣長が『いつしかも』に目をつけたのは注意ふかい。かう實例を集めて見ると除外例だも無くなつて來る。古人は予を欺かない。
以上、萬葉集中の用例のほかに古今集以下のものを少しばかり拾つておく。これも參考になると思ふ。

さくら花散らば散らなむ散らずとてふるさと人の來ても見なくに　（古今集卷二）
さつきまつ山ほととぎす打はぶき今も啼かなむこぞのふるごゑ　（古今集卷三）
今よりはつぎて降らなむ我が宿のすゝきおしなみふれる白雪　（古今集卷六）
たのめつつあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人は知らなむ　（古今集卷十二）
わすれ草かれもやするとつれもなき人のこころに霜はおかなむ　（古今集卷十五）
月夜にはこぬ人またるかきくもり雨も降らなむわびつつもねむ　（古今集卷十五）
春日山をのへの雪も消えにけりふもとの野べの若菜つまなむ　（新葉集卷一）
小倉山みねのもみぢ葉心あらば今一たびのみゆき待たなむ　（拾遺集卷十七）
わが宿の櫻の色はうすくとも花の盛りは來ても折らなむ　（後撰集卷二）
雁がねぞけふ歸るなる小山田の苗代水のひきもとめなむ　（後拾遺集卷一）

この將然言を受ける願望の『なむ』は、散る、降る、啼く、などの人間以外の働きに多

く用ゐる動詞の場合でも、また、待つ、行く、折る、貸す、などの自己の行爲にも他の行爲にも用ゐる動詞の場合でも、縱ひ一首上各特殊の色調はあつても、同樣、他に對する希望の意味なる事は萬葉以來の用例を見れば分る。新葉集卷一の『若菜つまなむ』などは特によい例である。

この將然言を受ける願望の『なむ』について山田孝雄氏は、『自家の情的傾向を豫想的にあらはすなり』と說明するが、情的傾向などと云つても意味が瞭然たらない。それよりも堀秀成などの說明の方が精細で且つ自然である。秀成いふ。『奈牟と成る時は、其願はしきことを思ふ意の辭となる。されど此はばやなどの如く切に願ふ意はなく、物の自然しかならむことを平和に願はしく思ふ意也。然るに世にはただ一向に願ふ意とこころえたるはいと粗漏ことなり』秀成のこの說明は例の音義說に立脚してゐるのである。富士谷成章の解は後段に抄する。これを見ても『待たむ』『待たな』と、『待たなむ』との間に根本の相違あることがわかるのである。なほ用例を拾ふ。

垣越に散り來る花を見るよりは根ごめに風の吹きもこさなむ

白露のおくに數多の聲すれば花のいろいろありと知らなむ

わび渡る我が身は露と同じくば君が垣根の草に消えなむ

こずやあらむ來やせむとのみ河岸の松の心を思遣らなむ

散りちらず聞まほしきを故鄕の花みて歸る人も逢はなむ

夏の夜の月は程無くいりぬとも宿れる水に影はとめなむ

秋の野にかりぞくれぬる女郎花今宵ばかりは宿もかさなむ

彥星の行合をまつかささぎの渡せる橋をわれにかさなむ

山櫻にほふあたりの春霞かぜをばよそにたち隔てなむ

よひのまも待つに心や慰むと今こむとだに賴めおかなむ

以上の引用例で、予は、『任せたらなむ』『嬉しからなむ』『久しからなむ』『君は來ななむ』『思はざらなむ』『うちもねななむ』などをしばらく除去しておいた。混雜するといけないからである。これも願望の意味である。それから所謂、『係のナム・ナモ』は無論ここでは論じてゐない。

なほ、兒良波安波奈毛、世奈波安波奈母、などの奈母が原形で、奈牟はそれから轉じたのだと山田氏はいふ。また、雲谷裳情有南畝の南畝は恐らくは奈母で『牟』と『母』は瞭然區別せずに發音してゐたのかも知れんと云つてゐる。

この項のはじめに、萬葉集の長歌中の『なむ』を解釋するのに、本居宣長が『いつしかも』に注意したのは好いと云つた。それと關聯してなほ他の一首に就いて書きおく。

萬葉卷八に大伴家持が坂上家之大孃に贈つた歌に、『わが宿に蒔きしなでしこ何時しかも花爾咲奈武なぞへつつ見む』といふのがある。この『花爾咲奈武』を舊訓では『花に咲かなむ』と訓んでゐて、考も略解もそれに從つてゐるが、契沖が先づ此訓方に異說を少し出し、雅澄がそれを襲いで『花に咲きなむ』と訓むべきことを力說してゐる。予も契沖の說に從つて、『花に咲きなむ』と訓んでゐる。左に先進の說を抽出する。

咲奈武は六帖にも、サカナムとあれど、願ふ詞なれば、いつかと云にかけあひがたき歟　サキナムと點し換べきにや。但後撰に、小野宮殿の歌に、松も引若菜も摘ず成ぬるをいつしか櫻はやも咲かなむとあれ

ば、今の點ひが事にあらず。（代匠記）

此歌にてはサキナムならでは協はず。奈武は常の奈武の格なればなり。サカナムと云ときは、奈武の詞、希ふ意となるが故に、上に何時毛とあるにかなはざるなり。咲をサカナム、待をマタナム、逢をアハナム、摘をツマナム、有をアラナムなど、五音の第一位の阿韻よりつづけたる奈武は、いづれも希ふ意の奈武なる格なればなり。

しかるを、此歌をも、『いつしかもはやく花に咲けかし』と希ふ意と心得て、サカナムと訓は後世意なり。すべて希ふ意の奈武の上のかかりは曾也何等の詞をおくこと古に例なきことなればなり。（中略）

しかるを、後撰集に、『松もひき若菜もつまずなりぬるを、いつしか櫻はやも咲かなむ』拾遺集に、『いつしかもつくまのまつりとくせなむつれなき人のなべのかず見む』など、上にいつしかといひて、希ふ意の奈武にうけたるは古にたがへり。そもそも『いつしか』といふは、何時かとその時を待遠に思ふのみの意の詞なるより轉りて、いつの間にやらむはやく、といふ意とせるなり。希ふ意の奈武にて、下をうくることになれるなり。さてそれより後には、いつしかといふ一の詞の如くになりて『いつしかぬる』などやうに云ることの多かるは、又再に轉りたるなり。（古義）

しかし此訓方は未だ定説までには行つてゐないやうであつて、折口氏も『花に咲かなむ』と訓んでゐる。なほ雅澄は、源氏物語、紅葉賀の、『よそへつつ見るに心はなぐさまで露けさまさるなでしこの花。花に咲かなむと思ひ給へしもかひなき世に侍りければ』とあるのをば、『今の歌によりて書るものなり』と解釋してゐる。つまり、源氏物語の歌の詞書中の『花に咲かなむ』をば、直接萬葉集の此歌を訓ちがひて、それから思付いて書いたやうに解釋してゐるのである。併し此は杜撰であつて、源氏物語のこの歌の『詞書』（實は歌に添へた消息文）のなかの『花に咲かなむと思ひ給へしも』云々は、萬葉集の此歌から來たと観るよりも、後撰集の讀人不知の、『我宿の垣根に植ゑし撫子は花に咲かなむよそへつつ見む』といふ歌から來てゐると観る方が正しい。後撰集を天暦五年の撰とし、源氏物語の制作を長保の末から寛弘の初めとするとその間にも五十有餘年の距離がある。紫式部が萬葉集に親しんだとするよりも後撰集に親しんだとする方が、源氏物語所載の歌風から看て自然である。それゆゑ、紫式部が萬葉集の歌を勝手に改作して、『花に咲かなむと思ひ給へしも』といふ文章を書いたと見るのは杜撰である。後撰集の此歌は萬葉集の家持の歌が本歌であつて、『いつしかも』を削り、『なそへ』を『よそへ』とし、『蒔きし』を『植ゑし』として、當代風にしたのである。『咲かなむ』としたのは、意識してさうしたので、他に對する希望の意である。誤謬ではない。

○『な』と『なむ』の説

三井甲之氏の、『北風の吹き來る野面をひとり行き都に向ふ汽車を待たなむ』の『なむ』の用法は、自分の意志をあらはすやうに使つてゐる。然るに日本語の慣用では、かかる『なむ』は他に對しておのづと希求する意であるから、三井氏の用法は謬妄だと、萬葉びとの用例に據つて證明した。この事は島木赤彦氏もすでに論じてゐる。しかるに、その島木氏の説に三井氏は服せず辯解の説をなしてゐる。三井氏の説によると、『待たなむ』といつたのは、『待たな』といふつもりのところを、据わりが惡いから、『む』

を是して、「待たなむ」としたのだと、かういふのである。つまり、「待たな」の代りに、「待たなむ」としたといふのである。予もおもふに、三井氏の說には理が無い。そして日本語尊重を力說しながら、予等が祖先の言語を根本から無視した說である。ゆゑいかんとなれば、

筑波根の裾わの田ゐに秋田刈る妹がりやらむもみぢ手折奈　(萬葉集卷九)

たちなばの古婆の波奈里が　おもふなむ心うつくしいで安禮波伊可奈(萬葉集二十卷)

八千くさの花はうつろふときはなる松のさ枝を和禮波牟須婆奈　(萬葉集卷二十)

八千くさに草木を植ゑて時ごとに咲かむ花をし見つつ思努波奈　(萬葉集卷二十)

君の家に植ゑたる萩の初花を折りて插頭奈旅わかるどち　(萬葉集卷十九)

いましらす國の都に妹にあはず久しくなりぬ行きて早見奈　(萬葉集卷四)

梅の花咲きたる園の青柳をかづらにしつつ阿素毗久良佐奈　(萬葉集卷五)

白波の十重に來寄する住吉の岸のはにふに二寶比天由香名　(萬葉集卷六)

玉つしま磯のうらまのまなごにもにほひて去奈妹が觸けむ　(萬葉集卷九)

わが待ちし秋萩さきぬ今だにもにほひて往奈をち方ひとに　(萬葉集卷十)

天のがはあひむき立ちてわが戀ひし君來ますなり紐とき設奈　(萬葉集卷八)

雨もふり夜もふけにけりいまさらに君は行かめやも紐解設名　(萬葉集卷十二)

ほととぎすきけどもあかぬ網取に獲りて奈都氣奈かれず鳴くがね　(萬葉集卷十九)

高圓の尾花ふきこす秋風にひもとき安氣奈ただならずとも　(萬葉集卷二十)

うつせみは數なき身なり山河の清けき見つつ道を多豆禰奈　(萬葉集卷二十)

消のこりの雪に相照る足びきの山たちばなを都刀爾通彌許奈　(萬葉集卷二十)

朝戸出の君が足結をぬらす露原早く起きて出でつつ我も裳の裾閏奈　(萬葉集十一卷)

ぬば玉のこよひの雪に率所沾名あけむ朝に消えば惜しけむ　(萬葉集卷八)

生きの緒におもへばくるし玉の緒のたえて亂名知らば知るとも　(萬葉集卷十二)

以上の用例をよく吟味すると、將然言を受ける「な」は、盡く自分のことに繋つてゐる。たとひ周圍の者の行爲もそのなかに交錯してゐてもよいところがあつても、つまり自分の行爲に關して自希の意志をあらはしてゐる。しかるに將然言を受ける「なむ」は、盡く他の行爲に關して自然に希ふ意をあらはしてゐる。この自他の關係に立つて、「な」と「なむ」とは慣用上の區別があるのであつて、「なむ」を以て「な」に代用せしむる事は謬妄である。ことに古代言語を尊重すといひ、萬葉集の言語を云々する三井甲之氏のごとき人々にとつて、この二つの混同は許容せられない筈である。これが三井氏の說に理が無い證である。「待たな」のかはりに「待たなむ」といつた語法の謬妄な證である。

この『な』は「む」に通ふものだとしてある。ただ「む」は自他共に用ゐるが、この「な」は、ただ自らしかせむとする事にのみいひて、他のうへをおしはかりうたがふやうの事にいへる例はなし。これ牟とのたがひめなり」と本居宣長も詞玉緒でいつてをる。この項の例は、去來結手名、加射之爾斯己奈、などの「な」は除いたのである。斯奈奈、伊奈奈もこの項に入れてよい。廣池氏の「な」と「なむ」混同說は謬妄なること茲でも明白である。

大槻博士が言海中に入れた語法指南で、「なむ。願ヒ又ハ吩咐フル意ナイフ語ニテ、押さなむ、受けなむ、生きなむ、有らなむ、ナド用ヰル

是ナリ。此語ハ語尾變化ナキノミナラズ、古クハ行かな、言はな、トノミモイヒタレバ願フ意アル感動詞ナルベクモ思ハルレド尙文ノ末ヲ結ベバ助動詞タルベシ』と云つてゐる。つまり、願望の『なむ』と、『な』の自他の差別を混同してゐるので未だ杜撰の言たるを免れない。そして此の大槻博士の說は、富士谷成章の脚結抄を踏襲したものである。しかし博士も最早廣日本文典では混同してゐないやうに訂正してゐる。

大槻博士の初期の文法の本をなした、富士谷成章の脚結抄に此の『なむ』を論じて、『里。テクレヨといふ。世にこれを願ノナムといひつけたれど、願にはあらで唯そとあつらふる詞也。チラバチラナムといへる詞をおもふべし。上世にはおほくナとのみよめり』といつてゐて、『なむ』と『な』を混同してゐる。このへんになると用例に重きを置いた本居宣長の方が說に精しいのであつて、予の歸納說もそこに落著くのである。

○ ひとつの『な』の例

將然言を受ける『な』は自ら希ふ意なることを實例について證した。ところが唯一首、萬葉集卷十七に、『道のなか國つ御神は旅ゆきもしらぬ君を米具美多麻波奈』といふのがある。本居宣長はこの例について、『これを他のうへにいひて、たまはなむと冀ふ意に聞えたり。例なきことなり。もしは奈の字は尼か年かなどの誤にて、たまはねにはあらざるにや』と云つてゐる。これは萬葉集中のただ一つの異例である。佛足石の歌にも、和多志多麻波奈、須久比多麻波奈、とあり、なほ、續紀宣命にも、治賜波奈、とある。

萬葉集中には上記一首のほか盡く、『ね』である。麻乎志多麻波禰、咩佐宣多麻波禰、令變賜根、安米母多麻波禰、などがその例である。

此等の『ね』といふべきところを『な』といつたのは除外例である。そしてよく見ると、盡く『賜』に續けたもののみである。そこで、『賜』に限つて『賜はね』とも、『賜はな』ともいつたことがあるといふことに歸著する。しかもこの唯一つの訛の『奈』は、この儘の形としてみると、『奈牟』との流轉關係は無くして、寧ろ、『禰』または『牟』との流用と看做すべきものである。さきの『賜はね』の例のほかに、依賜將、御見多麻波牟曾、賣之賜牟登、などの例がある。もう一つの愚按に、萬葉の、米具美多麻波奈は一つの訛であつて、それが少しばかりの例の間に擴がつたに過ぎない。或は多麻波理の例があるからして、『賜はらな』といふところを、『良』の舌音の發音し難いところを省略したのかも知れない。此等の除外例に於てすらも、自他の行爲を混同した、『待たな』と『待たなむ』が同一でないといふことが明かである。

○ 三井氏の文法論

前項には祖先が使つた『なむ』の實例をあげた。ここには、三井甲之氏の『なむ』に對する辯護說、つまり一種の文法論を吟味してみる。いま殆ど全體の主要な點を抄記して予の考を述べる。

(一) この『なむ』は『ぬ』の變化に『む』の連續したものではなく、『なむ』は分つべからざる助詞である。大槻博士は、『なむ』願ひ又は吩咐ふる意をいふ語にて、『抑さなむ』『受けなむ』『生きなむ』『有らなむ』など用ゐる是れなり、此語は語尾變化なきのみならず、古くは、『行かな』『言はな』とのみもいひたれば、願ふ意ある感動詞なるべくも思はるれど、尙文の末を結べば助動詞たるべし、と云つて居る。『な』の代りに『なむ』を

用ゐることは詩としての自由と語の音調を重んずる上から強ひて排するに及ばぬと思ふのである。

この「なむ」（將然言を受ける）は『な』に『む』の連續したものでなく、分つべからざる助詞だといふのは好い。三井氏は、先づ此言分を自ら忘却しない方がよい。次に大槻博士の字書言海中の言を引いて據どころとしたのは淺薄である。大槻博士の言は、自他の差別も、萬葉時代の用語例も無視した杜撰の言であるからである。なぜかといふに、博士は、『な』と『なむ』を同居せしめて論じてゐる。つまり古代の用例を無視してゐるのである。實際の用例を無視して初期の文法說に賴らうとした三井氏の論は先づ第一の缺陷にはひつてゐる。次に、作歌に際して『な・なむ』を混同することは、本人が強ひて混同したくば混同したところでかまはない。本人が無理に混同しようとするのを排したところで何になる。ただ祖先の用語例を正當と見て、それを標準とせば、その混同は謬忘だといふのである。通用しない作者本人だけの用法だといふのである。

（2） 萬葉の「吾が宿にまきしなでしこいつしかも花に咲きなむなそへつつ見む」の如きは言ふまでもなく「咲きなむ」である。源氏物語に、「花に咲かなむ」とあるは誤としてよい。何となれば、「ぬ」の變化ならば『咲かぬ』とはいはれず。自ら『咲かなむ』とは言はれぬ道理である。

萬葉の用例を認容したのはよい。源氏物語の文章の語法を『誤としてよい』といふのは勝手な謬妄である。源氏物語紅葉賀中の文章の『花に咲かなむ』は、あれは花に對して希望を抒べた句で作者がさう意識して使つた用法である。ところで予のさがしたかぎりでは「花に咲きなむ」の萬葉の歌を『咲かなむ』と改作して引用した歌は源氏物語には無い。三井氏の『引用』は少しをかしい。ただ後撰集卷五に、「我宿の垣根に植ゑし撫子は花に咲かなむよそへつつ見む」といふ讀人不知の歌があるのみである。此歌は萬葉の歌に似てゐるが、一首全體の意味からみて『花に咲かなむ』は正當の意味を有つてゐる。萬葉のは推量のナムである。後撰集のは願望のナムである。讀人不知の作者（或は後撰集の選者）が意識して他に對する希望の意味に使つたのである。そこで『花に咲かなむ』が誤だといふ三井氏の說の誤であることが明白になつてくる。ことに花に咲かなむ』の誤だといふ說を樹てるに、「ぬの變化ならば咲かぬとはいはれず、自ら咲かなむとは言はれぬ道理である」などといつてゐる。「ぬの變化にむの連續したものでなく、なむは分つべからざる助詞である」と九行前でいつたその脣の未だ乾かぬうちに、「ぬの變化ならば」と云々するに至つてはをかしいといはざることをえぬ。

もつとも三井氏の「奴の變化に牟の續いた奈牟」が連用言を受ける「なむ」であるといふ說には、種があるのであつて、山田氏なども複語尾相互の關係を說くところで、『ぬらむ』『ぬべし』などと同樣に取扱つて、『咲きなむ』は「咲きぬむ』だとしてあるのである。つまり、「咲かなむ」と、『咲きなむ』は其の成立が違ふといふのであつて、大槻博士のは其と少しく違ふのである。「咲きなむ」のナムは、「ヌ」の半過去助動詞が、「ナニヌネ」と活用するからして、その將然段の「な」に「む」の添はつたものだとしてゐる。金澤博士などもこの說を踏襲してゐて、それゆゑ半過去未來のナムと稱してゐる。三井氏のは大槻博士の言を種としたのである。

かく「咲かなむ」「咲きなむ」の「なむ」の各二つが成立上から區別すべきものだといふならば、源氏物語（後撰集の歌に由來したこの文章の「咲

かなむ』の『なむ』を取扱ふのに、『咲きなむ』をもつて律して、『ぬの變化に』云々といふのは間違つて居る。特に『咲かなむ』を誤だといふに至つては言語道斷である。それが、將然言を受ける『なむ』は、分つべからざる助詞だと認容して置いて、直ぐ源氏物語の文章の、將然言を受けた『なむ』が誤だといふのだからひどい。予が前行で自らの言を自ら忘却するなと云つたのはここだ。

一體、『咲きなむ』の『な・む』は『ぬ・む』または、『な・む』または、『にあらむ』だなどといふのは、學者が文法系統を樹てるための知識慾の滿足としては興味があらう。しかし眞に詩を味ふうへからは、そんな事よりも實例を多く集めて、その一々の意味と情調とを吟味した方が好い。ことに一つの假說をば直ぐ採つて、謬妄の辯護に役立たせようとするのは不徹底である。

（3） 普通の文典では、『有りなむ』の外に『有らなむ』を希望をあらはす助動詞として說明してゐる。しかし、『有りなむ』『咲きなむ』で十分に希望の意をも現はすべきである。これは未來を示す『む』に連續する『ぬ』の性質から自然に推理せらるるのである。『ぬ』は動作の現實的完了を示すのであるから、それを未來に期待することは自ら希望の意味を帶ぶるに至るのである。

普通の文典では、『有りなむ』を希望だとはしてゐない。又、『有らなむ』の『なむ』は助動詞としては說明してゐない。助詞或ひは感動詞としてある。大槻博士の如きも初期には、『助動詞たるべし』などと云つたが、今は感動詞としてある。この三井氏の言も魯鈍言である。

それから、『咲きなむ』で希望の意味を十分あらはし得るといふのも單に理窟で、實際の用語例を無視した說である。又山田氏のやうに『なむ（奴牟の變化といふもの）』『奈麻志』（奴麻志の變形と謂ふもの）と、『ぬらむ』（奴良武）『ぬべし』（奴倍斯）『ぬらし』（奴良志）と同一の發育史を有つやうに說くにしても、實際慣用例の、『なむ』『なまし』と『ぬらむ』『ぬべし』とは、『時』の關係を指示する心の持工合が大にちがふのである。こんな形式上からでなく、實例に逢著すると思ひなかばに過ぎるものがある。

かういふ形式的な文法論をば據どころとして、『む』は未來をあらはし、『ぬ』は動作の現實的完了だから、自ら、未來に期待するやうになる、そこで『咲きなむ』の『なむ』は十分希望の意味をあらはし得るといふやうな三井氏の說は、極端な音義說よりも珍なる說である。かういふ分解論が好きなら、將然言をうける『なむ』をも分つべからざる助詞だなどと諦めずに、その分解論を試みるはうが好からう。說を樹ててゐる人もゐるからである。

（4） 『咲きなむ』の『なむ』は客觀的狀態を主としていふのであつて、『咲かなむ』の『なむ』は、直接は主觀の意志を表示するのである。それ故に二つの『なむ』が異つた意味を現はすといふ從來の說は杜撰であつて、一は助動詞として狀態に關する希望を、一は助詞又は感動詞として主觀の意志を直接に現はすのであるから、同じく希望の意味を現はす場合に前者よりも後者の方が意味を強く言現はすのである。

先きに、源氏物語の『咲かなむ』が誤であると謂つてよいと明言した三井氏は、ここでは『咲かなむ』の『なむ』は直接に主觀の意志を表示するものだなどといつて、實に濟ましたものである。さきに否定して未だ脣の乾かぬうちに又其を肯定してゐる。自家撞著などいふもろこし人の造つた熟語を、このごろ忙しいので忘れてゐたが、三井氏の言を讀んで端なくも思ひ出した。

なほ、ここでも三井氏は、『咲かな』と『咲かな

む」とを一處にして論じてゐる。そして、この「な」「なむ」は直接に主觀の意志を表示するものだとしてゐる。直接に主觀の意志といふと、花ならば、花自身が直接に主觀の意志を發表して、「花咲かな」といふことになる。つまり花自身が自ら、「花咲かう。咲きたい」といふことになる。そんな蛇間なことがあるものか。それゆゑ上代にはこんな例はないのである。それから「咲かなむ」が若し假りに花自身の直接意志をあらはすと假定したならば、やはり萬葉集の『啼かなむ』は鶯自身の直接意志を表はして、鶯自身で「啼きたい」といつた事になる。こんな勝手なことはない。こんな事では萬葉集の將然言を受ける「なむ」の一つも解釋することが出來ない。これを他に對する願望の意に解して、「咲いて呉れればよい」「啼いてくれればよい」と解して始めて條理が立つのである。三井氏は「待たな」と「待たなむ」とを混同して用ゐ、それについて宏澁を敢てしようとするから、かかる苦しまぎれの哀れむべきところに落入るのである。さきに、「咲きなむ」「咲かなむ」の「なむ」の二つに根本の相違あると說いた三井氏は、ここでは、『咲きなむ』「咲かなむ」を異つた意味だとする從來の說が杜撰だといふに至つては驚かざることを得ない。煙に捲くやうなあやふやな事をいつて人をごまかしてはいけない。

（5）「な」が「なむ」と混同せしめられたのは主として音調の上の要求からであらう。『殺さな』といふ此の「な」は「む」と同じ意味で『殺さむ』といふと同じだと本居宣長は言つて居る。しかし彼も、「なは自ら然せむと欲することにのみいひて」といつて、それが主觀の意志を直接に表示するを認めて居る。それ故待たなむは「待たな」と同じ意味で『待ちなむ』とは全く異つて居る。

『なが』なむ」と區別せられずに混同せられたのは、上代には「賜はな」の一異例が少し問題になるのみで、全く無いことである。次に、本居宣長の詞瓊綸の言を引用するのは好いが、宣長の言は三井氏の說の辯護にはならず却つて反對なのである。宣長は、『なは自ら然せむと欲することにのみいひて』といふのであるから、三井氏が前に引いた「咲かな」の例とは合はない。また詞瓊綸の將然言をうける「なむ」の條を見ると、盡く、他に對する願望の意に解して例を引いてゐる。宣長は「な」と「なむ」で自他をはつきり區別してゐる。そこで宣長の說を味方とし、「それゆゑ待たなむは待たなと同じ意味で」とはいへぬ。『それゆゑ』が辻褄が合つてゐない。それから前言で、「待ちなむ」と「待たなむ」の二つの「なむ」が異つた意味だとする從來の說は杜撰だと云つた三井氏が、ここで、「待ちなむ」と「待たなむ」とは全く異つてゐると云つて居る。ここで『全く』といふのは字義どほりに「全く」と解してよいのであらう。予は何がなし狐につままれた樣な氣がする。

要之、三井氏の『待たな』「待たなむ」同義說には、何等の根據をもみとめることが出來ない。

わすれてゐたが、三井氏の論の公にされた雜誌は、大正六年四月十五日發行の「日本及日本人」である。予は自分の都合の好いやうにばかり、三井氏の文を抄出しなかつた事を證する爲めに、雜誌の名を明記しておくのである。

（大正六年六月二十五日）

○連用言をうける『なむ』

予が「なむ」を論じたのは、三井氏の、「北風の吹き來る野面をひとり行き都に向ふ汽車を待たなむ」の「待たなむ」の用ゐざまの謬妄なること、それからこの歌の「待たなむ」は「待たな」といふべきところを口調のうへから「む」を加へたのであるといふ三井氏自身の說明の無根據なること

を、予らが祖先の用例、主として萬葉集の用例を標準として證したのである。

それゆゑ、主題は、將然言を受くる願望の『なむ』にあるのである。しかし『なむ』にも種類があるから、混同しないやうに、そのをりをりに注意して來た。そして先づ、連用言を受くる『なむ』の萬葉集中の用例を對照として揭げた。ところが、七月十三日の時事新報文藝欄をみると、三井氏はかう云つてゐる。

次に、『なむ』に就ての論ですが、僕は助動詞『ぬ』と『む』とが連つて成立つた『なむ』と、係の助詞『なむ』『なも』感嘆詞『なむ』から類推される『なむ』或は希求の助詞『な』と同じ意味の助詞としての『なむ』とを分つて論じてゐるのですから、ここへ御注意願上げます。『なむ』の種類や成立に就て考へずにただ『なむ』の例のみを舉げて御論じにならぬやう願上げます。

○右は時事新報の文を三井氏自身の改正したのに據つた。

このたびの予の論を讀めば、かういふことは云へなくなつてくる。予はアララギ前月號で、『なむ』の論がいまだ未完であることを明記しておいたのに、そこを注意しないところに三井氏の言説の特徴があらう。

予は連用言を受くる推量の『なむ』の成立に對する先進の説にも顧慮してゐる。それは前言で明かである。しかしなほ念のために玆に一まとめにしてもよい。

(1) 脚結抄のいはゆる、『去倫のなむ』であつて、この『なむ』は『ぬ・む』からいでてゐる。俚語でいへば、『テシマハウ』である。人しれず思へばくるしくれなゐの末つむ花の色にいでなむ、は『色ニ出テシマハウ』である。

(2) 山田孝雄氏の説は、成章の踏襲で、『ぬ・む』からいでてある。心は花になさばなりなむ、は『ナッテシマフデアラウ』である。

(3) 大槻氏の説は、ヌの活用なるナに未來のムを連ねたもので、『な・む』である。半過去のナムと稱してゐる。多くの普通文典が之に從つてゐる。

(4) 岡澤鉦次郎氏の説は、『にあらむ』の約合であつて、『ら』音の省かつたものである。推測の義であつて、『デアラウ』である。

先づざつとかうである。予は三井氏みたやうに大槻氏説などにのみは頼つてゐない。且つ予は、推量の『なむ』の分解説などには餘り重きを置いてゐない。半過去、半過去未來といふことが念中にあるから、理窟上、テシマハウ、或はナッテシマフデアラウといふやうになり、又三井氏の説のやうに此の『なむ』にも希求の意があり得るなどいふやうな事になるのである。ところが實際の例を吟味すると、希望の意などは無論無く、テシマハウ、ナッテシマフデアラウ、などでは解けないものがあり、寧ろ、デアラウと翻した方がよい場合がある。『物の自然しかなり行むと思ふ』意で、『雨が降りなむ』は、『雨が降るべく思ふ』意だとする秀成の説で足りる場合がある。予が成立上の分解説などよりも、實際用例の此の『なむ』の含む概念と情調とに重きを置くのはこれがためである。予はわれら、祖先が用ゐた、連用言をうけた『なむ』に主概念主情調として、希求の意の無い事を明言しておく。つまり三井氏の説を根本から打破するのである。

(七月十四日朝)

○ 將然言を受けし『なむ』の一例。

折口氏の説

古事記の倭建命に答へたてまつつた美夜

受比賣の長歌に、「高光る、日の皇子。安見しし、吾が大君。璞の年が來經れば、璞の月は來經ゆく。諾な諾な。君待ちがたに、吾著せる、襲の欄に、都紀多多那牟余」といふのがあつて、この『月立たなむよ』の『なむ』は普通の用法と違ふといふのが先進の説である。

都紀多多那牟余は、月將立ヨなり。契沖、後の歌ならば多知那牟余と云べしと云り、信に後には多々那牟とては、立テヨカシと希ふ意になるを、古へは多知那牟の意にかくも云けるなるべし。立ツベキコトヨと云むがごとし。（古事記傳巻二十八）

都紀多多那牟余は、月將レ立ヨと云にて、立ツベキコトワリヨと云はむが如し。後世に多多那牟とは、立テヨカシと希ふことにのみ用ど、此はタタザラメヤと云ふ勢ひなれば、必ず此如有べきことぞ、言語の弘きこと活きてあるが如し。活用など云ひて狹き論すべからず。（稜威言別巻之三）

以上の説では、つまり萬葉時代ならば『立ちなむ』といふべきを　倭建命時代には、『立たなむ』といつたこともあるといふ説である。しかし愚見はすこし違ふのであつて、この『立たなむ』は『立ちなむ』の意ではない。この歌は、甘えて、少しく拗ねて、親しい心を吐露したのであつて、『ふかくいひ契つてわかれてから だいぶ年月が經つた。久しい間の寂しさを辛抱してきて、まのあたりあうてみると、くやしい、うらめしいやうな思ひも湧く。もう經水の潮來するのも當然であつて、いつそのこと、その方がよいとも思ふ』ぐらゐの意を、女詞で、つつましくいふのである。

つぎに、『君待ちがたに』は、媛自身が命を待兼ねてといふのではなく、『月水が待ちかね奉りて』（宣長）といふのであつて、それゆゑ、「月立たなむよ」は、『經水のあるのは當然である。むしろその方がよいとも思ふ』の意があつて、ここの『なむ』には、經水に對しておのづと期する意が含まつてゐるのである。つまりこの『なむ』には、他に對する自然的期待の意が含まつてゐるので、『立ちなむ』とは、語の情調がちがふのである。

守部の、『立たざらめやといふ勢ひなれば』といふ言は他に對する期待の意を否定するための言ではあるが、期せずして愚見と幾分通ずるところがある。愚見は此歌のうちの、『諾な諾な』と、結句の「よ」の調子に目を附けたのであつて、「月立たなむよ」を、『月立ちなむ』と解しては腑におちがたい。そこで、將然言を受けた、萬葉集中の『願望のなむ』は、すでに源をこのへんに發してゐるのではないかと思ふ。このことは、守部のやうに、『然る汚垢御姿にて大御盞を捧げ獻り給ふと思へりしにや』などいかめしく考へずに、兩性相親の流露語を念中にもつて釋くと無造做である。

予の如上言は或は牽強の説と嘲り去られるかも知れぬ。ただ、この『なむ』を、誤寫誤傳を否定して觀るとき、言語はさう急劇には變化しないといふ事實も、予の説に幾分の補助となるのである。ちなみに云ふ。熱田大神緣起所載のものには、結句が、『つきたちにける』になつてゐる。

契沖も、宣長も、守部も、「立たなむよ」を、『立ちなむよ』だと、理窟のうへからは解釋してゐる。すなはち、將然言を受ける願望のナムとしては意味が通じ難いといふので、そこで「立ちなむ」の意としたのであらう。併し普通の推量のナムとしても通じないところが自然にあるからして、彼等もおのつから、立ツベキコトヨ、立ツベキコトワリヨ、立タザラメヤ、などと解釋してゐるのである。このへんは識者のをしへをあふぎたいと思つてゐる。

（願望の奈牟は、奈母からいでてゐるといふ說があるが、これも妄ではあるまい。なほ溯つて、奈母は爾母からいでてゐるといふ說を折口信夫（釋迢空）氏がたててゐる。そして、萬葉集卷十四の、「あしがりのわをかけ山の穀の木のわをかづさ爾母かづさかづとも」の歌を例證としてゐる。この說が眞ならば、爾母、奈母、奈牟は相通ずるのであつて、願望のナムは分解し得るに至るのである。つまり、將然言を受くる「爾」は、「賜はね」の條で記したやうに他に對する願望の意であつて、それに詠嘆の「母」の添つたものとみるのである。さうみると、將然言を受くるナムに、他に對する自然的願望の意の出來たのも、無理でない發達の徑路をとつたとみることが出來る。なほ折口氏は、東歌にかういふ古語の殘つてゐるのは、東歌の「訛語」以外に、當時すでに都では死語になつてゐても、ずつと以前に官人移植民などが東國にさういふ詞語を傳へて、それが殘存してゐたのではあるまいかと談つた。

○意味のちがふ『なむ』の用例

日本語の奈牟の用法を定めるには、大體もつとも多く用ゐられた例に據るがよく、古事記の『多多那奈余』などは興味ある一例として觀る方がよい。

なほ、萬葉集卷十四、東歌の、「おもふなむ」「潮みつなむか」などの「なむ」、「戀ふしかるなも」「わぬに戀ふなも」「思ほすなもろ」「わをか待つなも」「わが心二行くなもと」などの「なも」は普通日本語ならば「らむ」といふべきところであつて、是等の例をもつて「なむ」の用法を律するのはわるい。

なほ、東歌中の、「夫に逢はなふよ」「忘れせなふも」「いまだ寢なふも」「籠にも滿たなふ」などの、なふは外形が「なむ」に似てゐるが、これは「なく」に通ふものであつて純粹のものと看做しがたい。ただし、かういふ同音の訛語も、單に訛語としてでなくその發育の徑路でも明かにすることが出來るなら興味ふかいとも思ふ。

○林圀雄の說

三矢氏は、「咲きなむ」の「なむ」にも十分希望の意があると說いたとき、予はその說の謬妄を難じた。ところが、古人にもかかる說をいつてゐるものがある。

常葉居主人林圀雄といふ人が文政九年に書いた、「詞の緒環」上卷には、すべてなむには願ふ意があつて、「行かなむ」「行きなむ」は、ただ自他の差別に過ぎないと說いてある。例へば第一アカサタナ等を受くる奈武は他のうへにかかり、第二音イキシチニ等を受くる奈武は自の上にかかり、第四音エケセテネ等を受くるは他にも自にもかかると、かう說くのである。古今集の「堀江こぐたななし小舟漕かへりおなじ人にや漕ぎわたりなむ」は「漕ぎわたりタイ」と自ら願ふ意だと說くのである。しかし予は無論彼の說を信じない。彼の說はいかにもつとものやうでゐて實は用例から歸納した說ではない。

○常陸風土記の將然『なむ』の一例

常陸風土記、新治郡の條に、「古老のいはく古へ山賊あり。名を油置賣命といふ。今社の中に石屋あり。俗の歌に曰く、こちたけば小泊瀨山の石城にも率て許母郎奈牟な戀ひそ吾妹」といふのがある。この奈牟の用法は他の用例と違つてゐる。しかし此用例を以て日本語の奈牟の一般用例と看做すのはわるい。なぜかといふに此は所謂『俗の歌』であるから訛と考ふべく、萬葉

東歌中の奈牟の用法に稍趣の違つたのがあると同様である、加ふるに此歌には意味の點から謂つても少し怪しいところがある。それは結句の『な戀ひそ吾妹』と上の句との連續が不自然に思はれるところである。萬葉卷十六に『事しあらば小泊瀨山の石城にも隱らば共にな思ひそ吾背』といふのがあるが、これならば句法も意味も怪しい點がない。そこで若し常陸風土記の奈牟に用法を訛でないと看ると、『な戀ひそ吾妹』は『な思ひそ我背』の記憶の誤であるかも知れない。民謠には語法の訛と、一二句たがつて傳播することは、稀有な現象ではないからである。

○萬葉の一首

萬葉集卷三の、『何處吾將宿たかしまの勝野の原に此日くれなば』を古くは『いづこにかわがやどりせむ』と訓み、代匠記、考などもそれを踏襲してゐる。ただ代匠記に『六帖、六、ワレハヤドノム』と註してゐる。久老の槻落葉には『イヅクニワレハヤドラム』と訓み、千蔭は略解にて『イヅクニカワレハヤドラム』と訓んでゐる。然るに、雅澄の古義では、『イヅクニカアハヤドラナム』と訓んでゐる。これは雅澄の『なむ』の將然言を受くる格に對する思違ひであらねばならぬ。若し『なむ』と訓みたければ『ヤドリナム』とせねばならぬ格である。かういふ思違ひの訓方が普通の假名がきにされて傳搬され、それが萬葉の一つの用語例だなどといふやうになると惡いとおもふ。

○古事記、神樂、催馬樂の歌謠中の『なむ』『な』『ね』の用例

なほ以上のほか、古事記、神樂、催馬樂あたりから『なむ』の入つてゐる歌をひろつておく。

青山に日が隱らば、ぬばたまの夜は出でなむ、朝日の咲榮え來て　（古事記神代卷）

八田の一本菅は、子持たず立ちか荒れなむ、あたら菅原　（古事記仁德天皇卷）

妹が門や夫が門、行き過ぎかねてや、わが行かば肱笠の、ひぢがさの雨もや降らなむ、郭公雨やどり笠やどり、やどりてまからむ、しでたをさ　（催樂）

葛城や、渡る久米路の、繼橋の、こころも知らず、いざかへりなむ、朝かへりなむ　（神樂）

以上を見ても大體、將然言を受くるものと連用言を受くるものとの間に意味の區別がある。一二例の異例、誤寫の疑あるものを根據として此二つの混用可能說に我を張るのは惡い。ついでに、『な』『ね』用例を幾つか拾つておく。

網はり互しめろよしによしより來ね　（紀）

島つ鳥鵜飼がとも今助に來ね　（記紀）

味酒三輪の殿の朝戸にも出でて行かな三輪の殿戸を　（紀）

味酒三輪の殿の朝戸にも押し開かね三輪のとの戸を　（紀）

貴人は貴人どち賤奴はも賤奴どちいざ會はな我はたまきはる內の朝臣が腹內は砂石あれやいざ會はな我は　（紀）

いざあぎ五十狹茅宿禰たまきはる內の朝臣が頭槌の痛手負はずは鳰鳥の潛せな　（紀）

いざあぎ振熊が痛手を負はずは鳰鳥の淡海の海に潛せなわ　（記）

三栗の中つ枝のふほごもりあかれる孃子いざさかはえな　（紀）

三栗の中つ枝のほつもり赤ら孃子をいざさらば吉らしな　（記）

雲雀は天に翔る高行くや速總別鷦鷯取らさね　（記）

隼は天にのぼり飛び翔り五十槻が上の
鷦鷯捕らさね　（紀）

大前小前宿禰が金門かげかく寄りこね雨
立ち止めむ　（記）

道に會ふや尾代の子天にこそ聞えずあら
め國にはきこえてな　（紀）

如上の例の示すが如く、將然言を受ける『な』『ね』には同じく希望でも自他の區別が大體きまつてゐる。紀の『朝戸にも出でて行かな』『朝戸にも押し開かね』などは最も明瞭な用例である。萬葉卷一の『家聞かな名のらさね』などよい參考例である。同じく卷一の『いざ結びてな』『草を刈らさね』など、卷一以下の數多の用例あるが、今は純粹形のみを拾つて置くこと前言にことわつた如くである。

○古事記文中の『なむ』『な』等

古事記の歌謠中の『なむ』『な』『ね』などの用例はすでに手鈔した。いま古事記文章中の用例を拾つて置かうと思ふが、文章中のものは歌謠のやうに、奈牟、那牟、南畝などとは書いてゐない。漢文で書いてゐるのを後世の學者が『なむ』と訓んだのである。例へば、古事記上卷の、以三爲請ニ將罷往之狀一をば、『罷往りなむとする狀を請さむと以爲ひてこそ　と訓み、答ニ白各宇氣比而生レ子をば、『各誓ひて御子生まな』と訓んでゐる類である。かくの如き例を古事記傳に從つて少しく拾はうと思ふ。

（1）『汝、此間にあらば、遂に、八十神に滅さえなむ』と詔り給ひて　（神代の卷）

（2）須佐能男命の坐します、根堅洲國に、參向てよ、必ず其の大神、議り給ひなむ』と詔り給ふ　（神代の卷）

（3）『賤奴が手を負ひてや死なむ』と男叱して　（白檮原宮の卷）

（4）今、天より八咫烏をおこせむ。故、其の八咫烏、導きなむ　（白檮原宮の卷）

（5）疾病さはに起り人民うせて盡きなむとす　（水垣宮の卷）

（6）神氣起らず、國安平ぎなむ　（水垣宮の卷）

（7）天の下平ぎ、人民榮えなむ　（水垣宮の卷）

（8）「あれ、御子に易りて海中に入りなむ。御子はまけの政とげて』　（日代宮の卷）

（9）吾は汝が命の御妻になりなむと思ふ　（高津宮の卷）

（10）後世の示すにも足へなむ　（近江飛鳥宮　卷）

（11）僕は一日に送り奉りて還り來なむ　（神代の卷）

（12）其の鰐魚返りなむとせし時に　（神代の卷）

（13）然らば吾も奇異と思へば見に行かな　（高津宮の卷）

右には、萬葉集に於てした如く、係の『なむ』『なも』は拾はない。『本つ國の形になりてなも產むなる』とか、『沙沙那美に出でてなも悉に其の軍を斬りける』などは拾はないのであつて、さういふ他の種の『なむ』『なも』は別に論じようと思ふのである。

（2）三井甲之に與ふ

君の催促によつて、七月十五日發行の「日本及日本人」中の君の僕に宛てた文章を讀んだ。一體なんの事だ。僕の言の核心を突いて來ないで、『下品な言葉づかひ』などと、詞尻をとら

へて女々しい事をいつてゐるに過ぎない「男らしくない回避的態度を取つて」などの言は君には適當であるから、持つて歸るがよい。そして今すこし堂々として來れ。僕が君の使つた「なむ」の謬妄なることを論じたのは、なにも島木赤彦氏への助太刀などではない。僕が勝手に君にむかふのだ。いつたい、「助太刀」などの必要なのは君の事だ。また、「助太刀」などの語を聯想せねばならぬのは君に限るのだ。この語も持つてかへりたまへ。

このたびは「なむ」に就ていふ。先づ僕の「なむ」の說を再讀したまへ。そして、餘計なことを言はずに左の件について明答が出來るならしたまへ。

（1）「北風の吹き來る野面をひとり行き驛に向ふ汽車を待たなむ」といふ君の歌の、「なむ」の用ゐざまは、吾等の祖先、主として萬葉びとの用例を標準として觀るとき、正當なる用法であるか、謬妄ならざる用法であるか。萬葉集とそれ前の用語例に據つて、君の用例の謬妄ならざる實證をあげ得るか。

（2）若し、萬葉びとの用例を標準とすることを肯ぜずとせば、「吾等は萬葉集へ、またそれ以前に溯つて自由な言葉と思想を求めて居る」といふ君の言はこの儘でよいか惡いか。君は此言に言責を有ち得る自信があるかどうか。

（3）將然言を受くる「なむ」が他に對する希望の意味に用ゐる實例は萬葉中にあることを僕は明示した。然らば、「平安朝以後に於て、咲かなむ、有らなむ、を他に對する希望の意味に用ゐる語感を作つて來たのは」といふ君の言は、謬妄か謬妄でないか。

（4）君は、君の使つた「待たなむ」は「待たな」といふところを、一音足りないから、口調の上で「む」を足したのであると、自ら說明してゐる。然るに萬葉びとの用語例には、「待たな」「待たなむ」の間には慣用上自他の區別がある。君はこの事實を認容し得るか。若し認容し得る能がありとせば、君の說の謬妄を訂正するだけの男らしき態度を君は有つてゐるか。

（5）萬葉集の「わが宿に蒔きし撫子いつしかも花に咲きなむなそへつつ見む」を「花に咲かなむ」として源氏物語に引用して居ると君は繰返して斷言してゐるが、それは本當か。

（6）僕は君の歌の「待たなむ」を、「待たな」とせよとは未だ嘗て論ぜぬ、その僕に向つて、『それならば僕が此場合、待たない、む、を拒んだ理由を破るべきだ』といふのは一體何事か。この言を撤回する正直さが君にあるかどうか。

（7）僕は、君の歌の「待たなむ」の謬妄を主題として論じたが、その他の種類の「なむ」の存在を否定してゐない。且つ僕が先に引用集めた實例は、將然言をうける願望の「なむ」と連用言を受ける推量の「なむ」に限局されてゐると明言してある。それに向つて「なむ」には種々あるとか、同じ「なむ」にも素性があるとか、も一度研究しなほして見るべきだなどの言を君は自ら恥かしいとは思はぬか。

先づ右の問に明答するがよい。僕から君の言說が謬妄だといはれて、いやに氣にする君の言は、僕には男らしくないくさつた女人の言を聯想せしめる。かういふと「人格」に對する漫罵だとか『誣ひた惡口を吐くのは、それは社會的道德的感情の悲しむべき一面を反映したのである』などと復云ふだらう。しかし僕はそん

な上品や下品やの言葉つかひの問題、くさつた女人のやうな仲間の道徳問題などはどうでもよいのだ。まさしく戰鬪の活動を思ふべしだ。もう現在の僕の覺悟はそんな老耄公卿じみたところにぶらついてゐないのだ。それゆゑ今後いつても無駄だ。それとも、「さうせぬに於ては僕は齋藤茂吉氏の態度に道徳的批判を加へて社會的良心の判斷に訴へようと用意してゐる」などと、用意などばかりしてゐずに速かに斷行するがよい。

（七月十四日夜）

(3) 三井甲之氏の答辯

三井甲之氏は、彼の文法論の謬妄なることを予から指摘されて、なほ妄執を敢てしてゐるからして、その謬妄なることの實證を倚ほ瞭然とさせ、併せて彼の妄を少しくひらいてやらうと思つて、アララギ八月號に於て七箇の質問を彼に向つて發した。

然るに彼は、九月一日發行の雜誌「日本及日本人」に於て、『齋藤氏は僕の問のうち重要なる多數には答へられぬと見えて答へぬが、今同氏が八月號でまとめて僕に向けた問には僕は悉く答へる』と圏點づきの前置をおいて殊勝にも答へてゐる。その『齋藤氏は僕の問のうち重要なる多數には答へられぬと見えて答へぬが』などの窮策文句は、予の文章を讀まぬ者の前には辛うじてごまかしも利から。予の文を知つてゐるアララギの讀者には何の要もなきものであるからして、かかる文句の批評は見免してやつてもよい。そして、直ちに彼の答辯を檢査しよう。

（茂吉問）『北風の吹き來る野面をひとり行き都に向ふ汽車を待たなむ』といふ君の歌の「なむ」の用ゐざまは、吾等の祖先、主として萬葉びとの用例を標準として觀るとき、謬妄なる用法であるか、謬妄ならざる用法であるか。萬葉集とそれ前の用語例に據つて、君の用例の謬妄ならざる實證をあげ得るか。

（甲之答）僕の歌の「待たなむ」が誤であるとするならばそれでよいと既に言つた。

（日本及日本人八二頁下段一三行）

「待たむ」又は「待たな」といふべき場合に、綴の都合上、歌や詩では「待たなむ」といつて惡いと申さるるならばそれでよいのです。僕は詩にはそのくらゐの自由を許してもよからうと思ふのです。

（同じく八二頁下段一五行）

彼の答中、「誤であるとするならばそれでよい」「惡いと申さるるならばそれでよいのです」といふ文句がある。

これは予が「謬妄なる用法であるか」と問ひたるに對して、「謬妄なる用法である」と承認した答と觀て可からう。すなはち彼は自らの謬妄用法を自認したのである。ここに於て、論戰は予が勝つて彼が負けたのである。もともと此が論戰の主題であつたのであるから、活動寫眞流にいへば、「牙城陷落の光景」であるといふぐらゐのところであらう。『そのくらゐの自由を許してもよからうと思ふのです』などは敗戰後の泣言に過ぎないのである。かつ、「謬妄なる用法である」とはつきり男子流にいはずに、「それでよいのです」などと、ぼかすところが女人流なのである。

（茂吉問）若し萬葉びとの用例を標準とすることを肯んぜずとせば、『吾等は萬葉集へ、またそれ以前に溯つて自由な言葉と思想を求めて居る』といふ君の言はこの儘でよいか惡いか。

（甲之答）用例に拘泥するよりもその言語

と思想との精神を攝取すべきだ。

から答へて、その次に阿部氏の「ゲーテ詩抄」のことなどを書いてお茶を濁さうとしてゐる。「ゲーテ詩抄」の事は別に論じてよいものである。「なむ」の論をしてゐるのに、ゲーテの詩のことなどを持出すのは魯鈍である。

彼は萬葉集以前の言葉を求めてゐるといふから、萬葉びとの用語例に據つて彼の用語例の謬妄なることを明示したのである。さうすると彼は、用例に拘泥する必要はないといふ。實に可笑しい。いつたい萬葉集の言語の精神を求めるのに、萬葉集の言語の用例に據らずに何に據るのか。彼は空論をしてゐる。そして如何に答辯に窮してゐるかを見よ。

（**茂吉問**）將然言を受くる「なむ」が他に對する希望の意味に用ゐる實例は萬葉集中にあることを僕は明示した。然らば、「平安朝以後に於て、咲かなむ、有らなむ、を他に對する希望の意味に用ゐる語感を作つて來たのは」といふ君の言は、謬妄か謬妄でないか。

（**甲之答**）此の場合の「咲かなむ」の「なむ」は助動詞としての「なむ」である。これは最初から齋藤氏等が助詞と助動詞との區別を注意せず、「將然言を受くるなむ」とのみいつて居るが、それにも、「助動詞のなむ」と「助詞のなむ」とを分つべきだ。

これも答になつて居らぬ。彼の歌の「待たなむ」は自分の事にかけて使つてゐるから、將然言を受ける「なむ」は他に對する願望の意だと注意したのである。さうすると、彼は、平安朝以後にさういふ語感を作つて來たといつたから、平安朝よりも以前に、即ち萬葉集で既に他に對する願望の意に用ゐてゐることの實證を擧げて彼の説を破り、あはせて「平安朝以後」といつたのは誤かどうかと糺問したのである。それには答へて居らぬ、又答へられる筈がないのである。

次に、「咲かなむ」の「なむ」が平安朝以後では、助動詞であるといひ、又、此の「なむ」には、助詞と助動詞と二とほりあるといふが、これも謬妄であつて、「咲かなむ」といふ工合に將然言を受けた「なむ」は、平安朝以後でも、正當な用例は盡く感歎辭（あるひは助詞）であつて、決して助動詞ではない。予は、「咲かなむ」で助動詞に使つた正しき例を見たく思ふ。大槻博士なども初期の語法指南では、「助動詞たるべし」などと云つたが、廣日本文典では瞭然と訂正したことをことわつてゐる。德川時代の文法家ですら、助動詞として取扱つてゐない、三井氏は謬妄言を發することを好むと見える。

それから、予が「なむ」を論ずるのに、助詞・助動詞の區別を樹てなかつたと彼がいふが、そして此事が予の言に向ふ彼の今の言としては唯一の武器であるらしく、ほかの處でも、「齋藤氏は最初からナムの論に就て助詞と助動詞との區別をして居らなかつた」などと大きな黑い圏點をつけて云つてゐるが、これもをかしい。將然言を受けるナムは感歎辭（あるひは助詞）で、連用言を受けるナムは助動詞であることは當然の事である。予も亦かく云つてゐる。（アララギ八月號一〇六六頁）又、成章の去倫のナムは助動詞であることを彼は知らない。又、「連用言を受けるなむ」と云へば助動詞であることぐらゐ理會が出來なくて予と論戰しようとするのは無理だ。

（**茂吉問**）君は、君の使つた「待たなむ」は「待たな」といふところを一音足りないから、口調の上で「む」を足したのであると自ら説明してゐる。然るに萬葉びとの用語例は、「待たな」「待たなむ」の間には慣用上自他の區別がある。君はこの事實を認容し得るか。若し認容し得る能がありとせば、

君の説の謬忘を訂正するだけの男らしき態度を君は有つてゐるか。

(甲之答) これは(1)と全く同じ内容を有するものである。

これも答になつてゐない。又第一の問題と此問題は内容が全く同じなどではない。第一の問題は、『待たなむ』が謬妄か否かと問うたのだ。ここの問題は、待たな、と『待たなむ』が同じ意味かどうかと問うたのだ。この差別が彼には分らぬと見える。それゆゑ、『待たな』と『待たなむ』とを混同などしてゐるのである。そして予からその謬妄を指摘せられたのである。

(茂吉問) 萬葉集の『わが宿に蒔きし撫子いつしかも花に咲奈武なそへつつ見む』を『花に咲かなむ』として源氏物語に『引用』して居ると君は繰返して斷言してゐるが、それは本當か。

(甲之答) 『引用』といふ語の意義を齋藤氏の如く狹義に解する必要はない。今の論では和歌が民謠的傳誦によつて、その言葉と意味とを變化せしむる徑路に就て論じたのではなく、單に例を萬葉や源氏から拾つたのだ。

これでは答になつて居らぬ。予は『本當か』どうかと問うたのである。すなはち、源氏物語紅葉賀中の、「よそへつつ見るに心はなぐさまで露けさまさるなでしこの花」花に咲かなむと思ひ給へしもかひなき世に侍りければ』の「咲かなむ』は、實は後撰集の讀人不知の歌、我宿の垣根に植ゑし撫子は花に咲かなむよそへつつ見む』の間接變形の引用なのであつて、萬葉集の大伴家持の歌の『引用』ではないのである。若し萬葉集の歌の引用であつたならば、源氏物語の歌も、『なそへつつ』といふ筈である。要するに彼は、雅澄の古義の文句を鵜呑にして少しの考察も研究もなすことなく、天下の人が何も知らないやうな口吻で、引用、引用と五たびも繰返したのである。そしてその謬妄を予から指摘されて窮した擧句に、『引用』といふ語を予の如く狹義に解する必要が無いなどといふ。廣義も狹義も無い。まるで謬妄なること予の證明した如くである。彼は群盲のまへにごまかす癖がついてゐると見えて、淨玻璃の前に立たせられても『あやまつた』といふだけの正直さが無い。彼の言説は皆かくの如くである。

(茂吉問) 僕は君の『待たなむ』を『待ちなむ』とせよとは未だ嘗て論ぜぬ。その僕に向つて、『それならば僕が此場合、待ちなむ、を拒んだ理由を破るべきだ』といふのは一體何事か。この言を撤回する正直さが君にあるかどうか。

(甲之答) 齋藤氏は『待たなむ』を『待ちなむ』とせよとは言はなかつたといふ。しかし島木氏が『待ちなむ』と訂正したのに僕が抗義しこの論であるから、齋藤氏が島木氏の説を否定するのであるならば何故にそれを明言せぬか。明言せぬ以上同誌上で僕と島木氏との論に加入したのを助太刀と見、島木氏と同じ立場にあると見るが自然である。

予は彼の歌の『待たなむ』を謬妄であると論じた。しかし『待ちなむ』とせよとは論ぜぬのである。それに向つて、『待ちなむを拒んだ理由を破るべきだ』などと苦しまぎれの餘計なことを云ふから反問したのである。彼も予の文章中から、『待ちなむ』とせよといふことを捜すことが出來なかつたと見えて、『しかし島木氏が』などといつて、ごまかさうとしてゐる。『ごまかす』と評されて悔しければ、積極的に予の文章中より實證をあげ來るがよい。それが出來なければ降參すべきだ。

(茂吉問) 僕は、君の歌の『待たなむ』の謬

妄を主題として論じたが、その他の種類の『なむ』の存在を否定してゐない。且つ彼が先月集めた實例は、將然言をうける願望の『なむ』と連用言を受ける推量の『なむ』に限局されてゐると明言してゐる。それに向つて『なむ』には種々あるとか、同じ『なむ』にも素性があるとか、今一度研究しなほして見るべきだ、などの言を君は自ら恥かしいとは思はぬか。

(甲之答)(茂吉いふ。ここの答はごたごたしてゐるから主要點を鈔する)(一)僕の歌に用ゐた『なむ』は『助詞のなむ』である。『他の種類のなむ』の存在を否定せぬにもするにも『助詞のなむ』と『助動詞のなむ』との重要の區別に氣づかぬのであるから否定も肯定も問題にならぬ

助詞、助動詞の問題などは當然の事であつて、そんなことは初等程な文典でも明快に書いてある。こんな事で予の説を破り得ると思ふのは寧ろ哀れむべきだ

彼が、將然言を受くる『なむ』が助詞(若くは感歎辭)であることを知つてゐるのは別に惡くはない。併し彼の此知識は器械的もしくは盲諳記に過ぎない。それは彼にその用法を知らない。用法を知らす自他を今、顛倒して使つてゐるやうなものが、助動詞、助詞などと幾千萬回繰返したところで何になる。彼が日本語を論ずるのに、いかに初等文法程度に、しかもそれすらも理會せずに、ふらついてゐるかを見よ。彼が自ら自告する如く、中學校で四年間も文法を教へたといふ一つの事實からしても：：機械的にもおぼえねばならぬのだ』どほりに、機械的に盲諳記をして、助詞、助動詞を繰返しても、用法を知らねば無益である。

(二)『將然言をうける願望のなむと連用言を受ける推量のなむに限局』とは何のことであるか。正則には、將然言又は未然形を受ける『なむ』は『助詞のなむ』で、連用言又は連用形を受ける『なむ』は『助動詞のなむ』である。此の區別を明かにすれば十分である。

『何のことであるか』とは彼が魯鈍にして理會が出來ないのである。『なむ』の用法には、この二つ以外にもあるから、『限局』せしめたのである。それから、『將然言をうける願望のなむ』といふ本邦語學者の慣用語は無論、中學校文法にも、『助詞のなむ』を意味してゐるぐらゐ分らないで、予に對ふのは少し荷が重すぎよう。況んやこんな事を予に講義しようとするに於てをやである。彼は、助詞のなむ、助動詞のなむ、の區別を明かにすれば十分だといふか、こんな區別などは初步文法に餘るほど書いてある。譃だと思ふなら大槻氏の文典以來の諸文典を見るがよい。予の言の主眼はそんな平凡なところに在るのではなかつた。先づ、彼の歌の『待たなむ』の謬妄をいひ、それを萬葉びとの用例に據つて實證するにあつたのであつて、それを成し遂げたのである。この點について彼は一言をも言ひ得ない苦しさに、助詞・助動詞などと言ひ出して來たのであるが、助詞・助動詞で十分だなどといつても、用法も知らなければ十分ではあるまい。それから彼は『願望のなむ』『推量のなむ』などいふのは舊式で幼稚で不正確で、こんな言方をして今日文法を論ずるのは大膽すぎるなどといつて居る。實にをかしい。予は先達の慣用法に從つたままであつて予の發明した言方ではない。かういふ『命名』の問題は直接ここに要のないことである。終止言といふか、截斷言といふか、第三階言といふか、終止段といふか、などの問題と等しく、項をあらためて論ずべき性質のものである。

(三)元來齋藤氏が『推量のなむ』といふの

は、「時の助動詞」であつて、推量や期待の意味は第二次のそれである。又『他に對する願望』等いふのも不正確の考方である。『他に對する』は全文の文脈と内容とによつて規定せらるるので「願望」はどこまでも「主格の願望」であるを氣附くべきだ。

「推量のなむ」『常のなむ』などの慣用語を「時の助動詞」に分類したところでかまはない。これは先達も既にいつてゐる。「去倫のなむ」「いなむのなむ」『半過去のなむ』『半過去未來のなむ』などの命名は時の助動詞であることを明示してゐるのである。この命名のことはアララギで既に鈔してゐる。今更「時の助動詞」などと予に説くのは迂である。

『他に對する願望』といふ慣用語も、「主格の願望」であるのは無論であつて、今更何を夢みて居るのだ。ただこれは、『主格の他に對する願望』の意であつて、『他に對するは全文の文脈と内容とによつて規定せらるるので』などでは無いこと、予の證明によつて明かである。彼は何處まで行つても魯鈍言を發することを好む。

『待たなむ』といへば、主格の願望でも、その願望は他のものの行爲に對する願望であつて、何も、「他に對する」は全文の文脈と内容とによつて規定せらるる必要はないのだ。「待たなむ」は、主格が自ら『待ちたい』といふのでなく、第二者すなはち他者に對して、「待つてゐて呉れ」と願ふのである。それゆゑ「汽車を待たなむ」とはいへぬのである。どこまで行つても彼の言は到底予の言の敵ではない。

以上彼が『僕は悉く答へる』と豪語して答へたからして、少しは手答があるかと思ふと、誠にへろへろに終つてゐる。かつ、問題の中心である「待たなむ」の謬妄なることを徹底的に實證し、彼自身をして「それでよい」と自白せしめた以上、即ち勝負で勝つた以上、このうへ『なむ』について彼と言合ふ必要を見ない。よつて此問題の言合を打切る。併し彼は腐つた女人の如くに今後も或はくどくど書くかも知れない。それは予の關する所では無い。（九月三日）

(4)「なむ」の論餘言

○三井氏の作、「北風の吹き來る野面をひとり行き都に向ふ汽車を待たなむ」の「なむ」の用ゐざまの謬妄なることを主題として論じたところが、三井氏は此問題を、いつの間にか、ずらし、移轉させ、混亂に至らしめて、不用意な讀者には、いづこに「主題」が存するかを見付けるのに困難な如き觀を呈した。そして、今では、助詞、助動詞などいふ文法學上の命名、分類の問題が主點であるかの如く見せかけてゐる。この「問題を移轉させること」は三井氏得意の戰法と見える。けれども直ちに本營を突かうとする予はこんな小方略には顧慮したい。そして主題については徹底的にその用法の謬妄なることを實證してしまつた。かくなるに及んで、枝葉の苦裏方便言の如きは向くべき心の要を見ないのであるが、餘言として、三井氏の論戰の態度のいかに小方略を弄してゐるかを暴露させて見る。はたし合で一命をおとせばそれで勝負がきまつたのである。骸骨が「まだ負けない」と云つても勝者は顧慮しない。

○三井氏の作歌態度

三井氏の作歌態度の不徹底を見免してゐたが、三井氏が予を目して「知らぬ振してゐる」といふから、今暴露させよう

△汽車をし待たむ、汽車を待つべし、汽車

な待たむとす、待ちても、待たばや、待たむゑ、等も此の場合適當でないから、止むを得ず、「なむ」を用ゐた。

▲又「待たばや」等此の場合に用ゐらるべき言葉を數多列擧してそのいづれもが不適當であるからとて「待たなむ」を止むを得ず用ゐたことを反覆説明したのであるが、齋藤氏には此の點に關しては知らぬやうな眞似をして默つて居り。

「知らぬやうな眞似をして默つて居り」などいふのは獨り三井氏に取つて殘酷である。『汽車をし待たむ』などが適當でなく、「汽車を待たな」が一音足りないゆゑに止むを得ず、自他上全く意味の違ふ「待たなむ」を持つて來たといふに至つては殘酷である。かういふ爲方なしの妥協で詩の言語を使ふやうなら詩などは作らぬがよいのである。詩の言語は「止むを得ず」などを絶した、絶待唯一のものでなければならぬ。期せずして三井氏の作歌態度が暴露して寧ろ殘酷である。

○「待たな」「待たなむ」同義説

「待たな」の代りに、爲方なしに「待たなむ」としたといふから、「待たな」「待たなむ」の間には願望希求でも慣用上自他の差別があり、『なむ』同義説は謬妄であることを萬葉びとの用語例によつて實證したのである。さうすると三井氏は苦しまぎれに、同義説などは述べぬと言放つた。その經過を明記しよう。

▲僕も、聲調上の要求から、『待たむ』「待たな」の代りに「待たなむ」としたので

（七月十五日發行日本及日本人）

▲『「な」の代りに「なむ」を用ゐることは詩としての自由と言語の音調を重んずる上から强ひて排するに及ばぬと思ふのである。

（四月十五日發行日本及日本人）

▲それゆゑ、「待たなむ」は「待たな」と同じ意味で。

（四月十五日發行日本及日本人）

▲希求の助詞「な」と同じ意味の助詞としての「なむ」

（七月十三日發行時事新報文藝欄）

かく明記した如く、三井氏は、「待たな」「待たなむ」が同じ意味だと繰返して云つてゐるから、予はその「同義説」は謬妄であると論破したのである。又「代りに」といふ以上、代用の任務を果すだけの言語でなければならぬのは當然である。然るに、意味の全く違ふものを代用せしめては代用にはならぬ。その謬妄を予は論じてやつたのである。さうすると三井氏に、

▲僕は齋藤氏が誣ふるやうに、待たな・待たなむ同義説などは述べぬ。

（九月一日發行日本及日本人）

▲「な」と「なむ」と同じだとはどこでも申しません。

（七月十五日發行日本及日本人）

から云つて、同義説などは述べぬと、空々しいことをいふが、現に述べてゐることと上に明記した如くである。「同じ意味」と「同義」とどう違ふか。予に對つて誣ひたなどと、群盲の前に自己の言をごまかさうとしてゐる。予は三井氏のこの圖々しき態度を書きとどめ置くのである。

○『咲かな』

三井氏は、『咲かな』を直接主觀の意志を表示するものだと云つたから、おもしろいと思つて予は、

直接に主觀の意志といふと、花ならば、花自身が直接に主觀の意志を發表して、「花咲かな」といふこととなる。つまり花自身が自ら「花咲かう」「咲きたい」といふことになる。こんな頓間なことはあるものか。

それゆゑ上代にはこんな例はないのである。（アララギ八月號參照）

と論じて置いた。然るに三井氏は予の言を理會し得ないで、あべこべに、予が『主觀』といふ語の概念を理會し得ないやうな口吻で、「また哲學的考察に於て齋藤茂吉氏や島木赤彦氏と論をするのは一々詳しく說明して示さねばならぬから非常に面倒である』などと云つて、さうして、

「主觀といへば認識する主觀であつて、花は認識せらるる客觀である。主觀と客觀との區別をも明瞭に理解せぬこそ「ヘマ」とでもいふのだらう。（九月一日發行日本及日本人）

と云つて居る。三井氏は四年間も中學校の少年を相手にしたと自告する如く、虛慢の癖が附いてゐると見えて、予に對つて「主觀」の概念が分らぬなどと威張るのである。さういふ三井氏には「主觀」といふ飜譯語を誰が始めて日本で用ゐたか、その時どういふ概念に用ゐたかが分るまい。若し分るといふなら此の虛慢の語を引込ますがよい。

ところで主觀は認識する主觀であつて、花は認識せらるる客觀だといふのはよい。今三井甲之が花を見て居る。此場合三井甲之は認識する主觀で、花は三井甲之の主觀から認識せらるる客觀である。その場合に、三井甲之が認識する主觀の直接意志の表示として、『花咲かな』とは言はれぬのが日本語法の約束である。認識せらるる客觀に對つて、認識する主觀が、將然言を受ける自希の助辭「な」を用ゐるのは謬妄なのである。つまり「屁間」なのである。予は實例に就いてくどい程この事を既に說明してゐる。それにも拘はらず、それが理會出來ずに魯鈍言を敢てする如きものは到底予の敵たる價値の無きものである。主觀、客觀などと氣取つて盲語記的に羅列しても、緊要僉目の「な」が理會出來なくば、何の役にも立つまい。

(5) 二たび「なむ」の論餘言

○『待たな』『待たなむ』

予は古人の用語例から歸納して、『待たな』と「待たなむ」とを混同するのは謬妄であると云つた。そして此二つを『同じ意味』だとする、三井甲之氏の『ナ・ナム同義說』の謬妄なることを論じた。さうすると三井氏は一面は巧みな、そして一面は窮した、そらぞらしき言說をもつて第三者の前に公表してゐた。それを次に書いてみる。

僕が僕の歌で、「な」の代りに「なむ」を用ゐた、「な」と同じ意味に「なむ」を用ゐた、といつたのを茂吉氏は僕が、な・なむ同義說を述べたといふから述べぬといつたのに對して、「代り」と「同じ意味」とを拾ひ出して飽くまで僕が同義說を述べたと強辯して、「圖々しい」といふのである。文法上の定說として一般的法則として「な」と「なむ」は同義なりといふのが同義說だ。僕は特殊の場合、即ち僕の歌の場合をのみいつたのだ。それ故に此の特殊的言說と普通的法則との差別をも辨ぜずして、他人に對して「圖々しい」などと云ふのは隨分圖々しい無反省の漫罵的偏癖として正常心理學的には研究するを得ぬものである」（大正六年十一月發行「詩歌」）

そして、「偏執狂」『天才のまがひもの』等の語を予のうへに冠らせようとしてゐる。しかし予は三井氏の此の巧妙な遁辭を肯んぜない。由來、「な・なむ」を論ずるに至つたのは、三井氏が、みづからの謬妄用法をば一般法則化しよう

としたからである。三井氏は祖先以來の日本國語法を否定して置いて、そして自分の歌の場合だけの文法に就いて論じたのならば、即ち三井氏の歌の特殊の場合のみに就いて解說したのならば、予は只笑つて看過ごしたであらう。然るに三井氏は、日本國語法と彼の歌の特殊謬妄語法と同居せしめようとしたのである。そして『な・なむ同義說』を強ひて作つたのである。それを予より難ぜられて、ひだりに走りみぎりに遁げ、とうとう如上の言をなしたのである。三井氏は以前に次の言を公表した。

「僕は助動詞「ぬ」と「む」とが連つて成立つた「なむ」と、係の助詞「なむ」「なも」、感歎詞「なむ」から類推される「なむ」、或は又希求の助詞「な」又は意志を現はす助動詞「む」と同じ意味の助詞としての「なむ」とを分つて論じてゐるのですから、ここへ御注意願ひ上げます」（大正六年十月十一日發行時事新報）

この「なむ」の種類を羅列したのは、まさしく日本語の語法としての一般則をいつてゐることは明かである。そしてその中に、希求の助詞ナと同じ意味の助詞としてのナムといふのがある。これがナ・ナム同義說でなくて何であらう。若し予のこの看方が偏して居たとせば予はみづから恥ぢようと思ふ。（十一月一日記）

○對他論小感

昨年の春ごろ、かつて書き棄てたものを顧みて、もう「對他論」は爲まいと思つたことがある。ところがふとしたはずみから「なむ」について三井氏と論じあふやうになつて、それが今迄續いた。これは對他論は爲まいと思つた予の心から觀れば不快であるに相違ない。然るに他と言合つたがために、新たに氣づいた事がある。それを少し書いておきたい。

其の一。「なむ」の文法にはすでに定說があつて事更に論じあふほどのものではなかつた。それゆゑ三井氏の「なむ」の用ゐざまに對しても單に『謬妄である』といふ最初の一言で足りたのである。しかし三井氏は予等の言に服せず、彼の特殊用法を一般法則化しようとし、予等の結論に對して、『理由を具せざる結論は漫罵である』などといつて來た。そこで勢ひ予等の結論を證據立てることになつて、そして文獻を讀むに及んで、今まで知らなかつた事を知る事が出來た。すなはち予は從來の文法書に書いてない多くの祖先の用語例を蒐めることが出來た。これは「對他論」の賜物である。おもふに、自らを欺くことなく、勝負を第三者に見せびらかすことなく、辯究して對者の非論を打ほろぼさうとするところに、人間力の發現がある。

其の二。對他論には理の究盡に連れて主觀語の入るのを常とする。これは對者の言の語氣に向ふ反應言であつて、怒り、雄たけび、突喊のこゑである。これを第三者が看て醜しとなすのを常とする。對他論の目的を第三者に見せびらかすにあるとするものは、此等の主觀語のみを拾ひ出し、これを利用して第三者に媚ぶることを敢てする。予はしばらく三井氏と言合つてみて、いかに彼は第三者のみに見えを張ることの上手であるかを知つた。彼はその筆法を數種の雜誌に繰返してゐた。予の言を打破らん唯一目的にして、かかる筆法を選ぶ必要はない筈である。

其の三。第三者はすでに對他言を、そして對他言中の主觀語を醜しとする。第三者は單に見物に過ぎないからである。その見物は、不可思議にも彼等の見て醜しとなす主觀語のみを讀んで、肝要の理路の文を讀んでゐないといふことを予は知つた。いつたい、見物たる第三者を目中に置いて眞の對他論は出來るものであらう

か。この點が予の興味を牽く。

其の四。見物たる第三者は、『論點』の大小を説く。『なむ』は一天爾遠波に過ぎない。血眼になつて論じあふ必要を見ないと、かういふ。幾ばくもなくして相互結論の是非に及ぶ。さうして、『その結果のいづれが正しきかを知らない』といふ。論じあふほどの要なき一天爾遠波だと謂つても日本國の一語である。日本國ではその用法を知つてゐなければならない。論じあふ要を見ないといふうへは、その用法を知つてゐることを豫件とする。しかるに、予の結論と三井氏の結論といづれが是なるかを知らないといふ第三者の言を、予はいたく面白いと思つても、予は對他論をもつて一般第三者のために公表することを欲しない。予は予自身のために、そして對者のために、引いて予と心を同じうし得る現世來世の友のために予の言を公表するのである。

其の五。ずるき對者は、『論點』をずらす事を知つてゐた。『なむ』の論がいつしか他の助詞助動詞の論となり、作歌の非難となり、ゲーテの詩の譯となり、顧みて他をいふに至つた。性欲に飽いたやうな面もちの第三者は、予の對者のかかる態度を讃じてゐる。第三者は多くの場合、論點を集中してそれを聘求することをしない。

其の六。論爭は醜い。甚大愛をもつてなぜ對者をおほはないであらうか。それはいい。けれども淺薄なる妥協の言はつひに愛染の心ではないと常に予はおもつてゐる。予はたとひ無數の第三者より醜しとせらるるとも、對者の非論を亡ぼすことを以て、愛染のみちでないとは信ぜない。ゆゑに第三者の瞳に予の言をうつすことを目的とせむよりは相互言論を淨玻璃のまへに立たしめむとするのである。（大正七年四月七日）

源實朝雜記

○

實朝は賴朝と政子の子であつて、賴朝は建久九年馬から落ちて疾をえて、翌正治元年五十三歳で死んだ。實朝は建久三年八月九日に生れた。「東鑑」に天晴風靜、早旦以後御臺所御産氣……巳剋男子御産也とあるのだから賴朝四十五歳、政子三十五歳の時にお腹に宿つたのである。賴朝はあのやうな男であり政子はあのやうな女である。賴朝を知る參考書に、吾妻鏡以下の予のまだ讀まない古文書、專門史家の書いた日本歴史、日本時代史のいろいろのもののほかに、山路愛山や幸田露伴の賴朝傳など、政子論では、三浦博士が婦人世界で論じたもの、其他、中央公論で山路愛山が論じたもの、「人生と表現」で[illegible]鶴城が論じたものなど參考になる。くはしい事は、その道の先達に聽かなければ分らない。而して賴朝の事業も七分迄は思ふ通りに行つたのである。（[illegible]）[illegible]のあつたのは陰暦十月の末か十一月の初と考へられるから、霜が白く身のしまる頃である。生れたのは八月であるから白露天より落ちて蟲しげきころである。これは事實で理窟ではない。

○

鎌倉幕府は關東武士の手になつたものだから文學などは何にも分らない樣に一寸思ふが實際はなかなかさうでは無かつたらしい。名僧や學者を招いで講義もしてもらつたらうし、書物なども京都からとり寄せたらしい。熱心な歌よみが多かつた時代だけに武士にも歌など手をつけるものがぽつぽつあつた。新古今集に賴朝の作が載つてゐる。賴朝は詩人たるべき素質が確にあつたと思ふ。實朝は歌が非常に好きで樂んで歌を勉強した事は境遇よりも先天の素質が重きをなして居ると察したい。

○

藤原定家は、歌に關しては骨の折れる仕事をして居る。歌人としてもそれ相應の歌人であつて、わが同人が考へてゐる程つまらぬ歌人では無い。歌人としての實朝を見るには、是非定家を見のがしてはならぬ。歌人としての實朝を育て上げた功は少なくも沒する譯にはいかぬ。實朝は建仁三年征夷大將軍に補せられ、同年元服して名を實朝と改めた。（千幡）（東鑑に幕下大將軍二男若君爲關東長者七日被下從五位下位記並征夷大將軍宣旨とある）その時定家は四十二歳であつた。元久二年實朝十四歳で初めて歌を詠む。（東鑑に將軍家令詠十二首和歌給とある）その年新古今和歌集が出來た。そして一部實朝の處へ（藤兵衛尉朝親が持つて來た。東鑑にその時の事を記して、「而將軍家令好和語給之上故右大將軍御詠被撰入之由就聞食頻雖有御覽之志云々」とあるなどは面白い。このあたりから、よく歌を詠んで居る。東鑑に有和歌御會とか將軍家御詠吟及兩反などあるにて分る。

○

承元三年實朝十八歳の時の七月五日の條（東鑑）に、內藤右馬允知親爲御使以此次去建永元年御初學後御詠撰三十首爲合點

被遣定家朝臣也」とある。これが定家に歌を見て貰つた初めである。知親は豫により定家の門人であつたのである。同年八月十三日の條に「知親自京都歸參所被遣于京極中將定家朝臣之御歌加合點返進又獻詠歌口傳一卷是六義風體事内々依被尋仰也」とある。この詠歌口傳といふのは、近代秀歌一名定家卿和歌式又一名承元和歌式であつて、實朝はこれによつて勉強したのである。「詞は古きを慕ひ心は新らしきを求め及ばぬまでも高き姿を願ひて寛平以往の歌にならはばおのづからよろしきこともなどか侍らざらむ」といつてゐる處を、實朝は後になつて善用したのである。善用といふ意味は、定家の「古きを慕ひ」とは古今集ぐらゐの程度のものであつたらしい。定家が貫之を評して「心たくみに丈及びがたく詞強く姿おもしろき」などと云つてゐるので分る。實朝の『古きを慕ふ』のは、そんなところは一躍に飛び越して、萬葉の眞の力に突入したのである。善用とはそれをいふのである。定家の詠歌大概に記せる『和歌無師匠只以舊歌爲師染心於古風習詞於先達者誰人不詠之哉』の心をよく應用したのである。そこが實朝の鑑賞家としても作者としても偉大な點である。けれども萬葉を見ない前は定家流の綺麗な歌ばかり詠んで居た。模倣の時代である。それでも巧みな技巧の棄てがたい歌を含んでゐる。

○

建保元年實朝二十二歳の時に定家が萬葉集一部を贈つた。東鑑に「京極從三位獻相傳私本萬葉集一部於將軍家」とあるのはそれだ。その時定家は五十二歳である。實朝は承久元年二十八歳で死んだ。その時定家は五十八歳である。定家は八十歳まで生きた。實朝が萬葉を讀み初めてから死ぬまで滿五年ぐらゐであらう。さうしてあの樣な秀歌をのこして居る。歌が好きで非常な勉強家であつた事が分る。實朝は自分勝手に萬葉調の歌を詠む樣になつたのであるが、それも以上述べた樣に定家の功の存する事を見のがしてはならぬ。實朝が萬葉集を讀み萬葉歌人に私淑するに至つたのは先天の偉い處であるが、自分の師で先輩である定家が實朝を褒めたのは實朝が秀歌を詠むに至つた一つの好刺戟と云はねばならぬ。定家は勉強家で精力強く負けぎらひで歌の相手などは自分の歌風に合はないとぴしぴしとやつつけたものと見える。功名心強く嫉妬心の強い男であつたらしい。(佐佐木博士著藤原定家參照) 若し實朝が普通の門人でもあつて萬葉調の歌など詠んだら矢張り攻擊したに相違ない。然るに定家は實朝を褒めて「鎌倉右府はたけたる歌人と覺え侍る。古人の詠作に竝べたりともすべて劣るべからず。實にたぐひ無事とぞ思ひ侍る」などといつてゐる處は彼の歌風から考へてどうしても幾分阿諛の分子がある。それは當時の人もさう思つて居たらしい。それは越部禪尼(俊成の女)が新敕撰を評したる消息に『新敕撰はかくれごと候はず候。中納言入道殿(定家)ならぬ人のして候はゞとりて見たくだにさふらはざりしものにて候。さばかりめでたく候御所たち(後鳥羽・土御門・順德)の一人もいらせおはしまさず』云々とあるにても分る。併し後代の吾等の眼から見れば偶然に見える定家の褒め詞も作り爲さ褒めたことばであつたのである。これは予のほんの私見である事をことわつて置く。

○

彼が萬葉調の歌を詠むに至つたのは、先天的に優れた素質があつたために萬葉の歌の心を理解し得たからである。京都は鎌倉より遠く、京都の文物が鎌倉にどしどし入らない爲めや、式

土の故郷に歸した當時の民族心理の關係だなどと說くのは幼稚な說である。鎌倉が僻遠の地だといつても交通は可なり開けて居た。特に實朝の妻は京都から來て居る。而して當時の代表歌集たる古今集は萬葉集よりも早く讀んで居る。特に父の作物も較つて居る。普通の人ならばどう考へても萬葉よりも親しいに相違ない。特にそれが彼の最初の師である定家も撰んだのであつて見れば尚更のことである。

○

實朝の歌にはその句（部分的句）に古歌と類似のものが多い。その事は「私鈔」のうちに述べて置いたが、この事あるがゆゑに實朝は獨創のある歌人でないとは少し違ふやうである。當時にあつては類句のある歌などは當り前である。試みに國歌大觀を見るならば萬葉以來その類句の多いのに驚くであらう。明治大正現代の歌壇に於ても類句だらけだ。けれども類句のある事は作者の側からいへば餘り自慢にはならぬが、金槐集の歌は詠んだ歌の殆ど盡くを載せたものらしいのであるから、批評する場合には取捨するだけの同情がなければならぬ、さうではあるまいか。

○

實朝は古語を踏襲する事は平氣でやつて居た。くよくよしない。そこが明治の正岡子規に似て居る。子規は一方古語をその儘用ゐるのを泥棒と迄いつてゐながら、「萬葉を模する　萬葉調の歌を詠む」と平氣で大きな聲でいつて居た。當時の與謝野鐵幹か小生の詩とか明治の歌だとか萬葉以來唯一の詩風だとかいつてゐたのとはよい對照であつた。實朝の歌にはその平氣さが表はれて居る。大まかで、定家あたりと比較すれば無器用であつて、餘り骨を折つてゐない。言葉も當時の俗語やら萬葉時代の言葉やら佛語漢語など思ふ通りに詠んで居る。

附記　實朝の歌の句のなかには萬葉集の歌からのみでなく、古今、拾遺、新古今あたりの歌から句を取つて歌つてゐるのがある。平氣でさういふ事をしたのはどういふ訣であるかを少し考へてみるのに、社會的に第一流の歌人で、また自らもかく任じてゐる者ならば、當時にあつても、さういふ事は努めて嚴しく、且つ神經過敏であつたに相違ない。[illegible]「主ある詞」などの語を作つて戒めてゐるのでも分る。然るに實朝は自らまだ專門歌人たる事を以て任じてゐなかつた爲めにそこまではいへてゐなかつたのかも知れない。そこ迄の野心がなかつたとも取れるし、藝術に對する良心が未だ徹底してゐなかつたとも取れる。謂ゆる第一流の歌人などをのぞけば大凡そんな事には平氣な世の中であつたかも知れない。それゆゑに此點で實朝に獨創がないとは言はれない。獨創云々の問題は別なところにある。

○

金槐集の特徵のうち、一つ書いて置くことがある。それは「題數首の歌」、題詠でない實際に觸れて詠んだ、吾等のいはゆる連作的の歌のある事である。

ある人の都の方へのぼり侍りしに、つけてよみて遣はす

夜を寒み獨り寢覺の床さえて我衣手に
露ぞおきける

かかる折もありけるものを旅枕ひさしも
る風を何いとひけむ

都べに夢にそれかさ使あらば[illegible]
吹きもつたへよ

都よりふきこむ風の君ならば忘るなとだ
に云はましものを

うつたへに思ふばかりはいはねども使に
つけてたづぬばかりぞ
岩ねふみいくへの峰を越えぬとも思ひも
出でむこころへだつな

これ等の歌は、調子に新古今ばりの所があつて細やかに心持を傳へてゐて、なほ底力のあることも注意すべき點である。ここの『ある人』は、夫人か或は女房の一人であらう。

相州の土屋といふ所に年九十にあまれるくち法師あり。おのづから來り昔語などせしついでに身の立居にたへずなむ成ぬる事なくなく申して出ぬ時に老といふ事を人々におほせてつかうまつらせし序によみ侍りし

我いくそ見し世の事を思ひいでつ明る程
なき夜のねざめに
思ひ出でて夜はすがらにねをぞなく有し
昔のよのふるごと
中々に老は呆れても忘れなでなどか昔を
いと忍ぶらむ
道遠し腰は二重にかがまれり杖にすがり
てぞここまでもくる
さりともと思ふ物から日をへてはしだい
しだいに弱る悲しさ

この歌で注意すべきは詞書のある事、心の連續を五首にして詠んでゐる事である。而して俗語が多い事である。一題數首の歌は萬葉集中の數首やら西行と寂然の問答やらちよいちよい當時の歌集に見當る。それを歌學者が一人も注意しなかつたのは腑甲斐ないことであつた。

○

藤原定家が實朝を稱揚したのに不純の分子が含んでゐるといつたが、それは聊か過言であるらしい。定家は新勅撰集に實朝の歌二十五首を採錄して居る。新勅撰集は文暦元年に敕を奉じて撰んだもので、定家はその時七十三歳であつた。實朝歿後十五年を經過して居る。翌年(七十四歳)小倉百人一首を書いた。その中に實朝の『世の中は常にもがもな』の歌を採つてゐる。新勅撰集の撰び方に就ては越部禪尼から攻撃を受けたけれども定家は左程の邪念があつて撰んだのではあるまい。新勅撰を撰ぶのに滿五年を費したと假定するも實朝死後十年を經て居る。縱し定家の撰んだ實朝の歌が吾等の標準と甚しく相異する事があつても、兎に角定家は實朝の歌を邪念なき心から褒めて居たと見るのが正當ではあるまいか。それならば歌人としての實朝の發達に定家の言が或程度の奬勵になつた事は否むべからざる事實であらうと思ふ。實朝は勝手に遠慮なくおのれの道を歩まうとしたのは云ふ迄も無いが、それを阻害もしないで奬勵したことは後代の吾等の感謝するところである。

○

定家の言は措き、言を極めて實朝を稱揚したのは賀茂眞淵である。([illegible]學、初學、[illegible]、金槐集附言、等)それでも初期の歌は褒めないで「くだれる世の垢づけるあり」(金槐集附言)とか「その始なるはいふに足らず」(同)などと言つてゐる。後代の予等は眞淵の言を聞くと何となく嬉しい樣な氣がする。眞淵は餘り萬葉が好きな爲めに時に人から冷かされてゐる。冷かさないものは難詰してゐる。それがやがて彼の徹底した萬葉尊重者であることを證してゐる。彼はその極むしろ癡の境にまで行つてゐる。彼は實朝を褒め、同じく實朝を褒めた定家の言に賛同したのはよいが、「定家卿の記されつるものに、鎌倉の右府はたけたる歌よみとこそおぼゆれ。この歌を見る時は、歌は物うくなりぬとぞあなる。後の世々に狭き箱の中に有りて女歌よめる人は、天地の大範の内にある男業を見てはうみぬべきことなり。されば此の卿こそさは記されたれ。然はあれど

よはひ七十路に餘れれば、思へど得こそ自ら交むるに目つながりけめ」などと云つてゐる。殊ら定家が實朝をほめても、自ら大海の磯もことろになどと、萬葉ぶりの歌を詠まうとはしなかつたに相違ない。褒めこそしたが、かの高慢な定家の眼には實朝などは、まだほんの初學者として映じてゐたであらう。賀茂眞淵はおもしろいことを言ふ人である。

明治になつてから、正岡子規は實朝の偉大なることを力を籠めて說いた（子規遺稿）さうして香川景樹が、鎌倉の右府の歌は志氣ある人決して見るべきものにあらず……右府の如く盡く古調を踏襲ひ古言を剽竊たらむには云々（歌學提要）の言に對して、自己の歌が盡く古今以下を踏襲剽竊した事を數へあげて、却て創意おほき實朝の歌を傷けんとは憎さも憎き振舞かな。泥棒が人に對して泥棒よばはりするさへ片腹痛きに、況して高潔清淨なる實朝の如きを泥棒に落さんとす。盜人たけだけしとは景樹の事なり」とまで云つて居る。和歌革新の鋭鋒が機を得て景樹に向つたのである。景樹の言はすでに不純な動機から出發してゐた。それに彼は當然たるべき歌論の總論をことごとしく云つてゐただけで、一首一首の本質に至つては、觀る目がなかつたのである。實朝の晩年の作の分らなかつたのは彼としては無理もないことである。

○

「彼はまた歌人として當代第一流なり」（佐佐木氏）といふ論斷を讀むと予は嬉しくなつてくる。當代に於ける熱心なる短歌作者たる定家をはじめ、後鳥羽、土御門、順德の三上皇、良經、通具、有家、家隆、具親、雅經、隆信、秀能、慈圓、式子內親王、丹後、宮內卿、俊成女、越前らの歌に對する研究が未だ積んでゐない予にとつては、佐佐木博士の言を信ずるより途は無い。

○

『彼には秀歌をと狙つて詠んだやうな跡が無い。この一首に他の云ひ得ぬやうな深い趣を云はう、巧みな法を見せようとするやうな當て氣は全く見えない。……彼には所謂匠氣なるものが無かつたと云へる』（窪田空穗氏）

この評言を讀んで、いかにも至當だと思ふ。この境は藝術家にとつての究竟點であつて、まさしく實朝の天品を示してゐる。ただ態度の純眞を以て、内心の無煩悶と混同してはならない。（後說）實朝の晩年の作は表はし方に於てなかなか骨折つてゐる。斧鑿の痕はさう目だたないが、いい加減で濟ますのとはちがふ。無匠氣といい加減で濟ます事とは兩立しない。窪田氏の言にはこの二つを混合してゐる嫌ひが無いでもない。

○

「彼は獨創の多い歌人とは云ひ難い。我が多くの歌人のやうに、歷史といふ一つの型のなかに閉ぢられそれによつて歌つて居る。歌の爲めの歌、彼れ自らの爲めの歌では無い。さう思はれるものが全體の大部分を占めて居る。彼は生れながら歌人の素質を持つてゐたが、大いなる歌人としては餘りにも弱く脆かつた。我執の念が少なく、諦めが早く附き過ぎた。特色ある歌人とは云ひ得るが、大きな所のある歌人、大きくなるべき歌人とは思はれぬ所がある」（窪田空穗氏）

この評言を讀むと予の意見と違ふ事が分る。予の意見は「私鈔」で盡きてゐるが、ここでも少しく書く。なる程實朝の歌には、他人の作から影響を受けたのが多い。然し金槐集の特徴を論ずるには、手習時代の歌を除去する用意が必要である。さうすると晩年の歌が殘る。晩年と云つても二十五歲から二十七歲一ぱいに過ぎ

ない。晩年彼れは一躍して萬葉の歌に肉迫してゐる。さうして存分に萬葉の影響を受けてゐる。そこがもう獨創の點を指示してゐる。いつの世でも流俗は偉大なる藝術の前には盲目である。觸れたやうな事を言つてはゐるが矢張り目が開いてゐないのである。ただ眞の意味の後繼者、模倣者の群が橋梁となつてだんだん目が開いてくる。それはずつと後の事である。かかる橋梁を待たずに直ちに萬葉に迫つた實朝を獨創者と云はずして何と云はう。當時にあつての實朝の實行は復古でなくつて創造の觀がある。偉大なる所以である。

「歷史といふ一つの型」といふ。寧ろ輕蔑の心である。けれど何事と雖も由緖とほき發育史を有つてゐないものは無い。短歌の體もさうである。この意味で實朝の歌は歷史を有つてゐる。ただ當時の歌壇を眼下に睥睨せんとしてゐるのは、流行を追ふ凡俗とちがふ點である。實朝の歌は「彼れ自らの爲めの歌ではない」といふ。ところが彼の晩年の出來のいい歌は、句々盡く彼れ自らの爲めの歌である。（「私鈔」を見よ）窪田氏の說は淺い。

「實朝は特色ある歌人とは云ひ得るが、大きな所のある歌人、大きくなるべき歌人とは思はれぬ所がある」といふ。これも違ふ。實朝は歌人として未だほんの初途で死んで仕舞つたと前言したが、それでも晩年には飽くまで發育し得べき證據を示して居る。その初途の曙光が實朝の生の連續に想到する我等の性命に働掛けて來る。我等が大正の時代になほ萬葉ぶりの歌を作り唱導する、決して偶然ではないのである。予の見によれば實朝は、特色のある歌人と謂はむよりも寧ろ大なる歌人、大なる歌人となるべき初途にあつたものである。大とは偉大を意味してゐる。

○

『彼の歌は、他人に對する感傷、自然に對する寫生、この二つに限られてゐて、殆ど自らを歌つた歌といふものが無い。……彼の歌の殆ど全部が外部から彼を動かしたものに對して彼の感懷を衝動的に歌つたものばかりであつて、彼の內部からおのづから湧いて迸るやうに歌つた作の無いといふのは、たまたま彼が自らに對する要求自らに對して持たずには居られない問題といふべきものを、さまで際やかには持つて居なかつたのでは無いかと思はれる』彼には問題がなく疑惑なく隨つて多くの煩悶も無かつた。それで何時も單純な安らかな明るい心持を持つて居られた。この心持がやがて歌人としての彼に、その眼の前に自らに開けて來る物に對し柔い神經を以て傷み、美しさを受け納れて其れを再現させるといふだけ——單純な優しい落ちついて品のいい歌を作らせて、それ以上には進まなかつたのであらうと思はれる（窪田氏）

かういふ評語に逢着する。この論者は既成の歌の材料（あるひは對象）の外邊のみを見て、既成の歌の本質を洞察し得ない形式論者である。歌の對象の山水にあるか、自己の行動にあるかに因つて、價値の高下を附するの間違であるのは、「足引の山がはの瀨の鳴るなべにゆつきが嶽に雲たちわたる」（人麿）の歌の對象の山水にあるのゆゑを以て、「憶良らは今はまからむ子泣くらむその子の母も我れを待たむぞ」（憶良）の歌の對象の自己の動作にあるものより劣るといふ論の非なるを見ても分るのである。また、實朝の『箱根路を』『大海の磯もとどろに』『世の中は常にもがもな』などの歌を自然に對する寫生であるといひ、それゆゑに自己に對する問題、煩悶が無く、歌が外部性で、內部迸發の歌でないなどといひ、それが寧ろ是等の歌の價値をして

小なりと[illegible]する結論に達してゐる。予の意見は全然それとちがふ。自然を歌ふのは性命を自然に投射するのである。Naturbeseelung である。自然を寫生[illegible]窪田氏等の用ゐる意味とちがふするのは、即ち自己の生を寫すのである。「大海の磯もとどろに」の歌にいかに悲痛たる意力の響があるかを味ひ得ずして、實朝の歌を云々するのは不用意である。また、此の究竟點に於て内外等の差別を附するのは一切無用である。

實朝の晩年は、厭[illegible]觀相と、諦念信順と、能働意力とのこの巴の擾亂の生である。それが晩年の折に觸れての作に表はれてゐる。表はす技巧の平氣さを見て直ちに無煩悶、無問題、無疑惑などと斷ずるのは淺い。又、「ものいはぬよものけだもの[illegible]」の歌等を、無煩悶な單純な優しい歌といひ、「この一枝を哀といはむ」『あらし立つみむ、おのづから涼しくもあるか」などを單に品のいい歌に過ぎないといふならば、これらも予の意見とちがふところである。

一體窪田氏の「自らを歌ふ」といふのは自らの行爲、趣向を歌ずる事であるかも知れん。或は主觀を露はに交ぜよといふ事であるかも知れん。併し必ずしも然からずして所謂正述抒情詩であり得る事は前言した。さうでなく、歌は自己の表現である」などいふ事であるかも知れん。しかし天然を詠じてもなほ鮮かに自己が表はれ得るのである。實朝の「大海の」の歌を見れば分る。大體、作歌の際に、「自己を表現する」などいふ題目を、意識にはつきりと上せて作歌するのは、もう不純の境である。實朝は決してそんな事はしなかつたやうである。そこが或人の目には無問題に映ずる點でもある。

附記 ここに引いた憶良の歌の第四句第五句『その子の母も我を待たむぞ』は、「そも其の母も我を待つらむぞ」あるひは、『その彼の母もわを待つらむぞ』などと讀んでゐる。

○

賀茂眞淵全集を讀むと、「龍のきみへ問答（龍のきみへは龍のきみえ即ち公美のことであることを佐佐木博士が考證して居る）のなかに、藤原定家の撰歌ぶりを評した一文があるから書いて置かうと思ふ。『新敕撰に後鳥羽帝の歌をいれられざるは定家鎌倉におもねりての事とおもはる。いかゞといふ公美の問に對して、眞淵は、『おもねりしなり、越部禪尼が書し物にさしもよくよみ給ひし土御門院の大御歌などをも入られずして爲家の歌をいとおほく入しは定家の撰ならずば取ても見るべからぬ物と様に書しなり。此撰はそのへつらひのみかは、歌にも甚あやまり多きものなり。すがたも屈しきはまりたるは、王威かま倉へうつりて京家困窮の時ゆゑに、おのづから京人の心窮し邪意のみに成て、いよいよ古き此御國の學をもせねば、只さる時の心にてよめらむ歌、さる心にて撰みなむ事いかでよき様の有べき』と答へてゐる。

實朝といふ名は天子から給はつた名ださうである。愚管抄に、『千萬御前、元服せさせて、實朝といふ名も京より給はりて、建仁三年十二月八日やがて將軍宣下申くだして云々」とある事を、宣長の玉勝間によつて知つた。（東鑑には建仁三年九月七日、將軍宣下。十月八日元服とある）

正岡子規が實朝の生の連續を考へて、『あの人をして今十年も活かして置いたらどんなに名歌を澤山殘したかも知れ不申候』と云つて居る。かういふ言は何の役にも立たないものか、或は極めて有意義のものかを考へたいと思ふ。

續源實朝雜記

○

敕撰集に選ばれた實朝の歌は、續後撰集十三首、新敕撰集二十五首、續拾遺集五首、續古今集七首、新後撰集六首、續千載集二首、續後拾遺集六首、風雅集七首、新續古今集四首、新後拾遺集二首、新千載集三首、新拾遺集二首、玉葉集十一首である。當時の歌人が、縱ひ一首でも敕撰集に選ばれるのを非常の光榮としたること、薩摩守忠度が兵馬匆忙の際に千載集の選者藤原俊成に百首詠卷を托して死後の榮を希求した如き、鴨長明が一首千載集に選ばれて生前の榮譽としたる如きを以て知ることが出來る。然るに實朝の歌は、新敕撰集の二十五首を首として合計九十一首が選ばれてゐる。

○

實朝は何故本歌を有つてゐる歌を多く詠んだか、それを平氣でゐたかの點に就いては、「私鈔」中で少しく說を云つたが、なほ少しく書いておく。本歌取は當時歌壇の一つの習慣である。定家は實朝に訓へて、「ふるきをこひねがふによりて、むかしの歌の言葉を、あらためよみかへるを、すなはち本歌とりと申す也」と云つてゐる。さうして、清輔の「君來ずば獨や寢なむ笹の葉のみ山もそよに騷ぐ霜夜を」「難波人すくもたく火の下こがれ上はつれなき我身なりけり」や、基俊の「あたら夜を伊勢の濱荻折敷ていも戀しらに見つる月かな」の歌を書いて、『かやうの歌を本歌にとりて、新しき歌に詠めるが誠によろしく聞ゆる姿に侍る也。是より多く取れば我が詠みたる歌とは見えず、もとのままに見ゆるなり』(近代秀歌)などと云つてゐる。つまり、他人の作物を借りてもよいが、目立たないやうにするがよいといふのである。なほ、每月抄にも、「本歌とり侍やうは』といつて、『本歌の詞をあまりおほくとる事は有まじきにて候。其中に詮と覺ゆる詞二ばかりとりて、その歌の上下の句にわかちおくべきにや』と說明し、詠歌大概にても、「於二古人歌一多以二共同詞一詠レ之已爲二流例一。但取二古歌一詠二新歌一事、五句中及二三句一者頗過分無二珍氣一。二句之上三字取レ之。猶案レ之以二同事一詠二古歌一頗無念歟』などいつてゐる。そのほかの歌學書にも、「本歌取の事」が必ず書いてある。順德院の八雲御抄に、「古歌をとる事」と題してあるのも卽ちこれである。由來、本歌取はすでに萬葉にも古今にもある事であり、大正の現代でもなかなか多いのである。ただ、實朝の時代には、それが著しい現象となり、大つぴらになつたといふのであつて、實朝の歌に本歌の多いのは此時代の歌壇の一つのおもかげを示すものである。

○

實朝がなぜ萬葉ぶりの歌を作るに到つたかに就いては、彼に先天的に優れた素質があつて、萬葉の歌の心を理會し得た爲めであると說いた。そのほか武家政治の時代を背景としてゐたこと、京都歌壇の刺戟競爭の渦中にゐないが爲めに、おのづから自己の好む道に向つて進み得たこと、征夷大將軍でありながら、赤木格平氏のいはゆる、「寂しき人」であつたことなど、考に入つてくる可能要約が幾つかあるが、それらは既に人も說いてゐる。

茲で一つ書いて置きたいのは、實朝が珍らしい氣稟をもつてゐても、目ざめ得るには一つの機緣を要したといふ事である。萬葉集は當時の歌人間にも、本邦古典の重寶として映じてゐた。また、天曆の五歌仙以來萬葉の研究は漸々その歩を進めてゐたのみならず、作歌に際して、萬葉中の歌詞を取つたり、調にならつたりして、それを或程度まで一種のほこりとしてゐたに相違ない。そして此は鎌倉時代の文學に古事典例を重んずるペダンチッシュの分子があつて、それが特徴の一つをなしてゐたのと同じであり、また歌合などの時の辯難には古事來歷を知つてゐるといふ事が、一つの有力な武器であつたのにも因してゐる。すでに、曾丹集のなかには、萬葉集の詞を取つて作つた歌が可なりあるのである。後鳥羽院御口傳に、『和歌を學問して、種々の難儀どもをさたして、才學をわかつことは人によるべし。よのつねには、ただ萬葉集ばかりよみたるやうを心得ておくべし、さほどの事は用なしとてさたせねば、人の萬葉集の言葉をとりて詠じたる歌を得讀まぬなり。それは無下の事にて有時に文字のうへばかりをよみすゑむため、一反人にも問きくべきなり』とあるなど、また、順德院御撰の八雲御抄のところどころに、『萬葉には』『萬葉にも』などあり、『凡歌の子細を深く知らむには萬葉集に過ぎたるものあるべからず』などはこれを證してゐる。また一方に於て、『唯よくよく古歌を見學して、さる物からしりがほに古き受けられぬ詞を好みよむべからず』（八雲）や、『萬葉集はげに代もあがり人の心もさえて今の世に學ぶとも更に及ぶべからず。初心の時おのづから古體を好む事あるべからず』（毎月抄）などと制してゐるところを見ると、低級な歌人の間にも、萬葉の詞などを採つて變な歌を作るものがあつたことを證するものである。もつて當時の歌人の萬葉集に對した態度が分るのである。かういふ事が、書きものとして、或は人の話として、實朝の耳に入つたのかも知れない。そして、さういふ歌道の重寶があるならば、是非欲しいと思つたのである。そして雅經を介して定家に尋ねたのである。定家が相傳私本の萬葉集一部を實朝に贈つた。實朝二十二歲の十一月である。予の機緣と謂つたのは當時の歌人の『萬葉集尊重』を實朝が知つたのを指すのである。

次ぎに、此は既に論じたが、定家が、實朝に向つて古歌を學べと教へたことである。『言葉は古きをしたひ』と云ひ、『しかれども大納言經信卿、俊頼朝臣、左京大夫顯輔卿、清輔朝臣、近くは亡父卿、即此みちを習侍ける基俊と申ける人、此ともがら、末の世のいやしき姿を離れて、つねに古きをこひねがへり。此人々の思ひ入て、すがた勝れたる歌は、高き世にも及びてや侍らむ』（近代秀歌）と謂へて居る。實朝には素質があつた。又境遇が特殊のものであつた。然も實朝が萬葉ぶりの歌を作るに至つたに就ては、縱ひ、定家の『古きをしたひ』は三代集を出でなかつたとしても、定家の功の甚だ大きいのを知る。また、新古今集を以て代表せられた歌境にも、幾つかの潛流があつて、それがやうやく尊い大業をもつてゐた實朝に至つて、白日下をながるる大河の相を示しはじめたとも觀るべきである。

○

定家が實朝の歌を褒めて、『鎌倉の右府はたけたる歌人とおぼえはべる』といつたのは、彼の歌風から考察して少し阿諛の分子があると予は說いた。次いでその稱讚の詞は阿諛ではなく、『兎に角定家は實朝の歌を邪念なき心から褒めて居たと見るのが正當ではあるまいか』と訂正した。この說に尚ほ少許の内容を與へたいと思

ふ。定家は幽玄とか有心とか云つて、『さても此十體の中にいづれも（いづれと申共）、有心體に過て歌の本意と存ぜる姿は侍らず』（毎月抄）のごとく、彼の本領はここにあつて、あのやうな細々しい綺麗な歌を作つたが、一代の宗匠として人に訓へた態度は、なかなか博大な心を示さうとしてゐる。自分の歌風に合はない者はびしびし難駁したといふよりも寧ろ宗匠としての彼は、歌の鑑賞者は決して偏狹であつてはならない、單に自己の好むところに執してはならないと說いてゐる。そこで彼は純萬葉調の實朝の歌をも褒め得たのである。縱しんば表面的であつたにせよ彼の博大心を予は感謝するのである。

定家はかう云つてゐる。『先にしるし申候にし十體をば、人の趣をみてさづくべきにて候。器量も器量ならぬも、うけたる其體侍るべし。或は幽玄體をうけたらん人に拉鬼體をよめとをしへ、又長高樣を得たる輩に濃體をよめとをしへん事、何かよかるべき。只佛の說たまへるあまたの御法も、衆生の機にあたへたまへるとかや。それにすこしもたがふべからず。我このむやうにうけたる才がたなればとて、此體をよめと得ざらん人に敎へ候はん事、かへすがへす道の魔障にて候べし。其人のよめらん歌をよくよく見したためて後に風體をさづくべきにて候。いづれの體をよまんにも、なほくただしき事は、わたりて心にかくべきにこそ。さればとて又其一體に入ふして餘體を棄てよとには候はず。得たる體を地盤として正位に詠みすゑて、さて餘の體をよまんはくるしう候まじ。ただ正路を忘れてあらぬ方に趣くをつつしむべき事とぞ覺侍る。いまの世にもかたをならべて互に達者の思ひをなしたる輩も、多分このおもむきを辨へかねて、ただわがよむやうを學べとのみ敎ふること、無下の道しらぬにて侍るべし。若われより越えて物をも高く案じすぐれたる姿を天骨とよまん人のあらんに、かやうに抗撕（提撕）せでは何かよろしく侍るべき。俊頼朝臣・淸輔朝臣などの庭訓抄にも此よしをよく申ためりとぞ見え侍る。邪に趣くところをぞ、いかにもまもり訓ふべきにて候』（毎月抄）つまり、歌の鑑賞者、歌の敎育者は、博大の心を持し、決して偏執であつてはならぬ事を說いたのである。毎月抄は承久元年七月に書かれたものとせば、直接實朝に云つたのではないが（衣笠内府に贈つたもの）、もつて彼が實朝の歌を褒め、新敕撰集に二十五首を採つた、彼の心境を解明することが出來るとおもふ。

附記　ここに引用した毎月抄の文は、佐佐木博士が宮内省圖書寮本によつて校正せられた書物を博士から拜借して寫取つたのであるが、博士の著、日本歌學史第八三頁引用の文と少しくちがふところがある。同書を參看せられむことをのぞむ。

○

定家は、新敕撰集に實朝の作二十五首を選んだ。そして、その新敕撰集は、越部禪尼から非難されたほかに、當代の人々からも、引いて後代の人々からも、彼此といはれて、後拾遺集に「小鰺集」といふ異名が付いたやうなことがなかつたまでも、いろいろ不平流言があつたことであらう。增鏡にさへ「心よからぬ事などささめく人もはべりけるとかや」などとある。定家の選んだ實朝の歌を一覽するのは興味ふかい。

（1）彥星のゆきあひをまつ久方の天の
　　河原にあき風ぞ吹く

（2）み冬つき春し來ぬれば青柳のかつ
　　らぎ山に霞たなびく

（3）春きては花とかみえむおのづから
　　朽木のそまにふれる白雪

(4) このねぬる朝けの風にかをるなり軒端の梅の春のはつ花

(5) 櫻花ちらば惜しけむ玉ぼこの道ゆきぶりに折てかざさむ

(6) 玉もかる井手のしがらみ春かけて咲くや川瀬の山吹のはな

(7) 夕されば衣手涼し高まとのをの への宮の秋のはつ風

(8) 故郷のもとあらの小萩いたづらに見る人なしみ咲きか散るらむ

(9) 路のべの小野の夕霧たちかへり見てこそゆかめ秋萩のはな

(10) 秋田の原の八重の雲路にとぶ雁の翅のなみに秋風ぞふく

(11) 雲のゐる梢はるかに霧こめてたかしの山に鹿ぞ鳴くなる

(12) 思ひ出でて昔を忍ぶ袖の上にありしにもあらぬ月ぞやどれる

(13) 淺茅原ぬしなき宿の庭の面にあはれいくよの月かすみけむ

(14) ぬれてをる袖の月影ふけにけりまがきの菊の花の上のつゆ

(15) 雁なきて寒きあさけの露霜に矢野の神山いろづきにけり

(16) 風寒み夜の深けゆけばいもが島かたみの浦に千鳥なくなり

(17) 山たかみあけはなれゆく横雲のたえまに見ゆる嶺のしら雪

(18) 武士のやそうぢ川を行くみづのながれて早き年の暮かな

(19) しらま弓いそべの山の松の色のときはに物をおもふころかな

(20) わが戀はあはでふる野の小篠原いくよまでとか霜のおくらむ

(21) さむしろに露のはかなくおきていなば曉ごとに消えやわたらむ

(22) 世の中は常にもがもな渚こぐ海士の小舟の綱手かなしも

(23) 山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心我あらめやも

(24) 思ひ出でてよるはすがらに音をぞなくありし昔の世々のふるごと

(25) 世にふればうきことのはのかずごとにたえず涙の露ぞおきける

これらの歌を見ると、大體に於て、新古今調のもつと、萬葉調のもつと、二とほりになる。萬葉調といつても矢張り當時歌壇の色調を交へてゐるが、歌は大樣で豐かであつて、調の高い、當時に於ては所謂長高樣の一種と看做すべきものであらう。この萬葉調のものは實朝にとつて比較的晩年の作であるのは無論であつて、それを定家が選んでゐるのであるから、愚秘抄中の定家の實朝に對した評言を、後人假託の筆として除去しても、なほ定家が實朝の歌をさう輕蔑してゐなかつたことがわかる。新敕撰集に三上皇の御製のないのは無論不當である。しかし其が阿諛して實朝の歌を選んだ證とはならぬのである。「定家、はま松のとしつもり、かは竹のよゝにつかうまつりて、なゝそぢのよはひにすぎ、ふたしなのくらゐをきはめて」云々(新敕撰序)といひて、貞永元年十月にこの序と目錄とを奏上し、文暦元年五月、七十三歲のとき、新敕撰集(草本)を奏覽し、數月經て、八月七日、敕撰の草案を南庭で燒いたあたり(明月記に云「敕撰愚草二十卷、僅置南庭燒之、已爲灰燼、奉敕未調卷軸以前、遭如此事、更無前蹤、無冥助、無機緣之條、已以露顯、往可欣、非誇罵辱、置而無益者也」)の感情を想像すると、彼の心に邪念などさうあらうとは思へない。予が改めて、實朝の歌を選んだにつき邪念云々のことを否定したのはこれがためである。しかしいよいよとなれば矢張り定家は

自ら作つた歌境に落著くのである。眞淵の『よはひ七十路に餘れれば、思へど得こそ自ら改むるに日のなかりけめ』（金槐集附言。これは貞享本の附言より引用したのであつて、賀茂翁家集收のものと少しく違ふ事を注意す）どころではなく、定家は實朝を目して自分の競爭者とはしなかつたのである。定家の實朝の歌に對した考は如是であるが、大正の現代にて萬葉集の歌を尊ぶと公言しながら、萬葉に學ぶのは其の精神であつて外形ではない、などといつてゐる不徹底なともがらよりも、定家の考が數段進步してゐることを覺悟せねばならぬ。

附記　歷代和歌敕撰考のなかに、『契沖難敕撰云。……右の消息（越部禪尼消息を指す）の中に御所たちとあるは、後鳥羽院・土御門院・順德院、この三院の御製を入られざるをいへり。しかれども若天氣御許容なかりけるか、關東のはからひか、此事定家卿本意ならざりけるにや、百人一首の終に後鳥羽院、順德院ふたりの帝のありがたき述懷の御歌を載せられたり。爲家卿、續後撰集に二首ながら入れられたるは父の卿の心ざしを補はれけるか、もしは云ひのこされけるか』とある。けれども、この辯護說を否定するものが多い。

百錬鈔のなかに『文曆元年十一月九日甲辰、中納言入道於二前關白家一被レ覽二新敕撰一、（先院御時被二奏覽一）兩殿下監臨有二用捨一被レ切二弃百首一云々、又有二被レ入之人一云々』これも何かを暗指すると思つて書く。

○

實朝の歌の眞價を見るには、全體を通じてその本領を見ることを要する。その本領は決して、『淚こそゆくへも知らねみわの崎さののわたりの雨の夕ぐれ』などにあるのではない。然るにかういふ模倣の歌、時樣を出でない歌、題詠の歌が、金槐集の過半を占めてゐるのである。さういふ歌のみを遺して實朝が若し死んで仕舞つてゐたら、予は到底實朝を論じようとはしないのである。然るに實朝には目ざめた以降の優秀な歌がある。なほ實朝が若し二十八歲で死ななかつたならばといつて假定說も成立つ。此は詩人を論ずるに當つては是非とも事實だけを據處としなくもよいからである。若し『極めて此公の心ならねば捨つべし』と眞淵がいつたやうな其等の初期の歌も、『汚れたる物を皆はらへすてて淸き瀨に身そぎしたらむ如くなる』と眞淵が評した晩年の歌も、平等に勘定に入れて、初期の平凡歌を以て實朝を非難する材料にするやうな人があつたら、さういふ人は實朝の歌などを論じない方がよいのである。

しかし、予が金槐集私鈔で選評した歌は、盡く晩年の作といふのではない。初期の作もあらう。中期の作もある。そして、本歌を有つてゐること、一私鈔中で論じた如くである。『霰たばしる那須のしの原』の本歌は、定家の『霰たばしる野べのささ原』であるとも云ひ得るほどである。然も予は大體として實朝の歌の本領を逃すまいとしたのである。即ち縱ひ初期の歌・中期の歌であつても、予の好む歌は實朝の歌の本領だと信じたからである。

初期の作・中期の作・晩年の作と分けると謂つても、その間に截然たる區劃があるのでなく、また多くの移行型と除外型が存してゐるのである。人の爲事はさう進步するものではなく、またさう豹變するものでもない。實朝の歌は進步と變化の著しい方であるが、それでも十年間ぐらゐでさう進步するものでない事を證してゐる。編年體でない金槐集から、初期・中期・晩年の作だといつて抄するのは困難であるが、予は試みにそれを行ふのである。そのうち、初

期・中期の作とおもふのは、盡く、「私鈔」中に收めなかつたものを採錄する。

さくら花さくと見しまに散りにけり夢かうつゝか春の山風

さくら花咲きてむなしく散りにけり吉野の山はよし春の風

乳房すふまだいとけなき綠子のともに泣きぬる年の暮かな

月影のしろきを見ればかささぎのわたせる橋に霜や置けむ

さ夜ふけて雲まの月の影見れば袖にしられぬ霜ぞ置ける

ながむれば衣手かすむ久方の月の都の春の夜のそら

春は來て雪は消えにし木のもとに白くも花の散りつもるかな

春ふかみ嵐の山のさくら花咲くと見しまに散りにけるかな

これらの歌は極めて初期の作だと推測する。歌を作つて見ようといふ氣になり、從臣の歌つくるものなどからいろいろ助言を得、先輩の作に倣つて、心持も手法もいかにも和歌らしく、何か一わたりの事をいはねば和歌にならないやうな氣がして、心もちを一捻して、これが和歌らしいと考へた時代であらう。『夢か現か春の山風』『吉野の山はよし春の風』『月の都の春の夜の空』などが即ちその事を證して居る。さうして、本歌取をやるにしても、『袖にしられぬ霜』といふやうなところだけに心の焦點があつたのである。それでも最後の二首の如きは下手ではあるが、素朴なところがあつて可哀らしい。これらは十六七歲ごろの時の作ではあるまいか。かういふ歌までも材料にして實朝の歌を非難しようとするのは無理である。

梅が枝にこほれる霜やとけぬらむほしあへぬ露の花にこほれる

ふけにけり外山のあらしさえさえてとをちの里にすめる月かげ

おく山のたつ木もしらぬ君により我心からまよふべらなり

岩くぐる水にや秋の立田川河風すずし夏のゆふぐれ

きのふまで花の散るをぞ惜しみこし夢かうつつか夏も暮にけり

ゆかしくは行ても見ませゆき島のいはほにおふる撫子のはな

さ夜ふけて蓮のうき葉の露の上に玉と見るまでやどる月影

をしむとも今宵あけなば明日よりは花の袂をぬぎやかへさむ

住吉の松の木がくれ行く月のおぼろに霞む春の夜のそら

誰すみて誰ながむらむ故鄕の吉野の宮の春の夜のつき

これらの歌になると、前のよりも少しく進んでゐる。先輩の作物を見る目も少しく肥えて來てゐるし、手法の捻り方も巧みになつて來てゐる。初句に『ふけにけり』などと置く當時の流行手法をおぼえて、心中に得意であつたのだかも知れぬ。「おく山の立つ木も知らぬ君」などの言掛することをおぼえて嬉しがつたのだかも知れぬ。かういふ幼稚な下級な作が金槐集にあることを世人が餘り知らない。それは金槐集を讀まぬからである。そして實朝の歌といへば、「霰たばしる那須のしの原」とか、「沖の小島に波の寄る見ゆ」とかぐらゐのものだとしてゐる。そして偶々金槐集を讀んで、かういふ歌に逢著すると反撥の心から出發して、金槐集の大部分は、囚はれたる歌、歌の爲めの歌である、そこで歌人として實朝の價値は小さいといふ結論をなすに至る。これはさういふ論者にとつて恐るべき鑑賞眼力の錯誤であると予は思

ふ。

雁がねの歸るつばさにかをるなり花をうらむる嵐の山かぜ

思ひいでて昔を忍ぶ袖の上にありしにもあらぬ月ぞ宿れる

むかし思ふ秋の寢覺の床の上にほのかに通ふ峰の松かぜ

大かたに物思ふとしもなかりけりただ我ための秋の夕ぐれ

さ夜ふけて雁の翅におく霜の消えても物は思ふかぎりを

難波がたこぎいづる舟のめもはるに霞に消えてかへる雁がね

故郷のあさぢが露にむすぼほれ獨り鳴く蟲の人を怨むる

いにしへを忍ぶとなしにふる里の夕べの雨ににほふたちばな

春雨の露のやどりを吹く風にこぼれてにほふ山吹のはな

我が宿の八重の山吹露をおもみ打はらふ袖のそぼちぬるかな

かういふ綺麗な巧みらしい歌もある。新古今集の大部分の歌を讀み味ひさうして定家に歌を送つて定家の添削を信じ切つてゐたころの作と思はれる。『郭公待つ夜ながらの五月雨に』などの歌もあるが、此などは定家の歌の模倣で、この時分には、自らの作を省るのに常に當時の歌人だちの作物のみを對象としてゐたもののやうである。それゆゑ此等の歌は盡く、當時の歌、遠く溯つたところで三代集を出でないところの歌に交渉をもつてゐるのである。さうして彼等の歌に比べてもさう見劣りのしないものであることが分る。議論に於て純眞直截の歌を唱道しながら、いよいよとなれば、古今集を宗とした香川景樹が、實朝の歌を評して、「ことごとく古調をかすめ」など謂つたのは、いかに彼が金槐集に對して無智であつたかを暴露するものであつて、然も得々として長生したのは、予に一つのをしへを與へるものである。

あしのやのなだの鹽やき我なれやよるはすがらにくゆりわぶらむ

和田の原八重の鹽路にとぶ雁の翅のなみに秋風ぞふく

ながれ行く木の葉のよどむえにしあれば暮れての後も秋は久しき

ふらぬ夜もふる夜もまがふ時雨かな木の葉の後の嶺の松風

わくらはに行きても見しがさめが井のふるき清水にやどる月かげ

秋田もるいほに片しく我袖に消えあへぬ露のいくよおきけむ

藻鹽やくあまのたく火のほのかにも我思ふ人を見るよしもがな

今さらにわが名はたたじかはらやのしたしく烟くゆりわぶとも

行く春のかたみと思ふにあまつ空有明の月は影もたけにき

立かへり見れどもあかず山吹の花散るきしの春の川なみ

稍後期の作も交つてゐると思はれるが、心の動きも細かく氣が利いて來てゐる。表はしかたも凝つたものがある。しかしかうした歌であつても實朝の歌は定家の歌などに比して意味が分り易い。同じく幽玄體・有心體の教育を受けても、彼の氣稟はおのづから謎のやうなところには止まつて居なかつたのである。これを予は最初ぞんざい、平氣の爲めだと思つたが、さうでなく、おなじく定家らの言つてゐる『思ひ澄ます』のであつても、謎のやうな境でなく明徹の境に落著くべき氣稟を有つてゐたのである。一見『ぞんざい』に見える初期の作のあるのは、寧

る晩年の遒勁流轉の作を生むべき理由の解明として役立つのである。

玉くしげ箱根のみうみけけれあれや二くにかけて中にたゆたふ

旅を行きし跡の宿守おれおれに私あれや今朝いまだ來ぬ

大海の磯もとどろに寄する波われてくだけてさけて散るかも

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に浪の寄る見ゆ

やらの崎月かげ寒しおきつ鳥かもといふ鳥うき寐すらしも

散のこる岸の山吹春ふかみ此一枝をあはれといはむ

春過ぎて幾日もあらねど我やどの池の藤なみうつろひにけり

ふく風の涼しくもあるかおのづから山の蟬なきて秋は來にけり

世の中は常にもがもな渚こぐあまの小舟の綱手かなしも

ものいはぬ四方のけだものすらだにも哀なるかなや親の子をおもふ

大君の勅をかしこみ父母に心はわくともひとにいはめやも

ひんがしの國に我をれば朝日さす藐姑射の山のかげとなりにき

山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心われあらめやも

これらの歌をば晩年の作として考へてゐる。ことごとく念々の動きに順ふ遒勁流轉の作ならぬはない。これらを上に記して來た初期の歌に比較したならば全く別人の作の觀をなすことが分る。みづから目ざむることの難く、進歩のおそきを歎ずるものは、現世に於ても予一人ではあるまい。さうして實朝の進歩のあとを見るに及んで、その前におのづから首のくだるものは予一人ではあるまい。『春待ちて霞の袖にかさねよとしもの衣をおきてこそゆけ』といふ歌には、『建保五年十二月方違の爲に永福寺の僧坊に罷りて歸り侍るとて小袖を殘し置きて』といふ詞書があり、東鑑建保五年十二月二十六日の條に此事が書かれてあるから、此は實朝二十六歳の時の作である。又『戀しともおもはでいはゞ久かたのあまてる神も空に知るらむ』といふ歌には、『建保六年十一月素還法師下總國に侍りし比のぼるべきよし申し遣はすとて』といふ詞書があり、東鑑建保六年十一月二十七日の條に此事が書かれてあるから、此は實朝二十七歳の時で然も死する約二ケ月前の作である。また、『磯の松いくひささにかなりぬらむいたく木だかき風の音かな』には、『三浦といふ所へまかれりし道に磯邊の松としふりにけるを見てよめる』といふ詞書があり、それを東鑑の記事に據つて考へるのに、此は十九歳の時の作ではなく二十六歳の時の作だと想像する。これらによつてみるに、實朝の晩年の作にも、時代の風潮の混じてゐるものがある。これは移行型の一つと考へてもよい。歌でもさう豹變が出來ないものであるからである。或はさう考へずに、その時代を背景とした自己が、いかに歌の上に表はれて行つたかをおもふのも亦予にとつて大切なことである。

○

實朝の作つた戀歌を讀んでゐると、巧みな表はし方の歌に出會ふ。さうして序歌が極めて多いのに氣がつく。これは萬葉集以來の慣用手段であるから少しも不思議ではない。實朝作の一つに、『わたつみにながれいでたるしかま川』といふ序歌がある　これも萬葉卷十五の『わたつみの海にいでたるしかま川絶えむ日にこそ我が戀やまめ』といふ本歌があるのである。六に

中期後期作の戀歌をとりまぜて幾つか書いておく。

わたつみにながれいでたるしかま川しかもたえずや戀渡りなむ

むこのうらの入江のすどり朝な朝なつねに見まくのほしき君かな

田子のうらの荒磯の玉藻波の上にうきてたゆたふ戀もするかな

我戀はかこのわたりの綱手繩たゆたふ心やむときもなし

秋の野に朝ぎりがくれなく鹿のほのかにのみやきき渡りなむ

雲がくれ鳴きて行くなる初雁のはつかに見ても人は戀しき

みしま江の玉江のまこもみがくれて目にし見えねばかる人もなし

五月やま木の下やみのくらければおのれまどひてなく郭公

人しれず思へばくるしたけくまの待つとは待たじ待てばすべなし

神山の山下水のわきかへりいはでもの思ふ我ぞ悲しき

山川の瀬々の岩波わきかへりおのれひとりや身をくだくらむ

岩ばしる山下たぎつ山川の心くだけて戀やわたらむ

○

金槐集で予の好きな歌はたいてい「私鈔」中に選拔したが、ここに補遺としてなほ少し選んでおく。

これらの歌は大して優れた作といふのではない。ただ實朝の歌をもつと精しく論じようとするときに、幾分の參考にならうかと思ふのである。またこれらの歌は、中期の作も晩年の作も交つてゐるやうである。

我宿のませのははそに(はた)(てに)はふ瓜のなりもならずも二人ねなまし

みなと風いたくな吹きそしながどりゐなのみづうみ舟とむるまで

東路の道の冬草枯れにけり夜な夜な霜やおきまさるらむ

みさごゐる磯邊にたてるむろの木の枝もとををに雪ぞつもれる

草枕旅にしあれば妹にこひさむるまをなみ夢さへ見えず

草枕旅にしあればかりごもの思ひみだれていこそねられね

さとみこがみ湯たてざさのそよそよになびきおきふしよしや世の中

大日の種子よりいでてさまやきさまやきやう又尊形となる

宮柱ふとしき(ふと)(しく)立て萬代に今ぞさかえむ鎌倉の里

ぬば玉のやみのくらきにあま雲のやへ雲がくれ雁ぞ鳴くなる

泉川ははその杜になく蟬のこゑのすめるは夏のふかきか

さほ山のははそのもみぢ千々の色にうつろふ秋は時雨ふりけり

八百萬四方の神たちあつまれり高天が原にきき(ち)たかくして

さ月やみ神なび山の時鳥つまごひすらし鳴音かなしも

五月やみさ夜ふけぬらし時鳥神なび山におのがつまよぶ

時鳥かならず待つとなけれども夜な夜な目をもさましつるかな

山ちかく家ゐしをれば時鳥なく初聲を我のみぞきく

あをによしならの山なる呼子鳥いたくな啼きそ君もこなくに

高まとのをのへのきぎす朝な朝なつまに
戀ひつつ鳴音かなしも

おのがつまこひわびにけり春の野にあさ
る雉子の朝な朝な鳴く

右の歌のうち、「さとみこ」は「里巫女」である。「みゆたてざさ」は、「御湯立笹」で、巫女が神前で熱湯に笹の葉を浸してそれを自身にかける、その行をなすとき神託を得るといふのである。第一二句は序であつて、笹の事が主である。『大日の種子より出でて』の歌には、「得功德歌」といふ題があるが、予には眞の解釋が出來ない。願はくは先輩の指教をまつ。ここには少しばかり書いておく。諸尊には「種子」がある。これは今でも梵字であらはして居る。ここは、大日如來の種子から出でて、卽ち大日如來の功德によつてなどの意かも知れない。「さまや教」は、「三昧耶形」のつもりのところを後人が思違へて寫したものであらう。「三昧耶形」は各諸尊に固有の「印相」のあるのを謂ふのであつて、いはば各諸尊本誓の象徵である。例へば阿彌陀佛は蓮華若くは初割の蓮華を持つてゐる。その蓮華は阿彌陀佛の三昧耶形である。また地藏尊の三昧耶形は錫杖とか蓮華とか寶幢などである。此歌は、種子から三昧耶形となり、いよいよ功德を得て、つひに尊形と成るといふことであらうと思ふ。さうして、「[illegible]四字合成の風吹けば霧雲はれて彌陀ぞあらはる」などと似た意味の歌であらうと思ふ。「八百萬四方の神たち集れり」の歌の結句の『きき』は、「ちき」の方がよいやうである。『ちき』は「千木」で、祝詞の、「高天原爾千木高知氏』あたりから由來してゐるらしいのである。

○

賀茂眞淵の極力實朝を稱揚したことは既に書いた。其眞淵の言説に根本の異見を有つた香川景樹の說の如きはもはや齒牙にだも懸くるの要なきものである。ここに同じく實朝を尊敬しながら、眞淵の實朝評を標準として、眞淵は實朝を褒め過ぎてゐるといふ說と、まだ褒め足りないといふ說とある。佐佐木博士は實朝を稱揚し、そして眞淵の言に對して、眞淵の評も己が好むところにおもねりたる嫌はあり(金槐集の後に)と云ふ。正岡子規氏も實朝を稱揚し、そして、眞淵の言に對して、「眞淵は力で極て實朝をほめた人なれども、眞淵のほめ方はまだ足らぬやうに存候。眞淵は實朝の歌の妙味の半面を知りて他の半面を知らざりし故に可有之候」(歌よみに與ふる書)と云つてゐる。ここに於て、おなじく實朝を稱揚しても、兩者の間に量に於て大分の距離が生じてくる。予の先師は、金槐集私鈔が雜誌アララギに出て居る時分に、予の評言を讀まれて、「八大龍王」の歌を餘り讚め過ぎたと云つた。先師は晩年に「叫びの歌」を唱へたとき、それでも、「實朝卿の歌には不思議に「叫び」の含まれた歌がある。それも何十首といふ程は無論ないけれども凡だが二十首ぐらゐはあるだらうと思ふ」といひ、「物いはぬ」「山はさけ」の歌をあげて、「此二首などは何人にも解るべき『叫びの歌』である。自然を歌つた歌にも叫びの含まれた歌は隨分ある」と云つてゐる(アララギ六ノ五)。今人も、予の實朝に對した評言が、或は過讚であつて、己が好むところに執し過ぎたといはれるかも知れぬ。しかし現在の予は、己が好む一途を行かむより途はない。さうして藝術道は究竟に於て一途である。念々燃えて歩まむ途はただ一つだと思ふのである。一たび實朝に對した予は、遠離して冷たくこれを見放つことは否であつたのである。冷眼もて予を見むものはしばらく措く。いささかたりとも予の生を認めむひとびとは、予が念々の燃ゆるのをゆるしたまへと思つてゐる。

○

金槐集は、實朝在世中に出來たものか、歿後に誰かが輯したものか、その命名も何時ごろで誰が爲したものか、寡聞の予は未だこれを知らない。そこでひそかに想像するに、歌集は實朝在世中から略出來てゐて、歌が出來るに從つて增補して行つたのだかも知れない。それは實朝自身でせずに、仲章かそのほかの從臣がしたのかも知れない。命名も實朝在世中に定まつてゐて、從臣中の學者か、或は京都の公卿あたり、恐らくは鎌倉にゐた學者が附けたのであらう。太上天皇御書下預時の一首が增鏡には『いかなる時にかありけむか、よみける」とあり。群書類從本の金槐集には、「太上天皇御書下預時歌」が一番しまひに書いてあるのから想像すると、彼の三首は長らく知れずにゐたのではあるまいかと說く人(鶴陰居士)もあるが、新勅撰集には『山はさけ海はあせなむ世なりとも』の歌が選ばれてゐるから、さうでないことが分る。又增鏡の『いかなるときにかありけむ』といふのも、增鏡の著者の筆の綾であるか、或は知らなかつたせゐであらう。新敕撰を撰ぶ頃は、略纏つた金槐集の寫が、師匠であつた定家の手元にあつたと見ても不當ではあるまい。貞享本の柳營亞槐奧書の『右之一帖者鎌倉右大臣家集　京極中納言門弟　此道之達者云々。然最初雖二部類一不審　尙之間　重而改レ之畢。尤可レ爲二證本一者乎』をも考へて見たい。此項全くの想像である。

○

實朝の和歌を觀るには、その先天の風骨を以て先づ基底觀を作らねばならぬことを云つた。ついでその機緣となつたものを觀ねばならぬことも云つた。進んで時代の氣運の大體を觀てもよいと思ふ。時代は平安の末期から鎌倉の初頭に移つたときである。源平の合戰を終結とし、公卿政治が武家政治に移つたときである。纖巧軟弱の氣風が遒勁豪放の氣風となり、感傷・空想より凝觀・諦相に轉じたときである。新佛教がどしどし勃興したときである。建築に於ていはゆる唐樣式(宋式。禪宗派)が傳來し、繪畫に於ても繪卷物の發達となり、彫刻に於ても康慶・運慶・快慶・定慶の徒いでて、金剛力士・四天王・五大明王などの動運の形相を示したものに傑作を遺した時代である。ときの女性は政子あたりを起點として質素儉約で貞操堅固を美德とし、ふはふはした夢のやうな女性とはちがふやうにならうとした時である。人々は現世歡樂の夢を打破られて悲痛流轉の現世相に面と對つたときである。以上には多くの除外例あること無論であるが、今は大體を觀むと欲して、除去の論法を採つたのである。當時の和歌は堂上に發達し歌壇の宗匠は生死の渦中に投ずることもなく、また、他の藝術壇の氣運に參與することなどは少なかつたのであらう。若し假りに實朝が當時の歌壇に居ないとしたなら、當時の歌壇は他の藝術壇に比していかに寂しいかを思はねばならぬ。ひとはさもあれ予は深くさう思ふのである。さうして、時代の氣運は恐ろしいほど大切であるが、偉大なる個人を待たずに、歌壇の氣運などを作ることは覺束ないと思ふのである。そして予は、實朝が晩年の作に思到り、短命にして果てた實朝が生の連續に思到つて心悸の亢ぶるを覺ゆるものである。

年譜

明治十五年（一歳）
七月二十七日、山形縣南村山郡堀田村大字金瓶に生る。農、守谷傳右衛門三男。父は金澤氏より出づ、三十二歳。母いく、二十八歳。

明治二十一年（七歳）
金瓶村尋常小學校に入る。

明治二十五年（十一歳）
上ノ山町尋常高等小學校に入學す。

明治二十九年（十五歳）
小學校を卒業す。七月父と共に湯殿山を參拜す。八月父と共に上京し、淺草區東三筋町五十四番地、淺草醫院齋藤紀一方に寄寓す。九月開成中學校第五級に入學す。三級ごろより、獨逸協會別科に通ふ。當時第一高等學校醫科志望の者の外國語は獨逸語に限りしためなりき。

明治三十四年（二十歳）
三月開成中學校を卒業す。齋藤紀一獨逸留學の途にのぼる。第一高等學校の入學試驗を受け落第す。

明治三十五年（二十一歳）
九月第一高等學校第三部に入學す。

明治三十六年（二十二歳）
齋藤紀一歸朝。神田和泉町一番地に轉住す。青山腦病院創立。

明治三十八年（二十四歳）
一月神田の貸本店より正岡子規先生の『竹の里歌』を借り讀み、作歌の志あり、切りに子規の模倣歌を作る。九月東京帝國大學醫科大學に入學す。夏、歸省す。次いで雜誌「馬醉木」を求めて讀む。

明治三十九年（二十五歳）
伊藤左千夫先生の門に入る。初めて「馬醉木」第三卷第二號に五首の歌載る。香取秀眞、蕨眞、長塚節、石原純、蕨桐軒、三井甲之、增田八風、赤木格堂、平福百穗、望月光男、胡桃澤勘内の諸氏と相識る。

明治四十年（二十六歳）
「日本新聞」の組織更り、七月より伊藤左千夫先生歌を選ぶ。競うて應募す。青山に轉住す。古泉千樫と相識る。

明治四十一年（二十七歳）
一月「馬醉木」廢刊す。二月より「アカネ」出づ。第一號より數號にわたり歌載る。九月「アララギ」（阿羅々木）第一卷第一號上總の蕨眞氏のところより出づ。歌の他、第二號に『短歌に於ける四三調の結句』及『漫言』を、第三號に三井甲之氏との論戰記を載す。觀潮樓歌會に出席し、佐佐木信綱、與謝野寛、上田敏、北原白秋、平野萬里、木下杢太郎、吉井勇、石川啄木、平出修の諸氏と相見る。

明治四十二年（二十八歳）
齋藤紀一再度の洋行に出發す。夏、熱病を病み、卒業試問を延期し、日本赤十字社病院分病室に入院す。九月「アララギ」東京に移る。「短歌研究」欄に參加す。「折にふれて」「細り身」「分病室」等の歌あり。堀内卓造、中村憲吉、土屋文明の諸君と相識る。

明治四十三年（二十九歳）
齋藤紀一歸朝す。十二月試問了り、東京帝國大學醫學科を卒業す。作歌尠し。「短歌研究」欄に參加し、牧水氏等の歌を評す。

明治四十四年（三十歳）
二月東京帝國大學醫科大學副手囑託、附屬

醫院勤務囑託。七月東京府巣鴨病院醫員囑託。呉教授、三宅助教授のもとにありて精神病學を攻む。

「アララギ」の編輯を擔當。『童馬言』『短歌小言』『短歌小論』を公にす。六月より『金槐集私鈔』を掲載しはじむ。柿の村人と相見る。

大正元年（明治四十五年）（三十一歳）

「アララギ」の編輯を擔當。一月より『童馬漫筆』を、十月より『山家集私鈔』を掲載す。十一月東京帝國大學助手に任ぜられ、附屬醫院勤務を命ぜらる。

大正二年（三十二歳）

「アララギ」編輯を擔當。五月生母歿す。十月「アララギ」叢書第二編として、『赤光』を出版す。

大正三年（三十三歳）

「アララギ」編輯を擔當。六月より『萬葉集短歌輪講』及『良寛和歌私鈔』を載せはじむ。

大正四年（三十四歳）

『愚庵和尚の歌』を「アララギ」一月號に公にす。三月四月「赤光批評號」。「切火合評」に加はる。

大正五年（三十五歳）

『短歌私鈔』を白日社より出版。「アララギ」に『短歌私鈔補訂』を出す。土岐哀果氏と論戰す。歌風稍平淡となれるが如し。平賀元義の歌を評釋しはじめて中絶す。

大正六年（三十六歳）

一月、願により東京帝國大學醫科大學助手並に附屬醫院勤務を免ぜられ、次いで東京府巣鴨病院醫員の囑託を解かる。十二月任長崎醫學專門學校教授、敍高等官六等、縣立長崎病院精神科部長を囑託せらる。

『童馬漫語』『山家集私鈔』、三井甲之氏との論戰あり。『續短歌私鈔』を岩波書店より出版す。歌風比較的順路を執る。

大正七年（三十七歳）

三月任長崎市救護所顧問醫囑託。夏、同僚と共に、別府、耶馬溪、日田、筑後川に遊ぶ。作歌少く、進歩せず。

大正八年（三十八歳）

一月東京に歸り實驗を爲す。夏、同僚と共に島原、熊本に遊び、阿蘇山に登る。秋、温泉嶽に修學旅行し、島原に至る。ついで平戸に旅す。作歌若干首、漫筆數種あり。『童馬漫語』を春陽堂より出版す。

大正九年（三十九歳）

一月流行性感冒に罹る。六月初め喀血す。温泉嶽、唐津、古湯、小濱、嬉野等に轉地療養し、晩秋に及ぶ。『短歌に於ける寫生の説』を「アララギ」に連載す。作歌若干首あり。

大正十年（四十歳）

一月第二歌集『あらたま』を春陽堂より出版す。一月熊本、鹿兒島、宮崎、青島、久留米等に遊ぶ。二月二十八日文部省在外研究員を命ぜらる。三月十六日長崎を去り、福岡、別府、丸龜、道後、松山、高松、岡山、大阪、近江等を經て上京す。夏、信濃富士見にて養生す。作歌若干首あり。十月二十六日熱田丸にて横濱を出帆し、十二月四日マルセーユ著、巴里を經て、同二十日獨逸伯林に著く。寒氣甚しく、連日陰鬱なる天氣續く。伯林ハンブルグ間の汽車中にて盗難にあふ。

大正十一年（四十一歳）

一月十三日朝伯林を出發し、その日夜ふけて墺太利の維也納に著く。神經學研究所にマアルブルグ教授を訪ひ、直ちに先生の指導をあふぐ。夏、ブダペストに遊び、ついで西南獨逸を旅し、伯林に至る。

大正十二年（四十二歳）

四月、一つの論文やうやく成る。ついで、心理學教室に通ひ實驗す。阿部次郎氏に會ふ。

昭和六年八月十四日印刷
昭和六年八月十九日發行

現代日本文學全集　第五十八篇

著者　新村出
柳田國男
吉村冬彦
齋藤茂吉

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一一一番
一一一二番
二二二三番
二二二四番

株式會社秀英舍印刷

改造社 文學月報

(第五十六號)
昭和六年八月十四日印刷
昭和六年八月十九日發行
編輯發行印刷人　山本實彦
東京芝愛宕下町　改造社

回顧斷片
（小波・水蔭・思案・幽芳四家）

高須芳次郎

今日、明治の小說を回顧するものは、第一に硯友社のことを想ひ浮べるであらう。硯友社の創立については、巖谷小波、石橋思案の二氏を忘れることが出來ぬと同時に、その初期の文學的活動のうちに加はつた江見水蔭氏のことも、自ら視野のうちに入つてくる。

私が日清戰爭後、東京へ出た頃の文壇では小波、水蔭二氏の武者振が花々しく、眼に映つた。殊に私は水蔭氏の短篇小說に興味を寄せ、その將來の發展を期待したのである。石橋思案氏は、作家としてよりも、寧ろ通人として、社交家として、新聞記者として、私の注意を惹いてゐた。

小波氏は八面玲瓏の才人であるが、一面に於て、無邪氣な、輕快な、天眞爛漫と云つてよいやうなところがあつた。左樣した性格、趣味が、早くから、氏の作品の上に現はれてゐた。『妹脊貝』にしても、『友禪染』にしても、無邪氣なラブ・ストリイと云つた工合で、『すみれ日記』が殊に評判よかつた。

かうした傾向を追うて進むとしたら、氏は小說界に於ても相當成功したにちがひなかつた。が、氏はその獨自の世界を築きあげるについて、今日の童話である御伽話に筆を染めることの一層、有望なることを率先、自覺した。茲に氏の文學的運命を開いてゆくよき道があつた。明治二十二年に公にした『黄金丸』を初陣に、御伽話の國を創造して、氏でなくてはならぬと云はれるほどの特色を發揮したのは、要するに、氏の聰明によるところが多いと思ふ。今日の童話が氏の盡力に負ふ事が少くない以上、氏の御伽話は、歷史的意味に於て特に重要視すべきこと、勿論であるが、その書き方、表現などに、氏一流の無邪氣さと淡泊さとを示してゐる點をも見逃してはならない。何と云つても童話文學の父だ。

水蔭氏も一時、少年文學の開拓に從事したことがあつたが、氏の本領は、はじめから別にあつたの

編輯室より

▼八月配本「新村・徳田・吉村・齋藤集」は、前月豫告の内容全部を收め[illegible]、全卷、何れも著者自身の嚴選による一粒選りの逸品だ。四家四樣、夫々とりどりの名作を集大成したこの一卷こそ、我が現代日本文學全集に[illegible]重からしめる特殊篇中の特殊篇として、最も讀みごたへあるものと信ずる。

▼次回配本は「明治の通人」石橋思案、巖谷小波、江見水蔭、菊池幽芳の四家の傑作を集成する第五十四篇の豫定。思案が[illegible]硯友社の一員であつた事、又、小波、水蔭、兩氏がこの派の新人として如何に華やかな文壇的飛躍を試みられたかは、凡そ明治文學史を繙く者の誰一人も[illegible]するところ。「思案集」には氏の代表作「京かの子」その他を、「小波集」には豫告の「妹脊貝」のほか「すみれ日記」二、及び童話界の先驅者としての氏を記念するために、長篇お伽噺「新八犬傳」「お伽太閤記」を特載し、又「水蔭集」には豫告の「女房殺し」「炭焼の煙」のほか、氏の自選に依つて名作數篇を收録する。

▼菊池幽芳氏の現文壇に於ける地位は、あまりにも周知だ。「幽芳集」には世評高い長大篇中から、目下自選をはなしてゐるので、發刊の日を刮目して待たれたい。

▼「偉人傳全集」は近來にない成功でまだ申込が殺到しつゝある。八月配本は久米正雄氏著「伊藤博文傳」、小笠原長生氏著「東郷平八郎傳」の二冊。「正岡子規全集」第一回配本は愈々出來した。

▼「日本文學大全集」は「有島武郎全集」の第二卷を、「日本地理大系」は「日本地理風俗」一に次いで、別卷「富士山」を刊行。

▼本月出版の單行本には、[illegible]氏の快著『消えない過去』、[illegible]著『[illegible]』、フーバー著『エヂソン』、[illegible]生氏譯レン[illegible]著『歐羅巴[illegible]』。

▼それから「カポネ」[illegible] 和氣律次郎氏著の、この殺人王の全生涯の大暴露だ。

▼[illegible]講座[illegible]と共に發刊する。前例なき陣容の詳細は内容見本を見られたい。

だ。氏は本來、詩人肌の人で、自然美を背景に人事美を描くと云つたやうな方面に獨自の長所があつた。その最初の意義ある短篇集『水車』を讀むと、何となく、國木田獨歩の『武藏野』に共通した感觸を受ける。

後年、氏は『水車』の傾向から次第に遠ざかつて了つたが、それでも、『女房殺し』及び『炭燒の烟』などを見ると、氏の詩人的傾向を察知することが出來る。清純な風景と清純な戀愛、それが交錯して、おのづから詩的韻致を帶びたところに、氏の優れた風格があつた。別に複雜な世相、深酷な人情を描かずとも、簡素、單純な一幅の粗描中に、脈々たる詩情が流露した。左様した日に於ける水蔭氏を知るべく、『炭燒の烟』『女房殺し』の二佳作がある。

小波、水蔭二氏が、精力無限式に多作したに對して、思案氏は寧ろ寡作だつた。それは、新聞、雜誌の編輯により多くエナジイを注いだからであつたらう。それに氏は紅葉、眉山、柳浪諸氏の如く、文學上のアンビションを持つてをらず、何れかといふと、文化文政期の江戸文學趣味の中に生きて、滑稽、諧謔を事とする上に、自ら滿足した氣味があつた。

それ故、思案氏の作品中、特に評家の注目を惹いたものはない。が、硯友社の元老として、氏が明治文學開拓の上に、相應の努力をしたことは、これを認識しなければならない。右の意味に於て、氏の作品『京鹿子』一篇を一個のモニユメントとして眺めることは、昔なつかしい、沁々した感興をそゝる。

以上、硯友社の三氏とは、別な軌道を歩いた作家の一人に菊池幽芳氏がある。年齡の上からすると、氏は小波、水蔭二氏と略ぼ同じ頃に文壇で活躍しなければならなかつた。が、氏は『大阪毎日新聞』に入つて、新聞記者生活に專心した爲め、おのづから、文壇に於て擡頭することが遲れた。明治三十二年、『己が罪』を出して、成功した以前にも、相應に見るべき通俗小說の作があつたのだが、氏の存在を文壇的に確保したのは、『己が罪』によるのである。

氏は『私の本業は新聞記者で、小說はその餘業に過ぎない。』と謙遜してゐる。けれども氏は曾て文學上のアンビションを抱いたことを肯定してゐる以上、通俗小說に於て、獨自の地步を占めようとした決心が氏の胸にあつたことは明白だ。

氏は通俗小說の構圖、材料の選擇などに於ては極めて老巧だ。それに氏のピユウリタン的趣味が、その作品を道德的ならしめ、家庭のよき讀物たる條件も必然備へてゐる。のみならず、『妙な男』、『大探檢』、『二人女王』などの如き獵奇、冒險、探偵などに關する大衆物に先驅した氏の慧眼は賞稱に價しよう。